九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—XXIV—

福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査

下　巻

1 9 7 8

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

―― XXIV ――

福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査

下　巻

昭和53年

福岡県教育委員会

例　　言

1.　この報告書は，九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち，昭和48年度に発掘した筑紫野市に所在する剣塚遺跡群の調査報告である。

2.　発掘調査は，日本道路公団の委託事業として，福岡県教育委員会が実施した。

3.　本報告にあたっての木材の鑑定には，九州大学農学部松本勗教授と同林弘也助手に担当していただいた。

　また，剣塚第１号瓦窯および溝状遺構出土の瓦類の整理・報告については，九州歴史資料館調査課に分担していただいた。

4.　本書は上・下の２巻に分かち，上巻に Ⅰ～Ⅴ を，下巻にⅥをそれぞれ掲載している。

5.　本書の執筆は，下記のとおりである。

Ⅴ－１	九州歴史資料館	石松好雄
	〃	森田　勉
	〃	高橋　章
Ⅴ－２	〃	亀井明徳
Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ－１・４	福岡県教育庁管理部文化課	石山　勲
Ⅴ－２・３・５・６，Ⅵ	〃	中間研志
Ⅵ－８		平島勇夫

6.　掲載図の実測・製図の分担については，挿図目次に示すとおりである。掲載写真のうち，遺物については，九州歴史資料館石丸洋氏の指導の下に，岡紀久夫・前田次郎・平島美代子の３君があたった。

7.　遺物の整理作業の大部分については，岩瀬正信氏の指導の下に，九州歴史資料館の整理作業員がこれを行ない，出土品は同館にて保管している。

8.　本書の編集は，上巻を石山が，下巻を中間がそれぞれ担当した。

下　巻　目　次

Ⅵ　弥生時代の遺構と遺物

頁

1. 住居跡群…… 127

2. 袋状竪穴群…… 153

3. 土坑墓群…… 229

4. 甕棺墓群…… 241

5. 石蓋土坑墓・箱式石棺墓…… 261

6. 柱穴群…… 265

7. 表採遺物と周辺遺跡採集遺物…… 273

8. 小結

　a. 袋状竪穴群について…… 297

　b. 石器について…… 306

　c. 甕棺墓について…… 313

Ⅵ　弥生時代の遺構と遺物

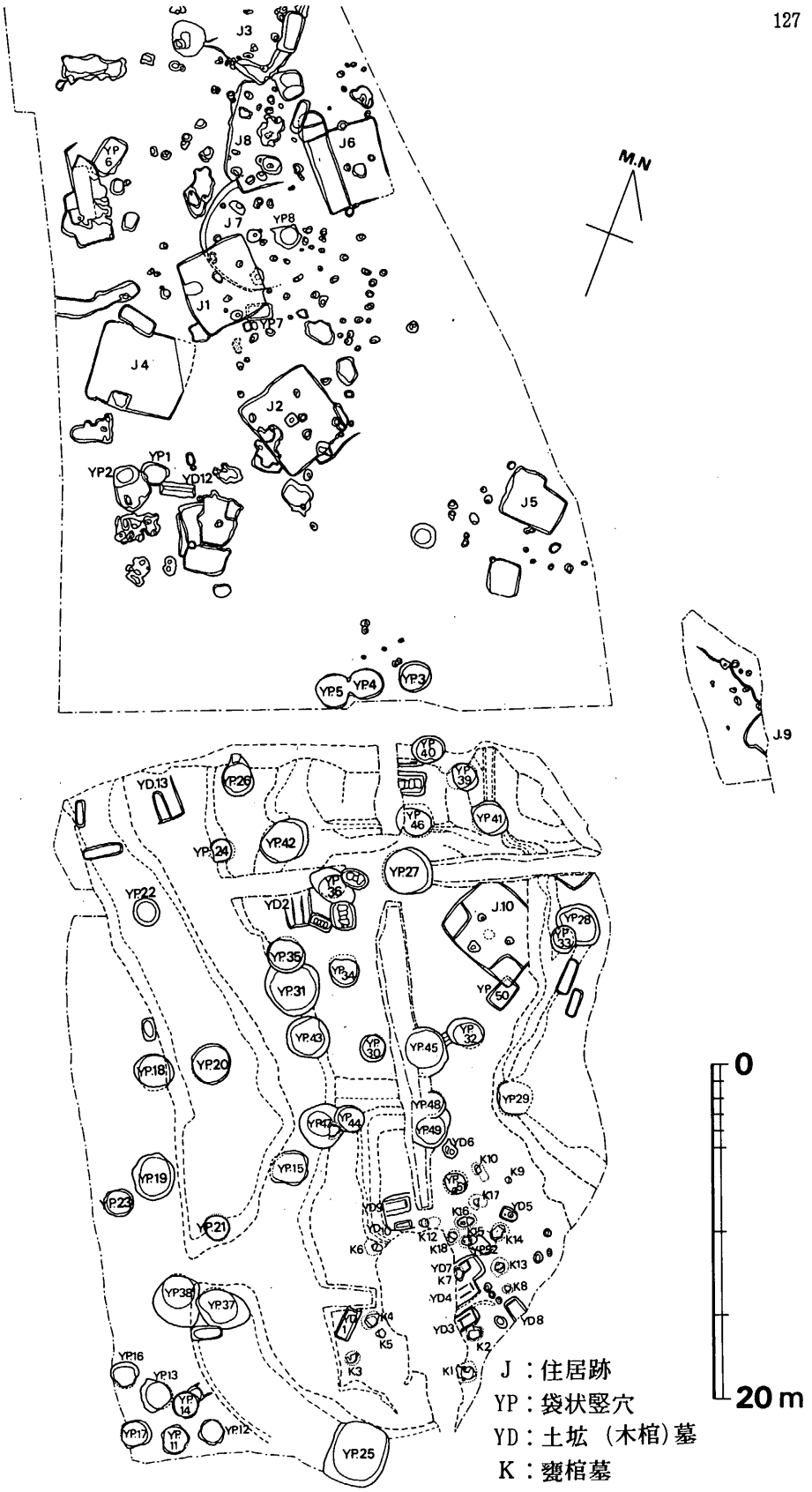


Fig. 110　弥生時代遺構配置図（縮尺 1/400）

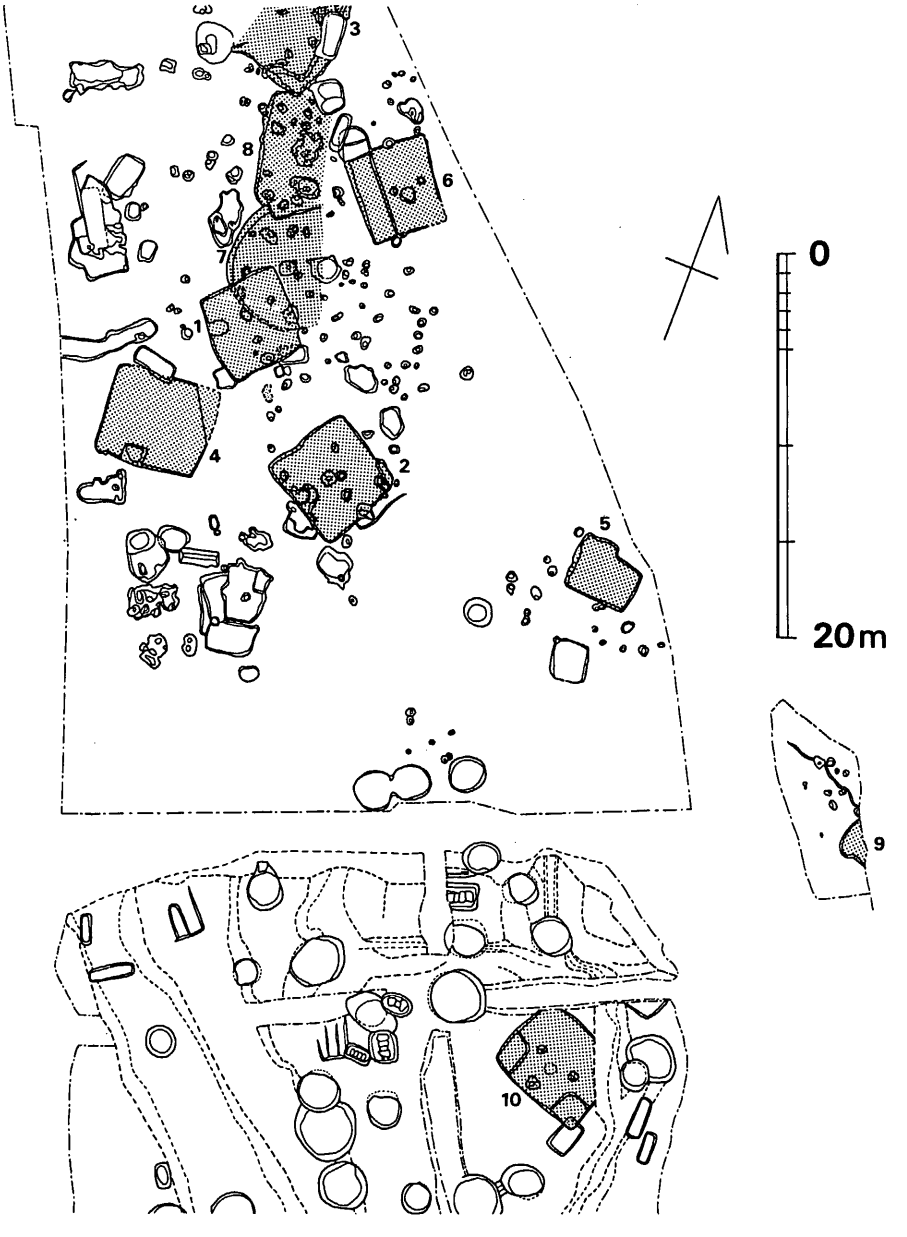


Fig. 111　住居跡配置図（縮尺 1/400）

Ⅵ—1 住 居 跡 群

1号墳と3号墳間の約50mの平坦地の調査は，ブルドーザーによる表土剝ぎを行ない遺構の存在を確認した上で本格的調査に入った。表土は西半部に薄く，東側に厚くなっていた。特にその中間よりやや3号墳寄りの東側では地山が深く落ち込んで，小さな谷状を呈していた。

西半部台地上に8軒分の竪穴式住居跡を検出した。即ち弥生前期の方形住居跡2軒，円形住居跡1軒，後期中葉が1軒，後期後葉に比定されるものが3軒，時期不明（前期方形住居跡より新しく，恐らく後期であろう）が1軒である。

また，1号前方後円墳の北西側，第5号住居跡の南東側の工事用道路断面に落込みが確認されたので拡張して調査した結果，方形プラン住居跡の一隅部分のみが検出され，第9号住居跡と呼称した。床面よりやや大きめの土器片数個が出土したが，調査中に盗難に会い，手元には現存しない。弥生後期に含まれる土器類であったと記憶する。

更に全調査期間の最終段階に近く，古剣塚第2号墳盛土下の旧表土下面より双隅にベッド状遺構を有する竪穴式住居跡1軒を検出した。この住居跡床面に密着する完形甕形土器1個も調査中に盗難に会い；本書に図示公開する機会を失ってしまった。

1号瓦窯の北隣からも方形竪穴住居跡1軒を検出したが，古墳時代後期の所産であるので，上巻にて詳述して，ここでは取扱わないこととした。

各住居跡の遺構の説明は，以下の一覧表にまとめたので参照していただきたい。また，出土遺物のうち石器類も各住居跡毎に表を掲載して文章に換えた。

Tab. 10 弥生時代住居跡一覧表 （単位：m）

番号	時期	平面形	長辺×短辺×深さ	面積m²	主柱穴 数	主柱穴 心心距離	炉	その他の施設	出土遺物	備考
1	後期後葉	方形	4.65×4.45×0.12	20.69	2 ?	2.75	中央	・南西壁際中央に貯蔵穴様土坑	甕口縁片1，底部片1，器台1，磨製石斧片1，ドリル1，プレイド1，安山岩片1	7号住居跡を切る 7号袋状竪穴を切る
2	後期中葉	方形	5.0× 4.6×0.45	23.0	2	2.3	中央	・南西壁際中央に貯穴様土坑 ・床面は北東へやや傾斜する	甕片3，壺片3，器台1，碧玉・管玉1，石のみ2，打製石鏃5 スクレイパー3，使用剝片3，黒曜石片47，安山岩片10，玄武岩片1，磨製石斧1	焼失による廃棄

番号	時期	平面形	長辺×短辺×深さ	面積m²	主柱穴 数	主柱穴 心心距離	炉	その他の施設	出土遺物	備考
3	(後期)?	方形	?×?　×0.22	—	?	—	?	・後世削平により不明点多し	砥石1，黒曜石片5 安山岩片10，玄武岩片1	2号木棺に切られる 8号住居跡を切る
4	後期後葉～古墳初頭	方形	5.7×5.0×0.13	28.5	?	— —	中央	・南壁際中央に貯蔵穴様土坑 ・東隅付近削平	器台1	1号木棺に切られる 焼失による廃棄
5	前期後半	長方形	3.7×3.0×0.82	11.1	?	—	?	・北壁東半が内へ張り出し，入口の可能性もあり	甕口縁片3，底部3 壺片1，スクレイパー5，使用剝片4	
6	後期後半	方形	4.7×4.1×0.7	19.27	2	1.5	中央	・西南壁沿いに4.6×1.1(5.06m²)の削り出しベッド→全面積比26.3% ・西北隅に段のある張り出し部あり，入口部と推定される ・南西壁際に板材差込み痕	甕口縁片1，底部3 高杯片1，無茎鉄鏃1，磨製石剣片1，黒曜石片2，打製石鏃4	
7	前期後半～終末	円形	半径3.15×0.25	31.16	6	2.1～2.8	中央	・東半分は削平される ・床面下より袋状竪穴(8号)→住居跡より古い	甕口縁片5，底部1 壺口縁片1，石包丁4，砥石1，打製石鏃2、スクレイパー4，使用剝片3，黒曜石片52，安山岩片28，玄武岩片7	8号住居跡を切る 1号住居跡に切られる
8	前期後半	方形	6.0×?　×0.3	—	?	—	中央	・壁は西辺のみ残り東側の殆んどは削平	甕口縁片1，底部1 磨石1，打製石鏃1 ブレイド1，スクレイパー1	7号住居跡に切られる 3号住居跡に切られる
9	(後期)?	方形	?×?　×0.2	—	?	—	?	・南西隅のみ残る		
10	後期中葉	長方形	5.65×4.5×0.85	25.43	2	1.7	中央	・南西隅と南東隅に1.5×1.9、1.1×1.8(4.83m²)の貼り付けベッド→全面積比19.0% ・南壁際中央に貯蔵穴様土坑	甕口縁片3，底部2 壺口縁片2，高杯片2，手捏ね1，蛤刃石斧片2，石包丁1 石のみ1，スクレイパー1，黒曜石片15 安山岩片8	50号袋状竪穴を切る

第1号住居跡出土遺物 (Fig.113)

甕（**1・2**）

厚手の短かく外反する口縁をつくる。口縁内面は横方向の粗いハケを施し，外面横ナデ，胴内面はハケではなく外面縦ハケかと推定される。**2**の底部は丸底風平底を呈し，やや薄手で内面には回転方向の強いハケ工具痕がみられる。口径22.6cm，底径7.2cmを測り，1・2とも胎土に粗砂幾らか含み，焼成やや不良で暗黄褐色を呈する。

器台（**5**）

筒形のくびれが上方にあり受け部が開く類である。受け部径11.5cm，底径10.6cm，器高18.0cmを測り，外面上半は強い指オサエがみられ，下端には縦ハケを施す。受け部内外面は横ナデ，内面は縦ナデ調整で，わずかにシボリ痕がみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で茶褐色を呈する。下端縁辺片には強い二次焼成を受けて赤変した部分がみられる。

前期壺・甕底部（**3・4**）

混入したものとして3の前期壺底部と，4の甕棺底部がある。**3**は円盤貼付状の外観をみ

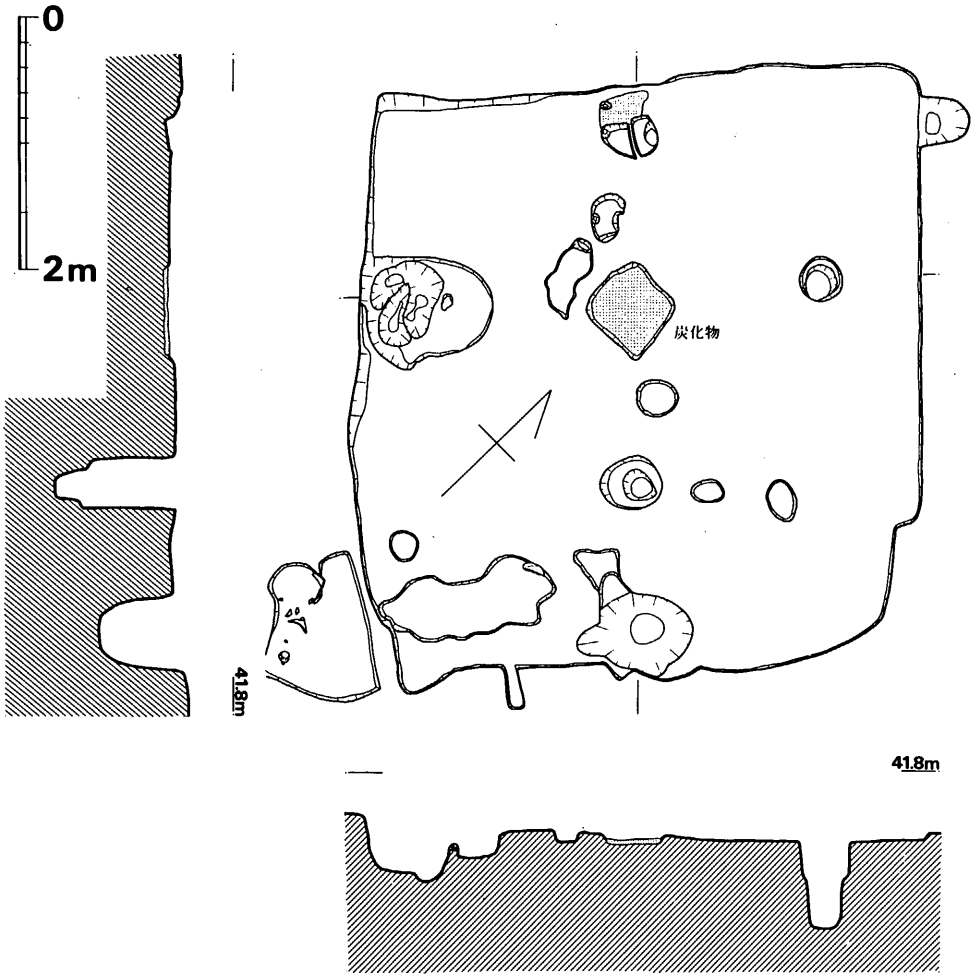


Fig. 112 第1号住居跡実測図（縮尺 1/60）

せ，中型の小ぶりの類に入る壺で，底径9.2cmを測る。胎土に粗石英粒かなり含み焼成良好で外面暗赤色，内面暗褐色を呈する。**4**は底径14.0cmの部厚い底部片で，胎土に粗砂極めて多く含み，焼成良好，黄褐色を呈する。

Tab. 11 第1号住居跡出土石器一覧表 （単位：mm・g）

Fig. No.	器 種	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	刃部長	備 考	台帳番号
113の6	磨製石斧	硬質砂岩	(89.0)	45.5	26.0	(171)	不明	全面研磨小型の蛤刃石斧か	16
113の7	石 錐	黒曜石	(16.0)	21.5	4.5	(1.2)		機能部欠損	14
113の8	ブレイド(？)	黒曜石	30.5	13.5	6.0	2.7	58.0	表面右側面に擦痕，上下面は原石粗面	15

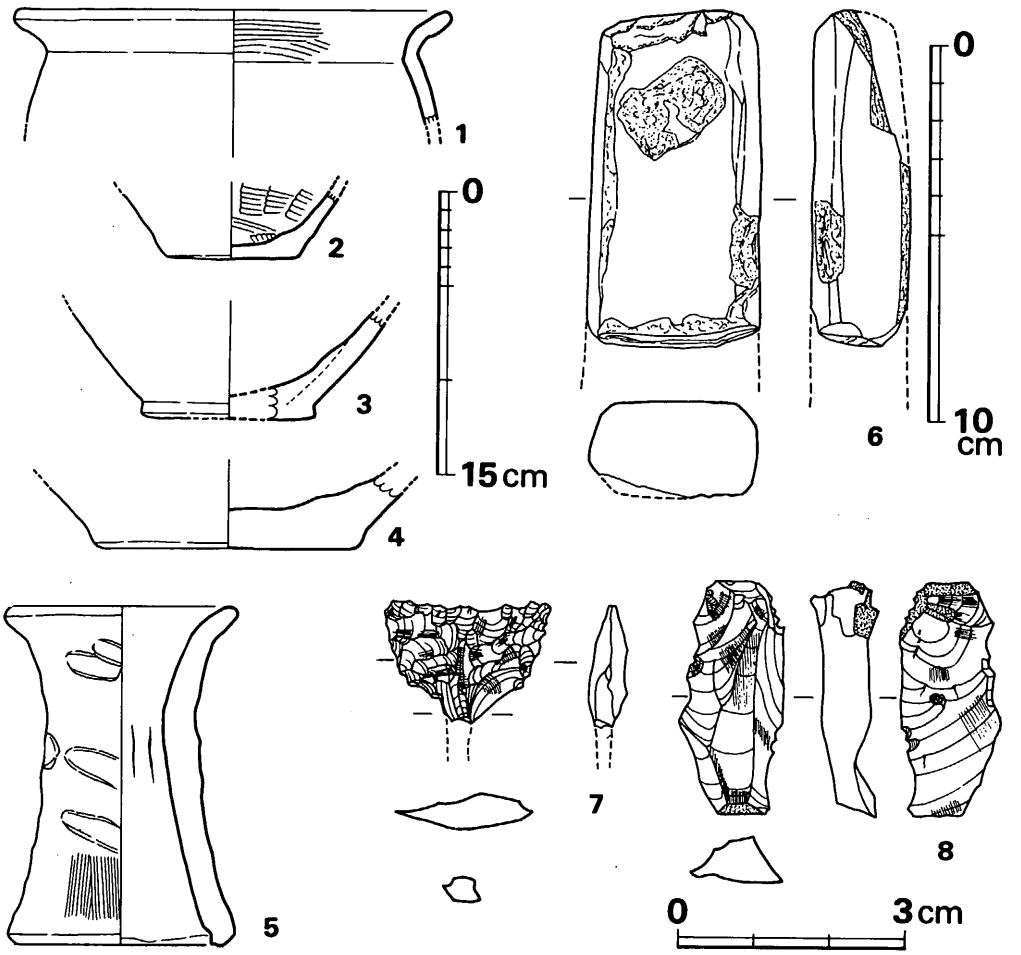


Fig. 113　第1号住居跡出土土器・石器実測図（土器¼，6は½，7・8は実大）

第2号住居跡出土遺物（Fig.115・116）

甕（**3・4・5**）

3は上半と底部とが同一個体であり，丸底風平底の胴上半は最大径を有する長めの器形を有する。口径17.4㎝，底径6.2㎝，胴最大径18.0㎝を測る。器表磨滅して調整不明で，胎土に粗砂かなり含み，焼成やや不良，淡褐色を呈する。**4**は径25㎝以上になる大型品で強く張る胴部を有する器形である。外面に強い二次焼成を受けて暗赤変している。頸部外面には強い指ナデがみえる。胎土に粗砂多く含み，焼成やや不良，暗黄茶褐色を呈する。**5**は，口径15.6㎝の胴の張らない小型甕である。胴内面には指オサエ痕が著しいが，他面は磨滅著しく調整不明。

1 住 居 跡 群

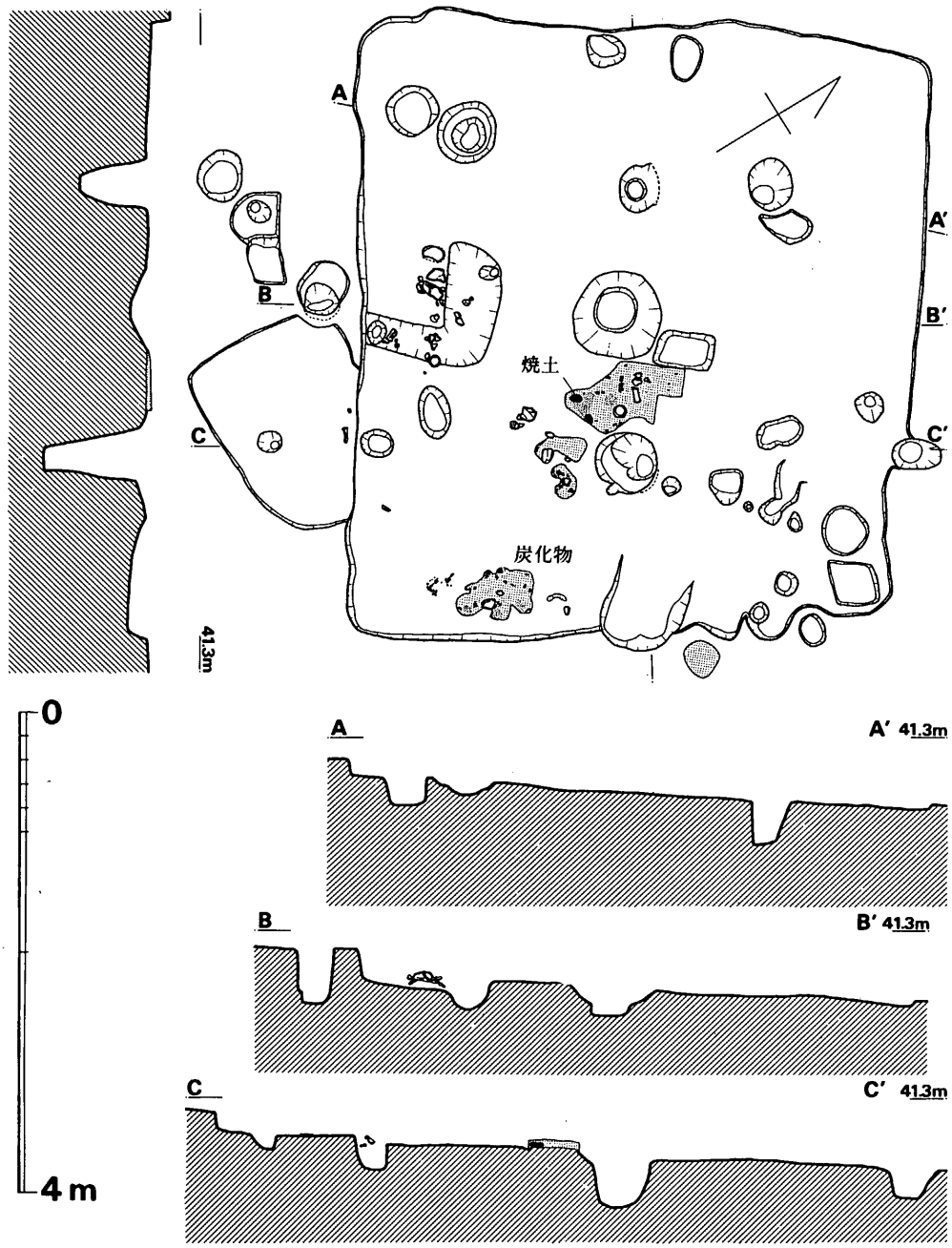


Fig. 114　第2号住居跡実測図（縮尺 1/60）

胎土に粗大石英粒多く含み，焼成良好にて淡茶褐色を呈する。

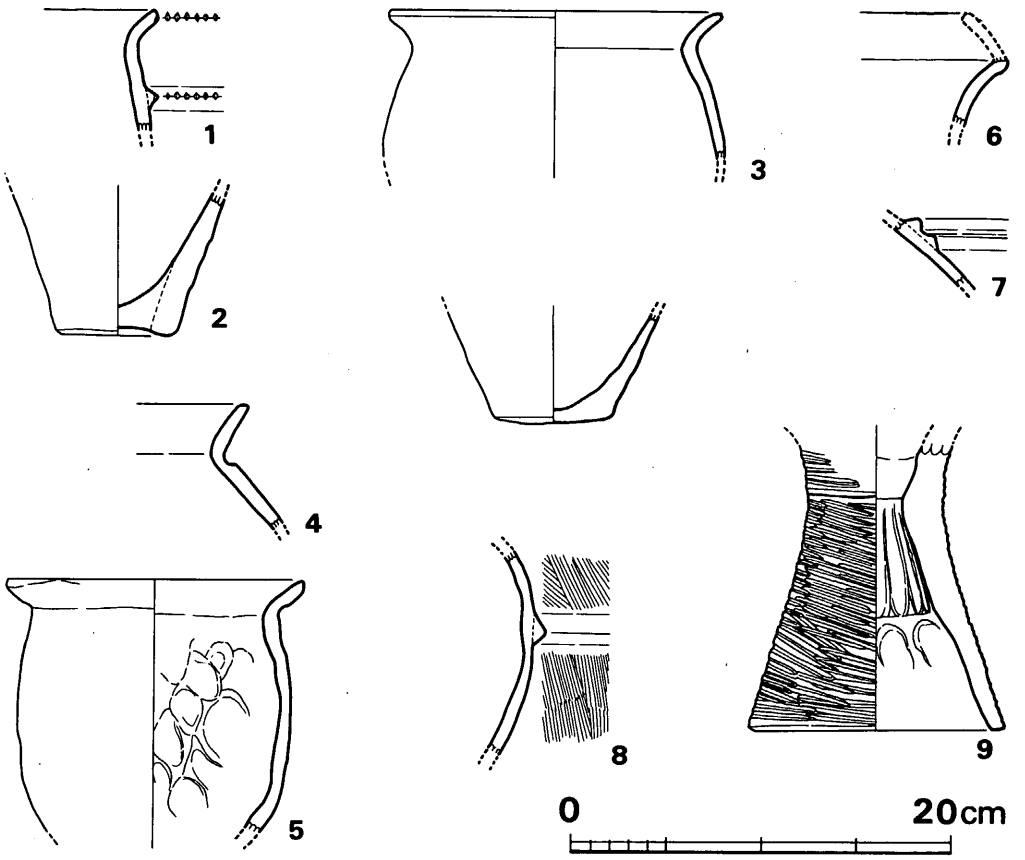


Fig. 115　第2号住居跡出土土器実測図（縮尺 ¼）

壺（6・7・8）

6は，逆「く」の字に内傾する口縁片で，胎土に粗砂かなり含み，焼成やや不良，淡黄褐色を呈する。**7**は壺肩部の連接2条三角凸帯片である。胎土に粗砂かなり含み，焼成やや不良，淡黄褐色を呈する。以上の6と7は同一個体の可能性もある。**8**は，胴最大径部に三角凸帯を貼り付け，外面に粗い縦～斜めハケを施す。凸帯部での径30cm程度の壺となり，胎土に粗砂かなり含み，焼成やや不良で外面黒色，内面黄白色を呈する。

器台（9）

外面に粗い叩目を施し，中位より上方でくびれ部をつくる筒形の類である。器壁厚く，叩目は巾3～4㎜の太いもので，内面には強い指オサエナデがみられる。底径13.5cm，くびれ部径7.1cm，を測り，底辺外縁は二次焼成で赤変する。胎土に粗石英粒多く含み，焼成良好，淡黄褐色を呈する。

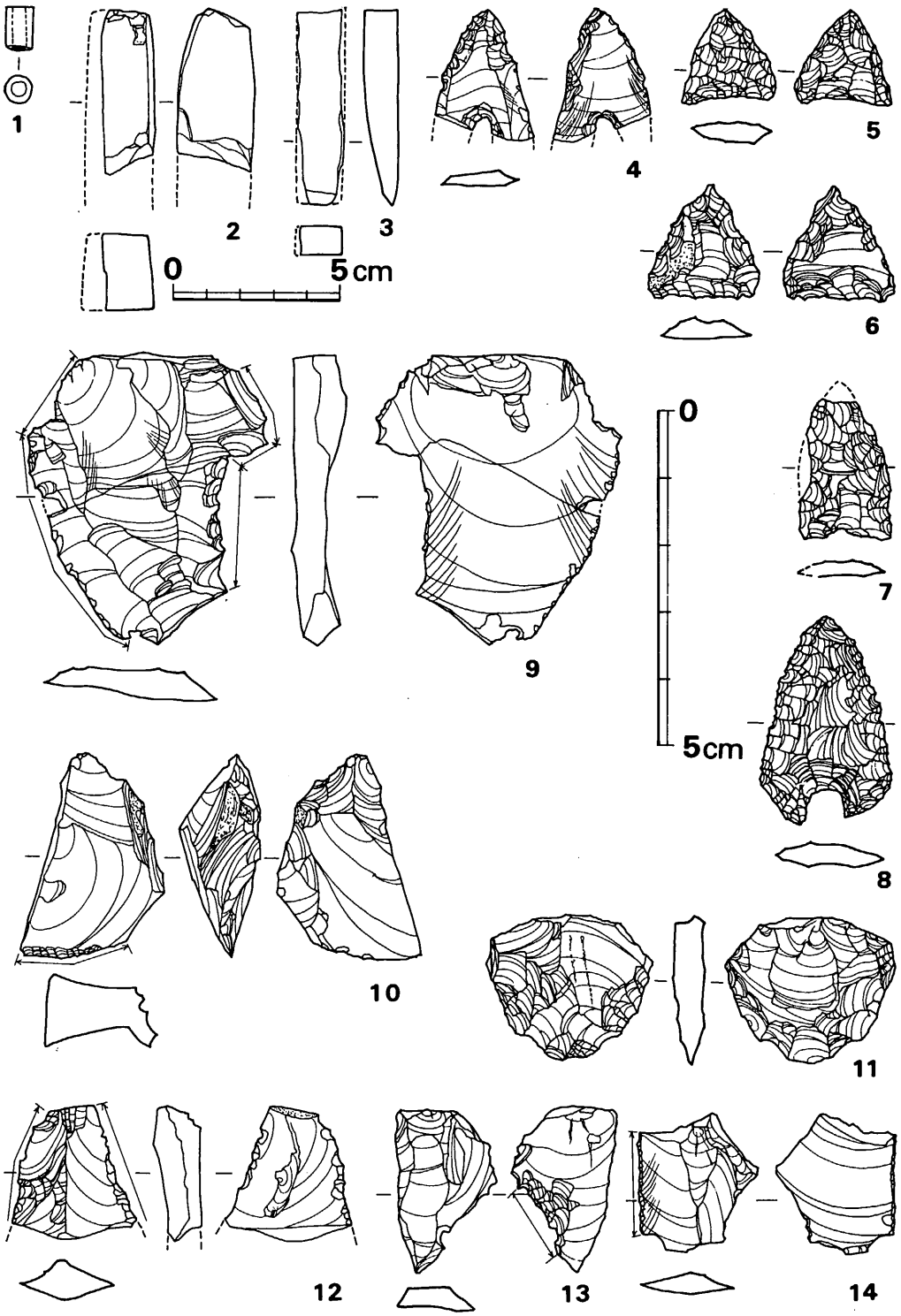


Fig. 116　第2号住居跡出土玉・石器実測図（縮尺実大，2・3のみ½）

前期甕（1・2）

覆土中の混入品である。1は口縁外端と貼り付け三角凸帯上に刻目を施し，胴のやや張る器形である。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で茶褐色を呈し，外面に煤付着がみられる。2は，浅い上げ底を呈し，底径6.3cmを測る。外面はナデ或いは磨き調整を行なう。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，外面赤褐色，内面暗褐色を呈する。

尚，この他石器以外に碧玉製管玉1点が出土している。小型品で，一見して当地方における弥生前期土坑墓等に副葬されるものと同類である。出土層位等は明確でないが，弥生前期遺物として混入したものと解釈したい。計測値等は以下の石器一覧表に詳記する。

Tab.12　第2号住居跡出土玉・石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig.No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	分　類		刃部長	備　考	台帳番号
116の1	管　玉	碧　玉	(6.5)	4.0	4.0					孔径2mm，白っぽい淡緑色	
116の2	石のみ	粘板岩	(48.5)	(16.0)	23.0	(30.5)				各面とも丁寧に研磨	25
116の3	石のみ	粘板岩	(58.0)	14.5	10.0	(13.1)			推定13.0	基部のみ柱状,刃部の方は扁平	17
116の4	打製石鏃	黒曜石	(19.5)	14.0	2.5	(0.5)	II	C		ブレイド使用の剝片鏃	21
116の5	打製石鏃	黒曜石	14.0	13.5	3.5	0.4	Ia	C			18
116の6	打製石鏃	黒曜石	17.0	16.5	3.5	0.8	Ib	A		原石粗面あり	19
116の7	打製石鏃	黒曜石	(20.5)	(13.5	2.5	(1.0)	Ib	C		側片ややふくらむ	20
116の8	打製石鏃	黒曜石	31.0	19.0	3.5	2.0	Ia	C		完形　鋸歯鏃	22
116の9	使用された剝片	黒曜石	(43.0)	35.5	5.0	(8.9)	B		(87.0)	上面は原石粗面，刃こぼれあり	27
116の10	スクレイパー	黒曜石	30.5	(21.0)	(11.0)	(5.2)	A		(16.5)	片面に小さなリタッチ	24
116の11	スクレイパー	黒曜石	21.5	24.5	5.0	2.7	C		43.5	両面よりリタッチ	26
116の12	使用された剝片	黒曜石	(20.0)	(18.5)	6.0	1.7	C		35.0	上面原石粗面，刃こぼれあり	23
116の13	スクレイパー	黒曜石	24.0	15.5	3.5	1.0	A		11.0	片面のみリタッチ	28
116の14	使用された剝片	黒曜石	20.0	17.5	3.0	1.0	A		14.5	刃こぼれあり	29

第3号住居跡出土遺物（Fig.118）

Tab.13　第3号住居跡出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig.No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	研磨面	砥の程度	備　考	台帳番号
118の1	砥　石	粘板岩	(109.0)	44.0	(22.0)	(106.1)	表　面 両側面	仕上砥	研磨面に擦痕あり	30

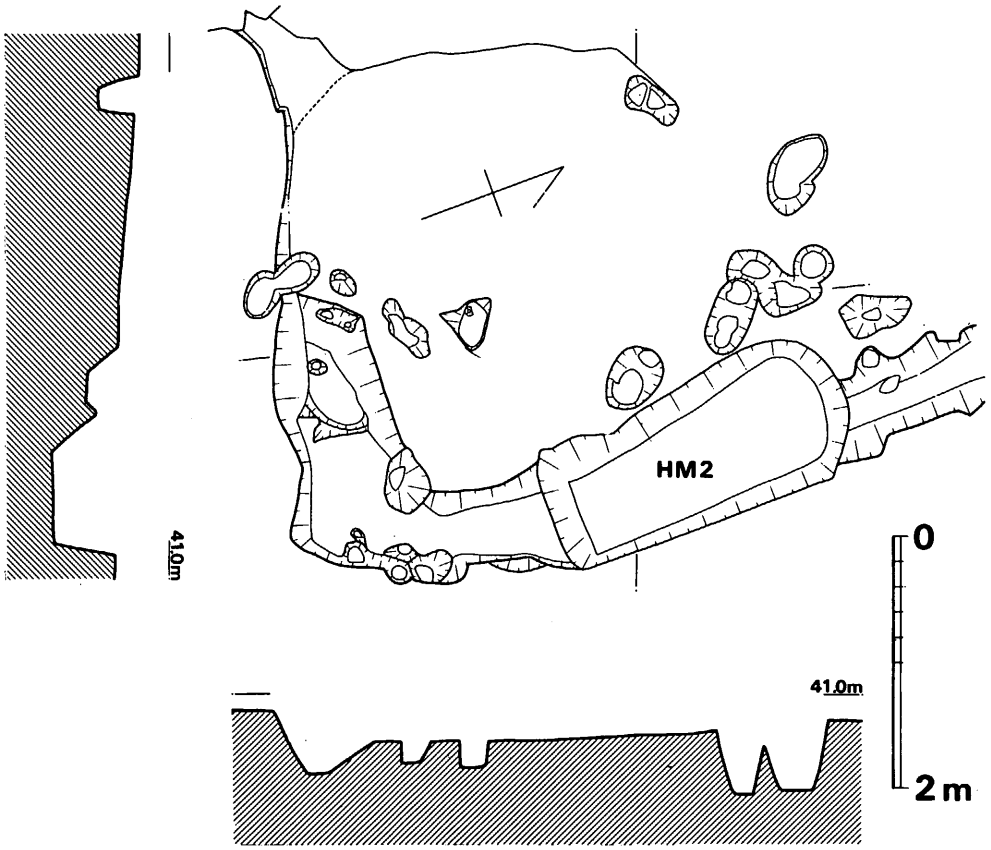


Fig. 117　第3号住居跡実測図（縮尺 1/60）

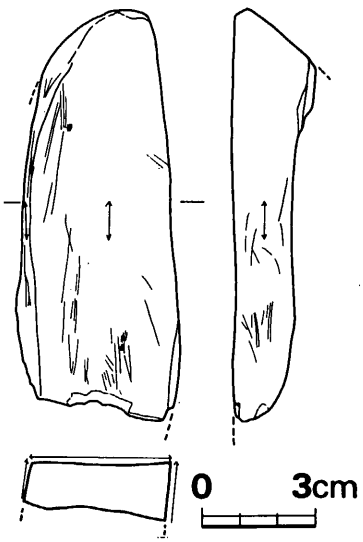


Fig. 118　第3号住居跡出土砥石実測図（縮尺 1/2）

第4号住居跡出土遺物（Fig. 119）

器台

径9.4cmの浅い受け部を有する器台である。脚部は中空となる。受け部端部が短かく内湾気味に立ち上がる。胎土精良で焼成良好，淡茶色を呈する。これ1点のみで住居跡の年代を決定するには躊躇するが，この器形をみる限りでは，古式土師器に含まれる可能性が強い。

Fig. 119　第4号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）

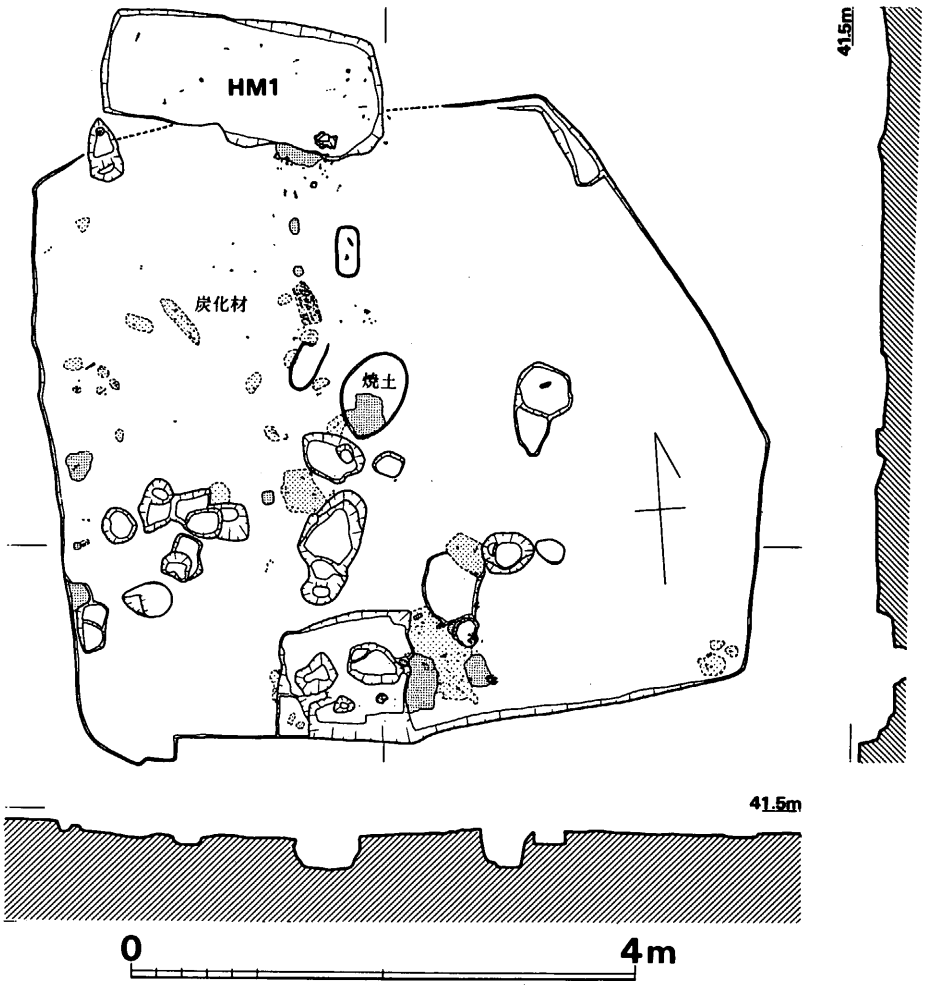


Fig. 120　第4号住居跡実測図（縮尺 1/60）

第5号住居跡出土遺物（Fig. 122・123）

甕（1～6）

如意形口縁外端に刻目を施し，外面にやや細かい縦ハケ調整を行なう。2は，従来「亀の甲タイプ」と呼称されている類で，やや張る胴部をつくるかと推定される。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好，茶褐色を呈する。6は，1/5残存するが，その部分での傾きをみる限り直口の鉢状の器形となるものかと思われるが，内外反転して亀ノ甲タイプの甕となる可能性も残る。3は底径6.0cm，外面にやや細かい縦ハケを施し，胎土に粗石英粒多量含み，焼成良好で茶褐色を

呈する。**4**は，かなり充実する底径5.3cm，の小型底部で，外面粗い縦ハケを施す。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で褐色を呈する。**5**は，底径9.3cmのやや大型の甕で，浅い上げ底状となる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，外面赤褐色，内面暗褐色を呈する。

壺（7）

頸部に3本の平行沈線を巡らす類で外面ヘラ磨きを施す。粗砂をかなり含み，焼成良好で外面暗赤色，内面暗黄色を呈する。

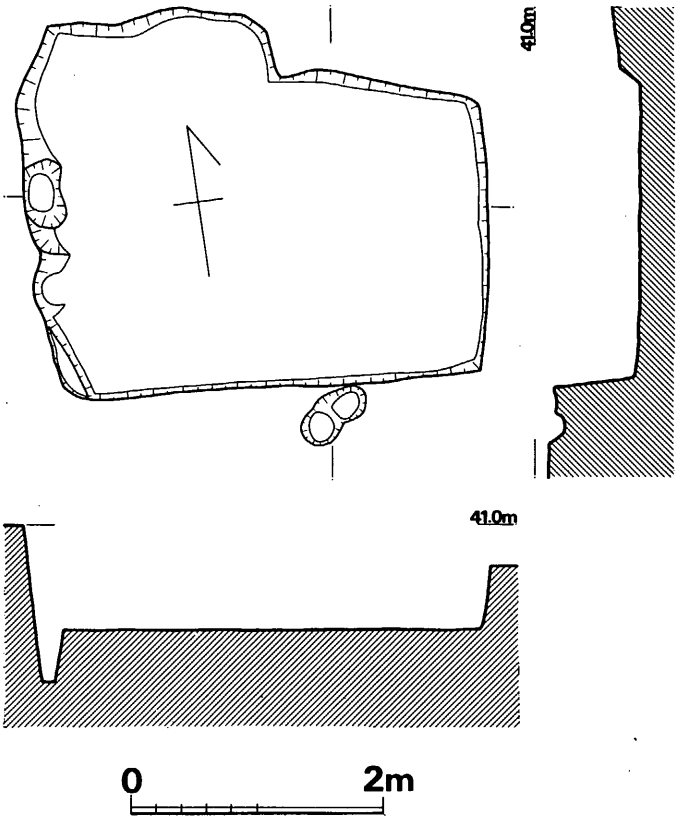


Fig. 121　第5号住居跡実測図（縮尺 1/60）

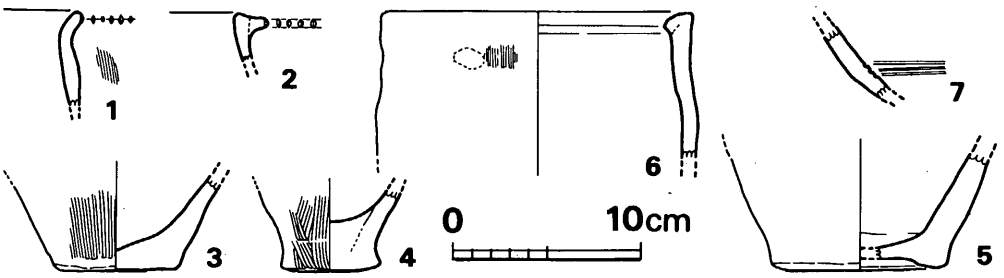


Fig. 122　第5号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）

Tab. 14　第5号住居跡出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
123の1	スクレイパー	安山岩	41.5	47.0	9.5	20.3	71.5	E	リタッチ両面	39
123の2	スクレイパー	安山岩	26.5	22.0	6.5	3.7	36.0	E	リタッチ片面 原石粗面有	37

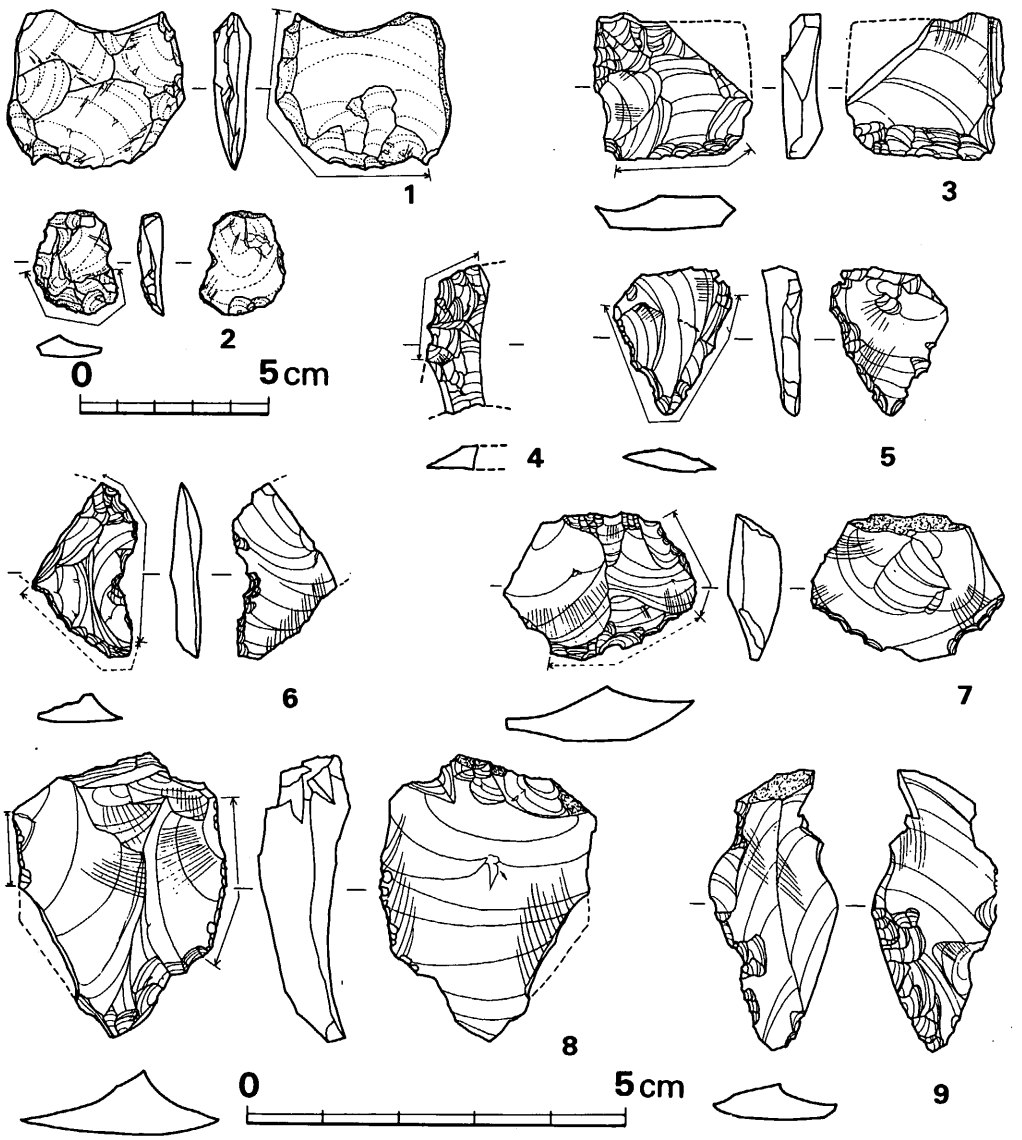


Fig. 123　第５号住居跡出土石器実測図（縮尺１・２は½・他実大）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
123の３	スクレイパー	黒曜石	19.0	20.5	4.5	(2.2)	17.5	A	リタッチ両面	34
123の４	スクレイパー	黒曜石	(19.5)	(8.5)	(3.0)	(0.6)	(16.5)	C(？)	リタッチ両面	35
123の５	使用された剥片	黒曜石	19.5	15.0	3.5	1.0	33.5	D	直線的に刃部 原石粗面有	33
123の６	使用された剥片	黒曜石	(23.0)	(13.5)	3.5	(0.9)	(23.0)	E	刃つぶし有	31

1 住　居　跡　群

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
123の7	使用された剝片	黒曜石	19.0	25.0	7.0	2.9	12.0	A	二辺に刃つぶし有 原石粗面有	32
123の8	使用された剝片	黒曜石	37.0	28.0	8.5	(7.3)	(30.5)	B	直線的に刃部	36
123の9	スクレイパー	黒曜石	36.5	16.5	5.0	2.1	20.1	D	リタッチ片面 原石粗面有	38

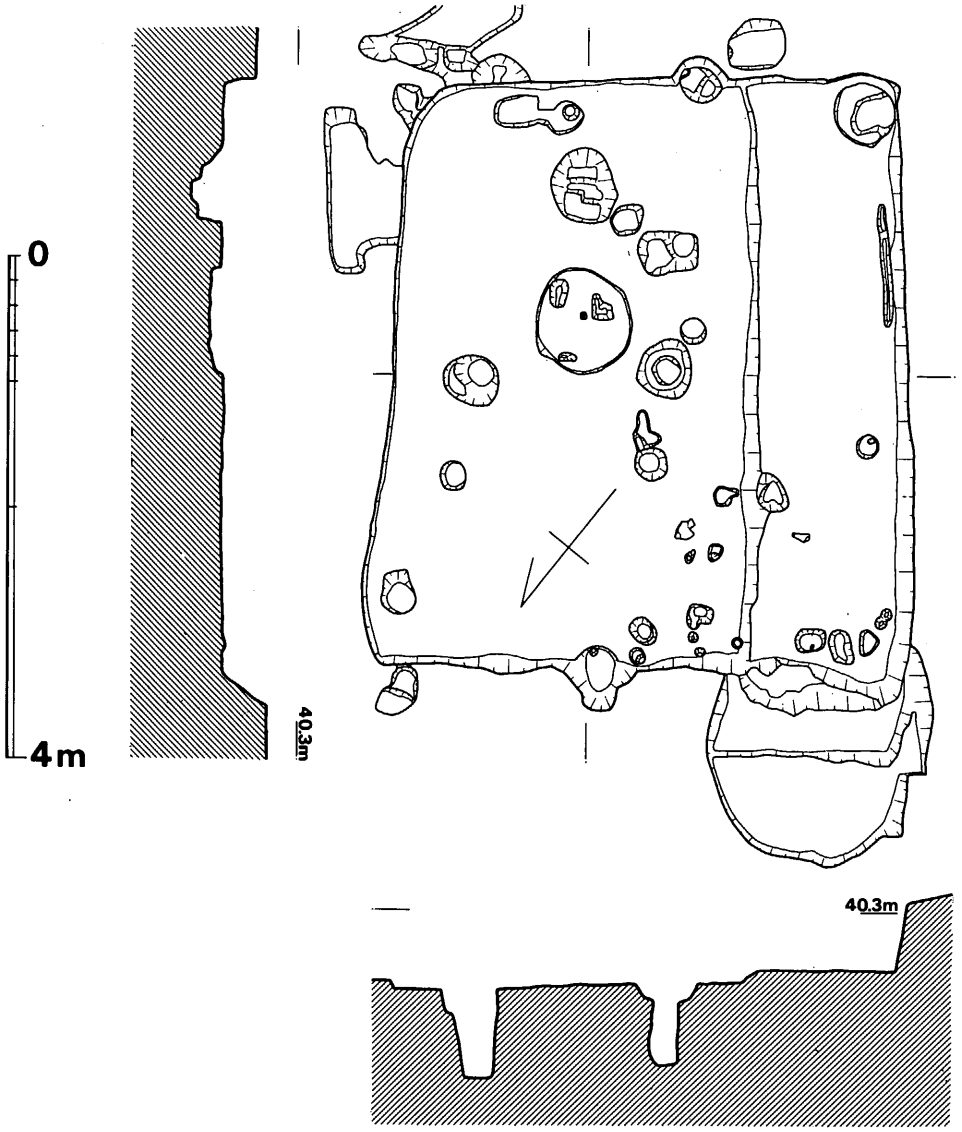


Fig. 124　第6号住居跡実測図（縮尺 1/60）

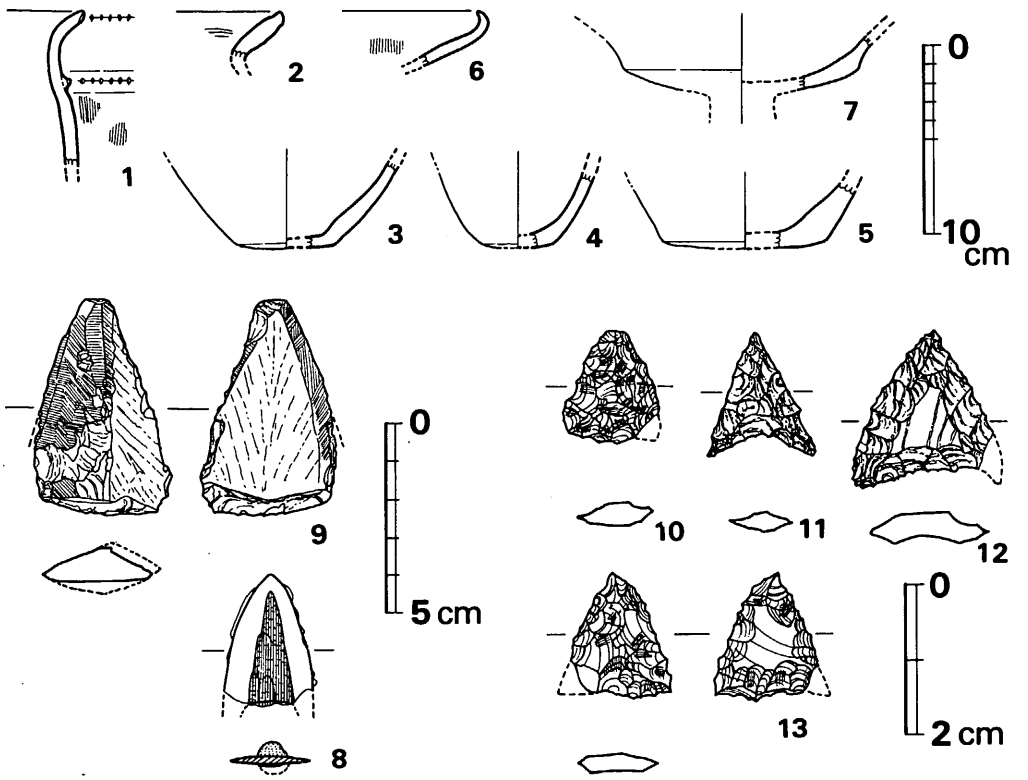


Fig. 125　第６号住居跡出土土器・石器・鉄器実測図（縮尺　土器¼・８と９は½・他実大）

第６号住居跡出土遺物（Fig.１２５）

甕（２・５）

２は，外面中ぶくらみする口縁小片であり，内面に粗い横ハケがみられる。胎土に粗砂少量含み，焼成良好，暗褐色を呈する。**５**は，8.8cmのやや大きめの底径を測り，丸底風平底を呈する。粗砂多く含み，焼成良好にて，外面赤褐色，内面暗褐色を呈する。

壺（**３・４**）

３は，丸底風平底で底径5.2cmを測る。底部は薄く，胴外面はヘラ磨きを施す。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で外面茶色，内面暗褐色を呈する。⅓残存。**４**は，小型の壺或いは鉢状の器形をなすものと思われ，不安定な丸底風平底をなす。胎土に粗砂幾らか含み，焼成やや良，黄白色を呈する。

高杯（**６・７**）

６は，大きく開いた杯部端が短かく反転して内湾する類である。内面に細かい縦ハケ調整がみられ，他は横ナデを行なう。胎土に粗砂少量含み，焼成良好，淡茶色を呈する。**７**は，杯部

中途で外面に稜をつくり，更に大きく開く類である。胎土に粗砂少量含み，焼成良好，黄褐色を呈する。

以上，総体的に弥生後期後半～終末期の様相をみせるものが多く，底部の状況などから，少なくとも最終末期までは下るまいと考える。

前期甕（1）

口縁外端と三角凸帯上に刻目を施す如意形口縁甕片である。覆土混入品である。外面に縦ハケを施し，胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡褐色を呈し，外面に煤付着がみられる。

鉄鏃（8）

床面出土品で，無茎鏃である。腸抉状部両端が欠損するが，木質の箆状のもので両面を挟む類である。基部～鋒部まで3.4cmを測り，最大幅2.4cm程度になると推定される。

Tab.15　第6号住居跡出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig.No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類		備　考	台帳番号
125の9	石剣か石戈	安山岩	(57.0)	(36.0)	9.0	(20.2)	(89.0)			周辺および表面の一部を研磨	41
125の10	打製石鏃	黒曜石	14.0	(12.5)	3.0	(0.6)		Ia	A	ほぼ完形	44
125の11	打製石鏃	安山岩	15.5	14.0	2.5	0.4		Ia	C	完形	43
125の12	打製石鏃	安山岩	20.0	(18.5)	4.0	(1.3)		Ib	C		42
125の13	打製石鏃	黒曜石	16.5	(13.0)	2.0	(0.6)		Ib	B		40

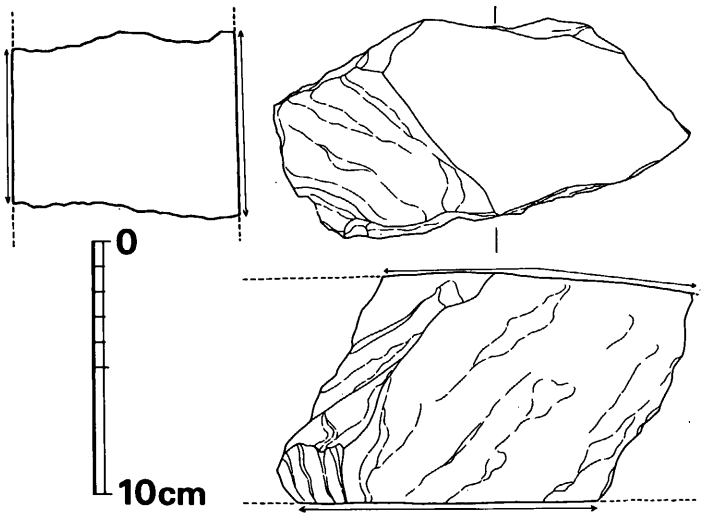


Fig. 126　第7号住居跡出土砥石実測図（縮尺 1/3）

第7号住居跡出土遺物

（Fig.126・128・129）

甕（1～5・7）

口縁外端に刻目を施すもの（1・2），口縁外端と三角凸帯に刻目を施すもの（3），口縁端の刻目の有無不明なもの（5），刻目の明らかにみられないもの（4）などがある。1・2は，頸部下に三角凸

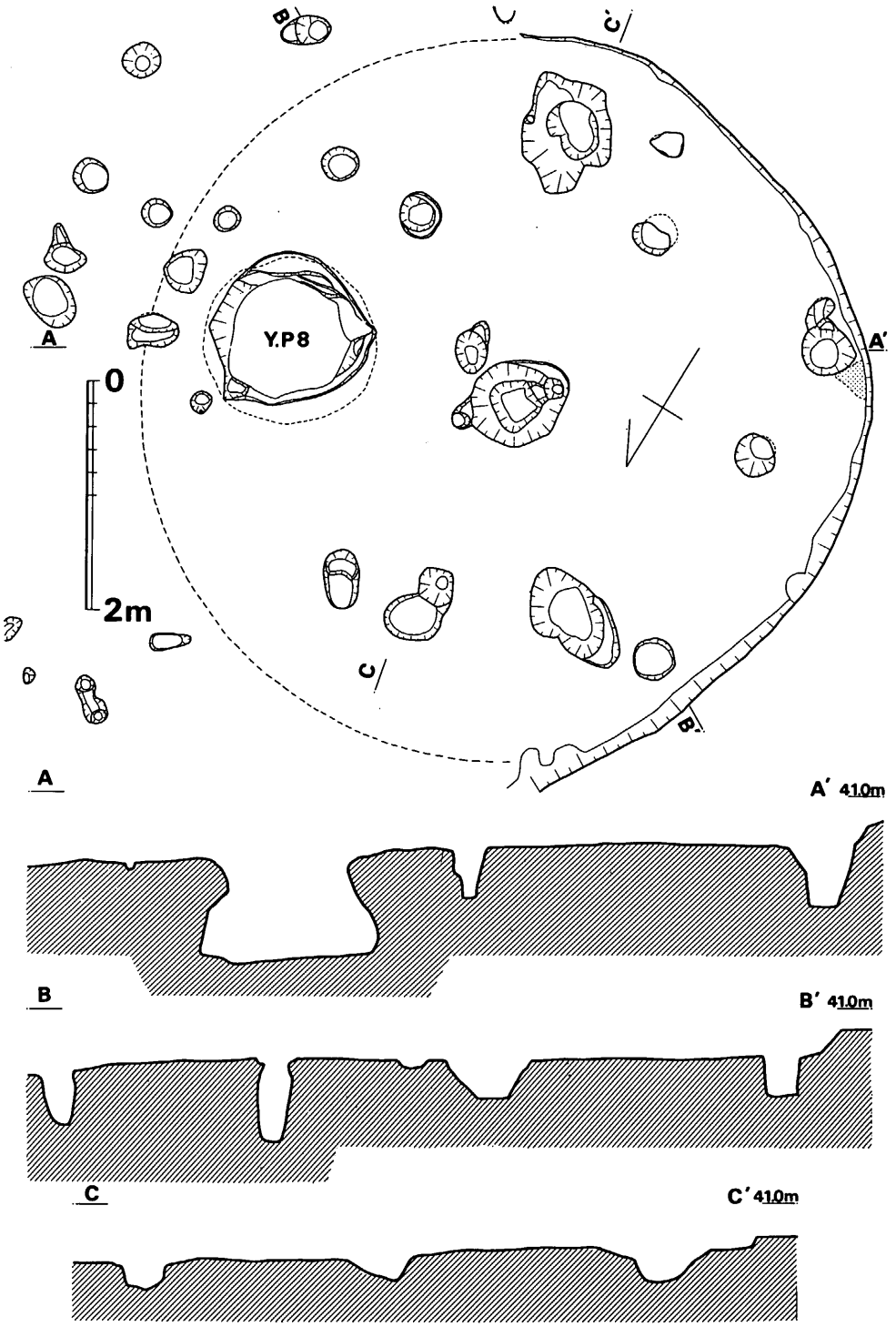


Fig.　127　　第７号住居跡実測図（縮尺　1/60）

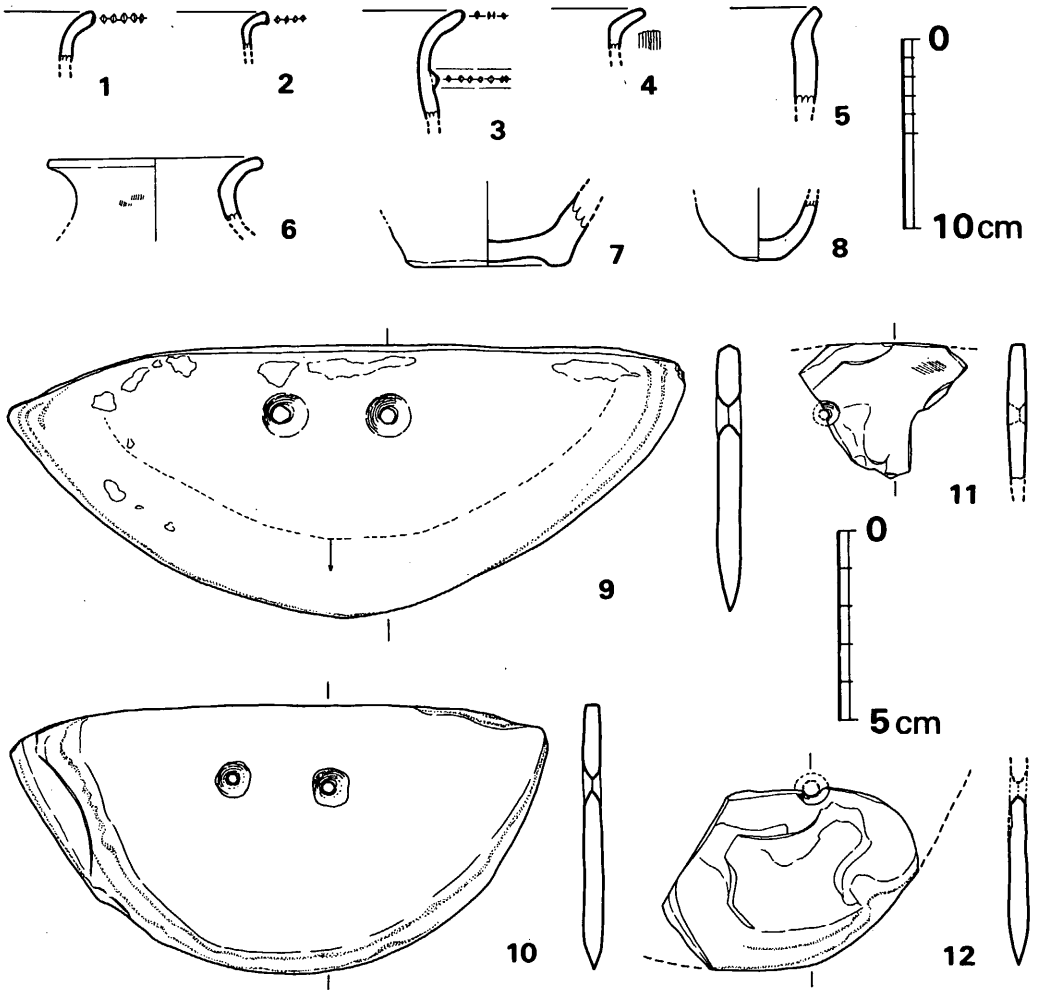


Fig. 128　第7号住居跡出土土器・石器実測図（縮尺 ¼・½）

帯を貼り付け,刻目を施す類となる可能性も残る。胎土に孰れも粗砂粒多く含み,焼成良好で,1は暗褐色, 2は淡褐色, 3は内面暗黄褐色, 外面暗褐色, 4は暗褐色, 5は内面黒色, 外面黄褐色を呈する。7は, 底外面を輪状にへこませ,浅い上げ底となる。底径8.7cmを測り, 胎土に粗砂多く含み, 焼成良好で茶色を呈する。

壺（6）

口縁片で, 丸く外反し, 端部は丸く収める。内面横ヘラ磨き, 外面縦ハケの上を横ヘラ磨きを施す。胎土に粗砂少量含み, 焼成良好, 黄褐色を呈する。

ミニチュア（8）

全体に割と丁寧に作られた壺或いは椀状のミニチュア品である。小さな平底風丸底を呈し，胎土に粗砂多く含み，焼成良好，暗褐色を呈する。

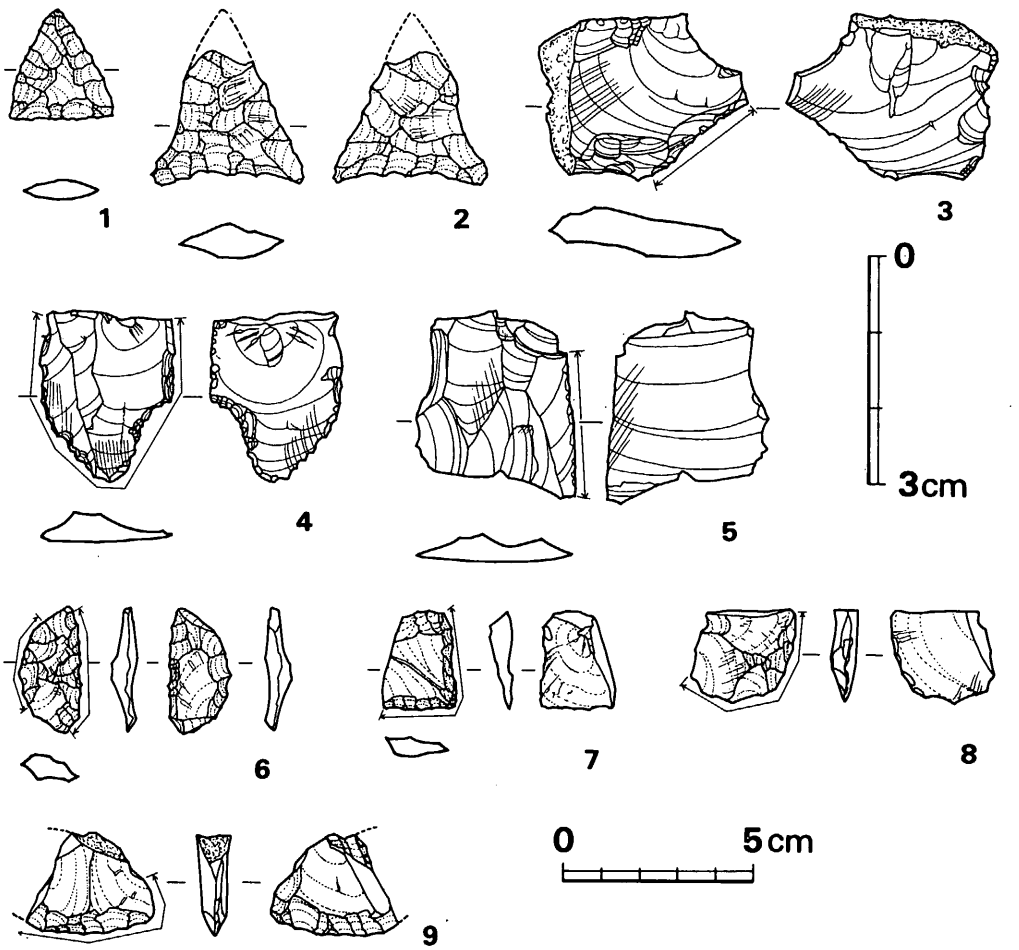


Fig. 129　第7号住居跡出土石器実測図（縮尺　実大・6～9は½）

Tab. 16　第7号住居跡出土石器一覧表（1）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	研磨面	備　　考	台帳番号
128の9	石包丁	頁岩	70.5	179.0	6.5	133	222.5	全　面	孔径4.5,4.5 穿孔両面，完形	46
128の10	石包丁	砂岩質	71.0	140.5	6.0	89.9	202.0	全　面	孔径 2.5，2.5 穿孔両面，完形	45
128の11	石包丁	粘板岩	(35.0)	(44.0)	5.0	(7.5)	不　明	表面風化	孔径3.0，穿孔両面	50
128の12	石包丁	粘板岩	(48.0)	(67.0)	5.0	(22.5)	(65.0)	表面風化	孔径 4.5，穿孔両面，大型半月形	51
126の1	砥　石	砂　岩	(164.0)	(85.5)	90.0	(1392)		表裏面	磨面は粗い 熱をうけ赤変	57

Tab.17　第7号住居跡出土石器一覧表(2)　(単位：mm・g)

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類		備　考	台帳番号
129の1	打製石鏃	安山岩	14.5	13.5	2.5	0.4		Ib	B		52
129の2	打製石鏃	安山岩	(17.5)	20.0	4.5	(1.1)		Ia	C	先端欠損	305
129の3	使用された剝片	黒曜石	21.5	27.5	6.5	3.4	16.0	A			55
129の4	使用された剝片	黒曜石	22.0	17.5	4.0	1.6	49.0	D			56
129の5	使用された剝片	黒曜石	24.5	21.0	3.5	2.0	18.5	A			49
129の6	スクレイパー	安山岩	33.0	16.5	6.5	3.4	29.0	A		左辺は刃つぶし(?)	54
129の7	スクレイパー	安山岩	26.0	19.5	6.0	3.2	18.5	A		右，上側辺は刃つぶし(?)	53
129の8	スクレイパー	安山岩	24.0	27.5	7.0	4.8	45.5	C			48
129の9	スクレイパー	安山岩	(26.5)	(33.5)	(9.0)	(6.9)	45.5	C		リタッチ両面	47

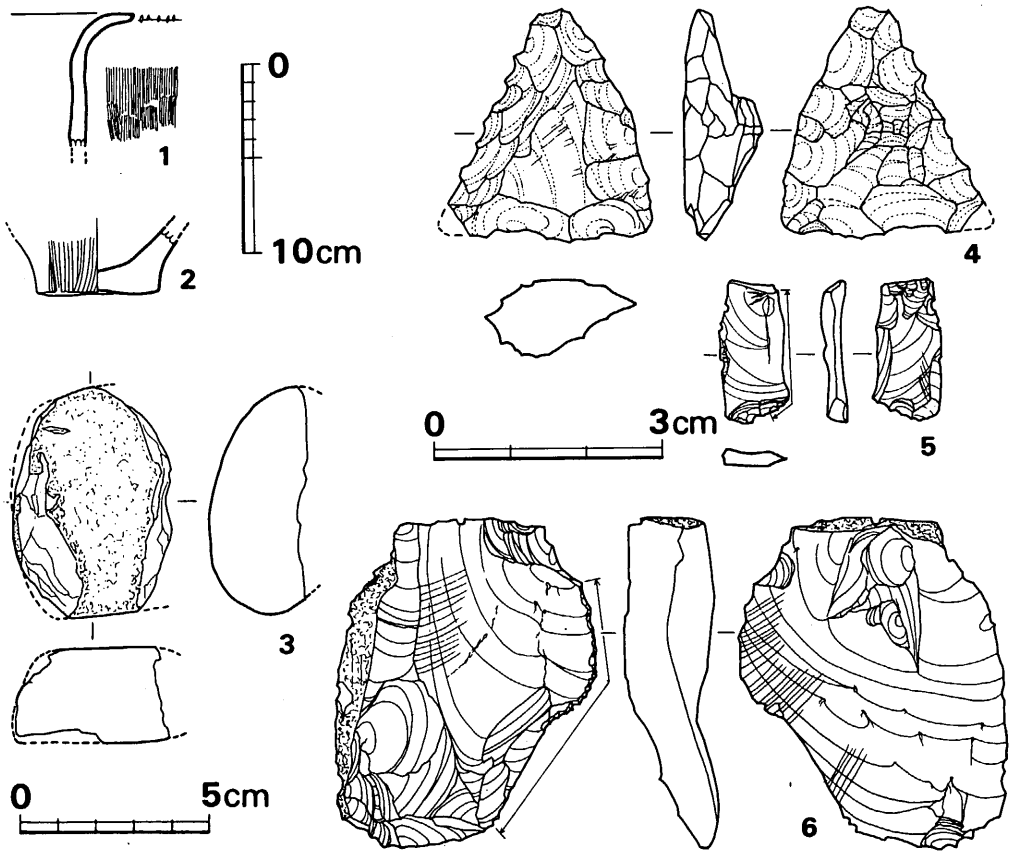


Fig. 130　第8号住居跡出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・3のみ½・他実大）

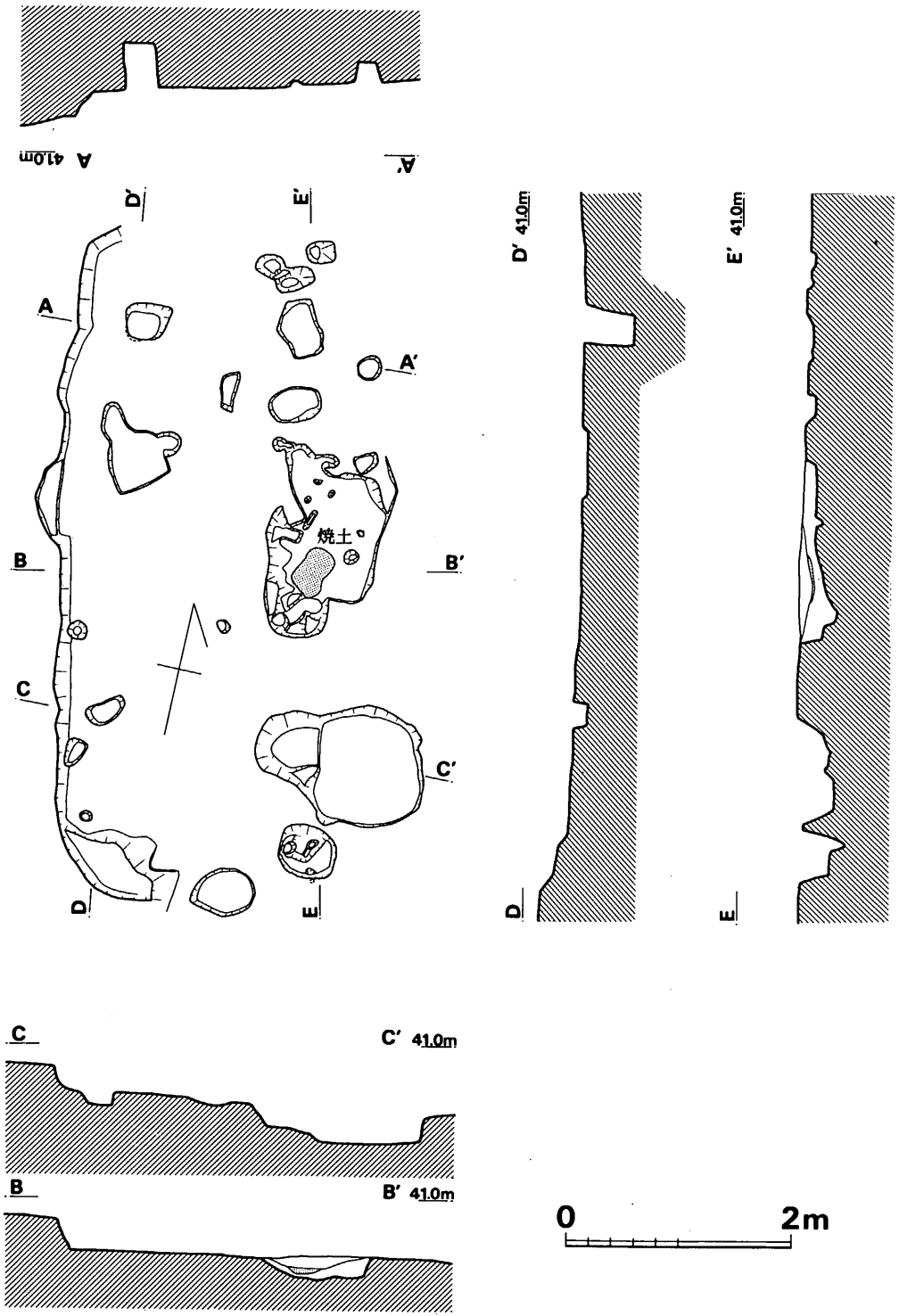


Fig. 131　第8号住居跡実測図（縮尺 1/80）

1 住　居　跡　群

第8号住居跡出土遺物（Fig.130）

甕（1・2）

孰れも中央炉中より出土のものである。1は，長く外反する口縁端のみに刻目を施す類で，頸部下の三角凸帯等は認められない。張らない胴部で，口縁内外面は横ナデ，胴内面縦ナデ，外面には細かい縦ハケを施す。刻目は口縁外下端ではなく口縁端面に及ぶものである。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，茶褐色を呈する。2は，底部外面中央が円形に僅かに窪むもので，外面に粗い縦ハケを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗茶褐色を呈する。

以上の土器を出土する第8号住居跡は第7号円形住居跡に切られるものであるが，既述した両者の土器の間に幾らかの差異は明らかに認められる。即ち，第7号住居跡出土器の中には，従来中期初頭に位置付けられている城之越式土器の甕に近いもの（口縁端に刻目を有さない Fig. 128—4）がみられ，第8号住居跡においては，口縁端面にのみ刻目を有し，張らない胴部を有するもの（Fig.130—1）がみられ，後者は板付Ⅰ式的様相を残すものである。この土器の変遷の段階差という点においても，北部九州地域における住居跡プランの方形→円形への移行の時期が少なくとも前期後半代に求められることをここに確認することが出来よう。

Tab.18　第8号住居跡出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
130の3	磨　石	砂　岩	60.5	(41.5)	25.0	(84.3)			表裏面を研磨	7
130の4	打製石鏃	安山岩	30.5	(26.5)	10.0	(5.4)		Ib　B	未製品	9
130の5	ブレイド(？)	黒曜石	18.5	9.0	2.5	0.4	15.0		原石粗面あり バルブ調整	10
130の6	使用された剝片	黒曜石	43.0	34.0	11.5	12.8	36.5	A	原石粗面あり 刃こぼれあり	8

第9号住居跡出土遺物

この住居跡床面より，大きめの土器破片が幾らか検出されたが，前記の如く調査中途において盗難にあい，残念ながら公けに図示することができない。記憶を辿ると弥生時代後期に含まれ得る類であったことを付記しておく。

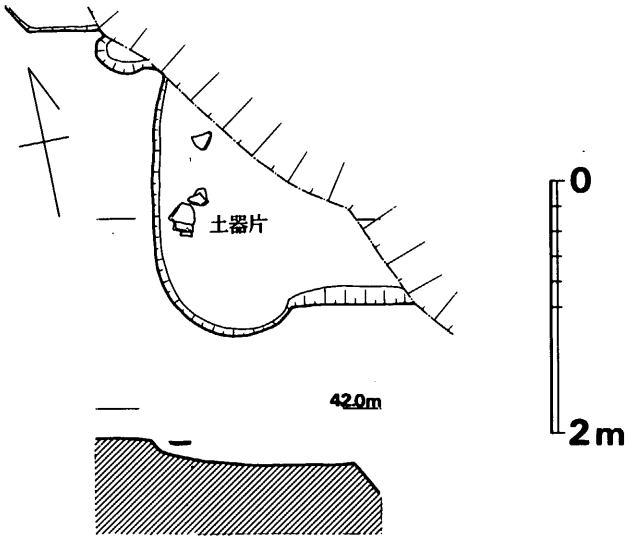


Fig. 132　第9号住居跡実測図（縮尺 1/60）

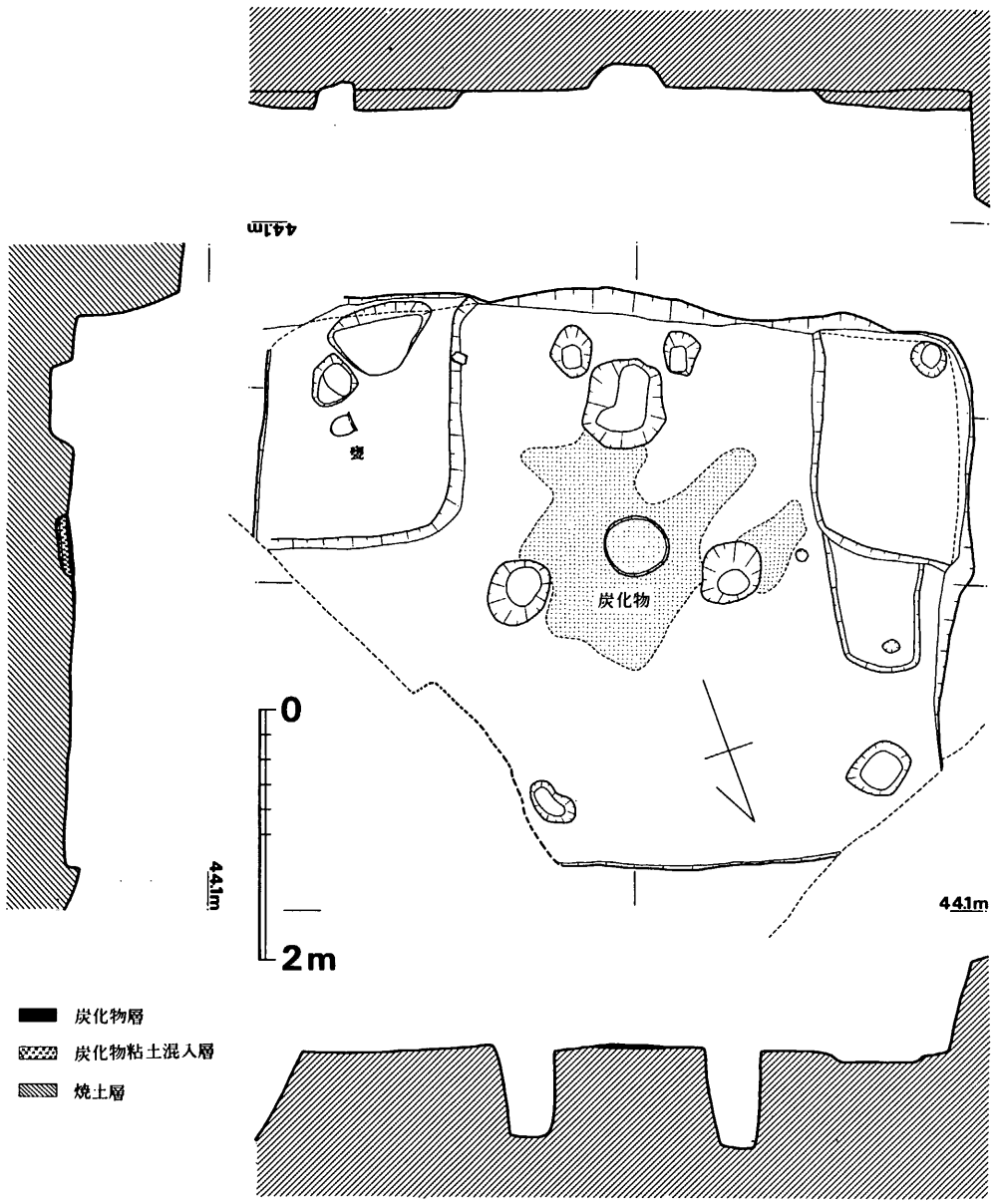


Fig. 133　第10号住居跡実測図（縮尺 1/60）

第10号住居跡出土遺物（Fig.１３４・１３５）

甕（１～５）

１は口径20.0cmを測る「く」の字口縁片で，胴は幾らか張るものであろうと思われる。

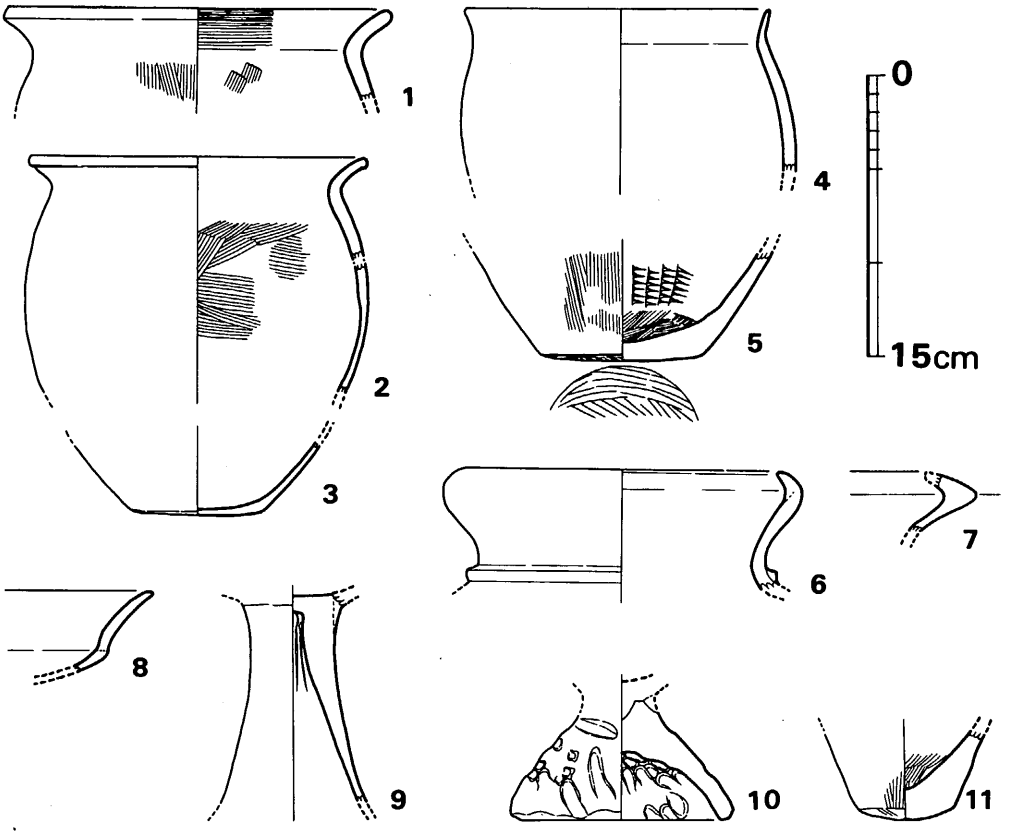


Fig. 134　第10号住居跡出土土器実測図（縮尺 ¼）

口縁内面は粗い横ハケ，外面は横ナデ，頸部以下内面はハケの上横ナデ，外面は粗い縦ハケ調整を施す。胎土に粗砂多く含み，焼成やや不良，淡褐色を示し，外面は煤付着して黒変する。**2** は，口縁外端がやや突出する「く」の字口縁甕で胴中位で丸く張る。口径17.6cm，胴最大幅18.2cmを測り，内面口縁～頸部下までは横ナデ，胴部内面は粗い横ハケを施す。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好，淡茶～黄褐色を呈する。**3** は，かなり薄手の丸底風平底の底部で，底径6.9cmを測る。胎土に粗石英粒極めて多く，焼成不良で黒～淡褐色を呈する。**4** は，直口気味でやや開く口縁を有する器形で，口径16.1cmを測る。器表剝落して調整全く不明で，胎土に粗砂かなり含み，焼成やや良，黄褐色を呈する。**5** は，3と比べてやや厚手の丸底風平底をなし，底径8.5cmを測る。内面に回転方向のハケ状工具端の強い押し引き状圧痕がみられ，胴外面は粗い縦ハケが施され，更に，底部外面に極めて粗いハケ状調整が施される。胎土に粗砂幾らか含み，焼成良好，外面赤茶色，内面黄白色を呈する。

壺（6・7・11）

6は，口縁丸く内湾し，中期からの袋状口縁壺の様相を残し，頸部に三角凸帯を貼り付ける類である。中期袋状口縁壺と異なり，口径大きく16.5cmを測り，頸部も短かい。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好，黄褐色を呈する。7は，6の口縁より更に鋭角に屈曲内湾し，外面に稜をつくる類である。胎土に粗砂幾らか含み，焼成やや良好，黄褐色を呈する。11は，厚手の不安定な平底風丸底をなし小型の壺或いは鉢状の器形になるかと思われる。内外面に粗いハケを施し，粗砂多く含み，焼成良好，外面淡赤色，内面灰褐色をなす。

高杯（8・9）

8は，終末期の杯部屈曲部から更に長く伸びる口縁を有する類ではなく，未だ短かい類である。胎土に粗砂少量含み，焼成良好，黄褐色を呈する。9は，やや長い中空の脚部で，外面は縦方向ヘラ磨き，内面は奥にシボリ痕がみられ，下半は縦ナデを施す。脚裾部以下が残らないが，数孔を穿った可能性もある。胎土に粗砂少量含み，焼成良好，黄白色をなす。

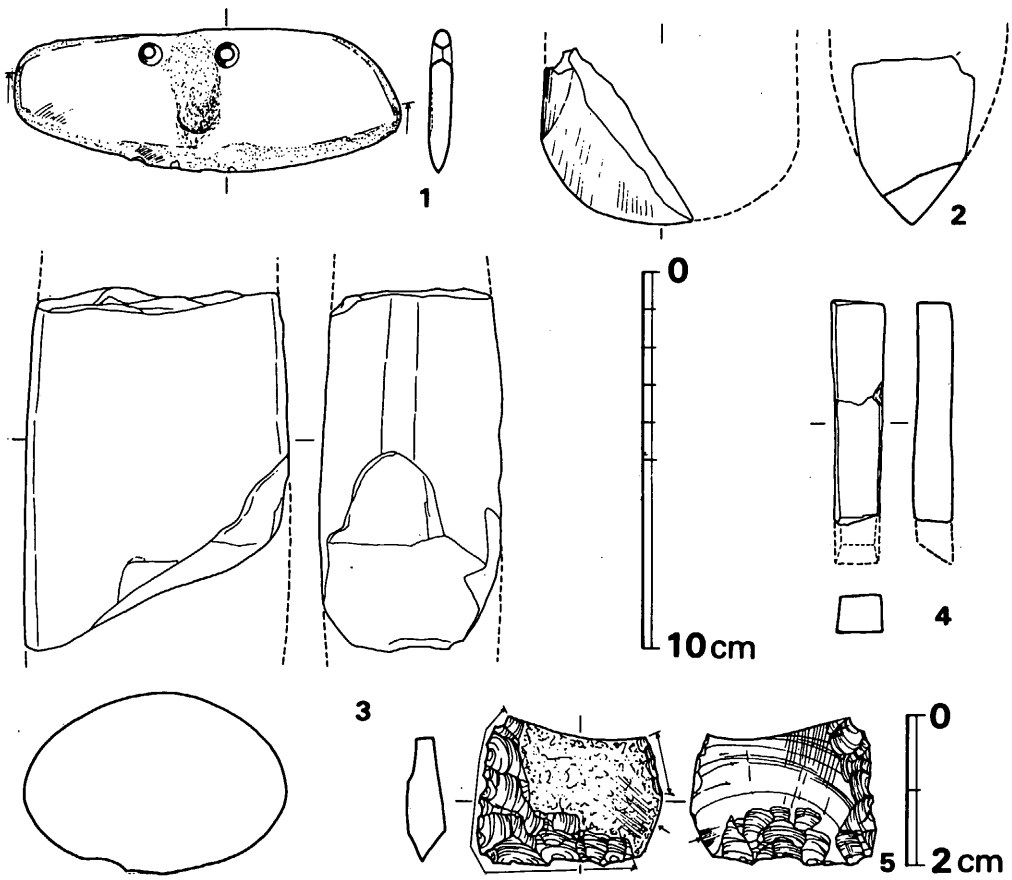


Fig. 135　第10号住居跡出土石器実測図（縮尺　½・5のみ実大）

器台（10）

強い指オサエ痕が内外面にみられ，全体に手捏ね的で，器台或いは台付鉢状の器形になると思われる。上部との接合は「ヘソ挿入法」である。外面に0.4～0.5cm四方の工具による方形の圧痕も認められる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡茶色を呈する。

尚，既述の盗難に会った本住居跡床面出土甕形土器完形品は，前記の2と3を合わせたような器形で胴はそれ程張らないものであったと記憶していることを付記しておきたい。（PL.74参照）（中間研志）

Tab. 19 第10号住居跡出土石器一覧表 （単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
135の1	石包丁	玄武岩(?)	38.0	101.5	6.0	30.4	120.0		刃部周辺に擦痕あり	61
135の2	磨製石斧	玄武岩	(46.0)	(40.0)	(32.0)	(41.1)	(51.0)		太型蛤刃石斧	58
135の3	磨製石斧	玄武岩	(95.5)	70.0	47.5	(544)	?		太型蛤刃石斧	62
135の4	石のみ	粘板岩	(58.0)	14.0	10.0	(8.9)	推定 11.0		丁寧な面取り研磨	59
135の5	スクレイパー	黒曜石	19.5	24.5	5.5	2.3	47.5	E	表・裏面同一方向に擦痕あり	60

Ⅵ—2 袋 状 竪 穴 群

調査期間の前半において，前記の住居跡群の集中部である，1号前方後円墳と3号墳の間において,住居跡群とともに，表土剝ぎの段階で弥生前期の遺構の存在が推定された。はたして，前期住居跡である第5・7・8号住居跡を検出する以前において第1～6号の袋状竪穴を検出した。第7・8号住居跡は，更にその後包含層下に検出したものであり，第7・8号袋状竪穴も更に掘下げたそれらの遺構に伴なって調査されたものである。将に，以来悔みと歯ぎしりの元となった前方後円墳々丘のユンボによるトレンチ発掘と略期を同じうする真夏の日照りに喘ぐ候であった。

さて，ここで記述しようとする袋状竪穴群が最終的に52基もの数に昇ろうとは，調査者は勿論，他の誰も予想だにしないことであった。更に，それらの殆んどを調査する段階は，当初の調査計画は大きく遅れており古剣塚諸墳の保存問題等の慌しい時期であった。 それらの状

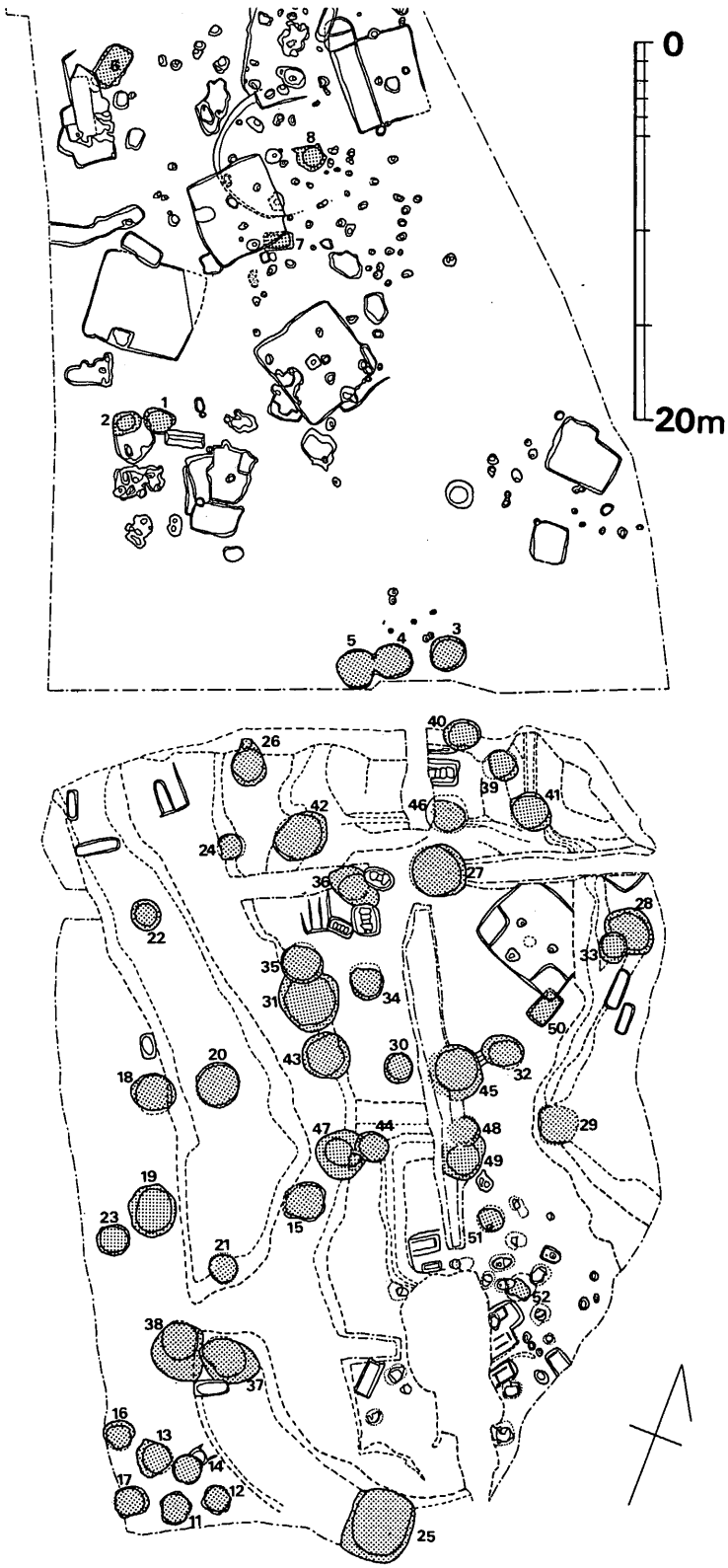


Fig. 136　袋状竪穴配置図（縮尺 1/400）

況の中で調査は速度を増し，一応この種遺構の完掘は終了したのであるが，以下述べようとする土器を主とする遺物編年等の基準ともなるべき調査中の各片に対する層位的，その他の確実な検討が充分になされ得なかったことは，悔やまれることである。更に遺物整理時における混乱等によっても，精密な資料としての検討を為し得ない状況となってしまった。

よって以下，各遺構出土の遺物は，明確に層位等を記述しないものに対しては一括遺物として同一遺構から出土したものとして取扱うこととしたことを了承願いたい。

以下，遺構の詳細に関しては一覧表に纒め，遺物のうち石器類においても，表を掲載して文章による詳述に換えたので宜しく参照願いたい。

2 袋状竪穴群

Tab. 20 袋状竪穴一覧表 (単位：cm)

No.	平面形(底床面)	上面径×深さ(床径)	出土遺物	断面類別	埋没状況	備考	時期
1	円形(多角形) 楕円(多角)	148×133×51 (141)×(123)	甕口縁片1，底部1，スクレイパー1 黒曜石片2，安山岩片1，	A	?	2号を切る	III
2	隅丸(長)方形 (不整四角形)	137×102×153 (103)×(93)	甕口縁片2，底部2，壺底部4，砥石1 打製石鏃2，ポイント1，使用剥片1 黒曜石片21，安山岩片3，玄武岩片1	A	IV＋III	1号に切られる	II
3	不整円形 (円形)	194×184×120 (177)×(167)	太型蛤刃石斧1	C	III		
4	不整円形 (円形)	163×約200×97 (195)×(192)	甕口縁1，底部(穿孔)1，黒曜石片1	B	(III)	当初時掘方床面では4号が新しい。埋没後半期は同時埋没	II
5	不整円形 (円形)	192×約193×91 (202)×(218)	甕口縁3，石包丁片3，扁平片刃石斧片1 磨石1，打製石鏃1，スクレイパー1， 安山岩片41，黒曜石片51	B	(III)		II
6	隅丸(長)方形 (隅丸(長)方形)	245×139×93 (217)×(124)	甕2，甕口縁片2，底部3，壺口縁片1， 壺肩部2，底部2，土製紡錘車1，砥石1 石包丁片1，蛤刃石斧1，スクレイパー2 ブレイド2，黒曜石片49，安山岩片15， 玄武岩片2	A	IV		I
7	隅丸長方形 (隅丸長方形)	148×86×76 (135)×(79)	スクレイパー1，黒曜石片26，安山岩片13 玄武岩片3	A	IV		(II)
8	不整円形 (円形)	103×102×92 (150)×(145)	甕(底部穿孔)1，甕口縁片7，底部3，壺口縁片1，肩部1，底部1，打製石鏃1 石斧片1，黒曜石片6，安山岩片2，玄武岩片1	B	IV	第7号住居跡に切られる	I
9	欠番						
10	欠番						
11	不整円形 (円形)	169×161×171 (143)×(154)	甕口縁片2，底部(穿孔)1，壺口縁片1 黒曜石片5，安山岩片5，玄武岩片1	(B)	II		III
12	不整円形 (円形)	164×153×134 (141)×(139)		A	II		
13	不整円形 (円形)	190×175×145 (159)×(158)	壺1，壺口縁1，底部1，扁平片刃石斧1 打製石鏃2，使用剥片2，黒曜石片12 安山岩片8	B	II＋(III)	床に甕，壺あり	I
14	円形 (円形)	152×152×123 (152)×(160)		B	II＋(III)		
15	不整楕円形 (楕円形)	200＋α×197×80 (191)×(200＋α)		(B)	II＋(III)	前方後円墳西側周溝に切られる	

No.	平面形（底床面）	上面径×深さ（床径）	出土遺物	断面類別	埋没状況	備考	時期
16	不整楕円形（円形）	160×140×118 (128)×(124)	甕口縁片1，壺口縁片1，扁平片刃石斧片1 打製石鏃1，安山岩片3	B	Ⅳ＋(Ⅲ)	床面にピットあり	Ⅲ
17	不整円形（略円形）	172×145×96 (160)×(152)	甕口縁片1，黒曜石片4	(B)	Ⅲ		(Ⅱ)
18	不整楕円形（不整円形）	242×190×150 (206)×(210)	玄武岩製石斧片1，黒曜石片2，安山岩片2	C	Ⅰ＋(Ⅲ)		
19	不整円形（不整円形）	280×260×125 (220)×(200)	黒曜石片2，チャート片1	(C)	Ⅱ		
20	略円形（円形）	226×240×51 (225)×(218)	甕4，甕口縁片1，底部1，壺1，壺口縁2 底部2，砥石1，叩石1，黒曜石片7 安山岩片1	(B)	Ⅲ	前方後円墳西周溝に上半部を切られる	Ⅱ～Ⅲ
21	円形（円形）	148×158×57 (153)×(153)		(B)	Ⅳ＋(Ⅲ)	前方後円墳西周溝に上半部を切られる	
22	不整円形（不整台形）	168×170×40.5 (130)×(129)		(C)		前方後円墳周溝に上半部を切られる	
23	円形（円形）	174×160×72 (154)×(160)	甕底部1，黒曜石片3，玄武岩片2	(B)	(Ⅰ)＋(Ⅲ)		
24	不整円形（円形）	123×128×177 (152)×(140)	甕口縁片1，底部1，黒曜石片2	B	Ⅱ＋Ⅲ		(Ⅱ)
25	不整円形（不整円形）	340×380×？ (320)×(280)	ガラス小玉2，使用剥片1，黒曜石片38 安山岩片5			中に釘 木棺？	
26	不整楕円形（不整円形）	195×165×190 (162)×(164)	甕口縁片1，底部1，壺口縁片1，底部1 砥石1，磨石1，黒曜石片6，安山岩片2	C	Ⅳ	床面にピットあり。北端に溝状入口あり。花崗岩3個あり	Ⅰ～Ⅱ
27	略円形（略円形）	285×284×292 (272)×(268)	甕2，甕口縁片2，底部2，壺1，底部1，石包丁1，土製紡錘車1，砥石1，磨石2，打製石鏃1，スクレイパー3，黒曜石片3，安山岩片5	C＋(B)	Ⅳ＋Ⅲ		Ⅱ
28	楕円形（楕円形）	285×220×185 (240)×(185)	甕口縁片5，底部1，壺底部1，扁平片刃石斧1 打製石鏃1，黒曜石片8，安山岩片6	C	Ⅱ＋Ⅲ	33号に切られる	Ⅰ～(Ⅱ)
29	不整楕円形（不整楕円形）	210＋α×190×85＋α (198)×(210)	甕口縁片1，底部3，壺肩部3，底部2，ポイント1，使用剥片1，黒曜石片7	(C)	(Ⅲ)	前方後円墳東周溝に切られる	(Ⅱ)
30	円形（円形）	158×152×120 (145)×(138)	甕口縁片2，底部1，壺口縁片1，底部2 石のみ1，玄武岩製石斧片1，打製石鏃1 石核1，ブレイド1，黒曜石片13，安山岩片4	(B)	Ⅲ		Ⅱ
31	不整円形（略円形）	320＋α×312×165 (285)×(272)	壺口縁片2，底部1，太型蛤刃石斧1 使用剥片1，黒曜石片1	C	Ⅱ＋(Ⅲ)	35号に切られる	Ⅱ

2 袋状竪穴群

No.	平面形 (底床面)	上面径×深さ (床径)	出土遺物	断面類別	埋没状況	備考	時期
32	不整楕円形 (略円形)	204×160×225 (161)×(155)	甕1，甕口縁片1，底部2，壺口縁片1 鉢片1，土製投弾1，黒曜石片16,玄武岩片1	(B)	II+(III)		II
33	不整楕円形 (不整楕円形)	180×150×113 (140)×(122)		(C)	?	28号を切る	III
34	不整円形 (不整円形)	230×245×240 (245)×(240)	甕9，甕口縁片5，底部3，壺9，壺口縁9 壺肩部7，底部3，無頸壺2，蓋1，蛤刃石斧1 柱状片刃石斧1，扁平片刃石斧1，磨製石剣1 砥石1，磨石1，スクレイパー4，黒曜石片 7、安山岩片25，玄武岩片1，炭化板材2枚 炭化米5勺，炭化堅果類3ℓ，獣骨片	C	III+IV		II
35	不整円形 (円形)	165+α×172×145 (162)×(167)	壺底部1，太型蛤刃石斧片1，黒曜石片5 安山岩片1	C	III	31号を切る	
36	不整長円形 (不整長円形)	298×160×193 (205)×(159)	甕2，甕口縁片1，壺1、壺肩部1、底部1 短頸壺1，石包丁片1，黒曜石片2，安山岩片2	C	II+III	2号石棺に切られる	III
37	不整長円形 (不整長方形)	287+α×210+α×110 (235)×(180)	甕1	C	(III)		(II)
38	不整円形 (円形)	230×250+α×129 (210)×(202)		(C)	?		
39	楕円形 (略円形)	190×120×180 (151)×(165)	甕底部2，打製石鏃1，スクレイパー1 黒曜石片1，安山岩片1	B+C	IV	壁に凹棚部あり	
40	不整円形 (略円形)	210×175×198 (175)×(170)	甕口縁片3，底部1，壺底部1，黒曜石片2 安山岩片1，玄武岩片1	C	III		II
41	楕円形 (略円形)	235×170×170 (198)×(188)	甕口縁片3，壺口縁1，壺肩部2，スクレイ パー1，石核1，黒曜石片6，玄武岩片4	(C)	I+(II)		II
42	楕円形 (楕円形)	320×220×120 (280)×(210)	甕底部2，壺肩部2，底部1，磨石1 黒曜石片1，玄武岩片1	C	III		I～(II)
43	略円形 (略円形)	230×250×230 (195)×(200)	甕口縁片2，壺口縁片1，壺肩部2，石核1 黒曜石片10，安山岩片3，玄武岩片1	C	III	中央にピットあり	I～II
44	円形 (円形)	132×120+α×105 (149)×(130+α)	甕口縁片4，底部1，壺2，壺口縁2 磨製石斧1，黒曜石片11，安山岩片3	B	III	47号を切る	II
45	不整円形 (略円形)	275×170+α×254 (250)×(238)	石包丁片1，石のみ1，黒曜石片2	C	?	V字溝に切られる	
46	円形 (楕円形)	178×173×218 (235)×(212)	甕口縁片1，黒曜石片1	B	II+(III)	古剣塚1号墳溝に切られる	(II)
47	不整円形 (不整円形)	260×270+α×175 (166)×(150)	甕口縁片1	C	I+II	44号に切られる	(II)

No.	平面形（底床面）	上面径×深さ（床径）	出土遺物	断面類別	埋没状況	備考	時期
48	円形（不整円形）	180×85＋α×133（155）×115＋α	甕口縁2，壺口縁片1，甕ミニチュア1 砥石1	B＋C	(III)	49号を切る	I～II
49	不整円形（不整円形）	230＋α×175＋α×245（191）×（205）		C	II	48号に切られる	
50	長方形（長方形）	211×129×98（200）×（122）	甕口縁片2，底部1，蛤刃石斧（盗難）1	A	IV＋(III)	第10号住居跡に切られる	II
51	略円形（円形）	118×100×140（121）×（124）	甕底部1，石包丁（未製品）1，スクレイパー1 黒曜石片6，安山岩片2，玄武岩片2	B	?	南の端にピットあり	
52	円形（不整円形）	75×65×175（125）×（142）	甕口縁片1，底部1，黒曜石片1，安山岩片3，頁岩片1	B＋C	?	K14・15に切られる	I

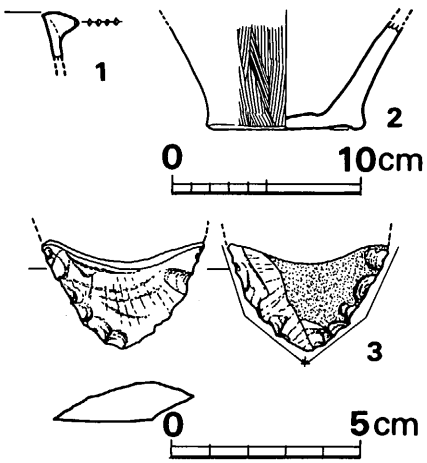


Fig. 137　第1号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺 ¼・½）

第1号袋状竪穴出土遺物 (Fig. 137)

甕（1・2）

1は亀ノ甲タイプ甕口縁片で，胎土に粗砂少量含み，焼成良好で黄褐色呈する。**2**は，底部外面が輪状に窪み，外面にやや粗い縦ハケを施す。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好，外面茶褐色，内面暗褐色を呈する。

Tab. 21　第1号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
137の3	スクレイパー	安山岩	(28.5)	(42.5)	10.5	(7.5)	(73.0)	D	リタッチ両面 原石粗面あり	63

第2号袋状竪穴出土遺物 (Fig. 139)

甕（1～4）

1は，口縁端面に刻目を施し，短かく外反する。外面に粗いハケを施し，張らない胴部をな

2 袋 状 竪 穴 群

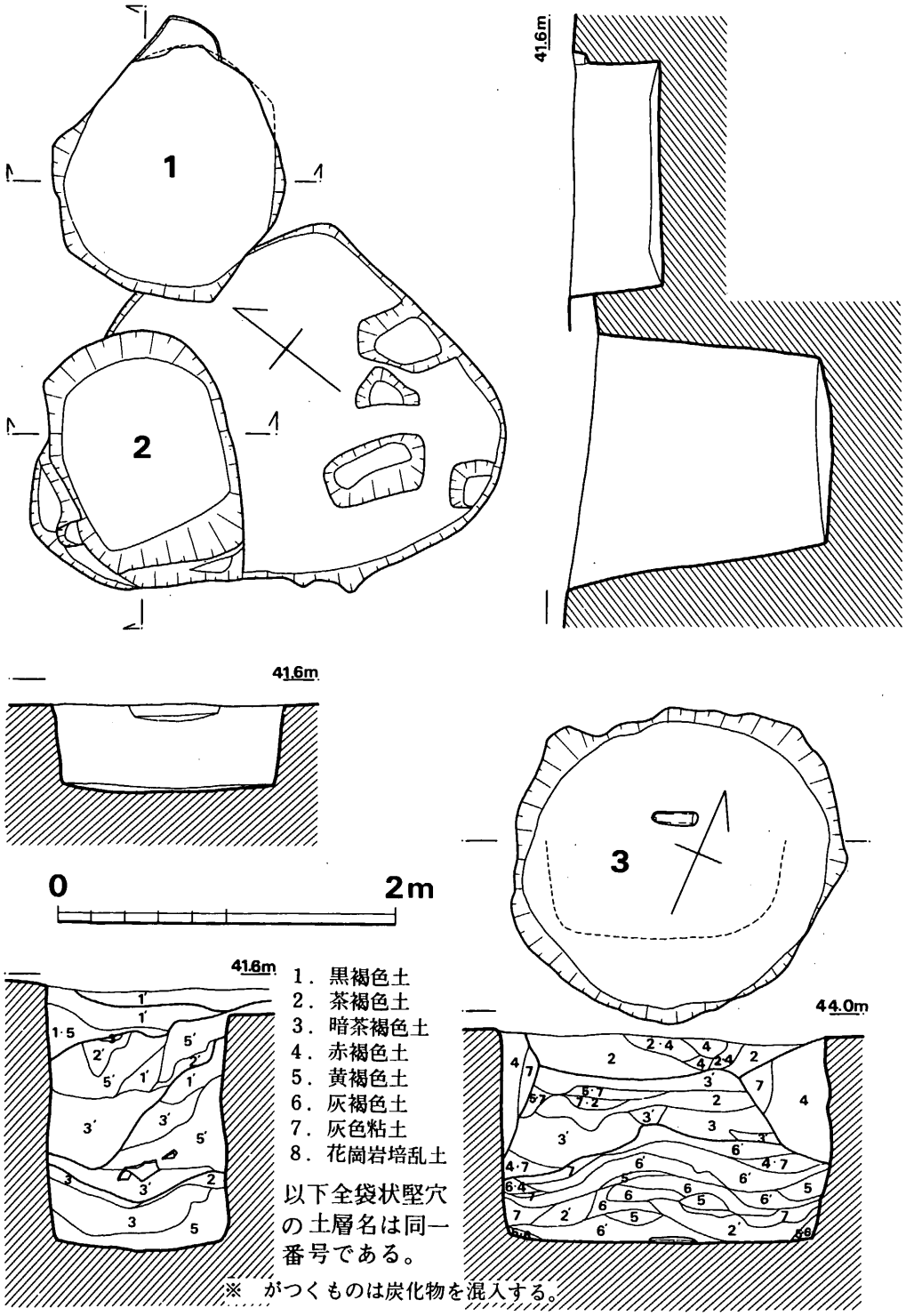


Fig. 138　第1・2・3号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

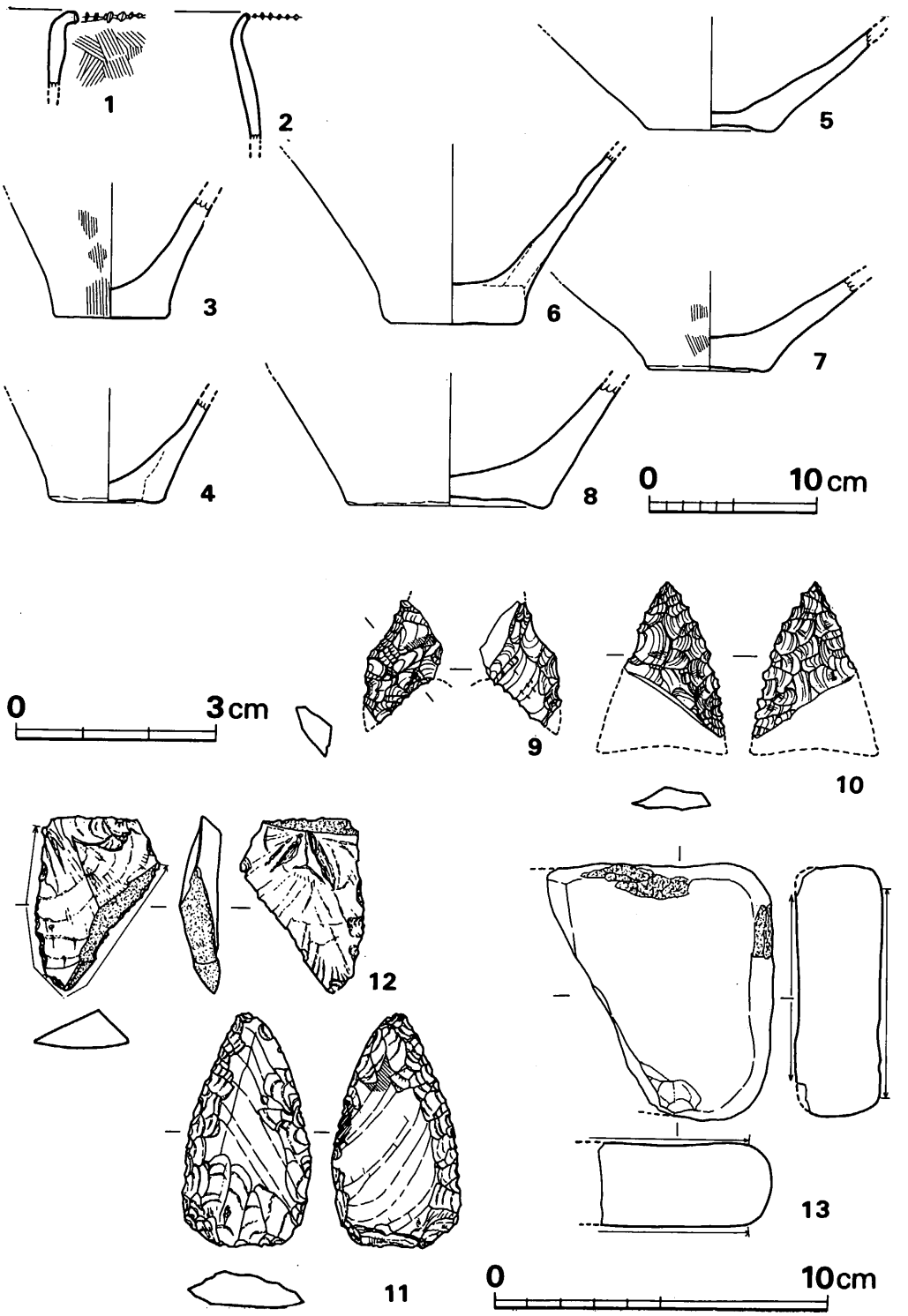


Fig. 139　第2号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・9～10は実大・11～13は½）

す。粗砂多く含み，焼成良好，外面黒色，内面淡褐色を呈する。**2**は，口縁外端のみに刻目を施し，胎土に粗砂多く含み，焼成やや不良で暗褐色を呈する。**3**は厚手の底部で径6.6cmを測り，外面に粗いハケ目を施す。粗砂多く，焼成良好，内面暗褐色，外面淡茶色をみせる。**4**は，わずかに輪状に上げ底となり，径7.0cmを測る。粗砂多く含み焼成良好，外面黄茶色，内面暗褐色を呈する。

壺（**5**～**8**）

孰れも底部のみである。円盤貼付状を呈するもの（**6**），僅かな上げ底状をなすもの（**5**・**7**・**8**），底径12cmの大型の器形をなすもの（**8**）などがみられる。5～7は外面ヘラ磨きで，うち6は外面縦方向ヘラ磨き，内面は横ヘラ磨きで，7は外面粗い縦ハケの上をヘラ磨きしている。孰れも胎土に粗砂多く含み，焼成良好で，暗褐色を呈する。

Tab. 22 第2号袋状竪穴出土石器一覧表 （単位：mm.g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類		備　考	台帳番号
139の9	打製石鏃	黒曜石	(17.5)	(12.0)	4.0	(0.6)		Ia(?)	C		67
139の10	打製石鏃	黒曜石	(22.5)	(15.0)	3.0	(0.65)		Ia	?	約1/2 現存	66
139の11	ポイント	安山岩	69.5	38.5	10.5	30.5				原剝離面には節理がみられる。完形	64
139の12	使用された剝片	安山岩	52.5	37.0	12.0	17.3	111.0	D		原石粗面あり，刃こぼれのみ，完形	68
139の13	砥　石	砂　岩	76.5	(67.5)	25.5	(204)				表、裏面のみ研磨粗砥	65

第3号袋状竪穴出土遺物（Fig. 141）

Tab. 23 第3号袋状竪穴出土石器一覧表 （単位：mm. g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	備　考	台帳番号
141	磨製石斧	玄武岩(軟質)	274.0	79.0	57.0	1,995	99.0	刃部に直角に擦痕あり太型蛤刃石斧	69

第4号袋状竪穴出土遺物（Fig. 140）

甕（**1**・**2**）

1は口径30.5cmを測り，口縁外下端に刻目を施す類である。胴外面にはやや細かい縦ハケ，頸部内面には横ハケを施す。粗砂かなり含み，焼成良好，淡茶褐色を呈する。外面全面に煤が付着する。**2**は，焼成後底外面から穿孔して甑に転用したもので，外面は粗い縦ハケを施し，焼成良好，黄褐色を呈する。

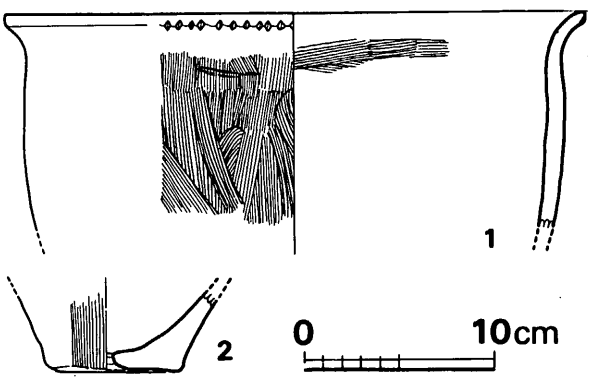


Fig. 140 第4号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 ¼）

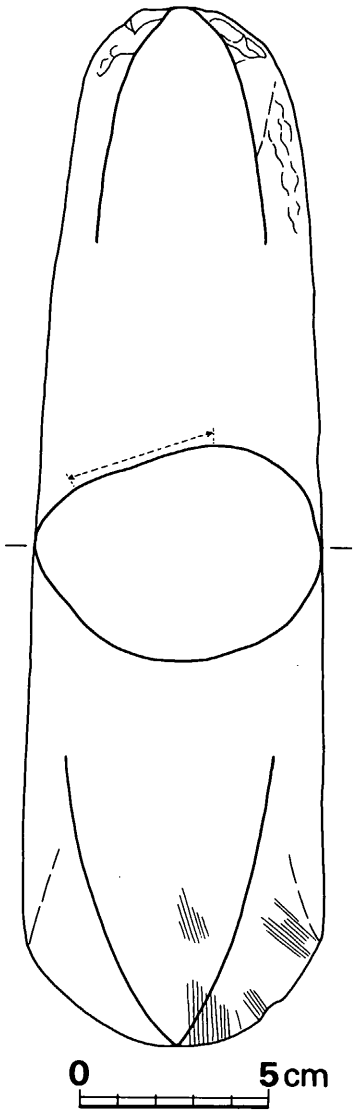


Fig. 141　第3号袋状竪穴出土石器実測図（縮尺 ½）

第5号 袋状竪穴出土遺物 (Fig. 1 4 2)

甕（1～3）

1は，明らかに口縁部その他に全く刻目をつくらず，頸部下を肥厚させ段をつくる類である。口縁内面にはやや細かい横ハケ，頸部内面は横ヘラ磨き，外面口縁～段下まで横ナデ，以下胴部外面は主に横ヘラ磨き調整を行なう。口径32.3cmを測り，胎土に粗砂幾らか含み，焼成良好で暗褐色を呈し，外面は煤付着する。**2**は，頸部下の貼付凸帯上に刻目を施すもので，欠損するが口縁外端部にも刻目を行なう類となろう。胴外面にやや粗い縦ハケ，他面は横ナデ調整を行なう。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で褐色を呈し，外面は煤付着して真黒となる。**3**は，口縁外端のみに大きめの刻目を施す類で，内外面横ナデ，外面は粗い横ハケの上を横ナデで消す。胎土に粗砂極めて多く含み，焼成良好，淡茶褐色を呈する。

この第4号袋状竪穴と，第5号袋状竪穴は，一覧表の備考の欄で記した如く，当初の掘方床面では第4号の方が新しいことが判かる。土層断面観察によると，第5号袋状竪穴壁が僅かに崩壊して放棄された直後に，連結するように第4号袋状竪穴を掘っている。恐らく，この両者は双円形プランのままに，第5号袋状竪穴の方も併行して使用され続けた可能性が強い。そして完全な埋没は同時であったと考えられる。

Tab. 24　第5号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm. g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	研磨	分　類	備　考	台帳番号
142の4	石包丁	粘板岩	(47.5)	(47.0)	4.0	(11.1)	(56.0)	表面		裏面はげる	73
142の5	石包丁	頁　岩	(32.5)	(51.0)	4.0	(7.7)	(25.5)	全面			74
142の6	〃（半製品）	硬質砂岩	(35.5)	(42.0)	4.5	(9.1)	(41.5)	背部以外		両面の多くは粗い研磨	75

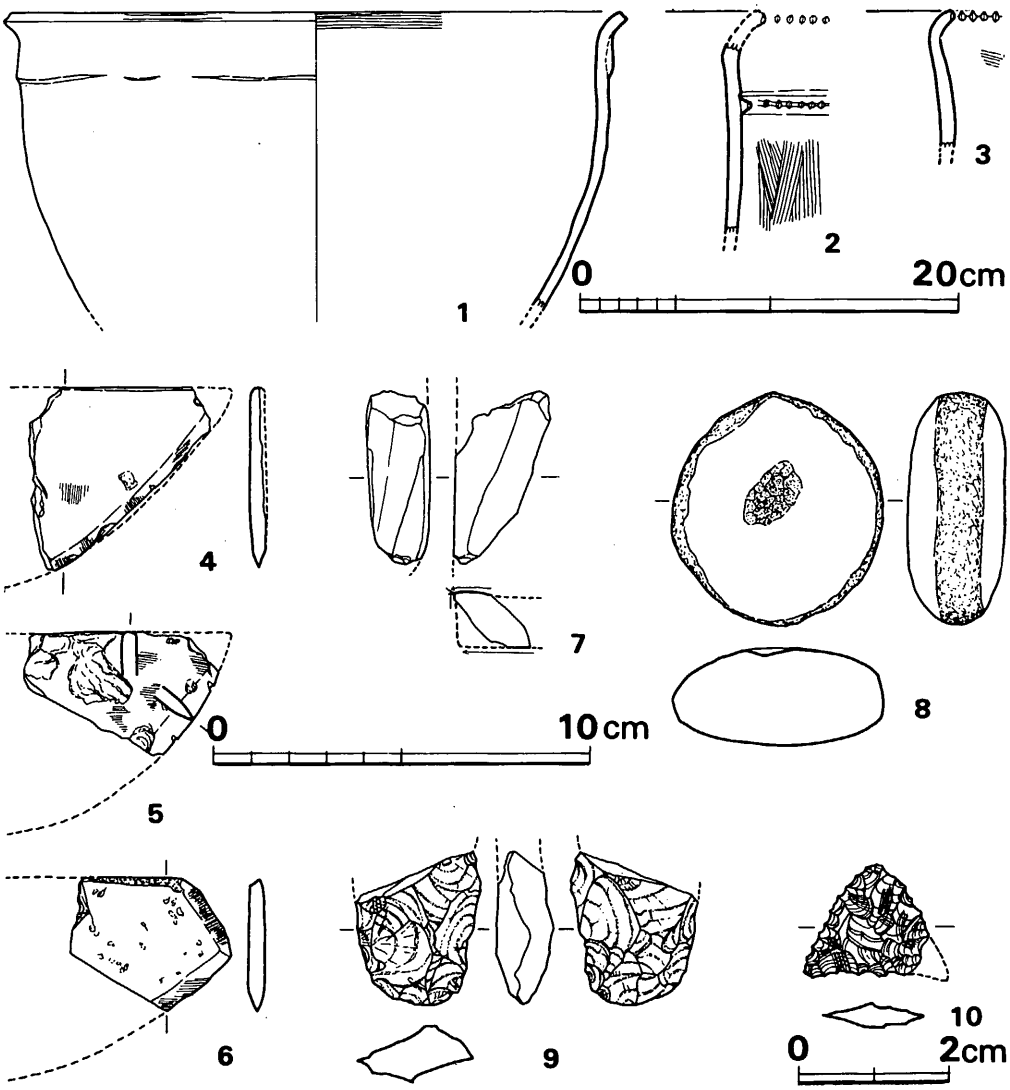


Fig. 142　第5号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・石器½・10のみ実大）

Fig. No	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	研磨	分　類	備　考	台帳番号
142の7	磨製石斧	粘板岩	(44.0)	(25.5)	(17.0)	(15.1)	不　明	全面		扁平片刃と推定	71
142の8	磨石、叩石	砂　岩	61.0	56.0	25.5	(124)		裏面		表面・周辺に叩痕	72
142の9	スクレイパー	安山岩	(40.0)	(33.0)	15.0	(17.2)	(50.5)		E	両面よりリタッチ	70
142の10	打製石鏃	黒曜石	14.5	(16.0)	3.0	(0.6)			Ia　B		76

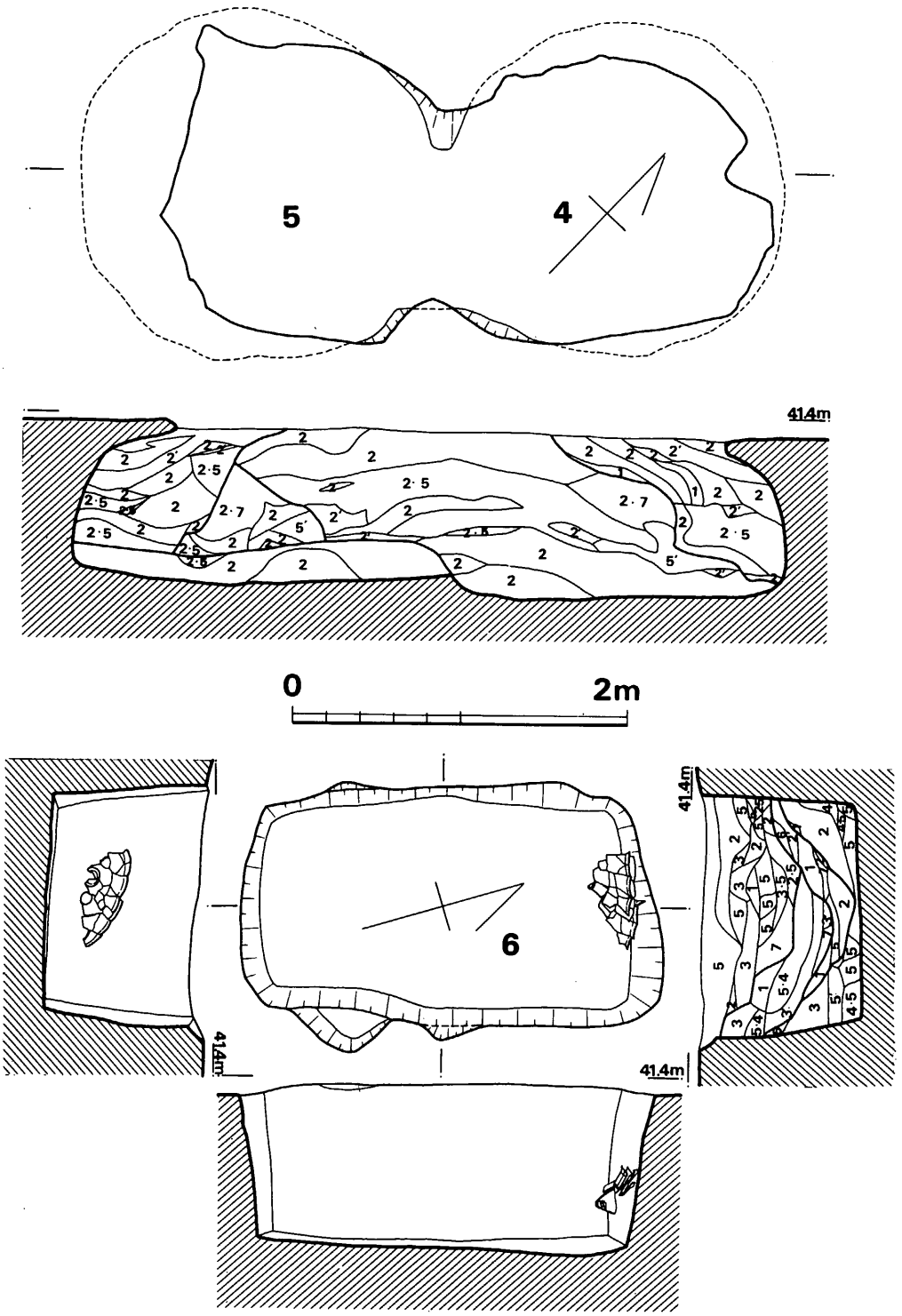


Fig. 143　第4・5・6号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

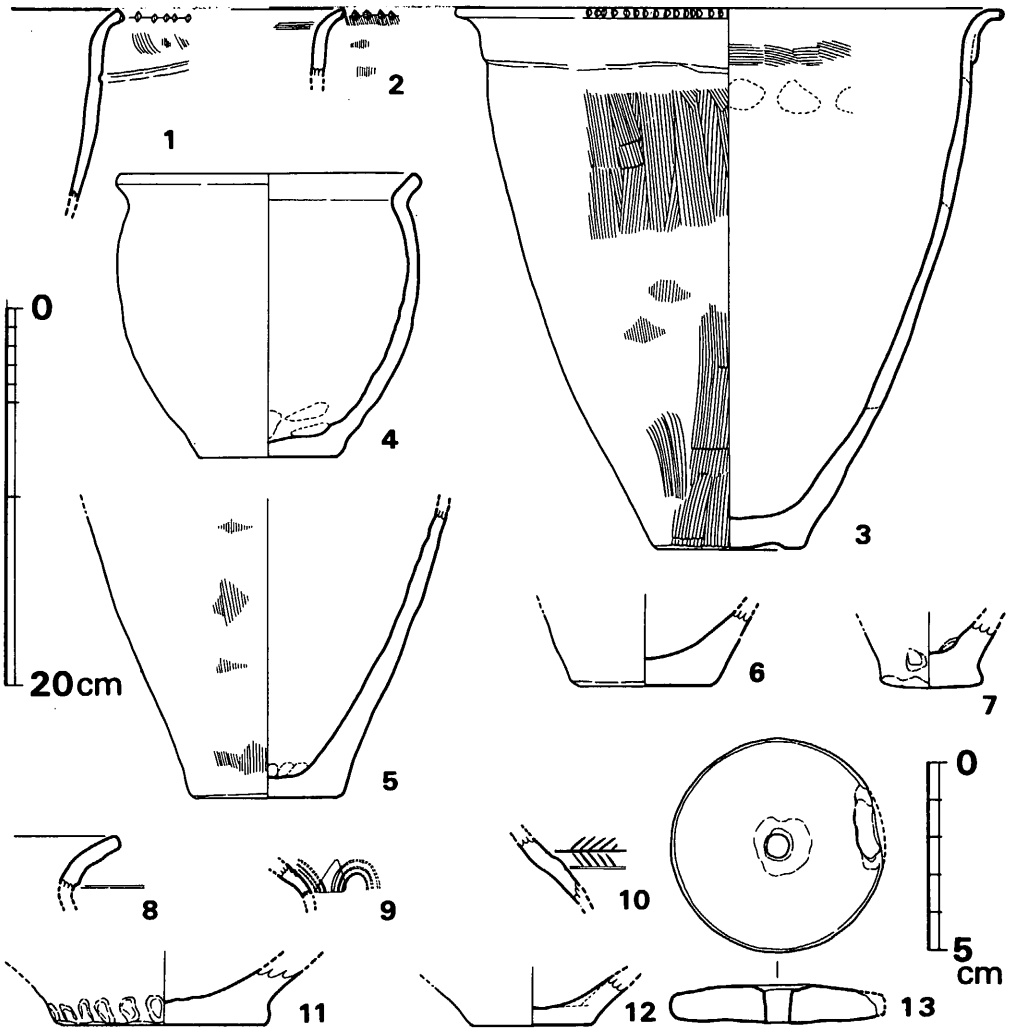


Fig. 144　第6号袋状竪穴出土土器・土製品実測図（縮尺　¼・13のみ½）

第6号袋状竪穴出土遺物（Fig. 144・145）

甕（1～7）

1は，口縁外端に刻目を施し，頸部下に太い段状沈線を廻らす。頸部外面は縦ハケの上に横ナデ，以下外面は縦ナデ，口縁内外面は横ナデ，以下内面は斜めナデ上げを施す。胎土に粗砂多く，焼成良好にて淡褐色をみせ，外面には煤が付着する。2は，口縁外下端に櫛目状工具による刻目を施す。これはハケの間隔と同じであり，同一工具によるものと思われる。刻目直下はハケが残り，以下頸部外面は縦ハケの上横ナデを行なう。頸部内面に横ハケが残り他は横ナデ調整である。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡褐色を呈し，外面には煤が付着する。3

は，北壁際に床面より20cm浮いた状態で押し拉がれたように出土した完形品である。口縁端全面に刻目を施し，頸部下で肥厚させる段をつくり，胴は張らず，底部は輪状にわずかな上げ底となる類である。口径29.0cm，器高23.9cm，底径8.0cmを測る。口縁内外面～外面段部下までは横ナデ，頸部内面に横ハケ，胴部内面横ナデ，胴部外面には15本1単位で2.3cm巾のやや細かい縦ハケを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，内面上半暗褐色，下半は炭化物付着して黒変し，外面下半は二次焼成のため器表剝落し赤茶色変する。外面上半には煤が付着する。**4**は，短かい口縁外反し，丸味を帯びた胴部に安定の良い大きめの平底を有する小型の甕である。口径15.7cm，器高15.2cm，底径7.5cm，胴最大径16.0cmを測る。底部内面には浅い指オサエ痕がみられる。外面ナデかと思われるが全体に調整不明。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好，暗茶色を呈する。**5**は，細身の甕底部で，外面は縦ハケの上をナデで消し，内面指ナデ上げを施す。底部内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で，外面は二次焼成を受けて部分的に赤変し，内面には炭化物付着して暗黒褐色変する。**6**は，底径7.0cmを測る安定した平底である。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で内面暗褐色，外面は二次焼成を受けて赤変する。**7**は，底径5.3cmの小型品で，内外面に指オサエ痕が部分的にみられる。蓋形土器となる可能性も残る。

壺（**8**～**12**）

8は，口縁下外面に段をつくる口縁片で内外面横方向ヘラ磨きが施される。粗砂かなり含むが，焼成良好で，淡褐色を呈する。**10**は，細い沈線による有軸羽状文を肩部に施文する壺小片で，胎土に粗砂かなり含み，焼成良好，淡茶褐色を呈する。**12**は径6.3cmの底部片で，外面ヘラ磨き調整で，粗砂多く含み，焼きは良く淡灰褐色をみせる。**9**は，土坑墓（組合せ木棺墓）・甕棺墓等の副葬品としてみられる小壺の類で，肩部に細く深い沈線で3本の重弧文を施す。胎土も精良で淡褐色を呈する。**11**は，径11.2cmの大型の底部で，甕棺片としての可能性もある。外面下端に強い指オサエ痕がみられ胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡褐色を呈する。

土製紡錘車（**13**）

一部が欠けるが直径5.6cm，孔径0.6～0.7cm，厚さ1.0cm，重さ39gの略完形品で，扁平な大型品である。床面よりやや浮いて出土した。胎土に粗砂幾らか含むが，焼成良く，灰褐色をみせる。

Tab. 25 第6号袋状竪穴出土石器一覧表 （単位：mm・g）

Fig. No	器 種	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	刃部長	分 類	備 考	台帳番号
145の1	磨製石斧	粗砂硬砂岩	(101.5)	79.0	(42.5)	(381)	73		全面研磨，蛤刃石斧擦痕あり	82
145の2	石包丁片	粗砂硬砂岩	(68.5)	(21.5)	6.0	(14.6)			部分的に研磨痕未製品	81
145の3	砥 石	砂 岩	(83.0)	(83.0)	(62.0)	179			攻玉用砥石に類似粗砥	80

2 袋状竪穴群

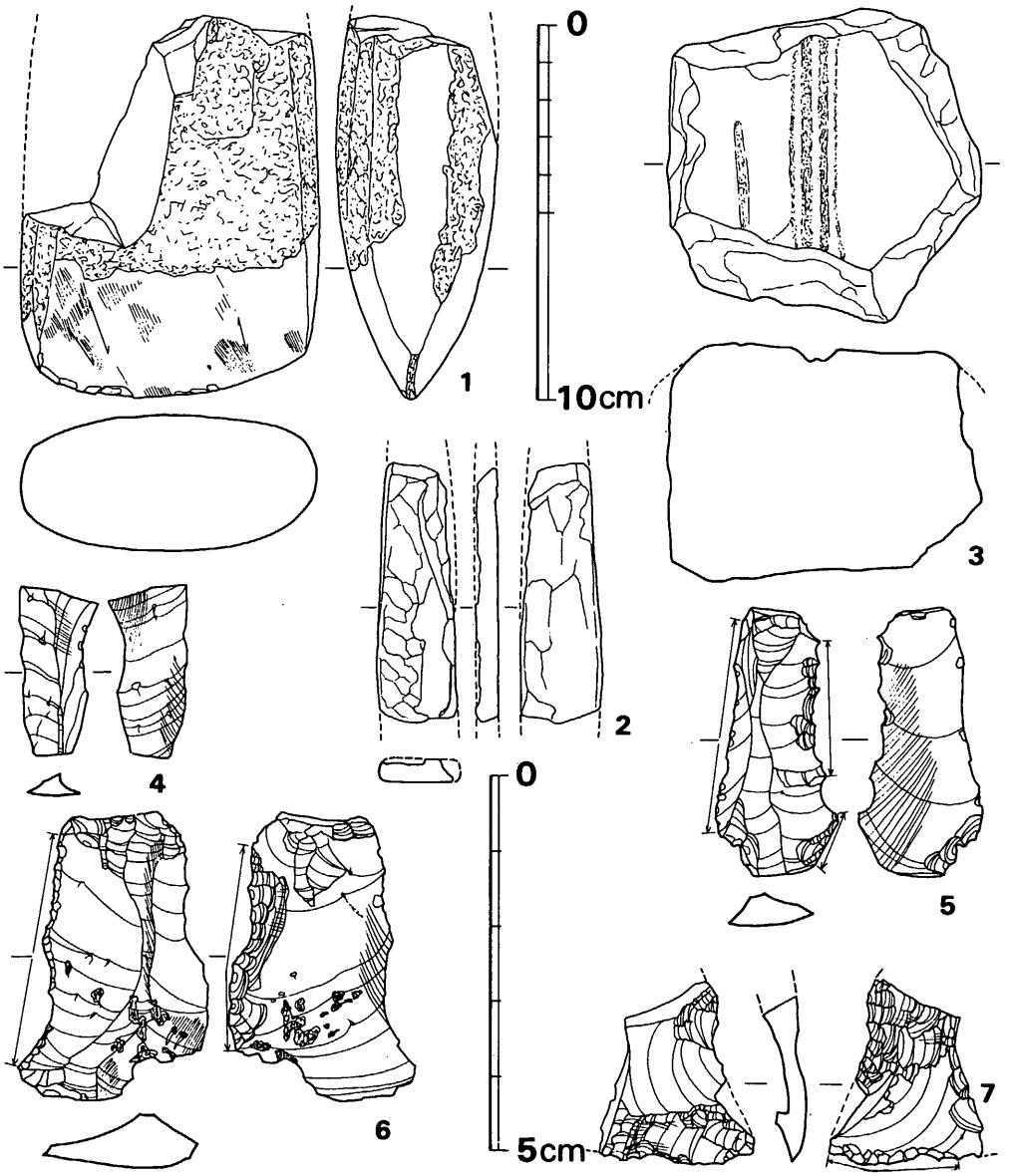


Fig. 145　第6号袋状竪穴出土石器実測図（縮尺 ½・4～7は実大）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
145の4	ブレイド	黒曜石	(23.0)	10.5	3.0	(0.5)	(45.0)			83
145の5	ブレイド	黒曜石	35.5	16.0	4.0	2.3	68.5			77
145の6	スクレイパー	黒曜石	38.0	24.5	7.0	5.5	60.5	B	片面よりリタッチ	78
145の7	スクレイパー	黒曜石	(24.0)	(20.0)	(6.0)	(1.5)	(20.0)	A	片面よりリタッチ	79

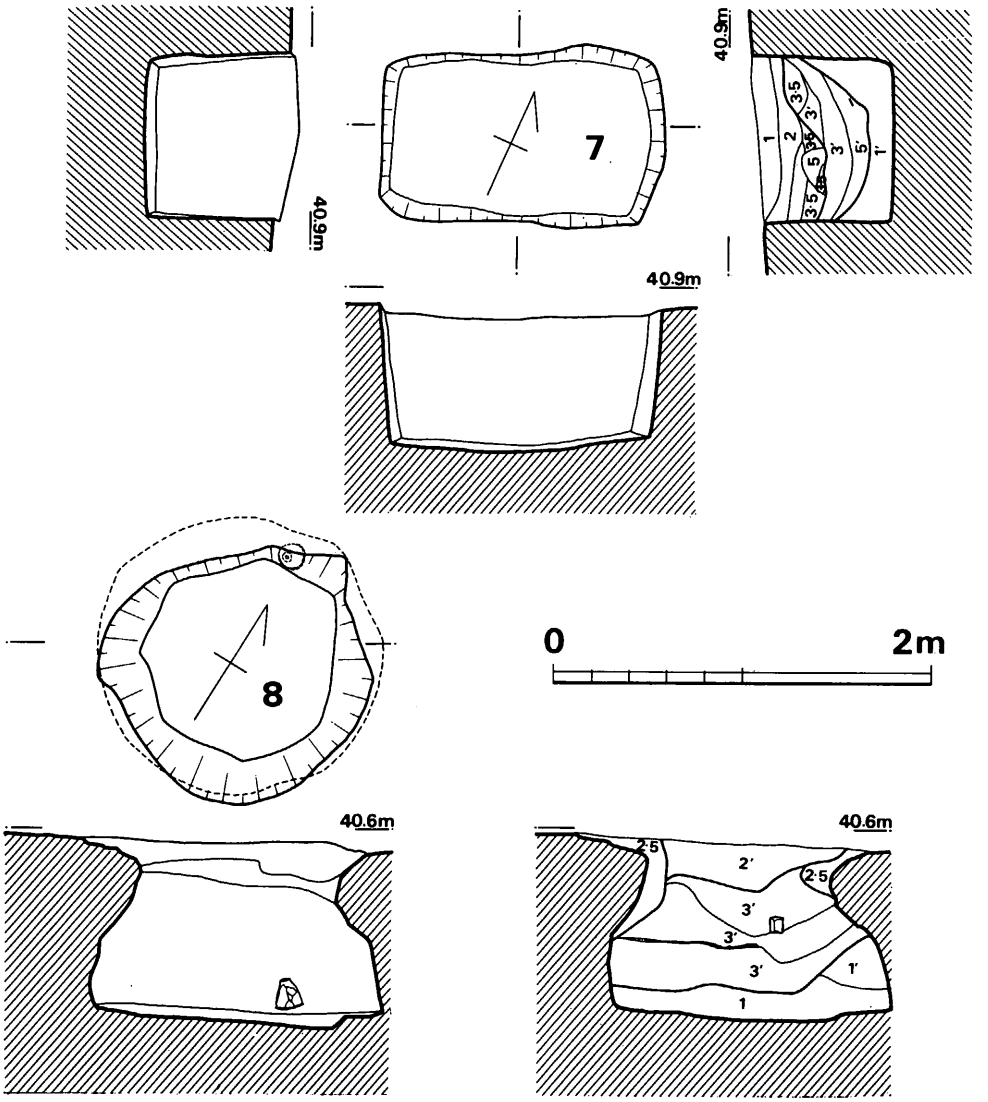


Fig. 146　第7・8号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

第7号 袋状竪穴出土遺物（Fig. 147）

Tab. 26　第7号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
147	スクレイパー	玻璃質安山岩	31.0	21.5	7.5	5.3	44.0	B	周辺を全体にわたり両面よりリタッチ	307

2 袋状竪穴群

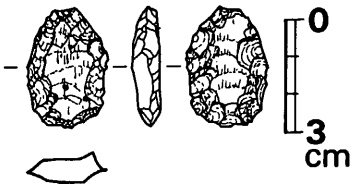


Fig. 147　第7号袋状竪穴出土石器実測図（縮尺 ½）

第8号袋状竪穴出土遺物（Fig. 148）

甕（1～11）

口縁外下端のみに刻目を有するもの（1・2・8），口縁外下端と頸部下の三角凸帯上に刻目を施すもの（3～5），頸部下に沈線を施すもの（6）等がある。**1**はゆるやかに開くもので，外面刻目直下はハケの上横ナデ，以下粗い縦ハケを施す。胎土に粗砂多く，焼成良好，内面は淡褐色，外面は煤付着して暗褐色を呈する。**2**は，丸く屈曲外反して外端部に貝殻腹縁による刻目がみられ，口縁内面は横ハケの上横ナデ，外面はやや細かい縦ハケがみられる。胎土に粗砂多く，焼成良好で淡褐色を呈する。**3**・**4**は，胎土に粗砂多く焼きは良く淡褐色を示す。**5**は，3・4よりやや大きめの器形で，粗石英粒極めて多く含み，焼成やや不良，内面黒色，外面淡褐色をみせる。**6**は，口縁外下端に貝殻腹縁による刻目を施し，頸部下には縦ハケの後一条の沈線を巡らす。口縁～頸部内面にはやや粗い横ハケがみられ，外面には縦ハケを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好内面赤茶色，外面煤付着して黒褐色を呈する。**7**は，丸く外反する口縁で，口縁端部の刻目の有無は不明であるが，無い可能性も強い。胴内面は横ヘラ磨き

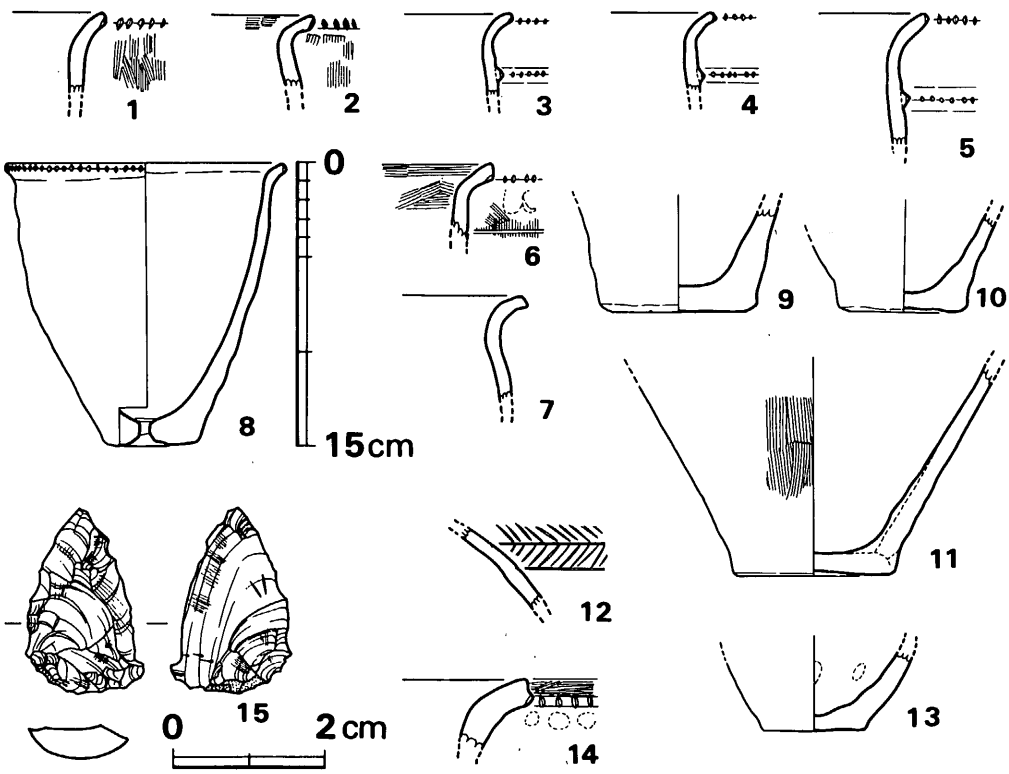


Fig. 148　第8号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺 ¼・15のみ実大）

で，粗砂多く含み，焼成良好，淡褐色を呈する。**8**は，北壁際床面より若干浮いて伏せた状態で出土した完形品小型甕である。焼成後底部中央に穿孔し甑に転用したものである。口径14.9cm，器高15.0cm，底径4.9cmを測る。口縁外端部に刻目を施し，張らない胴部に作り，外面は全面ナデ或いは磨きかと観察され，内面上半は横方向ヘラ磨きを施す。胎土に粗大石英粒極めて多く含み，焼成やや不良であるが，外面は二次焼成を受けて赤茶変し器表剝落する。**9**は底径8.3cmで，粗砂多く含み，焼成良好，外面茶褐色，内面暗褐色をみせる。**10**は，底径68cmの僅かに上げ底状となるもので，粗砂多くみられ，焼きはやや不良で淡褐色～黒色を呈し，外面は二次焼成を受けて部分的に暗赤変する。**11**は，底径8.5cmの僅かに上げ底状となるもので，外面には細かい縦ハケ，内面は縦ヘラ磨き，底内面に横ナデ調整がみられる。胎土に粗砂多く，焼成良好で，外面淡茶色を呈する。器表の残りがかなり良い。

壺（**12**～**14**）

12は，肩部にやや細いヘラによる有軸羽状文を施すもので，粗砂かなり含み，焼成良く赤茶色となる。**13**は，底径5.5cmで外面ヘラ磨きを施す。粗砂多く含み焼きは良く淡褐色を呈する。**14**は，口縁外下端のみに刻目を施す厚手の口縁片で，大型壺片である。端面は凹状となり横ハケが施される。所謂金海式期に近い同器種のものと異なり，上面を肥厚させず，刻目を下端のみに施す先行形態と考える。粗砂多く焼成やや不良で淡黄褐色を呈する。

Tab. 27 第8号袋状竪穴出土石器一覧表 （単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	分類		備考	台帳番号
148の15	打製石鏃	黒曜石	24.0	15.5	4.5	1.6	II	?	図の左下は表裏ともバルブカット原石粗面あり，未製品	306

第11号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.149)

甕（**1**～**3**）

1・**2**は，亀ノ甲タイプと呼ばれる口縁片で，**1**は外端部の刻目は不明であるが，**2**は刻目は明らかにみられないもので，時期的に下降する類である。**1**は**4**と同じく胎土に粗石英粒を多く含み，焼成やや良で淡茶褐色を呈する。**2**も粗砂かなり含み，焼成やや不良で，黄褐色。**3**は底径8.9cmでやや上げ底状となり，中央に焼成後の穿孔がみられ，甑として転用したものかと思われる。焼きはやや悪く黄褐色となる。

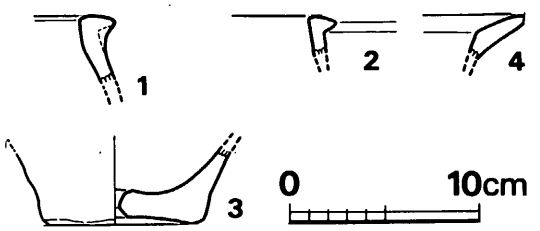


Fig. 149 第11号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 1/4）

壺（**4**）

口縁内面がやや肥厚して稜をつくる

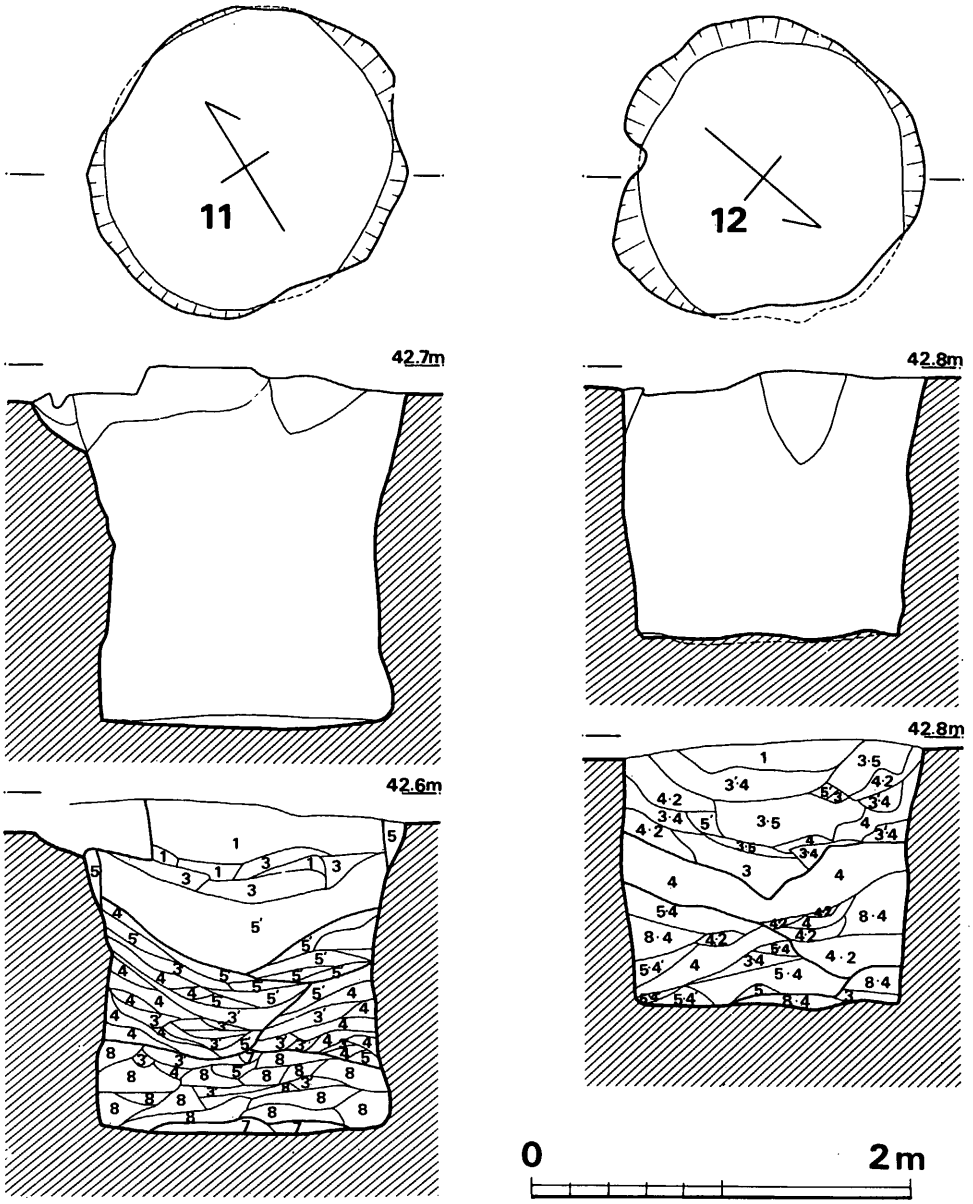


Fig. 150　第11・12号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

やや大きめの壺口縁となろう。端部の刻目等の有無は全く不明であるが，器形的に甕同様，時期の下降するものと考える。胎土に粗石英粒多く，焼成やや不良で黄褐色を呈する。

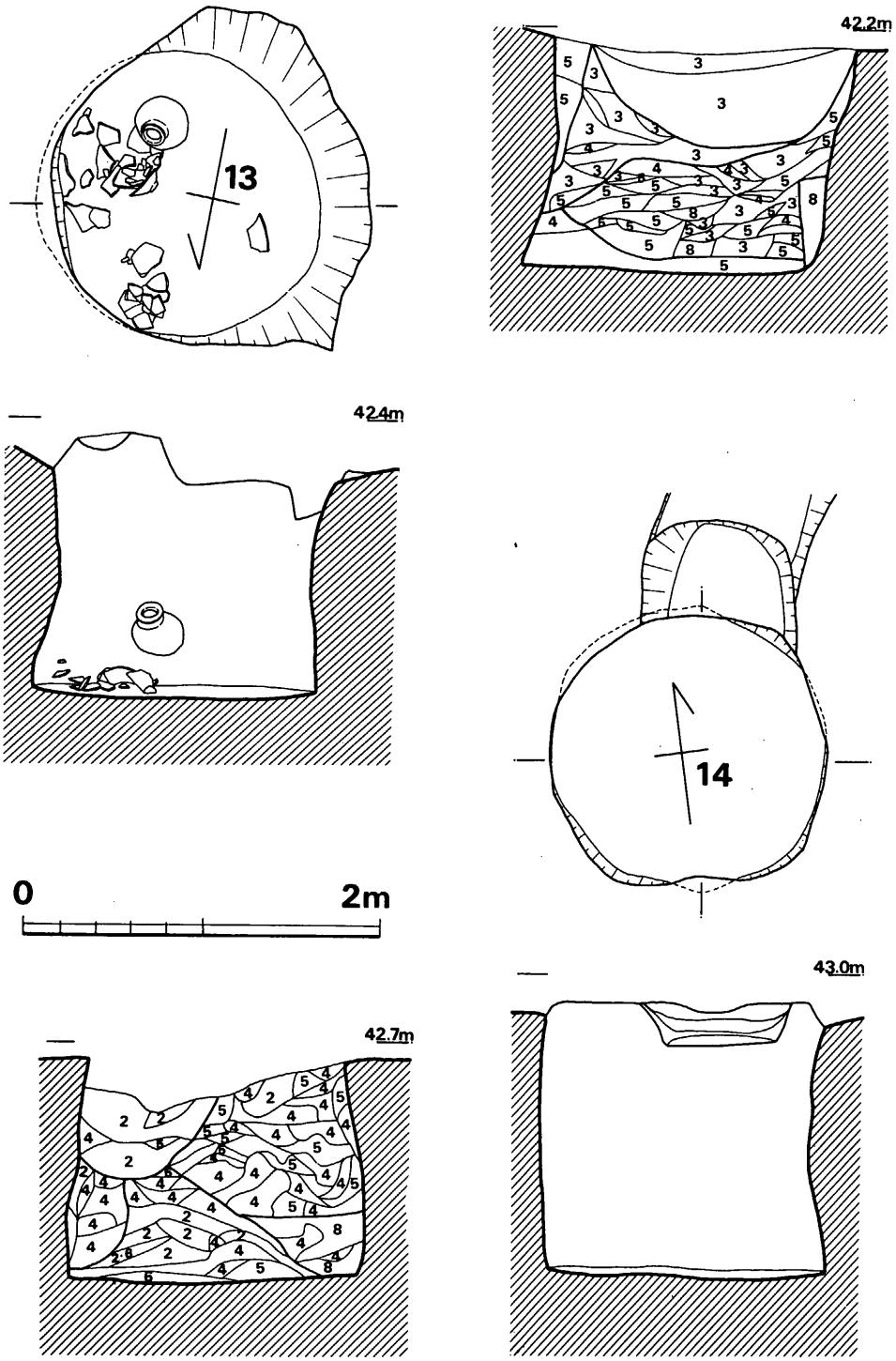


Fig. 151　第13・14号袋状竪穴実測図（縮尺　1/40）

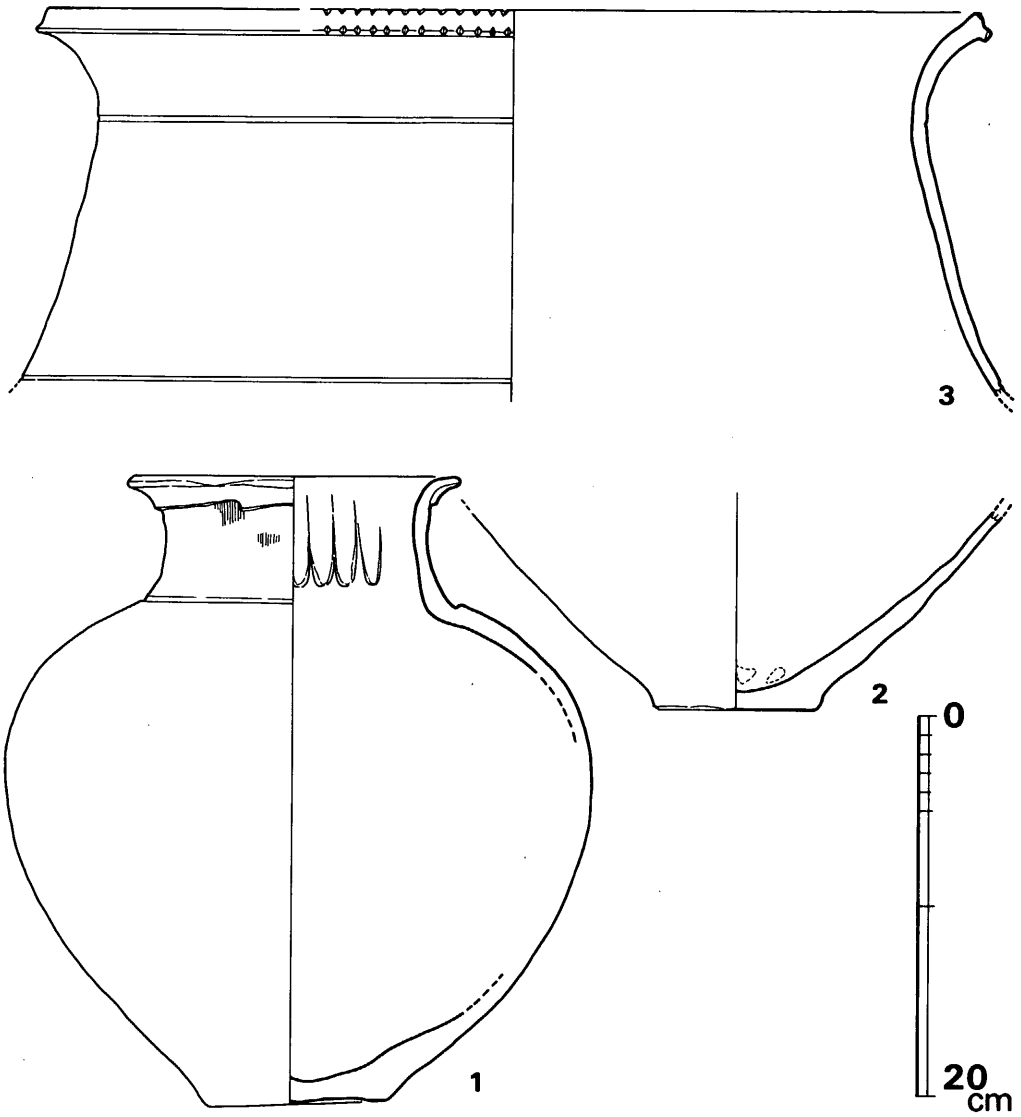


Fig. 152　第13号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 ¼）

第13号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.152・153)

壺（1～3）

1は，完形品で床面より20cm浮いて，2・3は床面直上に密着して各々出土する。1は，胴最大径をわずか上方につくり球形に近い胴部に，わずかな上げ底と，外面に粘土紐を貼り付けて肥厚させ段をつくる口縁を有する。肩部と頸部の境目は，部分的に沈線状になるが殆んどは段をなし，胴外面ヘラ磨き，頸部外面はやや細かい縦ハケの上をヘラ磨き，内面は指ナデ上げ痕がみられる。口径17.4cm，器高32.5cm，底径9.5cm，胴最大幅30.6cmを測り，胎土に粗砂多

く含み，焼成やや良く，淡茶褐色をなす。**2**は，底径8.5cmを測り，大きめの壺となる。外面は右下がり斜め方向のヘラ磨き調整が明瞭であり，底内面には指オサエがみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で黄褐色を呈する。**3**は，口径48.5cmの極大型品で，口縁端上下に各々刻目を施すが，内面を肥厚させる類ではない。口縁下と，頸部・肩部境目に各々一条の太い沈線を巡らす。粗砂多く見られ，焼成良好，暗褐色をみせる。

Tab. 28 第13号袋状竪穴出土石器一覧表 （単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類		備考	台帳番号
153の1	磨製石斧	粘板岩	(37.5)	23.5	7.0	(11.5)	23.0			扁平片刃，全面を丁寧に研磨	87
153の2	打製石鏃	安山岩	18.5	23.0	4.0	1.1		Ia	C	完形	86
153の3	打製石鏃	安山岩	(20.5)	(16.0)	3.5	(1.1)		Ia	?		85
153の4	使用された剝片	黒曜石	20.5	21.5	7.0	3.3	17.0	A		刃こぼれあり	84
153の5	スクレイパー	黒曜石	24.0	30.5	5.5	2.8	9.5	A		小さなリタッチ	88

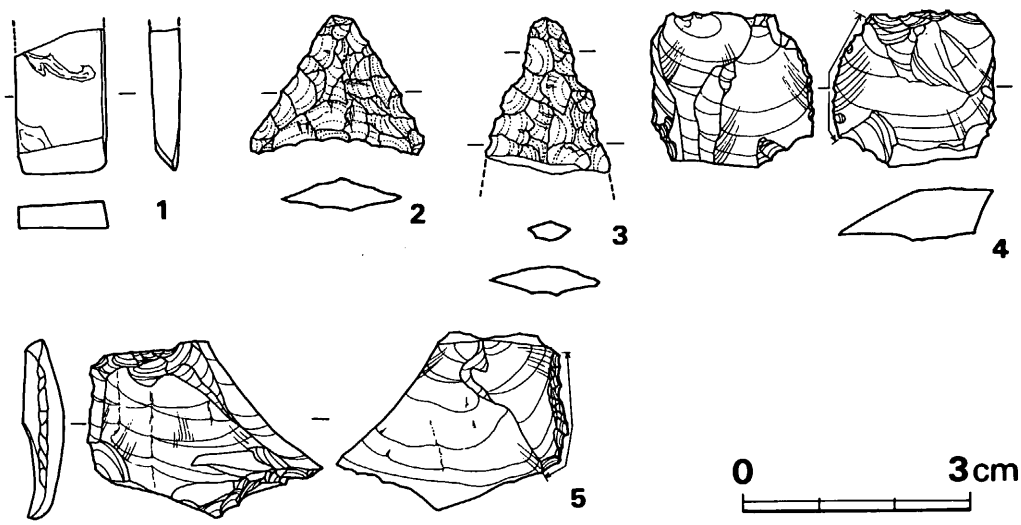


Fig. 153 第13号袋状竪穴出土石器実測図（縮尺 1のみ½・他実大）

第16号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.155)

甕（1）

口縁端部と頸部下三角凸帯上に各々刻目を施す類で，粗砂多く含み，焼きは良く淡褐色を呈する。

壺（2）

上層より出土するものであるが，開口壺の形態をとるものであろう。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で，黄褐色をなす。

2 袋 状 竪 穴 群

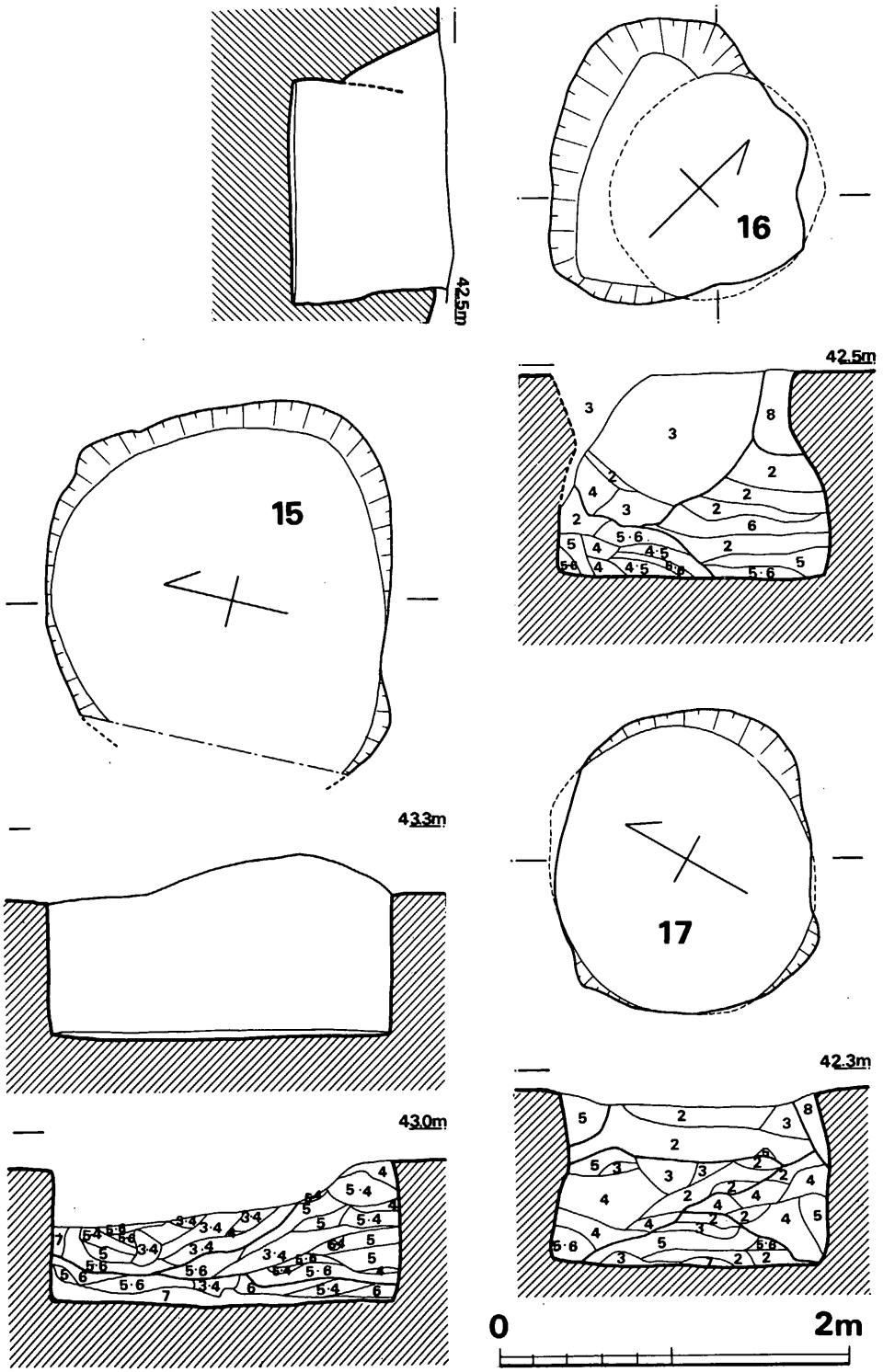


Fig. 154　第15・16・17号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

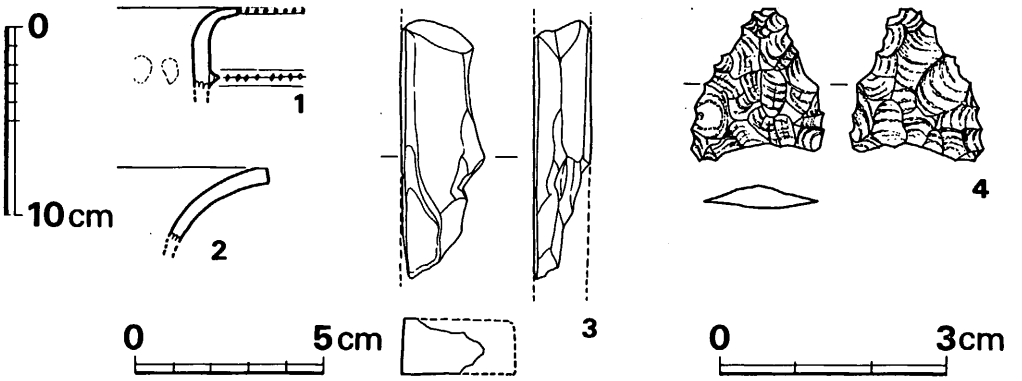


Fig. 155　第16号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・3は½・4は実大）

Tab. 29　第16号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類		備　　考	台帳番号
155の3	磨製石斧	粘板岩	(68.0)	22.0	15.0	27.8				全面研磨，扁平片刃	89
155の4	打製石鏃	安山岩	20.0	17.5	3.0	0.9		Ia	C	やや雑なつくり	90

第17号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.156)

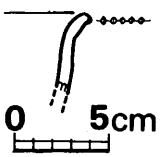


Fig. 156
第17号袋状竪穴出土
土器実測図（縮尺　¼）

甕

小片で，胴は張らず，口縁外端のみに刻目をつくる類である。器表剝落著しく調整不明で，胎土に粗砂多量含み，焼成やや良好で黄茶色を呈する。

第20号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.158・159)

甕（1～6）

1 は，張らない胴部に短かく外反する口縁外端のみに刻目を巡らす類である。内外面ともに器表剝落著しいが，外面にやや細かい縦ハケを施し，胴上部内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡黄褐色を呈し，下半部は内外面ともに二次焼成を受け赤変する。　**2・3** は，口縁外端部と頸部下に貼り付けた三角凸帯上に各々刻目を巡らす類で，胴は張らないがやや丸味を帯びて底部へすぼまる。**2** は，頸部内面横ハケの上をナデ，直下に指オサエ痕が連なる。口縁内外面横ナデ，凸帯を挾んで上下は強い指ナデ，胴外面にはやや粗い縦ハケが施される。外面は二次焼成を受けており，上半は煤で真黒，下半は赤変して器表剝落する。胎土に粗石英粒多く含み，内面暗褐色を呈する。**3** は，口縁内外横ナデ，頸部外面に縦

2 袋 状 竪 穴 群

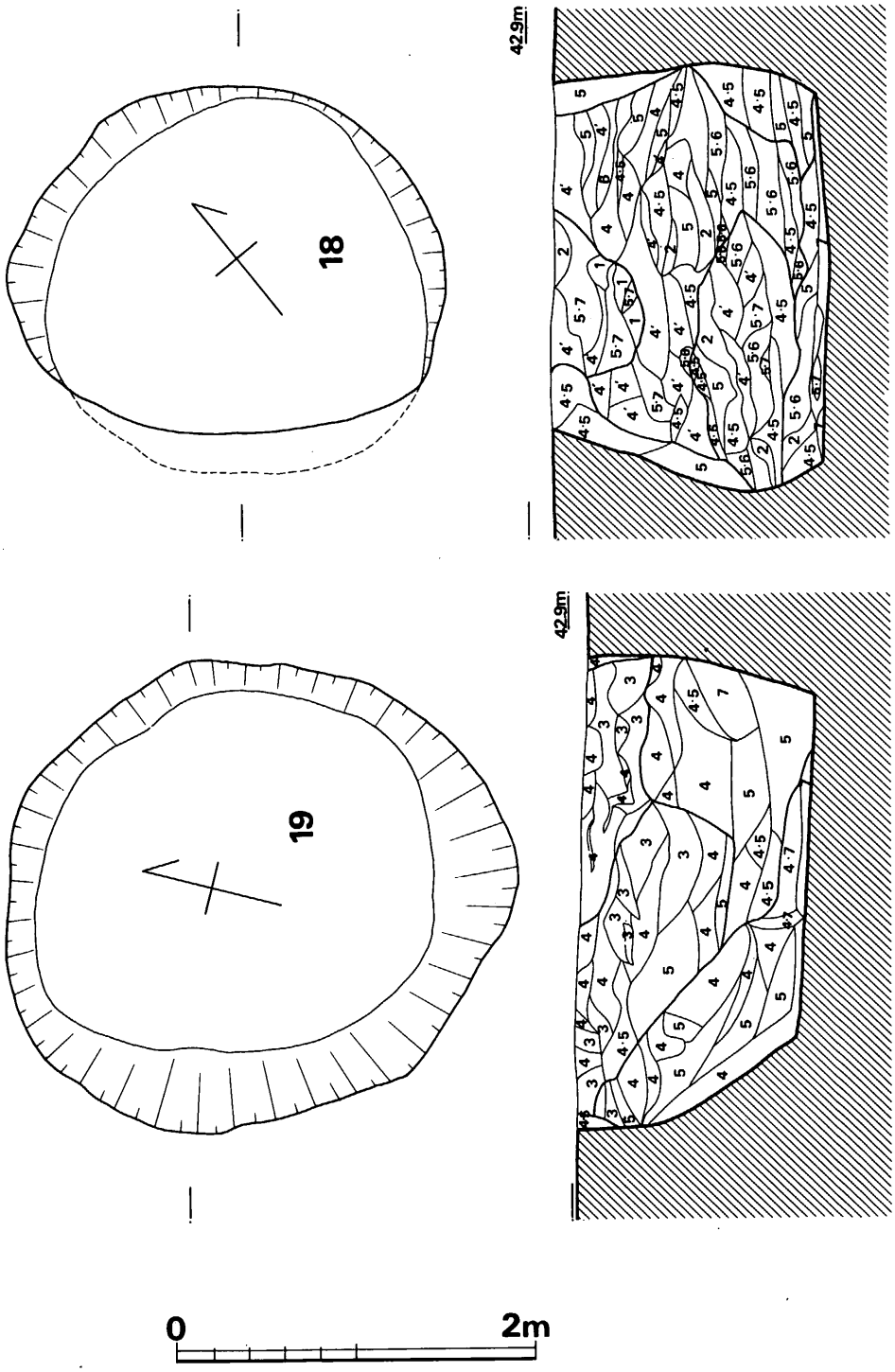


Fig. 157　第18・19号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

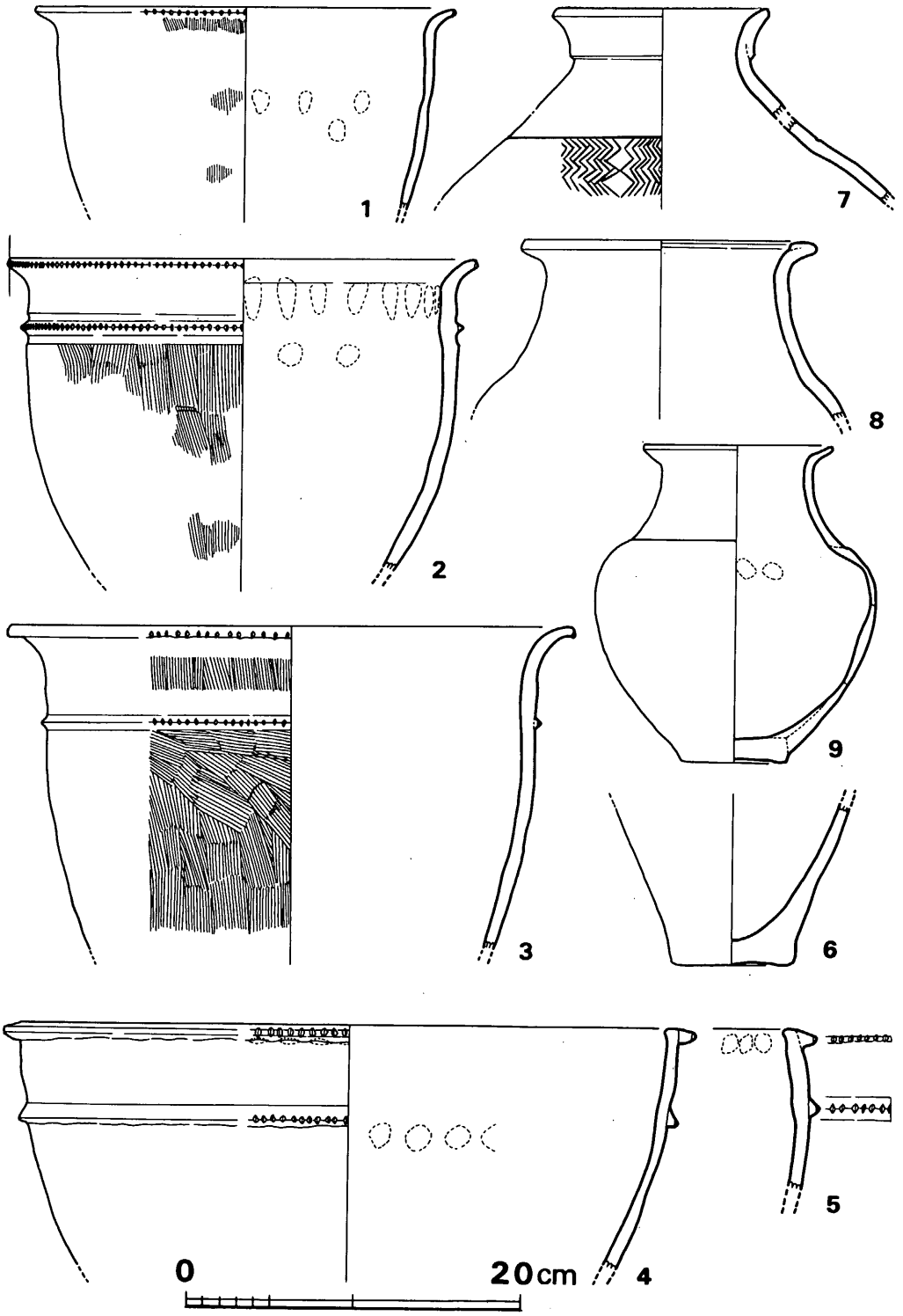


Fig. 158　第20号袋状竪穴出土土器実測図（その1）（縮尺 ¼）

ハケ,凸帯下は横ハケから下半へ行くに従って縦ハケとなる。胎土に粗砂多く含み,焼成良好,淡褐色呈する。4・5は,ほぼ同類であるが,5の方がやや張る胴部を有する。**4**は内面に荒い横ナデ,口縁〜凸帯下まで横ナデを行なう。胎土に粗砂多く含み,焼成やや良で内面黒色外面淡茶色を呈する。**5**は,内面粗いヘラ磨き,外面も横ヘラ磨きがみられる。胎土に粗砂多く含み,焼成良好,暗褐色を呈し,外面には部分的に煤残る。**6**は底径7.3cmで,僅かに上げ底状となる。外面下端部には横方向の粗いヘラ磨きがみられる。胎土に粗砂多く含み,焼成良好で外面赤茶色,内面暗褐色を呈する。

壺(7〜11)

7は,口縁外面を肥厚させ段をつくり,肩部との境に沈線一条を巡らし,以下に2段半分の細い沈線による羽状文を施す。全体に胴の張る扁平な器形となろう。胎土に粗砂極めて多く含み,焼成不良で暗褐色〜黒色を呈する。**8**は,口縁上面を肥厚させあまり張らない胴部をつくる。

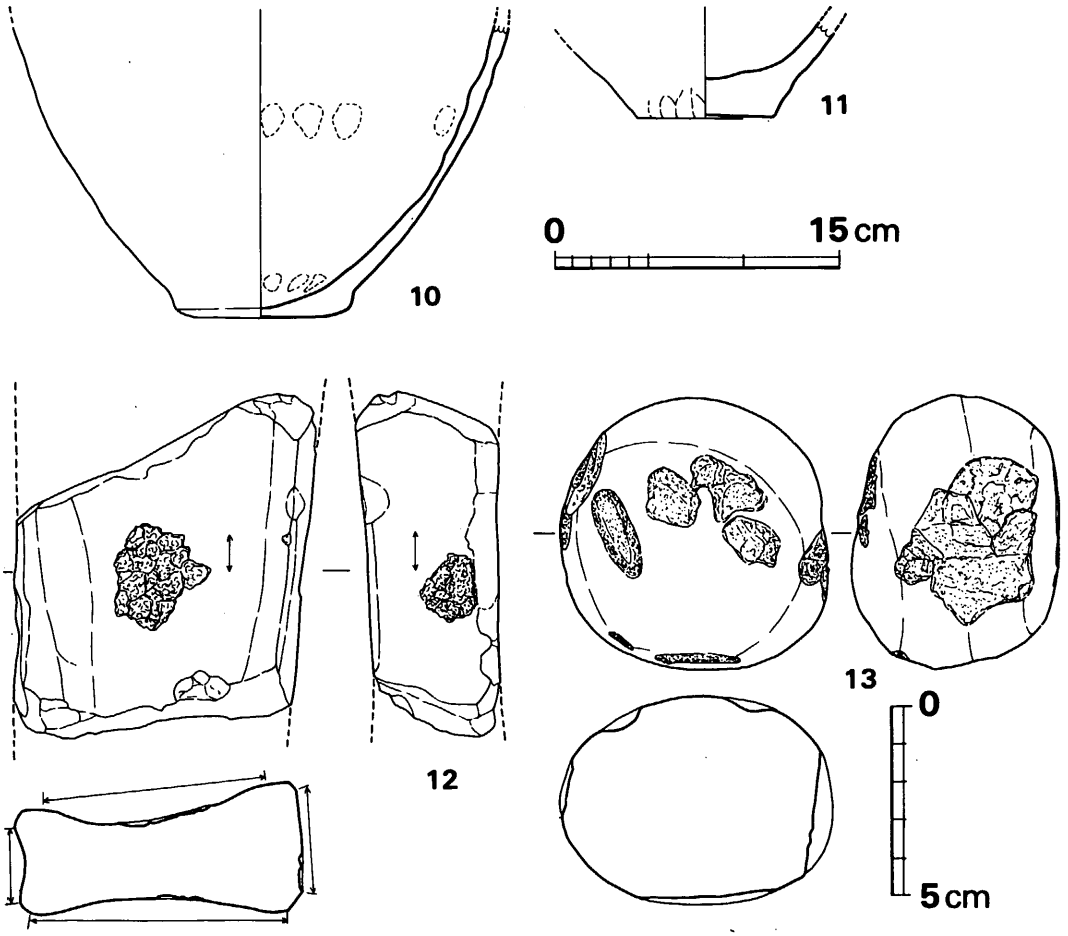


Fig. 159　第20号袋状竪穴出土土器・石器実測図(その2)(縮尺 ¼・石器½)

全体に磨滅著しいため，器面調整や，肩部・胴部の境等は明瞭にできない。胎土に粗石英粒多く含み，黄白色をなす。**9**は，やや小型で胴最大部を上位につくり，僅かな上げ底で，頸部・肩部屈曲に一条の沈線を巡らす。器壁は全体に薄手で内外面ヘラ磨き調整を行なう。胎土に細砂かなり含み，焼成やや不良，淡赤色～淡黄褐色を呈する。口径11.4cm，器高19.0cm，胴最大径16.8cm，底径6.4cmを測る。**10**は，底径9.2cmで，丸味を帯びて底部へすぼまる胴部を有する。外面は右下がり斜めのヘラ磨きを行ない，内面には指オサエがかなりみられる。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好，淡褐色となる。**11**は，厚手の僅かに上げ底状となる。外面下端は縦ヘラ削りがなされ，粗砂・細砂を多く含み，焼成やや良で，外面暗褐色，内面淡褐色をみせる。

以上の土器類は，孰れも床面直上の最下層（灰白色粘土層）出土のものである。

Tab. 30　第20号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位　mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	研　磨	叩　痕	備　　考	台帳番号
159の12	砥　　石	砂　岩	(90.0)	(79.5)	(37.5)	(279)	全面	表裏面 右側面	左側面は溝状にくぼむ	91
159の13	叩石磨石		72.0	70.0	54.0	435	部分的	上面以外		92

第23号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.160)

甕

底径8.7cmを測り，やや厚手の底部である。器表磨滅して調整は不明である。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で，内面暗褐色，外面淡茶色を呈する。

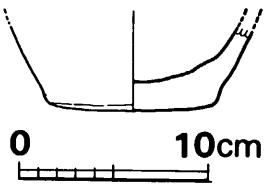


Fig. 160　第23号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺　1/4）

第24号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.161)

甕（1・2）

1は口縁下端にのみ刻目を施す類で，口縁内外面横ナデ，外面粗い縦ハケ，頸部内面に横ハケが残る。胎土に粗砂多く含み焼成良好で淡褐色をなす。外面には煤が付着する。**2**は底径8.5cmを測り，外面器表剝落し，粗砂多く含み，焼成良好で外面赤茶色をみせる。内面には炭化物が付着している。

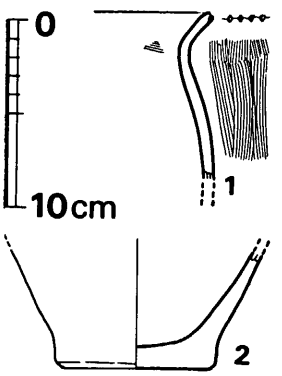


Fig. 161　第24号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺　1/4）

第25号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.164)

ガラス小玉（**1・2**）

いずれもコバルトブルーを呈し，平面形はかなり角張る。**1**は径4.5mm，厚さ3.5mm，孔径1.3mm，重量0.12g，**2**は径4.0mm，厚さ3.8mm，孔径1.2mm，重量

2 袋 状 竪 穴 群

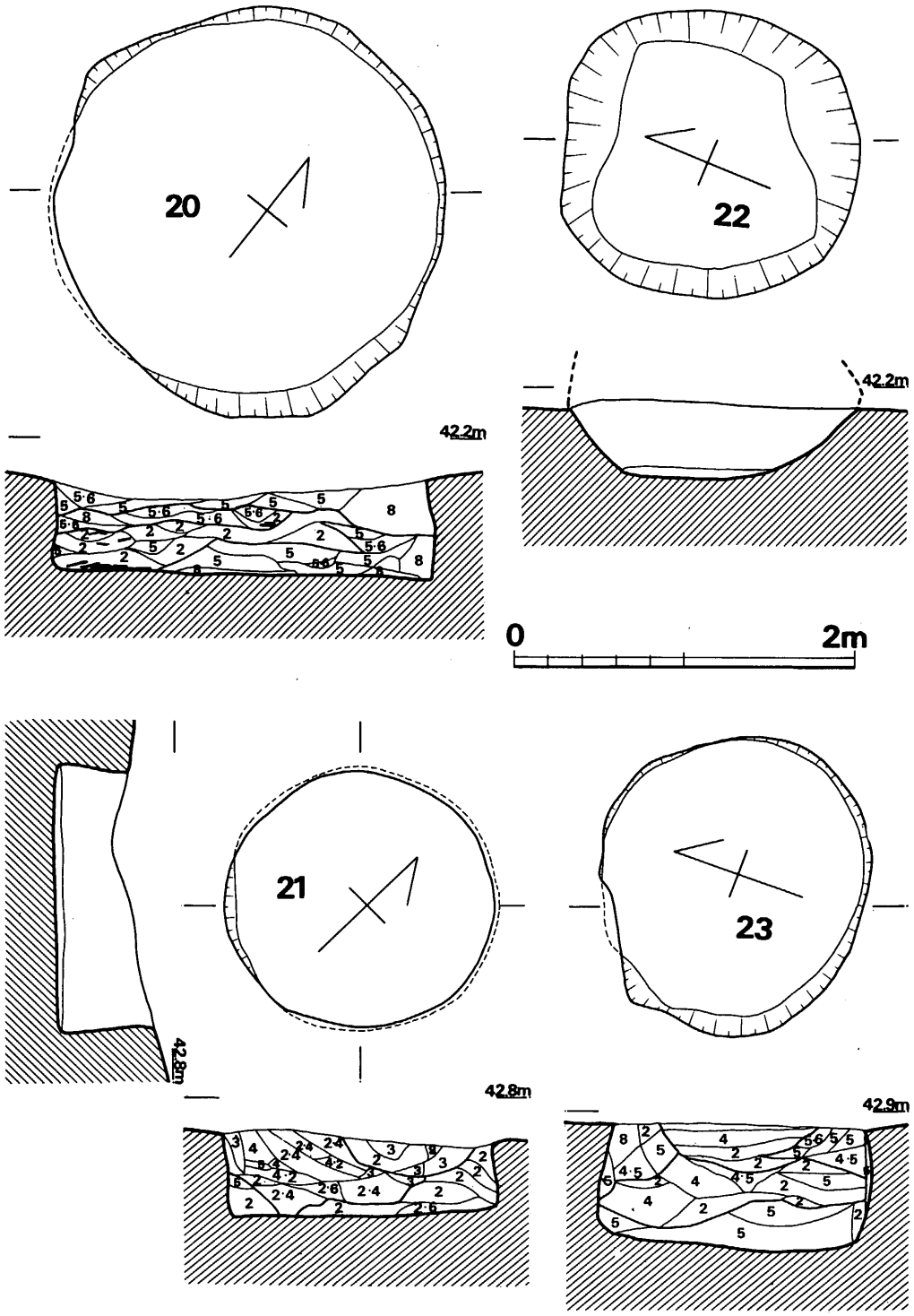


Fig. 162　第20・21・22・23号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

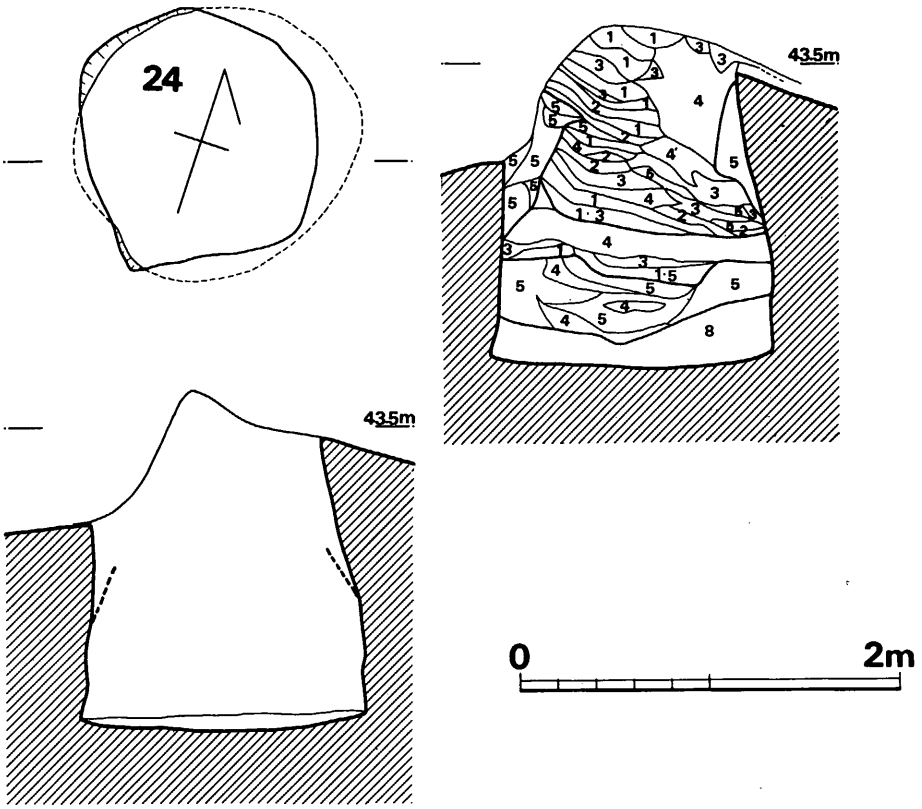


Fig. 163　第24号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

0.1ｇを測る。

この袋状竪穴は位置的に1号前方後円墳石室の前面にあたり，石室は略完全に盗掘され掻き出されており，副葬品等がこの竪穴上面に混入した可能性もある。また図示はできなかったが，調査段階で釘を使用した木棺墓が中央部中層部付近に確認されており，このガラス小玉は，弥生期のものというよりも以降の所産と考える方が妥当であろう。

第26号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.165)

甕（1・2）

1は，口縁外端部と胴上部の三角凸帯上に各々刻

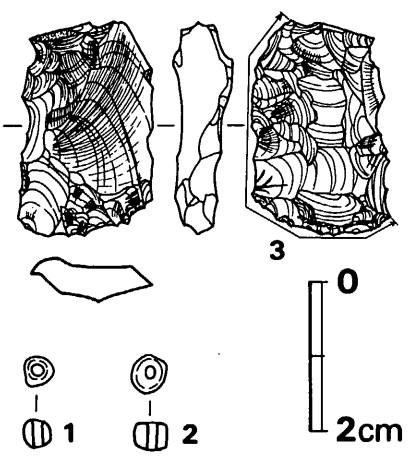


Fig. 164　第25号袋状竪穴出土石器・玉実測図（実大）

2 袋状竪穴群

Tab. 31 第25号袋状竪穴出土石器一覧表 (単位：mm・g)

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
164の1	使用された剝片	黒曜石	28.0	18.0	5.5	3.5	20.0	A	原石粗面あり 刃つぶしあり	93

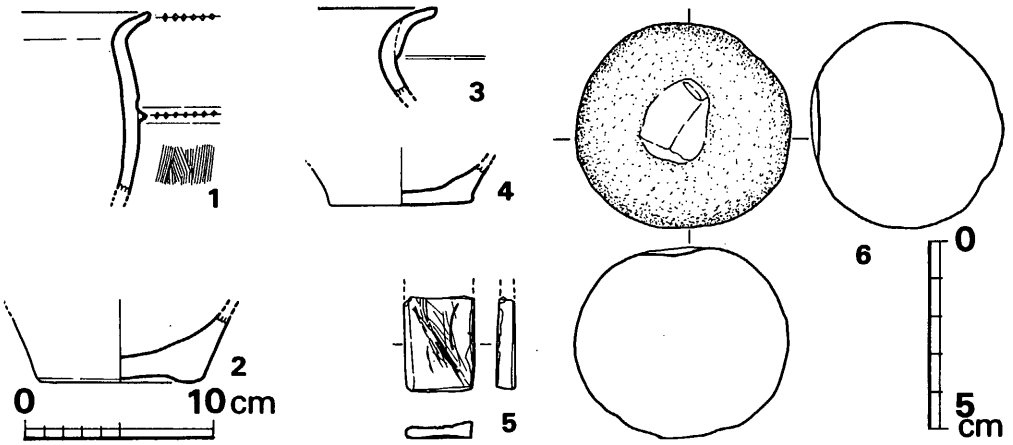


Fig. 165 第26号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺 土器¼・石器½）

目を施す類である。胴外面に縦ハケを施し，他面はすべて横ナデ調整を行なう。胎土に粗石英粒幾らか含み，焼成良好，暗褐色を呈する。外面は部分的に煤付着する。**2**は，底径8.7cmで僅かな上げ底状となる。粗砂多く含み，焼成不良で，黒褐色を呈する。

壺（**3**・**4**）

3は，口縁外面を肥厚させ段をつくる類で，胎土に粗砂多く含み，焼成良好黄白色を呈す。**4**は，底径7.5cmを測り，薄手の底部である。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，外面赤褐色，内面暗黄褐色を呈する。

Tab. 32 第26号袋状竪穴出土石器一覧表 (単位：mm・g)

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	研磨面	備考	台帳番号
165の5	砥石	粘板岩	(25.0)	18.5	5.0	(3.6)	表裏面，両側面，下面	仕上砥，表面に擦痕	94
165の6	磨石	玄武岩	54.5	57.0	50.5	243	表面風化	くぼみあり	95

第27号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.167・168)

甕（**1**～**6**）

1は，口縁端部に明らかに刻目をつくらず，張らない胴部のやや小型に類する。頸部内面に横ハケを施し，口縁内外面には横ナデ，外面には剝落著しいがやや細かい縦ハケが部分的に残

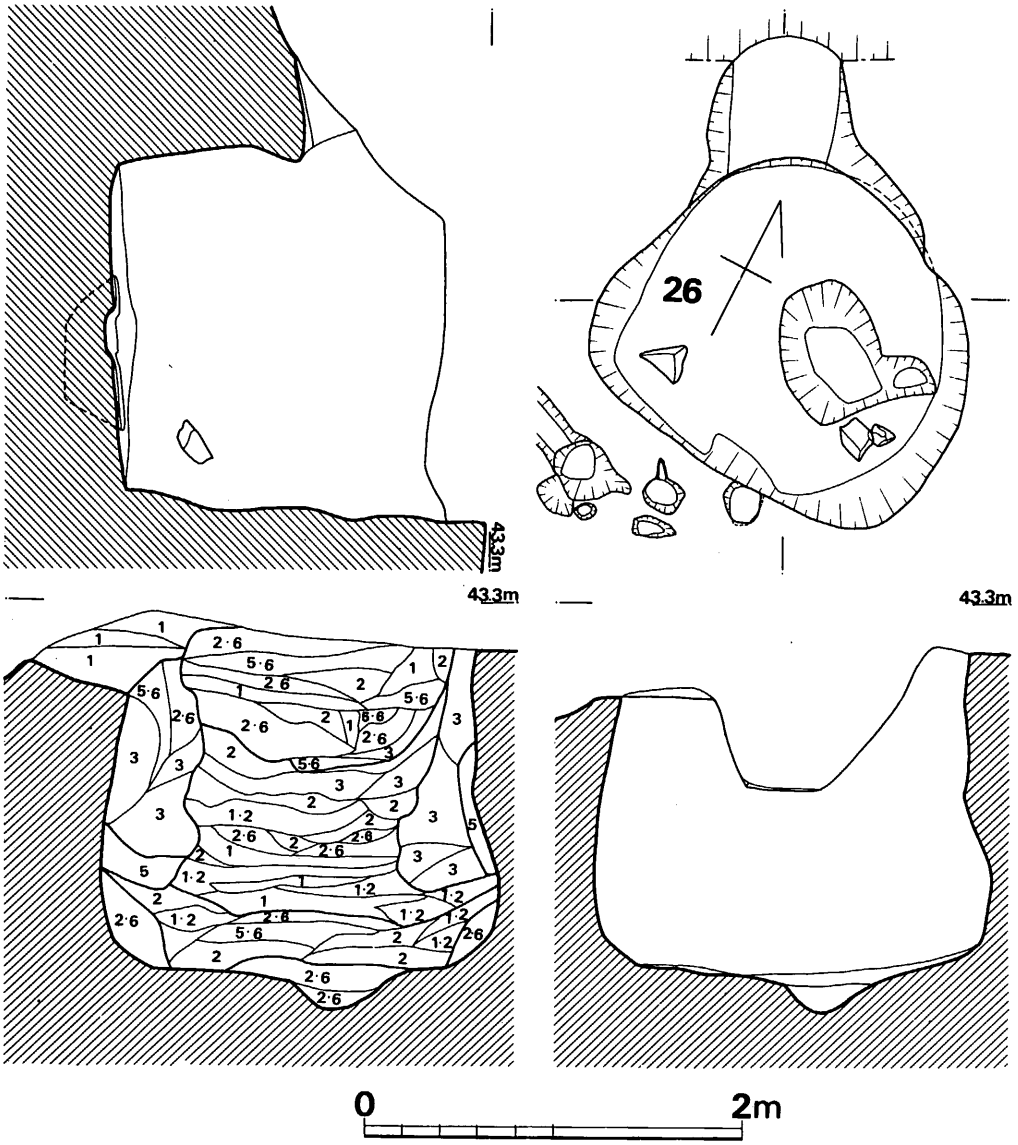


Fig. 166　第26号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

る。外面底部近くと頸部付近が二次焼成を受けて赤変する。胎土に粗砂極めて多く，焼成良好で黄茶褐色を呈する。口径25.0㎝，器高22.3㎝，底径8.3㎝，を測る。　**2**は口縁外端に刻目を施し，張らない胴部を有する。口縁内外面横ナデ，頸部内面は粗い横ハケ，胴部内面は横ハケの上をナデ，外面は縦ハケで,何回か重ねて施す。外面下半は二次焼成で赤黄変，上半は煤付着する。胎土に粗石英粒幾分含み，焼成良好，淡褐色を呈する。**3**は，頸部下三角凸帯上に刻目を施し，口縁外端部にも刻目を施すものと思われる。**4**は，口縁外方に粘土紐を貼り

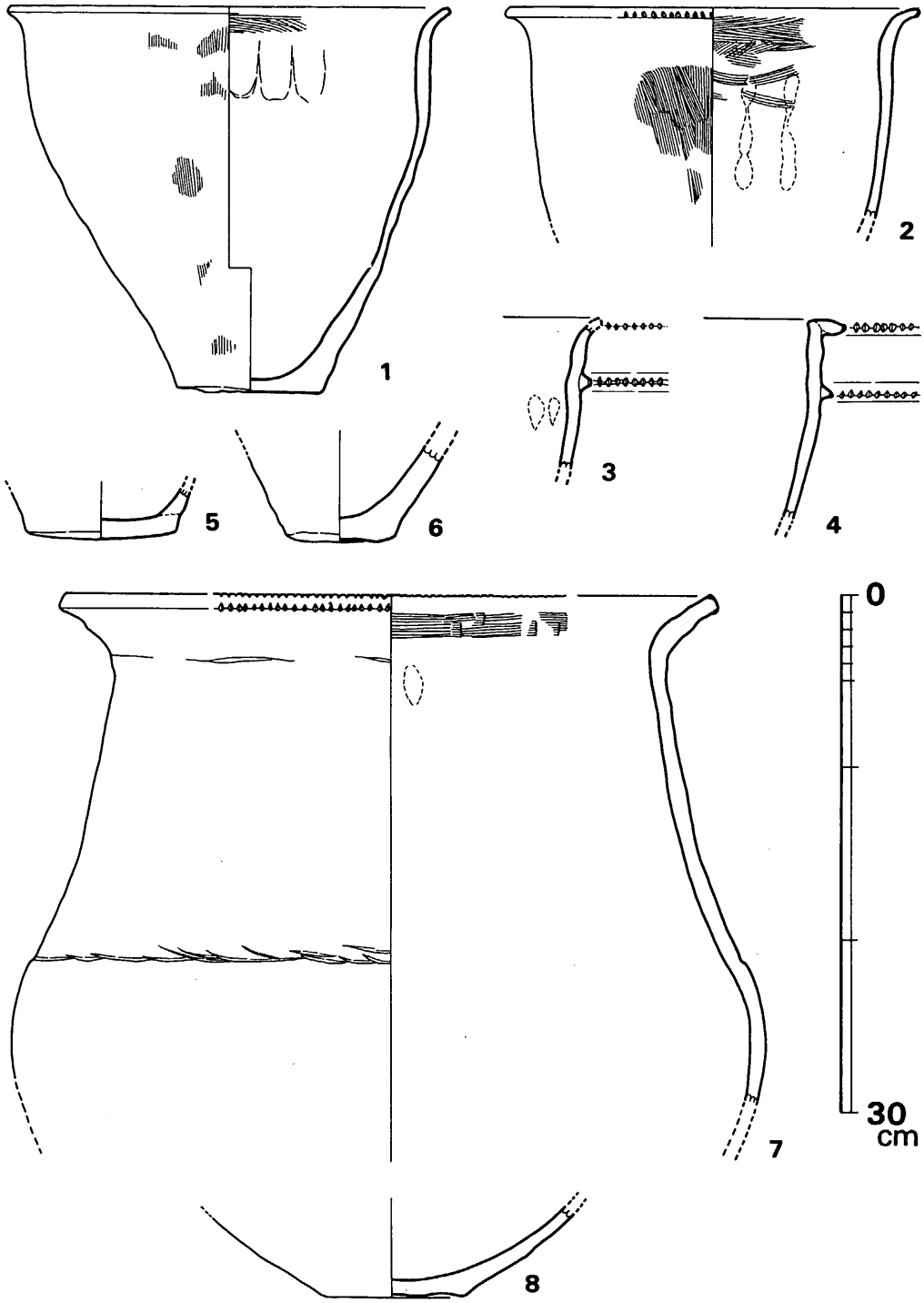


Fig. 167　第27号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 ¼）

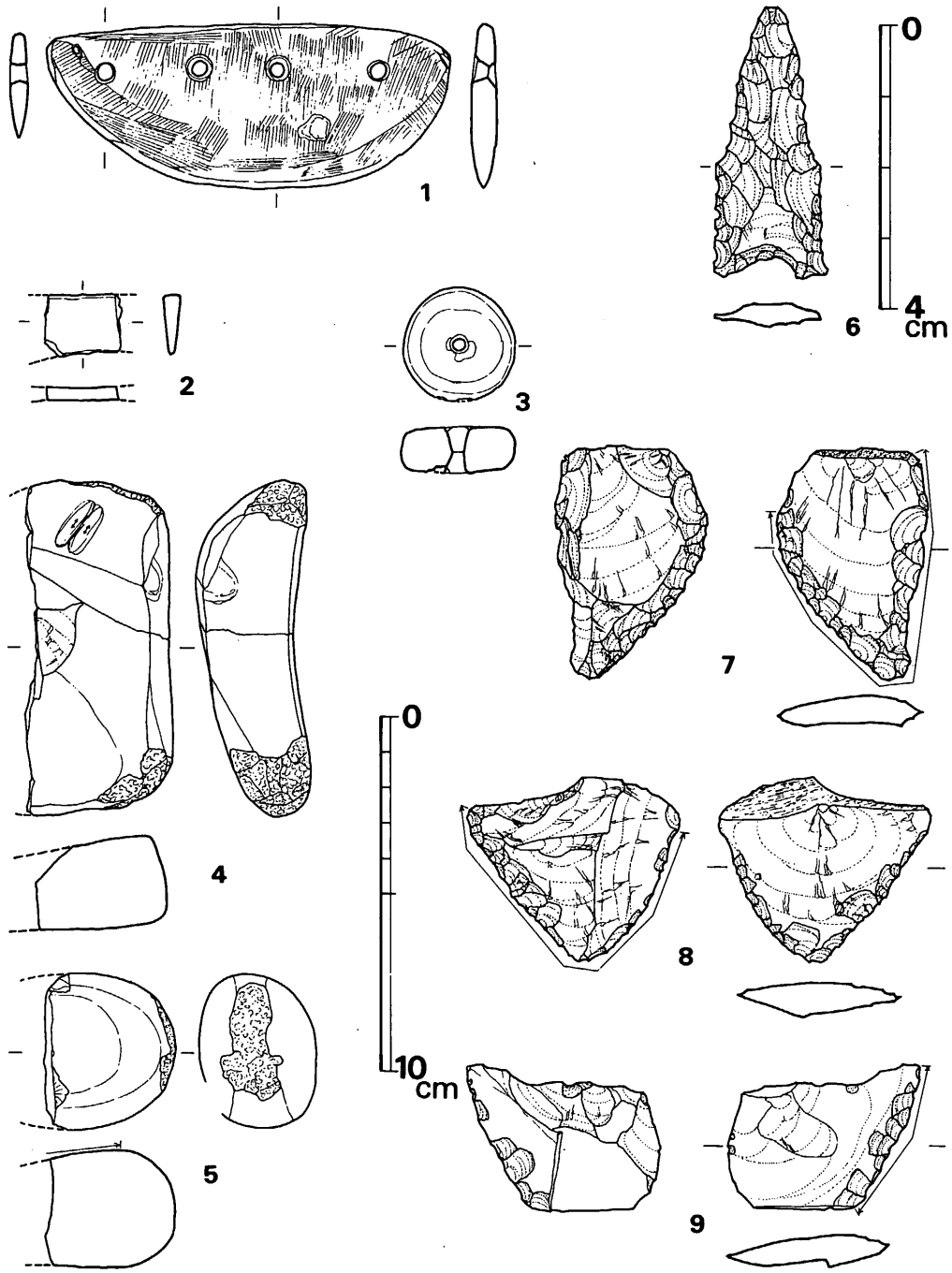


Fig. 168　第27号袋状竪穴出土石器実測図（縮尺　½・6のみ実大）

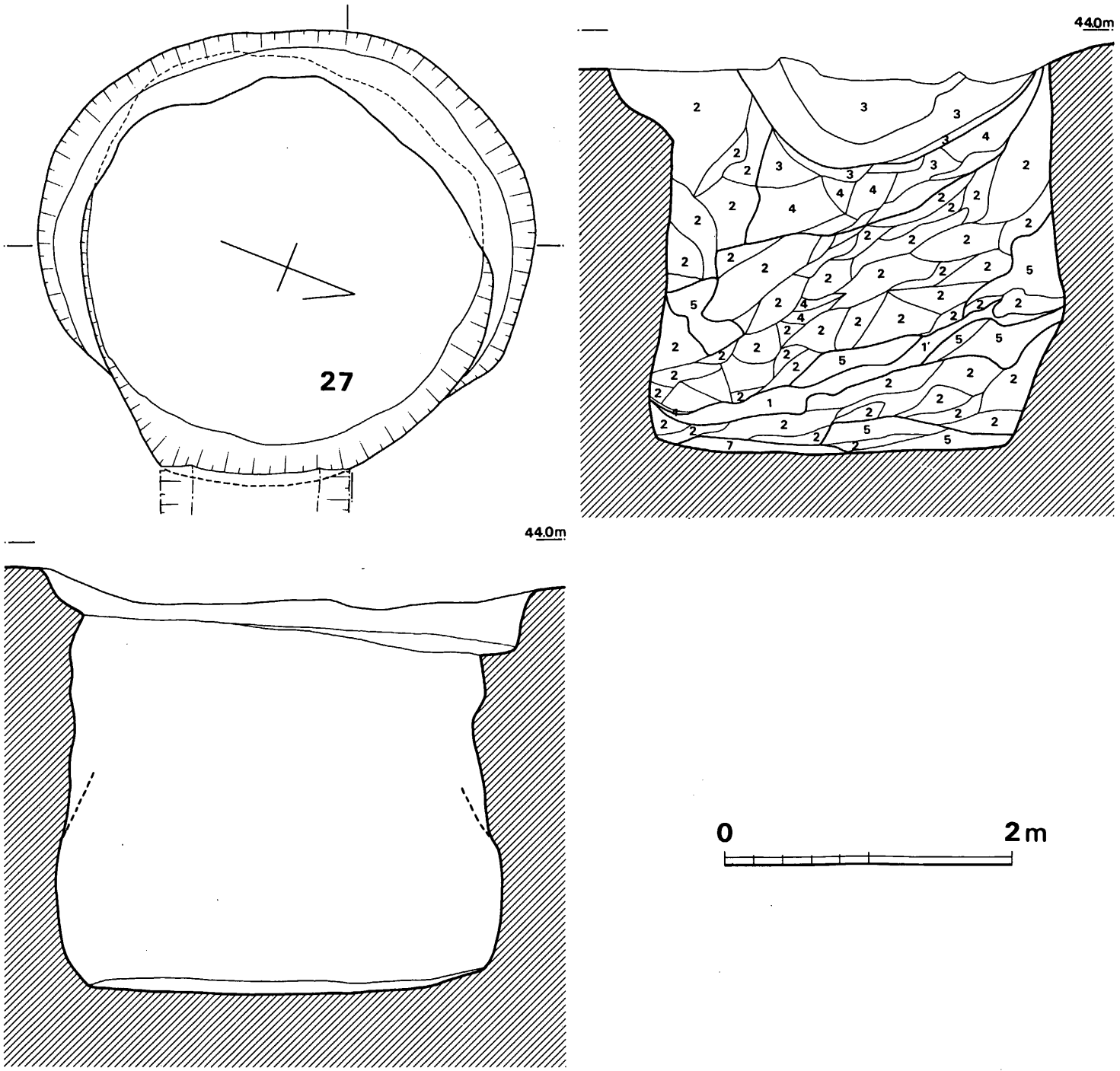


Fig. 169　第27号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

付け，端部に刻目を施し，頸部下の三角凸帯上にも刻目を施す所謂亀ノ甲タイプの甕である。

全面横ナデ調整を施し，胎土に粗石英粒極めて多く含み，焼成良好で内面黒褐色，外面淡褐色を呈する。**5**は底径8.7cmを測り，胎土に粗砂かなり含み，焼成やや不良で，内面灰白褐色，外面暗褐色をみせる。**6**は，底径6.4cmで僅かな上げ底状となり，外面縦方向のヘラ磨きかと思れる。粗石英多く含み，焼きは良く茶褐色をなす。

壺（**7**・**8**）

7は，口径36.9cm，胴最大径43.1cm，を測る大型品である。口縁外反し，口唇端部上下端に各々刻目を施し、上面等を肥厚させる類ではない。頸部と胴部の境目は，粗いヘラ状工具で段をつくる。頸部内面は，横ハケが施され，口縁内外面は横ナデ，頸部上半は右下がり斜めナデ，胴部上半は横ナデの上をヘラ磨きを施し，胴部内面は横ナデ調整がみられる。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で外面暗褐色(煤付着)，内面は暗茶色を呈する。**8**は，底径8.1cmで僅かな上げ底状となり，かなり扁平な壺となると思われる。外面ヘラ磨き，内面は丁寧なナデを行ない，胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で黄褐色をなす。

Tab. 33 第27号袋状竪穴出土 土製品・石器一覧表 （単位：mm・g）

Fig. No	器 種	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	刃部長	分 類	備 考	台帳番号
168の1	石包丁	頁岩質	46.0	112.0	7.5	46.1	152.0		両面穿孔、炭化物付着	96
168の2	砥 石	砂 岩	(17.5)	(21.0)	(4.0)	(2.8)				101
168の3	土製紡錘車		31.5	31.5	12.5	13.1			表面研磨調整	
168の4	磨石・叩石	砂 岩	94.0	(41.0)	25.5	(147)			全面研磨使用	103
168の5	磨石・叩石	花崗岩	43.5	(36.5)	33.0	(74.1)			明確な使用面は表面のみ	102
168の6	打製石鏃	安山岩	37.5	16.0	3.0	2.3		Ia C		100
168の7	スクレイパー	安山岩	65.5	42.5	9.0	29.3	128.0	D	両面よりリタッチ 原石粗面有り	97
168の8	スクレイパー	安山岩	51.0	59.5	10.0	25.7	102.0	C	両面よりリタッチ 原石粗面有り	98
168の9	スクレイパー	安山岩	40.5	53.5	9.5	18.4	44.0	A	両面よりリタッチ 表面風化	99

第28号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.170)

甕（**1**～**6**）

1は，口唇部全面に刻目を施し，張らない胴部をつくる。頸部内面に横ハケ，外面に縦ハケ調整を行なう。粗砂多く含み，焼成良好で暗褐色を呈する。**2**・**3**は，口縁外端部に刻目を施す類で，1の外面には粗い斜め，縦ハケが施される。孰れも粗砂多く含み，焼成良好で1は暗褐色，2は外面暗茶褐色，内面黒褐色を呈する。**4**・**5**は，口縁外端と三角凸帯上に刻目を施

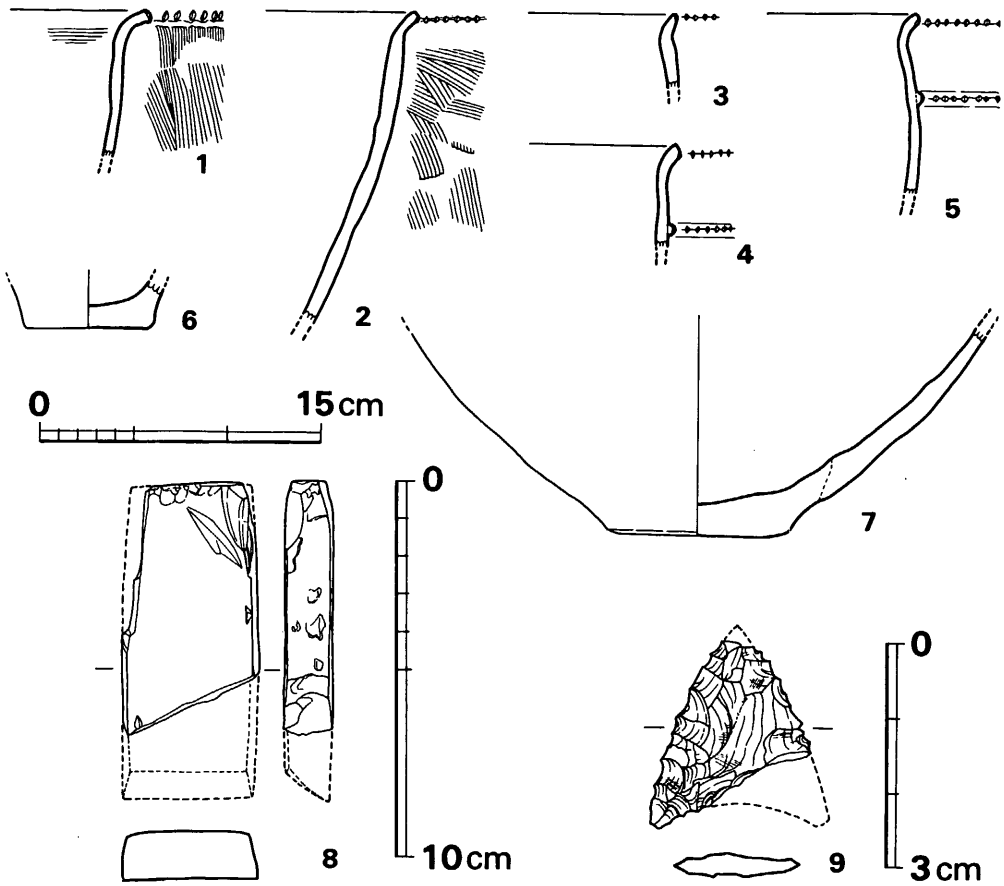


Fig. 170　第28号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺 土器¼・8は½・9は実大）

す類で，5はやや，胴張りを呈する。孰れも粗砂多く含み，焼成良好で，4は黄白褐色，5は黄褐色をなす。6は底径6.7cmで胎土に粗砂多く含み，焼きは良く内面褐色，外面赤茶色をなす。

壺（7）

底径9.5cmのやや大型品であり，外面に縦ヘラ磨きを施し，粗砂多く含み，焼きは良く暗黄褐色を呈する。

Tab. 34　第28号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	研磨	分類		備考	台帳番号
170の8	磨製石斧	粘板岩	(67.0)	36.0	13.0	(57.8)	推定34	全面			扁平片刃石斧	104
170の9	打製石鏃	安山岩	(24.5)	(21.0)	3.0	(1.3)			Ib	C	先端欠損	105

2 袋状竪穴群

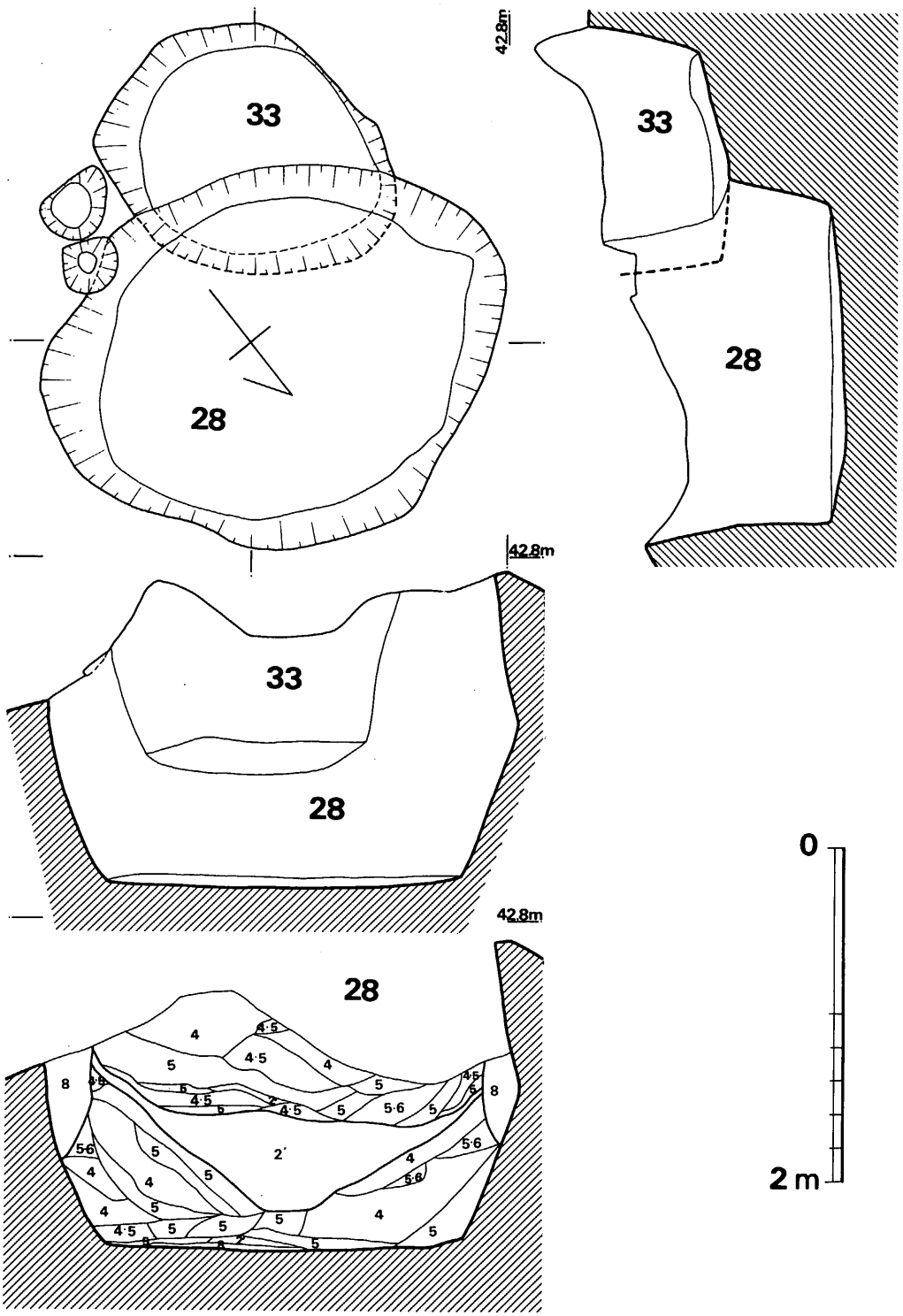


Fig. 171　第28・33号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

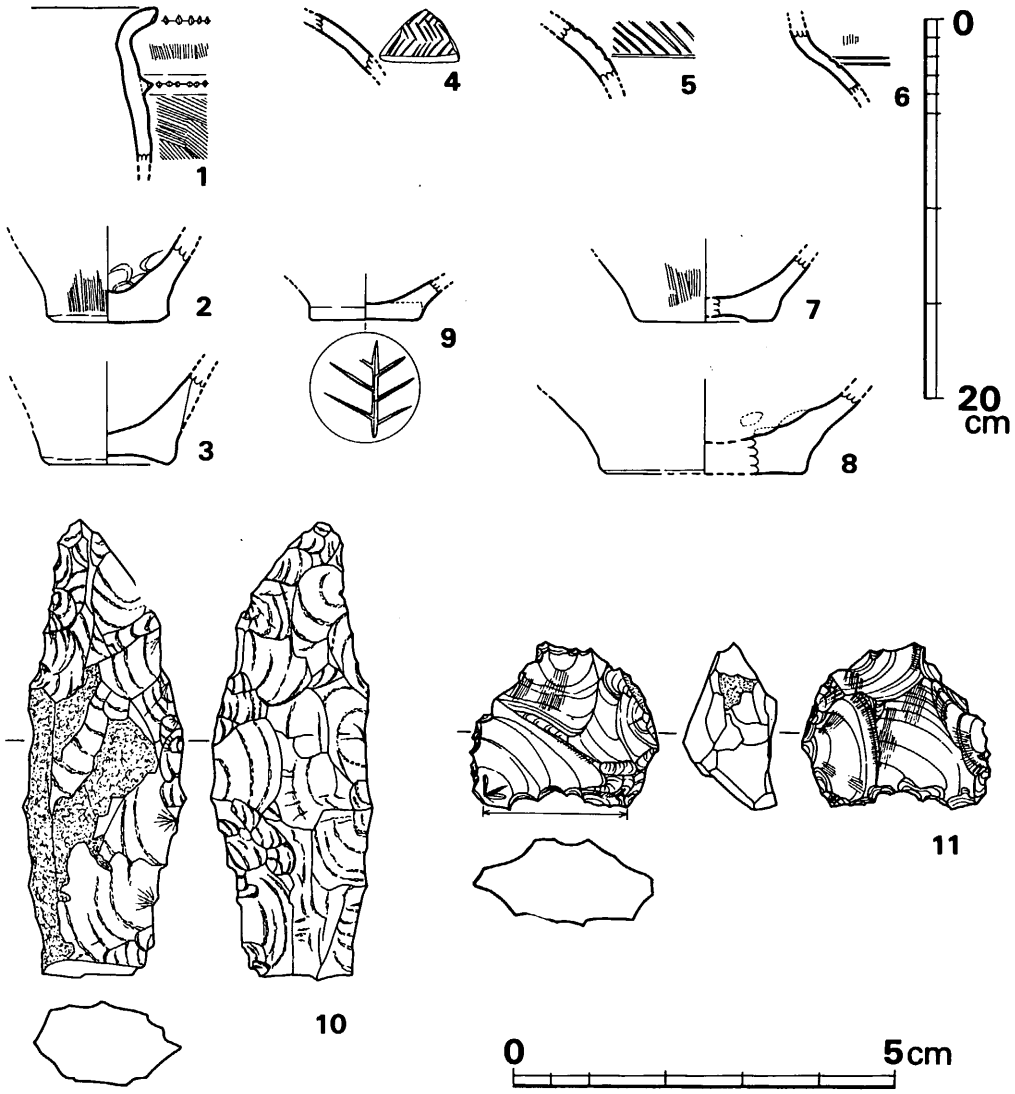


Fig. 172　第29号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺 ¼・石器は実大）

第29号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.172)

甕（1～3）

1は，口縁外端部と三角凸帯に各々刻目を施す類で，口縁内外面横ナデ，頸～胴部外面にやや細かいハケ調整を行う。粗砂多く含み，焼成不良で内面黒色，外面煤付着して暗褐色を呈する。2は，底径6.5cmで，外面にやや細かい縦ハケを施す。内面には強い指オサエ痕がみられ，粗砂多く含み，二次焼成を受け暗灰褐色を呈する。3は，底径6.5cmで上げ底状となる。底部と胴部は斜めに接合されるのが，明瞭に剝げた部分によって判かる。粗砂多く含み，焼きは

良く赤茶色をなす。

壺（**4**～**9**）

4は，肩部に浅く細い沈線で羽状文を巡らす類である。文様はかなり乱れる。粗砂かなり含み，焼きは良く淡茶色をなす。**5**は肩部にかなり深いヘラ描きの大型羽状文を巡らす類であり，4・6よりも大型の器形になろう。外面ヘラ磨きを行ない，胎土に粗大石英粒をかなり含

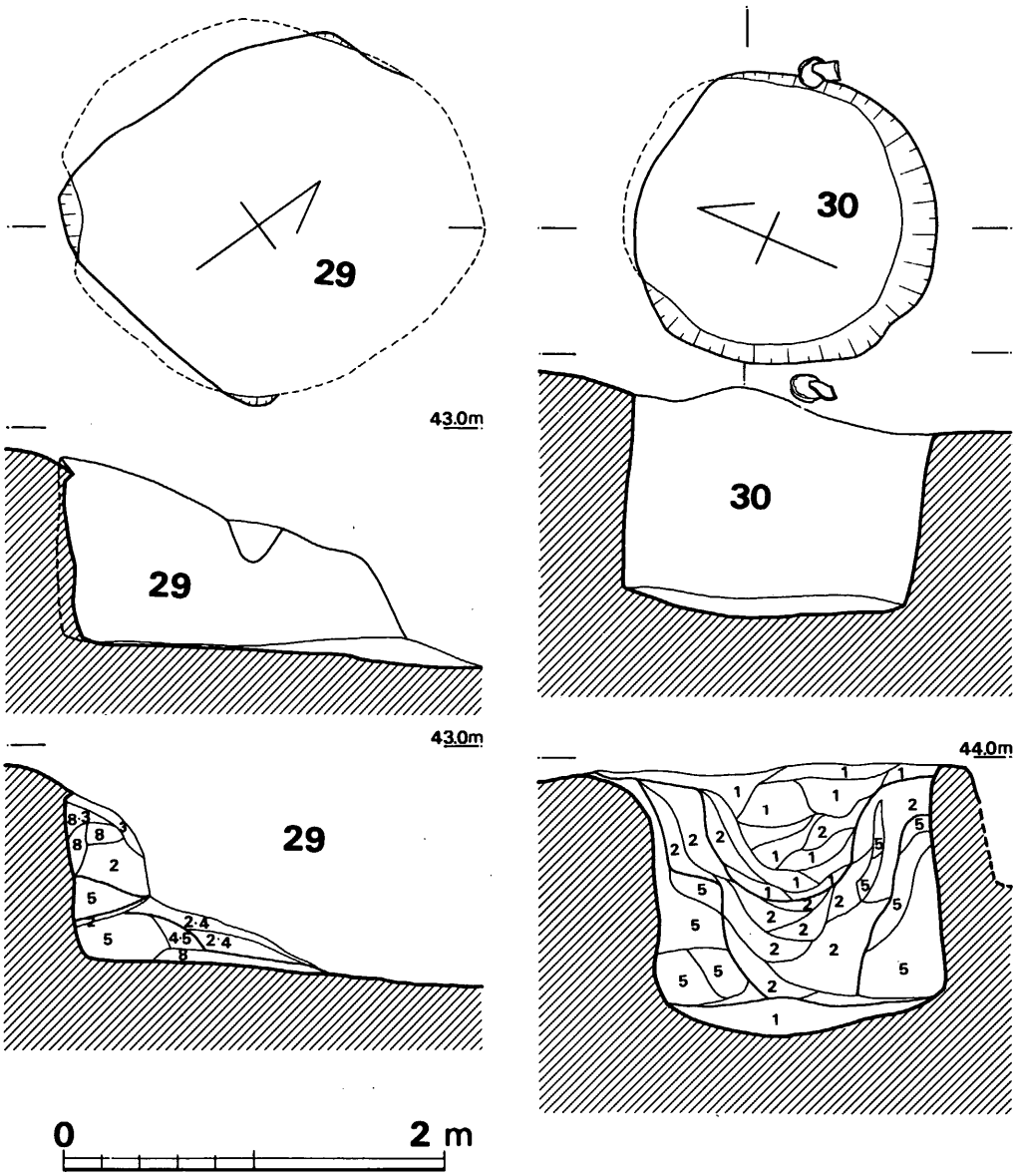


Fig. 173　第29・30号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

み，焼成良好で淡黄褐色を呈する。**6**は，肩部に2条の沈線を巡らす類で，外面に僅かに縦ハケが残る。粗砂かなり含み，焼きは良く内面淡褐色，外面には煤付着して暗褐色となる。**7**は，底径7.0cmで中央部分が上げ底状となる。外面にやや細かい縦ハケを施し，焼きは良く内面暗茶色，外面赤茶色を呈する。**8**は，大型品で粗砂多く含み，焼きはやや良く，外面淡茶色，内面黒褐色をみせる。**9**は，円盤貼付状の小壺底部で，底外面に木葉圧痕がみられる。他の副葬小壺と同様に胎土精良で，暗黄褐色を呈する。

Tab. 35　第29号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
172の10	ポイント	安山岩	(59.0)	21.5	11.0	(12.5)			原石粗面あり	106
172の11	使用された剝片	黒曜石	21.5	24.5	12.0	5.2	18.5	A	原石粗面あり	107

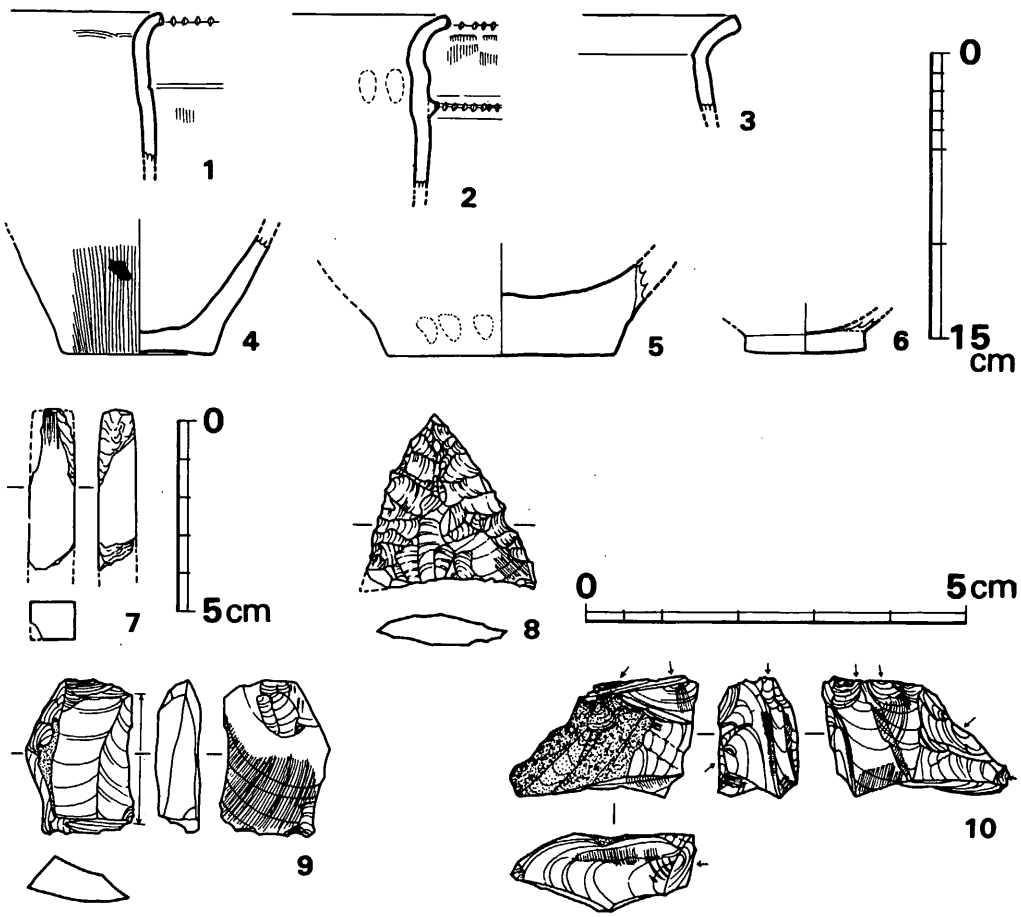


Fig.　174　　第30号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・7のみ½・他石器は実大）

2 袋状竪穴群

第30号袋状竪穴出土遺物 (Fig.174)

甕（1・2・4）

1は，口縁外端に刻目を施し，頸部下に沈線を施す類で，頸部内面に横ハケ，外面に縦ハケ残る。内外面ともに強い二次焼成を受けて暗赤変する。2は，口縁外端と三角凸帯とに刻目を施す類である。外面に縦ハケを施し粗砂多く含み，焼成やや良好で内面赤褐色，外面暗黄褐色～黒色を呈する。4は底径8.1cmを測り，外面に粗い縦ハケを施し，粗砂かなり含み，暗褐色となる。

壺（3・5・6）

3は，外反した口縁内面に，つまみ出した様な一稜をつくる類で，当地域においては数少ない例である。器表磨滅のため，口縁端部の刻目等の有無は全く不明である。粗砂多く含み，焼きは良くない。5は底径12cmを測る大型品で，胴部と底部との接合状況はその剝げ具合により明瞭である。焼きは良く淡褐色をなす。6は，小壺の類で，例に漏れず円盤貼付であり，胎土精良で、焼きは良く暗黒褐色をなす。

Tab. 36　第30号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類		備考	台帳番号
174の7	石のみ	粘板岩	(42.0)	12.0	10.0	(7.8)				4面基部面とも丁寧に磨く	108
174の8	打製石鏃	黒曜石	(22.5)	(22.0)	4.0	(1.3)		Ia	C	ほぼ完形	109
174の9	ブレイド	黒曜石	(20.0)	14.0	5.5	(1.5)	10.5			原石粗面あり，刃部にごく小さな刃こぼれ	111
174の10	石核	黒曜石	15.5	24.0	10.5	3.5				原石粗面あり	110

第31号袋状竪穴出土遺物 (Fig.175)

壺（1～3）

1は，口縁直下に1条の沈線を巡らす類で，口唇部付近は欠損する。内外面とも横方向のヘラ磨き調整を行なう。胎土に粗砂幾分含み，焼成良好で茶色を呈する。2は，口縁上面に粘土を貼り付けて肥厚させ，口唇部上下端に刻目を施す大型品である。口縁内外面横ナデ，頸部内面横ヘラ磨き，頸部外面は粗い縦ハケを消すように横ヘラ磨き調整が行なわれる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で灰褐色を呈する。3は，底径16cmを測る大型品である。外面にはヘラ磨き調整が行なわれるが，内面には二次焼成によるかと考えられる煤の付着が認められる。粗砂多く含み，焼きは良く暗茶色をみせる。

Tab. 37　第31号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
175の4	磨製石斧	玄武岩	(91.5)	77.0	43.0	(461)	推定123		全面研磨，太型蛤刃石斧	112

Fig. No.	器　　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　　考	台帳番号
175の5	使用された剥片	黒曜石	22.0	28.5	12.5	5.9	30.5	C	刃部両面に刃こぼれあり	113

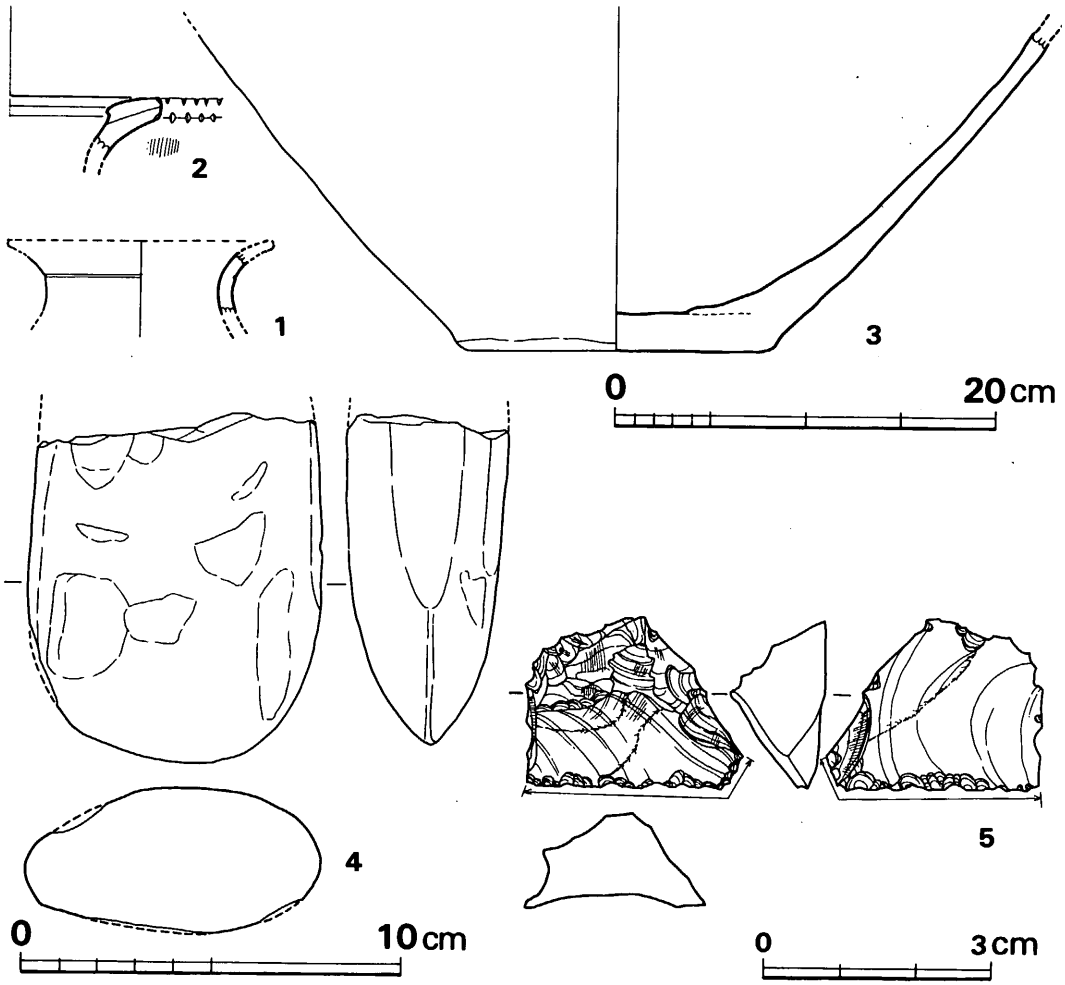


Fig. 175　第31号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・4は½・5は実大）

第32号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.177・178)

甕（1～4）

1は，口縁外端部と頸部下の三角凸帯上とも刻目を施す類で，胴部は凸帯直下でやや張りをみせる。口縁凸帯下までは横ナデ調整，以下胴部外面には細かい縦ハケを施す。胴部内面には連続する指オサエ痕が2段にみられる。外面上半は煤付着がみられ，下半は2次焼成で赤変する。

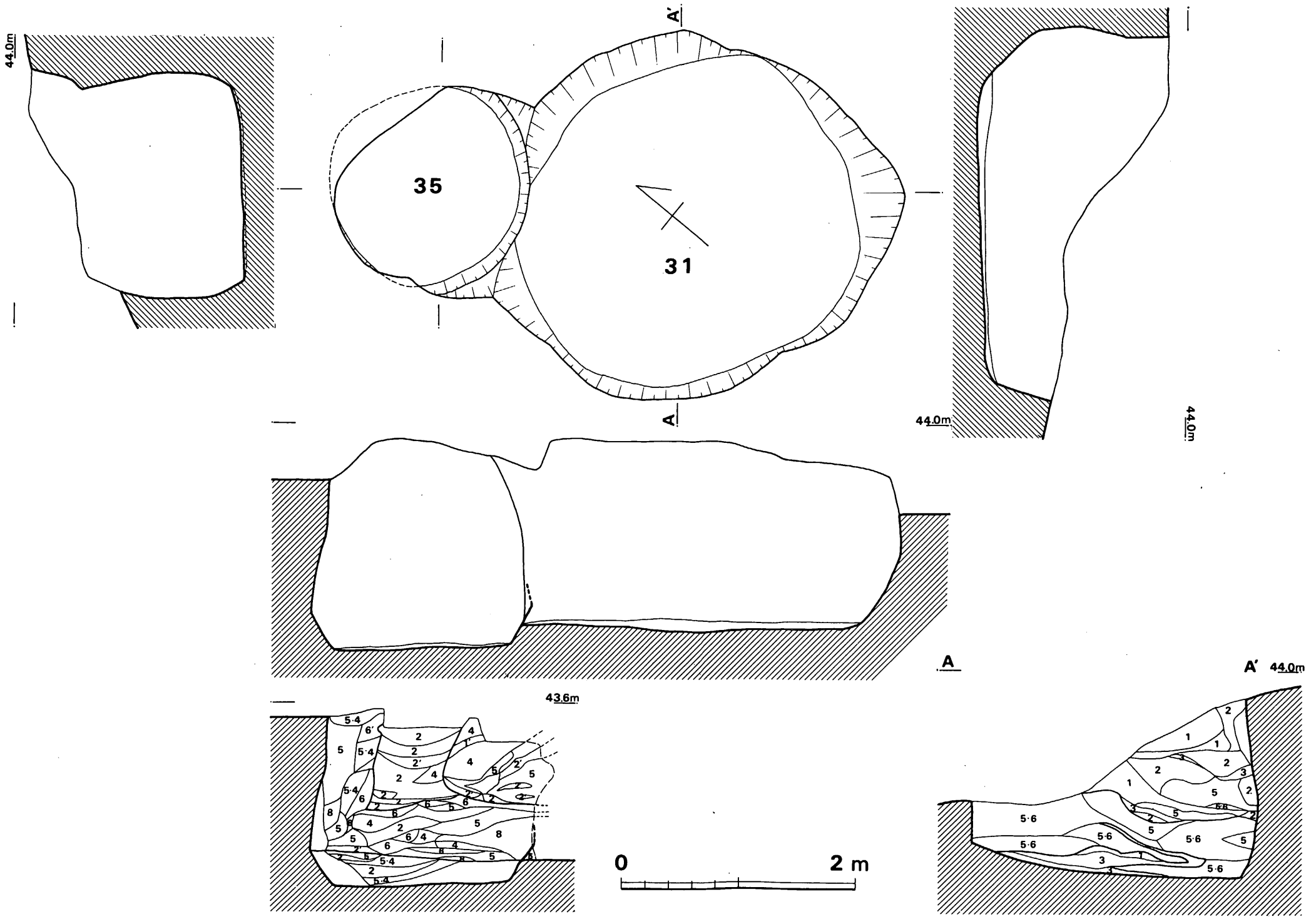


Fig. 176　第31・35号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

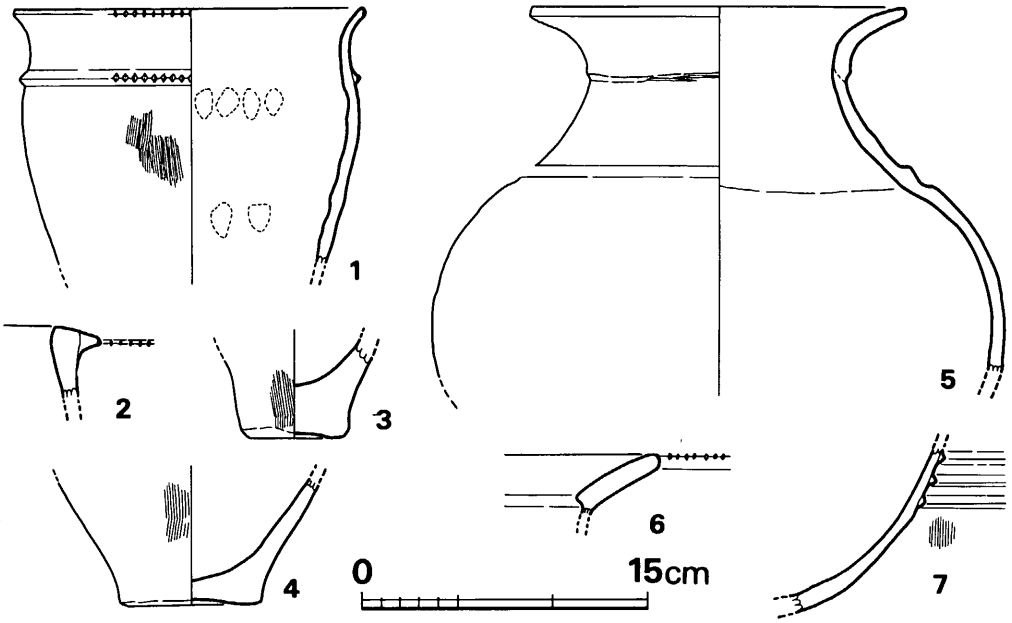


Fig. 177　第32号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 ¼）

2は，所謂亀ノ甲タイプの口縁片で，粗砂かなり含み，焼きは良く黄褐色をなす。3は，底径5.3cmの僅かな上げ底状となるやや充実した底部である。外面にやや粗い縦ハケを施し，粗砂多く，焼きは良く外面赤茶色，内面暗褐色を呈する。4は，底径7.5cmでやや上げ底状となる。外面にやや粗いハケ調整を行ない，粗砂かなり含み，焼きは良く茶褐色をなす。

壺（5・6）

5は，口縁直下外面に段をつくり，肩部に三角凸帯を巡らす類で，口径19.7cm，胴最大径30.1cmを測る。口縁下の段は，それ程シャープではなく，ダレた部分の方が多く，段下にごく部分的に沈線がみえる。口縁内面に横ナデ，凸帯上下間で強い指横ナデ，胴外面にヘラ磨き調整を行なう。胎土に粗砂多く含み，焼きは良く黄茶褐色を呈する。6は，口縁内上面を長く肥厚させ，口唇上端のみに刻目を巡らす大型品口縁片である。内外面横ナデ調整を行ない，粗砂多く含み，焼きは良く暗黄褐色をなす。

鉢（7）

3条の凸帯を巡らす類で，小片であるが凸帯の巡り方をみる限り鉢状の器種となるが，他の可能性も残らないとは言えない。全体に磨滅するが，凸帯上の刻目の存在は可能である。外面に粗い縦ハケ残り，粗砂かなり含み，茶色を呈する。

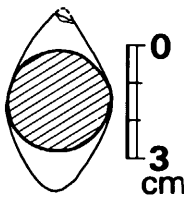


Fig. 178　第32号袋状竪穴出土投弾形土製品実測図（縮尺 ½）

土製投弾（Fig.178）

ラグビーボール状の土製品で，長さ4.8cm，最大幅2.8cm，重さ26.1gを測り最大幅部断面はほぼ正円形を示す。先端部は僅かに古い欠損がみられる。胎土に粗石英粒含み，茶褐色（⅓は黒色）を呈する。貯蔵穴上層西側溝寄り部よりの出土品である。

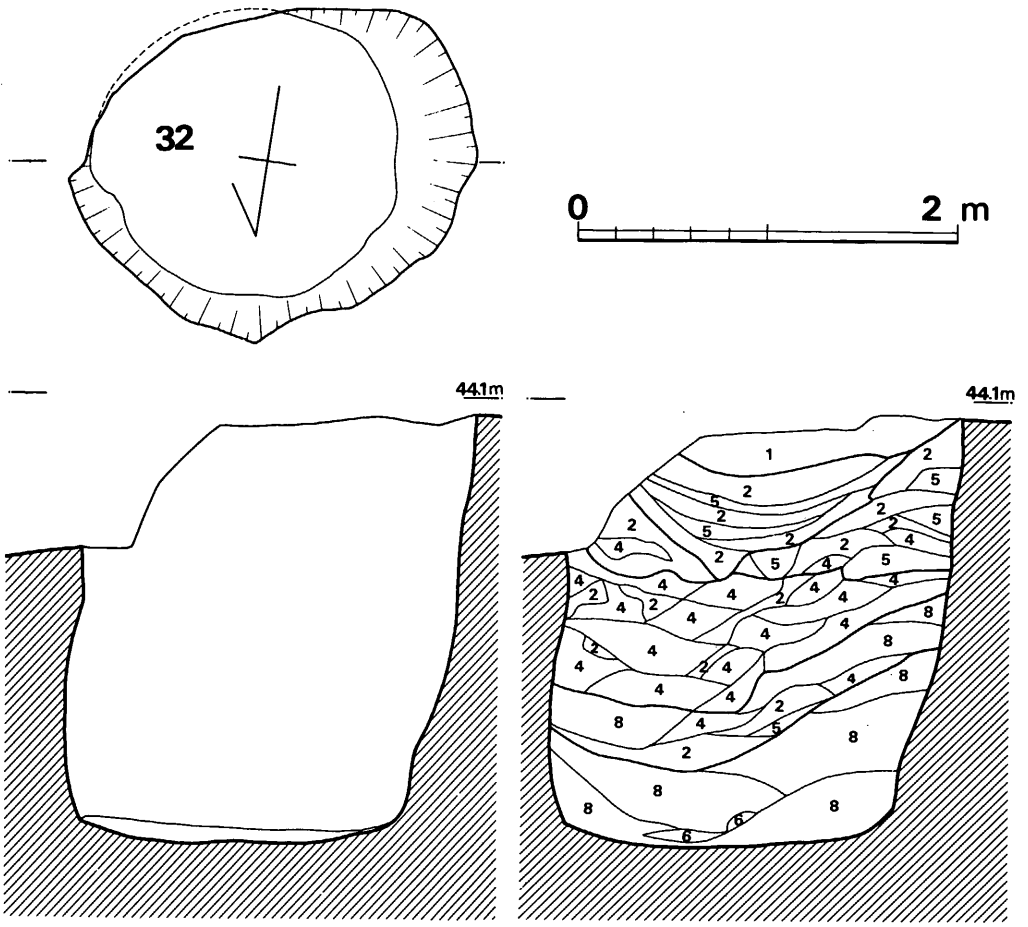


Fig. 179　第32号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

第34号 袋状竪穴出土遺物　(Fig.180～188)

甕（1～17）

小結の項で詳説する分類に従って以下の如く大別した。

Ⅰ－b類（1～4）は口唇外下端のみに刻目を巡らす類である。その中でも胴部の張らないもの（1・3），胴のやや張るもの（2・4）などがみられる。1は，口径29.4cm，器高33.0cm，底径8.9cmを測り，口縁部内外面横ナデ，胴外面には横方向平行叩目の上を板状工具幅3.6cmの

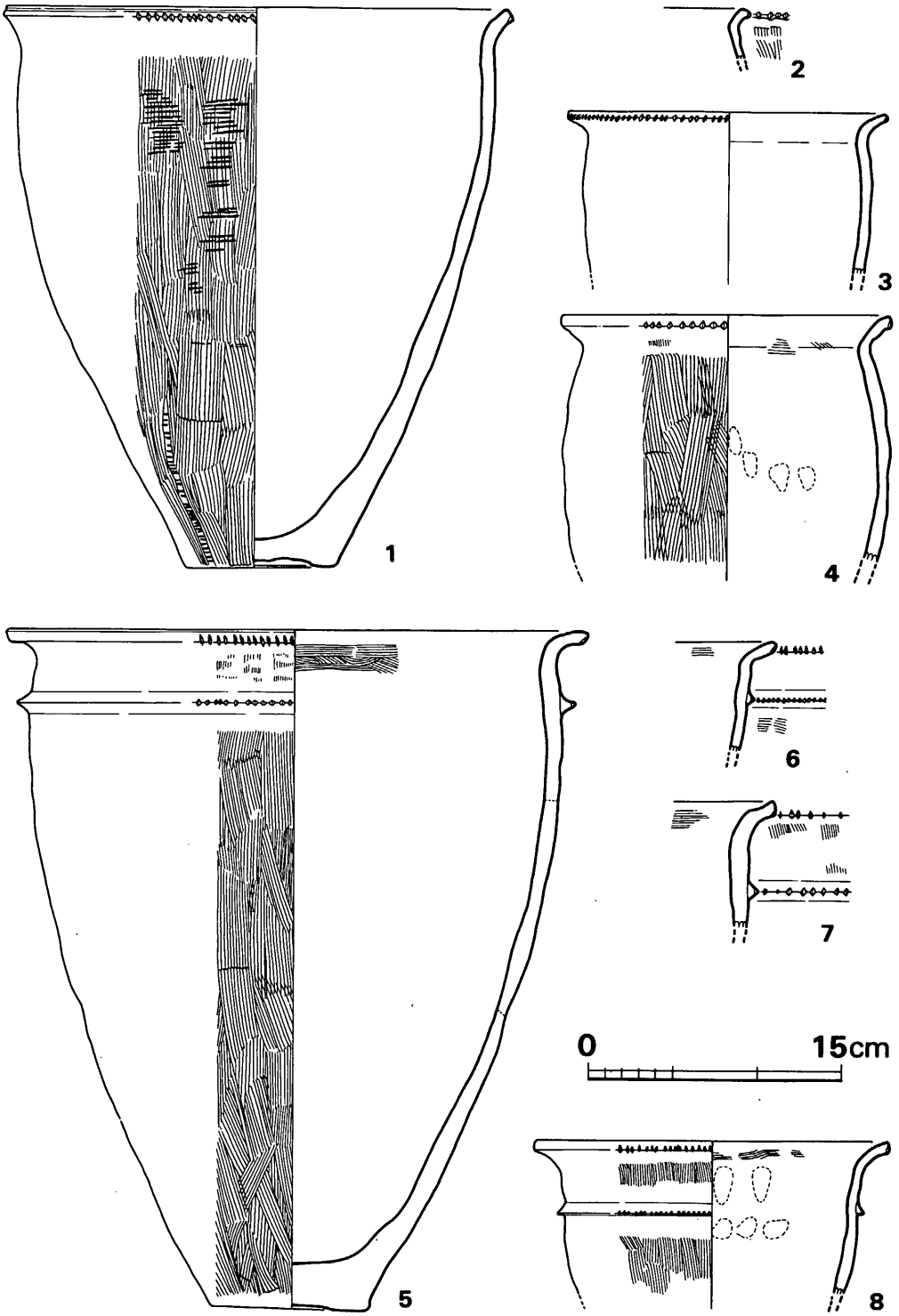


Fig. 180　第34号袋状竪穴出土土器実測図（その1）（縮尺 ¼）

やや粗いハケ調整が施される。叩目（ＰＬ.87部分接写を参照のこと）は１単位２㎝幅の中に８条分がみられ，主に胴上半部及び下端部に部分的に確認される。北部九州において従来知られている弥生後期の粗い叩目技法の他に，最近，筑紫野市道場山甕棺，朝倉郡三輪町栗田甕棺，筑紫野市高雄甕棺，孰れも中期後半に含まれる傘蓋形土器外面に，太い棒状工具による叩目や，やや細かい叩目（栗田例）等が施されることが知られてきた。（註１）

また，筑紫郡那珂川町宗石の前期後半甕棺にもやや細かい叩目がみられるが，本剣塚例の如く生活土器に細かい叩目が施されるのは初めての確認例である。ただ，この甕は生活土器とみて良いとしてもやや大きめの類であり，甕棺用甕を含み大型器種作製の際にはどうしても叩き締める必要があったと考えることもできよう。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で淡黄茶褐色を呈し，器表の残り極めて良好である。**2**は，頸部で屈曲してやや突出する外端部に大きめの刻目を施す。外面には粗い縦ハケが施され，胎土に粗砂多く含み，焼成やや不良で淡褐色をなす。**3**は，頸部内面に不明瞭な稜をつくり，頸部下で一度僅かに胴が張るような様相をみせる。口縁内外面は横ナデ，胴外面は縦ナデ，内面は粗い斜めナデを施す。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で，外面には二次焼成による煤がみられる。**4**は，中位で胴が張る器形で，外面に粗い縦ハケ（１単位1.7～2.0㎝），口縁内外面及び頸部下までは横ナデ，以下内面は斜めナデ上げが行なわれる。粗砂多く含み焼きは良く暗褐色～黒色を呈する。注目すべきは，全体にかなりの小破片に割れているが，その破片毎に色調が異なり，袋状竪穴廃棄後埋没中途で塵焼場等に転用して，一部破損した不要土器を投棄した際に割れて飛び散り，各々火勢の異なる場所で二次焼成を受けたものと考える。特にこの袋状竪穴はそういう例も多く，また出土土器・安山岩片・黒曜石片の量も他に圧倒して多量で，まとめて塵焼場を決めて一個所に投棄したような感を与える。

Ⅱ—a 類（５～11・17）は頸部下に断面三角凸帯を巡らし，口縁外下端と凸帯上に各々刻目を施す類である。胴が張らずに細身の器形をなすもの（５～８・11）や，胴がやや張り丸味を帯びて底部へすぼまるもの（９・10）や，前者のミニチュアの形態を示すもの（17）などがある。**5**は，口縁が丸く強く屈曲外反するもので，凸帯は鋭く高く，浅い上げ底状の底部となり，全体にかなり長胴細身の感を与える。口縁内外面横ナデ，頸部内面横ハケ，頸部外面縦ハケの上粗い横ナデ，胴部には板状工具によるやや細い縦ハケ（１単位幅3.7㎝）が施される。内面は丁寧なナデかと観察される。また貼り付け凸帯の剝げた部分には胴部と同じ縦ハケがみられ，この土器の作製順序としては，ハケ調整→凸帯貼り付け→凸帯上下間と口縁部の横ナデ→刻目施文という方法が確認される。粗砂多く含み，焼成良好黄褐色～茶褐色を呈する。この土器も甕４と同様に各破片毎に黒変・赤変し接合する類である。**6**は，口縁外面～凸帯下まで横ナデ，以上横ハケ，口縁内面横ハケを施す。粗砂かなり含み，焼成やや不良で外面灰～黒色，内面灰褐色を呈する。**7**は，口縁内外面横ナデ，頸部～凸帯上端まで縦ハケの上横ヘラ磨き，凸帯下胴部外面は横ヘラ磨き，頸部内面には部分的に横ハケ残り，口縁以下内面は横方向

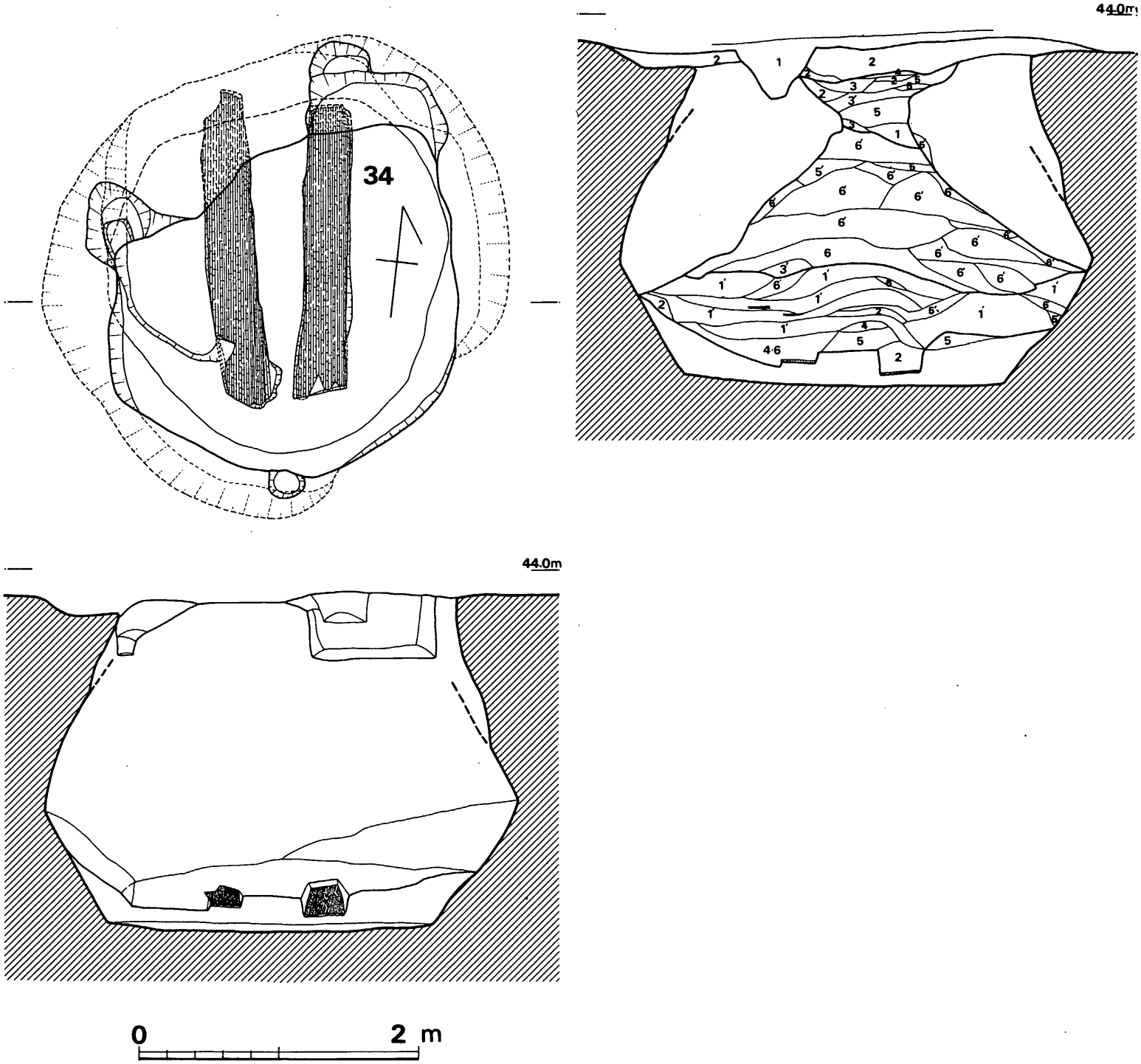


Fig. 181　第34号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

のヘラ磨きを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡褐色をなす。器壁がやや厚手で，5と同程度のやや大きめの器形となろう。8は，凸帯が全体に下へ垂れ下がり，口縁内外面には横ナデ，頸部内面には横ハケ，外面には縦ハケ，凸帯を挟んで上下間は横ナデ，以下外面胴部にはやや細かい縦ハケを施す。胎土に粗砂多く含み，焼きは良く淡茶褐色をなす。9は，口径37cmを測る大型の類で，口縁内外面横ナデ，頸部内面横ハケ，頸部～凸帯裏面にあたる内面は横ヘラ磨き，以下内面は横・斜めのナデ，頸部外面には縦ハケ，凸帯下の胴部外面には粗い横ヘラ磨きを施す。ここで注目すべきは，頸部外面に施される縦ハケである。即ち，1単位9本で幅1.5cmの工具を一定間隔（約1.5cm）おきに強く，やや斜めに施す。よって，浅いハケを一周させた後，間隔をおいて強く削り取るように同一工具で施文し，ある種の文様効果を期するものであろうと考える。胎土に粗砂多く含み，焼きは良く，内面淡茶褐色，外面には煤付着して黒～暗黄褐色を呈する。10は，鋭く高い凸帯を貼り付けており，この傾向は甕Ⅱａ類のうち胴の張るもののそれに，特に顕著である。（後出のFig.190—1をも参照のこと）口縁内外面横ナデ，頸部内面横ハケ，以下凸帯裏面にあたる部分までの内面は横ナデ，以下胴部内面斜めナデ，頸部外面縦ハケ，凸帯以下胴部には縦ナデを施す。胴外面下端に近くなると部分的に縦ヘラ磨きがみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，淡黄茶色を呈する。この土器も前述例の如く，二次焼成により破片毎に色調が著しく異なる類である。11は，口縁丸く屈曲し，端部は外方へ水平に短かく伸びる。三角凸帯は水平に貼り付けず，部分的に上下のぶれがかなり強い。口縁端部の刻目は，端部全面にわたって刻まれており，これをみる限り従来言われる板付Ⅰ式的な特徴であるが，口縁の屈曲の仕方，頸部下の刻目をつくる三角凸帯の存在，中心部のみが僅かに上げ底状に削り取られること等を併考して，ここでは甕Ⅱａ類に入れて，より新しい傾向が強いと判断したい。口縁内外面横ナデ，頸部内面横ハケ，以下内面縦ナデ，外面にはやや粗い縦ハケを下端まで施す。胎土に粗砂極めて多く含み，焼成良好内面赤褐色，外面黒～黄褐色～赤褐色を呈する。これも，前記例と同様に破片毎に二次焼成のために色調が全く異なる類である。17は，口径12.6cm，器高12.8cm，底径4.9cmの甕のミニチュアである。全体にミニチュアとしては精製であるが，法量に対して底部が異様に厚い。器面調整等は他の生活土器甕形品と殆んど変わるところは無い。口縁内外面横ナデ，頸部内面横ハケ，以下内面は磨き或いはナデでつるつるとなる。頸部外面は粗い縦ハケ，胴部外面にはやや荒く縦ハケを施す。胎土に粗石英粒を極めて多く含み，焼成良好である。このミニチュア土器も，前記例の如く，内外面にかなり強い二次焼成を受けて破片毎に色調が異なり，赤～黒褐色変する類である。

Ⅲ－Ｃ類（13）は，所謂亀ノ甲タイプのうちで刻目をつくらないものであるが，これは幾らか感じが異なる。内外面横ナデで，粗砂幾らか含み，焼きは良く，内面淡茶色，外面灰黒色を呈する。

Ⅳ類（12）は，口唇部下端に刻目を巡らし頸部下にやや幅広い沈線を巡らすものである。口縁

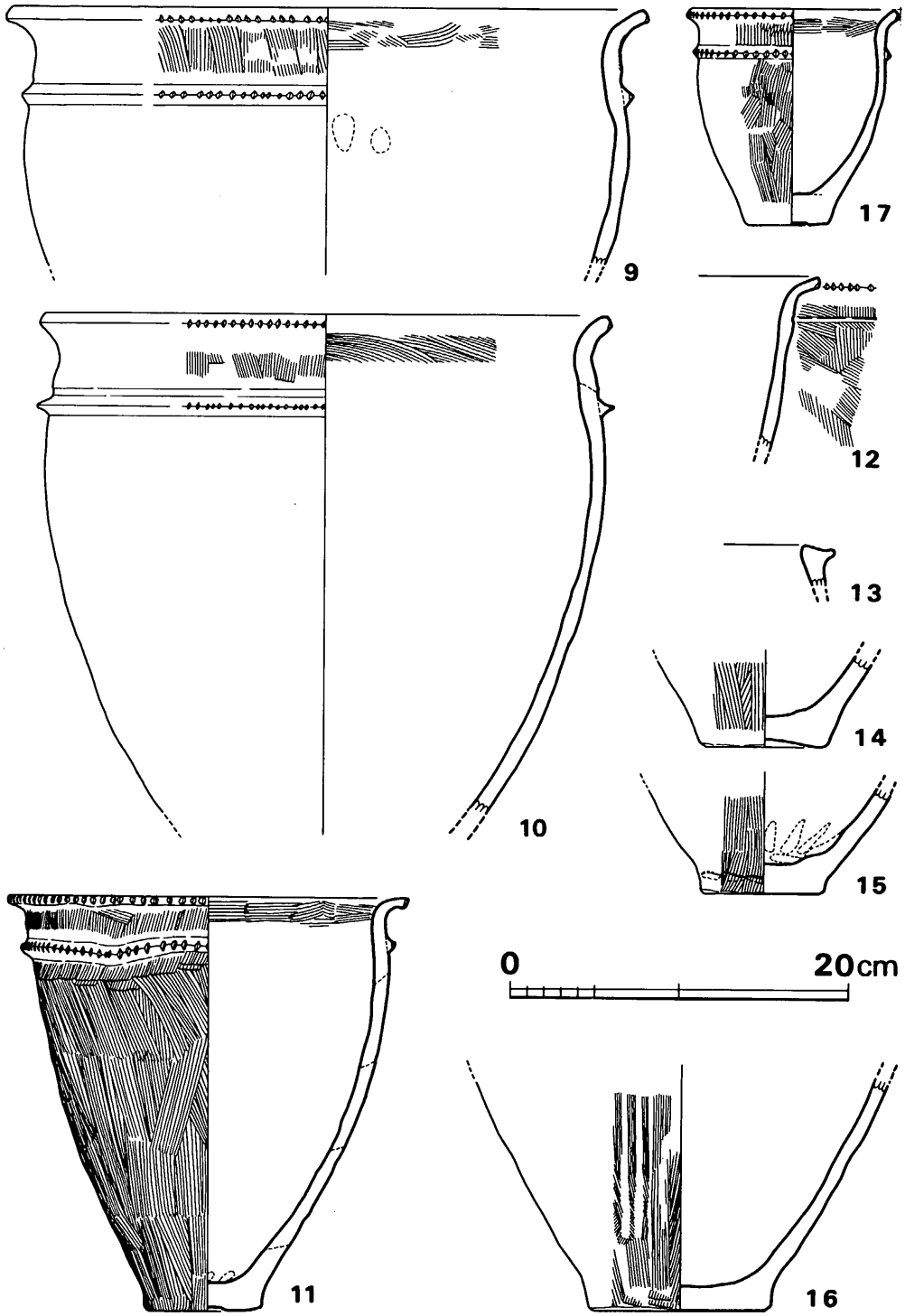


Fig.　182　　第34号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺　¼）

2 袋状竪穴群

内外面横ナデ，外面にはやや粗いハケを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で外面淡茶色，内面は強い二次焼成を受けて暗赤変する。

底部（14～16）14は，底径7.5cmのやや上げ底状となり，外面に板状工具による粗いハケ調整がみられ，下端部は横ナデを施す。粗砂多く含み，焼きは良く淡茶色を呈する。15は，底径7.1cmを測り，外面に縦ハケを，底内面には指オサエナデ上げを行なう。粗砂多く含み，焼きは良く内外面ともに強い二次焼成を受けて暗赤色変する。16は，底径10.7cmを測るやや大きめの器形で，外面縦ハケの上に縦方向ヘラ磨きを間隔をおいて施す。粗砂を多く含み，外面暗茶色，内面暗褐色を呈する。

壺（18～49）

この袋状竪穴より多くの壺が出土するが，各々口縁部・文様・大きさ等において多種多様である。ここでは個々の土器について記述するのみに留め，分類・系統等に関しては，まとめの項で詳述することとしたい。

18は，口縁下に段をつくる類で，口唇部が凹状になり横ハケを施し，内外面横ナデを行なう。胎土に粗砂多く含み，焼きは良く灰褐色を呈する。19は，口縁下にややダレた段をつくり，口唇部上下端双方に刻目を巡らす類である。口縁上面～外面段部まで横ナデ，その他内外面は横方向ヘラ磨きを行なう。粗砂多く，淡褐色をなす。20は，頸部中位で外面に段をつくり，口縁内上面に粘土を貼り付け肥厚させ，口唇部下端に刻目を施す類である。頸部内面横ヘラ磨きで，外面もヘラ磨きかと観察される。粗砂多くみられ暗茶色をなす。21は，口縁上面に粘土を貼り付けて肥厚させ、口唇部上下端に上端は左下がりに、下端は右下がりに細かい刻目を巡らす。内外面横ナデで，粗砂多く含み，焼きは良く淡褐色をなす。22は，口縁上面に粘土を貼り付け肥厚させ，口唇部下端のみに刻目を巡らす類である。口縁肥厚部～外面までは横ナデ，内面横ヘラ磨きを行なう。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で茶褐色～黒色をなす。この土器も前記の甕の項で例を示した如く，投棄後二次焼成により破片毎に色調が異なり，中には内外面ともに真黒に煤付着するものもみられる。23は，口縁等に刻目・段等を持たず，頸部と肩部の境に段をつくって沈線状としたり，強い横ヘラ押さえを行ない，段状としており，全体としては不明瞭な段をつくっている。口縁内外面横ナデ，外面横ヘラ磨き，頸部内面下半縦ナデを行なう。粗砂多く茶褐色～黒色をなす。下半は内外面とも二次焼成で真黒となる。24は，やや小型の球形に近い胴部をつくり，肩部と胴上部に2条の沈線を巡らし，その間に全体に雑な羽状文を施す。羽状文のうち下段は上段に比べやや太い沈線で粗であり，上段は細く密である。外面と頸部内面は横ヘラ磨き，胴内面は横ナデ調整を行なう。粗砂少量含み，茶褐色をなす。25は，頸部と胴部の境に沈線を巡らし，以下に羽状文を施す類である。文様はマッチ軸先状の工具で斜めに刺突状に施したものでかなり特異である。二段目と三段目の境部に部分的に極めて細い微細な線が引かれている。これは，他例の如く有軸羽状文となる類ではなく，文様

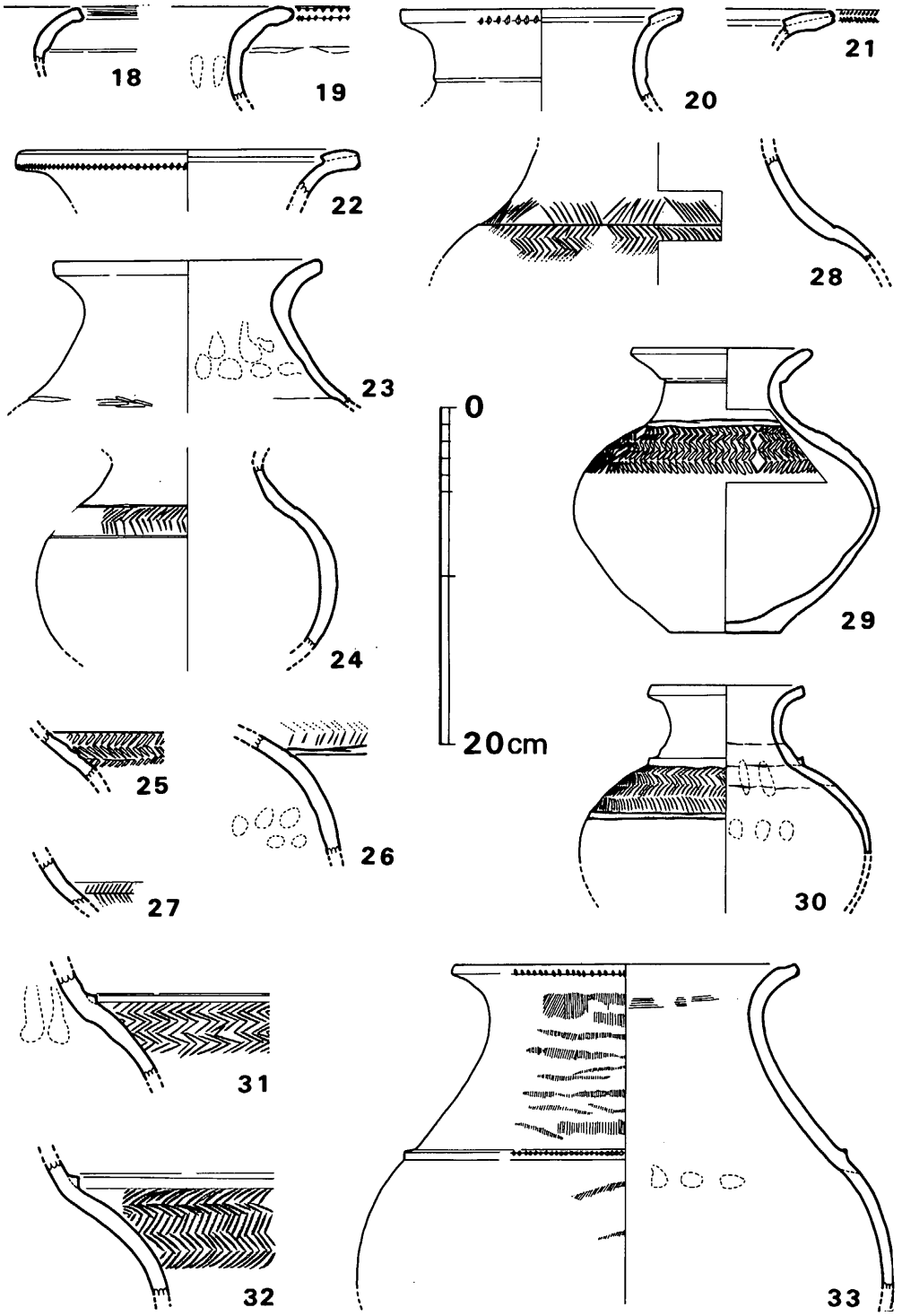


Fig. 183　第34号袋状竪穴出土土器実測図（その3）（縮尺　¼）

割り付けの為の線かと考える。内面横ナデを施し，粗砂かなり含み，焼きは良く暗褐色を呈する。**26**は，胴上半に二条の細い沈線を巡らし，以上に羽状文を施す類である。羽状文は鋭く細い沈線で，かなり乱れがみられる。外面横ヘラ磨き，内面横ナデ調整を施す。粗砂かなり含み，焼きは良く暗褐色を呈する。**27**は，頸部・胴部の境を僅かに段状に屈曲させ，以下にヘラ沈線による有軸羽状文を施す類である。外面ヘラ磨きをみせ，胎土に粗砂幾らか含み，焼成良好で暗褐色を呈する。**28**は，肩部と頸部の境目に沈線を巡らし，以下に羽状文を，直上には羽状文より長い平行沈線を斜めに互い違いに施し，あたかも重弧文を想像させるものである。頸部外面上半縦ナデ，以下外面横ナデ，頸部内面横ヘラ磨き，胴内面横ナデを施す。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で黄茶色を呈する。**29**，は口縁下で段をつくり，肩上部に2条の沈線を巡らし以下に幅広い沈線による羽状文を施す。胴はかなり張り，扁平な感を与える。口縁下の段は，段直下で削り出して沈線状となるもので，羽状文の方向転換部は全周に4ケ所みられる。器表は主に横ヘラ磨きが行なわれ，研磨は丁寧で光沢を有する。胎土に粗砂幾らかみられ，焼成良好で淡褐色～黒色を呈する。**30**～**32**は，肩部に断面三角凸帯をつくり以下に羽状文を施文するものである。**30**は，凸帯直下に貝殻腹縁による1条の沈線を巡らし，以下に羽状文を，更にその下に2条の沈線を孰れも貝殻腹縁により施文する。口唇部～凸帯までは横ナデ，口縁内面横ヘラ磨き，胴内面は横ナデが行なわれる。頸部と胴部境目の内面にはかなり明瞭な稜がみられる。頸部～胴上半の3ケ所に胎土の継ぎ目痕がみられる。胎土に粗砂少量含み，焼成良好で暗茶色を呈する。内面は二次焼成による煤で黒色となる。**31**は，凸帯下に鋭いヘラによる羽状文を施す。頸部外面横ナデ，胴外面横ヘラ磨きを行なうものである。粗砂かなり含み，焼きは良く，暗茶褐色を呈する。**32**は，凸帯下に貝殻腹縁による羽状文を施し，外面横ヘラ磨き，胴内面は横ナデ調整がみられる。粗砂多く含み，焼きは良く黄褐色をみせる。**33**は，口唇下端と肩部の三角凸帯上に刻目を施すやや大きめの器形である。凸帯はつまみ出しかと思われ，凸帯上の刻目は口唇下端のものに比べて小さく極めて密に施される。口縁内外面横ナデ，頸部内面に横ハケ残るが横ヘラ磨きで，胴内面横ナデ，頸部外面は縦ハケの上を間隔をおき横ヘラ磨きを施しハケを縞状に残しており，胴外面は横ヘラ磨き調整を行なう。頸部のヘラ磨きの技法は，それなりの文様効果を期したものの如くである。胎土に粗砂かなり含み，焼きは良く淡茶褐色を呈する。

34は，口唇部を凹状につくり，頸部と胴部の境目に削り出しの線を巡らし，胴最大幅を上位に有し，厚く僅かな上げ底状底部となる類である。沈線は明らかに段を意識した削り出しの線である。口縁内外は横ナデ，頸部内面横ハケ，頸部中位には粗い斜めハケ，以下沈線まで横ナデ，胴外面上半は単位3㎝前後の横～斜めハケ，下半では縦・斜めハケの上を縦ヘラ磨きで消す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で黄茶褐色を呈する。この壺の底部外面には不明瞭なものも含めて5ケ所の籾圧痕がみられる。（PL.91の接写を参照のこと）**35**は，頸部に縦3本の平

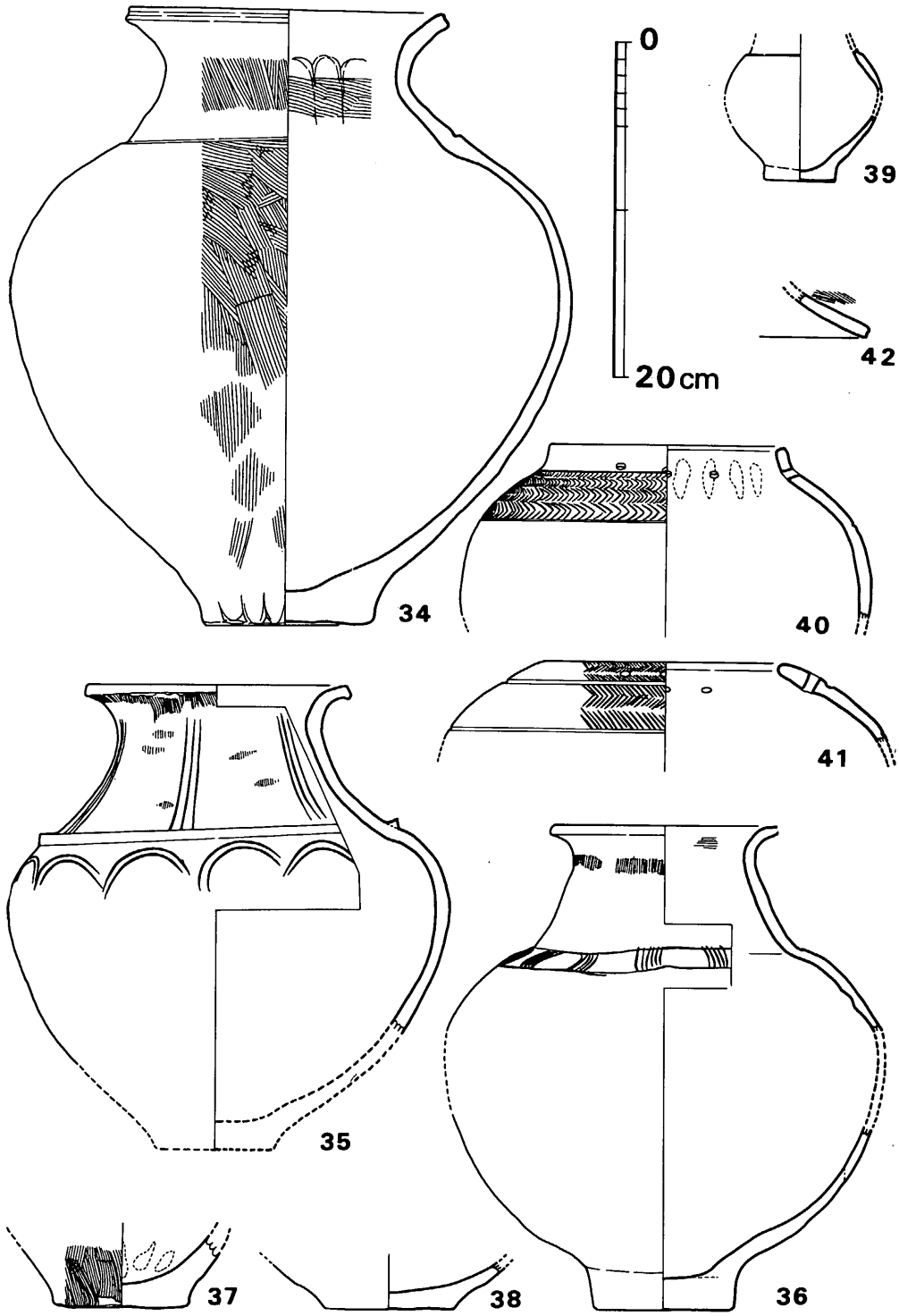


Fig. 184　第34号袋状竪穴出土土器実測図（その4）（縮尺　¼）

2 袋状竪穴群

行沈線を施し、肩部に三角凸帯を貼り付け，以下に下弦の2本重弧文を巡らし，胴最大径を肩直下に有する類である。頸部の縦3本平行線は全周に7ケ所均等に配置される。重弧文は全周に12個配され，各々文様には乱れがみられる。口縁上端内外面横ナデ，口唇直下外面縦ハケ，頸部外面は縦ハケの上を横ヘラ磨き，胴部外面は粗い横ヘラ磨き，頸部内面は縦ナデの上を横ヘラ磨き，胴部内面は横ナデの上を部分的に横ヘラ磨きを行なう。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で淡茶色～暗褐色を呈し，前記例の如く，二次焼成により破片毎に色調が異なる。**36**は，頸部と肩部の境目と胴上半に沈線を巡らし，その間に向かい合った重弧を配置する類である。沈線・文様は鋭く細い施文であり，重弧状の平行線は5～7本ずつが向かい合っており，かなり粗い施文で乱れが認められる。口縁内面は横ハケを消すように横ナデ調整，口縁下外面に1㎝幅で縦ハケをほぼ全周に残し，以下頸部～胴上半は横～斜め方向ヘラ磨き，胴下半は縦ヘラ磨き，底部付近外面は粗い横ヘラ磨き，胴内面は横ナデを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡褐色を呈する。**37**は，外面縦ハケを施し，やや内反り気味に立ち上がるが，丸味をもつ胴部を有する甕底部の可能性も強い。粗砂多く含み，焼きは良く暗褐色を呈する。**38**は，底径7.7㎝のかなり扁平な胴部をつくると思われる。外面横ヘラ磨きを施し，胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗褐色を呈する。**39**は，極めて小型の副葬小壺に酷似する器形で，肩部は削り出した段状をなす。外面丁寧な横ヘラ磨き，内面横ナデ調整を施し，胎土精良で焼きも良く淡茶色～黒色を呈する。

43は，口唇下端のみに刻目を巡らし，肩部に三角凸帯を貼り付け，以下に4本ずつの下弦の重弧文を連ねるやや大型種の類である。刻目はかなり密で，重弧文はやや細めの沈線でかなり乱れる。口縁内外面横ナデ，胴部外面は右下がり斜めヘラ磨き，内面にはすべて横ヘラ磨き調整を施す。胎土に粗砂幾らか含み，焼成良好で淡茶褐色を呈する。**44**は，口縁上面に粘土を貼り付けて肥厚させ，口唇部上下端に各々刻目を巡らし，肩部に2条の細めの沈線を施す大型器種の類である。口縁内外面横ナデ，口縁直下外面に縦ハケ残り，頸部～胴部外面には横～斜めヘラ磨き，頸部内面上半は強いナデ上げの上横ヘラ磨き，以下頸部内面横ナデ，頸部下半～胴部内面には斜めナデ上げ調整がみられる。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で茶色～淡褐色を呈する。**45**は，厚い器壁を有し，口縁上面に粘土を貼り付けて肥厚させ，口唇上・下端に刻目を施す類である。内外面横ナデで，極めて大型の器形となるものであろう。粗砂多く含み，焼きは良く暗茶色を呈する。**46**は，口縁上面を肥厚させ，口唇上・下端に刻目を施す類で大型の器形となるものである。頸部外面は縦ハケの上を上半は横ナデ，下半は横・斜めのヘラ磨きで消し，頸部内面はオサエナデ上げの上を横方向ヘラ磨きを施す。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で淡黄褐色～黒色を呈する。

47は，**48**と同一個体と考えられ，口縁上面を肥厚させ，口唇上下端に各々刻目を施し，肩部には明瞭な段をつくる大型品で甕棺に用いられ得る可能性も強いが，½残存のため明確に胴部

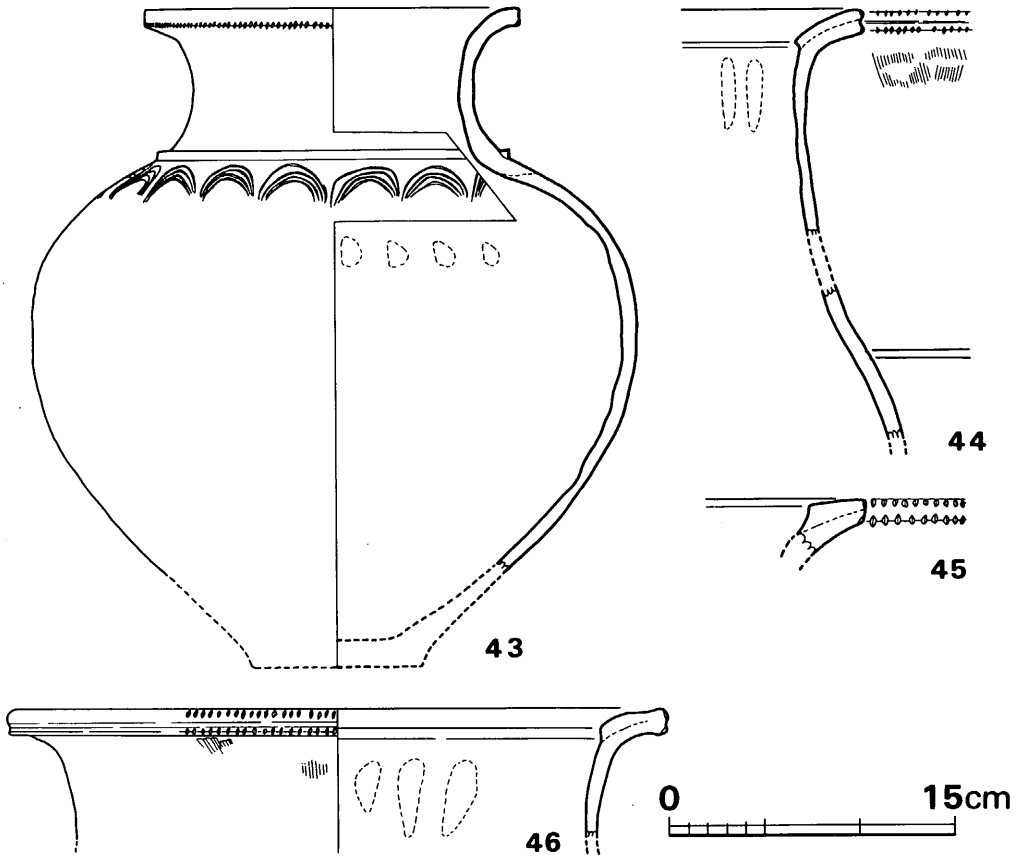


Fig. 185　第34号袋状竪穴出土土器実測図（その5）（縮尺 ¼）

穿孔の有無等を確認できないことから，ここでは他の**44**～**48**・**49**等とともに一応大型壺の類に含めておく。口縁内外面横ナデ，頸部外面上半横ヘラ磨き，下半は極めて粗い縦ハケの上を横ヘラ磨き，胴上半外面横ヘラ磨き，下半は右下がり斜めヘラ磨き，口縁肥厚部直下内面には粗い横ハケ，以下胴部上端までの内面には横ナデの上を粗い横ヘラ磨き，胴部内面には横ナデ調整を行なう。底部付近外面にはシボリ上げた様な痕跡がみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡褐色を呈する。**49**は，極大型器形の底部である。輪状の僅かな上げ底状となり，外面縦～斜めヘラ磨きを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で外面淡茶褐色，内面黒色を呈する。

無頸壷（**40**・**41**）

40は，丸く張る胴部に，短かく内傾して立ち上がる口縁をつくる。頸部のくびれの部分に2個ずつ対となる孔を穿つ。頸部直下と胴上半に細い沈線を巡らし，その間にヘラによる羽状文を密に施す。口縁内外面横ナデ，胴部外面横ヘラ磨き，内面横ナデ調整を行なう。胎土に粗砂僅かに含み，焼成良好で暗黄褐色を呈する。**41**は，内湾したままの口縁部に張る胴部をつく

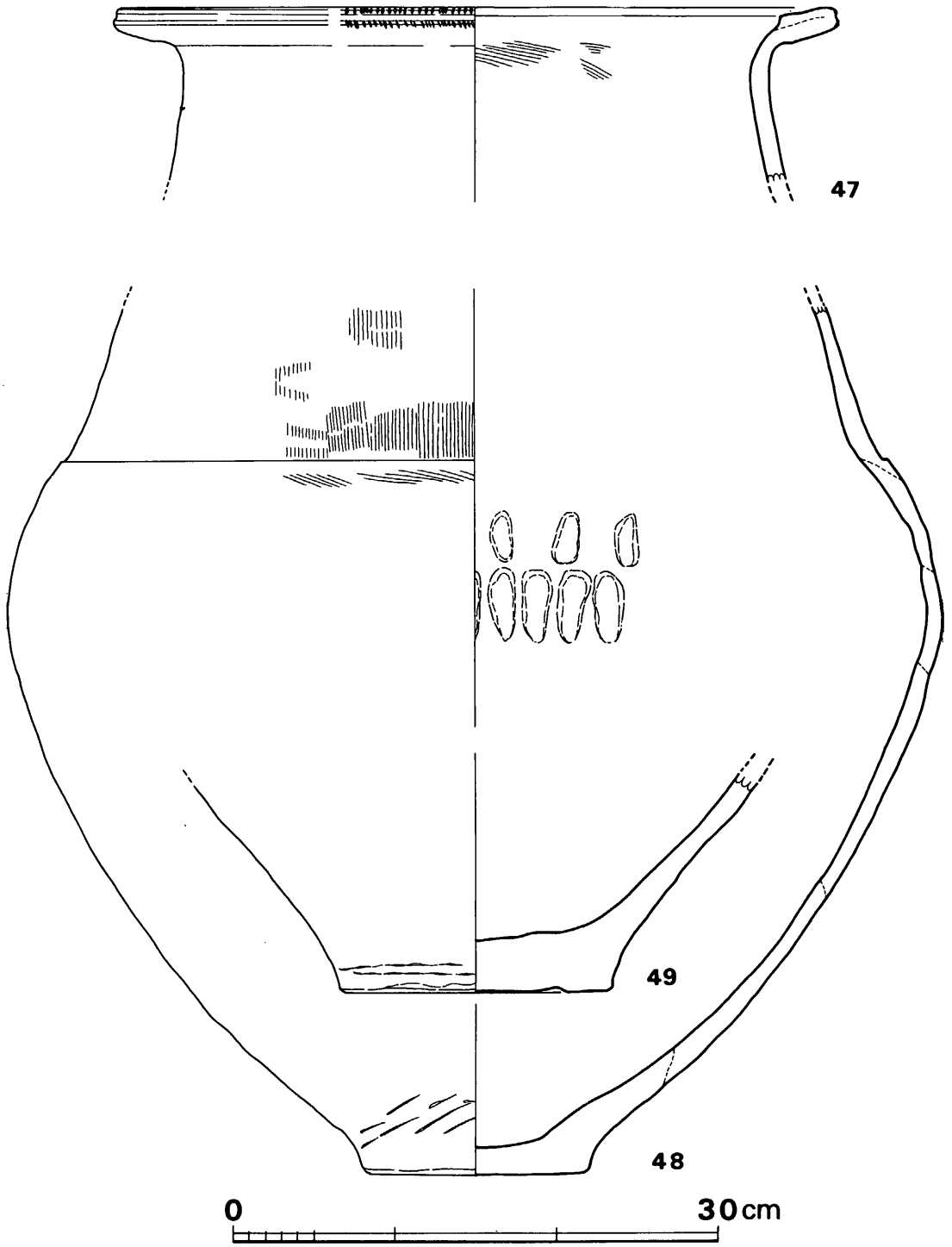


Fig. 186　第34号袋状竪穴出土土器実測図（その6）（縮尺 ¼）

る。2条の太い沈線を巡らし，直上に2個ずつの対になる孔を穿ち，沈線間とそれ以上の口縁までの間にやや細い沈線による羽状文を施す。内面は粗い横ヘラ磨きを施し，胎土に粗砂幾らか含み，焼きは良く暗黄褐色を呈する。

蓋（42）

端部外面を凹状にさせる蓋形土器の小破片で，かなりの大口径のものとなる。孔等の有無は明確でない。端部内外面横ナデ，外面にハケ調整を行なう。胎土に粗砂多く含み，焼きは良く茶褐色を呈する。

以上の第34号袋状竪穴出土の土器は殆んど総て，器表の残存状態が極めて良好であった。二次焼成にあっている為か，また，灰炭化物層が大部分を占めており，その中に埋没されていたためかと考えられる。

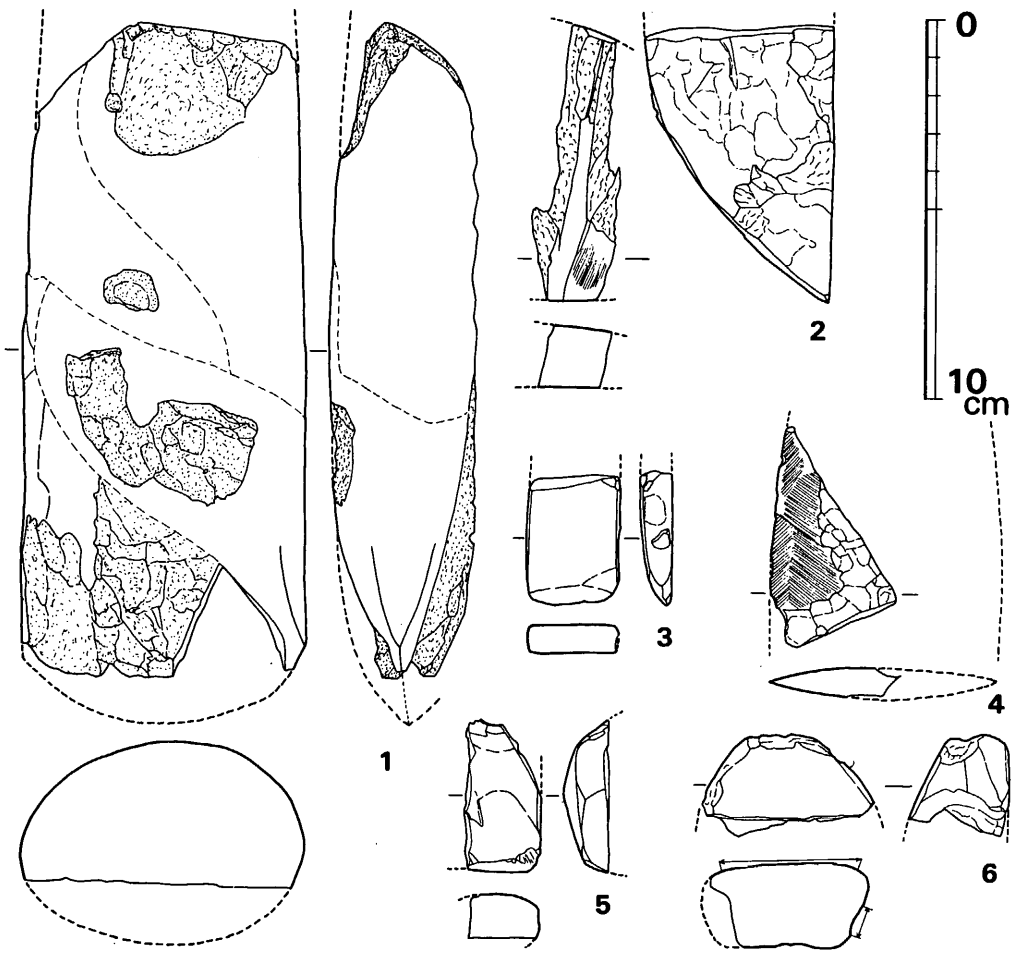


Fig. 187　第34号袋状竪穴出土石器実測図（その1）（縮尺 ½）

自然遺物（獣骨片・炭化米・炭化堅果類・炭化板材）

この第34号袋状竪穴からは，骨粉状となった獣骨少量と炭化米5勺分，炭化堅果類3ℓ分が中層～下層の埋土に混入して出土した。炭化米，炭化堅果類は現在専門研究者の方々に依頼して鑑定・分析中であり，この報告書掲載に間に合わなかった。残念であるが，今後刊行予定の報告書中に補記したいと考えている。

また，炭化した板材状の木質が床面より浮いた状態で平行して2枚検出された。(Fig.181, PL.186) これらは残りが極めて悪く，取上げ不能であった。出土状態からみると，或る程度壁面が崩れて埋まった後，板を平行に置きその上に貯蔵するものを載せたものか，或いは，棺材の一部となるものか，または単に投棄したに過ぎない類なのか全く決定打を欠くところである。

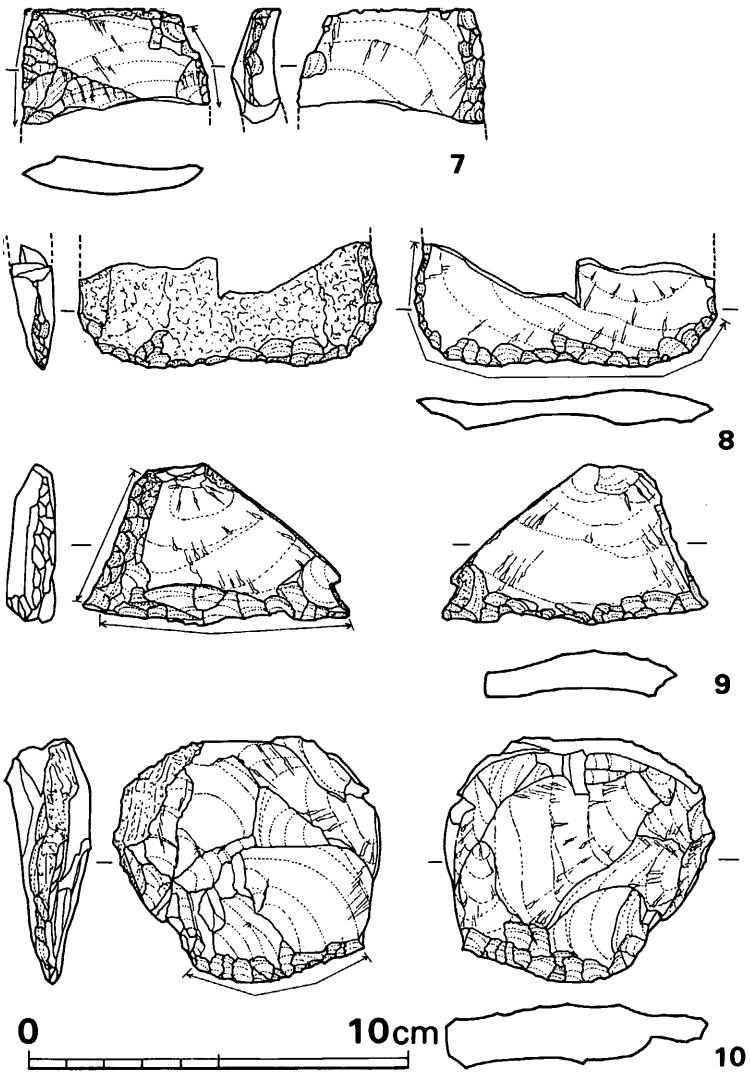


Fig. 188　第34号袋状竪穴出土石器実測図（その2）（縮尺 ½）

Tab. 38　第34号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
187の1	磨製石斧	玄武岩	(171.0)	75.0	(38.0)	(798)	不明		全面研磨・火をうける太型蛤刃と推定	123

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　考	台帳番号
187の2	磨製石斧	粘板岩	(72.5)	(23.0)	(49.5)	(88.6)	(13.0)		全面研磨・火をうける柱状片刃石斧	114
187の3	磨製石斧	粘板岩	(34.0)	24.5	9.0	(12.4)	24.0		全面研磨・扁平片刃石斧	121
187の4	磨製石剣	頁岩	(58.0)	(33.0)	(8.0)	(11.8)				120
187の5	砥石（？）	凝灰岩質	(39.5)	(20.0)	(11.5)	(13.4)			全面研磨	122
187の6	磨石	砂岩	(26.0)	(44.5)	(26.0)	(24.9)			表面・右側面を研磨大部分欠損	119
188の7	スクレイパー	安山岩	(30.0)	(49.0)	10.0	(17.2)	(52.0)	B	片面よりリタッチ	117
188の8	スクレイパー	安山岩	(32.0)	79.0	(11.5)	(21.3)	(107.0)	C	両面よりリタッチ	118
188の9	スクレイパー	安山岩	42.0	69.0	13.0	31.6	105.5	C	両面よりリタッチ	115
188の10	スクレイパー	安山岩	64.0	70.5	22.0	89.0	52.5	A	両面よりリタッチ	116

第35号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.189)

壺

底径９．３㎝を測り，外面は荒い横ヘラ磨き調整が施される。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡白褐色を呈する。

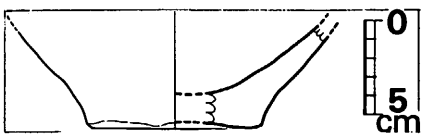


Fig. 189　第35号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 ¼）

第36号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.190)

甕（**1**～**3**）

1 は，かなり張る胴部上端に高く鋭い三角凸帯２条を貼り付け，口唇下端部と凸帯上に斜めの刻目を巡らす類である。底部は中心寄り部が削り取られて僅かな上げ底となる。下部の凸帯はその両端が継がらず上下にずれる。口縁内外面横ナデ，頸部内面横ハケ，凸帯上方外面はハケの上を横ナデ，凸帯下胴部外面はやや細かい縦ハケが施される。胎土に粗砂多く含み，焼成やや良好で，淡褐色～茶褐色を呈する。　**2** は，口唇下端と三角凸帯上に刻目を施す類で，外面煤付着する。胎土に粗砂幾らか含み，焼きは良く暗褐色を呈する。**3** は，口径18.5㎝を測り，「く」の字状に屈曲した口縁端等に刻目をつくらない類である。口縁内外面横ナデ，胴外面ヘラ磨きかと思われる。胎土に粗砂かなり含み，焼成やや不良で暗褐色を呈する。

壺（**4**～**6**）

4 は，余り張らない胴部で頸部に断面「コ」の字状凸帯をつくる類である。凸帯は部分的に三角凸帯となり，全体に器表の剝落が著しい為，凸帯の原状，刻目の有無，器面調整等全く不明である。粗砂極めて多く含み，焼きは良く黄褐色を呈する。**5** は，底径6.8㎝を測り，全体に上げ底状となる。底部近くで急にすぼまる形態をなす。内外面に指オサエがみられ，粗石英

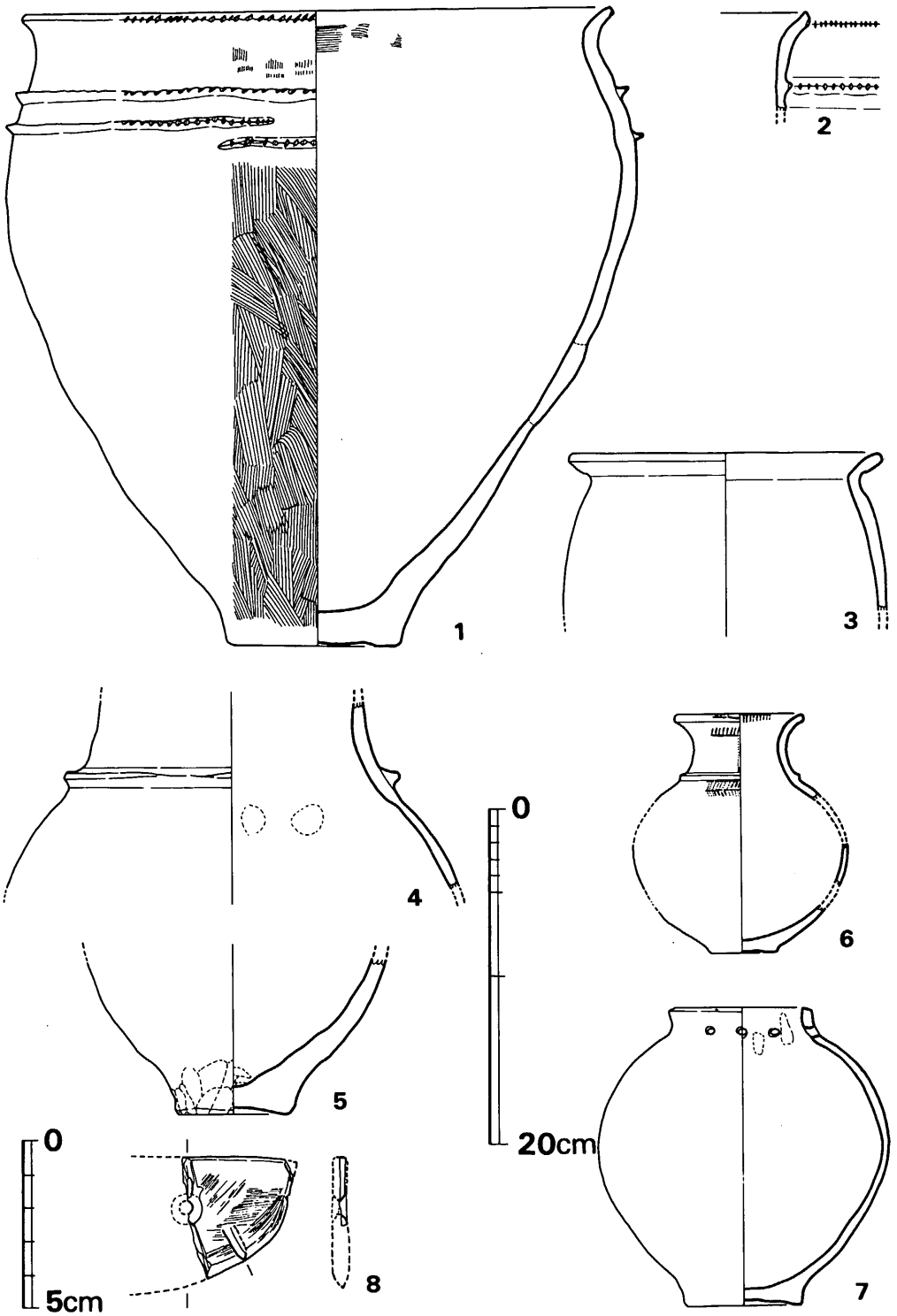


Fig. 190　第36号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺 ¼・8のみ½）

粒を極めて多く含み，焼きはやや良好で赤茶色を呈する。**6**は，口縁内面に短かい縦線を連ね，頸部外面に羽状文様を，更に三角凸帯直下に有軸羽状文を，孰れも丹でもって彩る小壺である。底部は僅かな上げ底となり，円盤貼付状の外観をみせる類ではない。丹彩は図示した部分のみで，不明瞭な部分が多く，頸部に縦3本線が施される可能性も残る。

短頸壺（**7**）

ほぼ直立した短かい頸部直下に，2個ずつの対となる孔が穿たれる。胴部は球形に張り，底部は上げ底状となる。外面ヘラ磨きで内面は丁寧にナデているようである。胎土に粗石英粒かなり含み，焼成良好で黄褐色～赤黒色（二次焼成）を呈する。

Tab. 39　第36号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	研磨	備　　考	穿孔	孔径	台帳番号
190の8	石包丁	硬質砂岩	(36.0)	(33.0)	(2.5)	(6.2)	(42.5)	表面	裏面ははげる	両面	40	124

第37号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.191)

甕

ややゆるやかに開いた口縁外端部に太めで深い刻目を巡らし，胴は張らない類である。頸部内面は粗い横ハケ，以下内面はナデ，外面は器壁剝落しているが僅かに縦ハケが残る。粗砂多く含み，焼きは良く暗褐色を呈する。

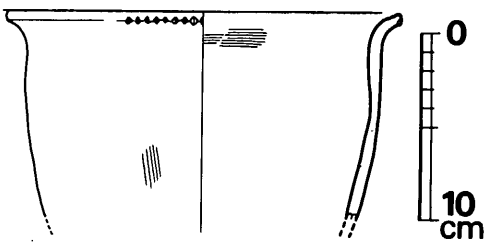


Fig. 191　第37号袋状竪穴出土土器実測図
（縮尺　¼）

第39号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.193)

甕（**1・2**）

1は，底径7.0cmを測り，外面細かい縦ハケを施し，下半は縦ヘラ磨きでハケを消し，下端部は横ヘラ磨きが行なわれる。粗砂多く含み，淡褐色をなす。**2**は，底径6.3cmを測り，外面にやや細かい縦ハケを施す細身の器形をなす。粗砂が多くみられ，焼きは良く，外面赤茶色，内面暗褐色をなす。

Tab. 40　第39号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類		備　　考	台帳番号
193の3	打製石鏃	黒曜石	(17.5)	(13.5)	3.5	(0.7)		Ia	C	先端欠損	125
193の4	スクレイパー	安山岩	45.5	37.5	9.0	17.7	49.5	A		原石粗面あり	126

2 袋状竪穴群

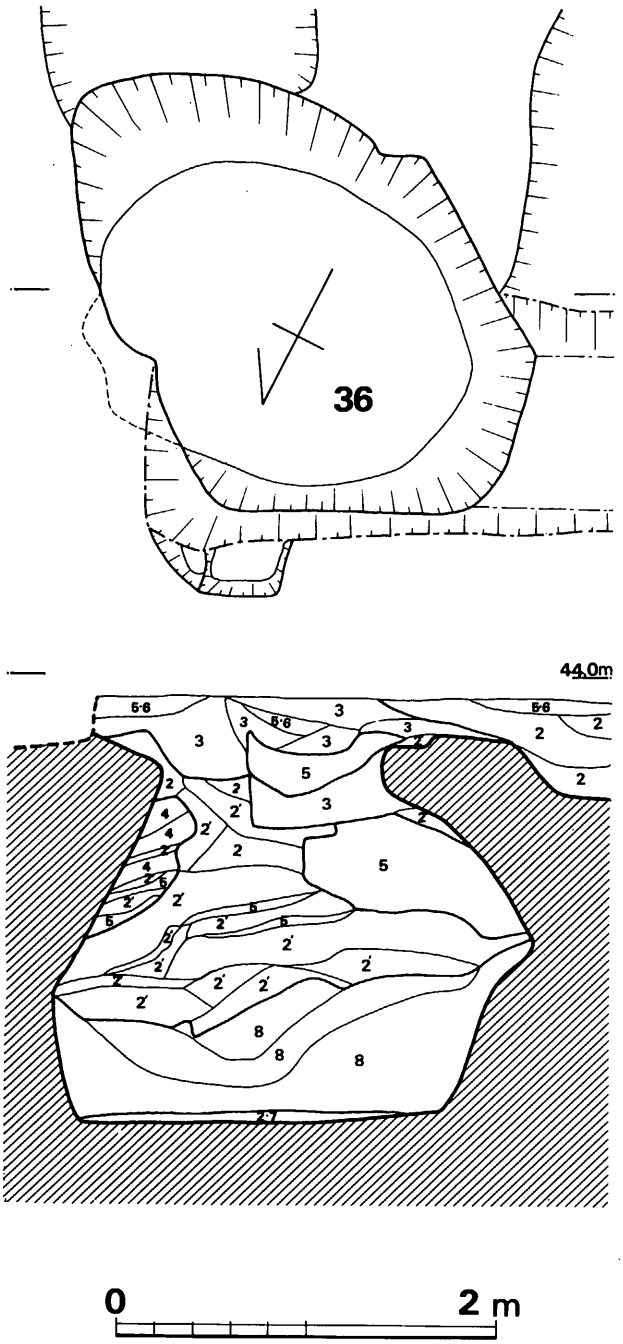


Fig. 192　第36号袋状竪穴実測図（縮尺　1/40）

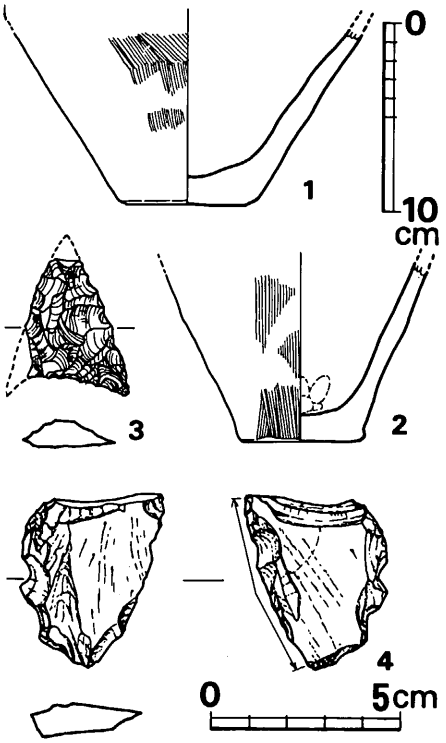


Fig. 193　第39号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　1/4・3は実大・4は1/2）

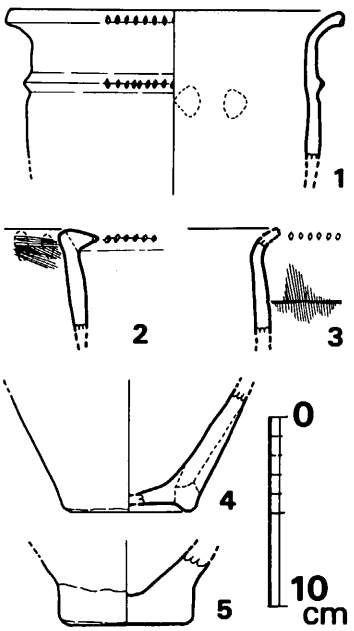


Fig. 194　第40号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺　1/4）

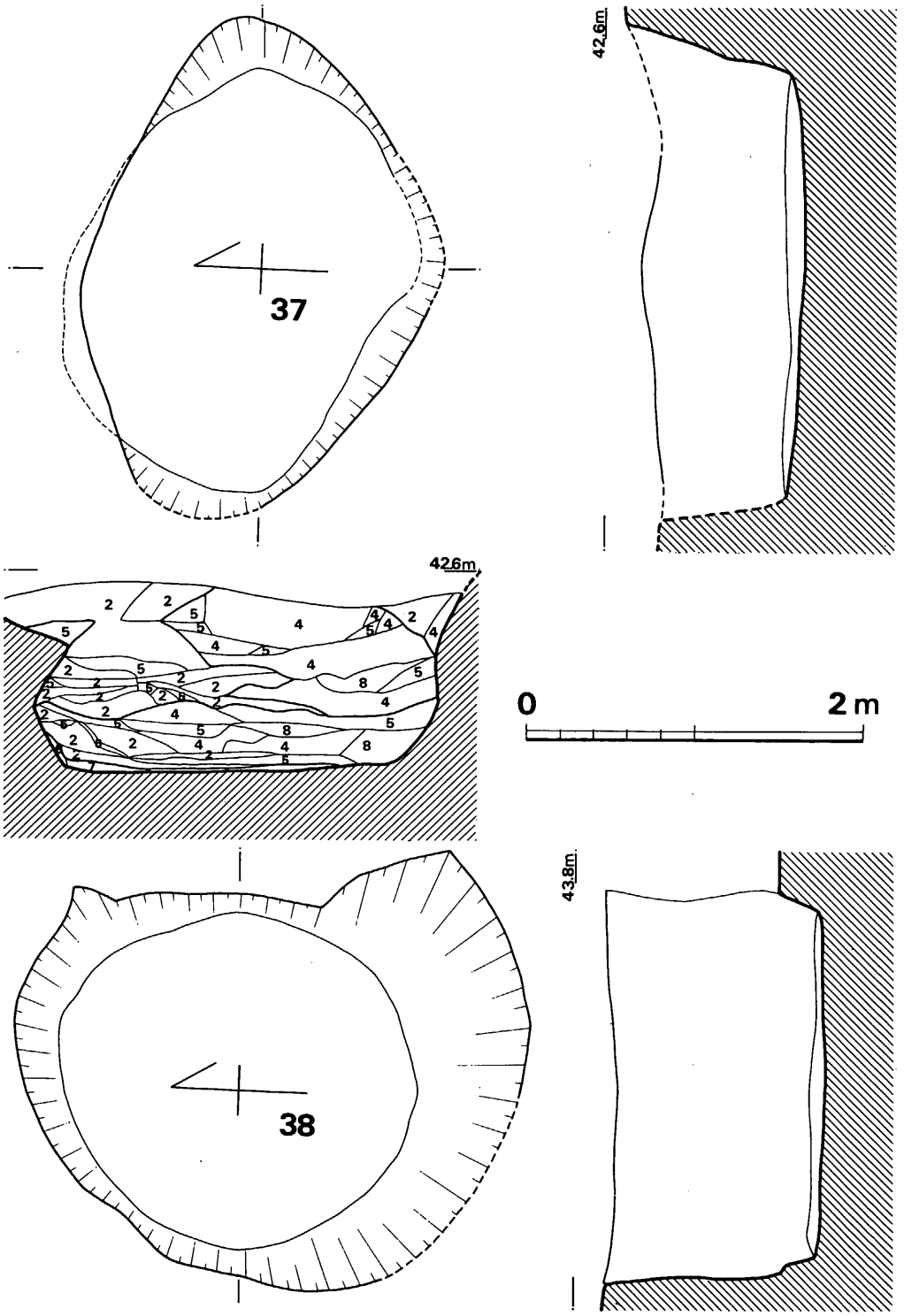


Fig. 195　第37・38号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

2 袋 状 竪 穴 群

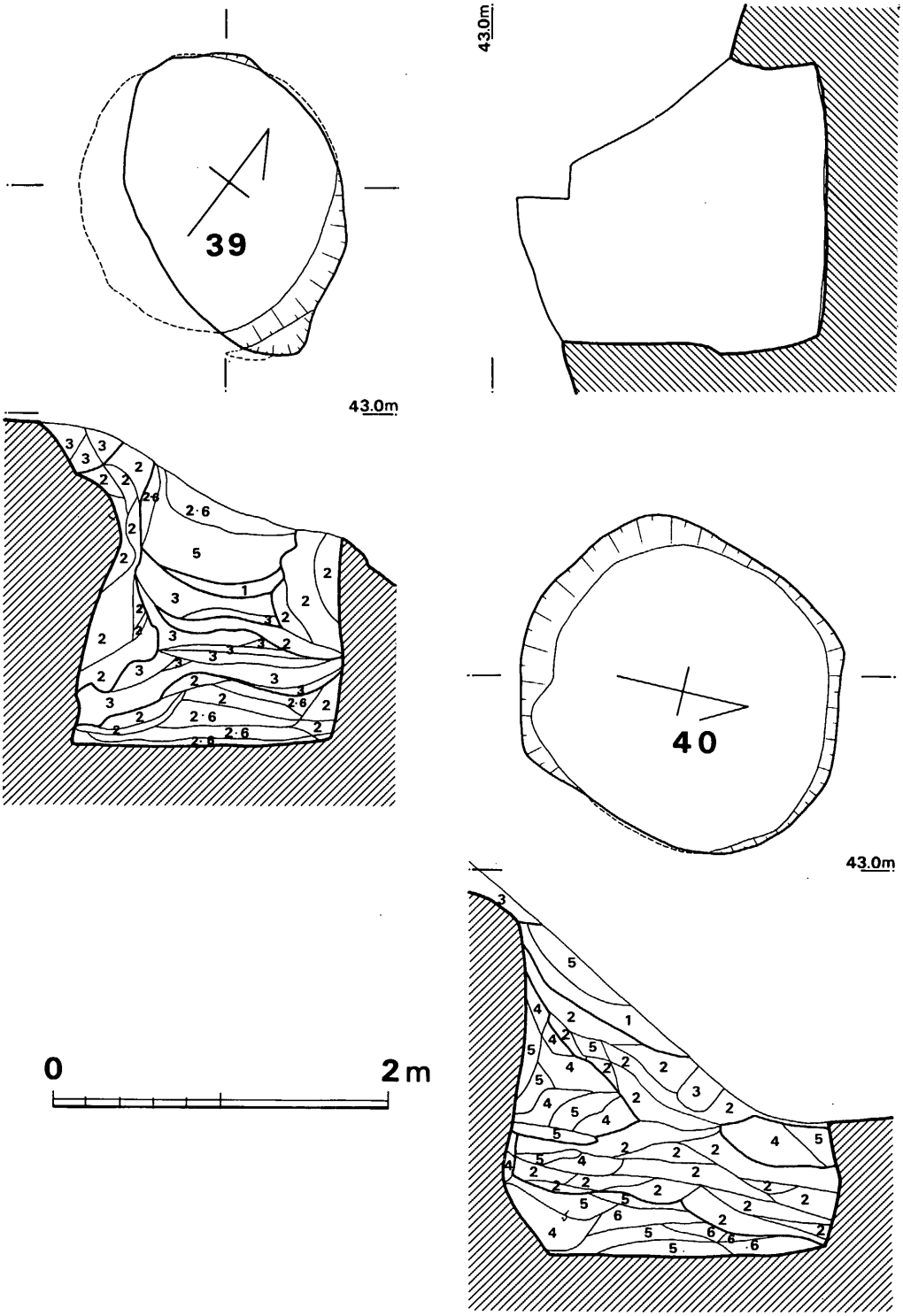


Fig. 196　第39・40号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

第40号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.194)

甕（1～4）

1は，口縁外端部と凸帯上に刻目を施す類で，胴の張らない小型の器形となる。粗砂かなり含み，焼きは良く内面暗黄褐色，外面煤で真黒けである。凸帯は貼り付けではないようである。2は，亀の甲タイプで，内面上端に横ハケが残る。やや胴の張る器形で，粗砂多く含み，焼成良好で淡茶色を呈する。3は，頸部下に細かい縦ハケの後，細かい沈線を巡らす類である。粗砂多く含み，二次焼成を受けて赤変をみせる。4は，底径6.6cmを測り，全体に上げ底状となる。外面は丁寧なナデ或いは磨きかと思われる。粗砂多く含み，焼きは良く外面赤茶色，内面暗褐色を呈する。

壺（5）

底径7.0cmを測り，厚手の器壁を有する。粗砂多く含み，焼成良好で外面暗茶色，内面黒褐色を呈する。

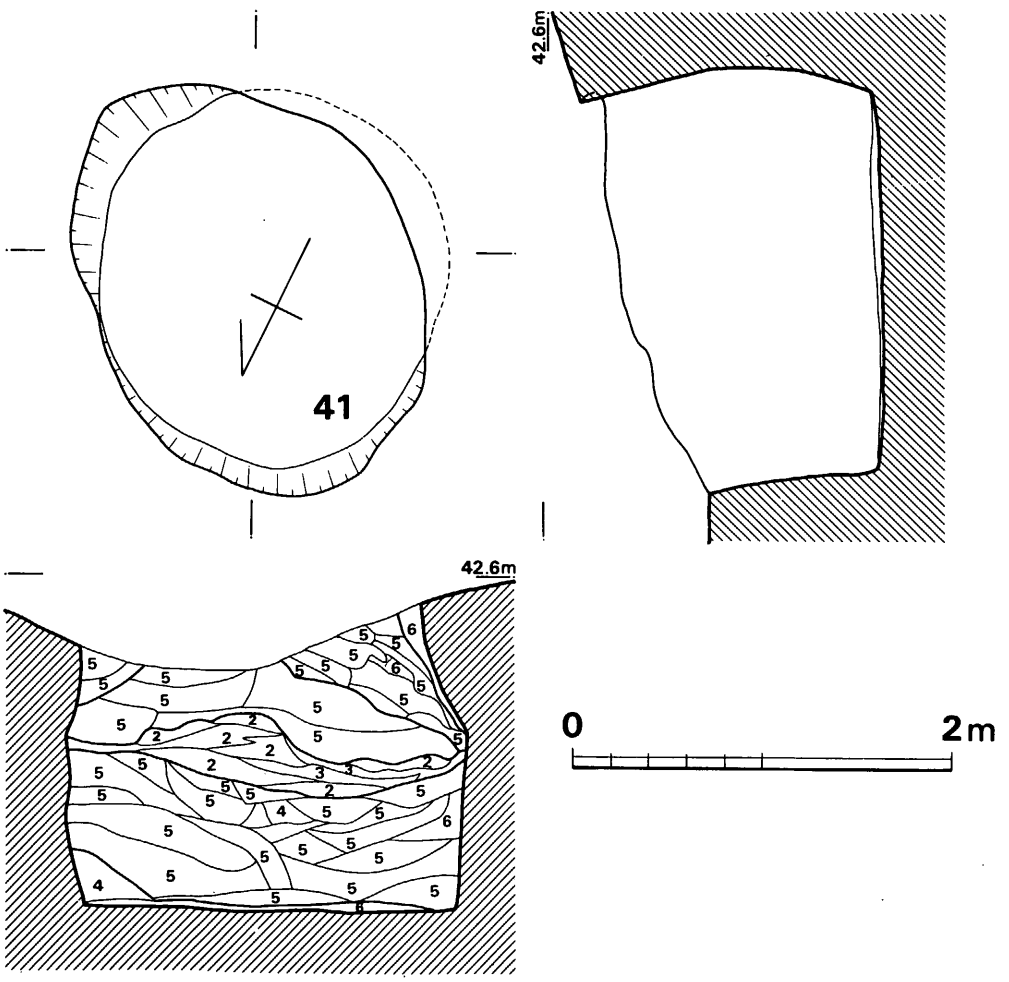


Fig. 197　第41号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

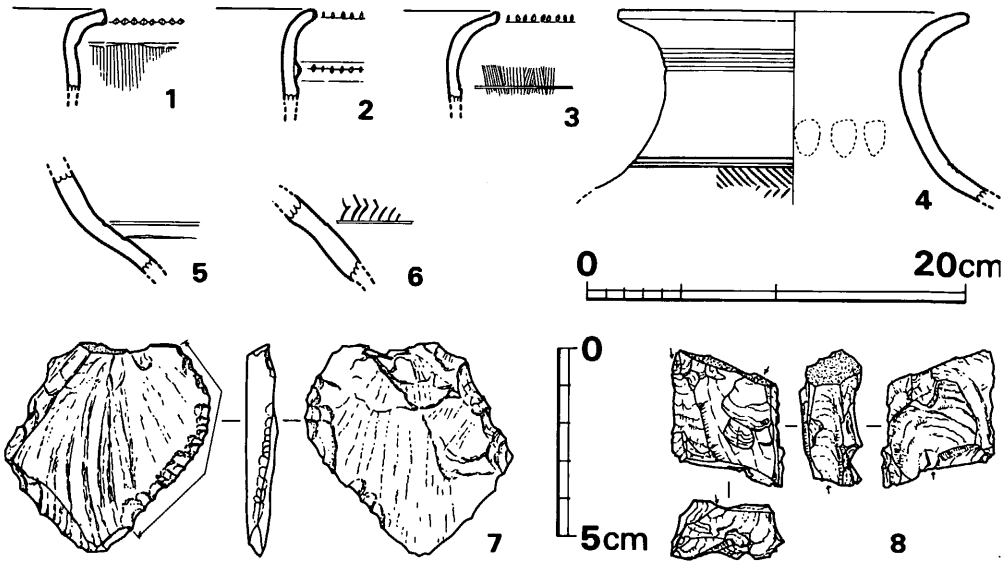


Fig. 198　第41号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・石器½）

第41号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.198)

甕（1～3）

1は，口唇下端に太めの刻目を施し，頸部下に段をつくる類である。段以下外面には粗い縦ハケを施す。胎土に粗砂かなり含み，焼きはやや良く暗褐色を呈する。2は，口唇下端と貼り付け三角凸帯上に各々刻目を巡らす類である。粗砂多く含み，焼きは良く暗褐色をみせる。3は，口唇部に刻目を施し，頸部下に沈線1条を巡らす類で，口縁内外面横ナデ，外面にはやや粗い縦ハケが行なわれる。焼きは良く，内面暗褐色，外面は煤で暗黒色を呈する。

壺（4～6）

4は，口縁直下外面と頸部下端とに各々3条の沈線を巡らし，更に肩部には貝殻腹縁による羽状文が施文される。内面ヘラ磨き，外面頸部上半は横ナデ，下半はヘラ磨きを行なう。胎土に粗砂多量含み，焼成良好で黄茶褐色を呈する。5は，肩部に2条の沈線を巡らし，外面横ヘラ磨きを施す。粗砂多く含み，焼成やや不良で外面黄褐色，内面黒色を呈する。6は，胴上半に1条の沈線を巡らし，以上にヘラによる羽状文を施す類である。粗砂かなり含み，焼きは悪く黒色を呈する。

Tab. 41　第41号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　考	台帳番号
198の7	スクレイパー	安山岩	55.5	53.5	8.0	27.7	57.5	C	片面リタッチ 原石粗面あり	127
198の8	石　核	安山岩	35.5	30.0	16.0	16.4			小型の石核 原石粗面あり	128

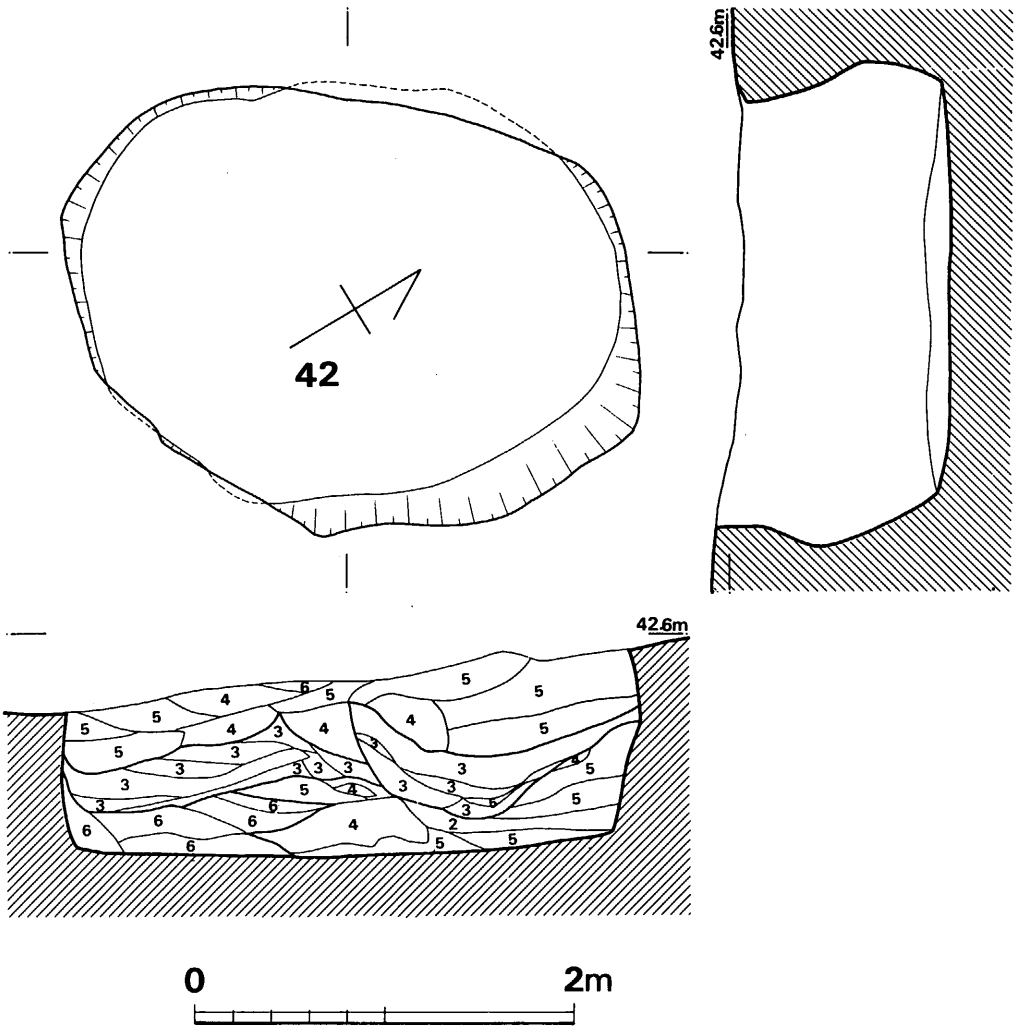


Fig. 199　第42号袋状竪穴実測図（縮尺　1/40）

第42号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.200)

甕（1・2）

1 は，底径7.5cmを測り，胎土に粗砂多く含み，焼きは良く外面赤茶色，内面黒色を呈する。**2** は，底径6.5cmを測り，僅かな上げ底となる。外面には細かい縦ハケがみられ，内面には炭化物付着して暗褐色を呈する。

壺（3～5）

3 は，肩部に沈線を巡らし，直下に貝殻腹縁による羽状文を施す類である。粗砂かなり含み，焼きは良く淡褐色をみせる。**4** は，肩部に細いヘラによる有軸羽状文を施す類で，外面は

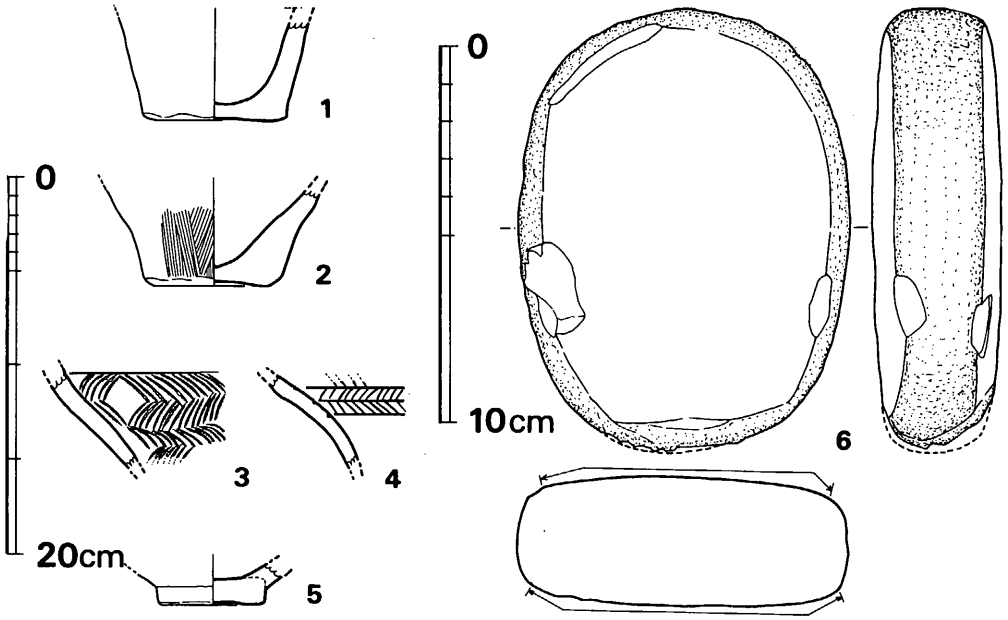


Fig. 200　第42号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・石器½）

ヘラ磨きを行なう。粗砂かなり含み，焼きは良く茶褐色を呈する。**5**は，円盤貼付け状の底部で，径5.6cmを測り，僅かな上げ底状となる。胎土精良で，焼成やや不良，暗茶褐色を呈する。

Tab. 42　第42号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	研　磨	備　考	台帳番号
200の6	磨　石	花崗岩(？)	116.5	87.0	34.0	(639)	表・裏面	ほぼ完形	129

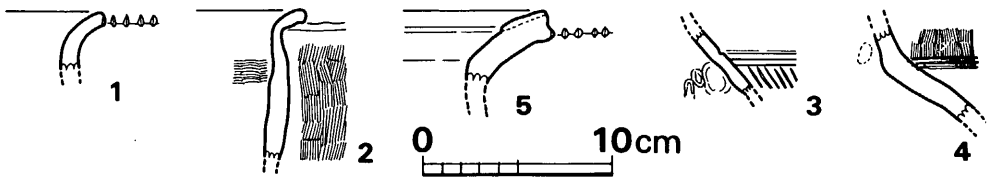


Fig. 201　第43号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺　¼）

第43号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.201・202)

甕（**1**・**2**）

1は，口唇下端に刻目を施し，内外面横ナデで外面煤付着する。焼成良好で淡褐色を呈し，胎土に粗砂多く含む。**2**は，屈曲して外反する口縁端には明らかに刻目がみられない類である。口縁内外面横ナデ，外面縦ハケ，内面一部に横ハケを施す。粗砂多く含み，焼きは良く，

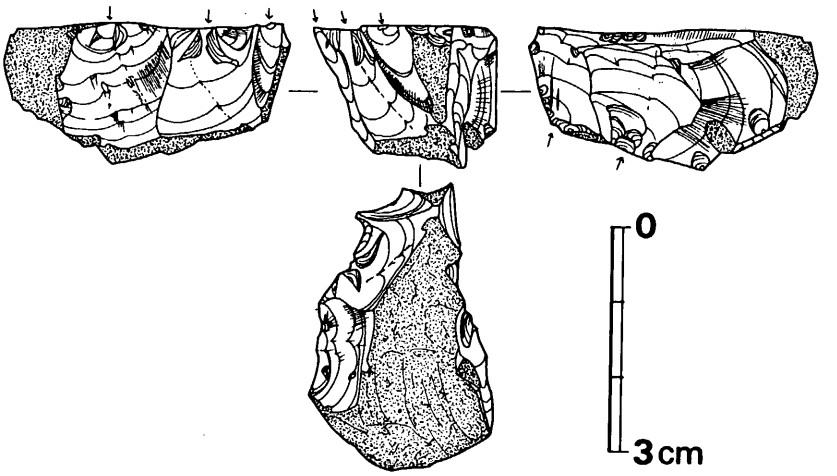


Fig. 202　第43号袋状竪穴出土石器実測図（実大）

茶褐色を呈する。

壺（3～5）

3は，肩部に沈線状の段を削り出し，以下に2条の沈線を巡らし，その下にヘラによる羽状文を施すものである。外面ヘラ磨き，内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂少量含み，焼きは良く淡黄褐色をなす。4は，頸部と肩部の境目で屈折し，肩に3条の沈線を施し，頸部外面には細かい縦ハケを施す。粗砂多く含み，焼きはやや悪く黄白褐色を呈する。5は，厚い器壁を有し，口縁上面を肥厚させ，口唇下端のみに刻目をつくる類である。胎土に粗大石英粒かなり含み，焼成やや良好で外面黄褐色，内面灰褐色を呈する。

Tab. 43　第43号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　　考	台帳番号
202	石　核	黒曜石	37.5	24.5	18.5	15.3	小型の石核，上面も原石粗面，6ヵ所はぐ	130

第44号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.204)

甕（1～5）

1は，口唇部下端のみに刻目を施し，外面に粗い斜めハケ調整が行なわれ，胴の張らない器形となる。粗砂多く含み，焼きは良く内面黄白色，外面は煤で黒褐色変する。2は，口唇下端と三角凸帯上に刻目を施す類で，頸部内面横ハケ，口縁内外面横ナデ，胴部には粗い縦ハケ調整を行なう。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で内面淡茶色，外面には煤が付着する。3は，口唇下端に刻目を施し，頸部下に沈線を巡らす類である。頸部外面には強い横ヘラ押圧がみら

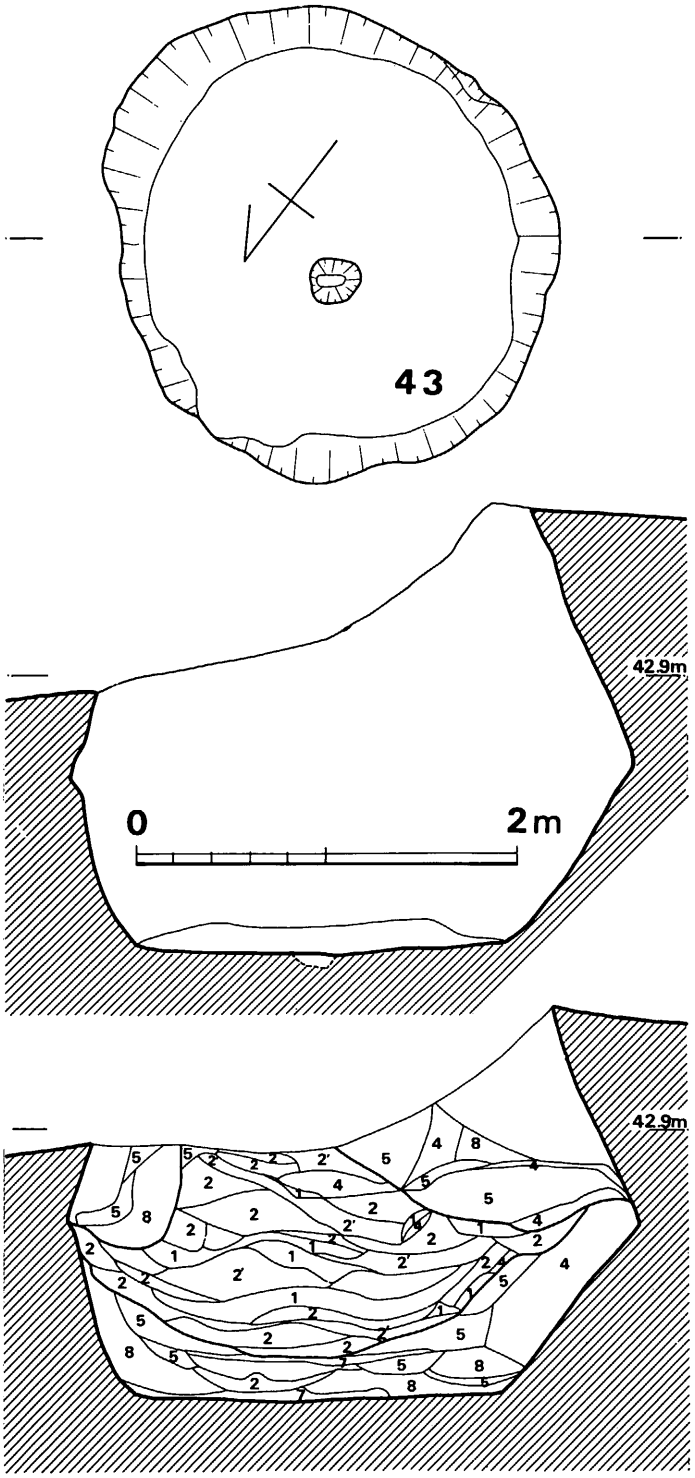


Fig. 203　第43号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

れ，以下外面は粗い縦ハケを行なう。胎土に粗砂幾らか含み，焼成やや良く，内面暗黄褐色，外面には煤が付着する。**4**は，口縁外端に刻目を施す亀ノ甲タイプである。粗砂多く含み，焼きは良く黄白色を呈する。**5**は，底径8.2cmで粗砂極めて多く含み，焼きは良く赤茶色をなす。

壺（**6**～**9**）

6は，上層下部より出土した完形品である。肩に三角凸帯をつくり，胴がかなり張り，扁平な感を与える器形である。頸部内面横方向ヘラ磨き，口縁外面～頸部外面～胴上半外面は横ヘラ磨き，外面胴下半は粗いヘラ磨きとなる。口唇部は横ナデで面取り状に明確な面をなす。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，茶褐色を呈する。**7**は，口縁が外方へ屈曲して水平に開く類で，少なくとも口縁～頸部周辺には文様はみられない。口縁内外面横ナデ，外面ヘラ磨きを行なう。胎土に粗石英粒が

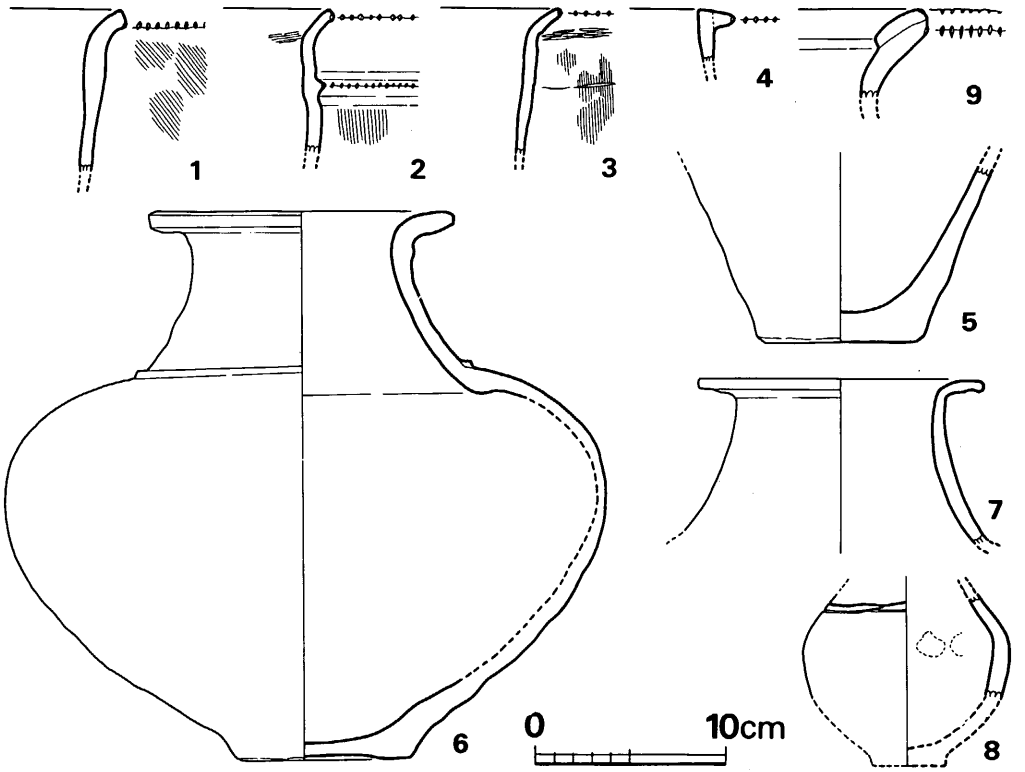


Fig. 204　第44号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 ¼）

幾らかみられ，焼きは良く淡黄茶色を呈する。**8** は，小型品で肩部に 2 条の沈線を巡らす類である。外面は横方向の粗いヘラ磨きで，粗砂幾らか含み，焼きは良く外面暗黒色，内面茶色をみせる。**9** は，口縁上端内面に粘土を貼り付け肥厚させ，口唇上下端に刻目を施す類である。大型品となるもので，内面には横ナデが認められる。粗砂多く含み焼成良好，茶褐色を呈する。

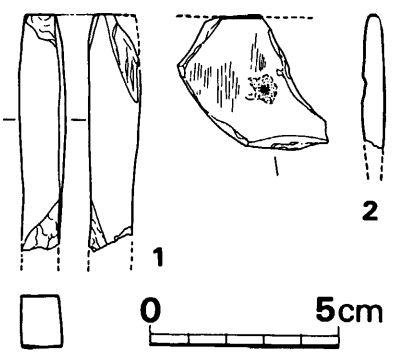


Fig. 205　第45号袋状竪穴出土石器実測図（縮尺 ½）

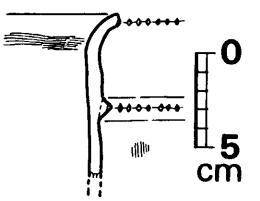


Fig. 206　第46号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 ¼）

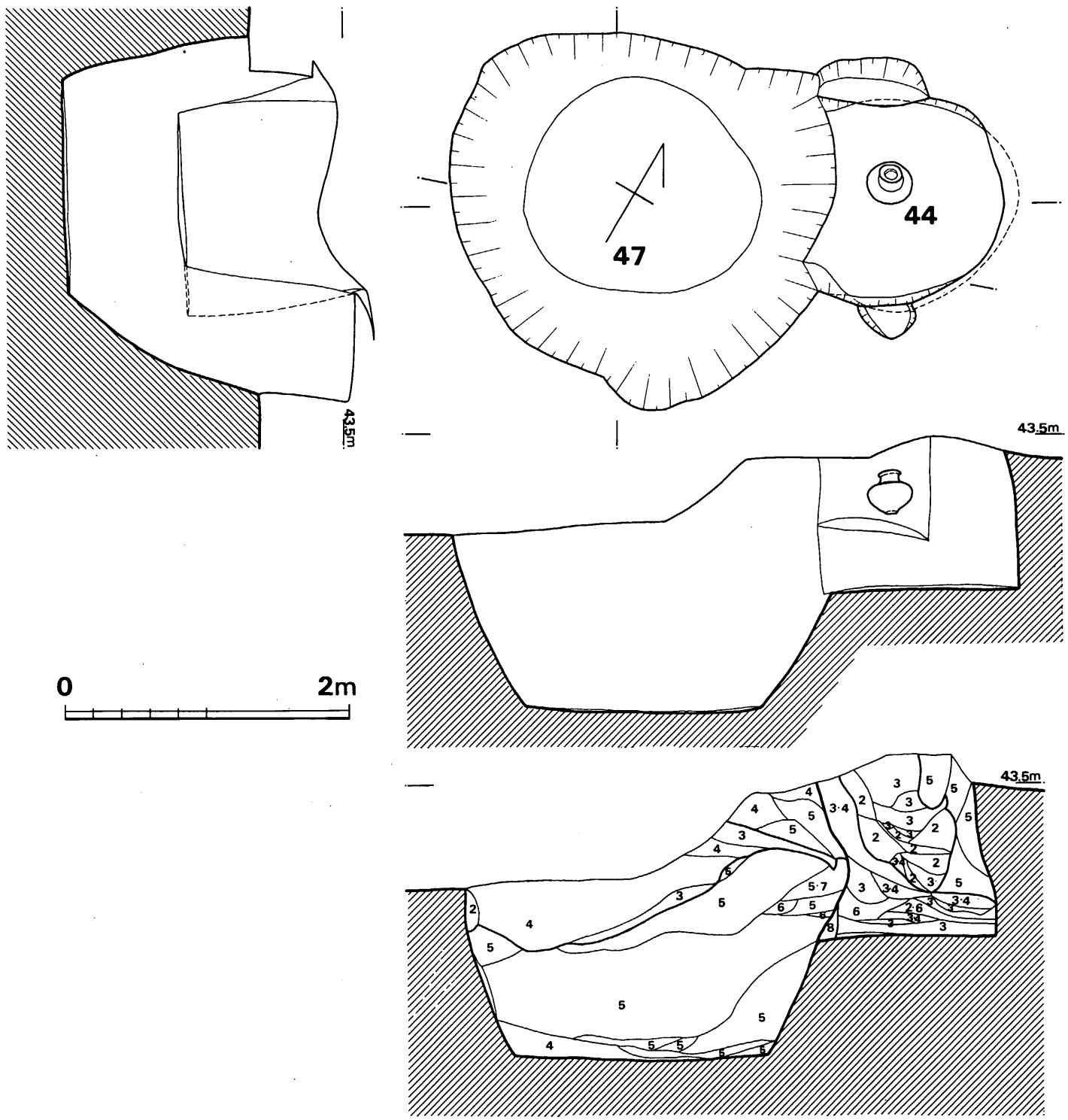


Fig. 207　第44・47号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

2 袋 状 竪 穴 群

第45号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.205)

Tab. 44 第45号袋状竪穴出土石器一覧表 (単位：mm・g)

Fig. No.	器 種	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	刃部長	研磨	備 考	台帳番号
205の1	石のみ	砂 岩	(62.5)	12.5	13.5	(15.5)	不明	全面		131
205の2	石包丁	砂 岩	(35.0)	(40.0)	6.0	(10.5)	不明	全面	未製品，穿孔部らしきものあり（片面）	132

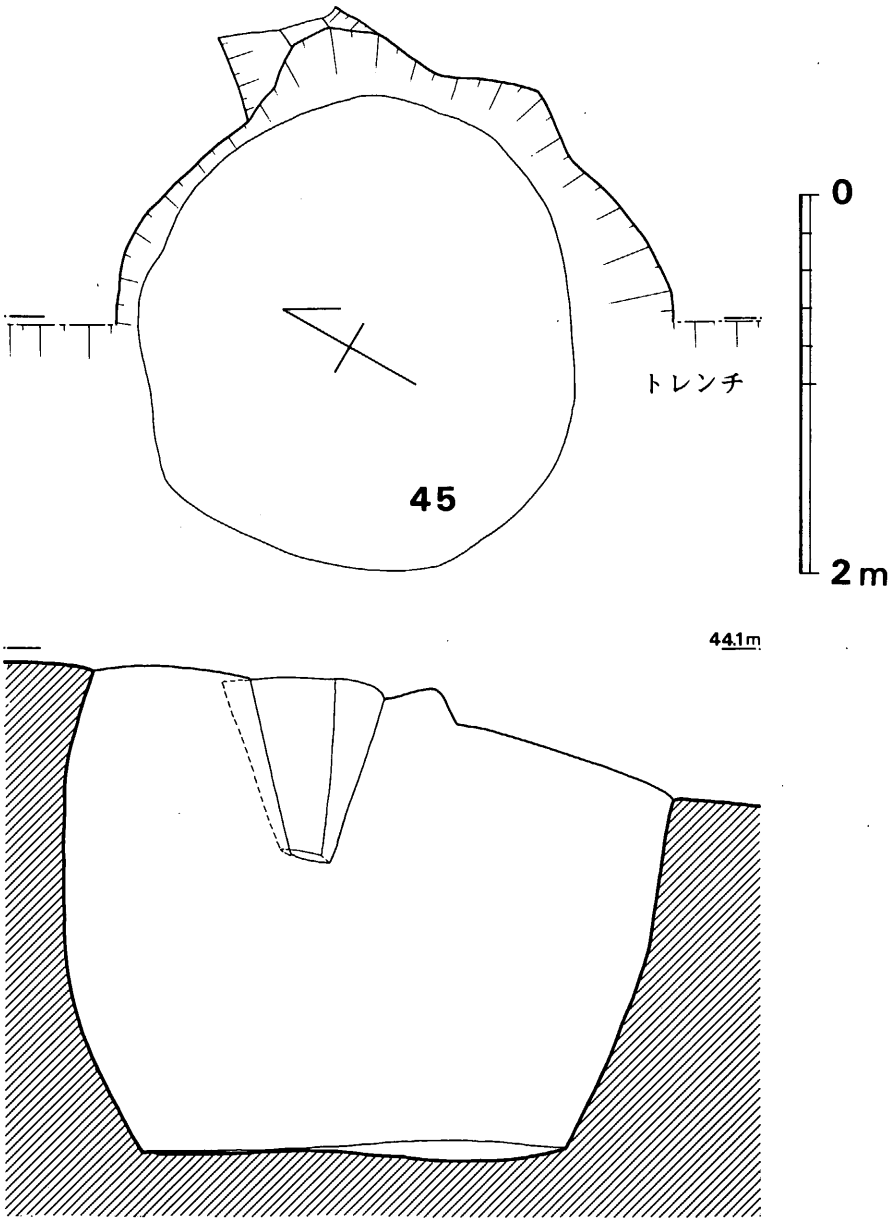


Fig. 208 第45号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

第46号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.206)

甕

口唇部下端と三角凸帯上に刻目を施す類で，頸部内面に横ハケ，胴外面に縦ハケがみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で内面暗茶色を呈する。外面には煤付着して真黒となる。

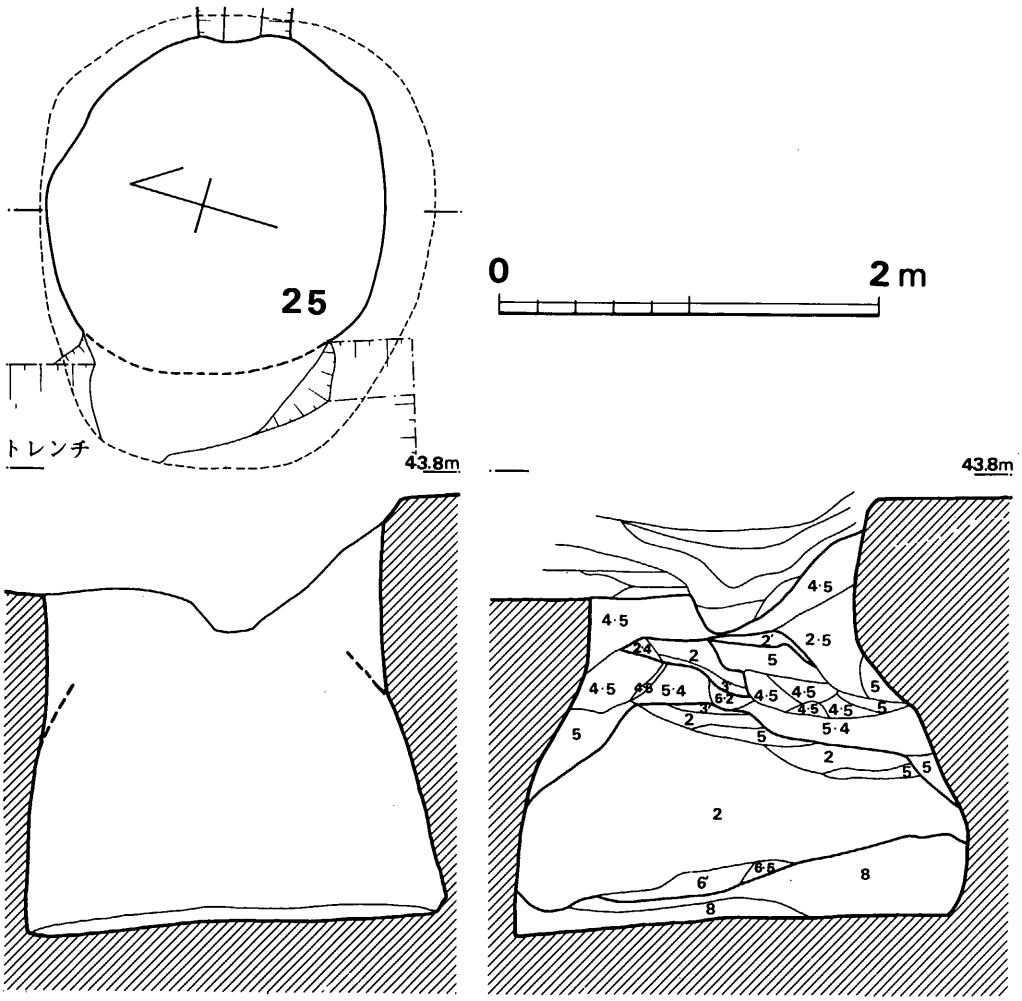


Fig. 209　第46号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

第47号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.210)

甕

口唇部下端にのみ刻目を施す類で，外面にやや細かい縦ハケがみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で内面は淡茶色を呈する。外面には煤が付着して暗褐色となる。

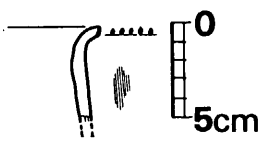


Fig. 210　第47号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 1/4）

2 袋 状 竪 穴 群

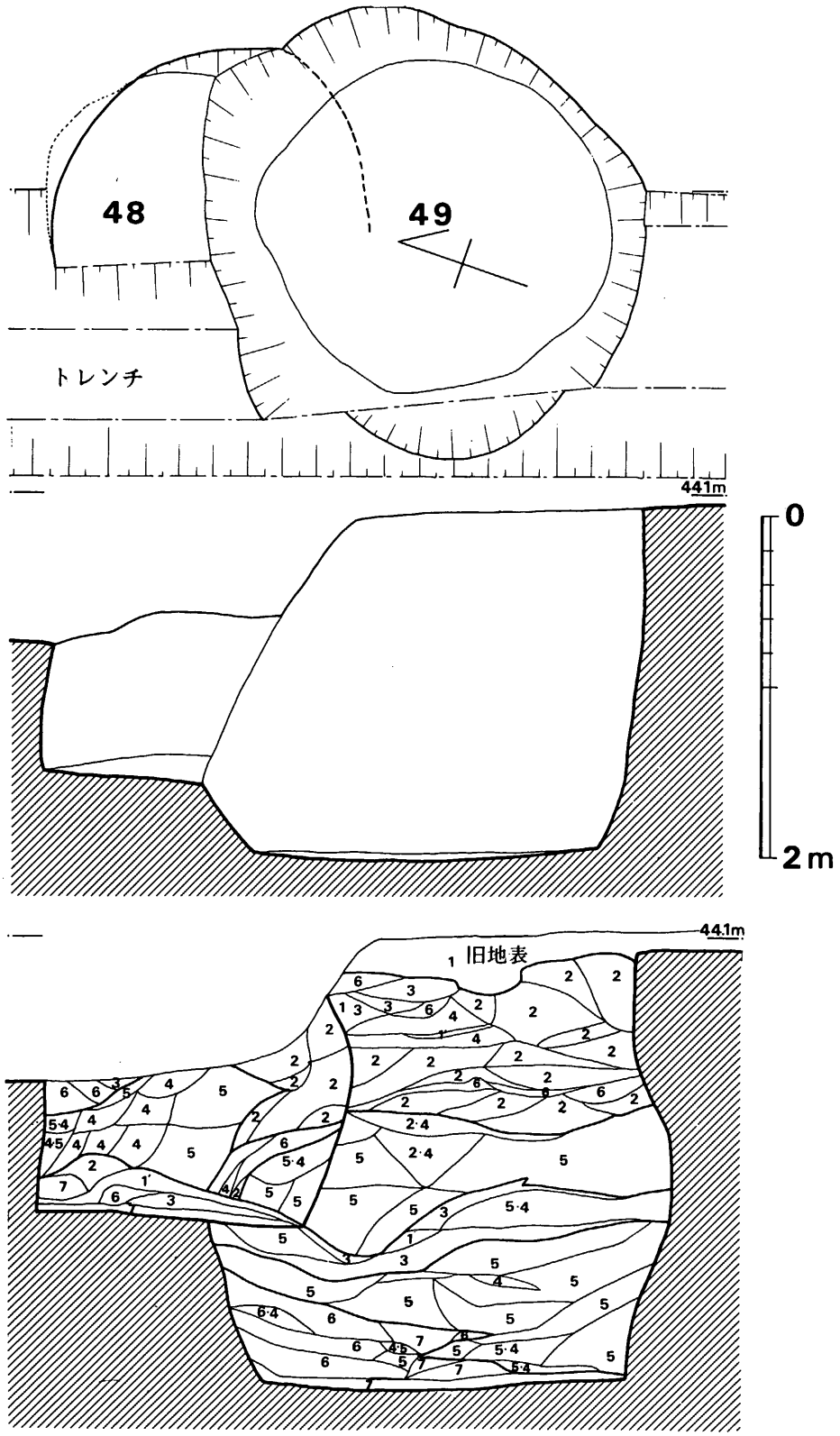


Fig. 211　第48・49号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

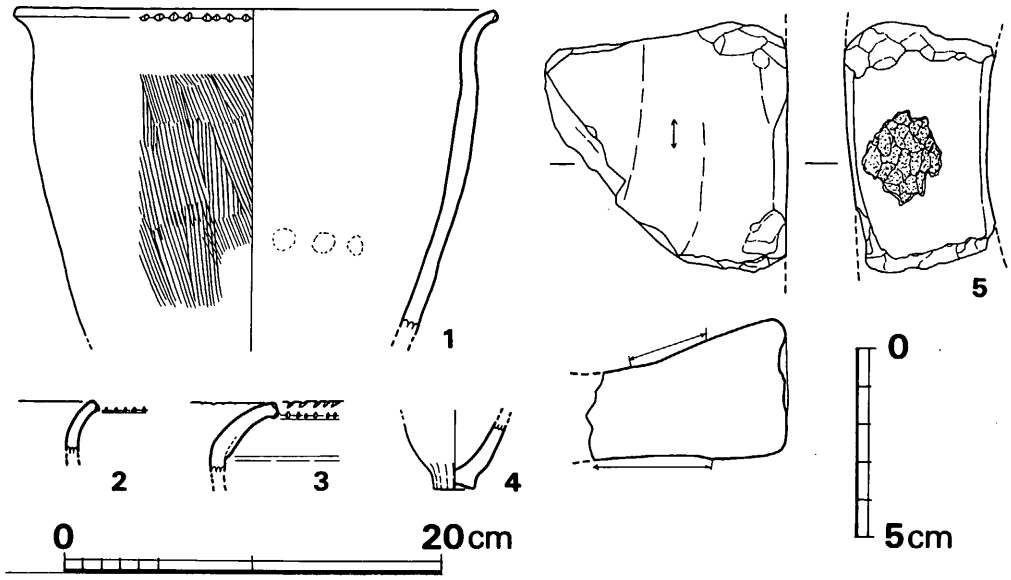


Fig. 212　第48号袋状竪穴出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・石器½）

第48号袋状竪穴出土遺物 (Fig.212)

甕（**1**・**2**）

1 は，口唇下端のみに刻目を施し，胴の張らない器形をなす。口縁部内外面横ナデ，胴外面には粗い縦ハケ，内面は縦ナデ調整かと思われる。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で内面は暗褐色を呈する。外面は煤付着して真黒となる。**2** は，口唇下端のみに刻目を施す類で，内外面横ナデ，胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で暗赤茶色を呈する。

壺（**3**）

口縁下外面を肥厚させ段をつくり，口唇部上下端に刻目を施す類である。内面は粗い横ヘラ磨き，外面煤付着するが，横ヘラ磨きが認められる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗褐色を呈する。

ミニチュア（**4**）

上げ底状の甕のミニチュアとなるものであろう。外面下端に縦指ナデがみられ，胎土には粗砂少量を含み，焼成不良で黒色を呈する。

Tab. 45　第48号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	研　磨　面	備　　考	台帳番号
212の5	砥石・叩石	砂　岩	(65.5)	(65.0)	(39.5)	(190)	表裏面・右側面	右側面のみ叩痕	133

2 袋 状 竪 穴 群

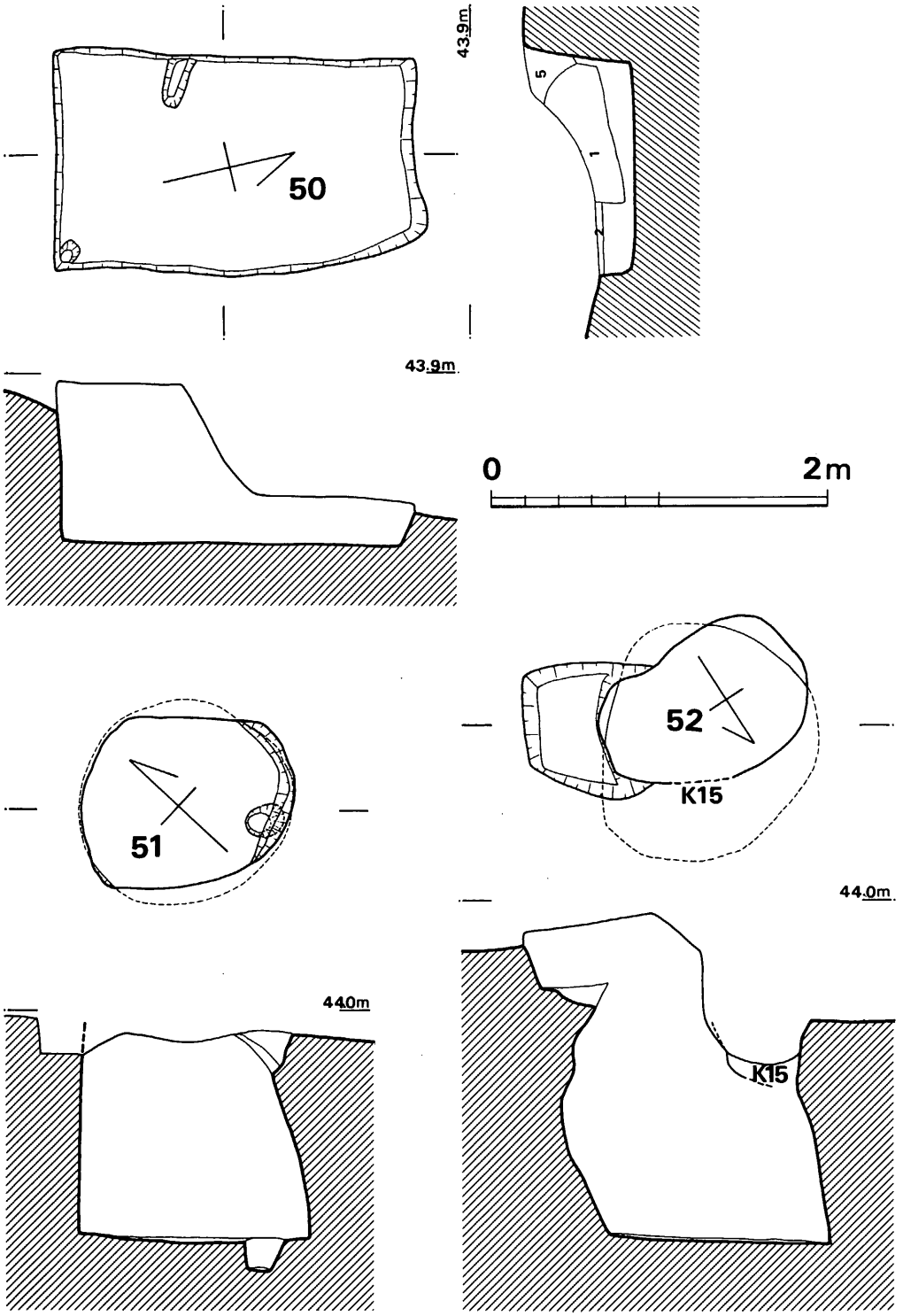


Fig. 213　第50・51・52号袋状竪穴実測図（縮尺 1/40）

第50号 袋状竪穴出土遺物

(Fig.214)

甕（1～3）

1は，口唇部下端と貼り付け三角凸帯上に刻目を施し，口縁内外面に横ナデが認められる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗褐色を呈する。外面には全面に煤が付着する。2は，頸部下に沈線1条を巡らす類で，頸部内面に横ハケ，口縁外面横ナデ，以下外面は粗いハケ調整を行なう。胎土に粗砂多くみられ，焼きは良く暗褐色を呈する。外面には煤が付着する。3は，底径5.8cmを測り，外面には粗い縦ハケを施す。粗砂かなりみられ，焼成良好で外面茶褐色，内面暗褐色を呈する。

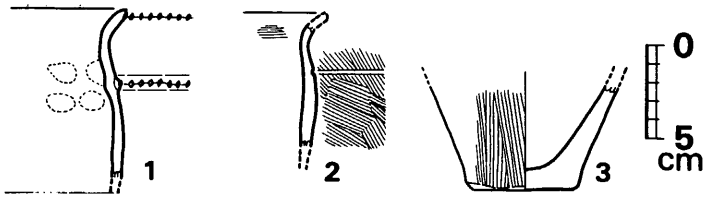


Fig. 214　第50号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 1/4）

この竪穴からは，壁際下層より太型蛤刃石斧（基部を欠損する）が出土したが，これも調査中途で盗難に会い手元に無く，図示して公にすることが出来ないのが残念である。

第51号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.216)

甕

底径9.8cmを測るやや大型品で，僅かな上げ底状となる。外面には粗い縦ハケ調整を施し，下半ではナデにより縦ハケを消している。内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂粒を多く含み，焼成良好で，外面暗黄褐色，内面には炭化物が付着しており，暗褐色を呈する。

Tab. 46　第51号袋状竪穴出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　考	台帳番号
216の2	石　包　丁	粗砂硬砂岩	58.5	83.5	6.0	32.1	93.5		未製品，両面の刃部周辺のみ研磨	134
216の3	コア スクレイパー	安山岩	51.0	47.5	24.0	55.0	44.0	A	両面リタッチ，原石粗面あり	135

第52号 袋状竪穴出土遺物 (Fig.215)

甕（1・2）

1は，口唇部下端に刻目を施し，器表磨滅して調整は不明である。胎土に粗砂粒を多く含み，焼成良好で，黄褐色を呈する。2は，底径9.5cmを測り，輪状に上げ底状となる。

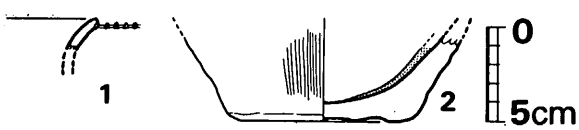
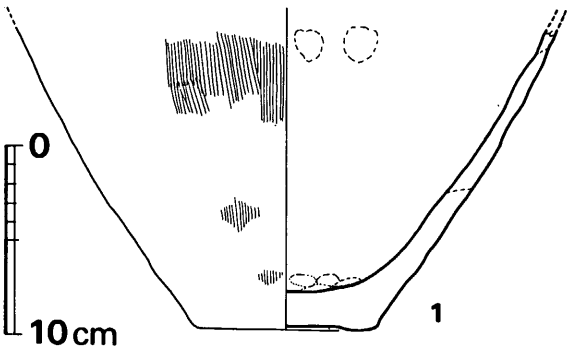


Fig. 215　第52号袋状竪穴出土土器実測図（縮尺 1/4）

外面には粗い縦ハケ調整が行なわれ，下端縁辺には横ナデが施される。内面には壁面に向かって厚く炭化物層がこびり付いている。(格子部分)　こげつきを剝がさないで何度も使用していて厚く付いたものなのか，或いは煮沸に適するようにそのまま意図して付けたままにしたも

のなのか判然としない。胎土に粗砂を含み，焼成良好で外面赤茶褐色を呈する。（中間研志）

註 1）九州歴史資料館岩瀬正信氏をはじめ，各遺跡調査担当者の御教示に負う処である。



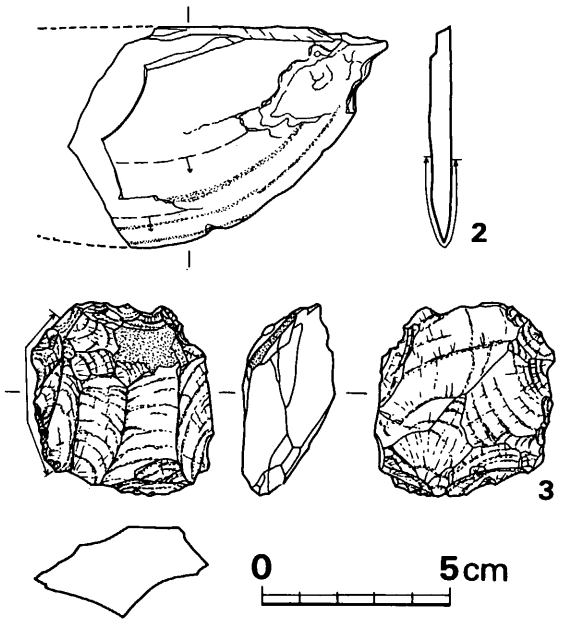


Fig. 216 第51号袋状竪穴出土土器・石器実測図
（縮尺 土器¼・石器½）

Ⅵ—3 土 坑 墓 群

弥生時代前期の組合わせ木棺墓や，切合いや土層状態から推定される弥生期の土坑墓等が，前方後円墳後円部下を中心として集中して検出された。分布状況をみてみると，前記後円部下に9基が集中しており，前方部西側に第2・13号の二段掘りの類がみられ，3号墳との間の住

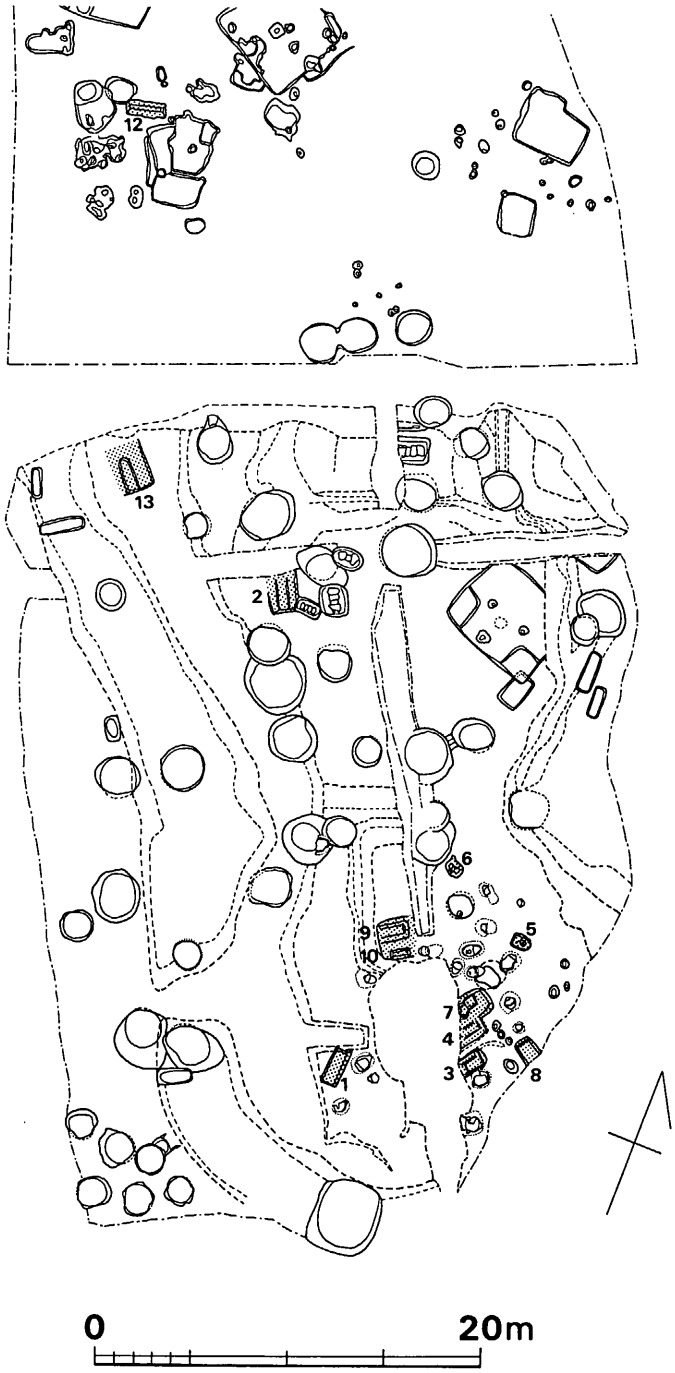


Fig. 217　弥生土坑墓配置図（縮尺 1/400）

居跡群の南西端に第12号が，更に3号墳北隣に第11号土坑墓がみられる。弥生前期・後期の住居跡の集中する部分より北に30m，南へ20～50m離れてこれらの土坑墓が設けられており，特に前期組合せ木棺墓の集中する部分とは前期住居跡から南へ60m前後隔たっている。もし、これらの既調査分の住居跡群と土坑墓群とが同一生活者による小集落・墓制であるとするならば、住居をやや低い丘陵上に，墓域をそれから50m前後離れたやや高い丘陵上に設け，両者域を異にしていたこととなる。また袋状竪穴群との関係も同様なことが観察される。時期として第8号住居跡と同時期の甕棺墓

も存在する可能性はあるが，甕棺墓・土坑墓・袋状竪穴の切合いをみる限り，甕棺墓は袋状竪穴を切り，また土坑墓を切る例がみられる。その逆はない。また袋状竪穴と土坑墓との切合いはみられない。このような事実より，時期差が土坑墓と甕棺墓との間にはみられ，土坑墓と袋状竪穴との間には恰も同時期併存のものもあると考えられる。以上の事を念頭に置いて，土坑墓の分布状況を再度観察すると，後円部下の集中部においては第51・52号袋状竪穴を例外とすると，墓域と袋状竪穴分布域とは区別されているようである。また，明らかに弥生前期の所産と思われる後円部下の組合わせ木棺の類のみをみると，先の例外とした袋状竪穴をも区別して，墓域と貯蔵区域とを異にする感を強くさせる。

以下，各弥生土坑墓について述べたいが，各遺構の観察等については一覧表を参照してもらい，出土遺物のみについて拙文を綴ることとしたい。

Tab. 47 弥生土坑墓一覧表 (単位：cm)

No.	時期	主軸方位	葬法	墓坑プラン	長×幅×深（棺身）	副葬品	備考
1	弥生前期（？）	N16°E	組合せ木棺	長方形	200 × 86 × 38 (185)×(60)×(31)	なし	南西隅は前方後円墳地山整形によりカットさる。赤色粘土分布範囲は(棺身)大きさ
2		N26°W	組合せ木棺	長方形(?)	198＋α×117×87.5 (159)×(55～59)×(?)	なし	2号石蓋土坑に切られる，2段掘り，裏込め及び棺材間隙込め石各一個づつあり
3	弥生前期	N38°E	組合せ木棺	短方形 隅丸方形	153＋α×103×48 (103)×(78～72)×(23＋α)	小壺（板付Ⅰ式） 円盤貼り付け底部	南西小口側掘り方が前方後円墳石室，墓道によって切られる。K1によって切られる
4	弥生前期	N36°E	組合せ木棺	隅丸多角形	(100＋α)×(38～43)×(40)	管玉7個 小壺（棺内）	YD7と同一墓坑 1号墳主体石室墓坑に切られる。平行で大小対をなす
5		N89°W	土坑	短矩形	100× 67 × 59	なし	南西隅はK14に切られる。棺材痕跡なし，中央に大小ピットあり
6		N76°W	土坑	隅丸短矩形	104× 60 × 60	なし	西側が削り出されて，枕様段をなす。
7	弥生前期	N35°30′E	組合せ木棺	隅丸多角形	(130＋α)× (50)×(56)	なし	YD4と同一墓坑 1号墳主体石室墓坑に切られる 平行で大小対をなす
8	弥生前期（？）	N58°W	組合せ木棺	長方形（推定）	82＋α×80～105×31	なし	東半分削去
9	弥生前期	N62°E	組合せ木棺	長方形	71＋α×90×42 (55＋α)×(67)×(42)	なし	西半分を調査ミスにより削去 10と同一墓坑 平行で大小対をなす
10	弥生前期	N66°E	組合せ木棺	長方形	90 × 56 × 29 (74×)×(35)×(29)	なし	一部をミスにより削去 9と同一墓坑 平行で大小対をなす

No.	時　期	主　軸 方　位	葬　法	墓　坑 プラン	長×幅×深（棺身）	副　葬　品	備　　考
11		N 5° 30′ E	組合せ 木棺	隅　丸 長方形	259×82～90×47 (？)×(50)×(？)	(？) 土器底部	1号墳周湟に切られる
12		N 64°E	木　棺	長 方 形	206× 72 × 104 (190)×(37)×(65)	な　し	断面V字で深い 裏込め土が確認される
13		N 24° 30′ W	土　坑	舟　形 長方形	197 × 67 × 51	な　し	2段掘りとなる

第1号土坑墓出土遺物 (Fig.218)

以下の表に計測値等は示すが，出土位置・層位等は確認していないものである。単なる混入物なのか，或いは，遺体中に残存していたものか，決定は判断しかねる。ただ，北部九州の他遺跡において甕棺墓・石棺墓・土坑墓中に骨片に嵌入した状態での出土例がみられるので，一応その可能性も有るものとして，資料に供するものである。

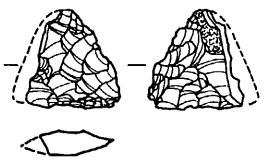


Fig. 218　第1号土坑墓出土石器実測図（実大）

Tab. 48　第1号土坑墓出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	分　類		備　　考	台帳番号
218	打製石鏃	黒曜石	13.5	(12.0)	3.0	(0.6)	Ib	A	原石粗面あり	5

第3号土坑墓出土遺物

(Fig.219・222)

副葬小壺 (Fig.219)

木棺域内床面に押し潰された状態で，小片の集合体となり出土したものである。頸部より屈曲反転して開く口縁をつくり端部はやや丸くおさめる。口縁下半外面は中ぶくらみを呈し，屈曲部外面には明確な段をつくる。

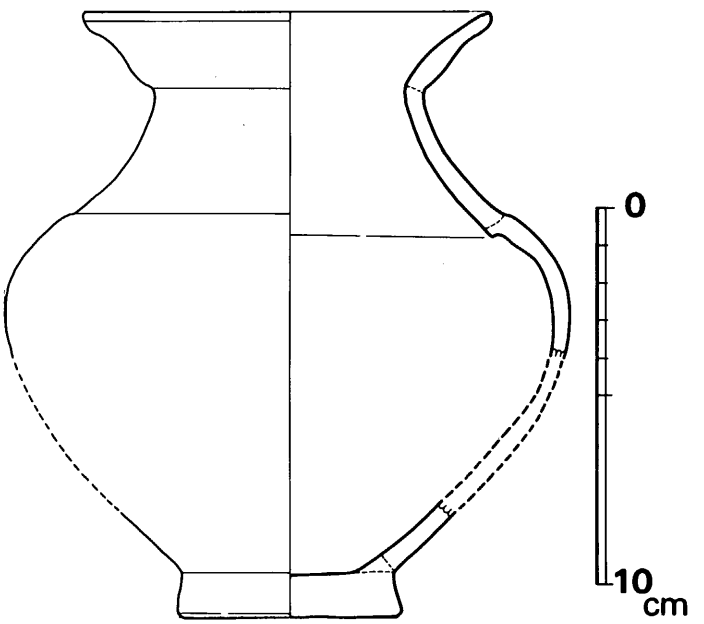


Fig. 219　第3号土坑墓副葬小壺実測図（縮尺 ½）

3 土 坑 墓 群

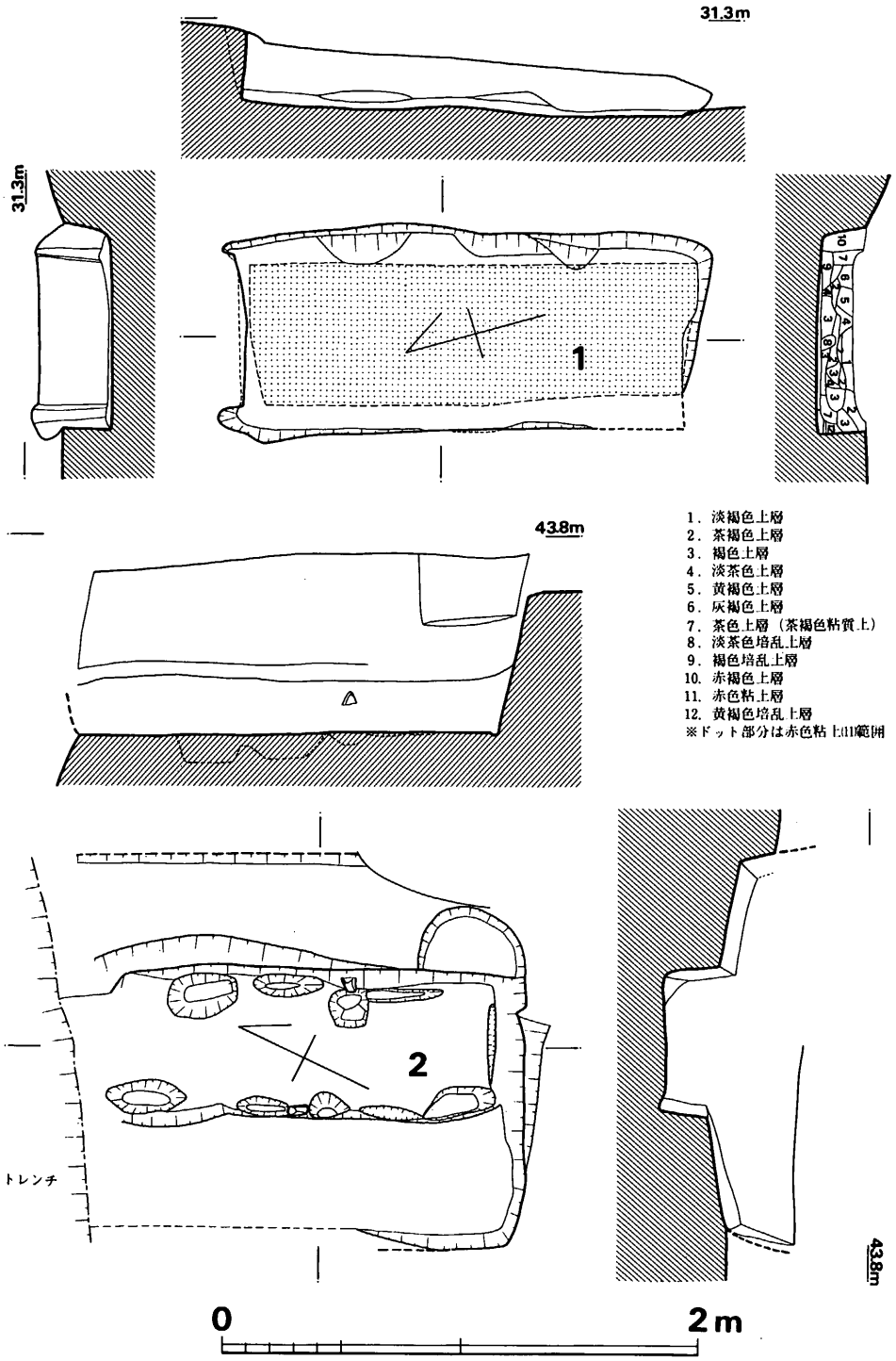


Fig. 220　第1・2号弥生土坑墓実測図（縮尺 1/30）

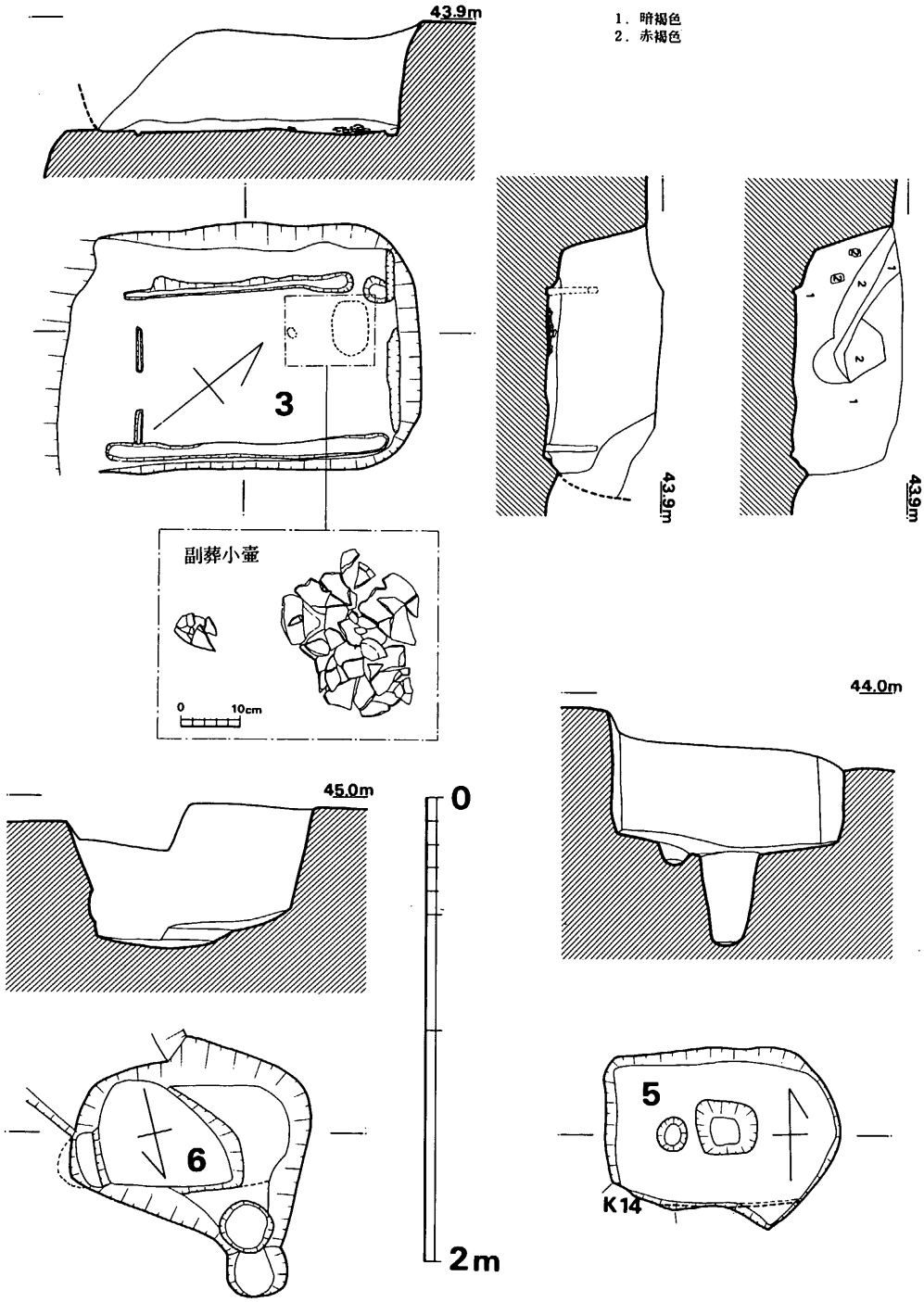


Fig. 221　第3・5・6号弥生土坑墓実測図（縮尺　1/30）

頸部と胴部の境に明確な凹稜をつくる。胴部は肩直下で最大部をつくり円盤貼り付けの底部へとすぼまる。口径10.8cm，器高16.1cm，底径6.0cm，胴最大幅14.9cmを測る。器表面は磨滅して調整不明。胎土精良で，焼成やや良好で茶色を呈する。器表残らず，痕跡は全く無いが，丹彩文の施されていた可能性も考えられる。

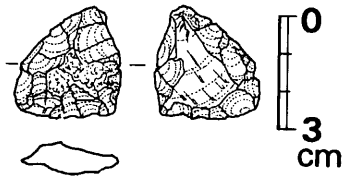


Fig. 222　第3号土坑墓出土石器実測図（縮尺 ½）

Tab. 49　第3号土坑墓出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
222	スクレイパー	安山岩	29.5	28.0	8.5	6.4	92.5	E	両面よりリタッチ、原石粗面あり	4

第4号土坑墓出土遺物

(Fig.223・224)

副葬小壺（Fig.223）

木棺部と推定される範囲の西北端部床面に横転して出土したもので，明らかに棺内に副葬されたものと考える。（Fig.225, PL.96参照の事）口縁部は頸部上端で「く」の字状に屈曲し外傾する。口縁外面のやや下位にナデにより稜をつくり，頸部以下で開き，頸部と胴部の境で外面に段をなし，胴部は球状に張り，底部は明らかに薄い円盤貼り付けを行なう。施文はすべて丹彩により，口縁部内面直下に長さ0.6mm前後の縦線を巡らし，口縁直下の締まった部分外面に2条の朱線を巡らし，肩～胴上半部の羽状文ま

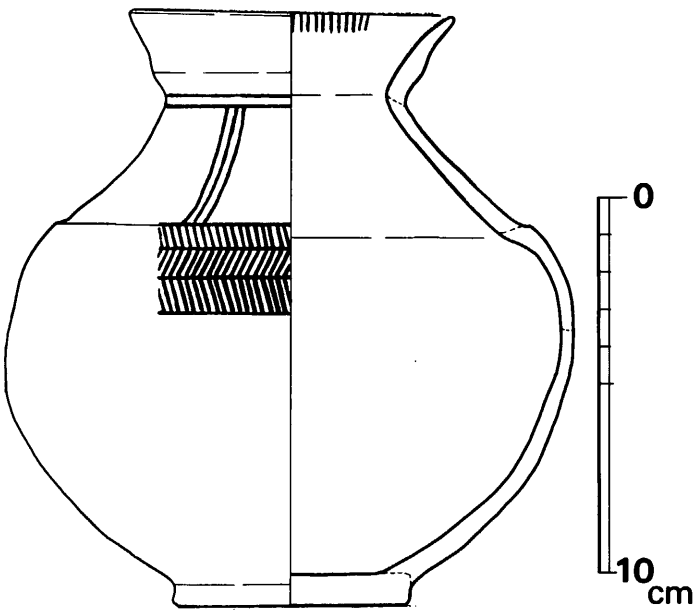


Fig. 223　第4号土坑墓副葬小壺実測図（縮尺 ½）

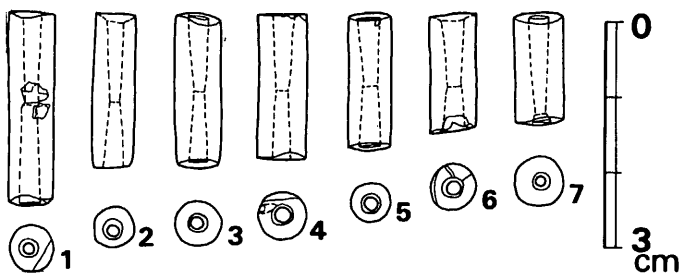


Fig. 224　第4号土坑墓出土管玉実測図（実大）

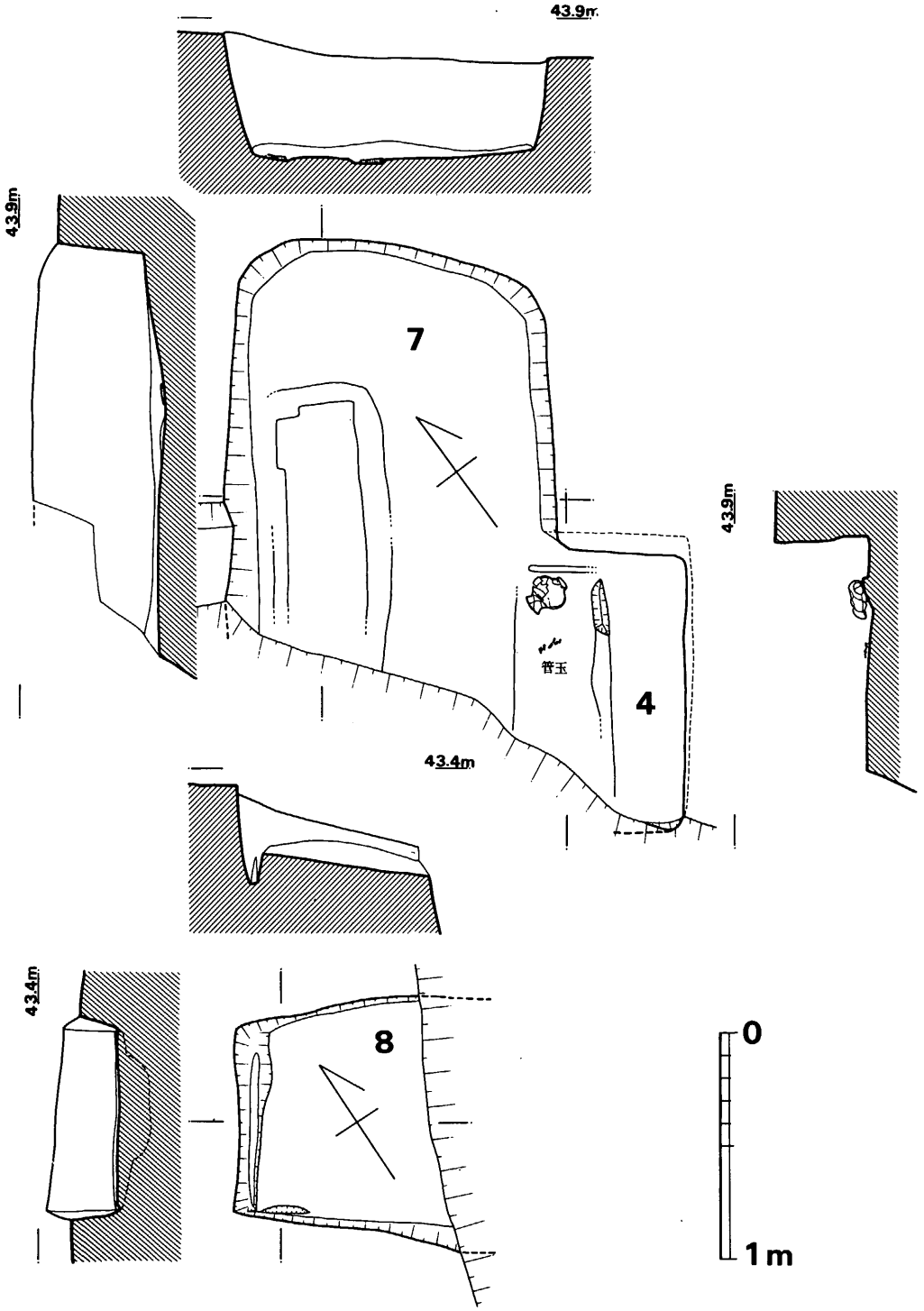


Fig. 225　第4・7・8号弥生土坑墓実測図（縮尺　1/30）

でに縦3本の平行線を配する。肩部の羽状文は有軸の類で，全体としての丹彩の施文法はK15，K16の各副葬小壺のそれと全く同じである。ただ他の面で異なる点は，胴部が球形になるということである。全体に薄手で，胎土精良，焼成良好で黄褐色を呈する。器表面は，取上げ後の乾燥等によりかなり剝落したが，全体に丁寧に磨き上げる類である。

管 玉 (Fig.224—1～7，Tab.50)

大小の計7個が，北東端部を頭位とすると，頸～胸上半に当たる部分に，床面より僅かに浮いた状態で出土した。出土状況等から，これらは着装品であったとするのが妥当であると考える。孰れも軟質玉製で，両面穿孔を行ない，7は下端際で一応両面穿孔状となる。これは，短かい類である為，片側からの穿孔のみで殆んど充分であり，端部際に至って一応両面から孔を拡げたものと思われる。これらは，その大きさにおいて，他遺跡の弥生前期土坑墓出土の同種管玉類に比べて，やや大きめの感を与える類も含まれる。各個別における計測値等はTab.50の一覧表を参照されたい。

Tab. 50 第4号土坑墓出土管玉一覧表 (単位：mm・g)

番号	長さ	径	孔径	穿孔法	色調	重量	備考
1	25.3	5.9～5.6	2.7～1.8	両面穿孔	灰緑色	1.60	面取り 面ずれあり
2	20.2	5.5～4.9	2.4～1.5	両面穿孔	灰緑色	1.15	断面やや多角形となる
3	20.1	5.9～5.2	2.3～1.4	両面穿孔	灰緑色	1.25	
4	19.4	6.2～6.0	2.5～1.6	両面穿孔	白灰（緑）色	1.30	片側端面で一部面取り
5	18.0	5.5	2.9～1.8	両面穿孔	灰緑色	1.00	
6	16.0	6.0	3.0～1.8	両面穿孔	白灰（緑）色	0.95	片側端面一部欠損
7	14.9	6.2～6.0	2.6～1.2	(一応) 両面穿孔	灰緑色	0.85	片側端で両面穿孔状となる

第5号土坑墓出土遺物 (Fig.226)

この土坑墓の覆土中より以下の土器片2点が出土した。

壺（1・2）

1は，遺物整理中に確認されたものであり，混入物と考えられ，層位は確認出来なかったが，一応図示したい。口縁上面に粘土を貼り付けて肥厚させ，口唇部上下端に刻目を施し，更に内面肥厚部上端に刻目を施す大型の器形となる。頸部段以下は横ハケ，他内外面は横ナデを施す。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で赤茶色を呈する。2は，円盤貼付状の底部をなす，副葬小壺の一部と考えて良い類であるが，他破片等が出土しない事等から，未だ決定的ではない。底径5.4

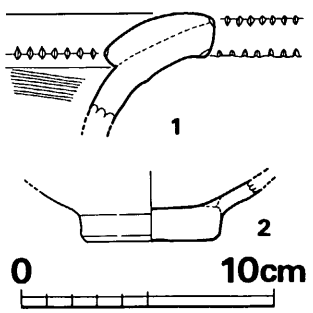


Fig. 226 第5号土坑墓出土土器実測図（縮尺 1/3）

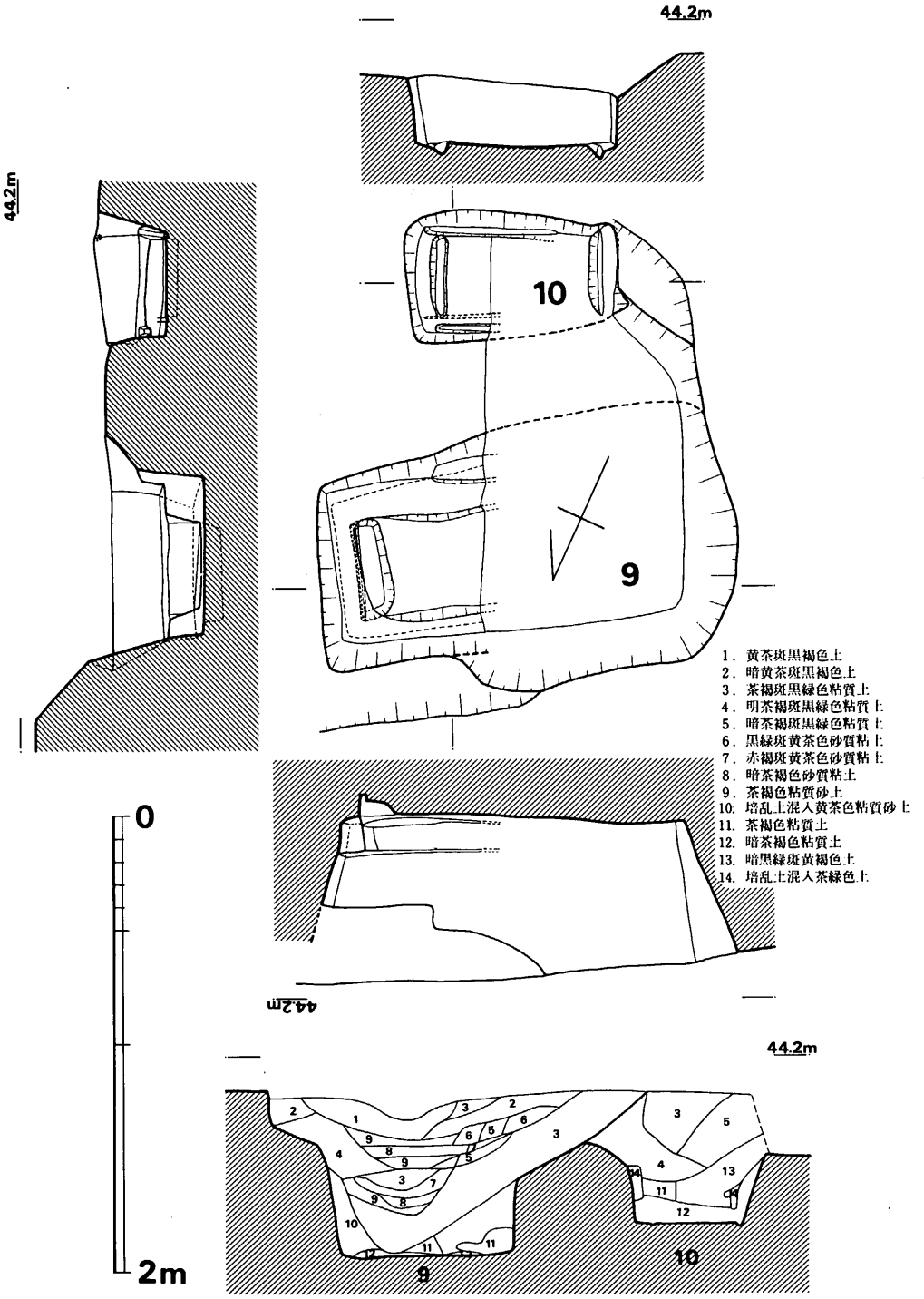


Fig. 227　第9・10号弥生土坑墓実測図（縮尺　1/30）

3 土 坑 墓 群

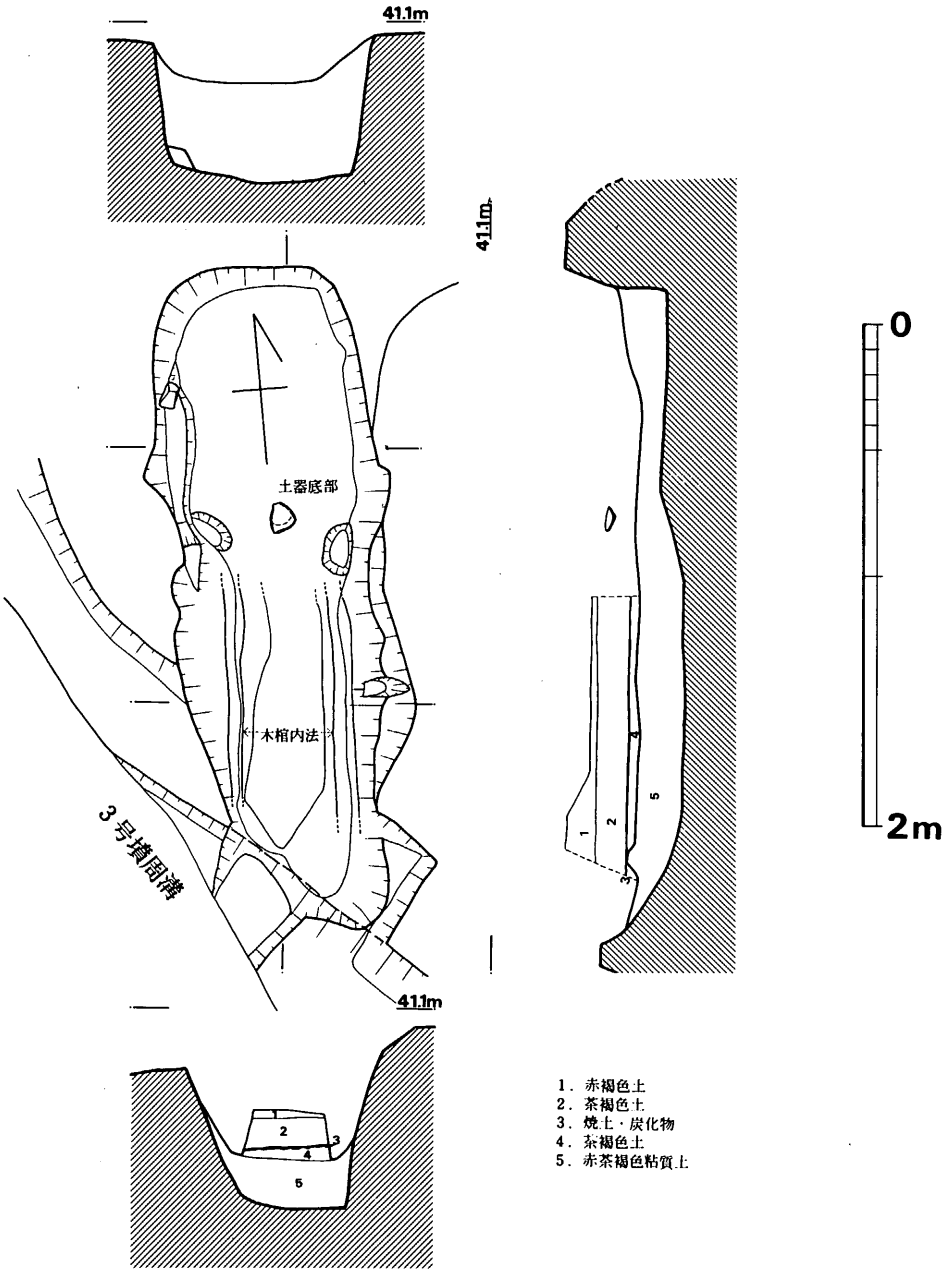
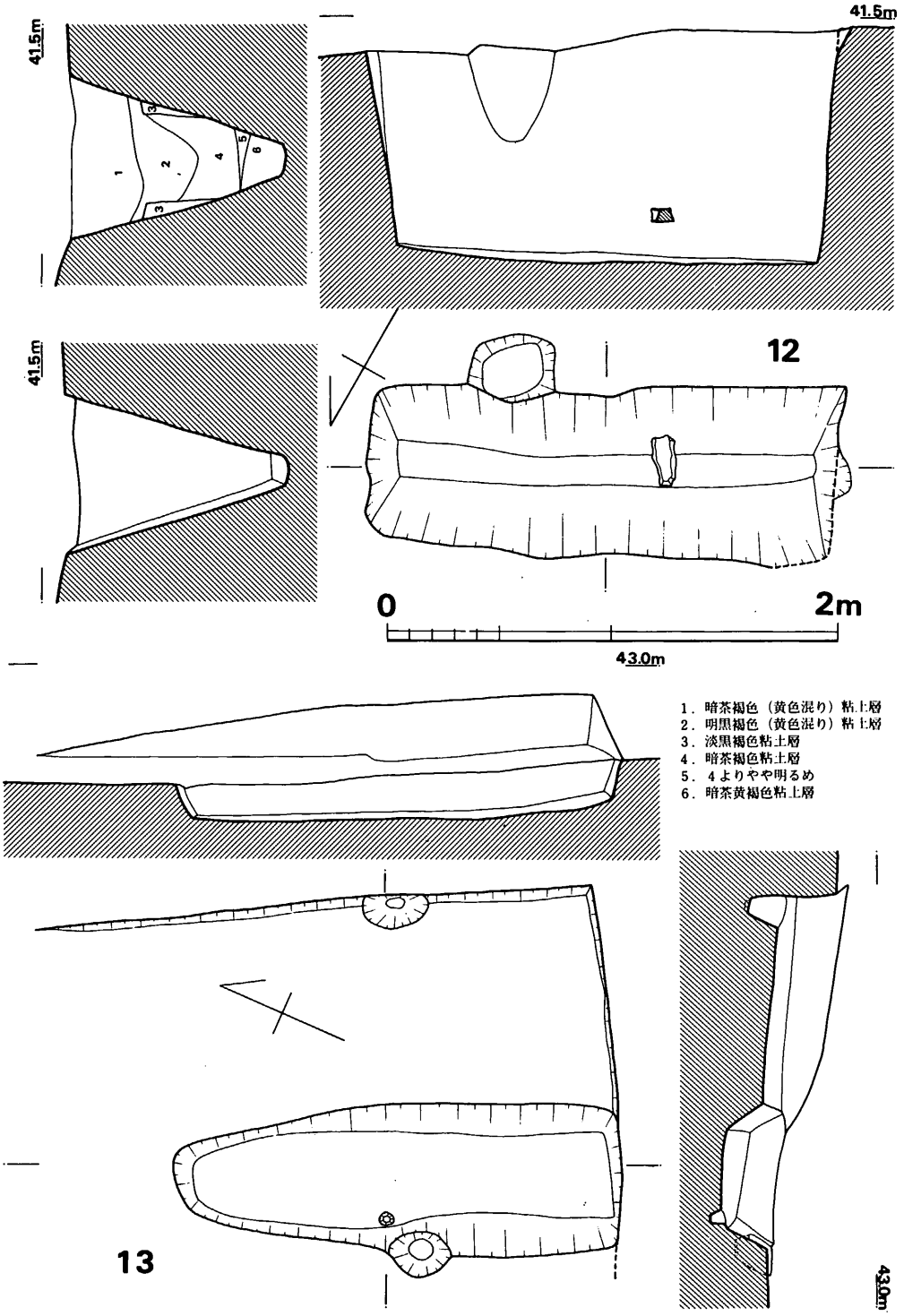


Fig. 228 第11号弥生土坑墓実測図（縮尺 1/30）



Fig．229　第12・13号弥生土坑墓実測図（縮尺　1/30）

cm，底部厚さ1.3cmを測り，外面にはヘラ磨き調整を行なう。胎土は精良で他例副葬小壺と同類であり，焼成良好で茶色を呈する。

第9号土坑墓出土遺物 (Fig.230)

1・2ともに先端部欠損する磨製石鏃で，計測値等は以下の一覧表に詳しいので参照して欲しい。孰れも中位で中層下部付近から出土したものである。出土状況や，欠損状態などからみて，遺体そのものが残らないので決定出来る類ではないが，遺体内に残在していたものである可能性も残り，単に春日市伯玄社遺跡出土例の如く副葬品である可能性も考えられる類である。

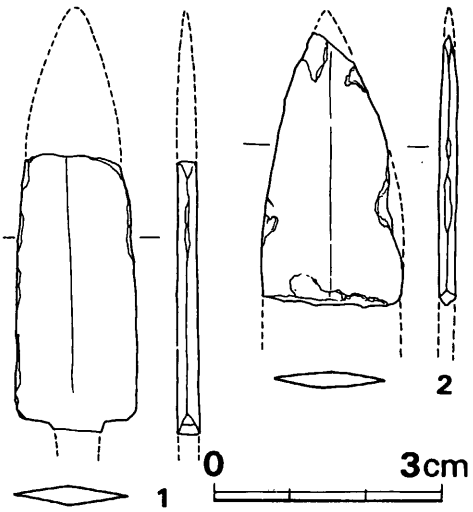


Fig. 230　第9号土坑墓出土磨製石鏃実測図
(実大)

Tab. 51　第9号土坑墓出土石器一覧表　(単位：mm・g)

Fig. No.	器　種	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考	台帳番号
230の1	磨製石鏃	粗砂硬砂岩	(36.5)	16.0	3.0	(2.5)	茎あり先端欠損	1
230の2	磨製石鏃	粗砂硬砂岩	(36.0)	18.5	2.0	(2.2)	先端欠損	2

Ⅵ—4　甕 棺 墓 群

剣塚1号墳（前方後円墳）後円部下で，集中して甕棺墓群が検出された。その端緒となったのは，1号墳主体部の横穴式石室墓道部右壁に綺麗に輪切りにされたK1であった。(Fig.214, PL.98) 同じ埋葬するという儀礼の中で，弥生前期のものが，古墳後期になると全く忘れ去られ，成長してきた権力の下に邪魔視され，無残にも輪切りとされた状態は調査者を始め説明を受けた人々を呆然とさせる感さえあった。

孰にしろ，その分布は現存の限りでは南北15m，東西9mの範囲内に含まれるものである。

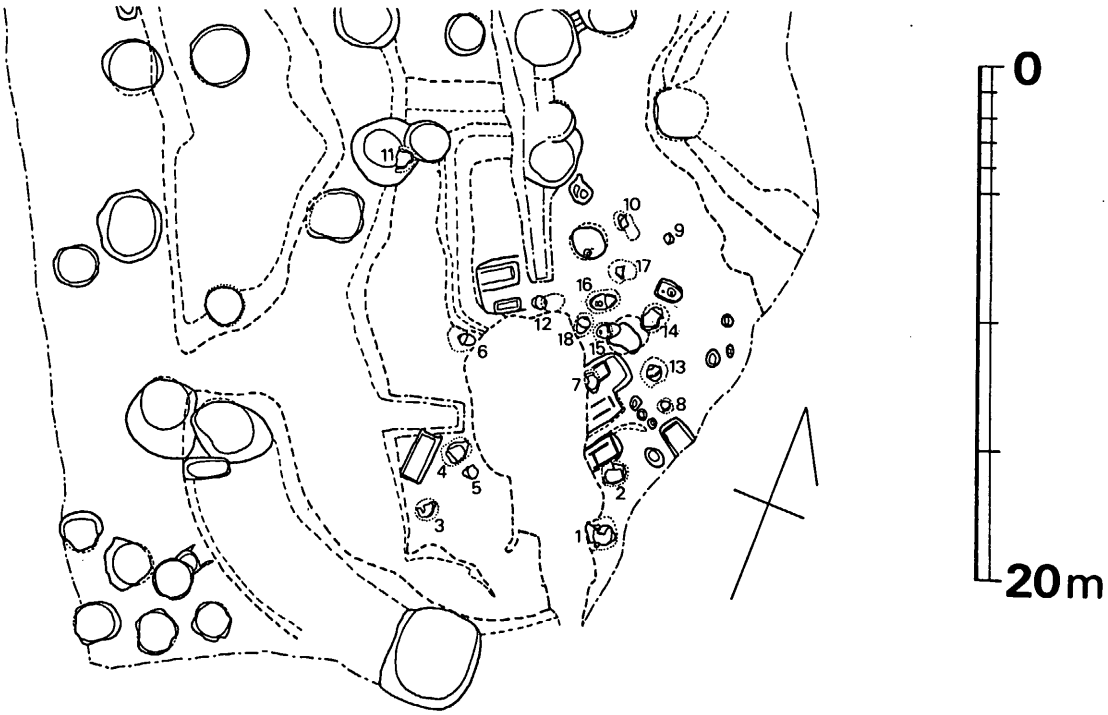


Fig. 231　甕棺墓配置図（縮尺　1/300）

その中に17基の甕棺墓が営なまれ，同区域にほぼ重複して土坑墓群９基が混在する。これは，明らかにこの時期において墓域が設定され，土坑墓と甕棺墓が前後関係をなす時期から同区域に連続して甕棺墓群が営なまれたことが想定される。甕棺墓と袋状竪穴との前後関係をみてみよう。K14・15が第52号袋状竪穴を切る事実がみられ，総てとは言い難いが，一部において袋状竪穴が甕棺墓に先行する時期が存在し，袋状竪穴の一部においては中期初頭に及ぶまで連続して新たに営なまれたものが存在することが知られている。

甕棺墓のうち，１基を除く他総ては前期の間に含まれる類であり，K11のみが後で詳述する如く弥生後期（～古式土師器）に考えらるものである。

Tab. 52　剣塚甕棺墓一覧表　　（単位：cm）

No.	時　期	主軸方位	傾斜角	下甕有孔	接合方法	副　葬　品	墓坑大きさ 長 × 幅 ×深	備　考
1	弥生前期	N85° E	33°30′	○	覆　口　式	小壺(接合部の甕外)	117+α ×110×？	下甕打ち欠き
2	弥生前期	N36°30′E	？	○	覆　口　式		106×85	上下甕打ち欠き
3	弥生前期	N21° E	？	？	？			
4	弥生前期	N31° E	39°	○	覆　口　式		130+α ×84×30+α	下甕打ち欠き

4 甕 棺 墓 群

No.	時 期	主軸方位	傾斜角	下甕有孔	接合方法	副 葬 品	墓坑大きさ 長 × 幅 × 深	備備 考
5	弥生前期	N57°E	53°	?	?			
6	弥生前期	N89°30′E	35°	○	覆 口 式		115+α ×90×70+α	
7	弥生前期	N50°30′W	40°	○	覆 口 式			YD4・7を切る
8	弥生前期	N2°E	?	?	?			
9	弥生前期	N84°30′E	?	○	?			
10	弥生前期	N45°W	28°	○	?			
11	弥生後期	略N13°W	?	×	?			
12	弥生前期	N65°30′E	45°30′	○	覆 口 式		65×50+α ×65	上甕・下壺打ち欠き
13	弥生前期	N61°W	36°	○	覆 口 式		85×84×54	下甕打ち欠き
14	弥生前期	N7°30′E	35°	○	上棺挿入式	小壺(胴部斜格子文) 墓坑内（接合部外）	145+α ×110×49+α	上甕打ち欠き YP52を切る
15	弥生前期	N51°30′E	26°	○	覆 口 式	小壺（丹彩）（接合部外）	130×70×95	下甕打ち欠き YP52を切る
16	弥生前期	N53°E	42°	○	覆 口 式	丹彩小壺（下甕内横転）	110+α ×83×63+α	上下甕打ち欠き
17	弥生前期	略N79°W	?	?	?			
18	弥生前期	N2°30′E	45°	○	覆 口 式		96 × 82 × 63	下甕打ち欠き

K1 (Fig.232・241)

前述した如く，1号墳墓道に上棺を輪切りにされたもので，南側覆口部脇に副葬小壺をもつ。覆口中央上部に一抱えもある花崗岩を有するもので，墓標的な存在として把握できよう。上棺は，口縁内面を肥厚させ端部に刻目を施す極大型品である。口唇下端には明らかに刻目が施される。上端における刻目の有無は磨滅の為全く不明であるが，無い可能性もある。口縁下外面に段状部をつくる。磨滅していない部分では明瞭であるが、他磨滅部分までつくるかどうは不明である。 内面に僅かに横ハケが残り，口縁下段下までの外面には横ナデ，頸部外面上半に粗い縦ハケを施し，以下外面器表は磨滅して調整不明。内面は横ヘラ磨きを施す。胴部との境には確かにくびれる状態がみられるが，沈線や明瞭な段状をなす類ではない。胎土に粗砂多く含み，焼成やや良好，黄褐色を呈する。

下棺は，口縁打ち欠きで，上棺に相当するような極大品である。口縁部の特徴は打ち欠きの為に不明であるが，頸部と胴部の境は明確にくびれることはなく，外面に2条の沈線を巡らす。沈線は1本になる部分もあり，とぎれとぎれとなる個所もみられる。外面横ヘラ磨きで，内面も横ヘラ磨きかと思われる。胎土に粗砂多く含み，焼成やや良好で，淡黄褐色を呈する。

K1副葬小壺 (Fig.233—1)

口縁外下部に段をつくり，頸部と肩部との境はくびれや段等の形状をなさず，3条の沈線を

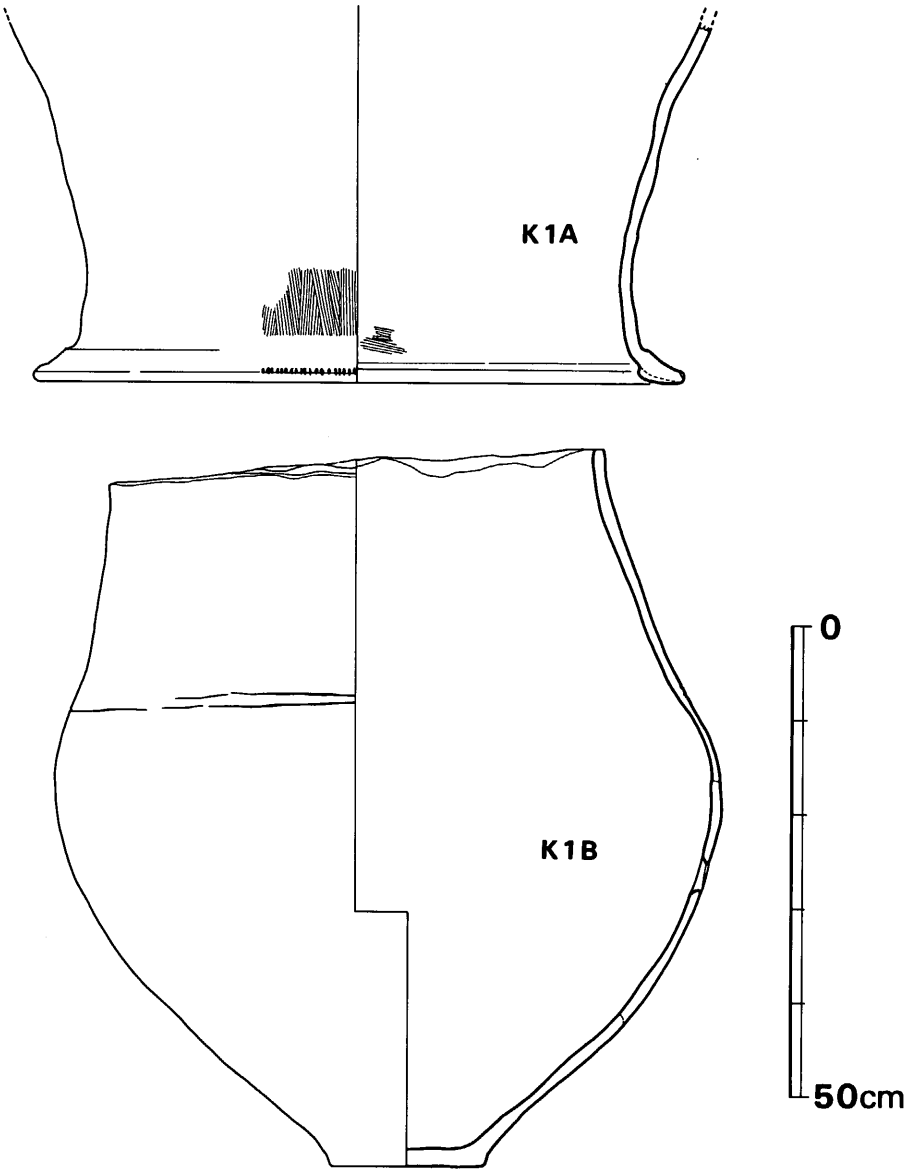
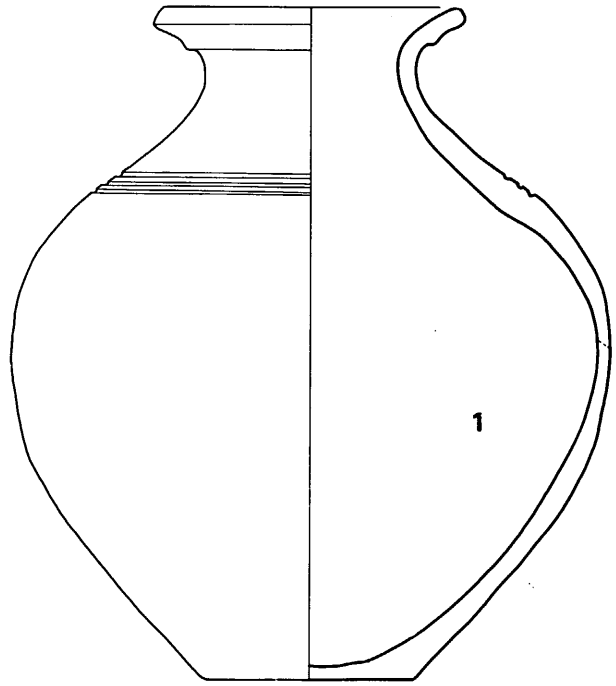


Fig. 232　第1号甕棺実測図（縮尺 1/8）

巡らす類である。底部は薄く，円盤貼付けの底部ではない。かなりの部分が剝落するが，外面ヘラ磨きかと考えられる。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で暗茶褐色を呈する。尚この土器は，春日市伯玄社遺跡前期甕棺墓副葬小壺と，その埋置法，やや長めで肩に3本沈線を巡らす点など極めて酷似するといわれる。（註1）



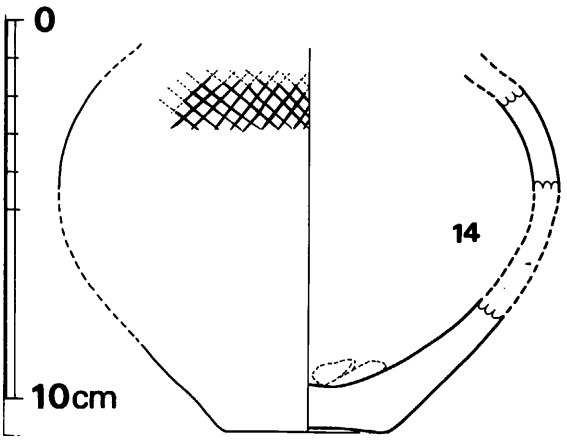


Fig. 233 第1・14号甕棺墓副葬小壺実測図（縮尺 ½）

K2 (Fig.235・242)

上下棺ともに大型品で，上棺は頸部の殆んどを打ち欠き，肩部以下が残る。肩部・頸部のくびれ部は段や明瞭なくびれ屈折をみせず，沈線2条を巡らす類である。沈線は細く，途中で途切れ途切れになり，全体に波状によたる。外面横～斜めヘラ磨き，内面上半は横ヘラ磨きを施す。胎土に粗砂を極めて多く含み，焼成良好で茶褐色を呈する。

下棺は，口縁部を丁寧に打ち欠き，殆んど締まらない頸部に均整のとれた丸い胴部をつくる。肩部上に1条の沈線を巡らし，胴上半に焼成後の穿孔を行なう。外面ヘラ磨き，内面には指ナデ上げがみられ，口縁直下頸部外面に横方向の太い叩目がみられる。（PL.99の接写を参照）胎土には粗砂多く含み，焼成良好で黄褐色を呈する。

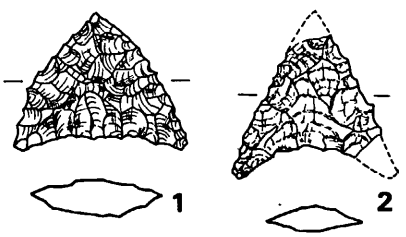


Fig. 234 第2号甕棺墓出土石鏃実測図（縮尺 実大）

Tab. 53 第2号甕棺墓出土石器一覧表 （単位：mm・g）

Fig. No.	器 種	石 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	分 類		備 考	台帳番号
234の1	打製石鏃	黒曜石	17.5	23.0	5.0	1.2	Ia	C	完 形	190
234の2	打製石鏃	安山岩	(19.0)	(20.0)	3.5	(0.9)	Ib	C		191

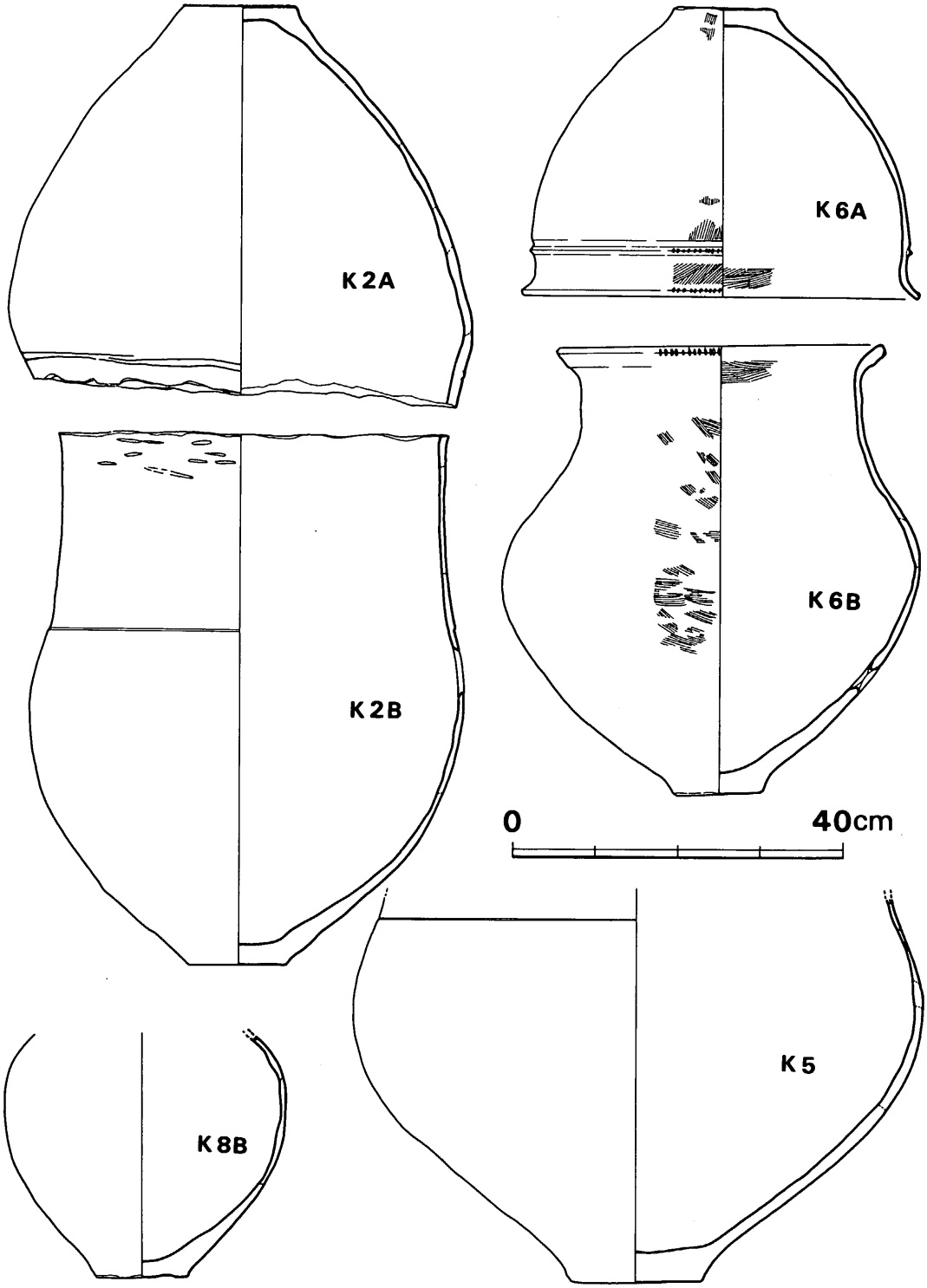


Fig. 235　第2・5・6・8号甕棺実測図（縮尺　1/8）

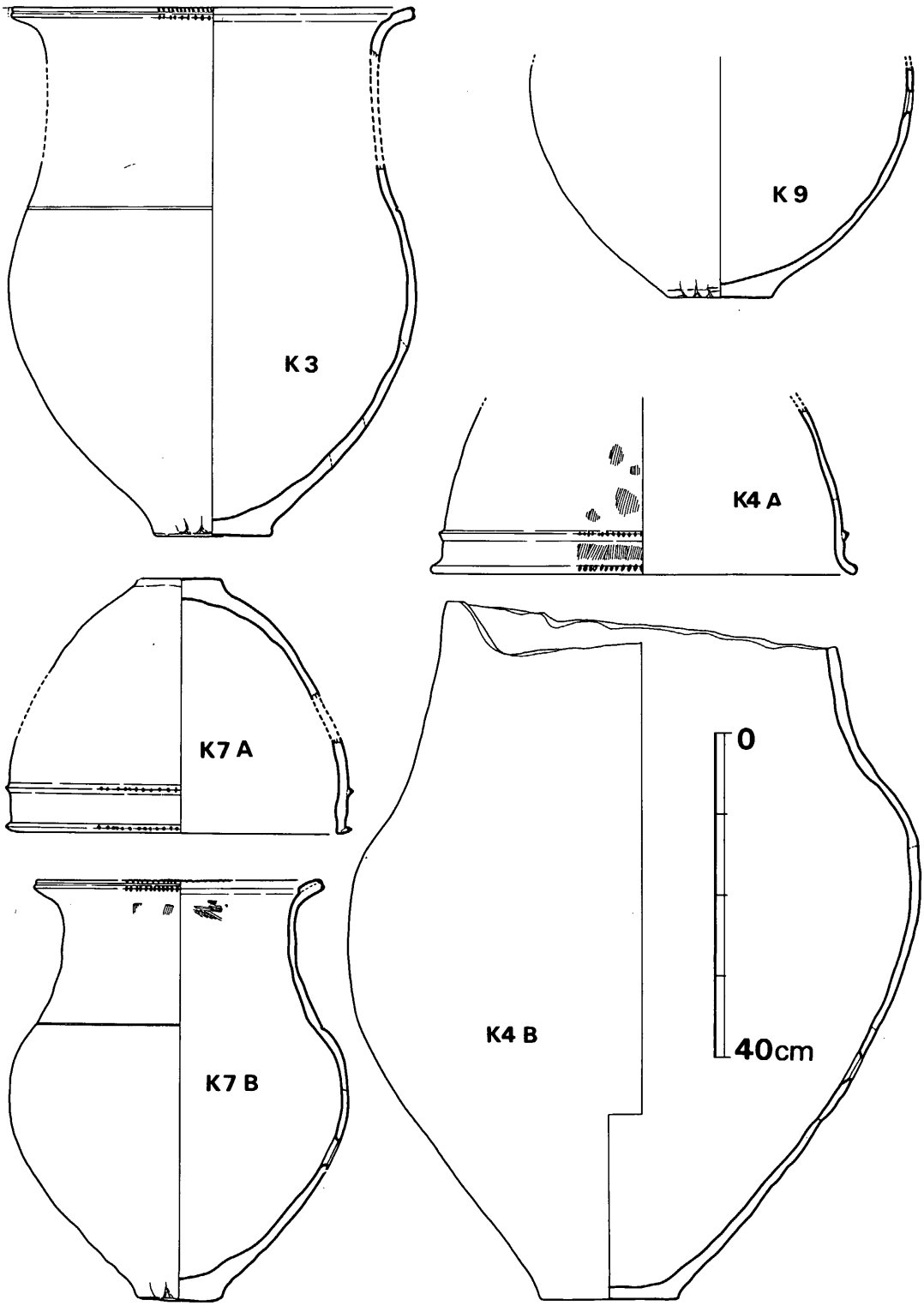


Fig. 236　第3・4・7・9号甕棺実測図（縮尺 1/8）

K 3 (Fig.236・242)

上下2個の棺を用いたとすれば上棺片が覆口下半部に残っても良いが，下棺が口縁まで残るのに対し，1片すらみられない。単棺の可能性が強い。上半を殆んど削平され，棺体も頸部上半以上は図上復元に頼らざるを得なかった。口縁部内面に強く指で押さえて太い沈線を巡らし，結果的に段状をなして口縁上面を肥厚させるものと同じ効果を表現したものと考える。口縁上面の粘土貼り付け或いは折り曲げによる肥厚の状態は，数ケ所を切断して観察を行なったが,明確に貼り付けであるとは認められなかった。器表磨滅して調整全く不明である。胎土に粗砂多く含み，焼成やや良好で，暗黄茶褐色を呈する。図示した器高は全くの推定復元による。

K 4 (Fig.236・242)

上棺は，底部～胴下半を殆んど後世の削平により欠損するが，大型の浅い甕形土器を用いる。口縁端と三角凸帯上に刻目を施す類で，頸部外面縦ハケ，凸帯を挟んで上下間は横ナデ，以下胴部はやや粗い縦ハケの上を横ヘラ磨きを行なう。内面は磨滅著しく調整不明である。胎土に粗砂極めて多く含み，焼成大旨良好で淡茶褐色を呈する。

下棺は極めて大型品で，頸部は締まり，肩部で張り，長めの器形となる。口縁～頸部上半を荒く打ち欠き，胴中位には焼成後の穿孔を行なう。頸部と肩部の境目には，沈線・段等は認められず，全体に大きなくびれがみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡茶褐色を呈する。全体に磨滅著しいが，内外面に横ヘラ磨き調整がみられる。

K 5 (Fig.235・242)

頸部以上を削平され，下半部しか残らないが，頸部から自然に肩部へ移行してその境目に1条の沈線を巡らす。胴径が大きく，全体にやや扁平な感を与える。殆んどの器表面が磨滅するため調整不明である。胎土に粗砂多く，焼きは良く黄褐色～暗茶褐色を呈する。

K 6 (Fig.235・243)

中期甕棺に於ける傘蓋形土器の祖形とも言える口径の大きい甕形土器を上棺とする。口縁外端と頸部直下の断面三角凸帯上に各々刻目を施す。口縁内外面横ナデ，頸部内面横ハケ，外面にはやや粗い斜めハケ，胴部は縦ハケを施す。胴下半外面は器表の磨滅著しく，ハケが残らないが，全面に施されたものと推定される。胎土に粗砂多く,焼成やや不良で外面淡茶褐色,内面灰黒色を呈する。

下棺は，口縁直下外面を僅かに肥厚させ，明らかに口縁外下端部のみに刻目を施し，胴部と頸部の境は自然に移行し，胴は張る。口縁下外面の肥厚部は，稜をなす部分も幾らかあり，意図的に肥厚させ段状に作ろうとしたものかとも思われる。口縁内外面に横ナデ，頸部内面には

横ハケの上を横ヘラ磨き，以下内面横ヘラ磨き，外面胴部上半～頸部には極めて粗い横・斜めハケの上を横ヘラ磨き，部分的にハケが残る。全体に整美な感じを与える土器である。

K 7 (Fig.236・243)

上棺は亀ノ甲タイプの甕で，口縁外端と三角凸帯の上に各々刻目を施す。口縁内面と凸帯直下までの外面には横ナデ，胴部外面には粗い横ヘラ磨きを行なう。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗黄褐色～淡茶褐色を呈する。

下棺は，口縁上面を肥厚させ口唇部上下端に刻目を施し，肩部上のくびれ部には1条の沈線を巡らす。沈線はかなり鋭く，削りとる様にしており断面三角形をなす。胴部は壺状に丸く張る。口縁内外面横ナデ，頸部内面には横ハケの上を横ヘラ磨きを行ない，粗いハケを残す。外面も総て横ヘラ磨きで，口縁直下に縦ハケ痕が僅かに残る。底部外面には強い指オサエ痕がみられる。胴半に焼成後の穿孔がみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗褐色～茶褐色を呈する。

K 8 (Fig.235・243)

上棺及び下棺の上半の殆んどを削平されており，小型の下棺胴部のみが残っていたものである。胴部が丸く張る壺形土器で，底部外面は輪状に窪む。内外面ともに器表の剝落が著しく調整不明である。胎土に粗砂多く含み，焼成やや良好で淡茶色を呈する。胴部穿孔の有無は残りが悪く不明である。

K 9 (Fig.236・243)

上半を削平されて，下棺の胴部以下のみ残存する。球形に張る胴部をなす。外面下端部に強い指オサエ痕がみられる。器表は著しく磨滅して調整不明である。胴部中程に焼成後の穿孔を行なう。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，黄褐色を呈する。

布目圧痕 (PL.102)　この土器を復元した際，岩瀬正信氏が胴部中位付近の小破片割れ目に布状圧痕のあることを発見された。　この小破片は確かにこの土器と同一個体であり乍ら，確実に接合することのできなかった小片である。圧痕は3㎜間に5本の経・緯糸を平織りにしたもので，極めて目が細かく，詳細は専門家の鑑定結果に待たねばならないが，その素材は何かという問題になろう。孰れにせよ，胎土中に故意に入れたものではなく，偶然に小片が混入したものであろう。織り目は経糸と緯糸とが直交せず，その間隙は菱形状となる。

K10 (Fig.237・244)

上棺及び上半部を殆んど削平されていたが，下棺の口縁部片が中に落ち込んでいたため，全

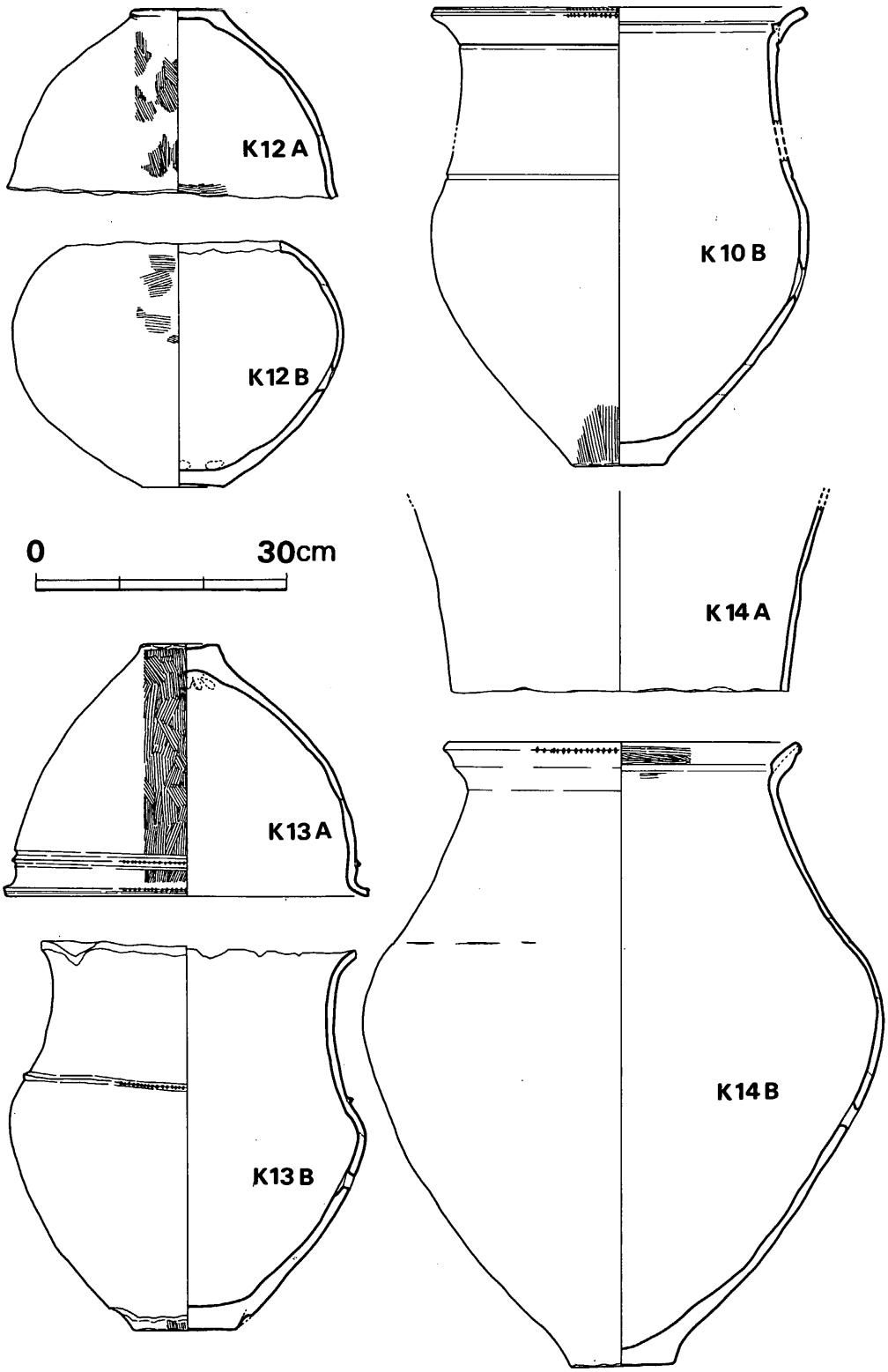


Fig. 237　第10・12・13・14号甕棺実測図（縮尺 1/8）

体を図上復元することが出来た。口縁内面には，東北九州や山口県地方の同時期壺にみられるような断面三角形の凸帯を貼り付ける。口縁下外面には幅広く断面三角形に削り出した沈線状の段がつくられ，肩部に太い沈線が巡らされる。 口唇部は凹状になり上下端に刻目が施される。口縁内面横ナデ，内面は胴部中位にヘラ磨きがみられるが，殆んど不明で，外面はヘラ磨き，下端部にはやや粗い縦ハケ調整が施される。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗茶褐色～暗褐色を呈する。

K11 (Fig.244)

前方後円墳西側くびれ部下に，第44・47号袋状竪穴を切って埋甕が検出された。位置として，群集する甕棺墓域からはずれた場所にある。残りが悪く，小片に割れて出土したため，復元不能であった。西側端部が厚手となり底部付近かと推定され，内面には粗いハケ調整が全面に施されていた。丸底の大きい壺棺であったと推定される。この近辺から厚手の二重口縁片が採集された記憶があり，同類である可能性もある。以上，述べたように，位置や，内面のハケ等の特徴より弥生後期～古墳時代初頭（古剣塚2号墳＝方墳の脇であること等から）の所産であろうと考えられる。

K12 (Fig.237・244)

墓坑形態の判かる数少ない例で，大きい竪坑を掘り，更に斜めに上下棺体がすっぽり入る程の斜坑を掘っている。上棺は，口縁を打ち欠いた口径の大きい甕形土器である。如意形に伸びた口縁をつくり，口唇部下端に刻目を施す類となろう。頸部内面に横ハケ，外面にはやや細かい縦ハケを施す。胎土に粗砂を多く含み，焼成良好で赤茶褐色を呈する。

下棺は，肩部で打ち欠き，胴部のみの小型の壺である。底部は僅かな上げ底となり，胴部上半には粗い横ハケの上に横ヘラ磨きを行ない，下半は横ヘラ磨きを行なう。内面には丁寧なナデ調整を施す。外面のハケが残るのは深く施される為で，その上も一応磨いているのである。やや下位に焼成後の穿孔を行なう。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で，淡褐色～茶褐色を呈する。

K13 (Fig.237・245)

上棺は，頸部で外反する口縁下端と三角凸帯上とに刻目を施す類で，厚い底部は上げ底状になる。口縁内外面横ナデ，頸部外面縦ハケ，胴部全面にやや細かい縦ハケを施す。内面は丁寧なナデ，底部内面には指オサエ痕がみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡黄褐色～黒色を呈する。

下棺は，口縁を荒く打ち欠き，頸部下のくびれ部に三角凸帯を貼りつけ，刻目を施す。底部は極く僅かに上げ底状となる。下端の底部側面部が全周に焼成前に剝げ落ちており，ごく部分

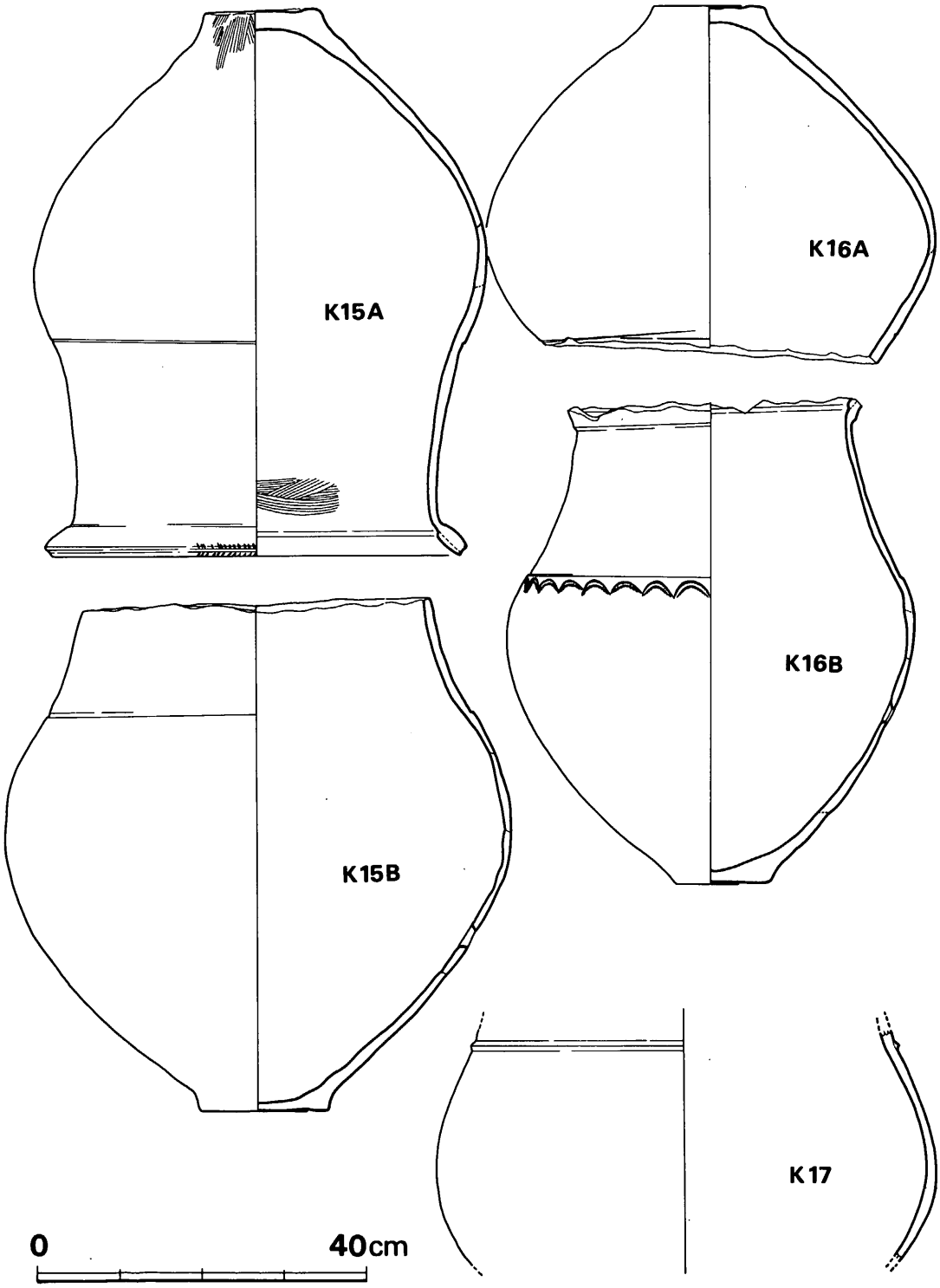


Fig. 238　第15・16・17号甕棺実測図（縮尺　1/8）

的に修復している。修復していない部分に粗い縦ハケが認められる。内面は粗い横ヘラ磨きを行ない，頸部外面は右下がり斜め方向のヘラ磨き，凸帯部を挾んで上下間は横ナデ，以下胴部外面は横ヘラ磨き調整がなされる。胴部中位に焼成後の穿孔がみられる。 胎土に粗砂多く含み，焼成良好で器表の残り良く，茶褐色を呈する。

K14 (Fig.237・245)

上半を削平されていた為，上棺の殆んどと下棺の半分以上を欠く。第52号袋状竪穴の一部を切る。上棺は口縁部を丁寧に打ち欠いた極大型壺で，頸部のみが残る。内外面ともにかなり磨滅しているが，ヘラ磨きを行なうようである。焼成良好で淡茶褐色を呈する。

下棺は，頸部が締まり器高の高い極大の類である。口縁部は「く」の字状に屈曲して，他例の如く上面が水平に近くのびる類ではない。口縁内面に粘土を貼り付け，肥厚させ，口唇部下端にのみ刻目を施す。肩部上端には，全く明確ではないが，沈線らしきものがみられ，可能性として沈線とみてもいいかもしれないという程度である。口縁外面は中ぶくらみし，部分的に稜をなす部分もある。口縁内面の肥厚部上に粗い横ハケがみられ，胴部中位外面には右下がり斜めヘラ磨き，下半には粗い縦ヘラ磨きが施される。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡黄褐色を呈する。

K14副葬小壺 (Fig.233)

底部片が主軸線上北端部に，肩部文様部片が，西側覆口部脇に出土した。同一個体であり，肩部片の出土した部分付近が原位置であったろうと推定され，副葬小壺であると判断した。全体に厚手の器壁を有し，肩部に細い沈線による細かい格子目文が施される類である。底部は全体に僅かな上げ底状をなし，円盤貼り付けの底部ではなく，外面は底外面まで丁寧なヘラ磨きが行なわれる。底部内面には指オサエ痕もみられ，内面はナデ調整かと思われる。胎土に幾らか細砂含むが全体にかなり精良で，焼成やや不良，白灰色～灰褐色を呈する。

K15 (Fig.238・245)

上棺は，口縁内面を肥厚させ端部上下に刻目を施し，肩上端に沈線を巡らす類である。口縁部はそれほど水平に近くならず，やや外傾するのみである。底部は輪状に窪む。口縁内外面横ナデ，頸部上端内面に粗い横ハケ，以下内面には横ヘラ磨きを行なう。外面頸部から胴部は横ヘラ磨きで，下端部に縦ハケが残る。口縁外面には段状をなす部分もみられるが，殆んどの部分では明瞭ではない。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で黄茶褐色を呈する。

下棺は，頸部中位で丁寧に打ち欠き，球形に近く張る胴部と締まる頸部をつくる類である。頸部下端は幅広い沈線状であるが，大部分では段状をなす。内面横ヘラ磨き，外面も横ヘラ磨きを行なう。胴下半には焼成後の穿孔がみられる。底部外面は輪状に窪む。胎土に粗砂を多

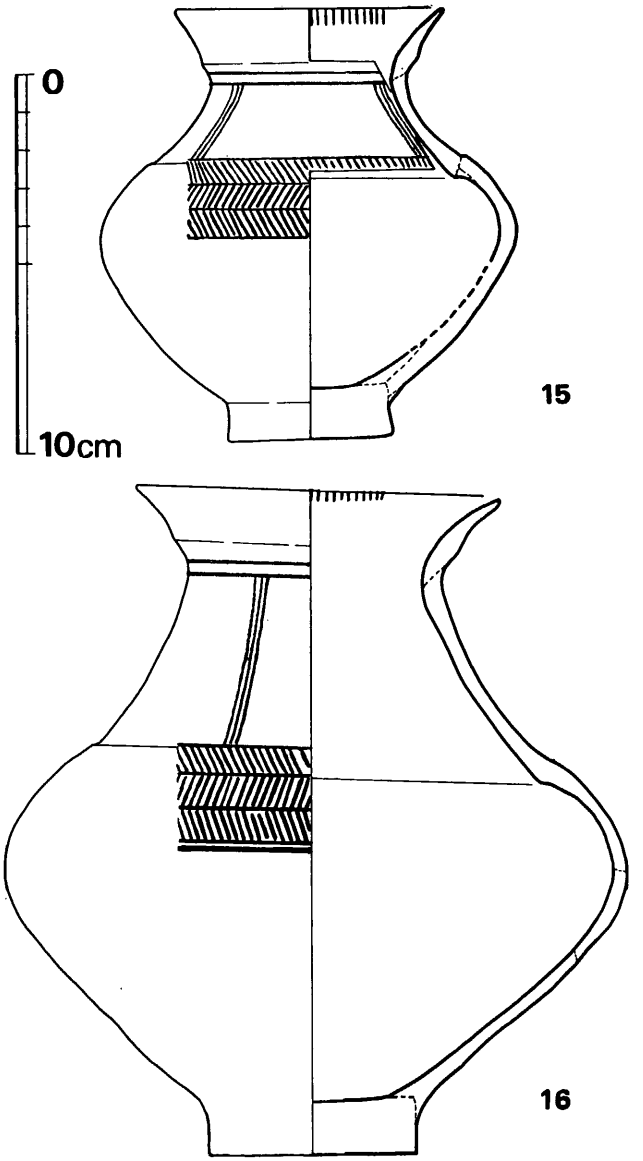


Fig. 239 第15・16号甕棺墓副葬小壺実測図（縮尺 ½）

く含み，焼成良好で暗褐色～淡茶褐色を呈する。

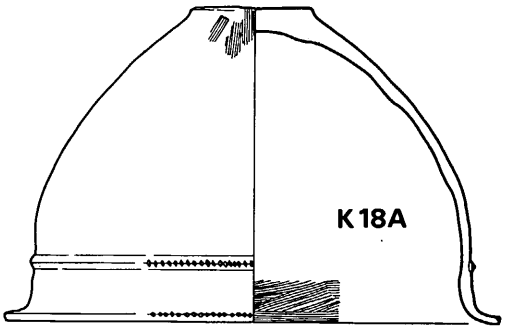
K15副葬小壺 (Fig.239)

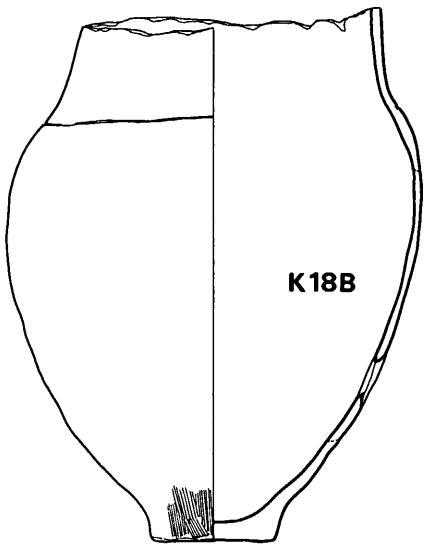
墓坑内北西際の覆口部脇にその部分だけ坑を拡げ，小壺が供献されていた。（尚，その反対側の南東側にも一部を拡げた場所がみられる。）口縁部内面に短かい縦線を連ね口縁直下に2条線を巡らし，頸部には縦3本線を，更に肩部に有軸の羽状文を施す。縦3本線は全周に4ケ所配される。これらはいずれも赤色顔料による彩文である。全体に薄手で，口縁外面は中ぶくらみし，肩部上端屈折部は，外面に明確な段をなし，内面には稜をなす。胴部最大径を上位につくり，ぐっと張る。底部は，外観上円盤との接合部での屈曲線をみせないが，一応円盤貼り付けのタイプに含まれよう。器表は外全面に丁寧に磨いている。胎土精良で，焼成良好，茶褐色を呈する。

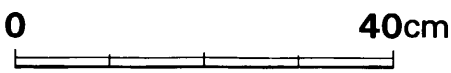
K16 (Fig.238・246)

棺内に副葬小壺を有するものである。上棺は肩部上端部で以上をやや斜めに打ち欠いており，肩部上端に1条の沈線を巡らす。沈線は，ごく部分的ではあるが15cm長さの間は削り出した段状となる部分がある。胴はかなり張る。外面横方向のヘラ磨きで，内面も横ヘラ磨きがみられる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好，淡褐色を呈する。

下棺は，口縁部の上半のみを荒く打ち欠いている。これは，当初より打ち欠く予定ではなく，







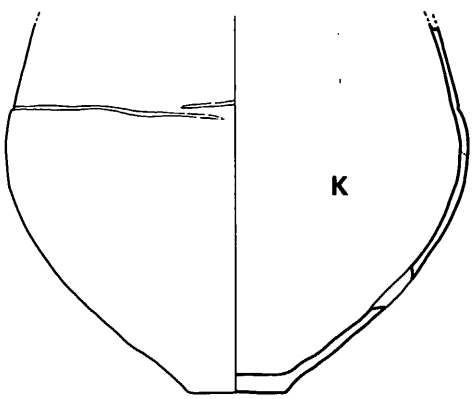


Fig. 240　第18・番外号甕棺実測図（縮尺 1/8）

上棺を覆う際に慌てて先端のみを打ち欠いたという『設計ミス』による結果であろう。口縁内面に粘土を貼り付け肥厚させ，外面も段部をつくり，肩部に貝殻腹縁による下弦の2重の弧文を連ねる。頸部と肩部の境目は，段をつくる。これは，沈線状部分が極く一部分のみで，他大部分は削り出した段状をなすという状態である。胴部は丸く張り，底部は僅かに上げ底状となる。全体に均正のとれた整美な土器である。口縁内外面横ナデ，頸・胴部内外面横ヘラ磨き調整を行なう。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で淡黄褐色をなす。

K16棺内副葬小壺 (Fig.239)

下棺の穿孔部付近に横転して出土したが棺内面より僅かに浮いた状態であった。すぐ横に下棺の口縁～頸部大破片がずれ下がってきており，当初下棺内頸部付近に在ったものがそれと一緒に下にずれ転がったものと考えられる。口径7.1cm，底径4.3cm，器高11.3cm，胴最大径10.9cmの小ぶりな端麗な小壺である。口縁内面に短かい縦線を連ね。口縁外面下端の段部下に2条線を巡らし，頸部に縦に3本平行線を施し，肩部には有軸羽状文を密に描く。これらは赤色顔料による彩文である。口縁外面で中ぶくらみし，不明瞭な稜をなす。頸部と肩部との境は明瞭な段をなす。その内面も鋭く稜をなす。胴部最大径を上位につくり張る。底部は厚い円盤貼り付けを行なう。口縁～頸部内面と外全面に横方向ヘラ磨きを施す。胴部以上は黒色変して，その上を光沢をなすまで丁寧に研磨している為に黒色磨研手法

の如き感をも与える程である。頸部の縦3本線は全周に四ケ所均等に配置施文している。丹彩はいずれも幅1㎜程度で，両端が細めになるもので，極めて密に，正確に描いており，筆状のものを用いたものかと推定される。例によって胎土は精良で，焼成かなり良好であり，淡茶褐色乃至暗黒色を呈する。

底部などに板付Ⅰ式の特徴を残し乍ら，胴部最大径を上位に有することや口縁等に既に板付Ⅱ式の様相が伺われる。以上の諸点より，従来の編年に従うならば，板付Ⅱa式のうちでも古式に含まれると考え得る。

K17 (Fig.238・246)

古剣塚2号方墳の地山整形により斜面となった部分より，削平されて胴部のみになった上棺が出土した。

やや下ぶくれのする胴部につくり，肩部上端に断面三角凸帯を貼付けている。全体に磨滅著しく，凸帯上の刻目の有無等は全く不明であるが，刻目を施す可能性も強い。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で暗茶褐色を呈する。

K18 (Fig.240・246)

上棺は，口縁がやや長く水平にのび，その下端部と三角凸帯上に刻目を施す傘蓋形甕である。口縁下半～頸部内面にやや細かい横ハケを施す。下端はヘラで消す。以下内面は極めて粗い横ヘラ磨きを施す。口縁内面上半～外面は横ナデ，頸部外面を横ヘラ磨き，凸帯を挾んで上下間は横ナデ，凸帯下約10㎝までは，光沢のある横ヘラ磨き，以下は斜め～縦方向ヘラ磨きで，下半はかなり粗くなる。下端には縦ハケを残す。胎土に粗砂多く含み，焼成やや不良で黒色～灰黒色を呈し，全体に黒色磨研様の如きである。器表の残りはかなり良好である。

下棺は，頸部中途で荒く打ち欠かれたもので，頸部でしまり，縦長の細身な感じのする土器である。肩部上端には，一部で段状となるが殆んどでは完全な沈線となる類を巡らす。底部は僅かな上げ底状となる。胴下半には焼成後の穿孔がみられる。内外面ともに横ヘラ磨きを行ない，下端には粗い縦ハケ調整を施す。胎土に粗砂を多く含み，焼成は良好で，赤褐色乃至暗黄褐色を呈する。

K番外 (Fig.240)

甕棺墓群の西方崖際付近の前方後円墳封土中の下層より破片群として採集したものを復元し

たら，図示した如き下棺に用いられた土器が組み上がった。

頸部中途で欠損（打ち欠きではない。）しており，肩部に浅く太い沈線が巡らされる。全体に球形の胴部をつくり，底部は極く僅かな上げ底状となる。胴下半に焼成後の穿孔がみられ，下棺であったことを物語る。内面横ヘラ磨き，外面上半は斜め右下がりヘラ磨き，下半では縦ヘラ磨きに近くなる。胎土に粗石英粒多く含み，焼成良好で淡褐色を呈する。（中間研志）

註 1）調査に参加された柳田康雄氏より御教示いただいた。

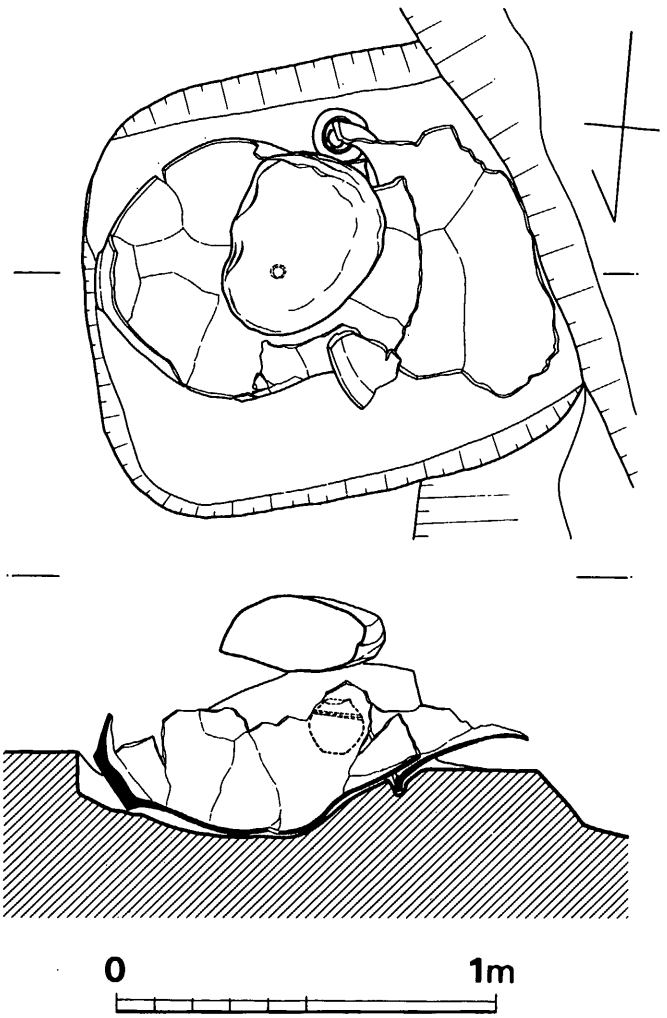


Fig. 241 第1号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

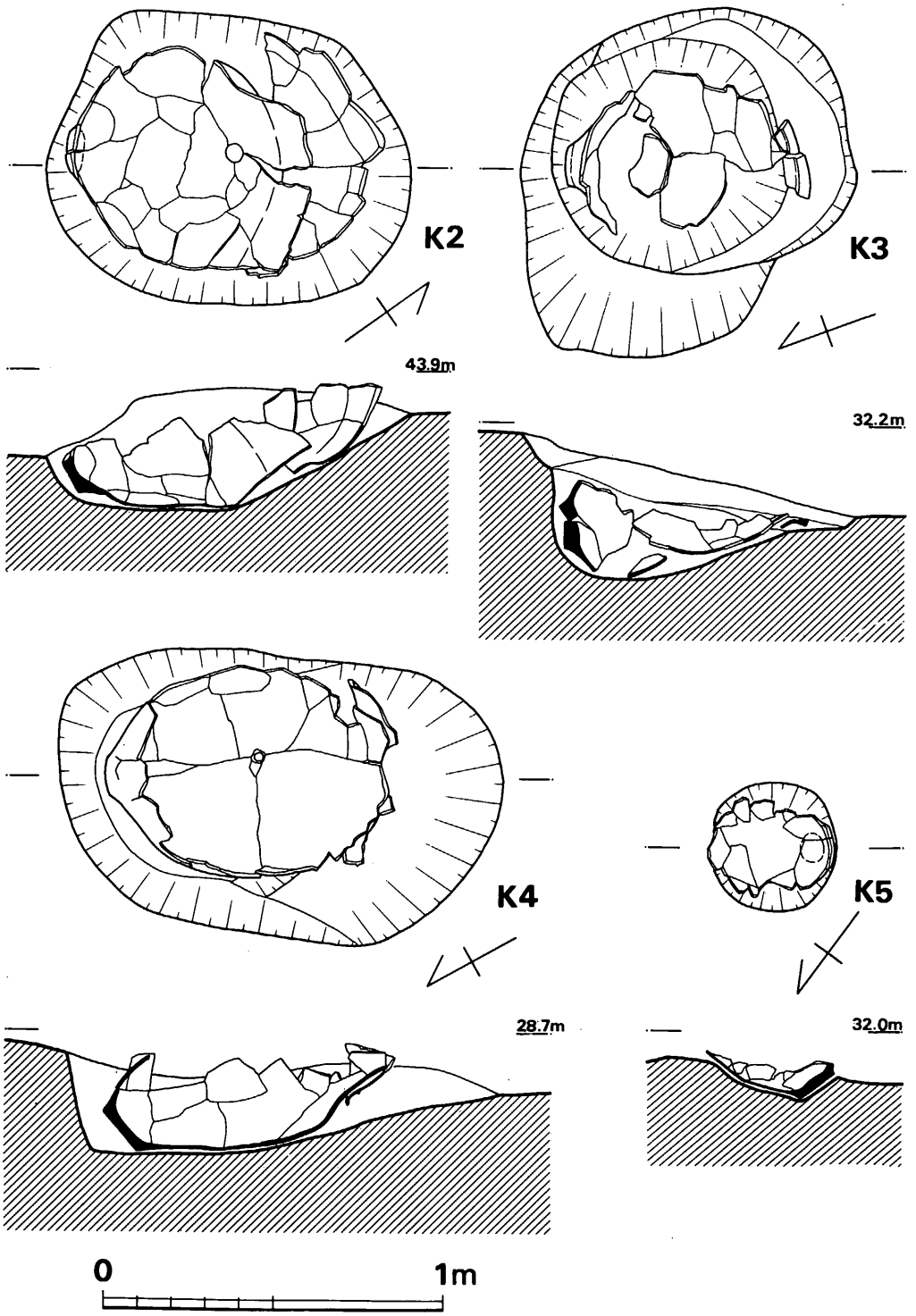


Fig. 242　第2・3・4・5号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

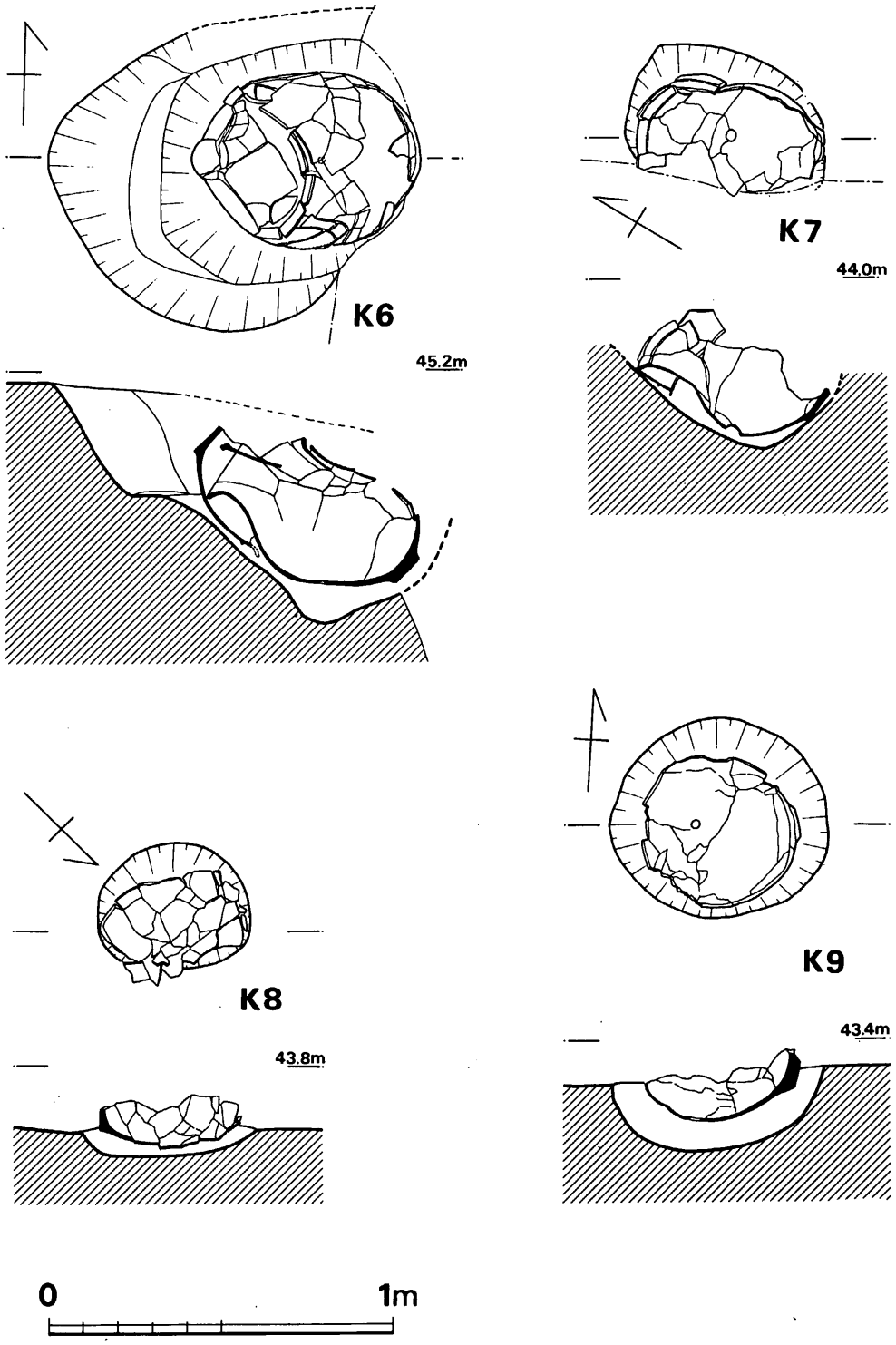


Fig. 243　第6・7・8・9号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

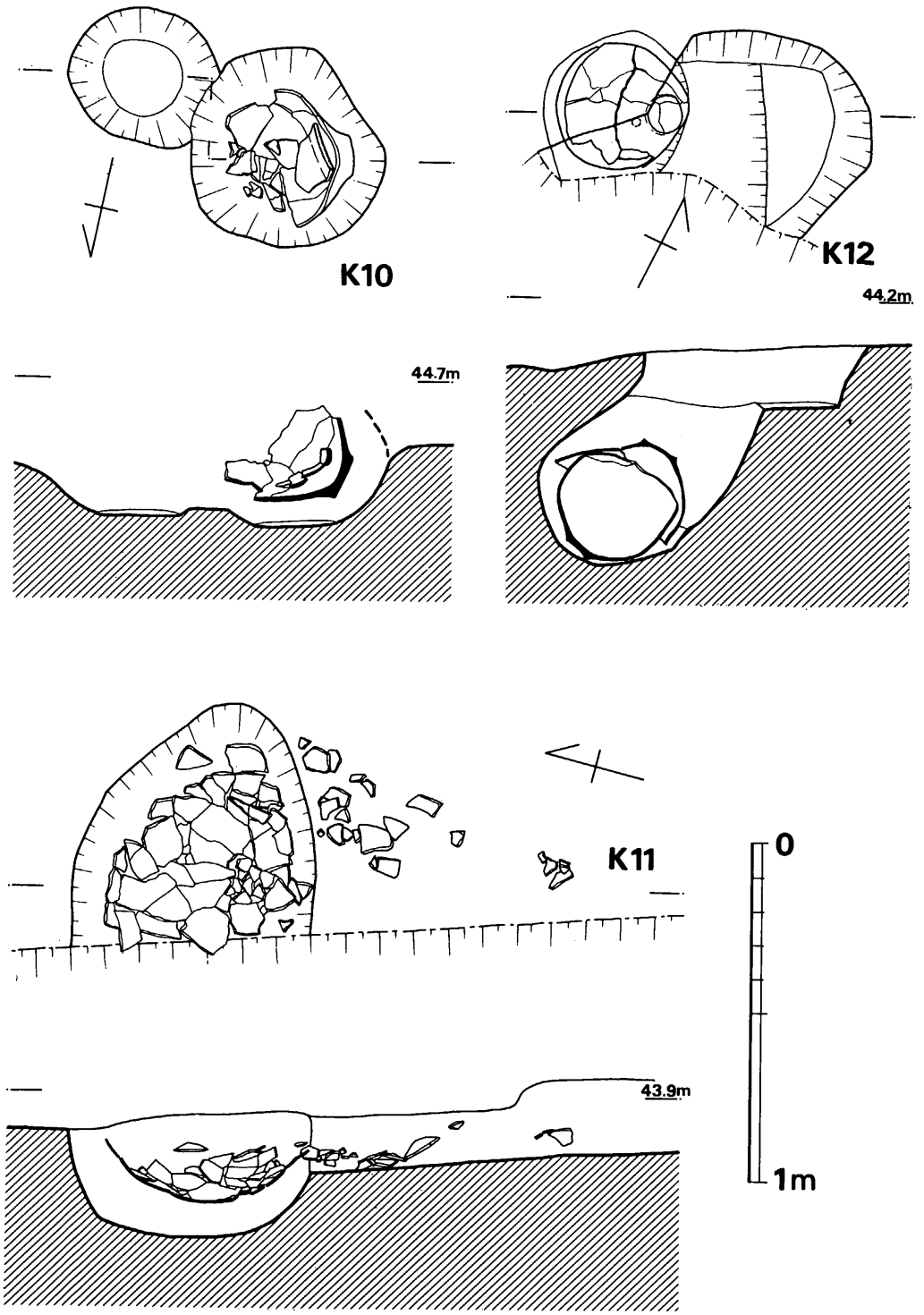


Fig. 244　第10・11・12号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

4 甕 棺 墓 群

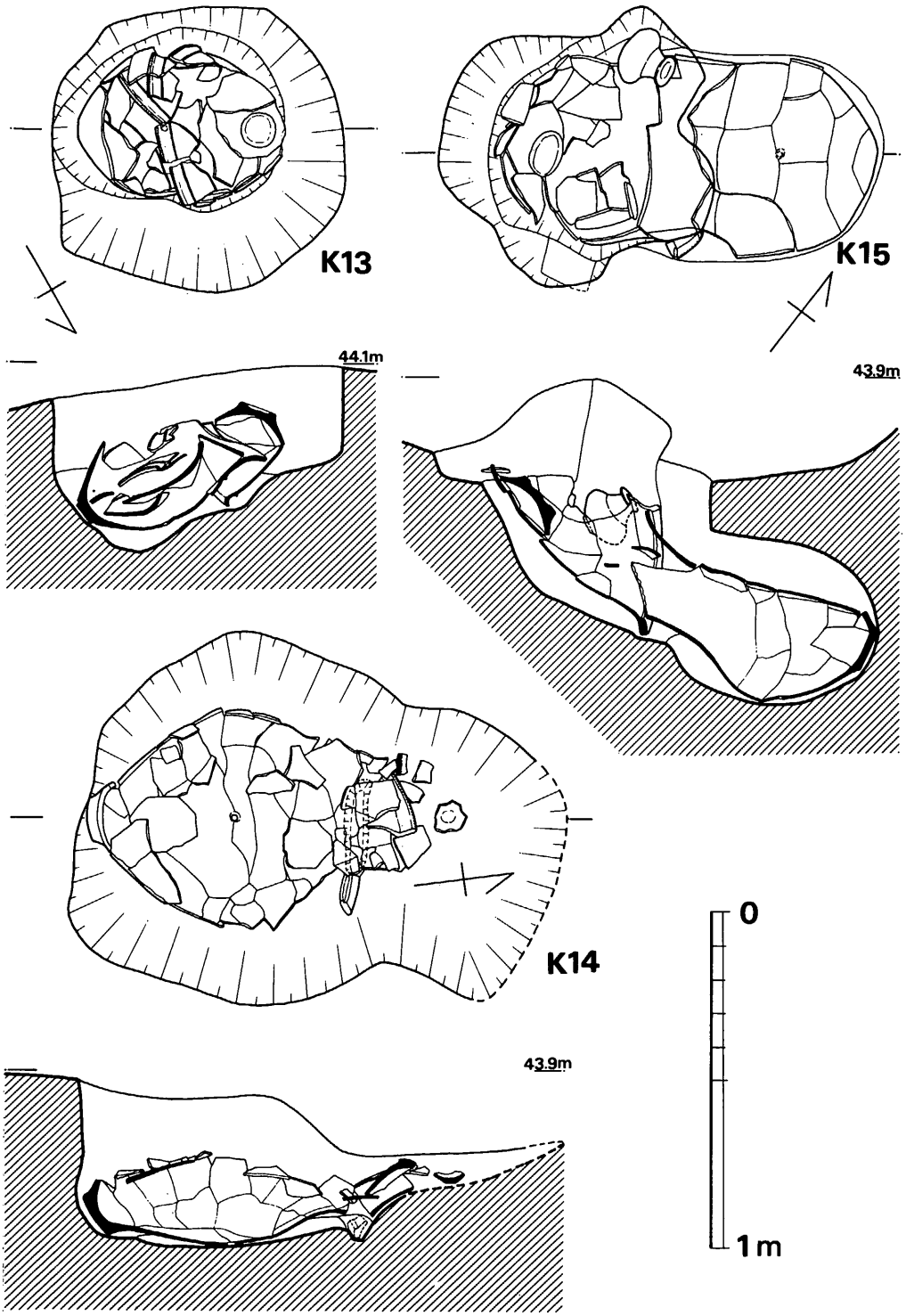


Fig. 245　第13・14・15号甕棺墓実測図（縮尺 1/20）

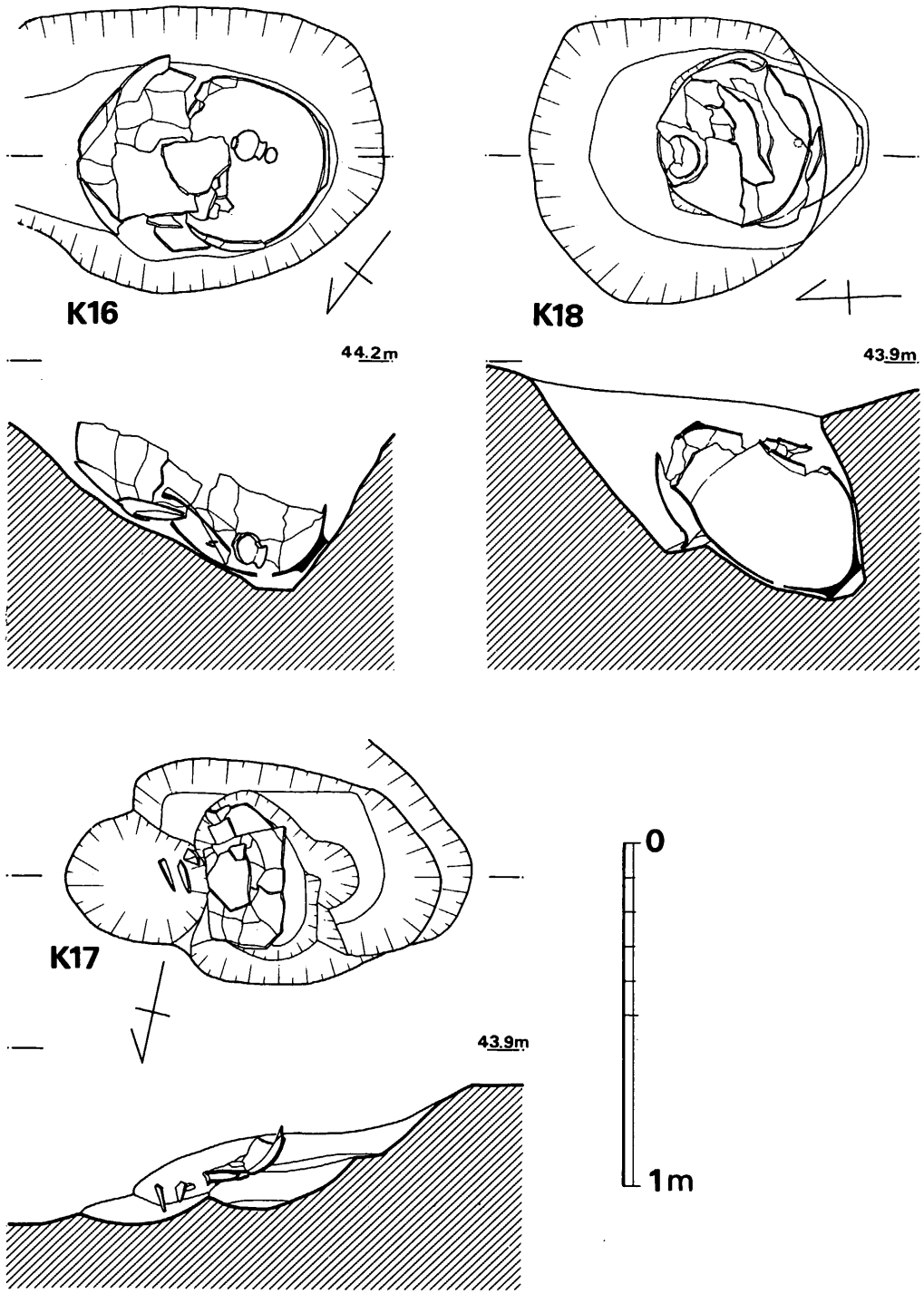


Fig. 246　第16・17・18号甕棺墓実測図（縮尺　1/20）

Ⅵ—5　石蓋土坑墓・箱式石棺墓

前方後円墳前方部下の弥生期旧地表下より，石蓋土坑墓2基，組合わせ式の箱式石棺墓1基が検出された。箱式石棺墓としては，この北方に2基平行してつくられ（第1・2号石棺墓），古剣塚1号墳（前方後方墳）の主体部と見做されており，一応古墳時代の所産として，上巻の方で取り上げたので，ここでは触れないこととする。

石蓋土坑墓・箱式石棺墓の集中する部分の切合い状況からみられる新旧関係は以下のとうりである。

第36号袋状竪穴 → 第1号石蓋土坑墓
第36号袋状竪穴 → 第3号箱式石棺墓
第2号土坑墓 → 第2号石蓋土坑墓 → 第3号箱式石棺墓

第1号石蓋土坑墓と第2号石蓋土坑墓との関係及び，第3号箱式石棺墓との新旧は明確でない。しかし，各々が集中して営なまれることを併考すると，それ程時期的差があるとは思えな

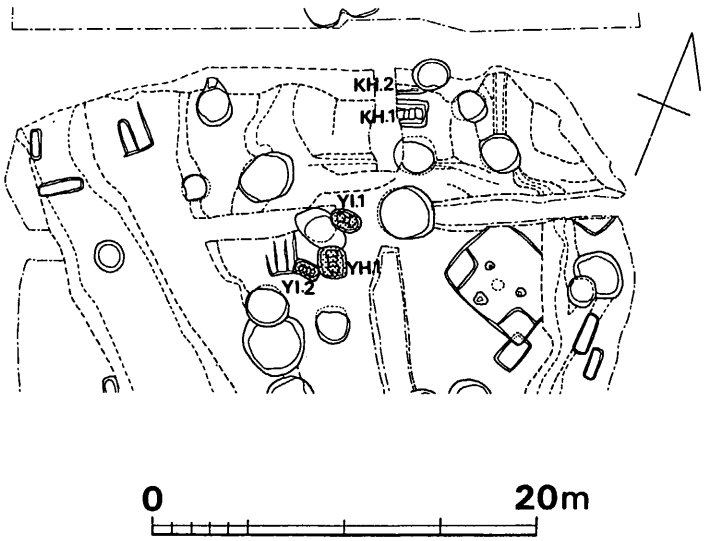


Fig. 247　石蓋土坑墓・石棺墓配置図（縮尺 1/400）

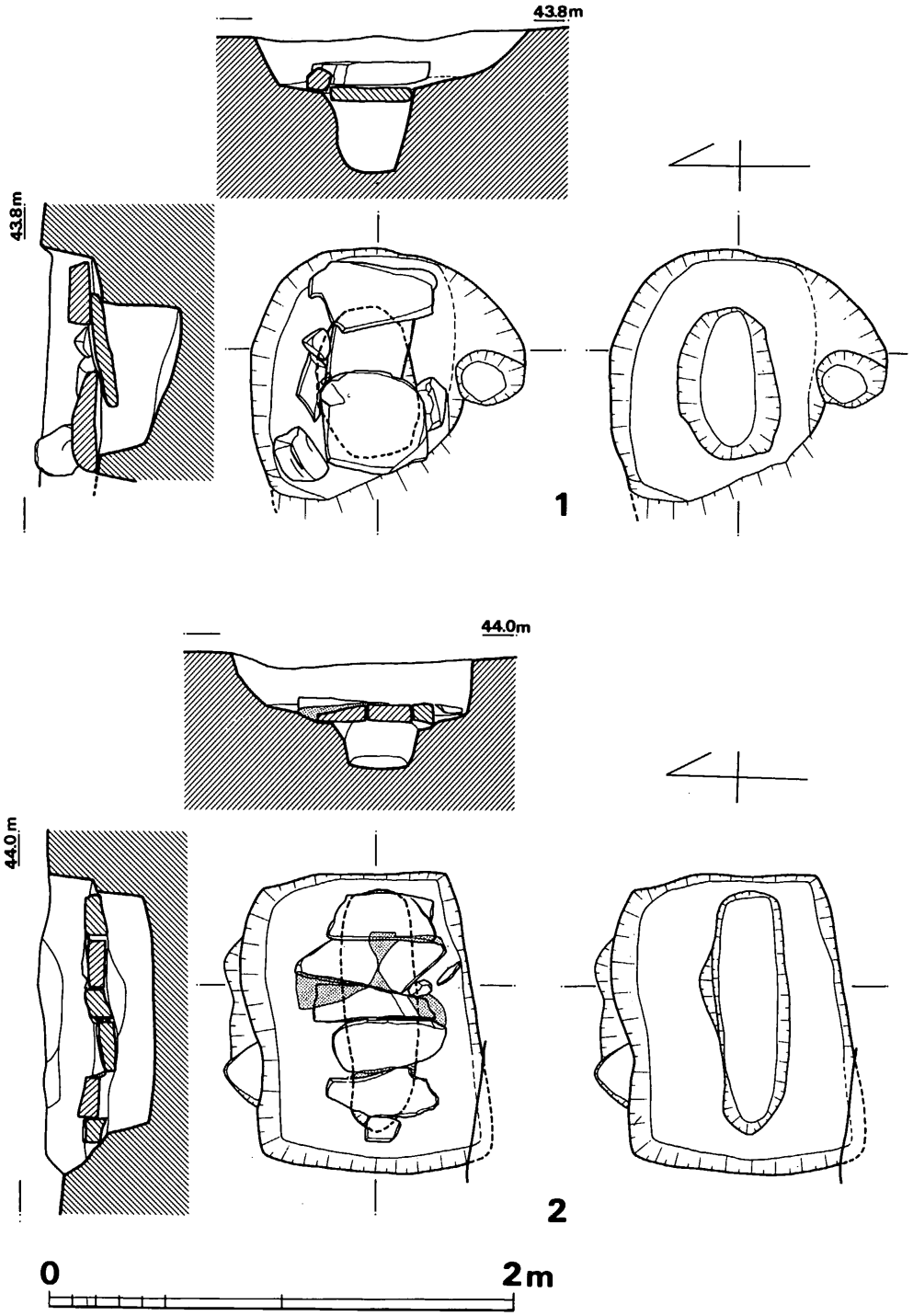


Fig. 248　第１・２号石蓋土坑墓実測図（縮尺　1/30）

い。ただ，石蓋土坑墓の2基が形式的にも同種墓制であり，主軸方向も一致しており，同時期と考えて良い。第2号土坑墓も2号石蓋土坑墓に切られるとしても，第3号石棺墓と主軸を同方向にとり，明確な2段掘りの形態をとり，前期の土坑墓群とも離れた位置にあり，時期的にもやや石蓋土坑墓・石棺墓等の方により近い時期と考えられよう。

第1号石蓋土坑墓 (Fig.248)

主軸をN90°Wの磁東西にとり，不整円形の墓坑中央に長円形の土坑を掘り，3枚の板状石を用いて蓋をかぶせる。墓坑は長さ117cm（復元），幅116cm，墓坑上面から土坑最下部までの深さは58cmを測り，土坑部は長さ65cm，幅42cm，深さ20～33cmを測る。石蓋は，中央の1枚を最初にかぶせて後，東西の板石で補なう。また北側中央部に2個，南側に1個の角礫で隙間を補充している。石材は玄武岩，及び花崗岩の板状となった類を用いる。蓋石間等の粘土目貼りはみられない。土坑底床面は東へ24°傾斜しており，高い方を枕状の部分と同様とすると，頭位は西にとったことになる。内面・蓋石等における朱の使用も認められない。長さが65cmしかなく，小児用と推定される。遺骨や副葬品等の遺物は全く残らない。

第2号石蓋土坑墓 (Fig.248)

主軸をN88°Eの東西にとり，不整長方形の墓坑に，舟形プランの土坑をつくる。墓坑の長さ126cm，幅100～85cm，深さ45cm，土坑の長さ102cm，幅31～26cm，深さ22cmを測る。石蓋は5枚の板石を用い，西端部や南側に補塡の為の角礫を数個用いる。蓋石間には目貼りの為に黄白色粘土を粗く用いる。床面や石蓋等における朱の使用は認められない。遺骨，副葬品等も全く検出出来なかった。

Tab. 54　石蓋土坑墓一覧表　　(単位：cm)

No.	主軸方位	墓坑プラン	土坑プラン	墓坑 長×巾×深	土坑 長×巾×深	石蓋長	石蓋数	副葬品	備考
1	N90°W	不整円形	長円形	117×116×58（推定）	65×42×20～33	91×53	3 他に角礫4	なし	36号袋状竪穴を切る。土坑床面東へ24°傾斜
2	N88°E	不整長方形	長円形	126×85～100×45	102×31～26×22	106×64	5 他に礫 3	なし	2号石棺に切られる 粘土封粗乍ら有り

第3号箱式石棺墓 (Fig.249)

主軸をN35°Wにとり，長さ200cm（推定），幅150cm，深さ85cmの不整長方形プラン墓坑を掘り，更に石棺側壁材を立てる為の溝状坑を掘る。長側壁は各3枚，小口部は各1個の板状石を用い，蓋石には大小4枚を使う。遺体葬置後，蓋石をかぶせ，黄白色粘土を蓋石間隙に目貼りする。埋め戻しの後に，石棺部中央上の蓋石上面より35cm上の位置に，35×23×22cmの塊石

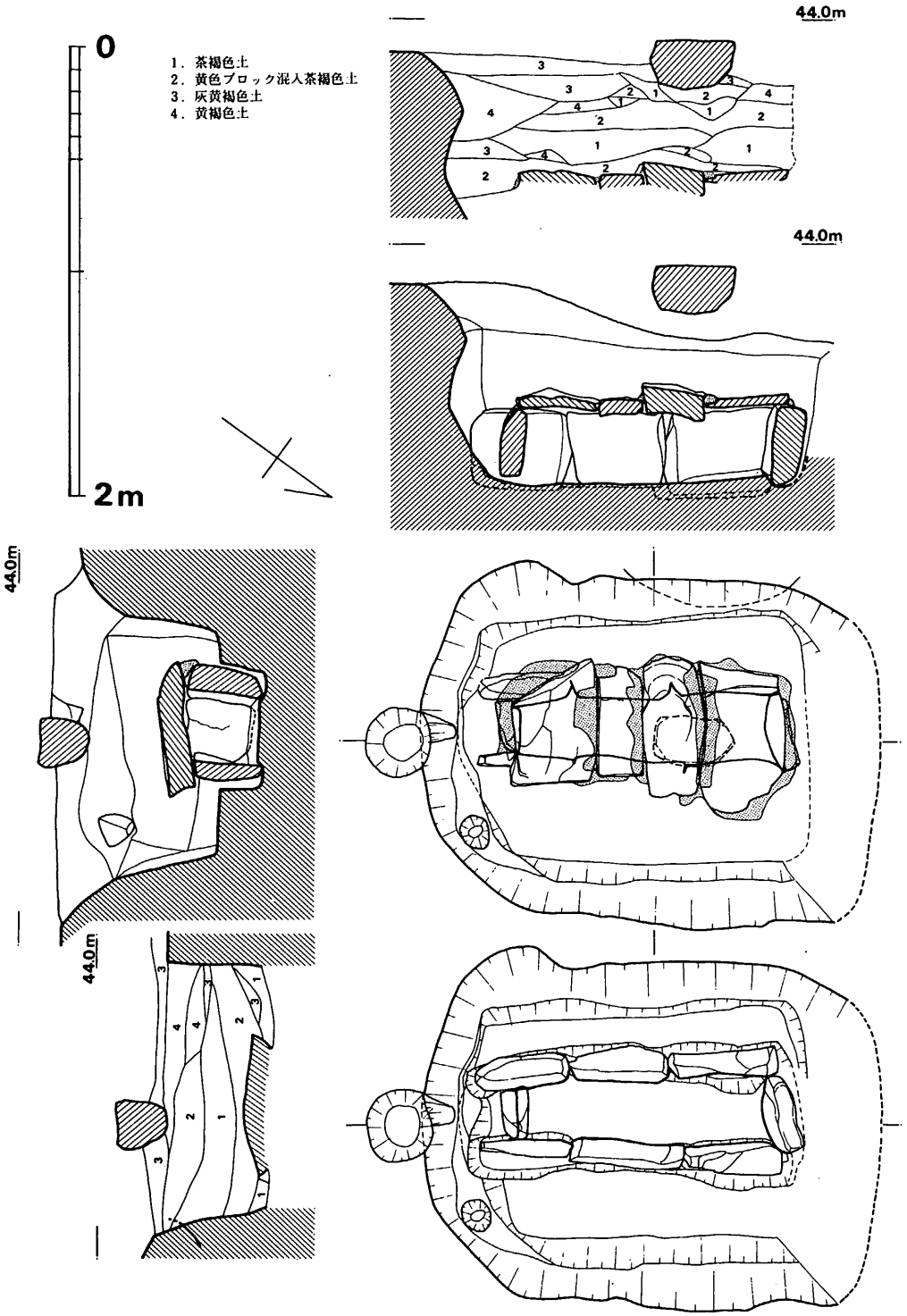


Fig. 249　第3号箱式石棺墓実測図（縮尺 1/30）

を据える。棺の内法は，長さ110cm，幅30cm，深さ30cm前後を測る。石棺材及び，床面等に朱の塗布・散布等は認められない。また，遺骨・副葬品等の遺物は全く検出されなかった。

石棺部上方の石は，土層上の検討から，墓坑内への埋め戻された土層に一部くい込んでおり，少なくともそれより浮くことは無く，石棺墓との関係は強いと判断した。墓標として考えてよいと考える。従来，弥生後期～終末期の墓制において例えば，福岡市宝満尾遺跡や鞍手郡若宮町汐井掛土坑墓・石蓋土坑墓群において墓域を区切るような標石群が検出されており，今後も類例がふえると思われる。また，既述の剣塚第1号甕棺墓においても上部に標石がみられる。時期こそ異なるが，甕棺墓や石棺墓等の如く密集して営なまれる中において棺体そのものが切り合う事は極めて稀であることを考えると，何らかの標識を考えねばなるまい。その意味においても本遺跡のこの2例は極めて格好の資料を与えることとなろう。　（中間研志）

Ⅵ—6 柱　穴　群

前項までに述べてきた弥生期各種遺構の他に，小ピット群が検出されている。これらは，大別して2地区に分けられる。

A．古剣塚2号墳旧表土下面における1群

B．3号墳との間の竪穴住居跡群周辺における1群

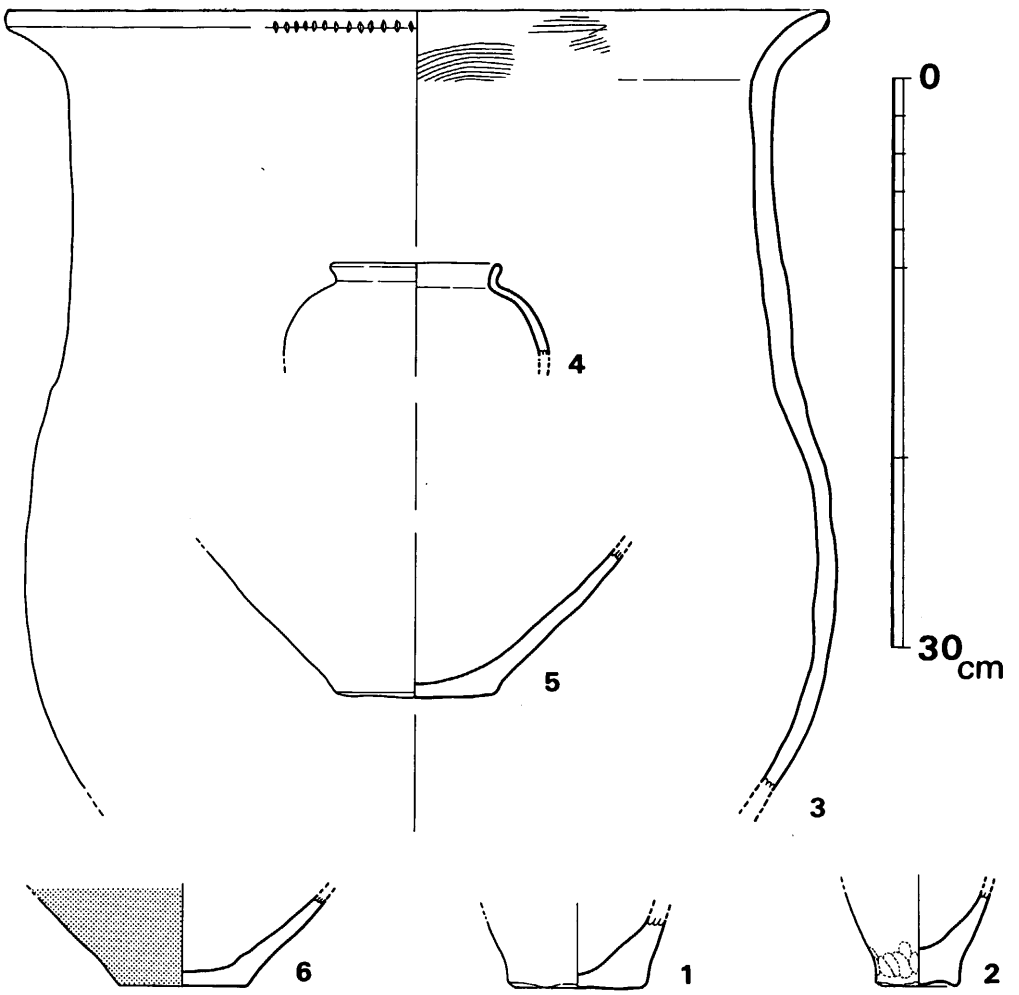
Aは，Fig.251に示す如く，第10号住居跡・第27号袋状竪穴・第2号土坑墓・第31号袋状竪穴・第30号袋状竪穴等に囲まれた地山の平坦部分で，大小約130個のピットが密集する。これらのうち幾らかの部分は住居跡等の柱穴と考えて良いものもあるが，明確に並ぶ類ではない。また，これらのピット中から出土する土器片等は，弥生期を下るものは全く無く，まず，弥生後期（第10号住居跡・石蓋土坑墓・石棺墓）の時期か，前期（各袋状竪穴）の時期のいずれかに大差無いと考えてよい。

Bは，第1号住居跡の西斜面，第8号住居跡の西側，第5号住居跡の西・南側等に，計約70個の小ピットや不整形土坑がみられた。これらのうち，約半数は須恵器小片，土師器小片，滑石製紡錘車等を出土し，古墳時代以降の所産と見做される。弥生式土器小片のみを出土するものもかなり有るが，明確に並んで，何らかの遺構を示すものはみられない。

出土遺物（Fig.250～257）

甕（Fig.250－1・2，252－1，255－3，256－1，257－1・2・4）

Fig.250－1・2はいずれもA地区の旧表土中出土品である。1は，底径7.3cmを測り，器表磨滅して調整不明。胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で暗茶色を呈する。2は，底径4.3cmを測り，僅かな上げ底状となりやや充実する。小型甕底部で，外面に強い指オサエがみられる。粗砂多く含み，焼成やや不良で黒褐色を呈する。Fig.252－1はB地区のピット中（P．71）出土品で，口縁外端部に刻目を巡らし，頸部外面を僅かに肥厚させ段を作る類である。外面に煤付着がみられ，胎土に粗砂多く，焼成良好で茶褐色を呈する。Fig.255－3は，B地区住居跡群周辺のD－10（第10号土坑）より出土のもので，底径13cmを測る大型品である。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で黄褐色を呈する。外面には横ヘラ磨きを施す。Fig.256－1は，B地区第17号



Fig．250　古剣塚2号墳旧地表及びPit中出土土器実測図（縮尺　¼）

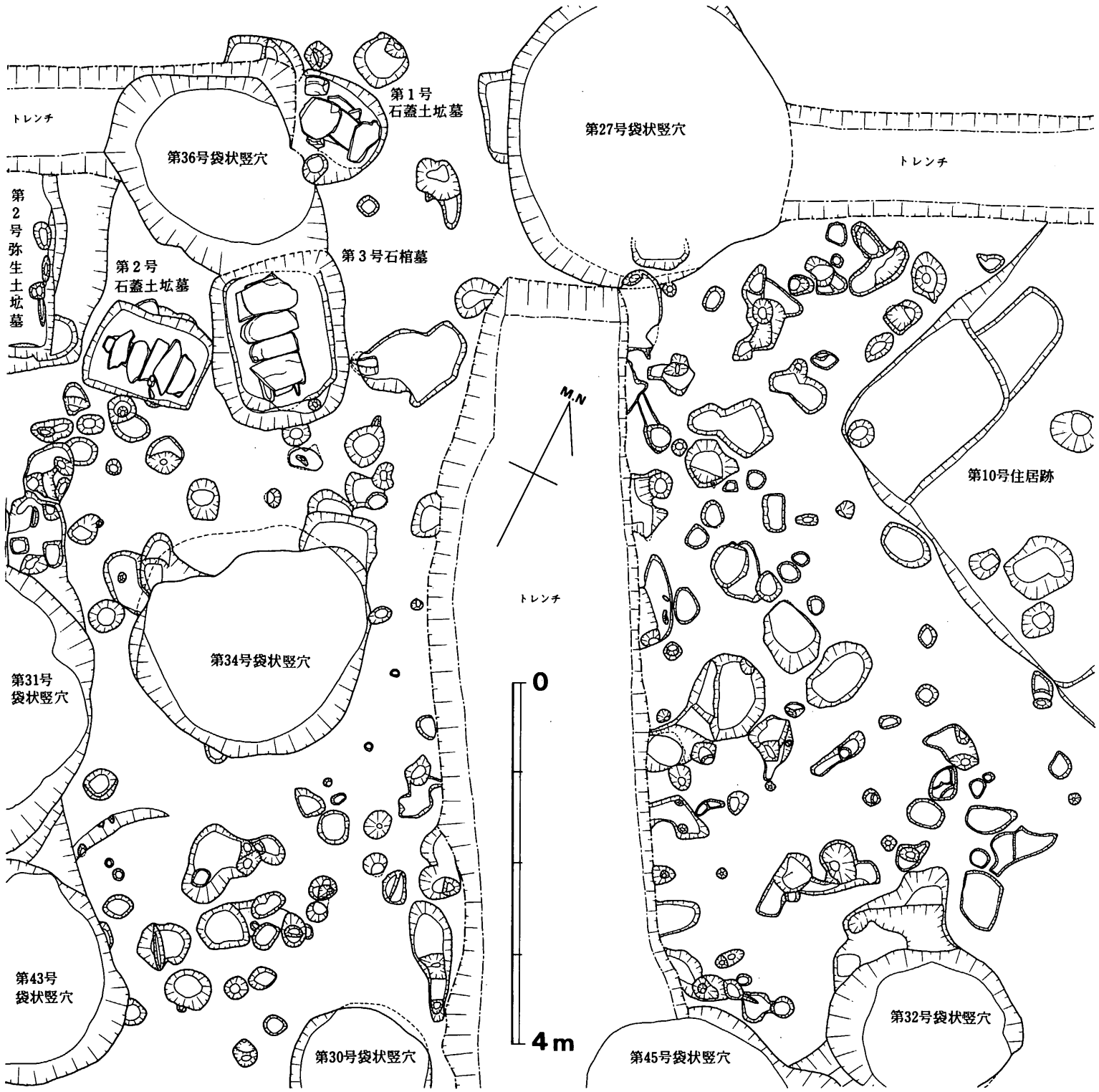


Fig. 251　1号墳墳丘下弥生時代 Pit 群実測図（縮尺 1/60）

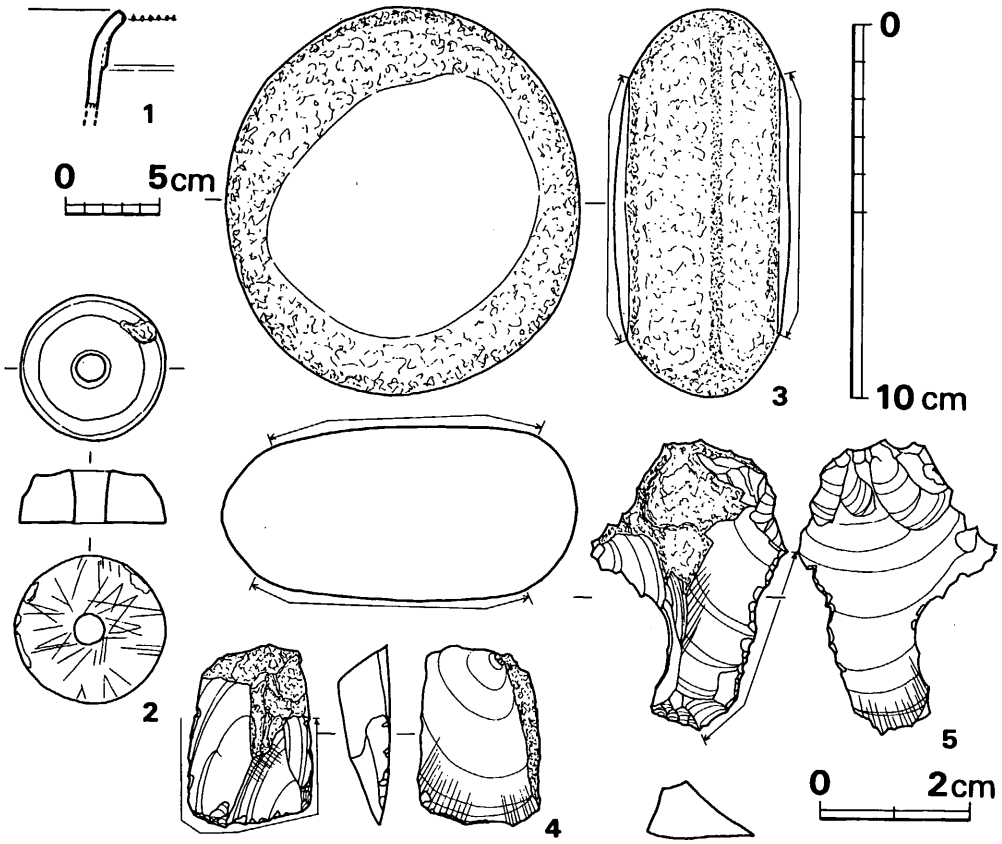


Fig. 252　住居跡群近辺 Pit 中出土遺物実測図（縮尺　土器¼・2と3は½・4と5は実大）

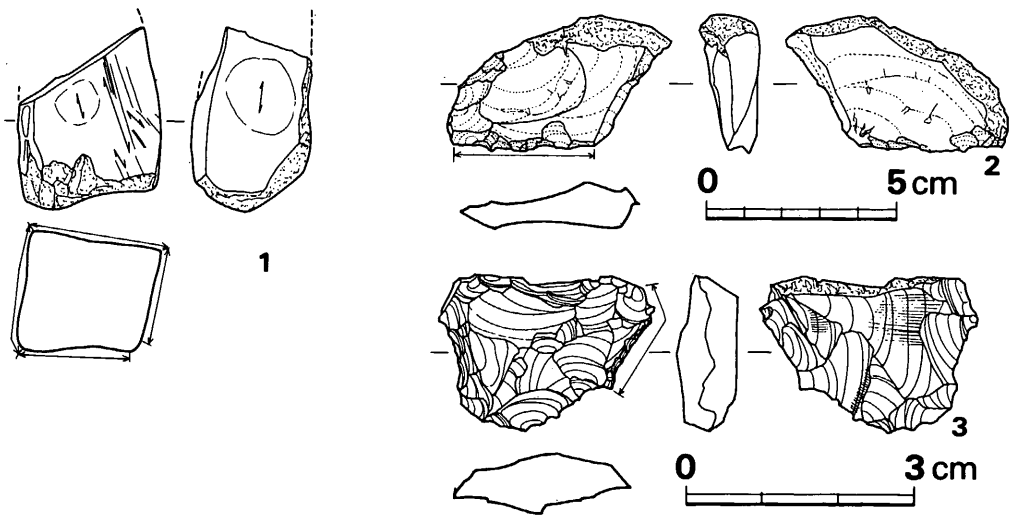


Fig. 253　第1・2・3号土坑出土石器実測図（縮尺　½・3のみ実大）

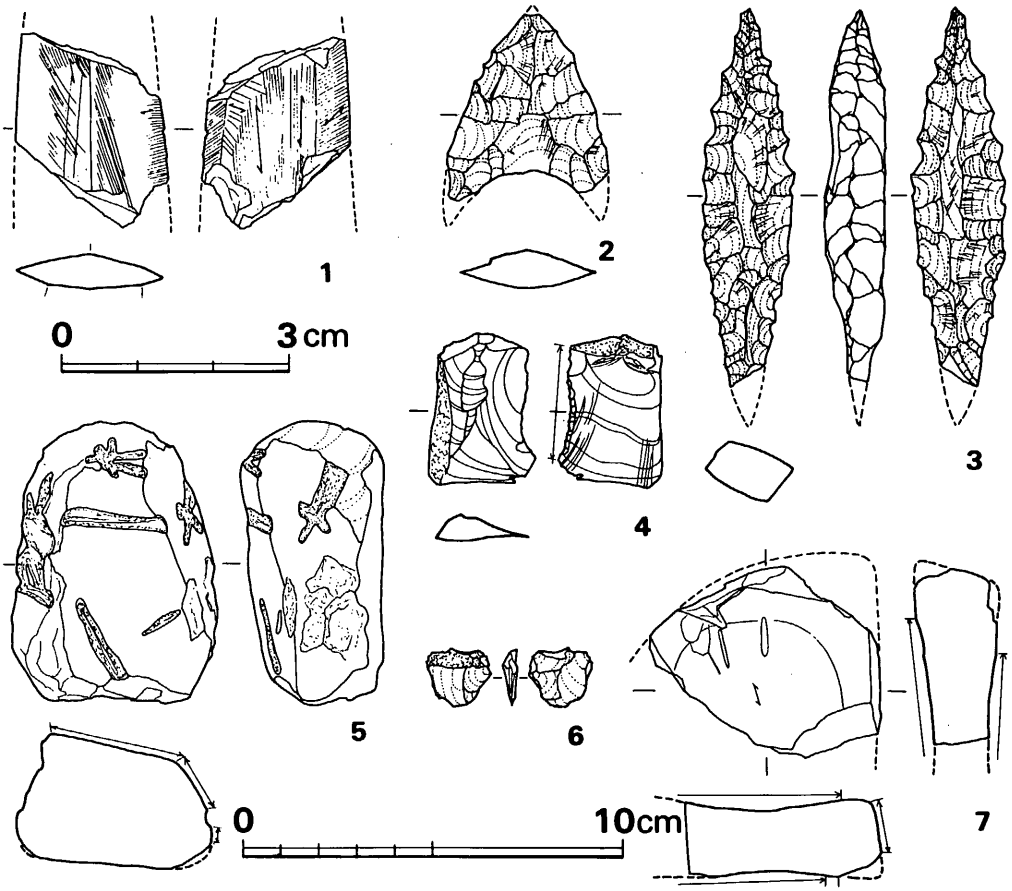


Fig. 254　古剣塚1号墳墳丘下旧地表及び Pit 中出土石器実測図（縮尺　1～4は実大・他½）

土坑出土の小片である。口縁外端が突出し，外面やや中ぶくらみをみせる。内面に粗い横ハケ，外面に縦ハケをみせる。胎土に粗砂多く含み，焼成良好で茶色を呈する。弥生後期の終末の所産である。Fig.257－1 は，焼成後に底部穿孔して甑に転用した類である。B地区第21号土坑より出土している。外面に粗い縦ハケを施し，内面には炭化物付着して黒変する。粗砂多く含み，焼成良好で外面赤茶色をなす。2は，B地区第29号土坑出土品で，底部外端が張り出し，底面を大きく窪ませた類で，外面屈曲部には縦ヘラ削りがみられる。粗砂多く含み，焼成良好で淡褐色を呈する。4は，B地区第30号土坑出土品で，口縁外下端部のみに刻目を施す類で，胴のやや張る器形をなす。粗砂多く含み，焼成良く，茶色をなす。

壺（Fig.250－3～6）

3はA地区P20出土品で，大型の壺から甕へ変化する器形である。口唇部下端に刻目を施し，口縁内面は肥厚せず，頸部と胴部の境は外面では明確ではないが，内面は部分的に稜をな

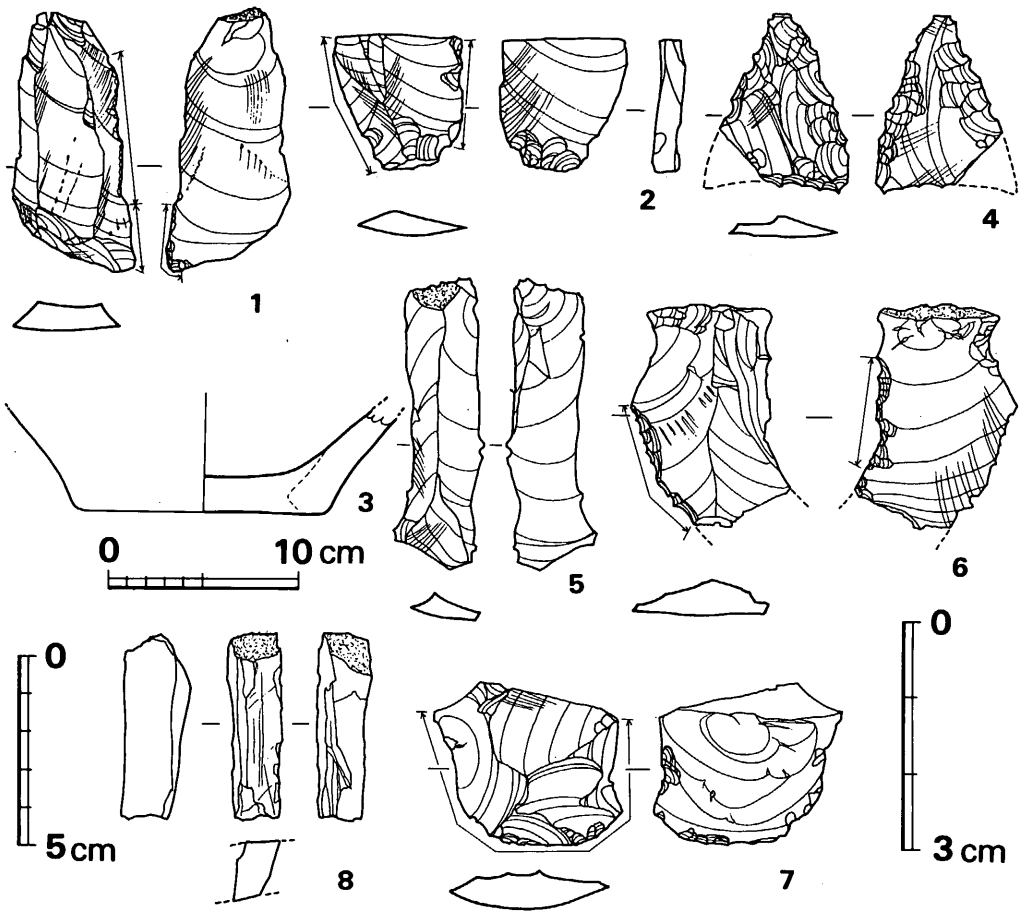


Fig. 255　第9～12号土坑出土石器・土器実測図（縮尺　土器¼・8のみ½・他実大）

す。頸部と口縁部との境目内面には稜をつくる部分が半分ぐらいみられる。口縁内面上半～外面は横ナデ，口縁内面は極めて粗い横ハケの上を横ヘラ磨き，頸部内面は横ヘラ磨き，頸部～胴部の外面には横ヘラ磨き，下半は斜めの磨きを行なう。胎土に粗砂を極めて多く含み，焼成大旨良好，茶褐色乃至淡褐色を呈する。**4**は，B地区旧表土層中より出土したもので，短かくやや外傾する口縁に強く張る胴部をつくる短頸壺の類である。口縁内外面横ナデ，胴外面は磨き或いはナデによるもので，胎土に粗砂少量含み，焼成良好で淡茶色を呈する。**5**は，やや丸底風となる壺底部片で，A地区P5出土品である。外面に斜めヘラ磨きを行ない，粗砂かなり含み，焼きは良く，黒～暗褐色を呈する。**6**は，A地区旧地表直上面より出土したもので，外面丹塗り磨研の壺底部である。胎土に粗砂少量含み，焼成良好で内面淡褐色を呈する。これは中期後半期の所産であろう。（中間研志）

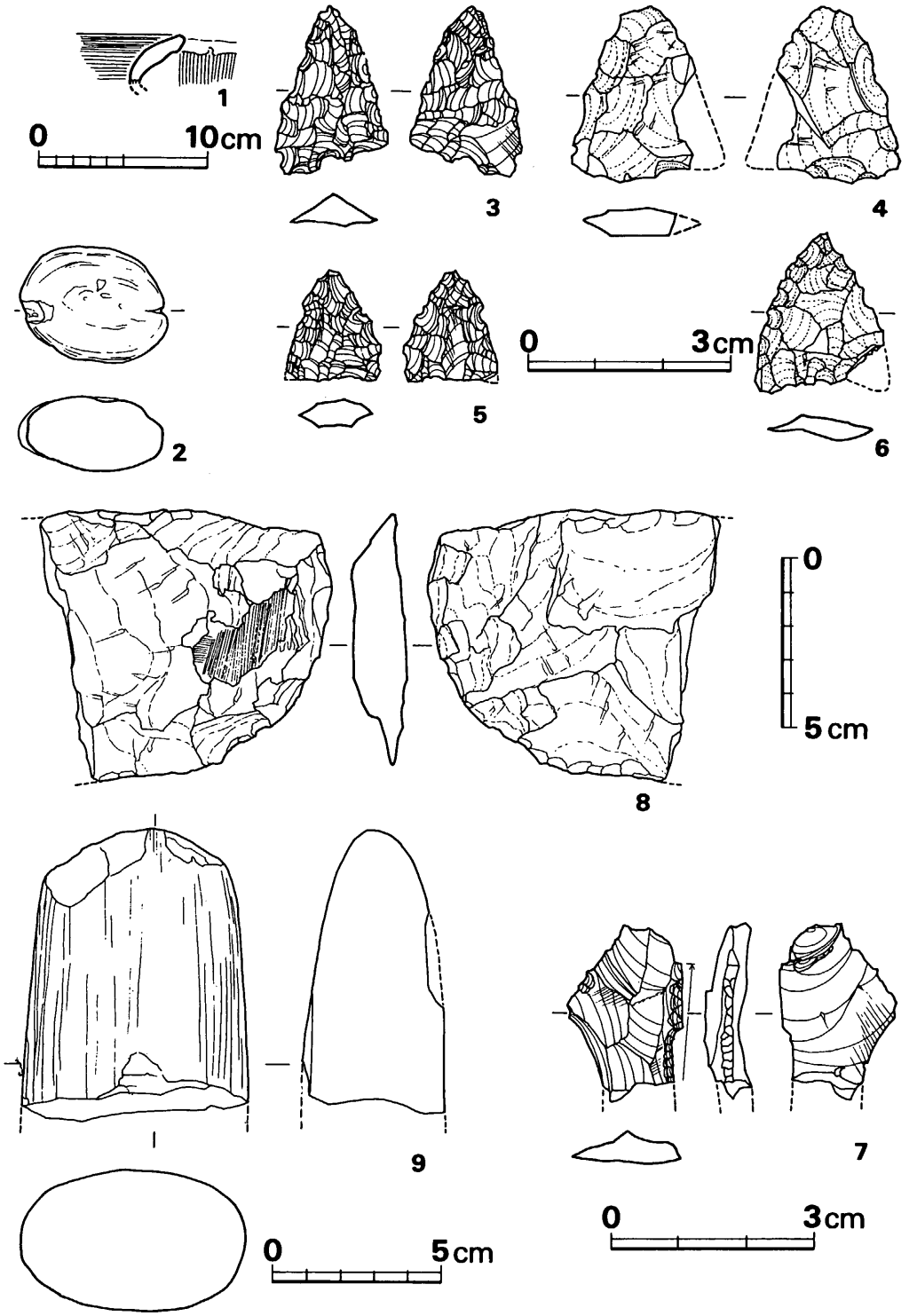


Fig. 256　第17～20号土坑出土遺物実測図（縮尺　土器¼・2・8・9は½・3～6と7は実大）

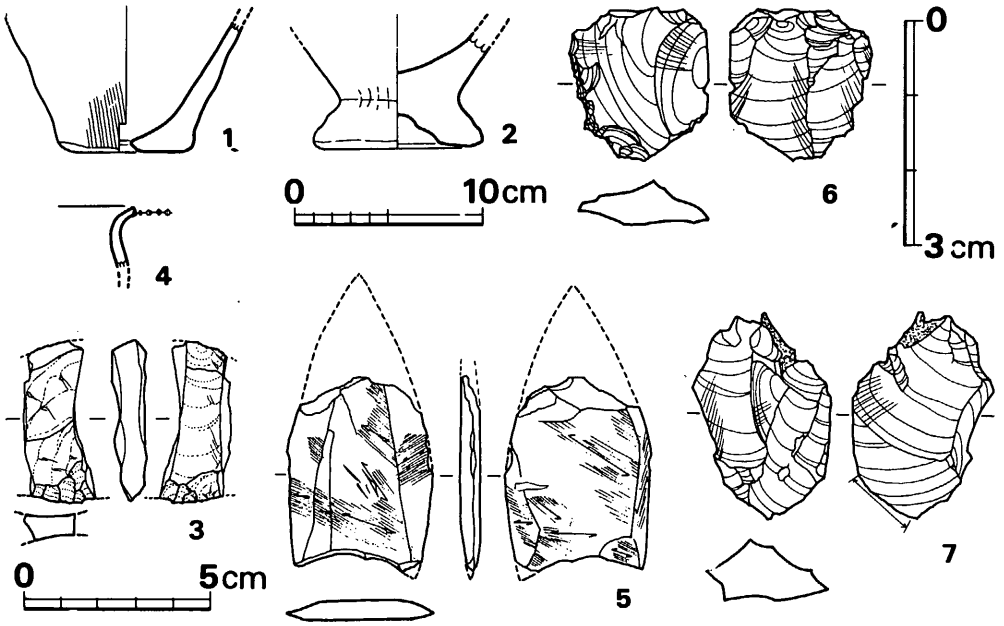


Fig. 257　第21～30号土坑出土土器・石器実測図（縮尺　土器¼・3のみ½・他実大）

Tab. 55　古剣塚2号墳墳丘下旧地表及びPit中出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	出土位置	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
254の1	磨製石剣	Pit出土	頁岩質	(24.5)	(19.5)	4.5	(1.9)			しのぎが明確でない	151
254の2	打製石鏃	旧地表出土	安山岩	(24.0)	(21.0)	5.0	(1.8)		Ia C	先端欠損	239
254の3	ポイント	旧地表出土	安山岩(?)	(49.5)	12.0	8.0	(4.4)				249
254の4	スクレイパー	旧地表出土	黒曜石	20.0	13.0	4.0	1.2	14.5	A	片面のみリタッチ	199
254の5	使用された剝片	Pit出土	安山岩	15.0	16.5	3.5	0.7	26.5	C	刃こぼれ，リタッチなし	152
254の6	磨　石	Pit出土	砂　岩	74.0	54.0	35.0	179			線状のくぼみあり	141
254の7	砥　石	旧地表出土	砂　岩	(50.0)	(60.5)	(21.0)	(73)			荒砥か(？)	230

Tab. 56　住居跡群近辺Pit中出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	出土位置	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　考	台帳番号
252の2	紡錘車	P.50	滑　石	38.5	38.0	14.0	34.2			裏面に文様	
252の3	磨　石	下層P. 1	玄武岩	102.5	94.5	46.5	748.0			表裏面研磨	153
252の4	使用された剝片	P.25	黒曜石	24.0	17.0	6.5	2.2	46.0	E	刃こぼれのみ	156
252の5	使用された剝片	P.61	黒曜石	38.0	25.5	7.5	6.2	27.5	A	刃こぼれのみ	149

Tab. 57　第１～３号土坑出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	出土土坑	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　考	台帳番号
253の１	砥　石	第１号	シルト岩(？)	(47.5)	37.5	31.0	(64.2)			原石粗面あり	161
253の２	スクレイパー	第３号	安山岩	35.5	58.0	15.5	25.2	32.0	A	両側よりリタッチ 原石粗面あり	160
253の３	使用された剥片	第２号	黒曜石	20.5	28.0	8.0	3.6	15.0	C	原石粗面あり	155

Tab. 58　第９～12号土坑出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	出土土坑	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
255の１	ブレイド	第９号	黒曜石	33.5	16.5	3.5	1.9	56.0		原石粗面あり	150
255の２	ブレイド	第９号	黒曜石	(17.5)	(16.5)	4.0	(1.0)	29.0			304
255の４	打製石鏃	第11号	黒曜石	23.0	(16.5)	3.0	(0.9)		Ⅰb　C	周辺のみ両側よりリタッチ	147
255の５	ブレイド	第11号	黒曜石	37.5	12.0	3.5	1.4	67.5		原石粗面あり	148
255の６	スクレイパー	第11号	黒曜石	(29.0)	(20.5)	4.5	(2.9)	32.5	B	原石粗面あり片面より小さなリタッチ	145
255の７	スクレイパー	第11号	黒曜石	(21.0)	(25.0)	5.0	(2.7)	(49.5)	E	片面よりリタッチ	146
255の８	砥　石	第12号	粘板岩	(49.0)	(14.5)	(16.0)	(13.4)			小型仕上げ砥	144

Tab. 59　第17～20号土坑出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	出土土坑	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分　類	備　考	台帳番号
256の２	石　錘	第17号	砂　岩	43.0	34.5	22.0	38.4			転石の両端に筋を入れただけの簡単なもの	136
256の３	打製石鏃	第18号	黒曜石	24.5	16.5	4.5	1.5		Ⅰb　B	完　形	157
256の４	打製石鏃	第18号	安山岩	25.5	(18.0)	4.0	(1.9)		Ⅰb　A		159
256の５	打製石鏃	第19号	黒曜石	16.0	(13.5)	4.0	(0.8)		Ⅰb　B	ほぼ完形	154
256の６	打製石鏃	第20号	安山岩	23.0	(19.0)	4.0	(1.3)		Ⅰa　C	基部欠損	142
256の７	スクレイパー	第20号	黒曜石	(25.5)	16.5	7.0	(1.7)	(17.5)	A	片面リタッチ	143
256の８	石包丁未整品	第20号	輝緑凝灰岩	(79.5)	(85.5)	17.0	(115)	?		表面の一部に擦痕あり	303
256の９	磨製石斧	第20号	玄武岩	(86.0)	(66.0)	(42.0)	(349)	?		太型蛤刃石斧基部	137

Tab. 60　第21～30号土坑出土石器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	出土土坑	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　考	台帳番号
257の３	スクレイパー	第26号	安山岩	(42.5)	(19.0)	9.0	(7.3)	(17.5)	A(?)	両側よりリタッチ	158
257の５	磨製石鏃	第30号	頁岩(?)	(25.5)	19.0	2.5	(1.7)			先端欠損	138
257の６	スクレイパー	第30号	黒曜石	19.5	18.5	5.5	1.9	18.0	A	片面のみ小さなリタッチ	140
257の７	使用された剥片	第30号	黒曜石	27.0	18.5	8.0	3.4	9.0	〃	刃こぼれ 原石粗面あり	139

Ⅵ—7　表採遺物と周辺遺跡採集遺物

前節までに，各遺構とそれに伴う出土遺物について述べてきたが，ここでは，それらの遺構に全く伴わない表面採集の遺物，表土（耕作土）出土の遺物，前方後円墳の盛土中や同周溝埋土中からの全く時期的に異なり，混入物と考えられるもの等の弥生期の遺物について記述して行きたい。ただ石器類に関しては，弥生期以前の所産もあろうと考えられるが特に分けなかった。

以下土器に関してはFig.258に前期の土器を示し，Fig.259には後期の土器を図示して，その順に述べたい。また，石器に関しては各々挿図毎に一覧表を作製したので参照されたい。

甕　(Fig.258—1～11)

1は，中央トレンチ内（盛土）出土のもので，口唇下半に大きい刻目を施す類である。内外面横ナデで，頸部内面に細かい横ハケが残る。外面全面に煤付着して黒色を呈し，粗砂かなり含み，焼きは良く内面淡褐色を呈する。**2**は、前方後円墳後円部の東半盛土中出土品であり，口唇下端と貼り付けた三角凸帯上に刻目を施す類である。頸部内面に粗い横ハケを施し，各所に指オサエがみられ，全体に歪つな器形をなす。粗砂多く含み，焼成良好で，外面赤茶色，内面暗黄褐色を呈する。**3**は，古剣塚2号墳盛土中出土品で，亀ノ甲タイプの口縁端部に刻目を施す類である。粗砂多くみられ，焼きは悪く，暗黒色をなす。**4**は，3と同様古剣塚2号墳盛土中より出土のもので，口縁直下に更に三角凸帯を貼り付け，口縁外端と凸帯上とに刻目を施す亀ノ甲タイプの類である。外面にはやや粗めのハケがみられ，粗石英粒多く含み，焼成良好で赤茶色を呈する。**5**は，3号墳付近の耕作土中より出土したもので，口唇部下端に刻目を施し，口縁下外面に太い沈線を巡らす類である。口縁内外面横ナデ，頸部内面には横～斜めハケ，以下内面はハケの上をナデで消す。頸部外面は縦ハケ，沈線部を挟んで上下間は横ナデ，以下外面は縦ハケを施す。外面には煤付着しており，胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で淡茶色を呈する。**6**は，前方後円墳西側周溝覆土に混入していたもので，底径8.7cmの僅かな上げ底をなす。外面には粗い縦ハケを施し，焼成良好で外面茶褐色，内面暗褐色をなし、胎土に粗砂多く含む。**7**は，前方後円墳東側周溝中出土のもので，平底の底部片で粗砂多く含み，焼きは良く

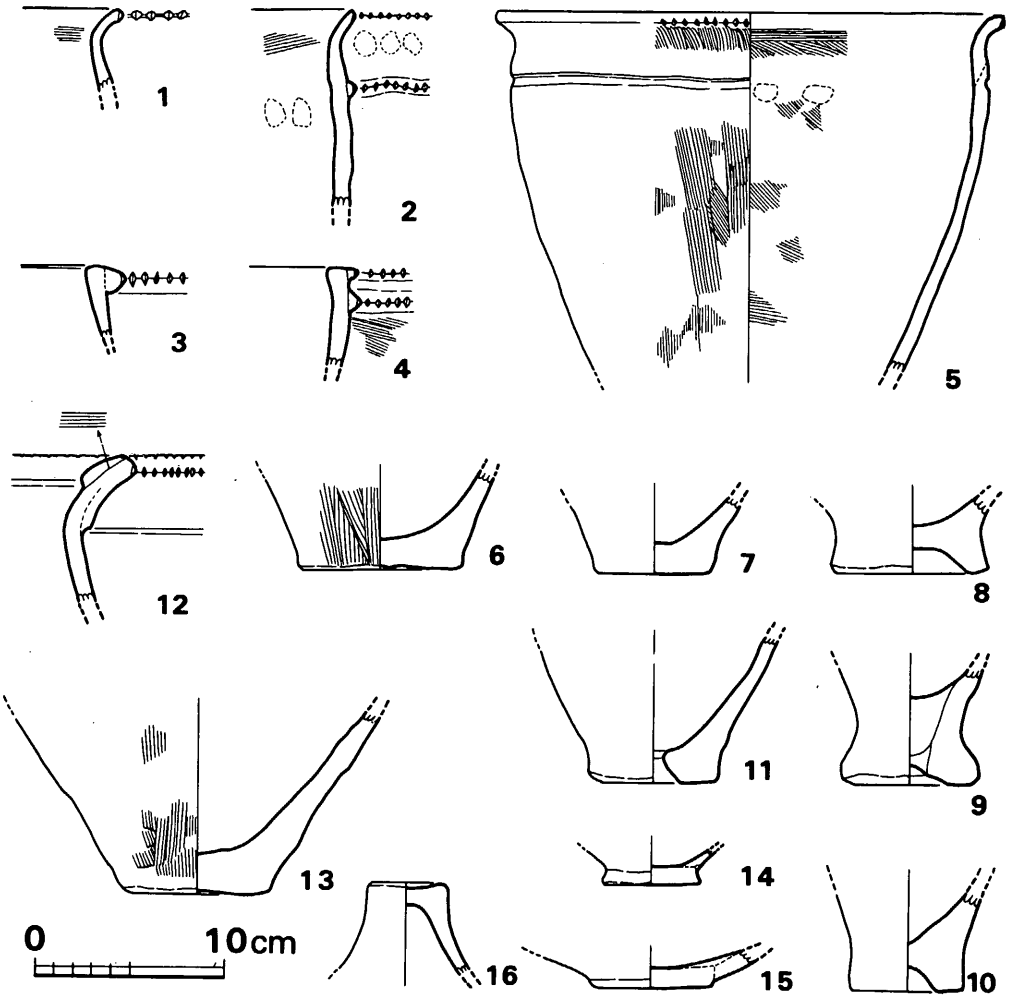


Fig. 258　表土・1号墳盛土・周溝内出土弥生式土器実測図（その1）（縮尺 ¼）

外面茶色，内面褐色を呈する。**8**は，前方後円墳西側周溝中出土品で，大きく上げ底状となったものであり，粗砂多く含み，焼きは良く外面赤茶色，内面黒色をなす。**9**は，前方後円墳の前方部盛土中出土のもので，充実した底部で底外面中心部を強く窪める類である。図示した接合法は明確なものである。粗砂多く含み，焼成良好で，外面赤茶色を呈し，内面は炭化物付着して黒色をなす。**10**は，前方後円墳東側周溝の須恵器群中に混入したものである。底部下面中央部を強く窪めたものであり，粗大石英粒を含み，焼きは良く茶褐色を呈する。**11**は，前方後円墳の西側周溝の須恵器群中に混入したもので，底中央に焼成後の穿孔を行ない，甑として転用したものである。粗砂多く含み，焼きは良く茶色をなす。

壺　(Fig.258—12～15)

12は，前方後円墳中央トレンチ（盛土）中より出土したもので，口縁上面に粘土を貼り付

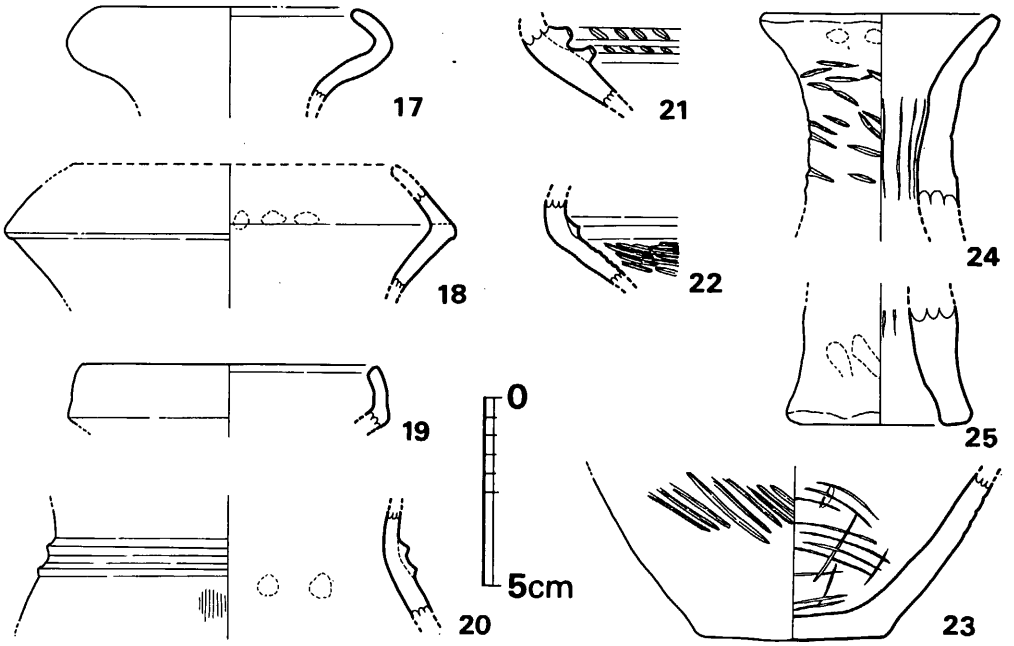


Fig. 259　1号墳盛土周溝内出土弥生式土器実測図（その2）（縮尺 ¼）

けて肥厚させ，外端部の上下に刻目を施す大型品の類である。口縁下外面には肥厚させた段をつくる。口縁内面の肥厚部接合面には粗い横ハケが施される。粗砂多く含み，焼成良好で灰色をなす。**13**は，前方後円墳後円部の盛土中出土品で，底外面中央部が僅かに上げ底状となる。外面上半はハケの上を磨き，下半は粗い縦ハケを施す。内面はかなり丁寧なナデ或いは磨きを行ない，胎土に粗石英粒を多く含む。焼きは良く内面褐色,外面淡褐色を呈する。**14**は，古剣塚2号墳盛土中出土の小壺底部である。円盤貼り付けを行ない，外面ヘラ磨き，胎土精良で焼成やや良好，内面淡灰褐色，外面黒褐色をなす。**15**は，古剣塚2号墳盛土中出土品で，外面ヘラ磨きの胴の著しく張る器形である。粗砂少量を含み，焼成やや不良外面淡茶色，内面黒色を呈する。

蓋　(Fig. 258—16)

把手部上面が窪む類で，前方後円墳盛土中出土品である。胎土に粗砂多く，焼きは良く，赤茶色をなす。

壺　(Fig.259—17～23)

17は，後円部南側の盛土中出土品である。口縁袋状をなし，やや口径の大きい類である。胎土に粗砂幾らか含み，焼きは良く淡茶色を呈する。**18**は，逆「く」の字の口縁をつくる類で，西側周溝からの出土品である。粗砂かなり含み,焼きはやや良く淡褐色を呈する。**19**は，前方後円墳くびれ部の盛土中出土品である。やや内傾するが，外面に明確な稜をつくる類で，

内外面横ナデを行なう。胎土に粗砂幾分含み，焼きは良く淡褐色をなす。**20**は，前方後円墳々丘内出土品で，頸部外面に2条の三角凸帯を巡らし，それ程張らない胴部をつくる。頸部以上は横ナデ，胴外面には粗い縦ハケがみられる。胎土に粗砂多く含み，焼きは良く赤茶色を呈する。**21**は，前方後円墳東側の盛土中出土品で，肩部上端の2条の連接凸帯上に斜めの大きい刻目を施す類である。かなり大型品と思われ，粗砂多く含み，淡茶褐色をなす。**22**は，古剣塚2号墳盛土中出土品で，頸部に低い三角凸帯を巡らし，胴部外面には粗い叩目が施される。粗砂多く含み，焼きは不良で淡黄褐色をなす。**23**は，僅かに丸底気味の底部で，古剣塚2号墳盛土中出土品である。外面に粗く太い叩目が施され，内面には間隔を置いた沈線がみられ，磨きの際のヘラ先による条線かと思われる。粗砂多く含み，焼成良好で，黄褐色を呈する。

器台（Fig. 259—24～25）

いずれも筒形の器台で，**24**は，前方後円墳の後円部の盛土中出土品である。受け部で開く類であり，外面は粗い叩目の上をナデている。内面にシボリ痕がみられ，受け部内面はナデ上げる。粗砂多く含み，焼きは良く黄褐色をなす。**25**は，前方後円墳中央トレンチ（盛土中）出土品で，内面にシボリ痕を残し，外面に指オサエを施す。粗砂多く含み焼きは良く茶色を呈する。

Tab. 61　表面採集石鏃一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	分類		備考	台帳番号
260の1	不明	黒曜石	(13.0)	(13.5)	3.0	(0.5)	Ia	A	先端欠損　ほぼ完形	268
260の2	表採	黒曜石	11.0	13.5	2.5	0.2	Ia	B	完形	293
260の3	1号墳後円部東盛土中	黒曜石	17.0	18.0	3.5	0.7	Ia	B	完形	198
260の4	不明	安山岩	18.5	(15.5)	3.5	(0.8)	Ia	B	ほぼ完形	300
260の5	表採	黒曜石	(18.0)	19.0	3.5	(0.9)	Ia	B	ほぼ完形	280
260の6	不明	安山岩	18.5	(18.0)	5.0	(1.1)	Ia	B	ほぼ完形	273
260の7	1号墳後円部盛土中	黒曜石	18.5	(18.0)	4.5	(1.2)	Ia	B	ほぼ完形	215
260の8	3号墳表土中	黒曜石	(20.0)	(16.0)	3.5	(1.1)	Ia	B	先端欠損　ほぼ完形	271
260の9	1号墳玄室内	安山岩	32.5	23.5	5.5	3.3	Ia	B	完形	251
260の10	表採	安山岩	18.0	18.5	3.5	0.9	Ib	B	完形	299
260の11	表採	安山岩(玻璃質)	(17.5)	(17.0)	3.5	(0.9)	Ib	B	先端欠損　約⅓欠損	256
260の12	古剣塚2号墳盛土中	安山岩	24.0	(18.0)	5.5	(1.9)	Ib	B	基部欠損	241
260の13	表採	黒曜石	16.0	(15.5)	3.5	(0.6)	Ia	C	約¼欠損	267
260の14	南湟中	黒曜石	(18.0)	(12.5)	3.5	(0.6)	Ia	C	かなり欠損	170
260の15	表採	黒曜石	17.0	(15.5)	3.5	(0.7)	Ia	C	わずかに欠損	262
260の16	表採	黒曜石	19.0	20.0	3.0	0.8	Ia	C	完形	255

7　表採遺物と周辺遺跡採集遺物

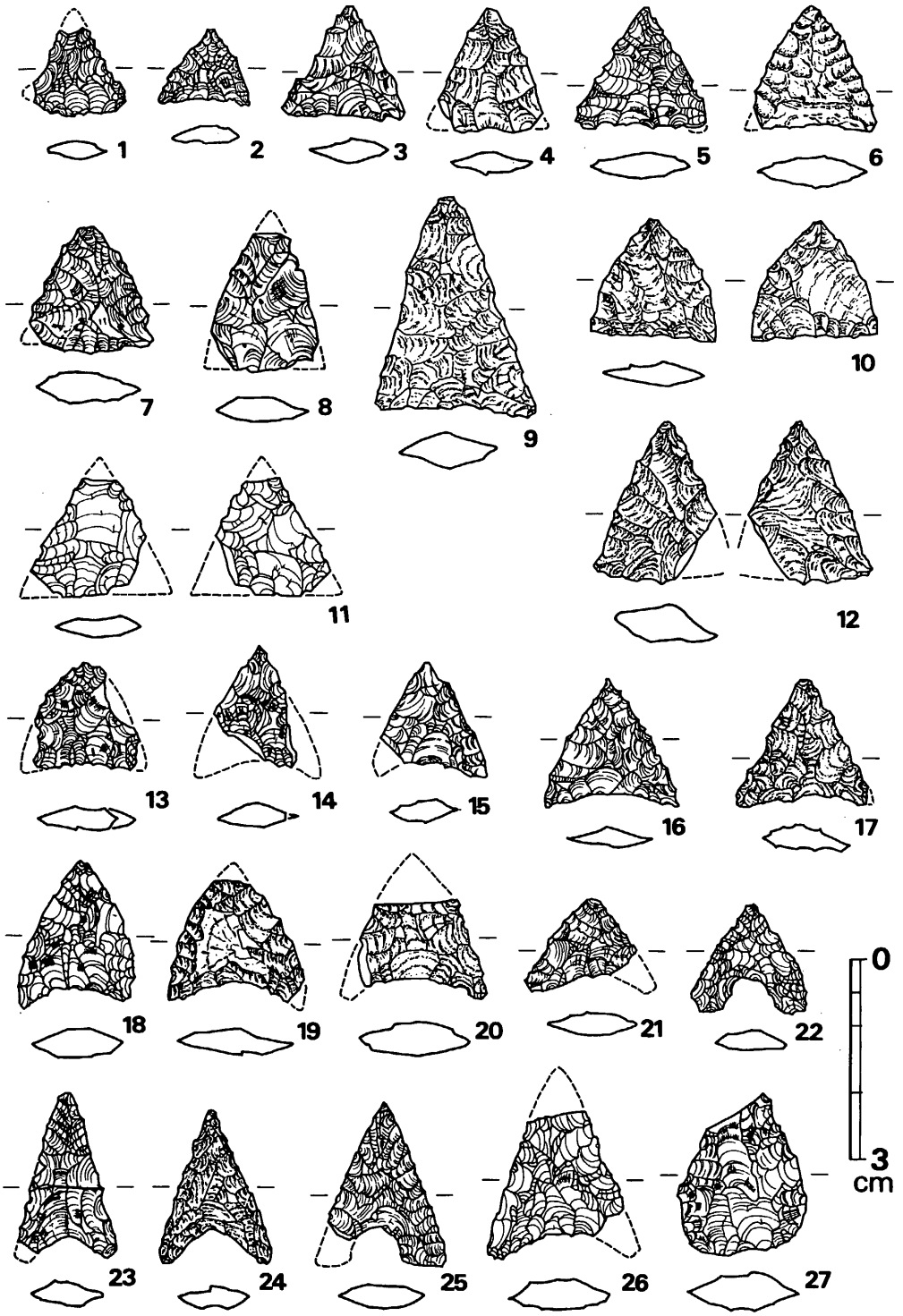


Fig. 260　表面採集石器実測図（その1）（実大）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	分類		備考	台帳番号
260の17	表採	安山岩	19.0	(19.5)	4.0	(1.0)	Ia	C	ほぼ完形	279
260の18	後円部南側	黒曜石	21.5	17.5	4.0	1.1	Ia	C	完形	250
260の19	古剣塚3号墳々丘表土中	安山岩	(17.5)	(20.0)	4.0	(1.2)	Ib	C	先端欠損　ほぼ完形	209
260の20	古剣塚2号墳盛土中	安山岩	(15.0)	(19.0)	5.0	(1.4)	Ia	C	先端欠損　約⅓欠損	221
260の21	不明	黒曜石	13.5	(16.5)	3.5	(0.4)	Ia	C	基部欠損	269
260の22	表採	チャート	16.0	17.0	3.0	0.6	Ia	C	完形	283
260の23	表採	黒曜石	24.5	(15.0)	4.0	(0.8)	Ia	C	ほぼ完形	263
260の24	不明	安山岩	23.0	16.5	3.5	0.8	Ia	C	完形	294
260の25	1号墳東湟中	黒曜石	24.5	(17.0)	3.5	(0.9)	Ia	C	基部欠損	174
260の26	採集土中	黒曜石	(22.0)	(20.0)	4.5	(1.5)	Ia	C	先端欠損　約¼欠損	264
260の27	剣・1・3マゼコゼ	黒曜石	24.0	19.0	5.5	2.2	Ia	?	製作途中　完形	296
261の28	古剣塚3号墳すそ東側地山上	黒曜石	(25.5)	(14.5)	4.5	(1.4)	Ia	B(?)	かなり欠損	219
261の29	1号墳後円部盛土中	安山岩	28.0	15.5	5.0	2.1	Ib	B	裏面に原石粗面あり 完形	216
261の30	表採	安山岩	27.0	17.0	5.0	2.2	Ia	B	完形	278
261の31	不明	黒曜石	14.0	(11.5)	2.0	0.3	II	B	ほぼ完形	292
261の32	古剣塚3号墳すそ東側地山上	安山岩	(14.5)	(17.0)	4.0	(0.8)	Ib	B(?)	かなり欠損	218
261の33	表採	安山岩	(13.5)	(17.5)	2.0	(0.6)	II	〃	先端欠損 かなり欠損	266
261の34	表採	黒曜石	14.0	(17.0)	2.5	(0.4)	Ib	B	ほぼ完形	281
261の35	表採	安山岩	19.5	(15.5)	3.0	(0.8)	Ib	B	わずかに欠損	257
261の36	表採	黒曜石	19.5	(12.0)	3.0	0.6	II	?	製作途中　完形	258
261の37	表採	黒曜石	16.0	(15.5)	2.5	(0.3)	II	C	ほぼ完形	282
261の38	不明	黒曜石	(21.5)	(21.0)	4.0	(1.8)	II	C	先端欠損 かなり欠損	284

Tab. 62　表面採集ポイント・スクレイパー一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器種	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
261の39	ポイント	3号墳々丘地山上	黒曜石	71.0	26.0	13.5	22.2			ほぼ完形	252
261の40	スクレイパー	1号墳々丘中	黒曜石	14.0	16.0	8.0	2.3	13.5	A	両面リタッチ	238
261の41	スクレイパー	不明	黒曜石	34.0	22.5	8.5	4.1	42.0	D	両面リタッチ 刃つぶしあり	259
262の42	スクレイパー	南湟3区	黒曜石	(18.5)	24.5	4.5	(2.2)	21.5	A	片面リタッチ 刃つぶしあり	172
262の43	スクレイパー	1号墳々丘中	黒曜石	20.5	17.0	4.0	1.6	37.0	C	両面リタッチ	309
262の44	使用された剝片	1号墳表採	黒曜石	29.0	41.5	9.0	8.2	26.5	A		310

7　表採遺物と周辺遺跡採集遺物

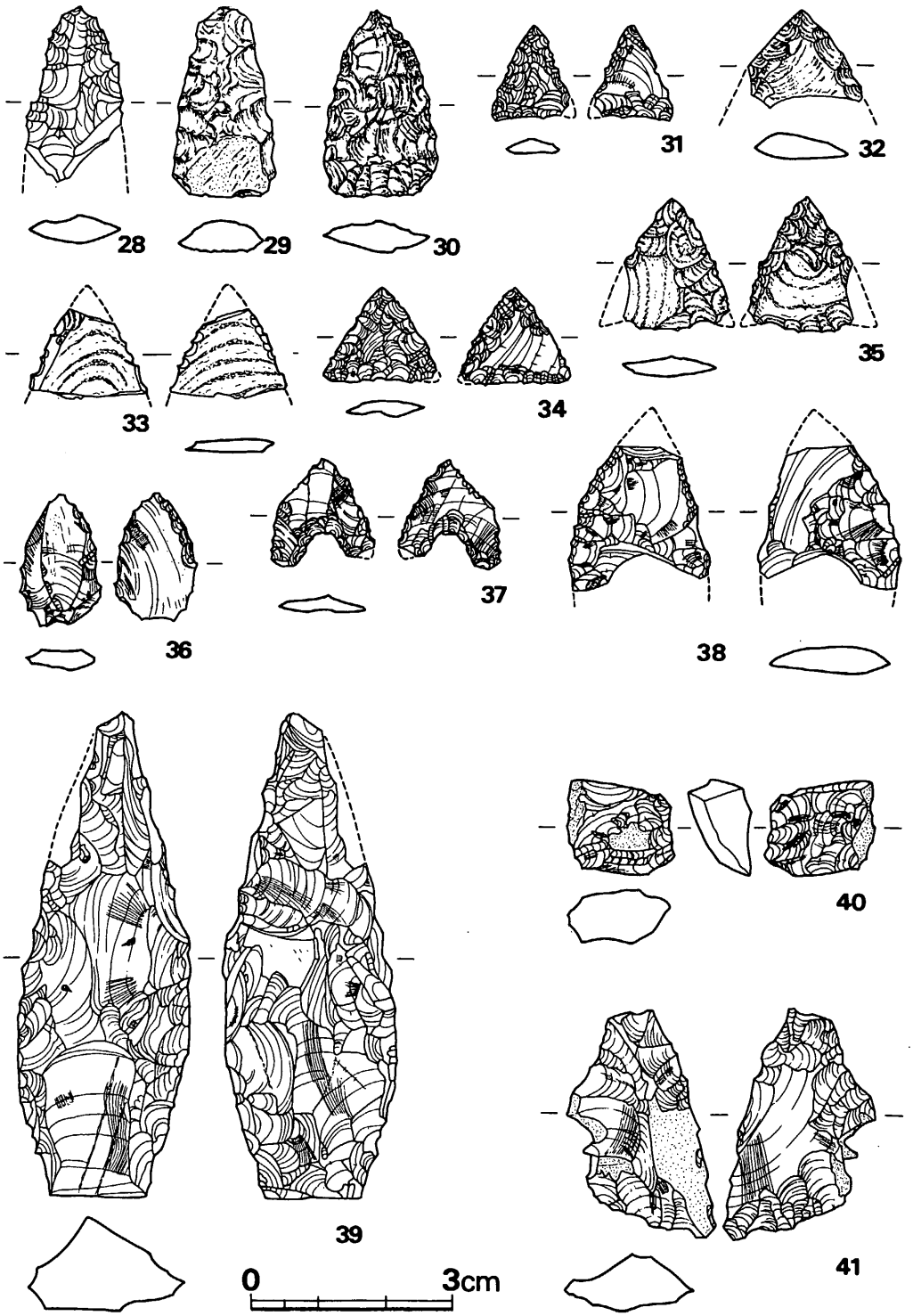


Fig. 261　表面採集石器実測図（その2）（実大）

Fig. No.	器　種	出土位置	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　　考	台帳番号
262の45	スクレイパー	1号墳前方部封土中	黒曜石	23.0	37.0	8.0	4.7	28.0	A	片面リタッチ 小さなリタッチ	206
262の46	スクレイパー	1号墳前方部封土中	黒曜石	25.5	35.0	10.0	6.0	22.0	A	両面リタッチ	203
262の47	スクレイパー	南湟2区2層	黒曜石	28.5	37.0	11.0	11.6	23.5	A	片面リタッチ 刃部以外に リタッチあり	187
262の48	使用された剝片	古剣塚3号墳すそ東側地山上	黒曜石	30.0	32.0	9.0	5.8	57.5	E	片面リタッチ 刃部の一部に リタッチ	220
263の49	スクレイパー	南　湟	黒曜石	24.0	33.0	9.5	5.5	29.5	C	片面リタッチ 刃つぶしあり	171
263の50	使用された剝片	下層住居跡北上	黒曜石	27.5	14.5	4.5	2.1	57.5	D	刃こぼれのみ	11
263の51	使用された剝片	南湟2区2層	黒曜石	25.0	29.0	8.0	4.35	36.0	C	片面リタッチ 刃部の一部を リタッチ	162
263の52	スクレイパー	1号墳前方部封土中	黒曜石	17.0	18.5	4.0	1.15	13.0	A	片面リタッチ 二辺に刃つぶし のリタッチあり	207
263の53	使用された剝片	下層住居跡北上	黒曜石	20.0	28.0	9.5	4.1	43.0	C	刃こぼれのみ	12
263の54	スクレイパー	南湟2区2層	黒曜石	20.5	17.5	4.0	1.6	36.0	E	片面リタッチ 小さなリタッチ	189
263の55	使用された剝片	1号墳後円部凹坑	黒曜石	21.0	21.0	5.0	2.0	40.0	C	刃こぼれのみ	242
263の56	使用された剝片	1号墳マウンド中	黒曜石	23.0	18.0	8.5	3.2	11.5	A	刃つぶしあり	240
263の57	使用された剝片	1号墳後円部凹坑	黒曜石	20.5	28.5	7.0	3.5	38.5	B	刃こぼれのみ	244
263の58	スクレイパー	1号墳南湟	黒曜石	19.5	15.0	3.5	1.2	20.0	A	片面リタッチ 刃つぶしの リタッチあり	164
263の59	スクレイパー	古剣塚3号墳墳丘中	黒曜石	24.5	18.5	5.0	2.1	37.5	B	片面リタッチ 刃つぶしあり	237
264の60	スクレイパー	不　明	黒曜石	23.5	22.0	7.5	2.8	30.0	B	片面リタッチ 小さなリタッチ	260
264の61	使用された剝片	1号墳前方部封土中	黒曜石	25.0	27.5	6.5	4.2	20.5	A		204
264の62	使用された剝片	不　明	黒曜石	34.0	20.5	7.0	3.3	35.5	B		261
264の63	使用された剝片	1号墳東湟	黒曜石	31.5	16.0	5.0	2.25	36.5	B		184
264の64	スクレイパー	1号墳南湟	黒曜石	35.0	17.0	5.5	2.4	51.0	D	片面リタッチ 小さなリタッチ	165
264の65	スクレイパー	前方部堆積土	黒曜石	30.5	23.5	8.0	5.1	26.5	A	片面リタッチ 刃部に平行の 擦痕あり	196
264の66	スクレイパー	不　明	黒曜石	25.0	18.0	8.0	3.3	21.0	A	片面リタッチ 小さなリタッチ	297
264の67	スクレイパー(？)	1号墳南湟	黒曜石	19.5	24.5	7.5	3.8	なし	A(?)	片面リタッチ 刃つぶしのみ	186
264の68	スクレイパー	南　湟	黒曜石	15.5	28.5	5.5	2.0	15.5	A	片面リタッチ 小さなリタッチ	301
264の69	スクレイパー	1号墳前方部封土中	黒曜石	20.0	23.5	5.0	1.7	12.0	A	片面リタッチ 小さなリタッチ	302
264の70	使用された剝片	古剣塚3号墳墳丘中	黒曜石	17.0	30.0	7.5	3.1	19.5	A		236
264の71	スクレイパー(？)	耕作土中	黒曜石	19.5	19.0	5.5	1.9	なし	A(?)	片面リタッチ 刃つぶしのみ	290

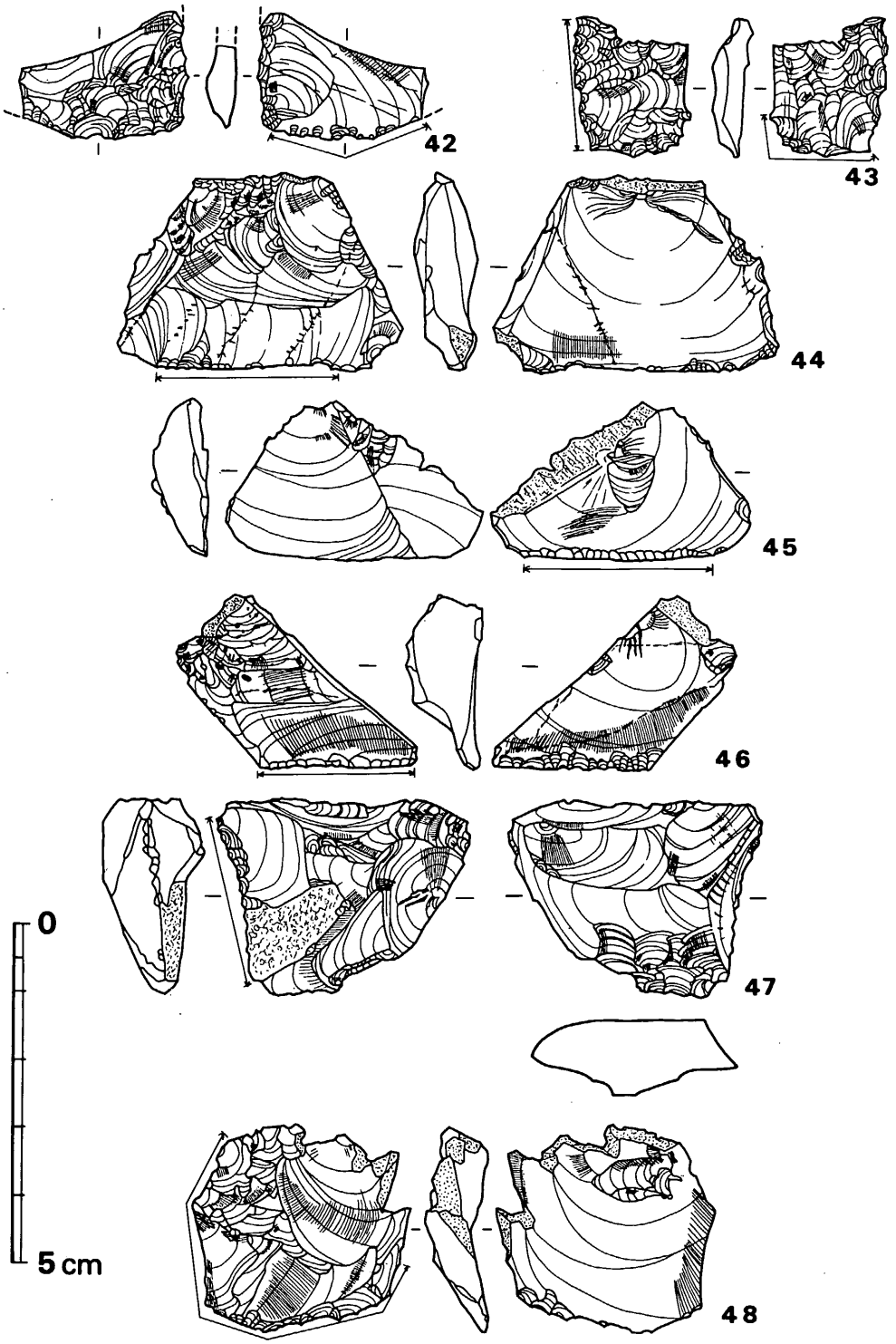


Fig. 262　表面採集石器実測図（その3）（実大）

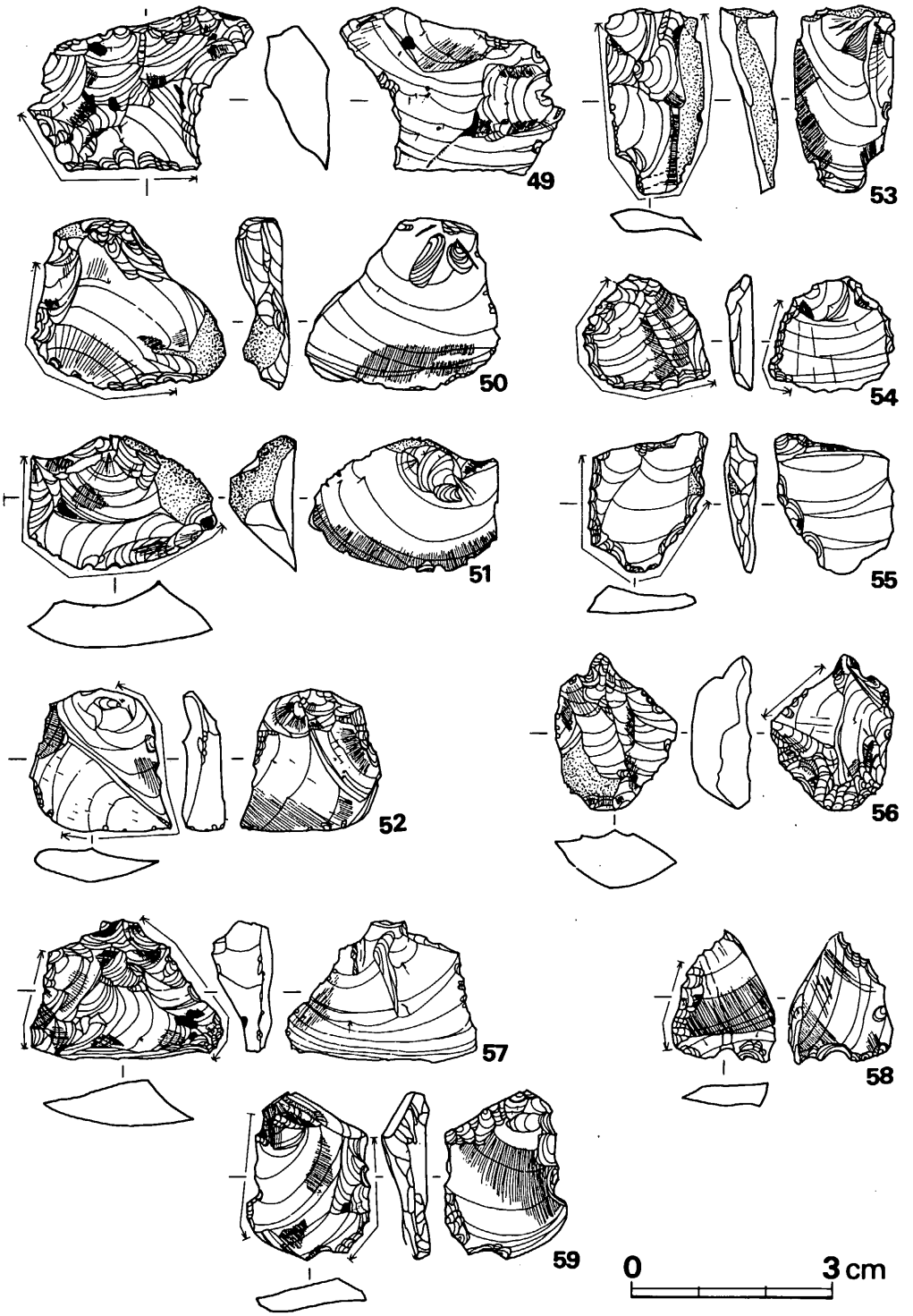


Fig. 263　表面採集石器（その４）　（実大）

7　表採遺物と周辺遺跡採集遺物

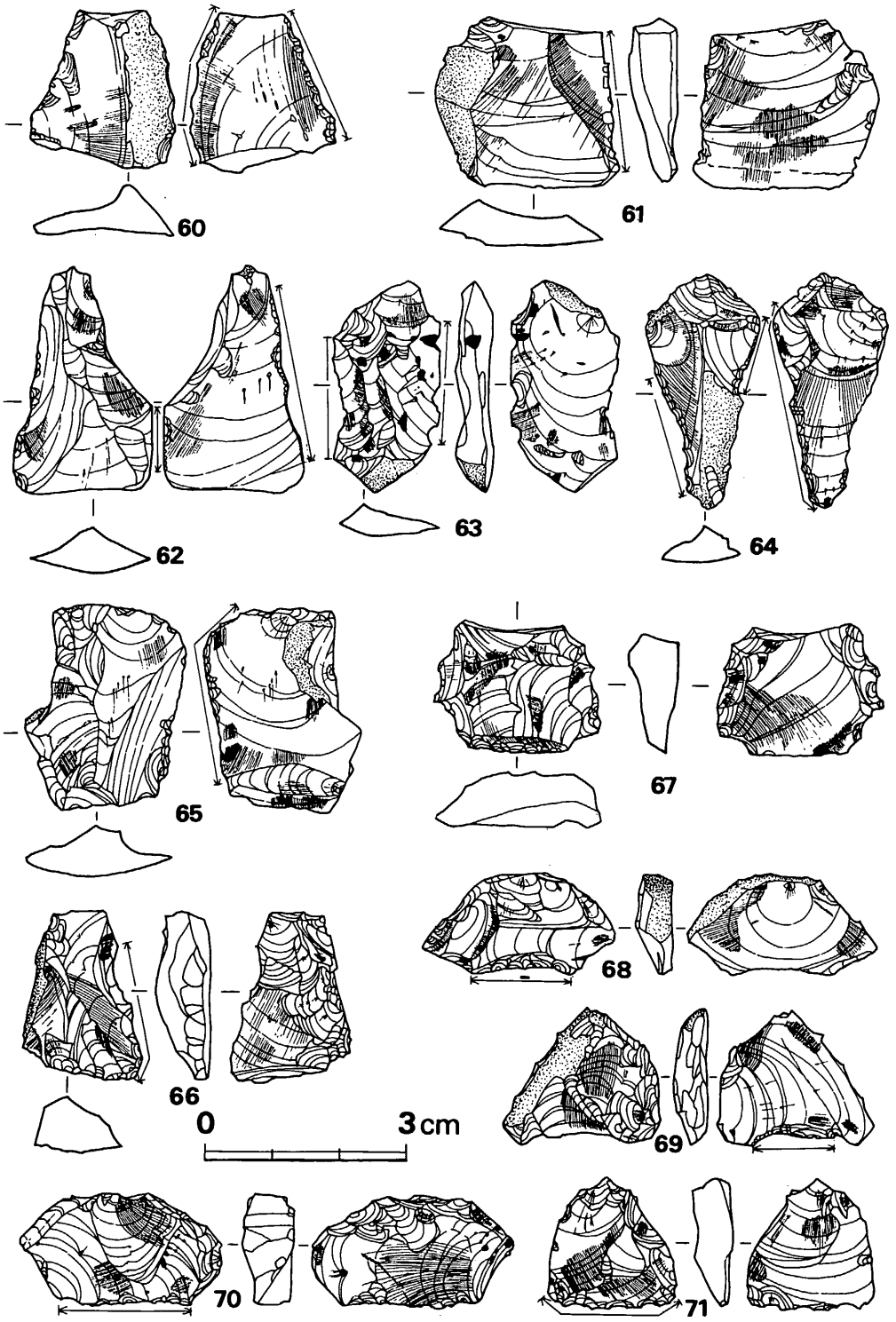


Fig. 264　表面採集石器実測図（その5）　（実大）

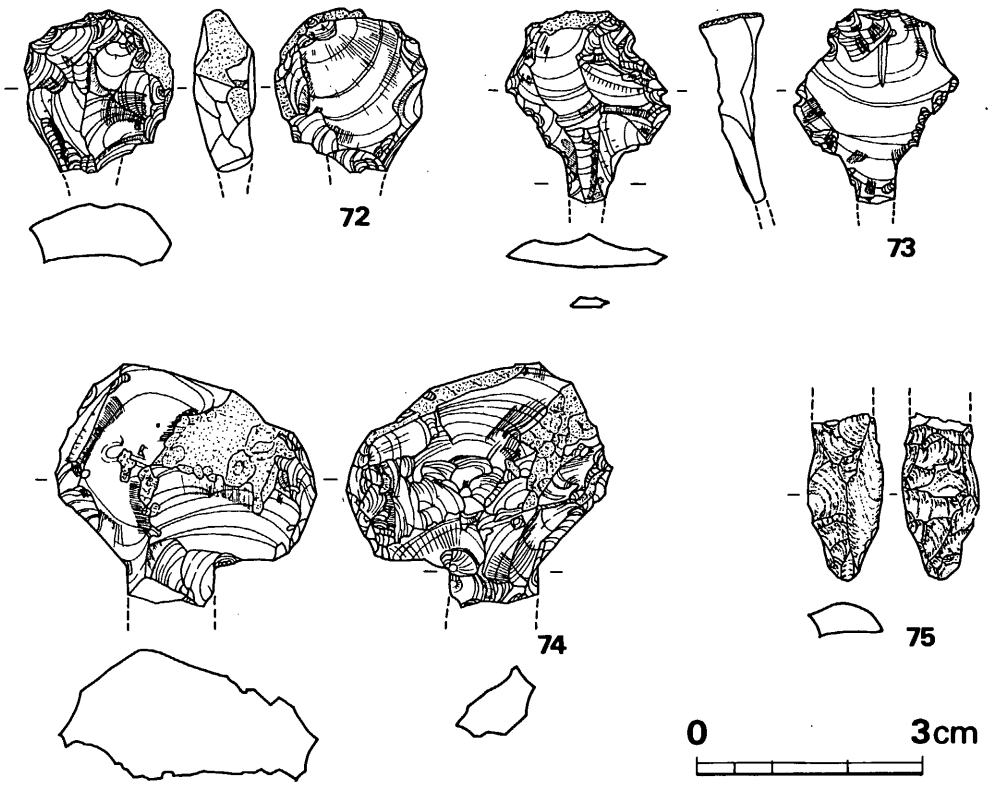


Fig. 265　表面採集石器実測図（その6）（実大）

Tab. 63　表面採集石錐一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	原石粗面	備考	台帳番号
265の72	J2N，J4N	黒曜石	(21.5)	20.0	8.0	(3.7)	右側面	機能部欠損	6
265の73	1号墳前方部封土中	黒曜石	(25.5)	21.5	4.5	(2.4)	上面	機能部欠損，小さたリタッチあり	205
265の74	採集土	黒曜石	(32.0)	34.5	17.0	(16.6)	上面・表裏面	機能部欠損	265
265の75	古剣塚3号墳々丘表土中	安山岩	(22.0)	10.0	4.5	(1.3)	なし	機能部のみ	210

Tab. 64　表面採集石核・刃器一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	備考	台帳番号
266の76	J6W 土器群C	黒曜石	30.5	19.0	14.5	9.9		完形	13
266の77	1号墳後円部褒棺	黒曜石	37.5	16.0	7.0	4.7		上・下面，表・裏面に原石粗面あり　完形	245
266の78	南湟2区2層	黒曜石	44.0	32.5	36.5	41.0		原石粗面あり　完形	163
266の79	1号墳東湟	黒曜石	35.5	30.0	11.0	(13.7)		左側辺をリタッチ，スクレイパーとしても使用　一部欠損	185
266の80	1号墳後円部凹坑	黒曜石	(19.0)	17.5	6.0	(1.6)	(20.0)	刃部に刃こぼれ	243

7　表採遺物と周辺遺跡採集遺物

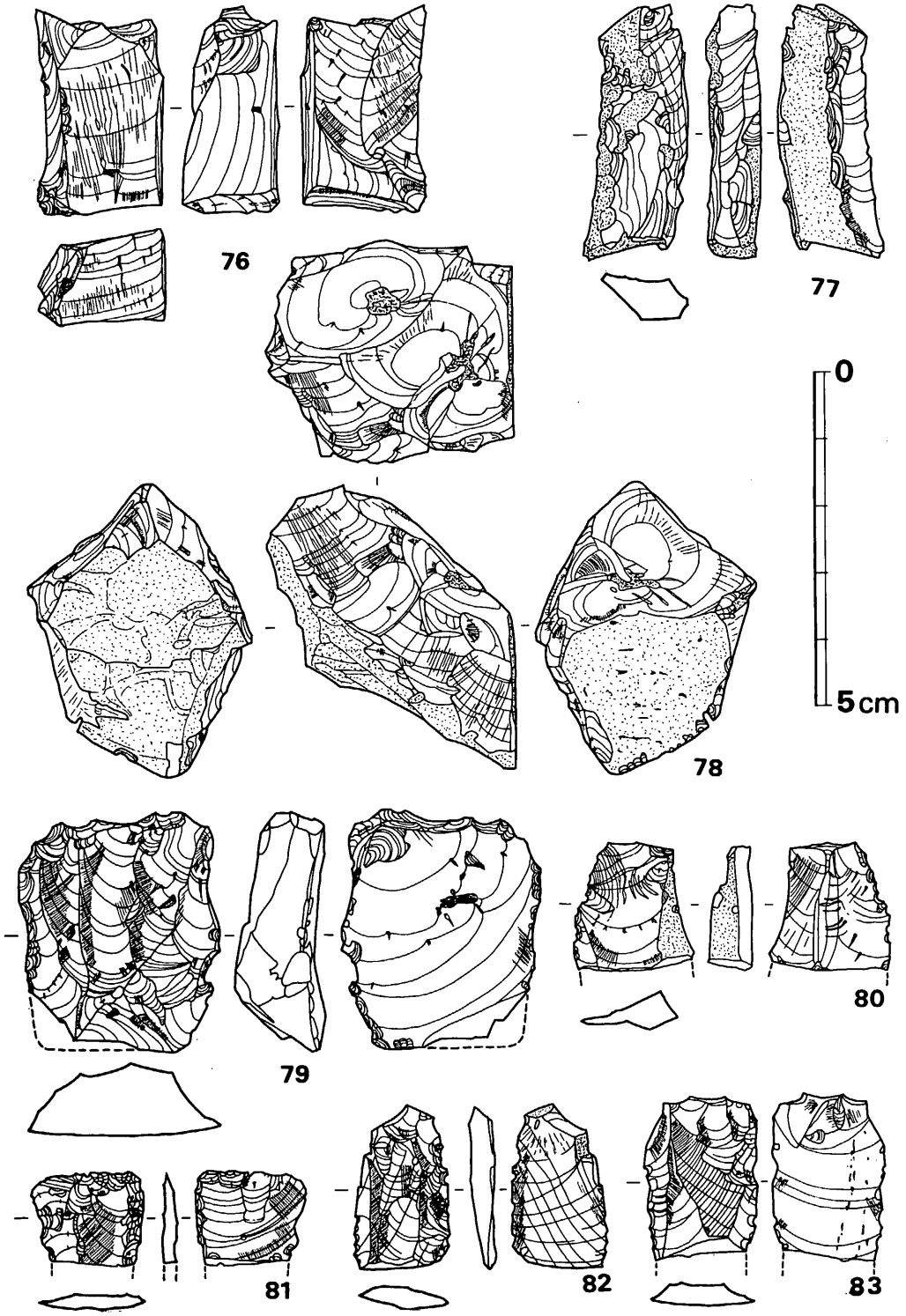


Fig. 266　表面採集石器実測図（その7）　（実大）

Fig. No.	出土位置	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	備　　考	台帳番号
266の81	表　採	黒曜石	(14.0)	17.0	2.5	(0.8)	(20.5)	右側辺・上辺を両面よりリタッチ,スクレイパーとして使用	277
266の82	1号墳前方部封土中	黒曜石	24.5	14.0	3.5	1.3	36.5	原石粗面あり，刃部は直線的　完形	208
266の83	第1号襲棺上	黒曜石	(24.5)	17.0	3.5	(1.9)	(47.0)	刃部に刃こぼれあり	201
267の84	後円部南	黒曜石	50.0	25.5	9.5	9.45	90.0	両側辺に刃こぼれ，先端部に原石粗面　完形	194
267の85	不　明	黒曜石	42.5	25.0	4.5	4.3	70.5	両側辺に刃こぼれ　完形	270

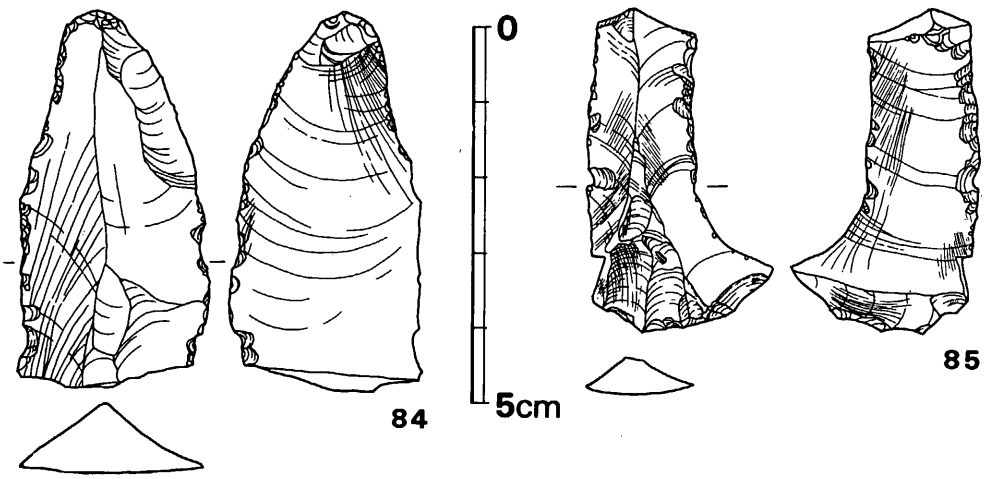


Fig. 267　表面採集石器実測図（その8）　(実大)

Tab. 65　表面採集スクレイパー一覧表　(単位：mm・g)

Fig. No.	出土位置	石　質	最大長	最大幅	最大厚	重　量	刃部長	分類	備　　考	台帳番号
268の86	D墳丘	安山岩	21.5	21.0	5.0	2.3	69.5	E	両面リタッチ 鏃のつくりかけか？	227
268の87	1号墳前方部封土中	〃	28.5	(37.0)	7.0	(5.8)	(32.0)	A	両面リタッチ 石匙約½欠損	202
268の88	1号墳表採	〃	(20.0)	(30.5)	(6.0)	(2.5)	?	A	両面リタッチ 石匙刃部欠損	311
268の89	表　採	〃	56.0	23.0	11.0	15.5	15.5	A	両面リタッチ	275
268の90	南　湟	〃	36.0	75.5	14.0	36.2	81.0	A	両面リタッチ，片面リタッチ部分あり	176
268の91	1号墳西湟5区	〃	40.0	83.5	13.0	50.2	88.0	A	両面リタッチ リタッチは粗い	166
268の92	西　周　湟	〃	57.5	32.5	10.0	19.4	50.0	A	両面リタッチ 原石粗面あり	169
268の93	1号墳西湟5区	〃	47.0	39.0	9.0	14.7	39.5	A	両面リタッチ 原石粗面あり	167
268の94	1号墳マウンド中	〃	65.0	39.0	13.0	30.2	33.5	A	片面リタッチ 原石粗面あり	213
268の95	不　明	〃	97.0	53.0	35.0	150	92.5	A	両面リタッチ石核にも利用か(?)原石粗面あり	298
268の96	表　採	〃	46.0	67.0	13.0	43.3	28.5	A	片面リタッチ刃つぶしあり原石粗面あり	276

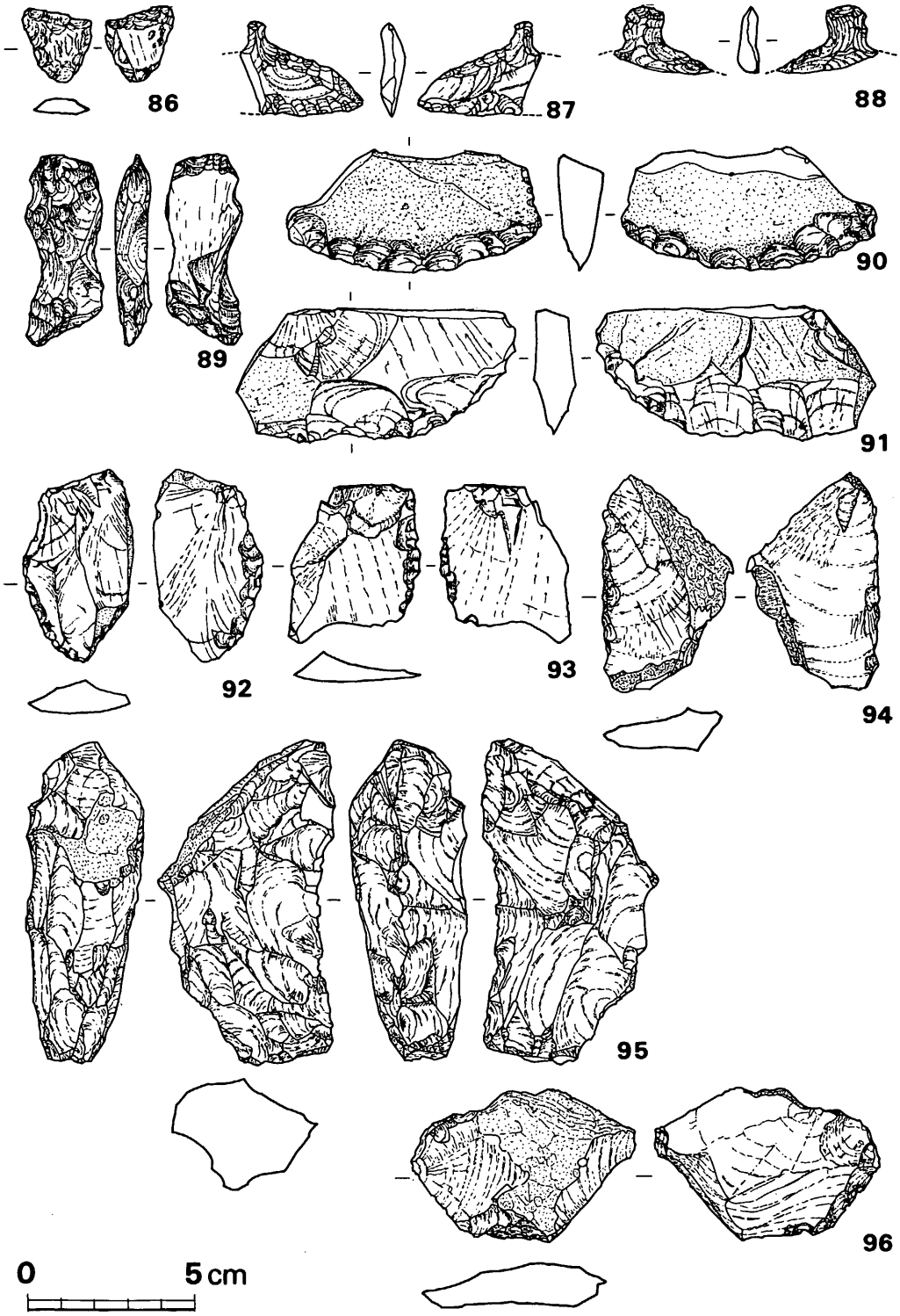


Fig. 268　表面採集石器実測図（その9）（縮尺 ½）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	分類	備考	台帳番号
269の 97	表採	安山岩	87.0	46.5	10.0	(44.7)	(26.5)	D	片面リタッチ 原石粗面あり	274
269の 98	不明	安山岩	40.5	61.5	13.0	29.3	66.5	C	片面リタッチ，原石粗面あり，リタッチ粗い	295
269の 99	古剣塚2号墳後マウンド中	安山岩	49.5	60.5	17.0	37.0	106.5	E	片面リタッチ 原石粗面あり	222
269の100	表採	安山岩	36.0	17.5	9.5	4.3	51.5	D	両面リタッチ 原石粗面あり	289
269の101	1号墳後円部凹坑	安山岩	76.0	97.5	17.0	141.1	112.5	A	両面リタッチ 原石粗面あり	247
269の102	1号墳マウンド中	安山岩	62.0	81.5	30.5	149.2	142.0	C	両面リタッチ，チョッピングツール的な使用(?)	246
269の103	古剣塚2号墳マウンド中	安山岩	(47.0)	57.5	13.0	(31.4)	(65.0)	C	両面リタッチ	223
269の104	1号墳マウンド中	安山岩	55.5	40.5	11.0	30.5	60.5	A	片面リタッチ	212
269の105	1号墳々丘中	安山岩	26.5	39.5	11.5	9.7	72.0(?)	C	石器ではないかも(?)	226
269の106	3号墳表土中	安山岩	29.0	40.0	4.0	6.4	85.5	E ?	片面リタッチ両側辺は刃つぶしか？	272

Tab. 66　表面採集石斧・石のみ一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	研磨	敲打	備考	台帳番号
270の107	1号墳東湟	蛇紋岩質	106.5	37.0	13.5	(67.2)	(9.0)	刃部付近のみ		局部磨製	168
270の108	3号墳表土中	粘板岩	(85.0)	(58.5)	(14.5)	(139)	不明	表面風化		撥型石斧	254
270の109	1号墳西周湟1区1層	蛇紋岩	(169.0)	89.0	31.0	(605)	(40.5)	全面	有	太型蛤刃 擦痕あり	178
270の110	南湟2区溝底	安山岩	(89.0)	74.5	31.0	(306)	66.0	全面	不明	刃部磨滅	179
270の111	1号墳南周湟3区	硬質粘板岩	(72.5)	59.5	13.0	(100)	49.5	部分的	不明	刃部磨滅	182
270の112	1号墳盛土中	玄武岩	(71.0)	(46.0)	15.5	(73.6)	41.0	全面	不明		211
270の113	D墳丘	頁岩	(103.5)	56.5	(18.0)	(100.6)	不明	全面	不明	太型蛤刃か(?)	228
271の114	後円部南側	砂岩	(109.5)	51.0	33.0	(289)	不明	表面風化	有	太型蛤刃石斧	229
271の115	古剣塚4号墳盛土	砂岩質安山岩	(149.5)	83.0	(50.0)	(901)	92.5	全面	不明	太型蛤刃石斧	234
271の116	南湟5区	玄武岩	(57.5)	(55.5)	(41.0)	(123)	不明	表面風化	なし？	太型蛤刃石斧	183
271の117	1号墳後円部東墳丘中	玄武岩	(95.5)	(68.5)	47.0	(539)	不明	全面	不明	太型蛤刃石斧	232
272の118	1号墳南周湟3区	玄武岩	(95.5)	(32.0)	(35.5)	(86.0)	(12.0)	全面	不明	太型蛤刃石斧	181
272の119	1号墳前方部封土中	粘板岩	(41.0)	29.5	(9.5)	(20.5)	不明	全面	なし	扁平片刃石斧	214
272の120	1号墳玄室埋土	粘板岩	(40.0)	(8.5)	10.0	(5.8)	(3.0)	全面	不明	石のみ	193
272の121	表採	粘板岩	(54.5)	16.5	13.5	(11.2)	不明	表面風化	なし	石のみ	288
272の122	1号墳々丘内	粘板岩	(51.5)	(12.0)	15.5	(9.1)	不明	全面	有	石のみ	192
272の123	1号墳後円部東墳丘中	粘板岩	(69.0)	20.5	14.5	(34.3)	不明	全面	なし？	石のみ	231
272の124	南周湟東半第5層	粘板岩	109.0	27.0	26.0	107	(22.0)	表裏面	なし	柱状片刃，抉りなし	175

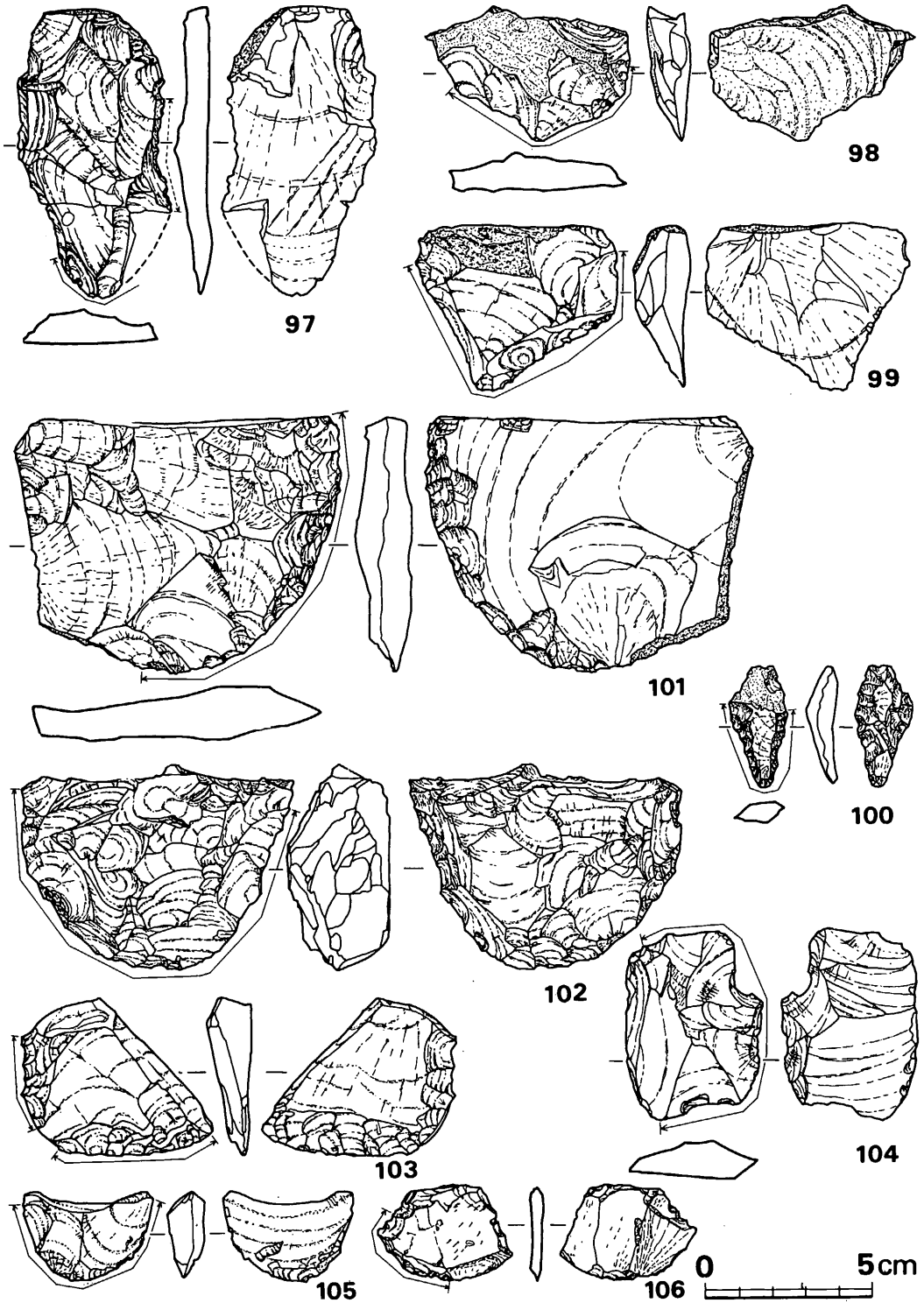


Fig. 269　表面採集石器実測図（その10）（縮尺 ½）

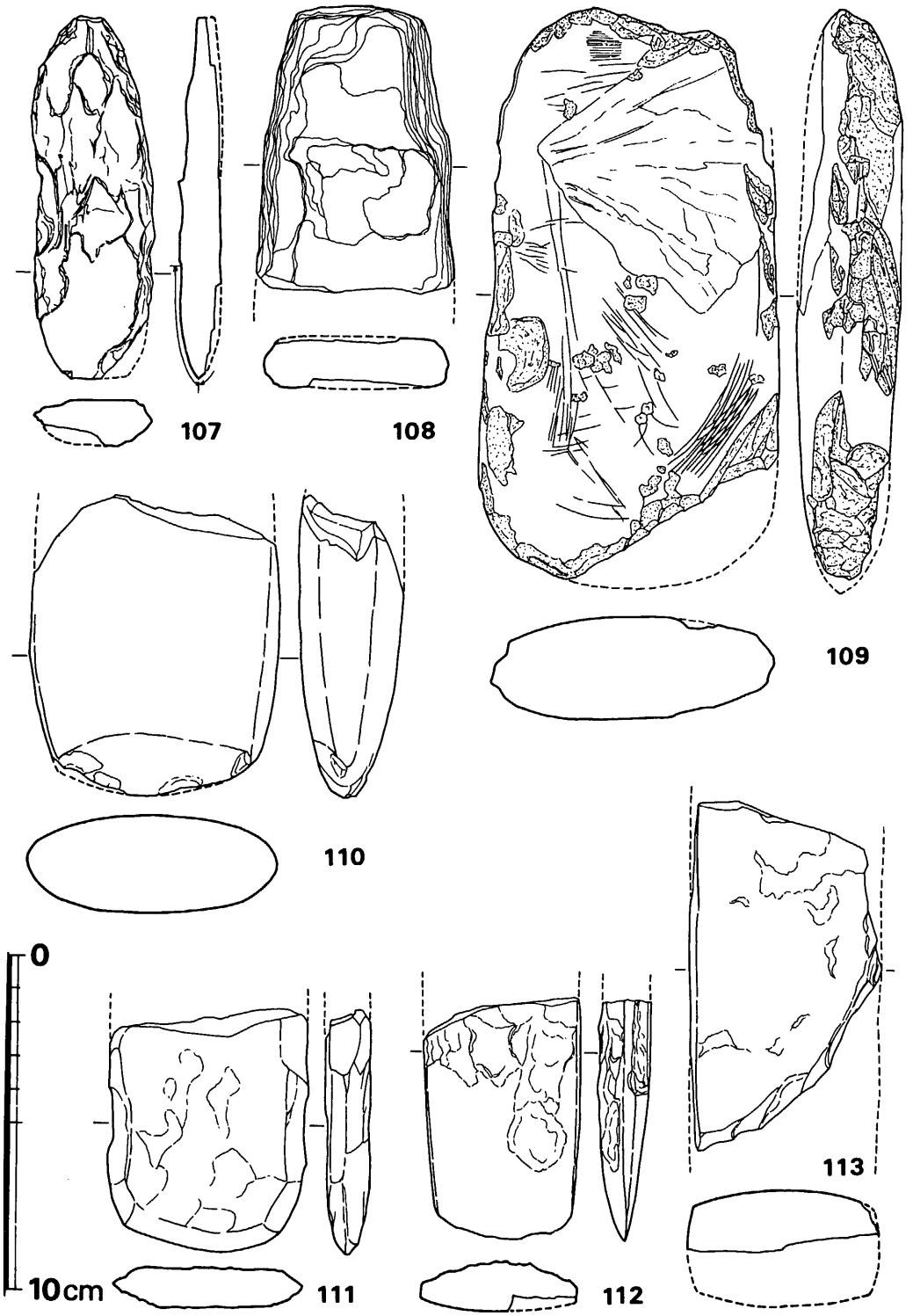


Fig. 270　表面採集石器実測図（その11）（縮尺 ½）

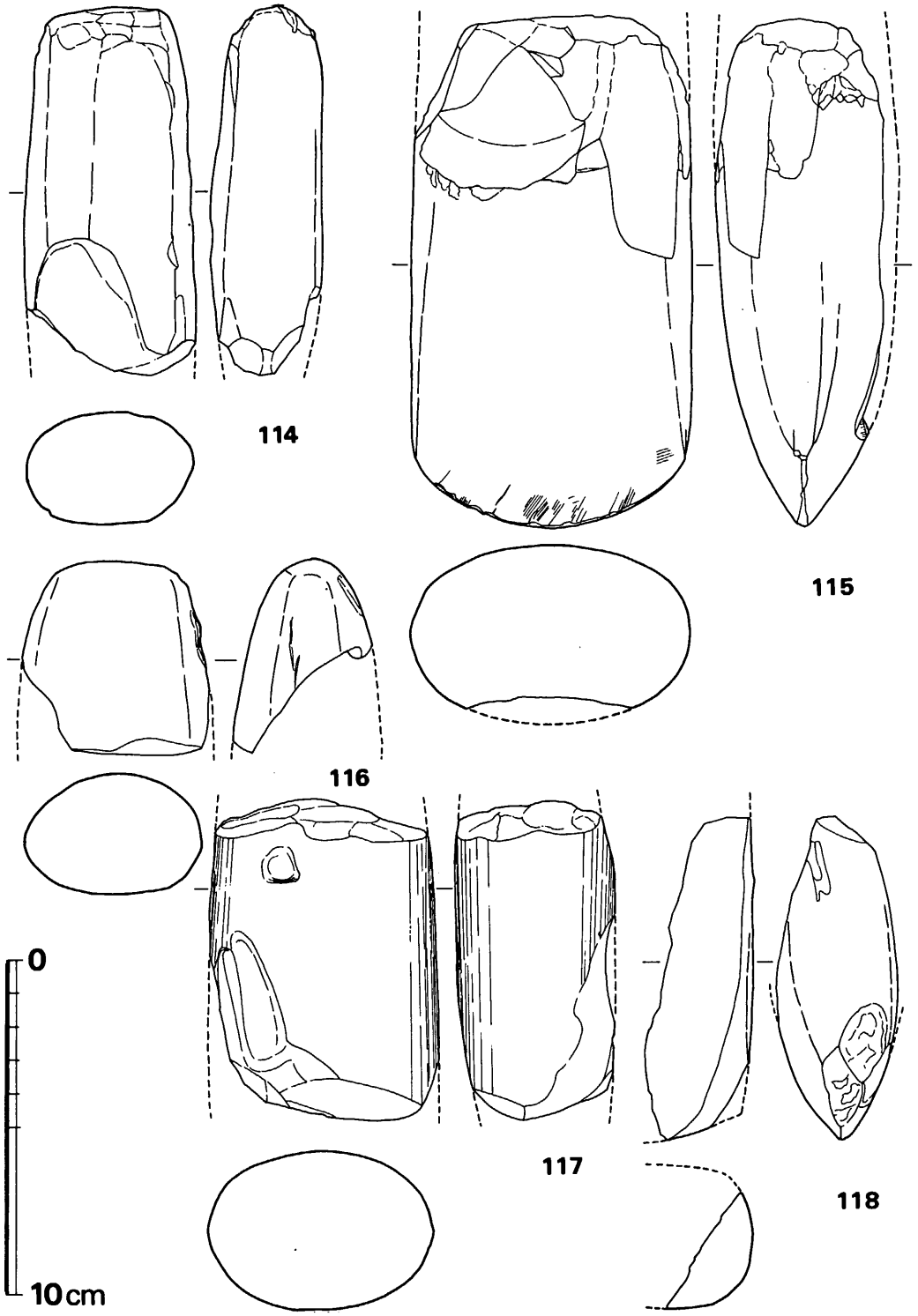


Fig. 271　表面採集石器実測図（その12）（縮尺 ½）

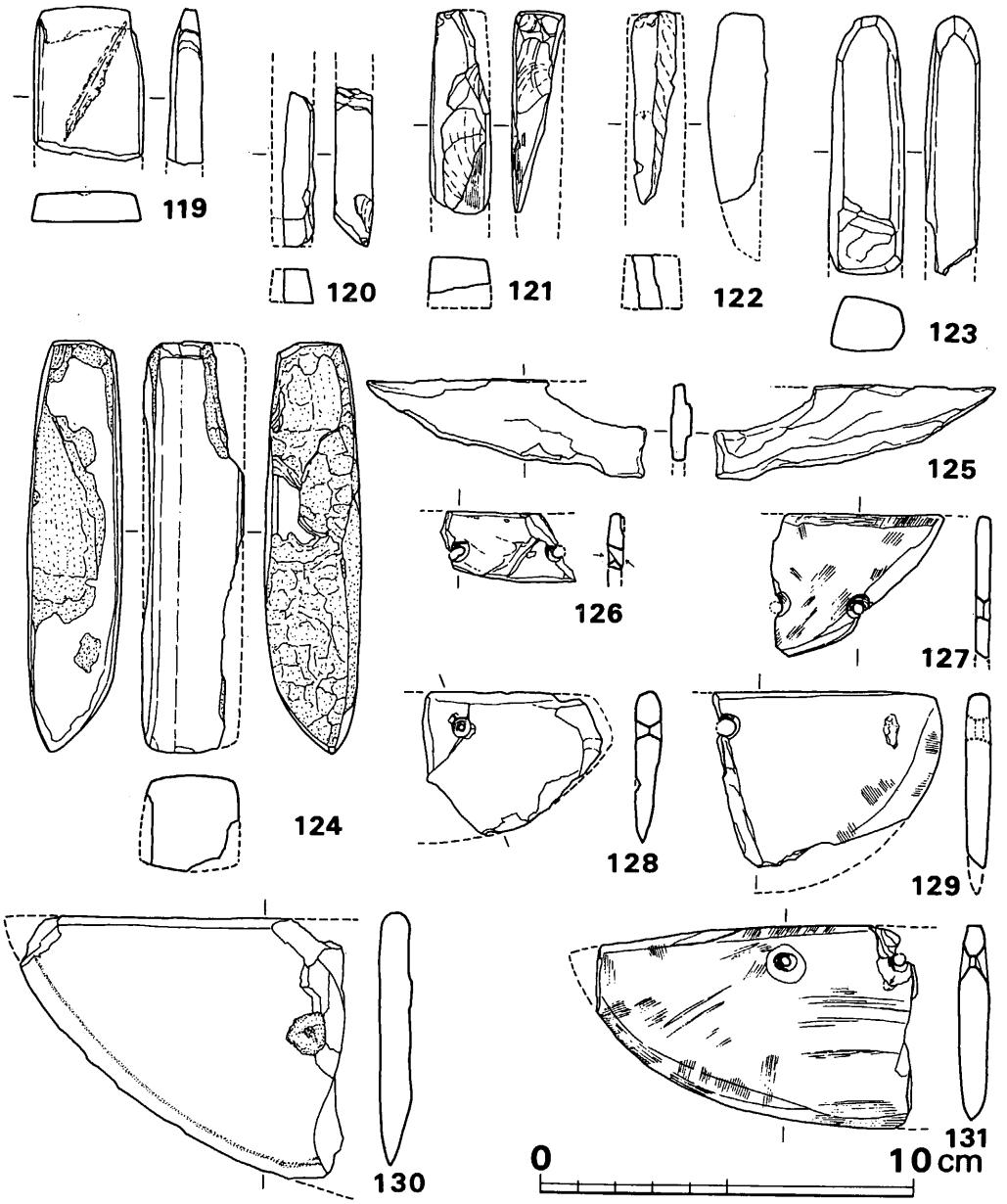


Fig. 272　表面採集石器実測図（その13）（縮尺 ½）

Tab. 67　表面採集石包丁一覧表

（単位：mm・g）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	研磨	備考	穿孔	孔径	台帳番号
272の125	1号墳後円部東盛土中	頁岩	(26.0)	(75.5)	6.0	(9.8)	不明	なし	未製品	不明		200
272の126	EF23・24周溝内(3号墳)	頁岩	(18.5)	(36.5)	4.5	(4.3)	不明	全面		両面	3.5 3.5	173
272の127	表採	硬質砂岩	(37.5)	(45.5)	4.0	(9.1)	不明	表面に部分的		両面	?, 3.0	291

7　表採遺物と周辺遺跡採集遺物

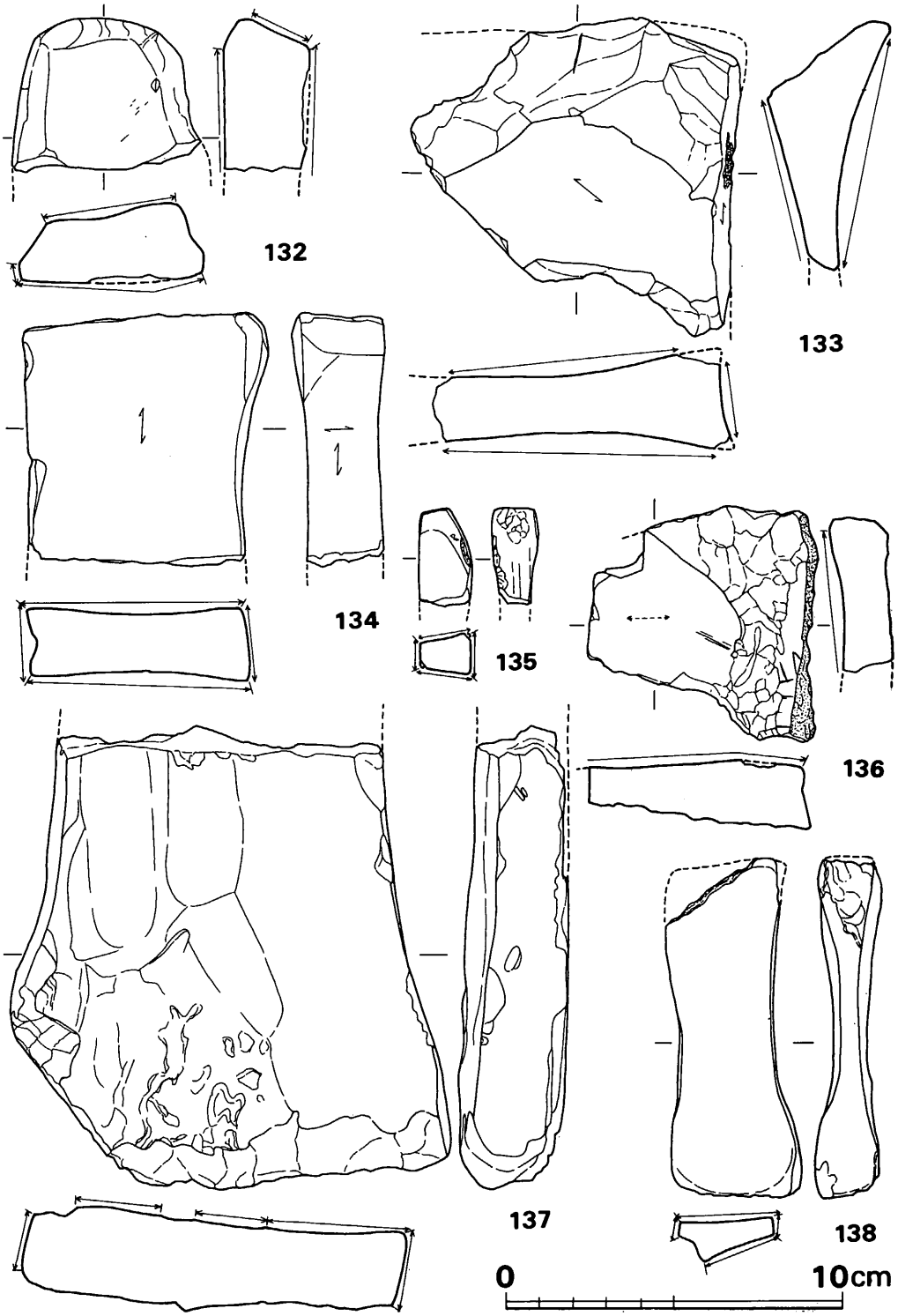


Fig. 273　表面採集石器実測図（その14）（縮尺 ½）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	研磨	備考	穿孔	孔径	台帳番号
272の128	1号墳前方部東トレンチ	硬質砂岩	(38.5)	(49.5)	7.0	(16.4)	(20.0)	全面		両面	?,1.5	217
272の129	1号墳玄室内埋土	輝緑凝灰岩	(47.0)	(61.0)	6.5	(23.8)	(34.5)	全面		両面	?,5.0	195
272の130	古剣塚3号墳南側周溝	頁岩	(70.0)	(86.5)	9.0	(75)	(94.5)	全面	未製品	途中		233
272の131	不明	頁岩	53.0	(85.5)	8.0	(52.3)	(90.0)	全面		両面	3.0,?	287

Tab. 68　表面採集砥石一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	研磨面	砥の程度	備考	台帳番号
273の132	前方部堆積土	砂岩	(46.0)	(55.5)	25.5	(85.2)	表・裏面 上面・左側面	中砥		197
273の133	南周湟2区2層	砂岩	(94.0)	(98.0)	36.5	(239)	表・裏面 右側面	中砥		180
273の134	古剣塚3号墳西裾	砂岩	(74.5)	73.0	27.0	(204)	表・裏面 両側面	中砥	溝状のくぼみあり	235
273の135	南湟2区2層	砂岩	(29.0)	16.0	13.5	(8.3)	表・裏面 両側面	中砥	小型	188
273の136	南湟5区	砂岩	(70.0)	(68.5)	20.0	(112)	表面	中砥		177

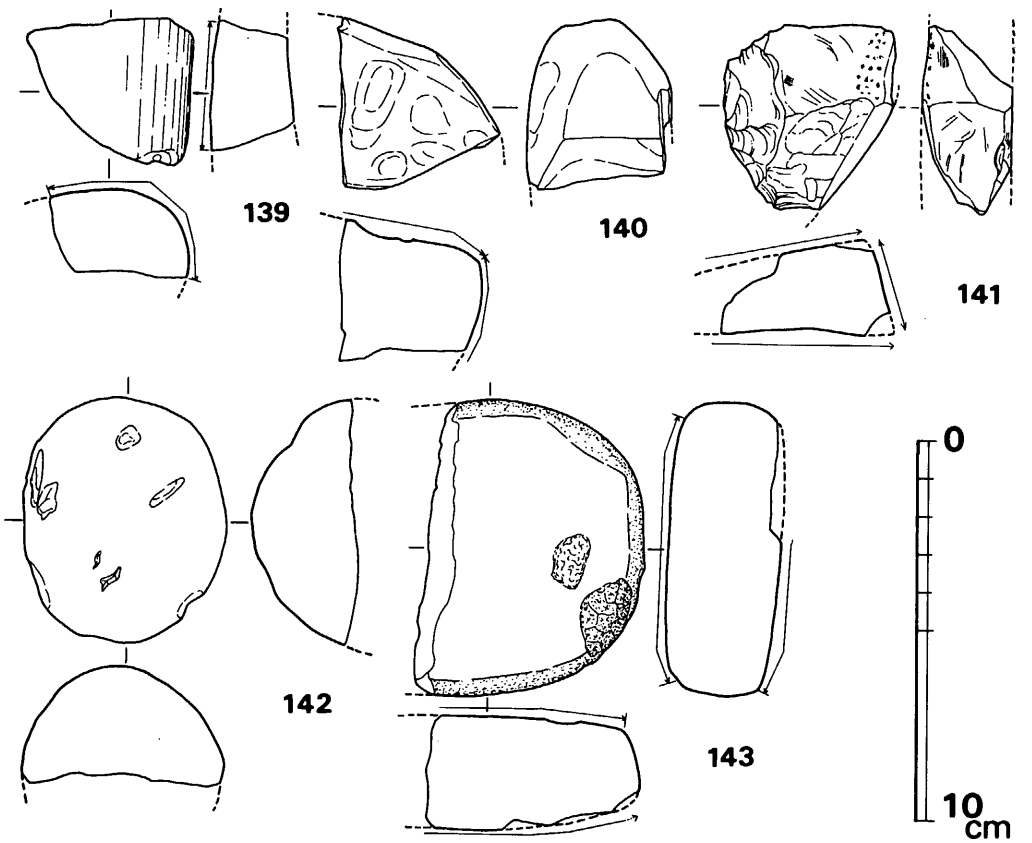


Fig. 274　表面採集石器実測図（その15）（縮尺 ½）

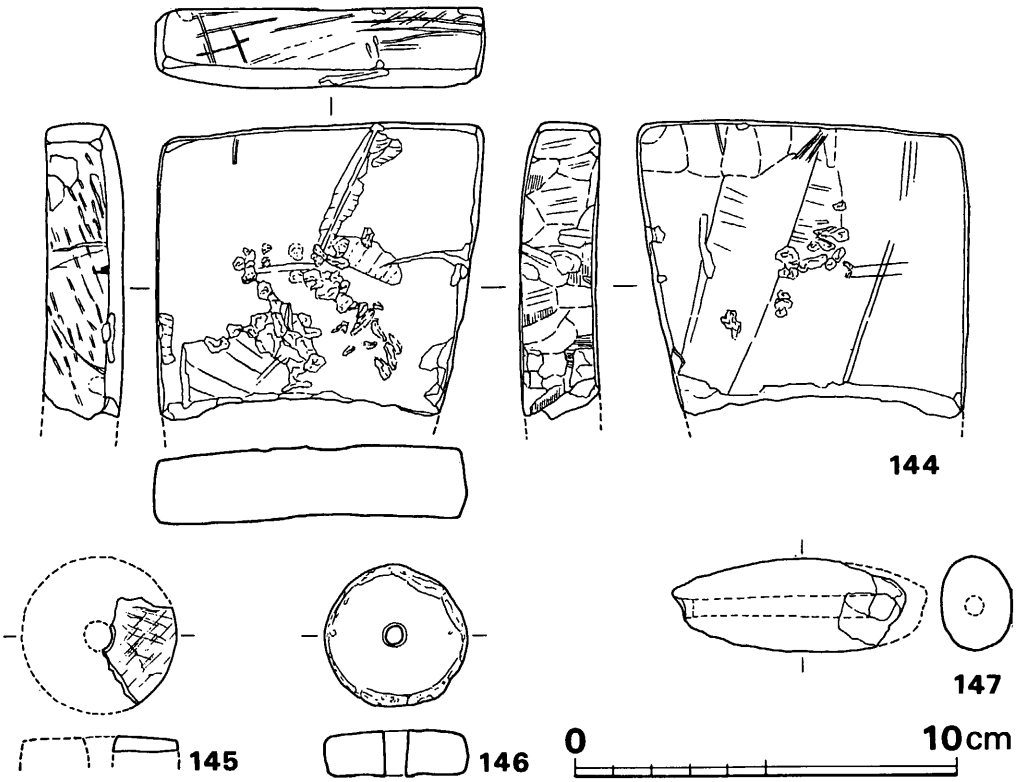


Fig. 275　表面採集石製品・土製品実測図（縮尺　½）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	研磨面	砥の程度	備考	台帳番号
273の137	1号墳後円部凹坑	砂岩	(136.5)	130.5	32.0	(767)	表面・両側面	中砥		248
273の138	表採	粘板岩	99.5	(40.5)	18.5	(71.5)	表・裏面両側面	仕上砥		253

Tab. 69　表面採集磨石一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	出土位置	石質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	台帳番号
274の139	1号墳々丘内	玄武岩	(37.5)	(43.0)	(22.5)	(56.1)	残存¼以下	224
274の140	不明	玄武岩	(44.0)	(42.0)	(37.5)	(90.5)		285
274の141	1号墳後円部東側	砂岩質	(48.5)	(44.5)	(23.5)	(54.7)	叩痕あり	308
274の142	1号墳々丘内	玄武岩	(63.5)	53.0	(30.5)	(138)	⅓～¼現存	225
274の143	不明	玄武岩	77.5	(59.5)	30.5	(203)	½現存	286

Tab. 70　表面採集石製品・土製品一覧表　（単位：mm・g）

Fig. No.	器　種	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
275の144	滑石製不明品	1号墳南湟	(77.5)	86.0	21.0	(282)	全面を研磨，表裏面に叩痕あり
275の145	滑石製紡錘車	古剣塚2号墳マウンド中	(27.5)	(19.5)	(4.0)	(3.4)	復元直径41.0mm，復元孔径 7.5mm
275の146	土製紡錘車	不　明	37.5	37.0	12.0	18.6	孔径 4.5mm～6.0mm
275の147	土　錘	古剣塚3号墳周溝	24.5	(61.0)	19.0	(23.0)	

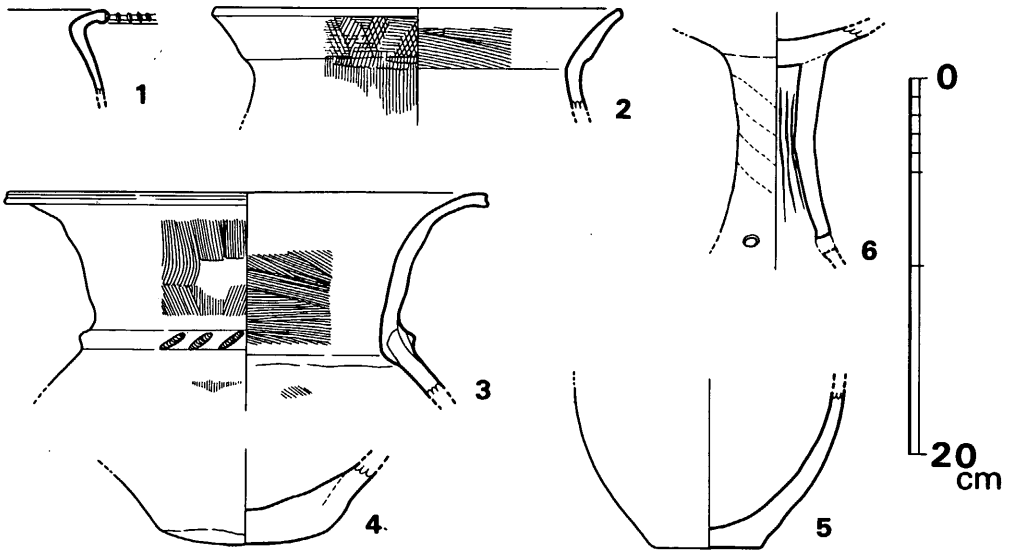


Fig. 276　剣塚遺跡北方水田採掘中採集の弥生式土器実測図（縮尺 1/4）

◎ 周辺遺跡採集の遺物

剣塚遺跡調査中に，本遺跡北方500mの大佐野から通古賀を結ぶ道路と当縦貫自動車道がボックスで交叉する水田において，基礎工事の為にユンボで掘削していた際に採集した遺物である。水田の床土に埋没していた為か，いずれも極めて器表の残りが良く，弥生終末期の貴重な資料の一つとなろう。

甕　(Fig.276－1～2)

1のみが前期の所産である。口縁強く外反して水平にのび，その端部全面に刻目を施す類である。内外面横ナデで，胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で赤茶色を呈する。**2**は，頸部で明確に屈折して「く」の字状に伸び，口縁外面下半に中ぶくらみ状の不明瞭な稜をつくる。口唇部～口縁内面上半は横ナデ，以下明瞭な稜をつくる頸部内面までは粗い横ハケ，胴部内面横ナデ，口縁外面は横ハケの上に斜めハケを施し一部で綱目状となる。胴部外面は縦ハケを施し，ハケは櫛目状の荒いものである。胎土に粗砂幾らか含み，焼成良好で内面淡褐色，外面は煤で黒色を呈する。

壺（3）

開口壺状に口縁拡がり，頸部に太い凸帯をつくりその上に斜めの太く長い櫛目状工具による刻目を施す。口唇部は凹状となり，口縁内面上半～外面上端は横ナデ，内面下半には細かい横ハケを施し，胴内面にはナデを行ない，ごく部分的にハケを残す。口縁外面は縦ハケ，凸帯を挟んで上下間は横ナデ，胴部外面には縦ハケが施される。胎土に極く少量の粗砂を含むが，全体にかなり精良で，焼成良好，外面灰茶色，内面は灰黒色を呈する。

高杯（6）

中空で高い脚部を有する大型の器形となろう。杯部内面はヘラ磨き，脚外面は縦ヘラ磨き，外面には右下がりのシボリが行なわれた痕跡がみられ，内面には，そのシボリによる縦ジワ痕がみられる。孔は3個と推定される。胎土に粗砂少量含み，焼成良好で，灰褐色を呈する。

底部（4・5）

4は，不安定な平底風丸底をなし，器壁厚く，外面縦ナデを行なう。粗砂多く含み，焼成良好で外面淡褐色，内面は炭化物が付着して黒色を呈する。5は小型の甕，或いは短頸壺状の器形をなすもので，安定した平底につくり，球形に近い胴部を有する。外面ヘラ磨きで，胎土に粗砂かなり含み，焼成良好で，茶褐色を呈する。　（中間研志）

Ⅵ—8　小　　結

a．袋状竪穴群について

本遺跡においては，南半の前方後円墳下を中心に50基の袋状竪穴が検出された。「袋状竪穴」の名称は，本遺跡例においては実態にそぐわないものもあるが，ここでは一応通称「貯蔵穴」と呼ぶ弥生前期～中期の断面袋状乃至筒形の深いものを「袋状竪穴」と総称した。これらの袋状竪穴が平面的な分布状況だけでグルーピング不可能であることは言うまでもなく，特に本遺跡例では，低位部（住居跡群近辺），高位部（前方後円墳墳丘下）の区別に，更に中位部（前方後円墳周溝内～周溝西外平坦地）を加えて，各部の立地における諸制約による形態の変化等を導き出そうと試みた。

規模の分類　まず，計測値において原状に近く信頼度の高いものは，床面積，及び床面標高で

ある。深さ，断面積等は，これ程幾重も各時代遺構が重複して原地形を留めない遺跡においては，上面の削平著しく，埋没までの壁面崩壊等を考慮すると，著しく信頼度に欠ける部分が多く出てくる。以上のことから，横軸に床面積を，縦軸に標高を落としてみた(Fig. 277)。床面標高から上方に実線を引き，その袋状竪穴の現存の深さを示した。後述する如く，これによって少しでも深さの復元を試みようとするものである。横軸の床面積の分布をみると全体としてはそれ程明確に分類できないようである。よって更に，(Fig.278) の床面径の(長径×短径)度数分布をみてみると，大・中・小の大分類ができる。45°斜線より著しく離れて下方に分布するグループは，方形プランと，楕円形プランの類である。この大・中・小の分類により再び (Fig.277) をみて，高・中・低位の各部に宛てはめてみると，以下の事実が浮かび上がる。

1．低位部においては，小類のうちでもより小型に類するもの (0.9～1.7㎡) と，中類のものが各々4基づつみられる。

2．中位部においては，小類のものと，中類の中でもより大きい類に入るもの (3.3～3.85

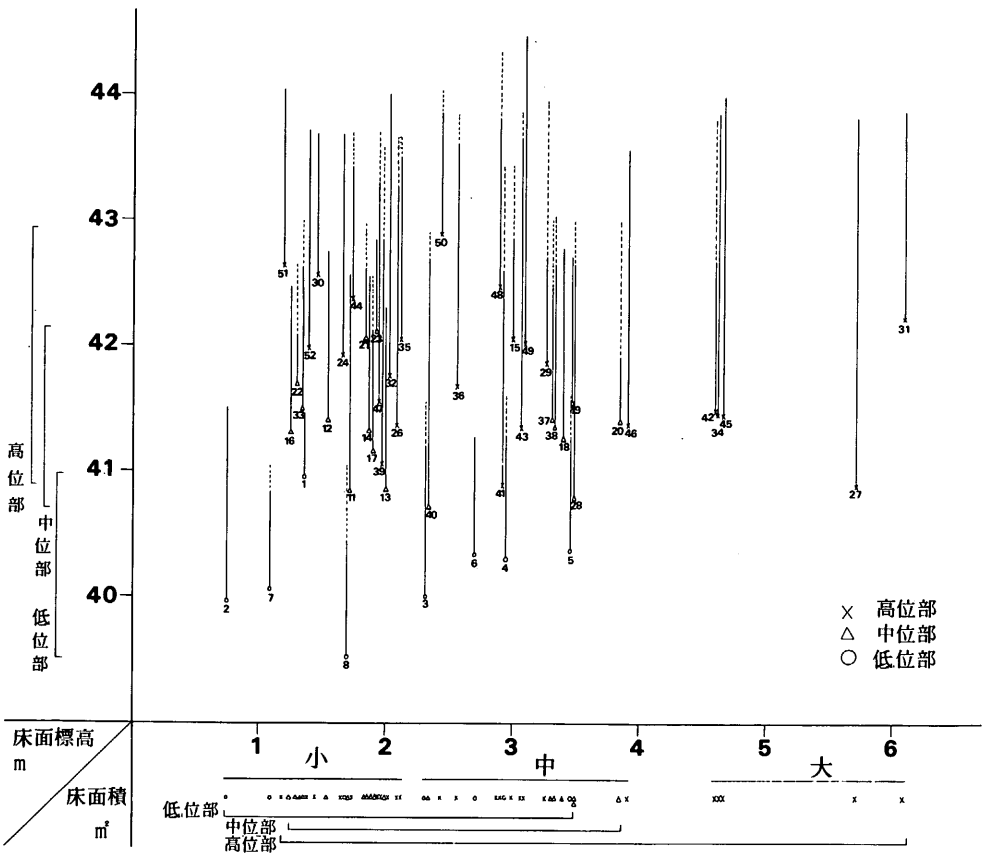


Fig. 277　袋状竪穴の床面標高と床面積

8 小　　結

㎡）がみられ，各々10基，6基と，後者が約半数となる。

3．高位部においては，小類のもの10基，中類のもの9基，大類のもの5基と，全体に平均的な分布を呈する。

次に，(Fig.277) に示した床面標高とその深さの上に，削平されたと推定される分について，各々にあたって点線を延ばし，その深さの復元を試みた。((Fig.279) の点線部分) その際に次のことに配慮した。

1．まず旧地形の推定の基準として，第34号袋状竪穴近辺を中心として弥生期の旧地表が残る部分のものにおいては，一応その上面が原形上面に近いものであろう。

2．弥生期における地形の削平等の大規模工事等は行なわれることは無かったろうと推定して，高位と中位の中間位置にあるものは，旧地形は自然傾斜であったと考え，上面はその中間値をとって大差なかろう。

3．1における上面が原状を保つものから推定して，それに近い古墳前期に著しく地形を変

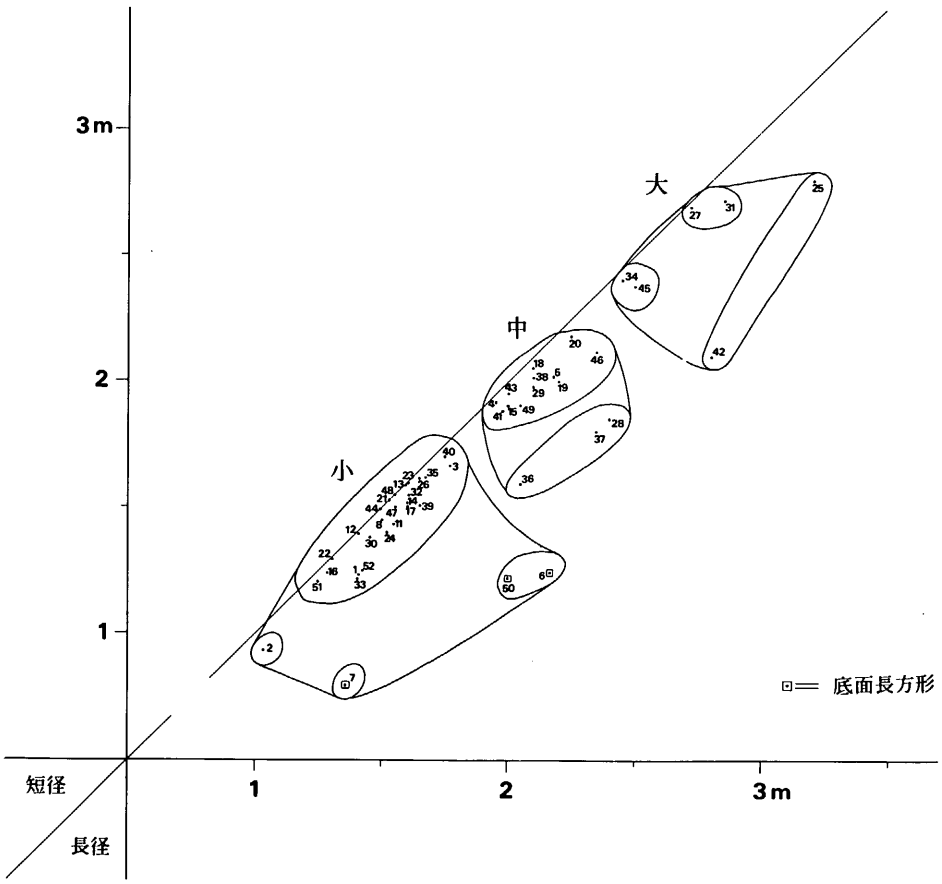


Fig. 278　袋状竪穴の底床面長径と短径

容させられた部分のものに対しても，ほぼ同程度の上面標高を示すものと考えてよかろう。

4．低位部においては，住居跡の残存状況を考えるとき，上面を削平されたとしても，まず最大限の５０㎝内外と考えてよく，東側斜面に在るものの方が削られた可能性が強い。

以上の諸点を考慮して，原状深さを推定復元し，その復元深さと，床面積との関係を示したのが(Fig. 279)である。これを観察すると，一応大類・中類・小類・特小類等に分類できる。この中には，床面積でみると，中類に入るが深さの点でやや浅い１グループがみられる。これらは，深さの推定復元が甘かったのか，或いは，それで１グループをつくれるのか，まず判断に迷うが一応１グループをつくるものと考えたい。また，深さの点だけからみると，深いもの，中深いもの，浅いものに明確に分類できる。この結果が最も明確に出来る類であり，全体としては，深いものはより床面積が大きくなるという傾向としては促えられるが，同面積でも中深

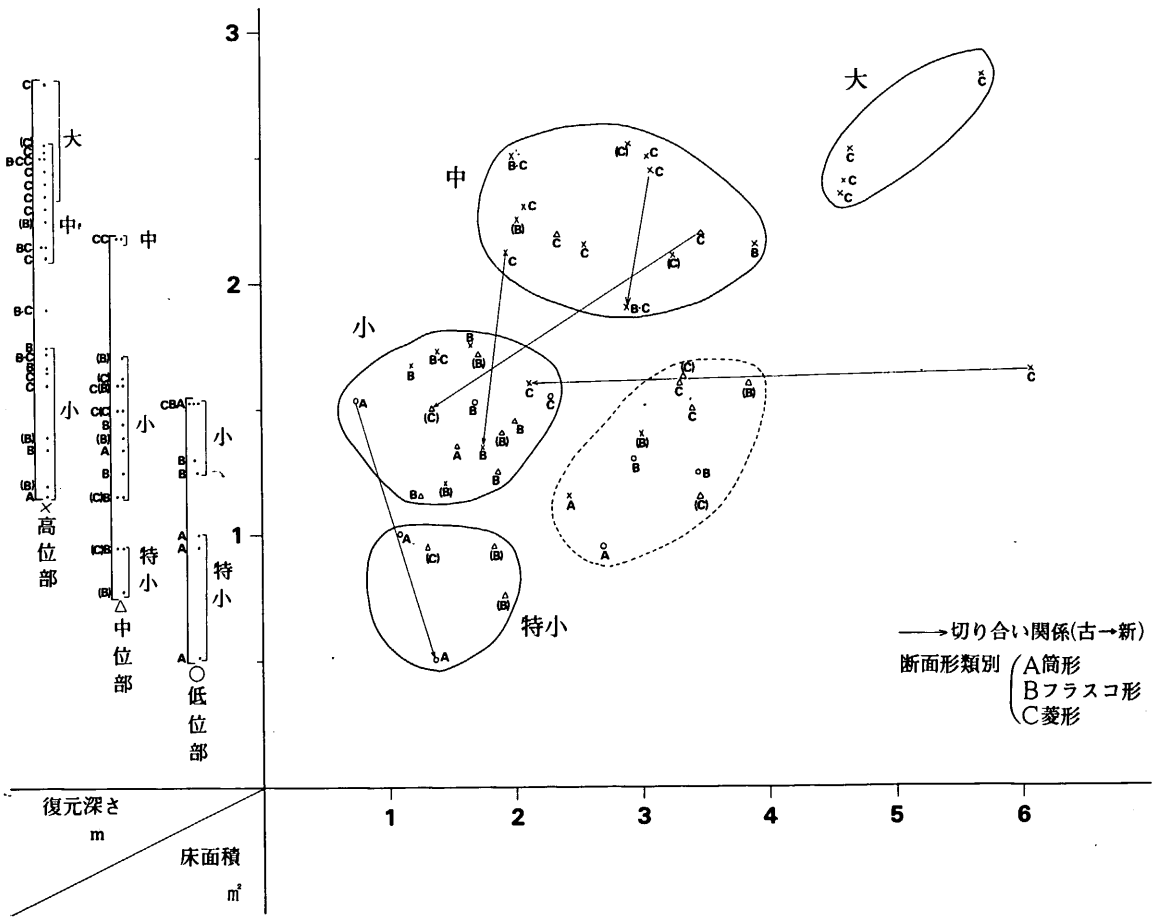


Fig. 279　袋状竪穴の復元深さと床面積

8 小　　結

のグループと浅いグループがあるという如く，分類上最も信頼のおけるのは，深さと，高～低位部の立地条件であろうと感じている。このことは，筑紫郡那珂川町門田遺跡の例（註 1）においても全体として感じられることである。以上の分類法で判かったことを記すと次の様になる。

1．高位部に立地するものにおいては，深いもの14基（大類4基＋中類10基）と，中深のもの（小類9基）のみがみられる。

2．中位部のものにおいては，深いもののうちでもやや浅い部分に含まれるものと（中類2基）中深のもの（小類12基）浅いもの（特小類3基）がみられる。

3．低位部のものには，中深のもの（小類5基）と浅いもの（特小類3基）がみられる。

以上のことから，立地におけるその規模の差というのは明確である。この結果がどういう理由に依るものなのか考えてみたい。まず，時期の差によって立地が移ってゆき，更にそれに伴って大小の形態（規模）差が出てくるという考え方がある。これに対しては，各(大・中・小)セット関係を1セットとして，各種毎に掘る場所を替えて用途を異にしたのだという考え方がある。更に，掘り易さという点において，地質的な問題から言って，高い部位程掘り易かったのであるから，深いものは高位部に設けたのだという考え方に対しては，本遺跡においては中位部・高位部ともに下層は真砂土であり，（低位部においてはかなり厚くローム層がみられたが）その間の差を説明出来る類ではない。

以上の各部位における差は，時期差の問題を加味せねばならないので最後に検討することにして，次に各個における断面形の分類をみてみたい。

断面形の分類　断面形の分類は以下の如くである。

A類―筒状の現存断面形をなし，中の埋土状況からみて壁面上部のせり出しが在ったとしても，それが著しく崩壊した痕跡がみられないと判断したもの。

B類―現存断面がフラスコ状を呈しているものと，現状ではそれが認められなくても上部のせり出しの著しい崩壊等が認められ，その推定が可能なもの。

C類―床面から一度外方へ開き，更にフラスコ状にせばまる「断面菱形」の類で，床面からの壁立ち上がりが明らかにその類であると判断できるものを含む。

以上の断面形態による分類を Fig.279 の中に当てはめてみると，A類は特小類と小類の浅く狭いものに集中する。B類は，小類に殆んどが集中し，中類及び小類の広いグループに僅かにみられる。C類は，小類にも僅かに含むが，殆んどは中類・大類にほぼ集中する。これらの分類を更に高位・中位・低位の別に当てはめると，

1．低位部においては，浅いものがA類，中深のものが主にB類となる。

2．中位部においては，浅いものがB類，中深のものがB類を主としてC類とA類が僅かにみられる。

3．高位部においては，中深のものにB類を主としてC類とA類が少し含まれ，深いものに

は殆んどC類がみられる。

以上の様な結果となり，深さによる区別と殆んど一致するものとなり，これによっても，前の深さの復元も略当を得た所ではなかったかと判断できよう。

時期の分類　次に，各袋状竪穴出土遺物（主に土器）に依って各々の時期を確定してその時期における形態・規模・立地等を判断しなければならないが，実際には各々に各種土器のセットが出土する訳ではなく，更に，先に述べたように出土遺物の総てが床面密着ではなく，厳密な意味で袋状竪穴初掘削時を表わすものではないという難点がある。それはともかく，ここで袋状竪穴に関する切合い関係をみてみよう。（ＹＰ：袋状竪穴）以下，旧→新を示す。

ＹＰ８ → 第７号住居跡 → 第１号住居跡
第８号住居跡 → 第７号住居跡
ＹＰ７ → 第１号住居跡
ＹＰ２ → ＹＰ１
ＹＰ５ → ＹＰ４　（最終埋没同時期）
ＹＰ３１ → ＹＰ３５（最終埋没同時期）
ＹＰ２８ → ＹＰ３３
ＹＰ４７ → ＹＰ４４
ＹＰ４９ → ＹＰ４８
ＹＰ５２ → Ｋ　１５
ＹＰ５２ → Ｋ　１４

これらの関係で面白いことは2→1，31→35，28→33，47→44，49→48といずれも，深い類→浅い類の事実がみられることである。

これらに加えて，各袋状竪穴における遺物による時期を考えてみる。大きく3期に分類できる。即ちⅠ期～板付Ⅰ式の傾向を残し，板付Ⅱ式の古式に該当すると考える前期中葉（6・8・13・26・42・43・52），Ⅱ期～板付Ⅱ式の新式に該当すると考える前期後葉（2・4・5・7・17・24・27～32・34・37・40・41・44・50），Ⅲ期～前期終末から中期初頭（1・3・11・16・20・36）。Ⅲ期には明らかに中期に含まれるものも入れた。この時期判定に使用した土器は，総てがその遺構の初営の時期を示すものではないことや，土器を出土しない袋状竪穴も多く，必ずしも確定的ではないことを明記しておく。その上で，これらの切り合い関係状況をみると，Ⅰ期→Ⅱ期と考えられるものと，Ⅱ期の間での切り合いと思われるもの（5→4，31→35），Ⅱ期→Ⅲ期となるもの（2→1，28→33）がみられ，いずれも規模が小さくなる傾向を示す。更に，Ⅰ則は高・中位の中・小類，低位の小・特小類にみられ，それ程集中する傾向などはみられず，全体にやや小型であるが，各部位において大小のセット関係を示すようである。Ⅱ・Ⅲ期においても同様の傾向がみられる。

8 小　　結

また，断面形の類別の時期的変化もそれ程明確にはできず，各期にまたがっている。ただ床面プランが方形をなすもの（6・7・50）においては，少なくともⅢ期に下る要素は無く，より古い様相をみせる。以上の袋状竪穴の形態・規模・時期の関係での考察をまとめると次のようになる。

1．総体的に，Ⅰ期のものは小～中類で，Ⅱ期になると大類も作られバラエティーに富んでくる。Ⅲ期になるとやや小ぶりになる傾向を示す。

2．高・中・低部位における立地の違いは，各時期における占地条件による移動を示すものではなく，各期の各部位への規模（特に深さ）と形態（断面形）の異なるものをセットとして造営した可能性が強い。

3．ただ床面長方形のものは古い様相を示す。

4．断面形態・深さ等は，高・中・低各部位によって明確な差異を示し，その制約に何らかの理由を考えざるを得ない。

このような傾向は鞍手郡鞍手町向山遺跡（註2）においても推定され，このように大小の異なるタイプのものがセットをなすということは，両者間の中に貯蔵するもの等の区別があったのではないかという疑問を抱かせる。崩壊頻度の高い構造である事を考えるとき，勿論，各期のすべてが全く同時に営まれたとは考え難く，このような地盤の弱い地域ではせいぜい四半年程度が使用可能期間であって，それ程大集落の造営とは考えなくても良い。本遺跡検出の前期住居跡は3軒であり，周辺の状況を考慮しても同時期4～5軒の小集落が50基の袋状竪穴を崩壊する毎に次々に造営したと想像することも決して無理なことではない。

埋没状況　次に袋状竪穴における埋没状況を見てみたい。一覧表（Tab.20）に示した分類は以下の如くである。

Ⅰ類―埋没した土が，ほとんど地山土（花崗岩培乱土）で占められるもの。

Ⅱ類―下半のみが地山土で大きく埋まり，上半には有機質を含んだ土や，黒色土等が時にレンズ状に大きく窪んで埋没したもの。

Ⅲ類―黒～灰褐色の有機質土を多く含むが，両壁際の床面や中位で断面三角形状の地山土の落ち込みがみられるもの。

Ⅳ類―殆んど全埋没土を炭・灰や暗色系の有機質土で占める類。

以上の分類は，各袋状竪穴実測図に付掲載した土層図を色分けしてみるとより歴然とする。また，前に分類した断面形も，この埋没状況分類を考慮したものであることは言うまでもない。Ⅰ類は，完全に埋め戻した可能性が強いが，明らかにこの類の代表的な例となるものはみられない。Ⅱ類は，中途まで上壁が崩壊して埋没したものの，その上面において更に再使用した可能性のあるものもみられる。Ⅲ類は，上壁のせり出し部がそのまま崩壊して落ち込んだ類で，この類が最も多い。Ⅳ類は，殆んど崩壊せずに残ったものであり，埋没も塵捨場等として炭化物層が著しくみられるのが多い。筑紫野市針摺野黒坂遺跡例（註3）においては総32基中15基

が埋め戻しを行なっているとのことであるが，本遺跡例においては，Ⅰ類と，Ⅱ類の一部，Ⅲ類の一部にその可能性を与えられるのみで，明確な様相を示すものは極めて少なく，却って崩壊後にレンズ状に炭化物層などが堆積して，前述の如く塵捨場等への転用が強く推定されるものである。

（中間研志）

b．石器について

本遺跡では，石器が約320点出土しており，その総てを図示し，計測値等を各表にまとめた。また石器については，通し番号（KZ1～KZ311）をつけて台帳に記した。石器の一部には旧石器・縄文時代の所産と考えられるものが僅かに存在するが，その殆んどは，本遺跡の全体に分布する弥生時代前期のものであると考えてよい。

ここでは各石器種について若干の考察を行ない小結としたい。

打製石鏃 石材としては大別して，黒曜石・安山岩（註4）・チャートの3種類が用いられている。打製石鏃70点のうち黒曜石製40点・安山岩製29点・チャート製1点で，それぞれ57.2%・41.4%・1.4%を占める。個数では殆んどが黒曜石と安山岩で占められ，やや黒曜石が多いと言える。これに先端の欠損したものを考え合わせると，黒曜石製5点（12.5%）・安山岩製7点（24.1%）となり，安山岩は黒曜石の約2倍の欠損率となる。先端の欠損した石鏃は再使用が不可能であることを考えると，この欠損率の差が究極的には（原石入手・加工の困難さの程度を同じぐらいと仮定した場合），石鏃総数における石質による数の差異となってあらわれると考えられよう。

まず基部の形態によってA・B・Cの3型に分類した。（Tab.71）

Tab. 71 打製石鏃分類表（その1）

	石質	Ia	Ib	II	小計	計
A	チャート	0	0	0	0	5(1)
	黒曜石	2(1)	2(0)	0	4(1)	
	安山岩	0	1(0)	0	1(0)	
B	チャート	0	0	0	0	25(3)
	黒曜石	7(1)	4(0)	1(0)	12(1)	
	安山岩	4(0)	8(1)	1(1)	13(2)	
C	チャート	1(0)	0	0	1(0)	35(8)
	黒曜石	15(2)	2(0)	3(1)	20(3)	
	安山岩	10(3)	4(2)	0	14(5)	
不明	黒曜石	2(0)	0	2(0)	4(0)	5(0)
	安山岩	1(0)	0	0	1(0)	
計		42(7)	21(3)	7(2)	70(12)	70(12)

A型―所謂凸基式のもので，最大幅は基部端にはない。

B型―所謂平基式のもので，最大幅は基部端にある。

C型―所謂凹基式のもので，最大幅は基部端にある。抉りには浅いものから深いものまであるが，特に区別はしなかった。

この分類によればA型5点（7.1%）・B型25点

8 小　　結

(35.8%)・C型35点(50%)・不明5点(7.1%)となる。半数がC型だがこれにも比較的抉りの浅いものが多く，基部は，平坦か，浅い抉りのものが大部分であると言える。石材別に見ても大差はないようである。

また石鏃の素材を考慮に入れⅠ類・Ⅱ類に分けた。(Tab.72)

Ⅰ類：不定形の剥片を利用したもので調整剥離が顕著に見られる一群である。このⅠ類の中でも，剥離が全面に及ぶもの・僅かしか原剥離を残さないものと，剥離が部分的で比較的広い原剥離面を残すものとがある。前者をⅠa，後者をⅠbとして区別した。

Ⅱ類：刃器状の剥片を利用して製作された所謂剥片鏃の一群である。これには剥片の基部側を利用するものと，先端を利用するものとがあるが，特に区別しなかった。この他に通常の技法によらずに製作されたと思われる石鏃及びその未製品が出土しているのでこれも広義な意味で剥片鏃の中に入れた。

この分類によればⅠa類42点(60%)・Ⅰb類21点(30%)・Ⅱ類7点(10%)で，不定形の剥片を利用し，しかも入念な調整剥離をしたものが大部分を占める。

Tab. 72　打製石鏃分類表(その2)

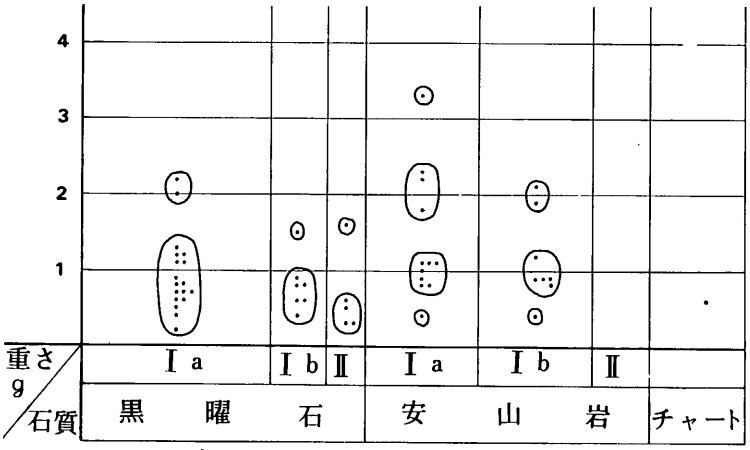
	石　質	Ia	Ib	II	小 計	計
製品	チャート	1(0)	0	0	1(0)	66(12)
	黒 曜 石	25(4)	8(0)	4(1)	37(5)	
	安 山 岩	15(3)	12(3)	1(1)	28(7)	
未製品	黒 曜 石	1(0)		2(0)	3(0)	4(0)
	安 山 岩		1(0)		1(0)	
計		42	21(3)	7(2)	70(12)	70(12)

(　)の中の数字は総数のうち先端の折れたものの数

Ⅱ類は僅かに10%で，通常言われる剥片鏃は3点(4.3%)にすぎない。Fig.116－4・Fig.261－37は「鈴桶型刃器技法」によって剥ぎ取られた剥片を利用したものに類似する。基部の部分でバルブをカットし抉りを入れている。石材も佐賀県腰岳産の透明度のある良質な黒曜石を利用している。しかし，「鈴桶型刃器技法」が盛行する時期との時間的な差・明確な「つまみ型石器」が出土していないことの2点を考慮して速断は避けておきたい。Fig.261－3は刃器状の剥片の先端を利用した剥片鏃で，調整はほとんど施されていない。通常の技法に拠らない広義の剥片鏃の特徴は，バルブカットを行なっている点である。そして，バルブはほぼ基部に相当し，表・裏面ともに原剥離面を残す(Fig.261-38・Fig.261-37)未製品(Fig.261－36・Fig.148－15)から推測すると，石核としてFig.202が考えられる。小型の原石を半裁することなく剥離作業を行なうため打面側に原石粗面が残ることがある。果して弥生時代前期にこうした「技法」が技法として成立するかどうか判断しがたい。大方の御教示を仰ぎたい。

次に打製石鏃の石質別・類別による重量の分布について述べる。(Fig.280)

これによれば，チャート製は別にして，黒曜石・安山岩質のものは各類ともに，2ないし4区分が可能である。石質別では，黒曜石製が0.2g～1.3gの間に大部分が収まるのに対し，



※完形品及びそれに近いもののみ

Fig. 280　打製石鏃の石質と重さ

安山岩製では，むしろ0.7g 以下のものは少なく1gと2gのそれぞれを中心とした値に集まっている。総数の点では0.6g～1.1gのものが多くを占めている。

完存した打製石鏃（わずかな欠損品も含む）が49点と少ない上に，時期的な分類もできていないため明確なことは言えないが，射殺する対象物の相違によって最低2類種のものが製作されたことが推測される。

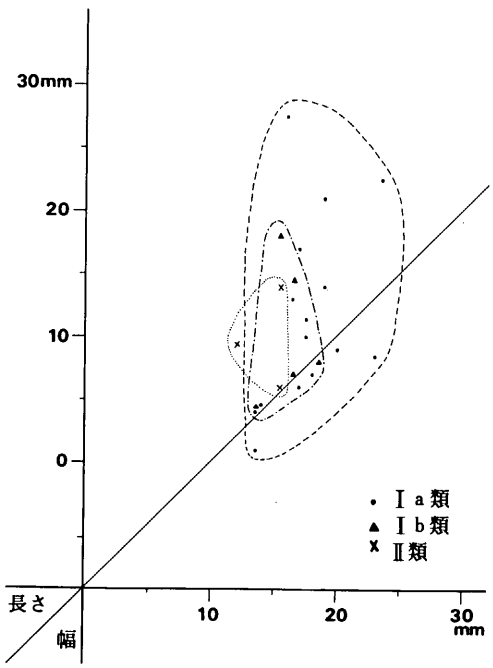


Fig. 281　打製石鏃の長さと幅

最後に打製石鏃の長さと幅による分布状況をみると（Fig.281），幅に比して，長さの方がやや長いことが一般的にいえる。種別では，Ⅱ類が幅12㎜～16㎜，長さ16㎜～24㎜と比較的小さくまとまるのに対し，Ⅰ類になるとバラつきが大きくなるということが見られる程度で，特に際立った特徴は指摘できない。

スクレイパー・使用された剝片　本遺跡では，スクレイパー（註5）・使用された剝片（Used Flake 以下使用剝片と略す）が112点出土してる。これらには擦痕・刃こぼれ・調整剝離が見られるが，これら総てが人為的なものかどうか判断に迷う場合が多い。また同じ剝離を刃こぼれと見るか調整によるものと見るか，更には，調整されたエッジを刃部とするかしないか等問題は多い。逆に殆んど人為的な痕跡を残さずとも，十分に石器としての使用に耐えうるものもあ

8 小　　結

る。これらの点においては，早急に統一した基準が設定されることが望まれるが，現時点では個々の判断を観察者の眼に頼らざるを得ない。本遺跡出土の石器については，10倍率のルーペを使用して，擦痕・刃こぼれ・調整剥離を観察し刃部がどこであるかを判断した。

またスクレイパーと使用剥片との間には，刃部調整の有無という差はあっても，その形態・刃部の位置など類似しているものがある。従って，分類にあたっては共通のものを用いた。刃部の位置と状態に注目しA・B・C・D・Eの5類に分けた。

A類：剥片の一辺を刃部としているものである。刃部が内彎しているもの・直線的なもの・外彎しているものがあるが特に分けなかった。

B類：離れた二辺が刃部となっている剥片ででる。『石刃状剥片』（以下「石刃」と略す）も或る意味ではこの類に入るが，その形態の差が明確であり，実際の使用においても異なっていたと考えられるので別にした。

C類：隣り合った二辺が刃部となっている剥片のうち，二辺のなす角度が比較的大きい類である。

D類：隣り合った二辺が刃部となっている点はC類と同様だが，二辺のなす角度が小さくV字状をなすものである。

E類：三辺以上にわたって刃部が形成されているものである。周辺全部が刃部となっているものもこの類に入れた。

Tab. 73　スクレイパー・使用された剥片一覧表

	石　質	A	B	C	D	E	小　計	計
スクレイパー	黒曜石	21 (18.75)	4 (3.57)	4 (3 .57)	3 (2.68)	3 (2.68)	35 (31.25)	79 (70.54)
	安山岩	21 (18.75)	2 (1.79)	10 (8.93)	4 (3.57)	7 (6.25)	44 (39.29)	
使用された剥片	黒曜石	14 (12.50)	5 (4.46)	6 (5.36)	3 (2.68)	3 (2.68)	31 (27.68)	33 (29.46)
	安山岩	0 (0)	0 (0.89)	1 (0.89)	1 (0)	0 (0)	2 (1.79)	
計		56 (50.00)	11 (9.82)	21 (18.75)	11 (9.82)	13 (11.61)	112 (100)	112 (100)

（小数点第3位以下4捨5入）

器種・石質で類別して一覧表を作成した。（Tab.73）これから石質に関係なく，スクレイパー・使用剥片ともにA類が全体のほぼ半数を占めることがわかる。A類のうちでも，刃部が内彎すもの，直線なものは黒曜石製のものが殆んどなのに対し，外彎するものは安山岩製に多く見られる。さらに刃部調整の点では，黒曜石製は小さなリタッチを入れるのに対し，安山岩

製のものは比較的大きなリタッチを両面から入れるものが多い点を揚げることができる。

黒曜石製の，スクレイパーと使用剥片の数の比率をみると，ほぼ同じであることがわかる。このことは，黒曜石のもつ性格（貝殻状に割れて，薄い剥片をとることが容易である等）から敢えて刃部調整を施さなくても，剥片のままで充分に使用に耐えることを意味する。これは黒曜石製スクレイパーのうち，刃部補強のために小さなリタッチを入れるにとどめた例が多い点からも首肯けることである。これに対し，安山岩製のものは，数の比率でスクレイパーが圧倒

Tab. 74　石器・不使用剥片の総数・総重量による比率一覧表

袋状竪穴						
	石器		不使用剥片		計	
	数	重さ	数	重さ	数	重さ
黒曜石	17 (4.8)	54.65 (5.2)	339 (95.2)	995.2 (94.8)	356 (100)	1049.85 (100)
安山岩	21 (11.8)	451.0 (25.2)	157 (88.2)	1342.4 (74.8)	178 (100)	1793.4 (100)
玄武岩	4 (14.3)	3497 (90.2)	24 (85.7)	378.5 (9.8)	28 (100)	3875.5 (100)
その他遺構・表採						
	石器		不使用剥片		計	
	数	重さ	数	重さ	数	重さ
黒曜石	107 (11.9)	345.85 (10.9)	794 (88.1)	2816.0 (89.1)	901 (100)	3161.85 (100)
安山岩	55 (15.4)	1023.6 (32.7)	303 (84.6)	2102.3 (67.3)	358 (100)	3125.9 (100)
玄武岩	12 (22.6)	2788.3 (79.8)	41 (77.4)	704.9 (20.2)	53 (100)	3493.2 (100)
総計						
	石器		不使用剥片		計	
	数	重さ	数	重さ	数	重さ
黒曜石	124 (9.9)	400.5 (9.5)	1133 (90.1)	3811.2 (90.5)	1257 (100)	4211.7 (100)
安山岩	76 (14.2)	1474.6 (30.0)	460 (85.8)	3444.7 (70.0)	536 (100)	4919.3 (100)
玄武岩	16 (18.0)	6285.3 (85.3)	65 (82.0)	1083.4 (14.7)	81 (100)	7368.7 (100)
計	216 (11.5)	8160.4 (49.5)	1658 (88.5)	8339.3 (50.5)	1847 (100)	16499.7 (100)

※重さ単位は　g　（　）内は%

8 小　　結

的に使用剝片を上回る。しかも刃部調整は比較的大きい。同じ刃部調整とはいえ，黒曜石製の小さな，補強のためのリタッチに比べ，安山岩製のそれは，刃部をつくり出す点に重点がおかれている。

以上，打製石鏃・スクレイパー・使用剝片について述べてきたが，本遺跡では，「石器」と認定できない黒曜石・安山岩質のフレイクやチップが多量に出土している（Tab.74）。それらの総重量からみれば，実際に「石器」として使用されたものは，ごくわずかでしかない。このことは，打製石器が，決して製品として他から移入されたものではなく，原石入手の後，当地において製作されたという事実を如実に物語っている。

磨製石器　本遺跡では，磨製石器が100点あまり出土している。そのうち，実測可能だったもの99点を一覧表にまとめた（Tab.75）。これらの石器について，下條信行氏の論文（註6）に依拠しながら時期分類を試みた。

＜石包丁＞下條氏は，夜臼・板付Ⅰ期から前期末に存在する『規格的石包丁』の特徴として『一般に大型で，背刃間の幅が広く，大振りの弧刃をなす。しかも厚みは薄く，直線的な断面型をなす。』とされている。これに相当する石包丁としては，5・6・51号袋状竪穴，7号住居跡，出土のもの，それに表採の台帳番号173・233・291・200があげられる。また第20号土坑の未製品もこの類に入れられるだろう。前期末～中期初頭以後の石包丁は，『大振りのものは消滅し，やや小型になるが，身を厚く作り，断面も直線的でなく，中膨らみの形態へと変化』することを特徴とされている。これには，第27・36・45号袋状竪穴，第10号住居跡出土のもの，そ

Tab. 75　磨製石器一覧表

	2 YP	3 YP	5 YP	6 YP	13 YP	16 YP	20 YP	26 YP	27 YP	28 YP	30 YP	31 YP	34 YP	36 YP	42 YP	45 YP	48 YP	51 YP	小計	1 YJ	2 YJ	3 YJ	6 YJ	7 YJ	8 YJ	10 YJ	1 D	9 YD	12 D	17 D	20 D	30 D	旧地表	下層P.1	ピット	表採	合計
石のみ											1					1			2		2					1										4	9
扁平片刃石斧			1		1	1				1			1						5																1	6
柱状片刃石斧													1						1																1	2
太型蛤刃石斧		1		1								1	1						4	1						2					1				8	16
その他の石斧																																			4	4
石包丁			2						1					1					4					4		1									5	14
石包丁未製品			1	1												1		1	4												1				2	7
磨石	1							1					1		1				4						1								1		4	10
磨石・叩石			1				1		2										4															1	1	6
石錘																													1							1
砥石								1	1				1				1		4			1		1			1		1			1			6	15
砥石（溝あり）				1			1												2																1	3
石剣													1						1				1											1		3
石鏃																												2				1				3
合計	1	1	5	3	1	1	2	2	4	1	1	1	6	1	1	2	1	1	35	1	2	1	1	5	1	5	1	2	1	1	2	1	1	1	2	37	99

れに表採の 台帳番号195・217・287 が相当しょう。
＜太型蛤刃石斧＞弥生前期初頭より末までに存在する太型蛤刃石斧は，『横断面形は楕円形にならず，薄手の長楕円形をなし，……平面は刃部に広く，頭部に狭い。』ことが特徴なのに対し，前期末より中期のそれは，『断面厚手の楕円形になり蛤刃をなし』，対照的である。本遺跡では，前者として，第1号住居跡出土のもの，表採の台帳番号211・254・178・182・168が，後者に属するものとしては，第3・6・31・34号袋状竪穴，第10号住居跡，第20号土坑出土のもの及び，表採の 台帳番号179・229・232・183・181・228・234 がそうである。下條氏は，さらに後者を「今山産のもの」と「在地タイプ」の二者に分類しているが，このことは本遺跡でも言えそうである（例えば，第3・34号 袋状 竪穴のそれは「今山産のもの」台帳番号229 は「在地タイプ」）。
＜柱状片刃石斧＞柱状片刃石斧は，本遺跡では2点出土するのみである。台帳番号175 は，断面形がまだ隅丸方形で蒲鉾型まで至っていない。しかし，背・腹ともに弓状になり始めている。前期末に始まる特徴的な柱状片刃石斧に先行しよう。また，この石斧にはまったく抉りを入れた様子がみられないものも特徴のひとつである。第34号袋状竪穴出土のそれは，他にあまり例を見ない。背・腹ともに丁寧に磨いており，腹側は平坦である。刃部も鋭く研ぎ出している。かなり大型になることが推定されるが，両側面が欠損しているため，その全貌は明らかでない。
＜扁平片刃石斧＞扁平片刃石斧について下條氏は，時期による形態の変化は見出されないことを述べ，『横断面は扁平の長方形または台形をなす。（中略）各面や稜線は明瞭にとぎ出され鋭利である。』とされている。本遺跡出土の6例中5例までは，そのとおりだが，1例（第34号袋状竪穴出土品）のみは若干形態が異なる。横断面はむしろ隅丸長方形で両側面がややふくらむ。また背側の刃部削り出しによってできた稜線も直線的でなく丸味をもっている。前期でも末期に出現する形態のものであろう。
＜石のみ＞本遺跡では9例の出土があるが，その形態によって3類に分類することが可能である。Ⅰ類は 第30・45号袋状竪穴，第10号住居跡出土のもの，及び表採の 台帳番号193・288 がこの類に入る。断面は正方形に近い長方形をなし，背・腹ともに直線的に伸びる。基部も背・腹と直角につくられる例が多い。刃部が残っているのは 台帳番号193 のみだが，これは扁平片石斧の可能性があり，何とも言いがたい。Ⅱ類は第2号住居跡出土のもの，及び表採の台帳番号192がそうである。腹側は直線的だが，背側は弓状に彎曲する。刃部は 台帳番号17 でみられるように小さく片側をけずり出す。台帳番号25 はやや大型である。Ⅲ類は台帳番号23である。断面は長方形に近いが，各辺がややふくらみ，基部は丸味をもつ。左側面に自然面を残し，あるいは製作途中で折れた可能性が考えられる。とすればⅠ類に似るものと思われる。
各類の時期について述べると，Ⅰ類は共伴する石器からみると，前期末～中期初頭以後に位置させることができる。Ⅱ類は，石器の質的強化という観点から見ればⅠ類より後出とみられる。だが，他の石器は質的強化が前期末～中期初頭でおこなわれており，時期的なずれが考え

られる。Ⅲ類の位置づけは不明である。

<石剣>第34号袋状竪穴，第1号ピット，第6号住居跡よりそれぞれ1点ずつ出土している。いずれも全体の器形は不明である。第6号住居跡出土のものは未成品で，石戈の可能性が考えられる。

<石鏃>第9号土坑墓より2点，第30号土坑より1点出土している。第9号土坑墓出土のものは，前期でも古手で，断面扁平菱形の身に茎が付く。『前期の墳墓に関連して出土する事が多い。』という下條氏の指摘のとおりである。第30号土坑出土のものは，扁平な無茎のもので，基部には抉りが入る。形は三角形というよりむしろ五角に近く，表側には，鎬が中央を走り，身中央より基部端に分かれている。前期末～中期初頭以後に属する。

以上見てきたように，本遺跡では大陸系磨製石器が総て揃っている。太型蛤刃石斧は総て製品であり未製品は一点もない。今山産玄武岩製のものは，製品として本遺跡に移入されたものである。一方，石包丁は，製品とともに未製品の出土がある。このことは，原石もしくは半製品が立岩地域より移入され，当地で製作されたものであったことを充分推測させる。（平島勇夫）

c．甕棺墓について

本遺跡より前期甕棺墓17基が検出された。しかし，方墳や前方後円墳造営等によってかなりの数が全く痕跡を残さずに削除されたものと思われ，特に前方後円墳主体部の横穴式石室墓坑の部分は甕棺墓地の中心部西半を占めており，当初の数は30基前後であったと推定できる。

年代　各遺構の切合いによる前後関係は以下の如くである。

ＹＤ４・ＹＤ７ ⟶ Ｋ７
ＹＤ３ ⟶ Ｋ２
ＹＰ５２ ⟶ Ｋ１４
ＹＰ５２ ⟶ Ｋ１５

甕棺墓相互の切合い関係はみられない。これによって判かることは，ＹＤ３・ＹＤ４は孰れも甕棺墓（Ｋ２・Ｋ７）に先行する可能性を有し，更に副葬小壺からみてみると，ＹＤ３・ＹＤ４の副葬小壺は，K15・K16の副葬小壺とタイプが極めて類似していることが注目される。これと，Ｋ１の副葬小壺とを比較すると，明らかに前後関係を認めることができる。以上の関係は以下に記す如くである。

Ⅰ期　ＹＤ４・ＹＤ７＝K15＝K16＝ＹＤ３　K14
↓　↓
Ⅱ期　Ｋ７　Ｋ１　Ｋ２

Ⅰ期は従来板付Ⅱa式と呼ばれてきた時期であり，Ⅱ期は板付Ⅱb式に該当する時期と考えるが，Ⅰ・Ⅱ期ともに各々袋状竪穴の時期の分類に大旨符合する。これら本甕棺墓の下限となるⅡ期の時期は，各甕棺が金海式甕棺と明らかに一線を画し得る類であり，それ以前のものと位置付けられる。Ⅱ期のK-1の副葬小壺は春日市伯玄社遺跡94号甕棺墓副葬小壺（註7）に酷似しており，その甕棺は，上下共口縁打欠きの壺の大型化した甕2個の覆口式で，下甕肩部には沈線を巡らす類であるとのことである。従来伯玄式と仮称されていたタイプであるらしい。正式報告書が刊行されるまでは断定は控えなければならないが，この種のものは，大野城市中・寺尾遺跡第2次調査甕棺群（註8）と同期のものではないかと考える。中・寺尾甕棺については，同書において橋口氏がその副葬小壺より「前期後葉～末」に位置付けられており，金海式甕棺より古い要素をもつ一群として「甕棺の一型式として設定し得る」とされる。橋口氏の設定される「一型式」のこの第2次調査の分を『中・寺尾式甕棺』と称したい。この中には，伯玄社前期甕棺の殆んどを占める部分，中・寺尾前期甕棺の第1次調査分（註9）の新しい部分，筑紫野市塔原甕棺群（註10），剣塚Ⅱ期甕棺群などが群として調査されたものとして含まれよう。

そして更に，既に同氏が当剣塚甕棺に対してより古いものとの見通しを立てておられる如く，中・寺尾式の前段階として，剣塚Ⅰ期の類がある。口縁外面直下を肥厚させ段をつくり，肩部には主に段をつくり中には沈線を施す。全体としては中・寺尾式と非常に区分できない所であるが，特に異なる点は，頸部が上方へより締まり，口縁上面が強く屈折して開かず未だ外傾する程度に留まることである。未だ完全に中・寺尾式と区別できる類ではないが，将来，板付Ⅱa期の甕棺例が増加することを期待して，この剣塚Ⅰ期の甕棺を一応仮りに―剣塚式―と呼んでおきたい。

甕棺墓の発生　さて，ここで北九州弥生時代の特徴的墓制のひとつである甕棺墓の発生の問題がある。甕・壺等への土器内収葬の習は各時代にわたって点々とみられる類であり，弥生期直前の縄文晩期においてもかなり知られてきた。しかし，ここで問題となるのは，弥生中期を頂点とする大量生産された甕棺用の甕として製作されたものを使用した墓制の初現がどの時期から認められるのかということである。一般に甕棺用大型甕による葬制の一応の確立期は前期末の金海式期に求めることができようか。そして，その金海式甕棺の源流が既述してきた如く中・寺尾式，仮称剣塚式期まで求められ得ることは疑いを入れる所ではなかろう。

ここで，本遺跡出土壺の法量計測を図示してみた（Fig. 282）。黒点は生活遺構における出土品で，×は甕棺墓に使用されたもの，△は副葬小壺を示す。これによって観察された事は以下の如くである。

1．小・中・大類に分類され，大類は更に特大のものが分離される可能性がある。

2．口径と胴最大幅の相関においては，小類→中類へと胴部の方が大きくなる傾向がみられるのに対し，中類→大類へは口径と胴最大幅とが同じ長さに近付く傾向へと変化する。

8 小　　結

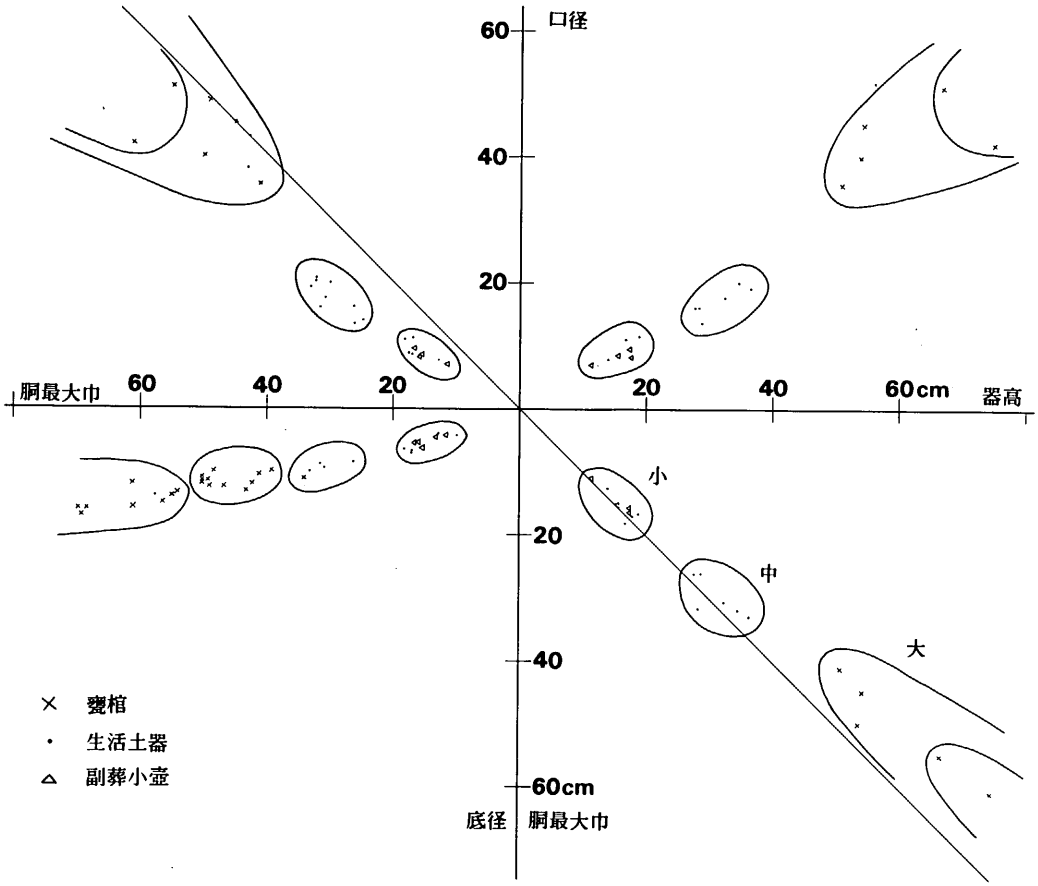


Fig. 282　剣塚出土前期壺の法量

3．胴最大幅と器高の相関においては，小類・中類ともにほぼ同じ長さであるのに対し，大類～特大類では，器高の方が高くなる傾向を示す。

4．確かに大型の類に生活遺構（袋状竪穴を含む）からの出土品がみられるが，明らかに床面に密着していたとか，貯蔵等に使用されていたという痕跡は全く認められず，更に，その総てが半分以下の破片であるということから，壺の大型化して甕棺墓に使用されていた土器は当初より「甕棺」として製作された可能性が強いのではないかと思われる。

2と3の傾向はそれこそ，遺体を収めるに都合良くした結果であると考えられよう。4の生活遺構からの大型品の出土は，筑紫郡那珂川町門田遺跡（註11）袋状竪穴からもみられる。22号例では明らかに壺棺墓を竪穴廃棄後に営なんだものである。18号例は出土状況では墓制と断定できないが，あたかも上下棺と副葬小壺の如き呈を示しており，22号例の如き類なのであろう。3号袋状竪穴からも大型品が出土し，剣塚旧表下ピット中出土品と酷似するが，竪穴放棄後の一括廃棄のうちの破片である。

次に，同じ甕棺墓に使用された器種として上棺の大型の浅い甕形土器に関するものとして，木遺跡出土甕完形品の総ての法量を図示した。(Fig.283) これによって，小・中・大類の他に，明らかに甕棺使用甕（×印）の1群がみられる。即ち，器高においては中～大類の生活土器の範囲であり乍ら，口径に於いて明確に極大となり区別できるものである。これは口径と器高との相関において全く明らかである。壺分類の際の判断と同様に，この種の上甕も，甕棺用として作製された可能性が強く，中期に確立する傘蓋形土器の祖源的な位置づけも可能となろうか。

穿孔と打ち欠き　更に，下甕胴部の穿孔と，口縁打ち欠きの問題がある。穿孔の習は，生活の器を仮器に転ずることによる思想の表われとされる。(註12)　確かに既報告例では前期の中・寺尾式甕棺までにおいてはその殆んどが穿孔される例が多く，金海式の前期終末期までその傾向は著しい。しかし細かくみると，中期初頭に比定されるものの大型甕棺に穿孔がみられる例がかなりある。佐賀県唐津市萬麓遺跡（註13），佐賀県神埼町四本黒木遺跡（註14），福岡市西区片江カルメル会修道院内遺跡（註15），佐賀市金立町開拓遺跡（註16），朝倉郡夜須町城

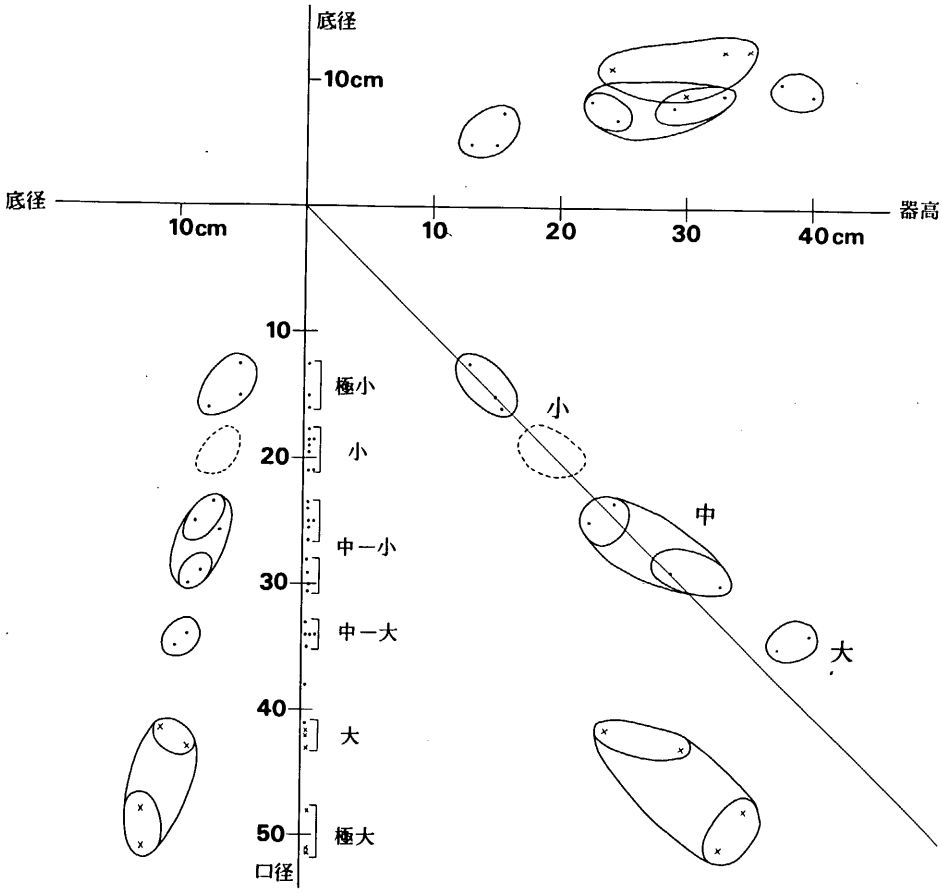


Fig. 283　剣塚出土前期甕の法量

8. 小　　結

山遺跡（註17），小郡市津古内畑遺跡（註18），粕屋郡古賀町中ノ坪遺跡（註19）などに散見する。また逆に中期の生活小型土器を転用したにも関らず甕棺に穿孔を行なわない例もみられる。また，筑紫野市塔原遺跡（註20）においては，中・寺尾式の大型甕棺であり乍ら，明らかに穿孔を行なわない類もある。以上の事から，穿孔の習慣というものは，基本的には生活土器を一部打ち欠いて仮器とするという思想に基いている事は首肯されるが，それが仮称剣塚式期前後においては大型の土器は既に甕棺用として作られていた節がある事実を考慮する時，埋葬の際の「穿孔」作業の慣習化・形式化が強く残っていたのではないかと推定される。

口縁打ち欠きに関してみてみると，覆口という縄文晩期からの習性の継続とみられるのであり，その為の打ち欠きが殆んどであり，金海式以降になると圧倒的に打ち欠かないものが多い事実がある。だからといって，口縁を打ち欠いているものは甕棺用に作られたものではないことを意味するのであろうか。大型の生活土器を打ち欠いて覆口式にしようとしたことは前時代からの習性を強く踏襲していただけであり，壺の大型化の中で初期の甕棺用土器の作製に当たっての規格化が未熟な段階であることを考慮するならば，必ずしも生活土器の転用と決めつける必要はないと考える。

結論としては，本遺跡甕棺墓使用土器のうち，大型化したものは，既に甕棺用「甕」として製作されたものであり，大型「壺」の転用と考えなくともよいのではないかということである。

甕の分類　駄文を長々と綴ったが，最後に本遺跡出土の弥生前期～中期初頭における甕形土器の主に口縁部近辺の形態により分類，出土総数を当たったものを資料として掲載しておきたい。（Tab.76）諸学の研究に供することができれば幸いである。

I－a：所謂如意形口縁の端部全面に刻目を施し口縁下に凸帯等をつくらない類で，板付I式の特徴の強いものである。

I－b：口唇下端のみに刻目を施し，以下に凸帯等をつくらない大きな意味での如意形口縁の類。

Tab. 76　弥生前期～中期初頭甕形土器分類表（数字は個体数）

分類 ＼ 出土遺構	I			II				III			VI	計
	a	b	c	a	a′	b	b′	a	b	c		
袋状竪穴	1	25	3	28	1	2	1	4	3	3	8	79
住居跡	1	3	1	3	0	0	0	1	0	0	0	9
甕棺	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0	0	5
表採・他	1	2	0	1	0	1	0	1	1	0	1	8
計	3	30	4	36	1	3	1	6	5	3	9	101
	33		4	37		4		11		3	9	101
	37			41				14			9	101
	78							14			9	101

Ⅰ－c：如意形口縁で口縁下に全く凸帯等をつくらず，口縁端に刻目も施さない類。

Ⅱ－a：如意形口縁下に三角凸帯をつくり，口唇下端と凸帯上に刻目を施す類。

Ⅱ－a′：如意形口縁でかなり張る胴部につくり，口唇下端と2条の三角凸帯上に刻目を施す類。

Ⅱ－b：如意形口縁の外面下を肥厚させ段をつくり，口唇下端のみに刻目を施す類。

Ⅱ－b′：Ⅱ－b類のうちで刻目をみない類。

Ⅲ－a：口縁外面を肥厚突出させる所謂亀ノ甲タイプの口縁外端に刻目を施し，以下に凸帯を作らないもの。

Ⅲ－b：亀ノ甲タイプの口縁外端部と，直下に作る三角凸帯上とに刻目を施す類。

Ⅲ－c：Ⅲ－a類に刻目を施さず，時期的に下降する類。

Ⅳ　：如意形口縁下端に刻目を施し，頸部に1条の沈線を巡らす類。

総数が101個体であるので，各々の個数がその％値をほぼ示すことになる。全体として如意形をなす類が圧倒的に多く，筑後川以南の系統であると思われるⅢ類の数は全体として14％弱にすぎない。

最後に，本遺跡報告書作製に当たっては，あくまでも資料の提供ということに主眼を置き，限られた時間の中で最大限の実測図掲載に努めた。その方面へ時間をかけ過ぎた為に，却って遺構・遺物の説明の中で充分意をつくされなかった部分の多かったことも事実であり，深く反省する次第である。

（中間 研志）

註1）宮崎貴夫「a，袋状竪穴について」「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第3集」福岡県教育委員会　1977

2）中間「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅻ」福岡県教育委員会　1977

3）松岡史・前川威洋・副島邦弘「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第1集」福岡県教育委員会　1970

4）考古学で使用される「サヌカイト」は岩石学上のそれと比較し，広義に用いられている。ここでは厳密性を期すため「サヌカイト」なる名称は使用せず，総て「安山岩」とした。

5）スクレイパーはその形態の相違によって各種の名称を与えられている。と同時に雑器的な性格をも持ちわせていることは既に指摘されている通りである。ここでは，刃部調整を施したものを一括して「スクレイパー」としておく。そして刃部調整は施さずとも刃こぼれ等使用痕が観察されるものを「使用された剥片」とした。

6）下條信行『九州における大陸系磨製石器の生成と展開』史淵　第114輯　1977

7）柳田康雄氏の御教示による。

8）橋口達也「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告書　第1集　大野城市教育委員会　1977

9）浜田信也・酒井仁夫「中・寺尾遺跡」大野町の文化財　第3集　大野町教育委員会　1971

10）酒井仁夫・中間「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅳ」福岡県教育委員会　1974

11）前掲書　(1)

12）桐原健『仮器の系譜』古代文化　25—12　1973　によれば，埋葬容器として用いられる穿孔土器を「日常什器を仮器に転ずる為の穿孔という至極もっともな考察」としてとらえ，弥生甕棺に関しては「什器転用の甕棺には穿孔があり，その土器が当初より甕棺として作成されたものならば完全な形で発見されてよい」と論じている。

13）木下巧「萬篦・寺ノ下遺跡」佐賀県文化財調査報告　第29集　佐賀県教育委員会　1974

14）新郷土刊行会「四本黒木遺跡発掘調査報告書」1977

15）山崎純男「京ノ隈遺跡」段谷地所開発株式会社　1976

16）木下之治・木下巧「金立開拓遺跡」佐賀市教育委員会　1974

17）橘昌信「城山遺跡群発掘調査報告書」夜須町教育委員会　1973

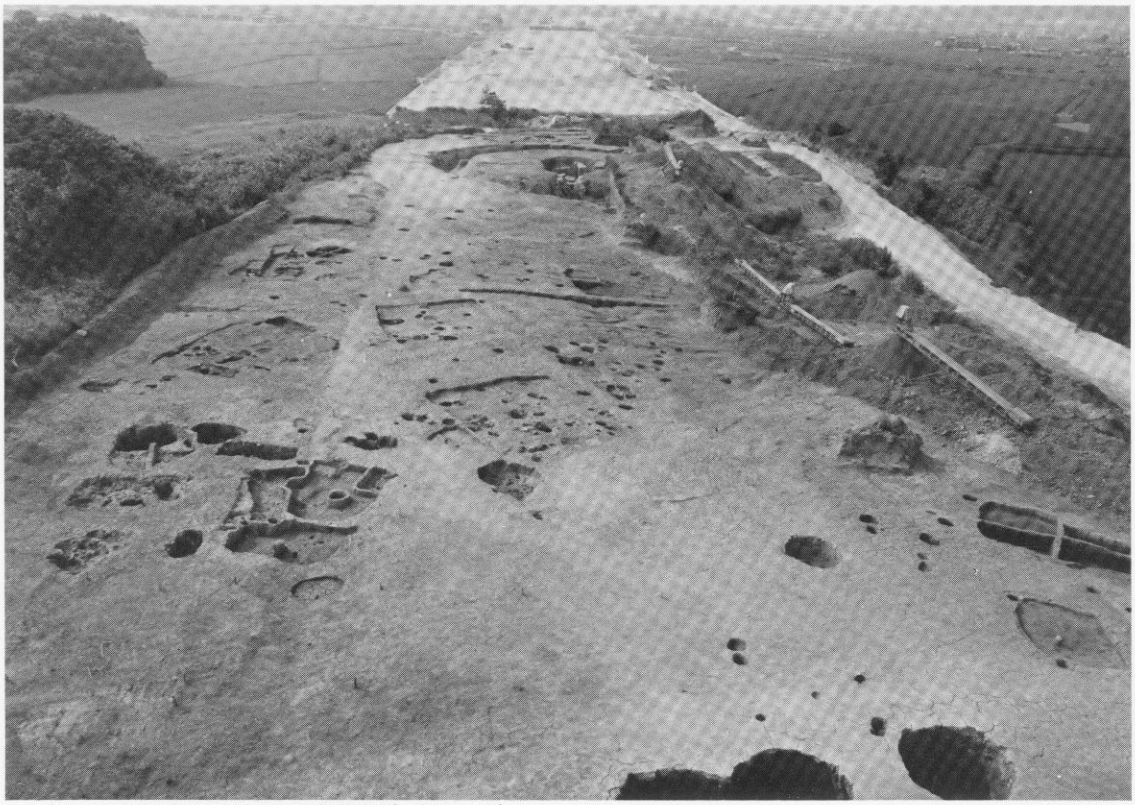
18）柳田康雄「津古内畑遺跡」小郡町教育委員会　1970

19）中間「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XXI」福岡県教育委員会　1978

20）前掲書　(7)

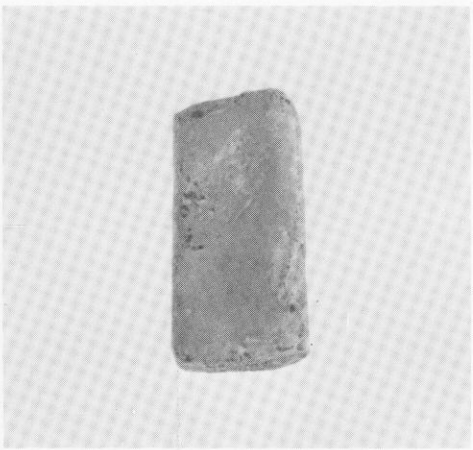
PLATES

（1）南半弥生時代遺構全景（北から）

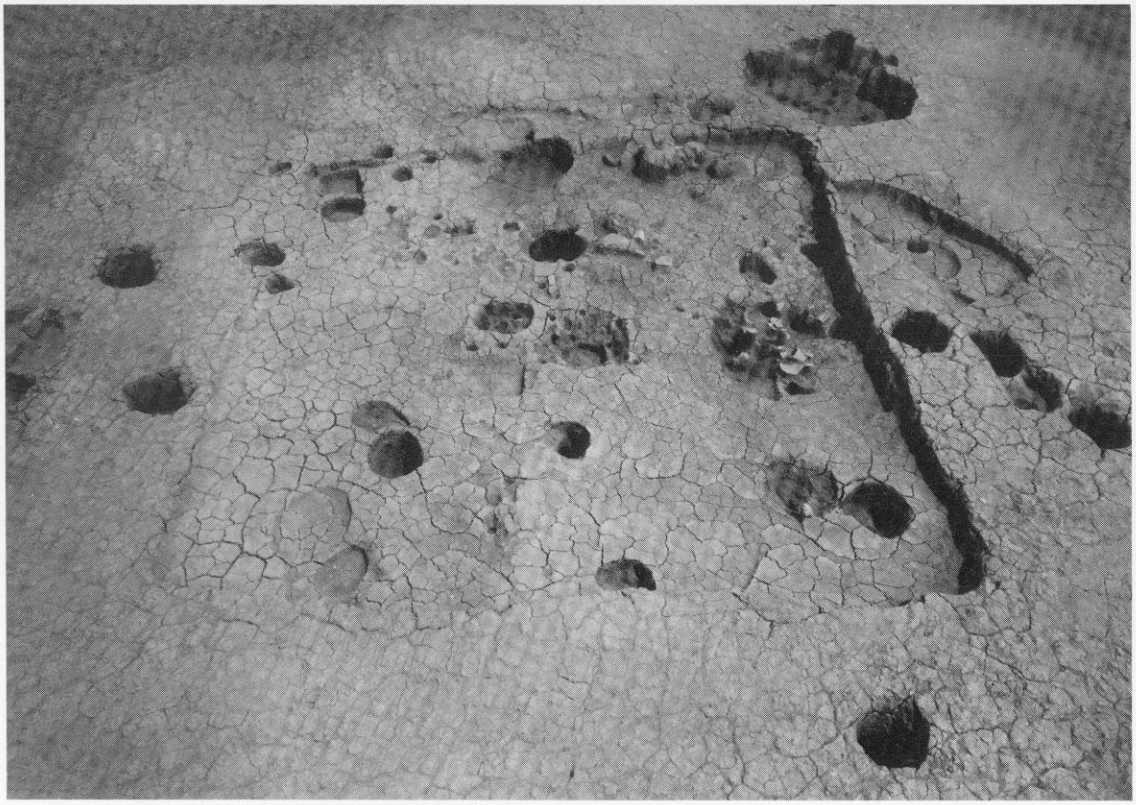


（2）北半弥生時代遺構全景（南から）

（1）第1号住居跡全景（北から）

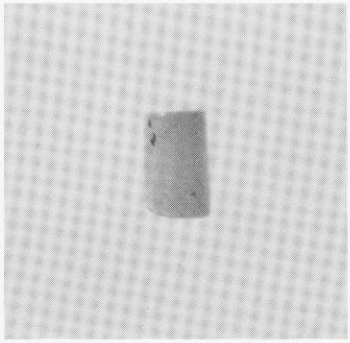


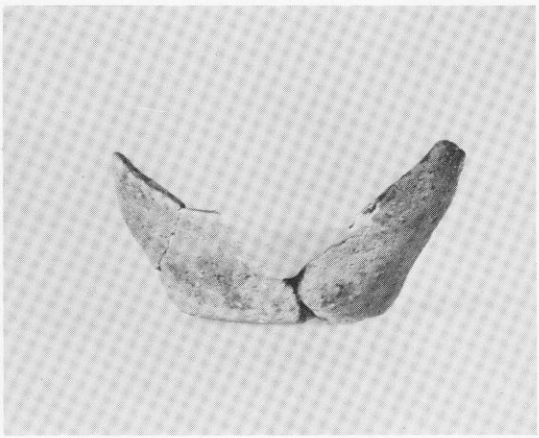
（2）第1号住居跡出土土器・石器類



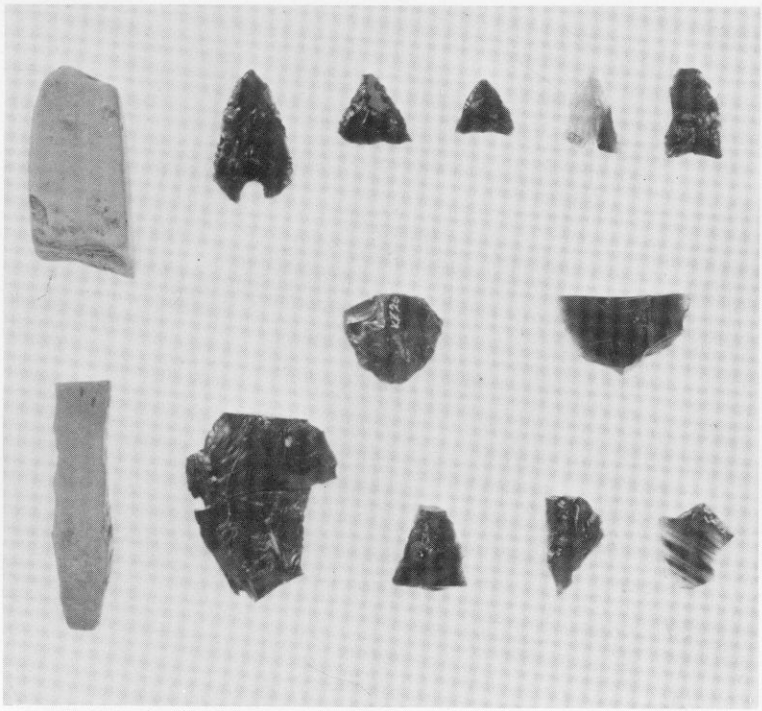
（1）第2号住居跡全景（北西から）

碧玉製管玉

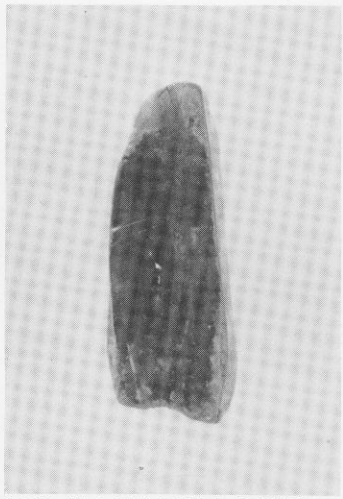




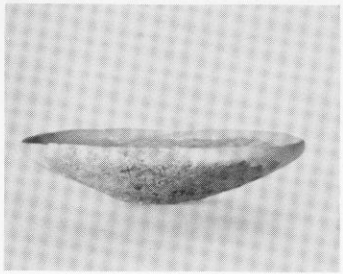
（2）第2号住居跡出土土器・玉



（1）第2号住居跡出土石器



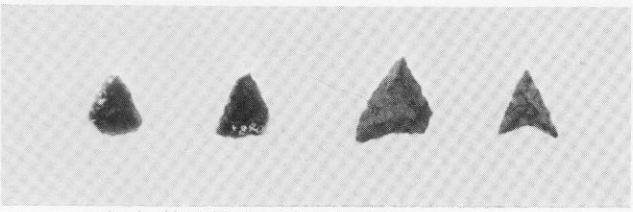
（2）第3号住居跡出土砥石



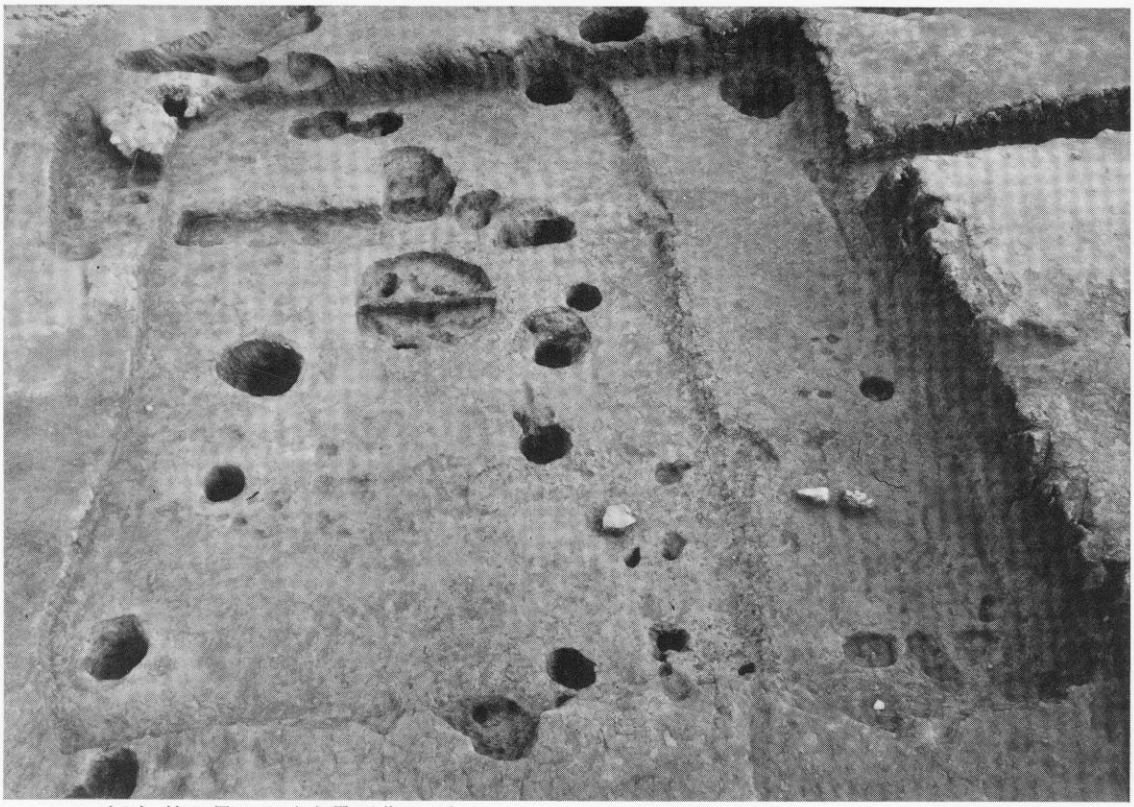
（3）第4号住居跡出土土器

（4）第4号住居跡全景（東から）

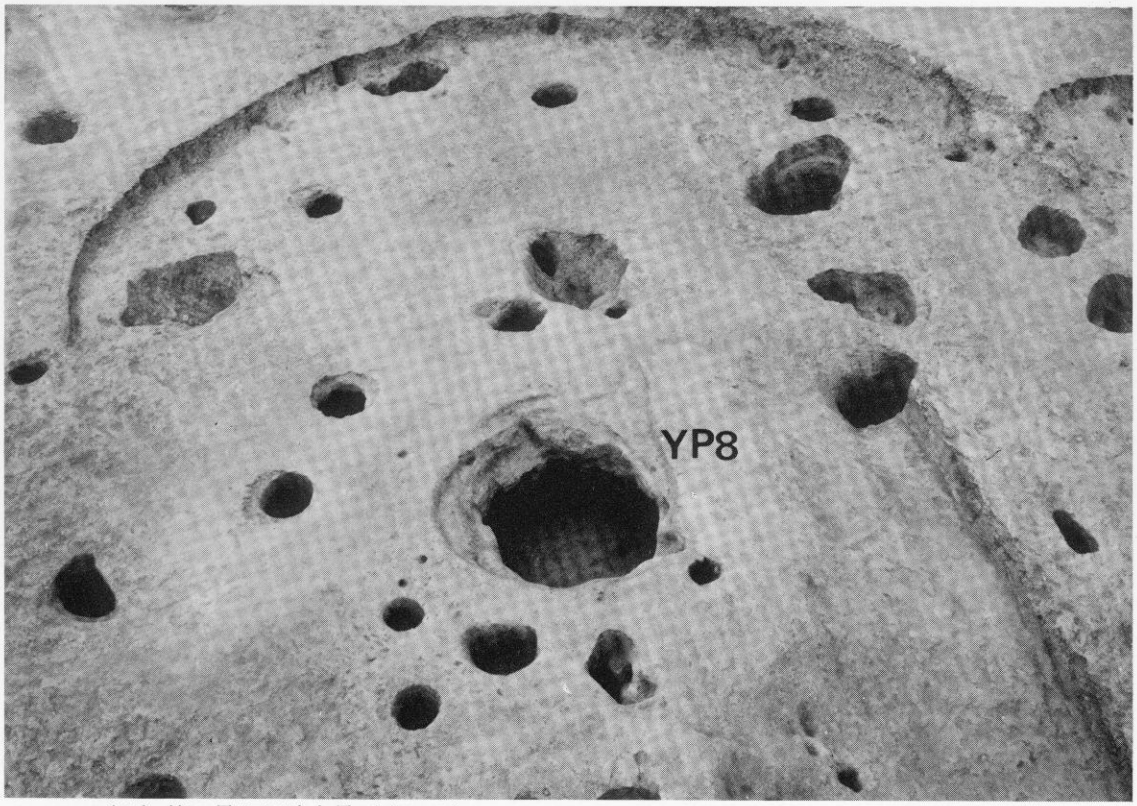
(1) 第5号住居跡出土石器



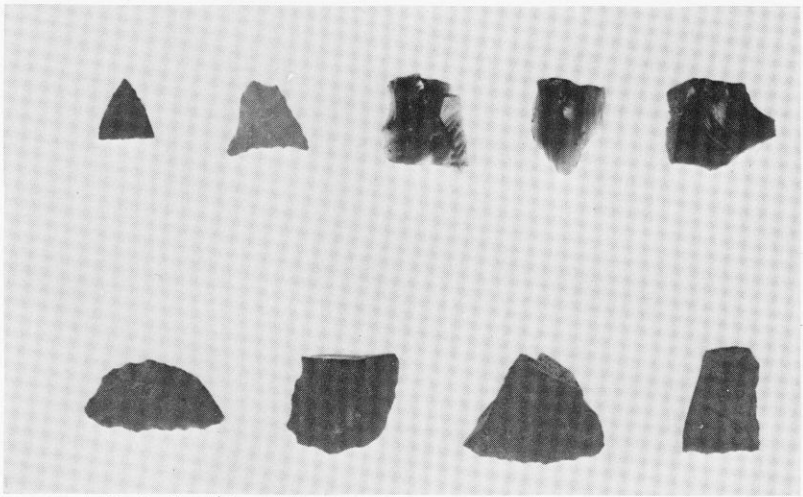
（2）第6号住居跡出土石器　　鉄　鏃

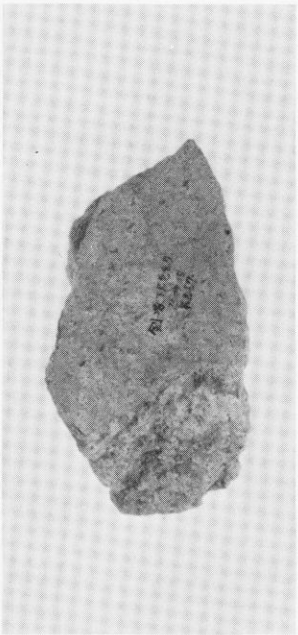


（3）第6号住居跡全景（北から）

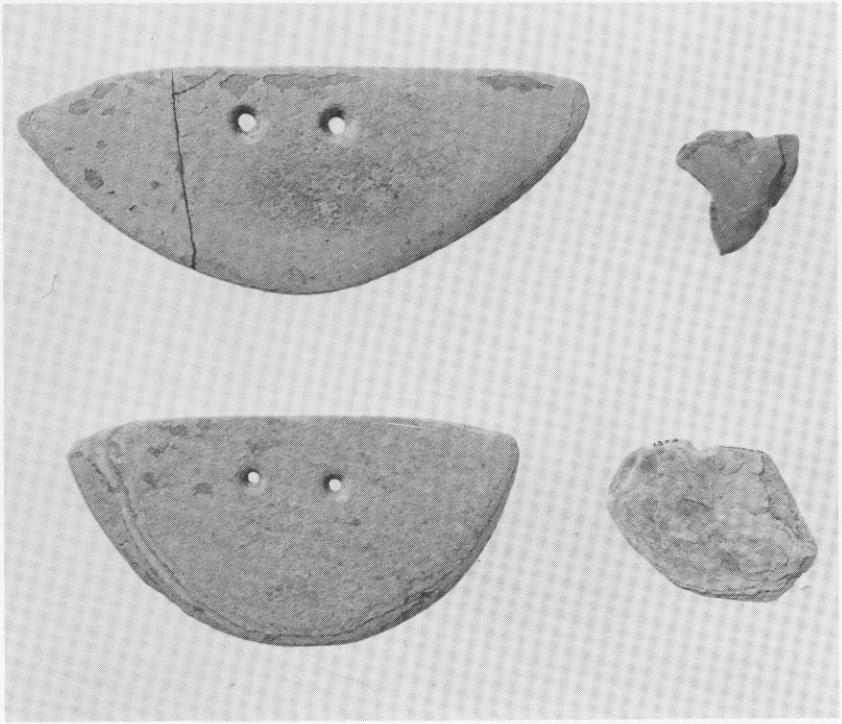


（1）第７号住居跡全景（東から）



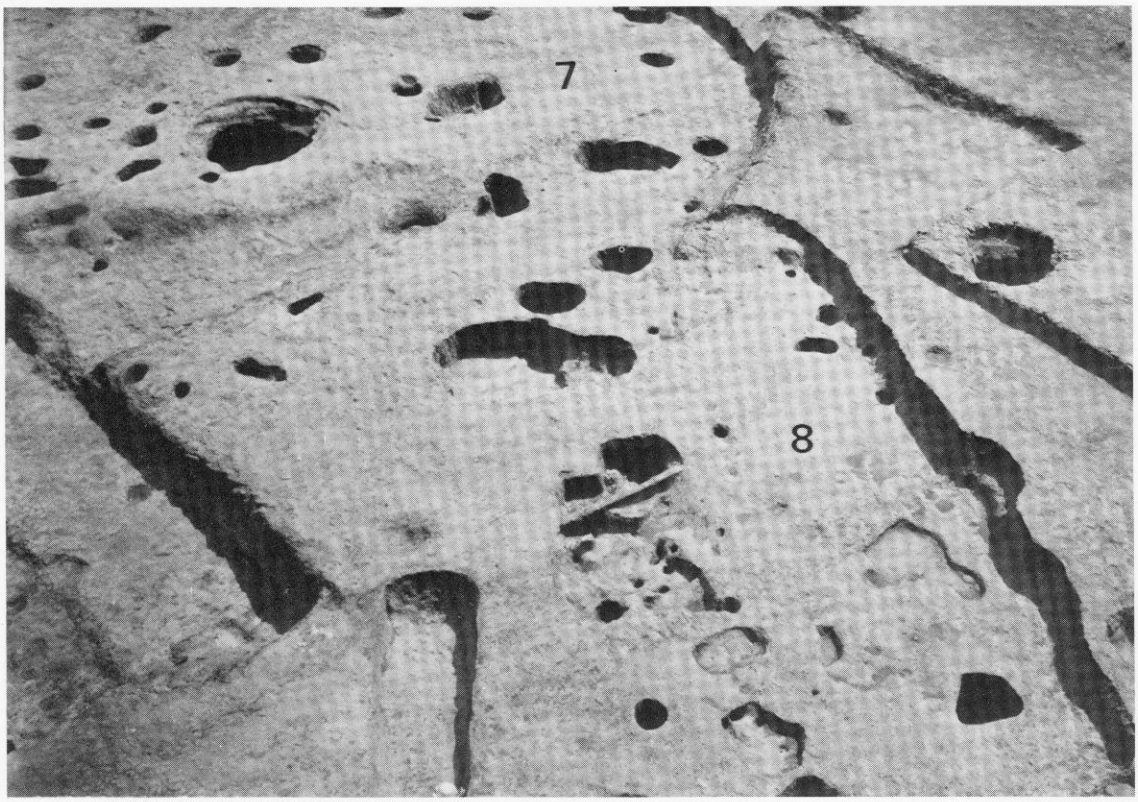


（2）第７号住居跡出土土器・石器



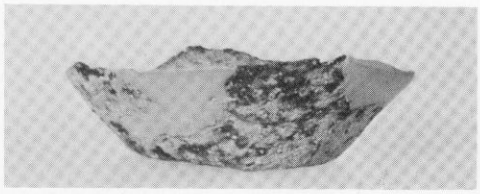
（1）第7号住居跡出土石包丁

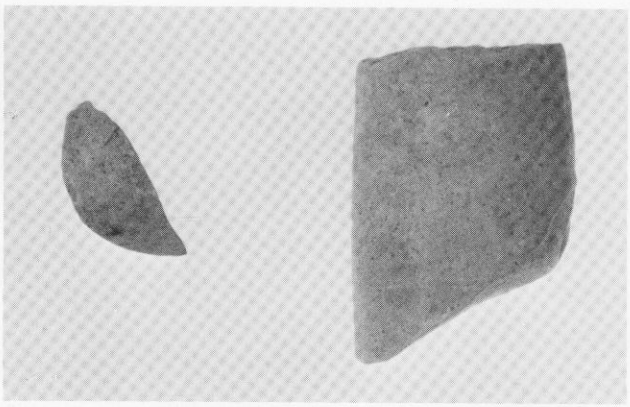
（2）第8号住居跡
出土磨石

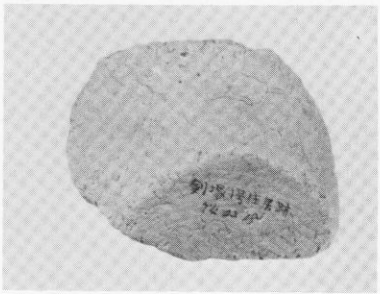


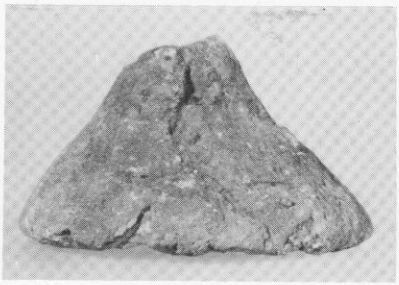
（3）第8号住居跡全景（北から）

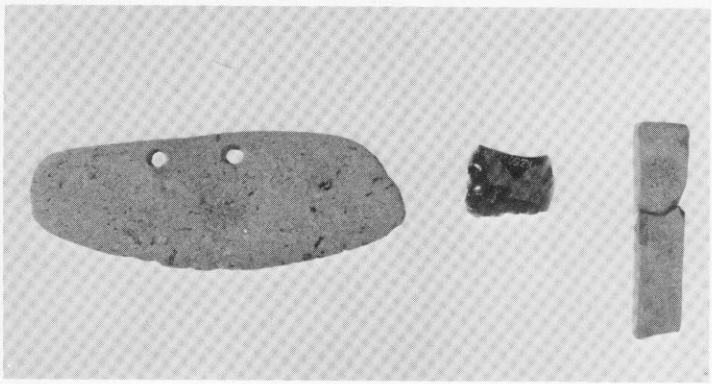
（1）第10号住居跡全景（西から）



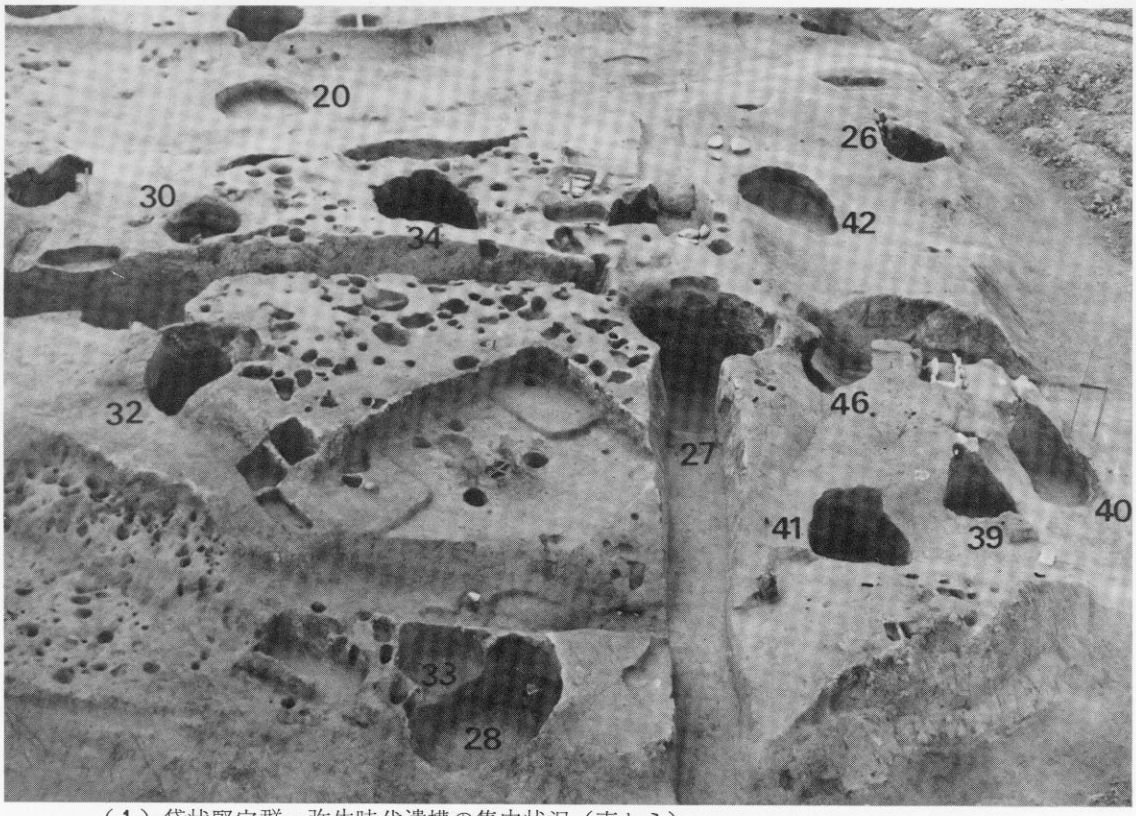




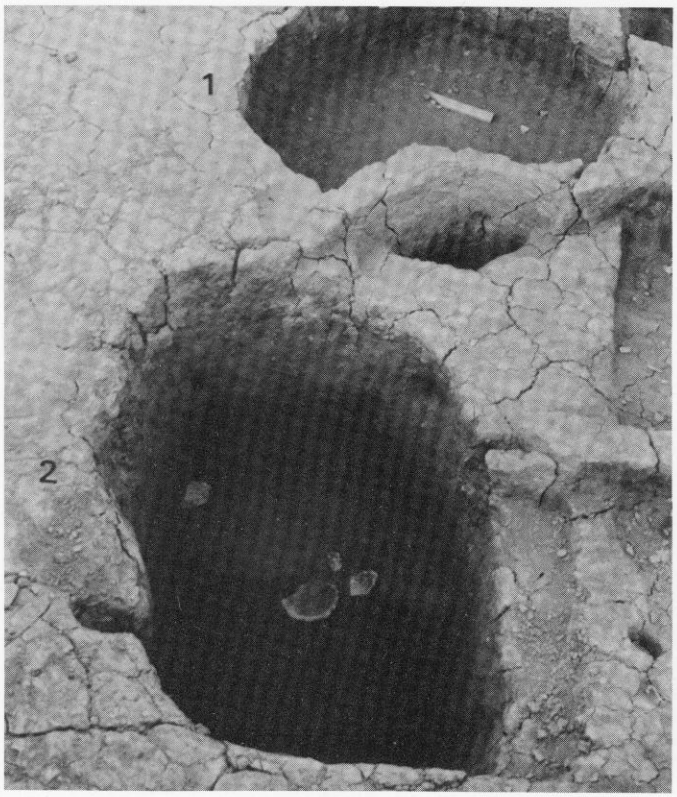




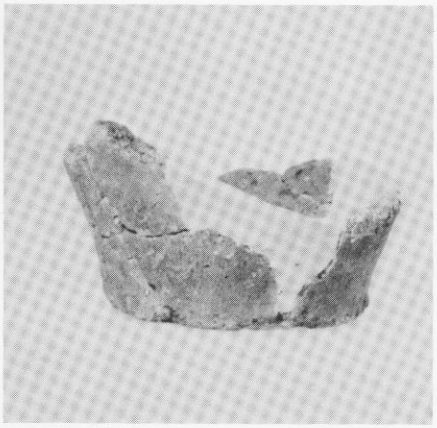
（2）第10号住居跡出土土器・石器

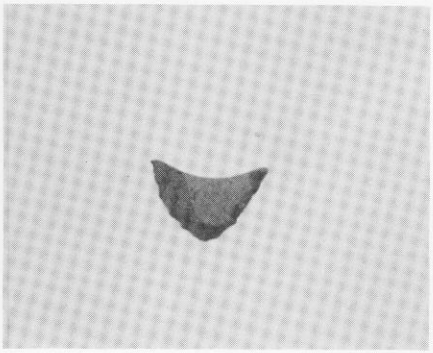


（1）袋状竪穴群・弥生時代遺構の集中状況（東から）

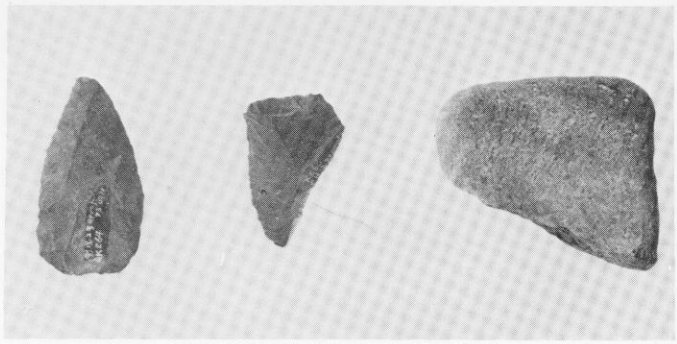


（2）第1・2号袋状竪穴（西から）



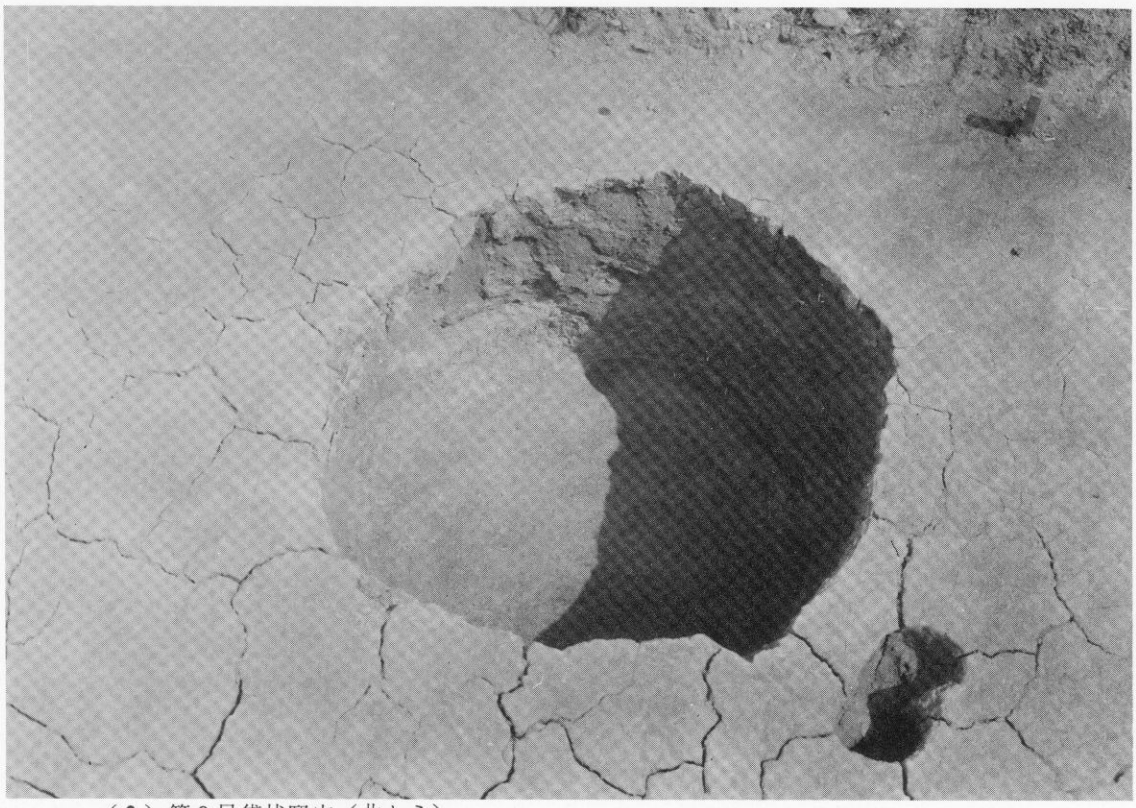


(3) 第1号袋状竪穴出土土器・石器

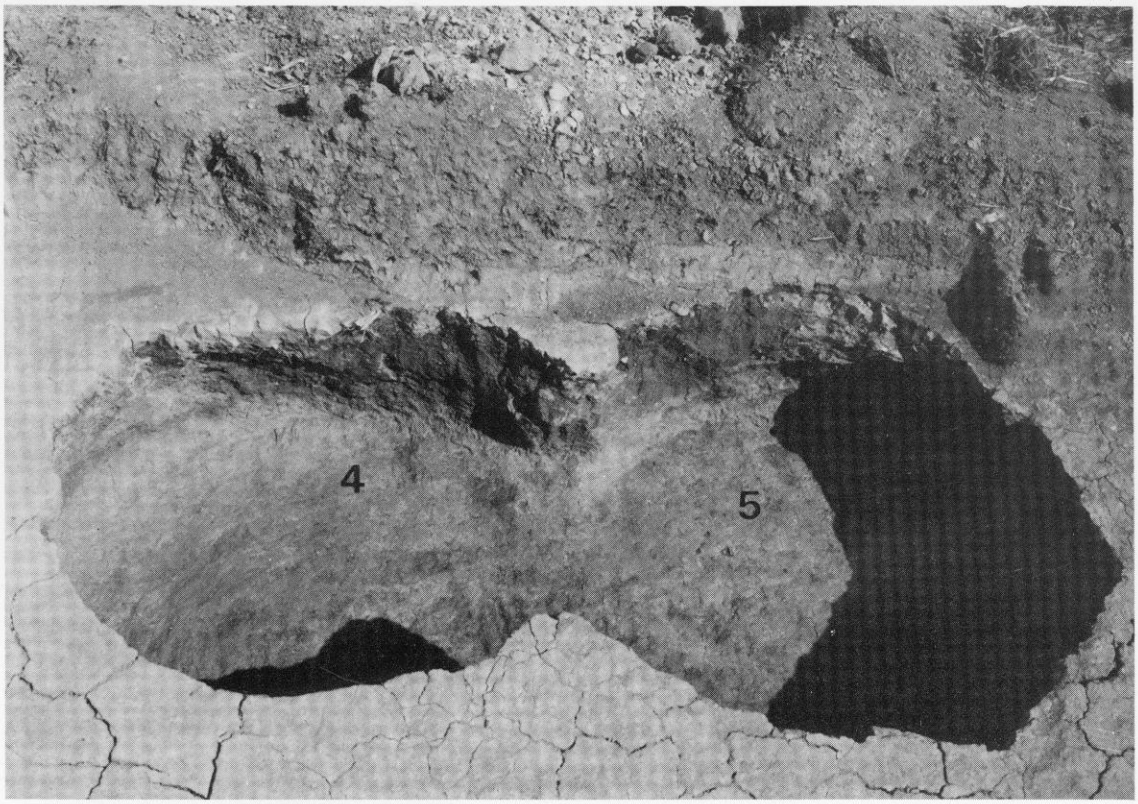


（1）第2号袋状竪穴出土土器・石器

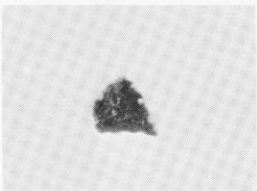
(2) 第3号袋状竪穴出土石斧

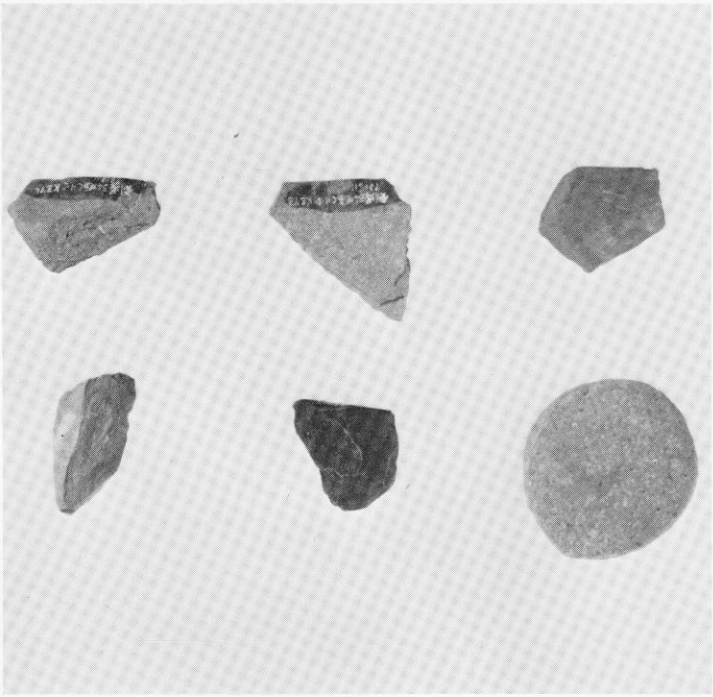


（3）第3号袋状竪穴（北から）

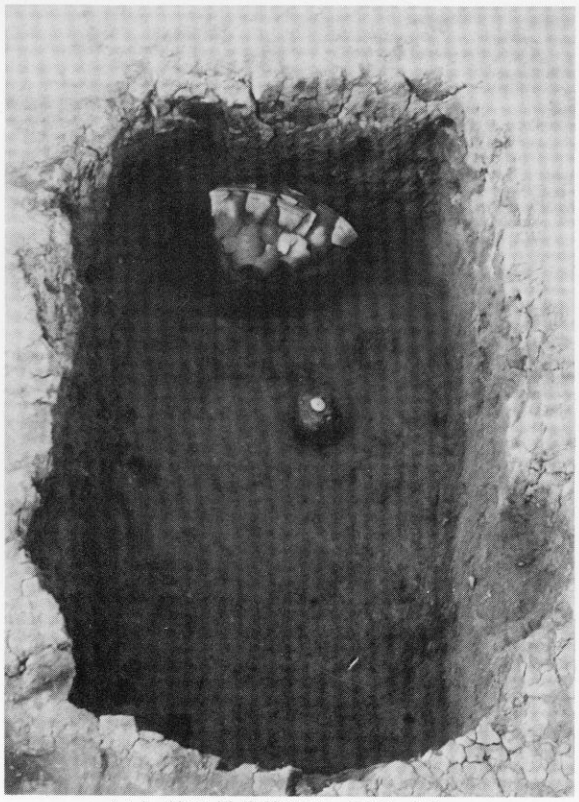


（1）第4・5号袋状竪穴（北から）

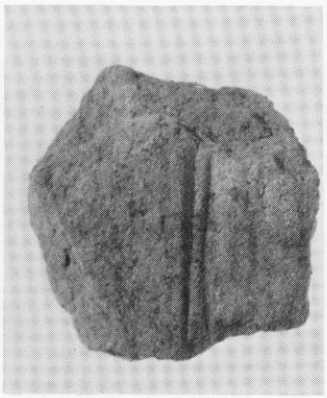




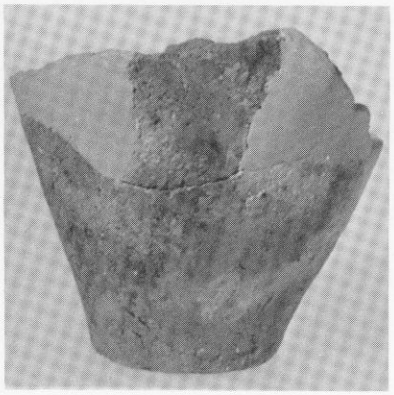
（2）第5号袋状竪穴出土土器・石器



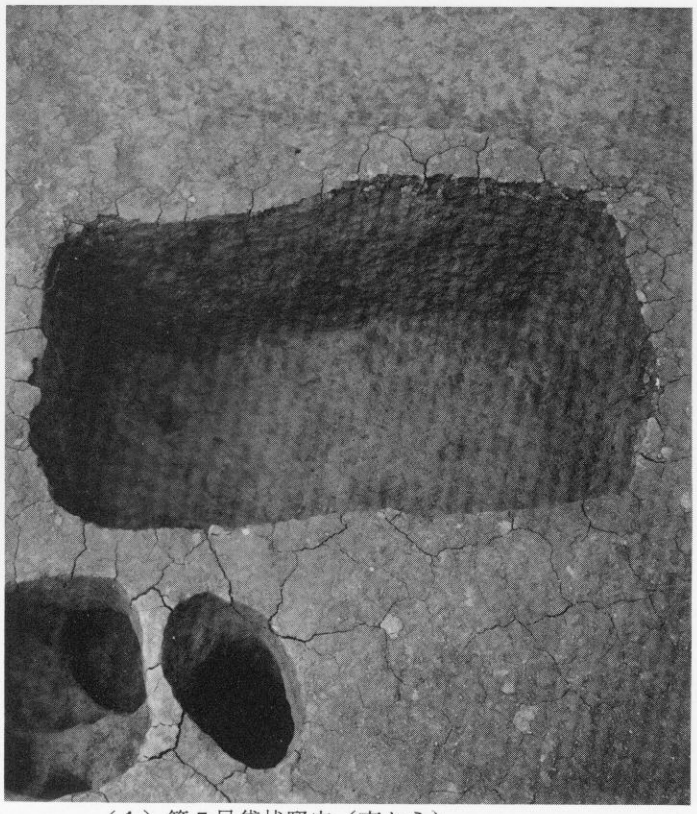
（1）第6号袋状竪穴（南から）



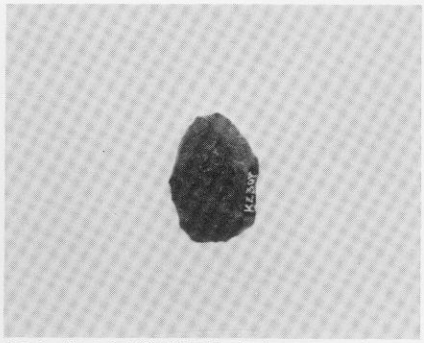
攻玉用（？）砥石



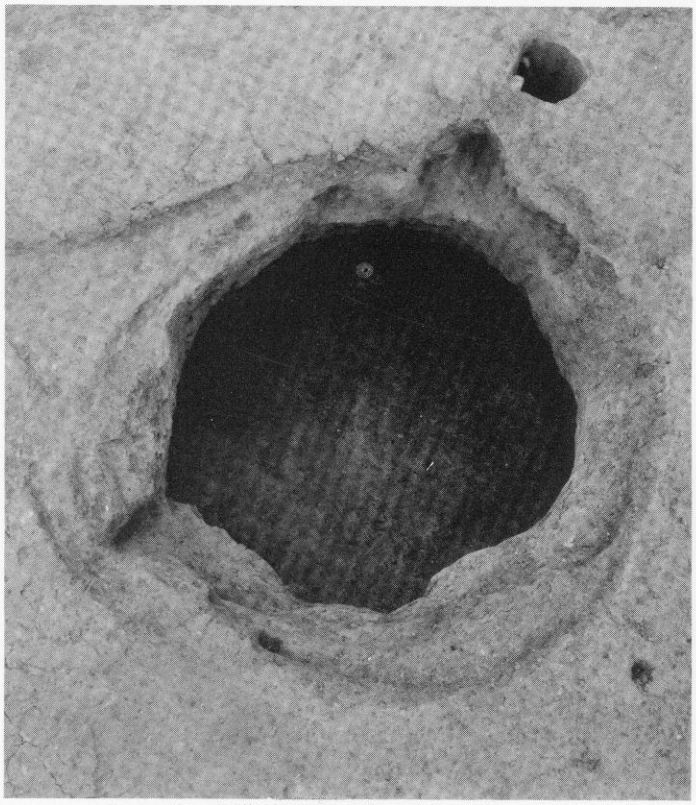
（2）第6号袋状竪穴出土土器・石器・紡錘車



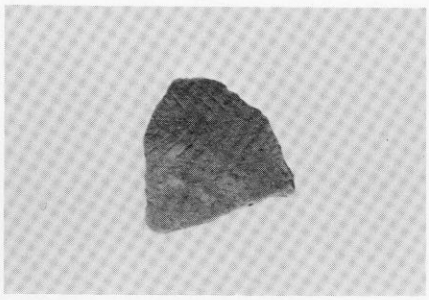
（1）第7号袋状竪穴（南から）



（2）第7号袋状竪穴出土スクレイパー

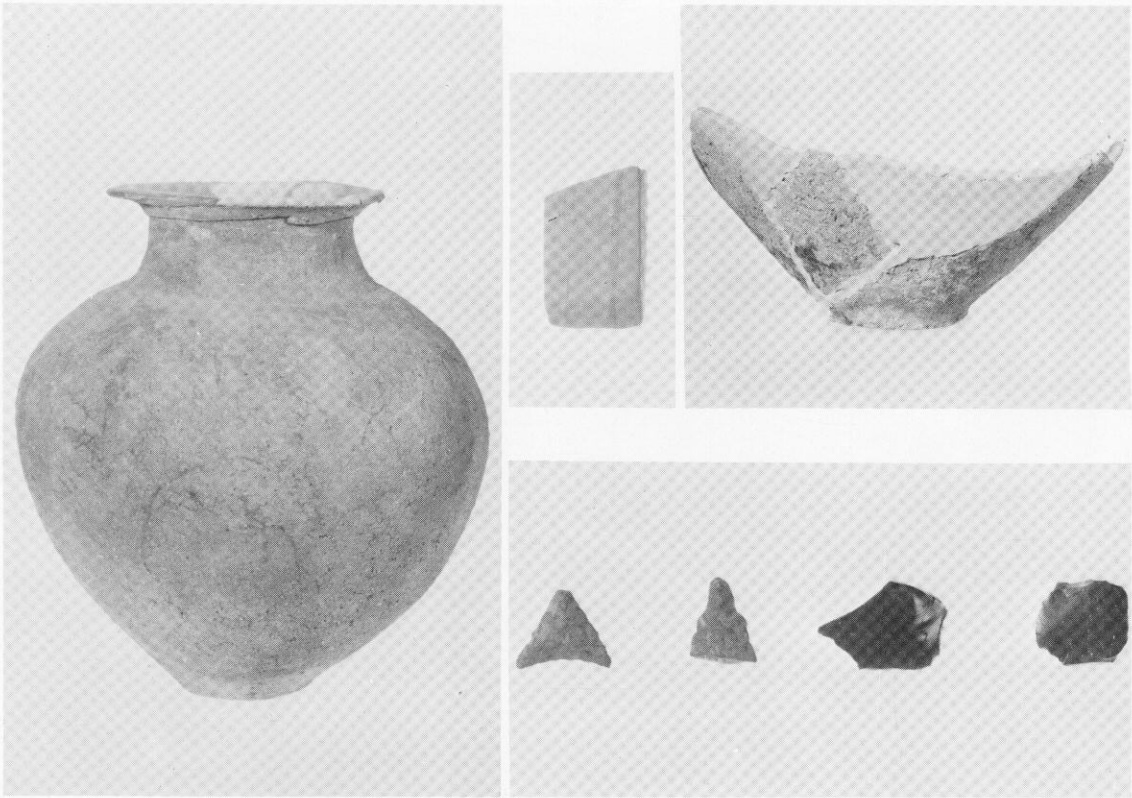


（3）第8号袋状竪穴（南から）

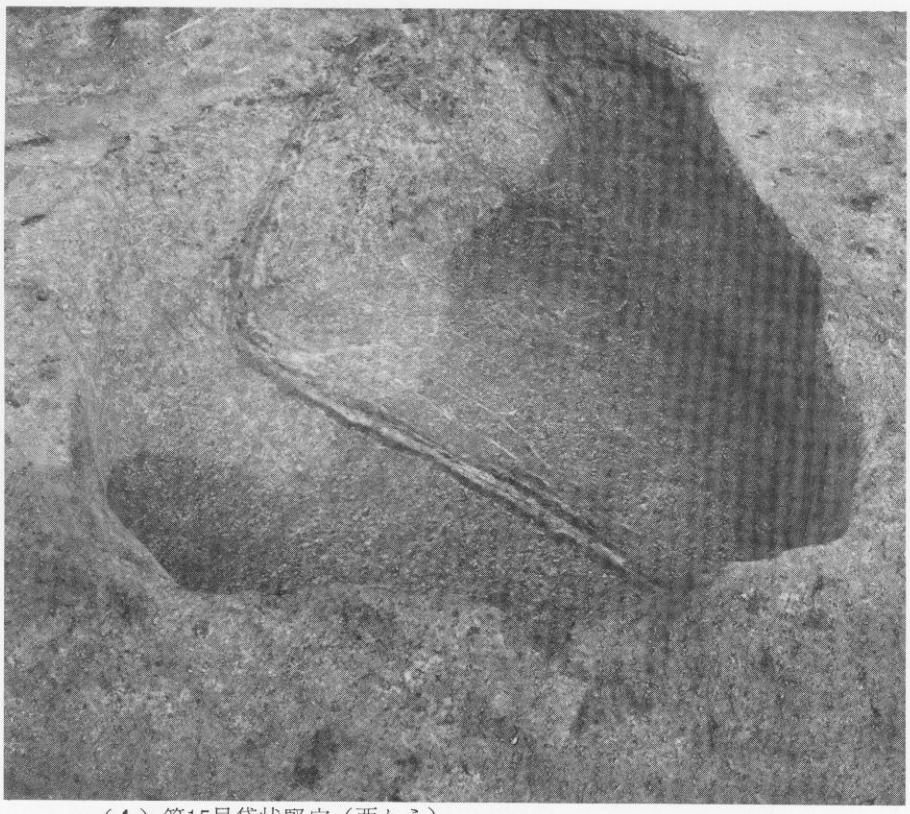


（4）第8号袋状竪穴出土土器・石器

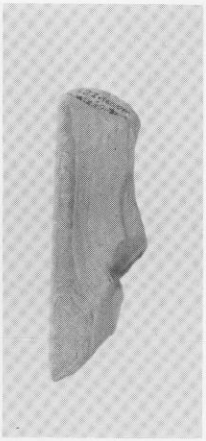
（1）第13号袋状竪穴（南から）

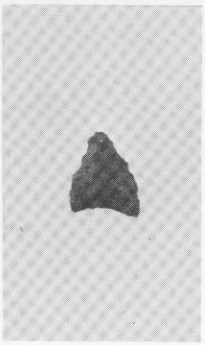


（2）第13号袋状竪穴出土土器・石器

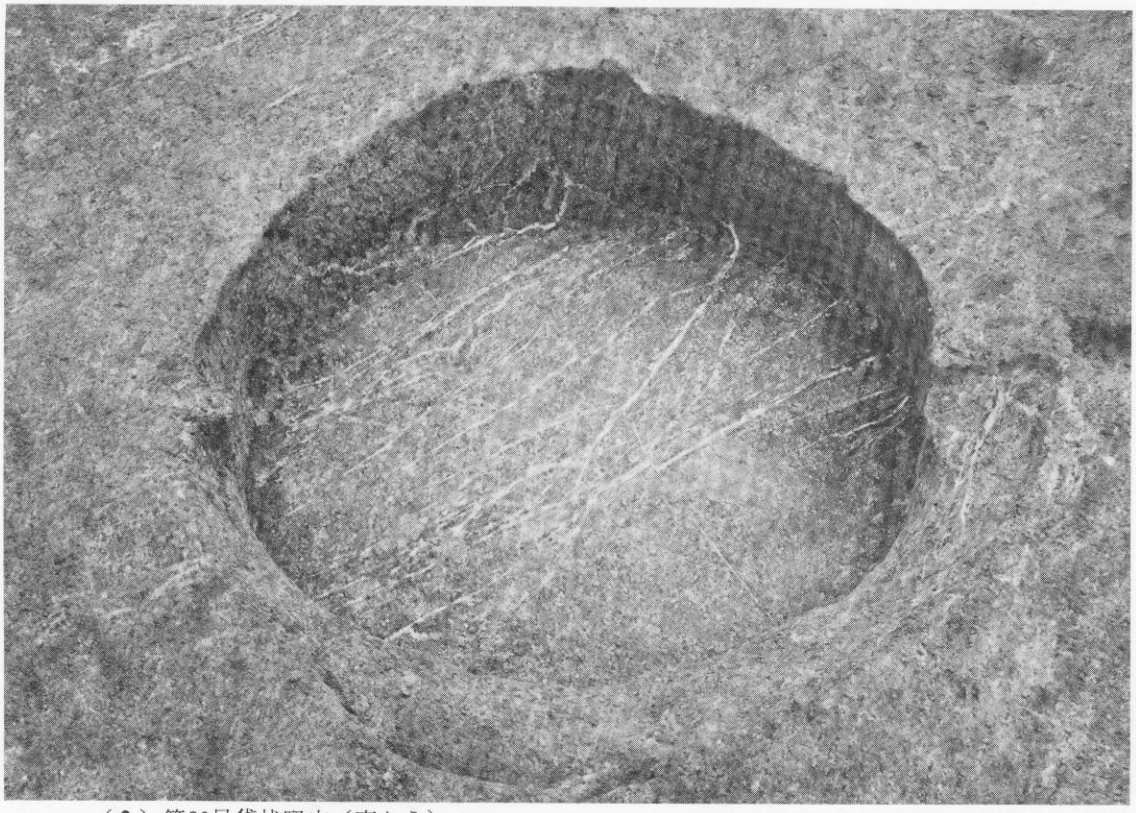


（1）第15号袋状竪穴（西から）

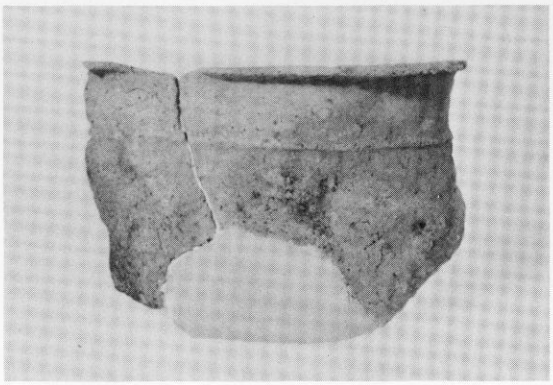


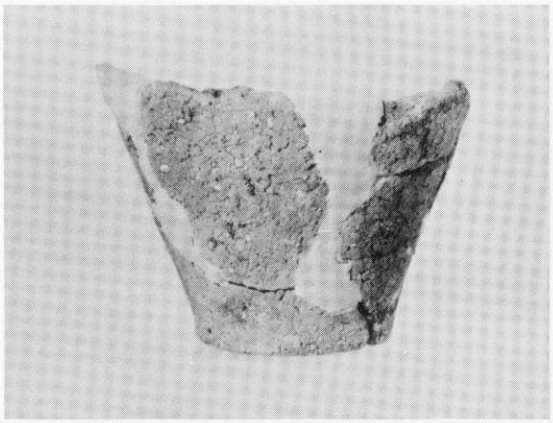


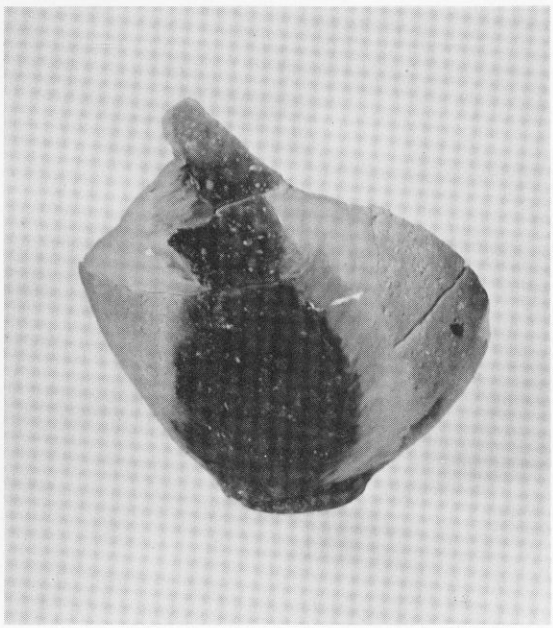
(2) 第16号袋状竪穴出土石器

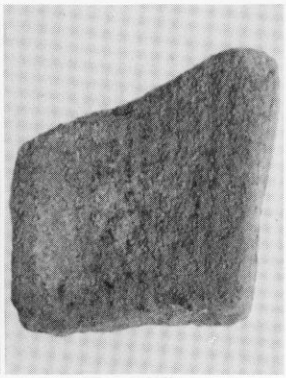


（3）第20号袋状竪穴（東から）

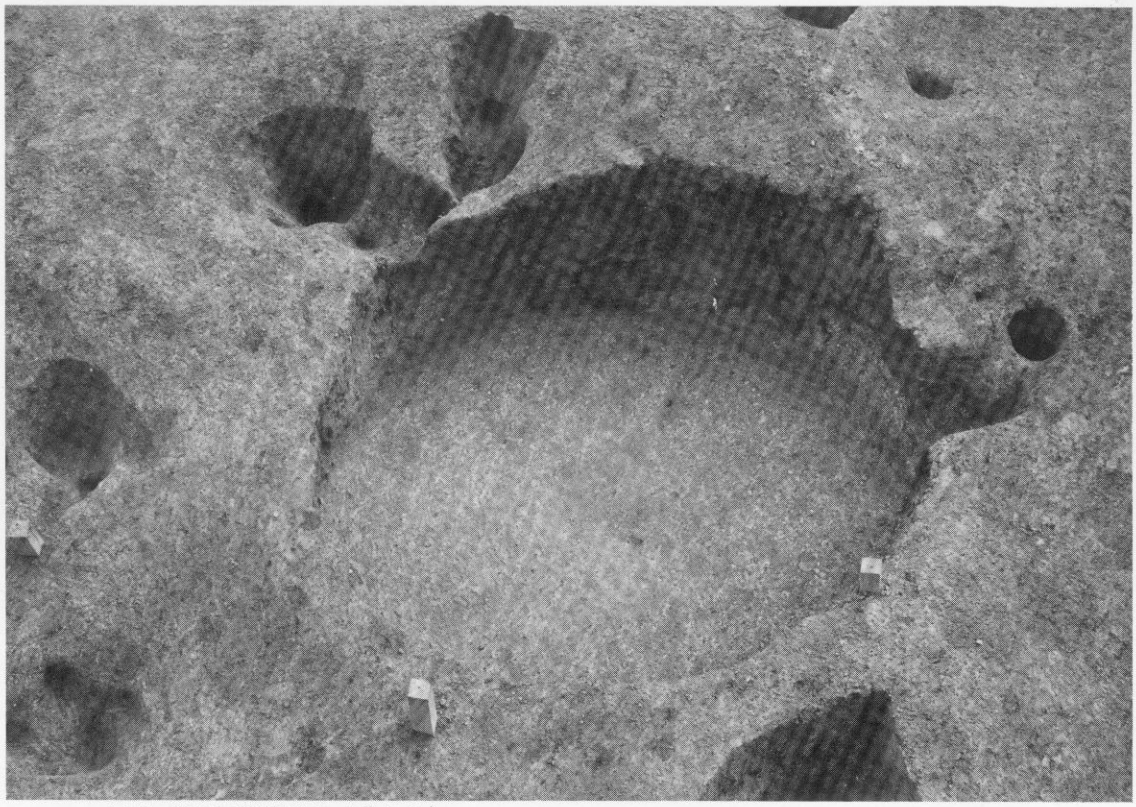




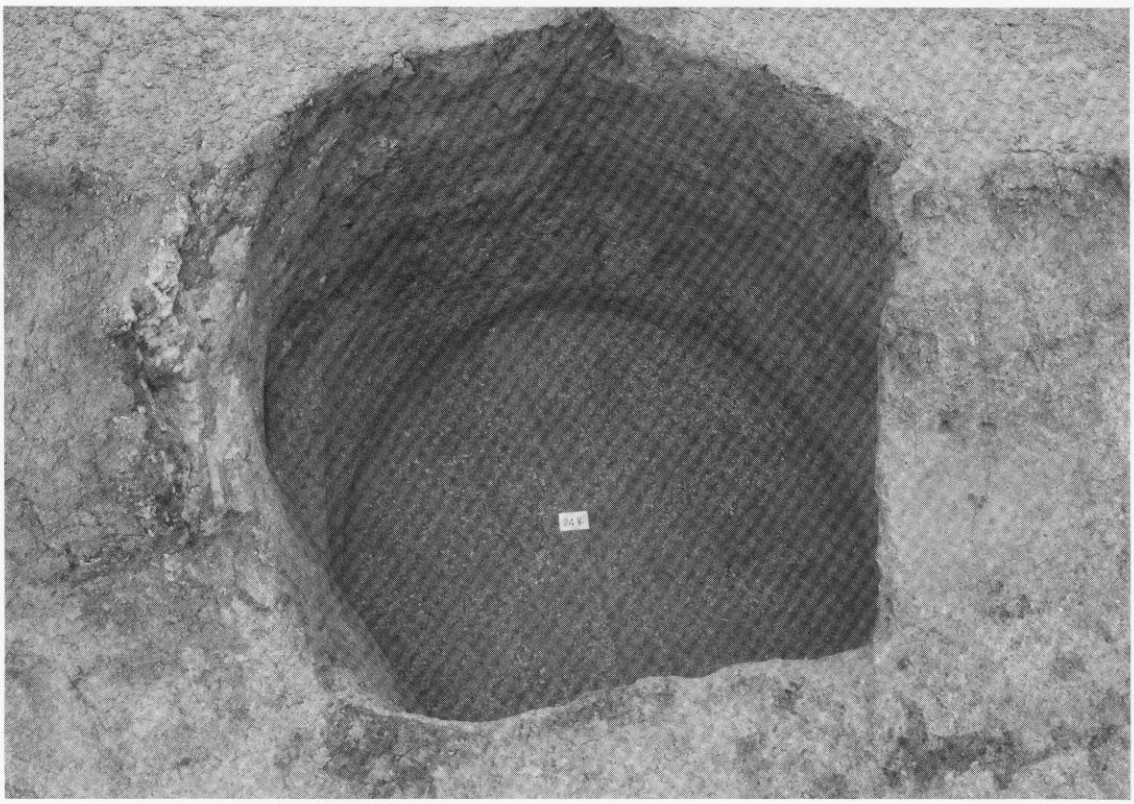




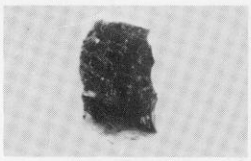
第20号袋状竪穴出土土器・石器

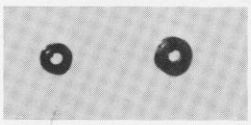


（1）第21号袋状竪穴（北から）

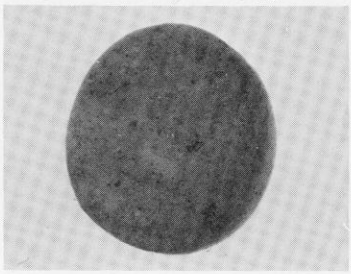


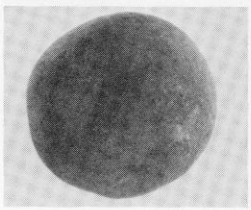
（2）第24号袋状竪穴（西から）

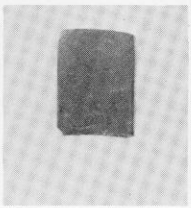




(1) 第25号袋状竪穴出土石器

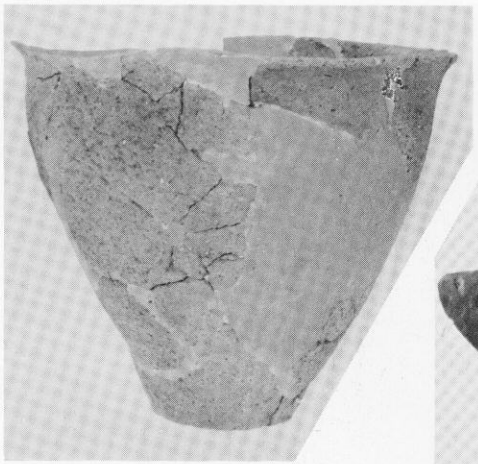


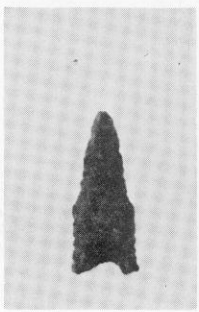


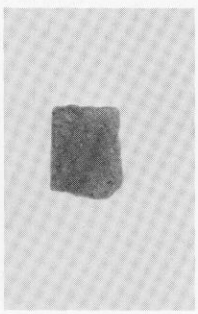


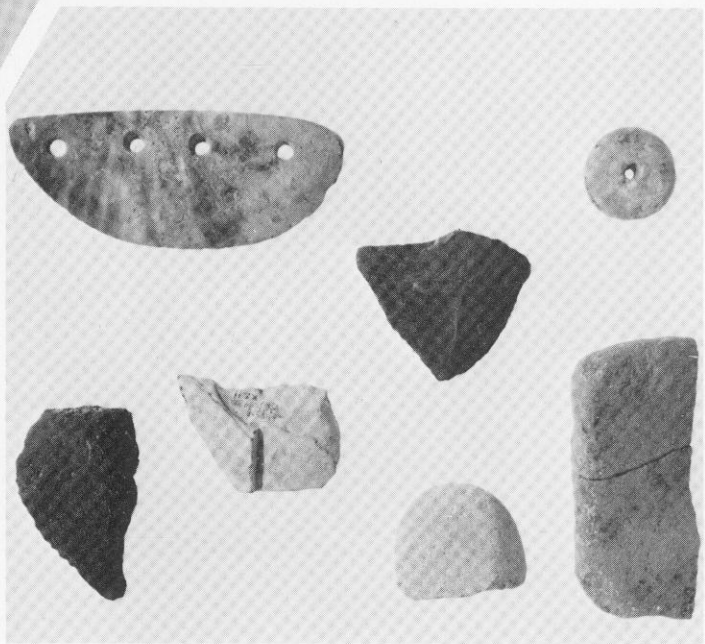
（3）第26号袋状竪穴出土石器

（2）第26号袋状竪穴（東から）

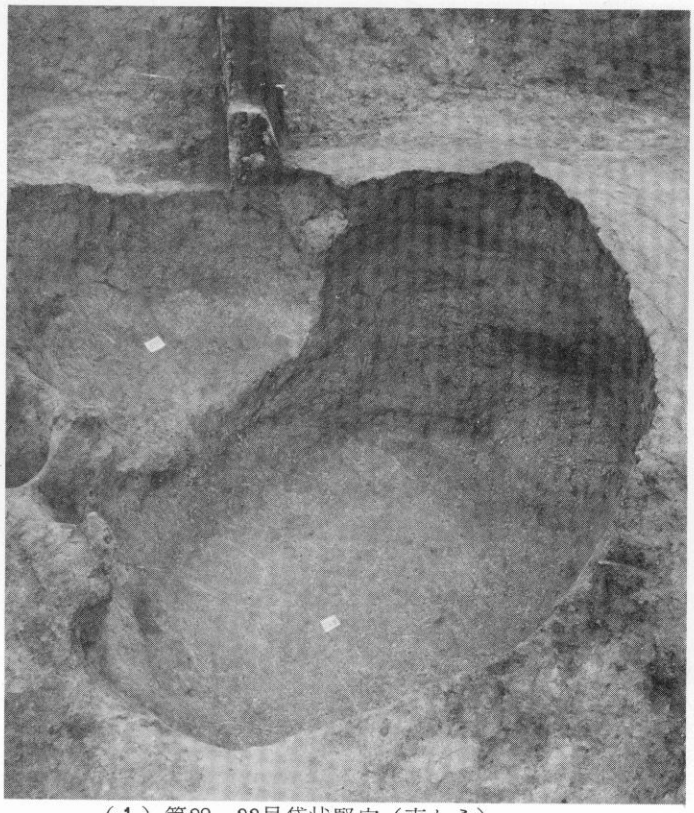




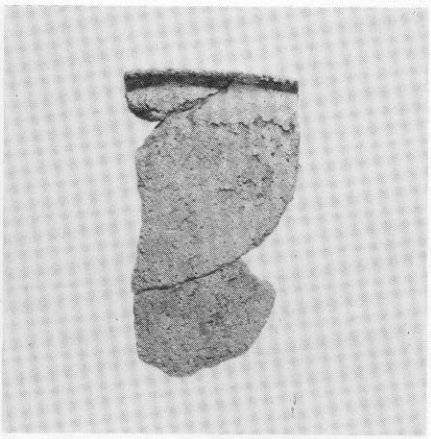


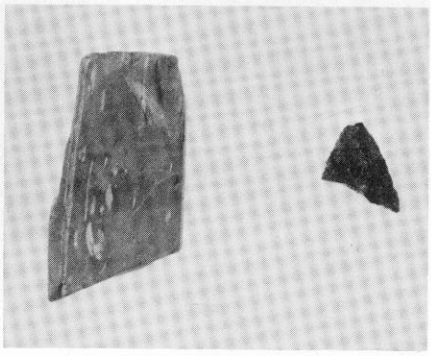


（4）第27号袋状竪穴出土土器・石器・土製紡錘車

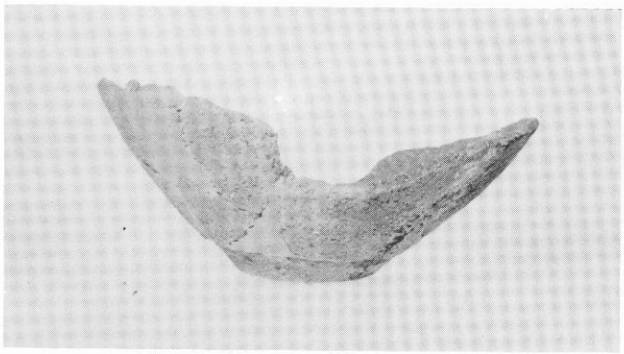


（1）第28・33号袋状竪穴（東から）

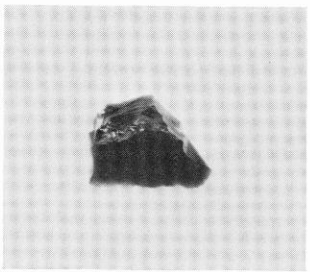




(2) 第28号袋状竪穴出土土器・石器

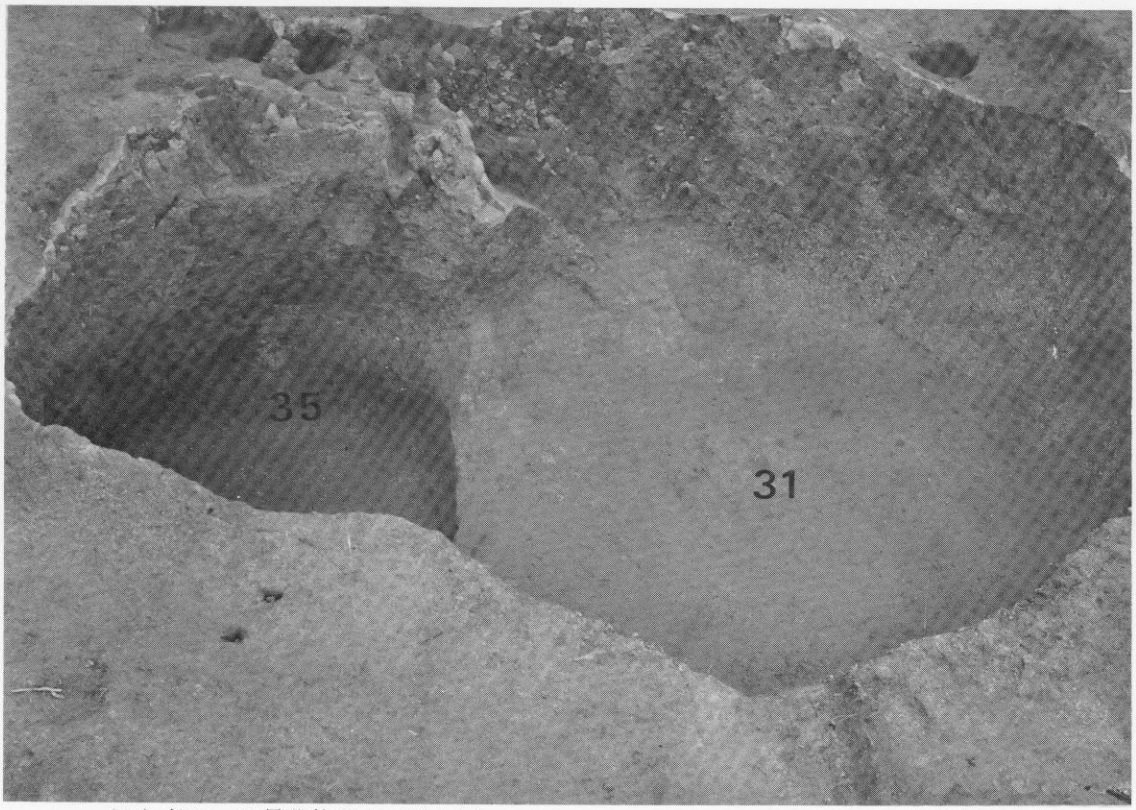


第28号袋状竪穴出土土器



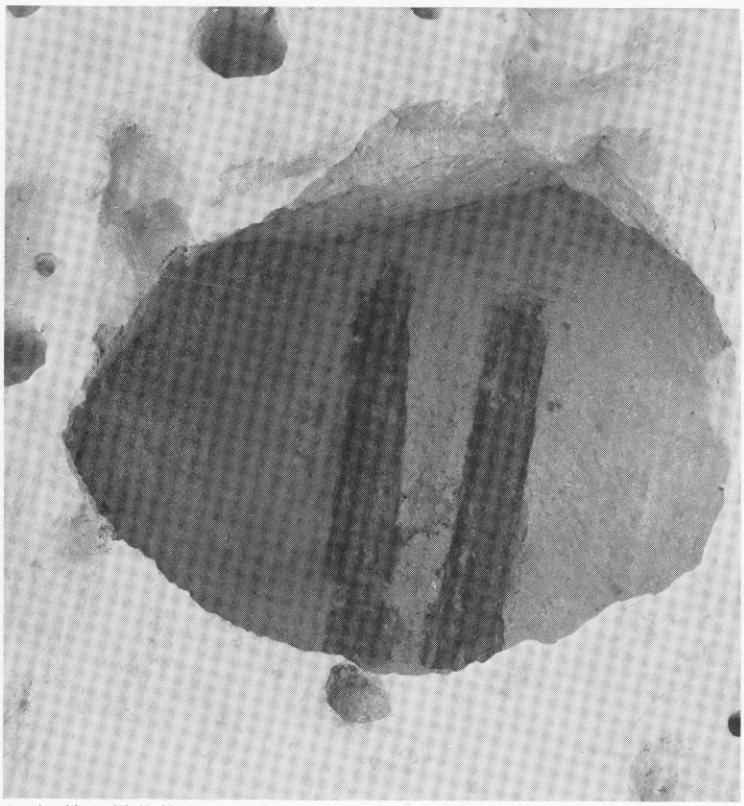
(4) 第31号袋状竪穴出土石器

（3）第29号袋状竪穴出土石器

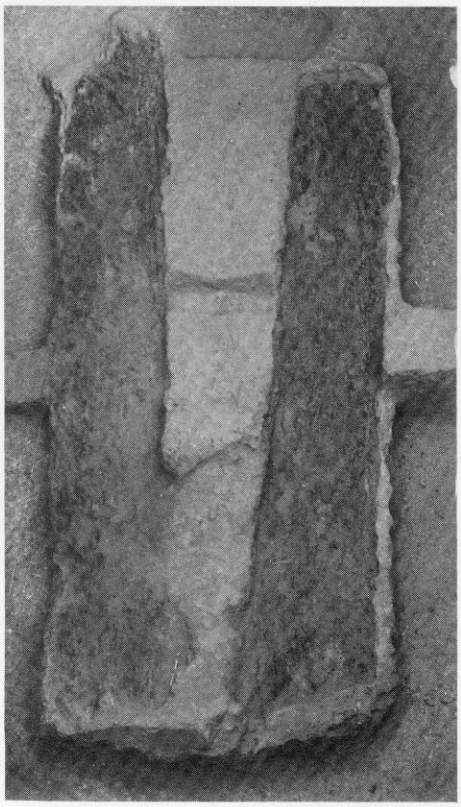


（1）第31・35号袋状竪穴（西から）

(2) 第32号袋状竪穴出土土器・土製投弾



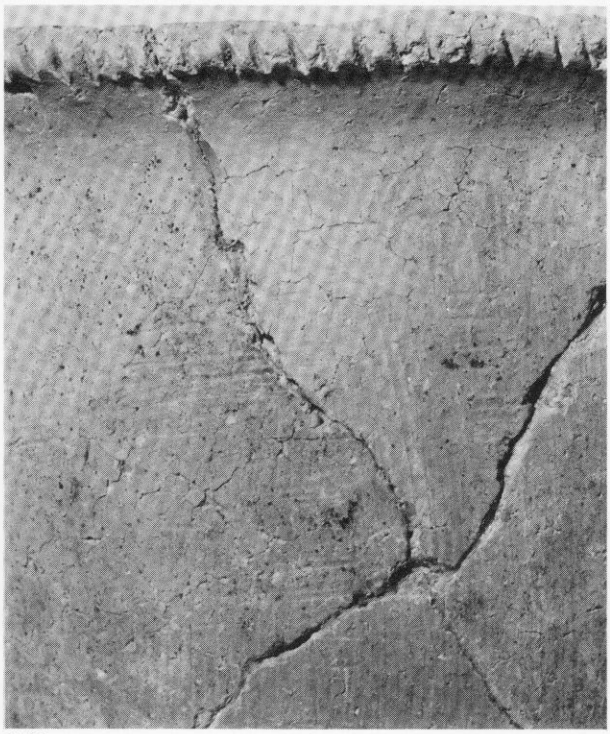
（3）第34号袋状竪穴（南から）



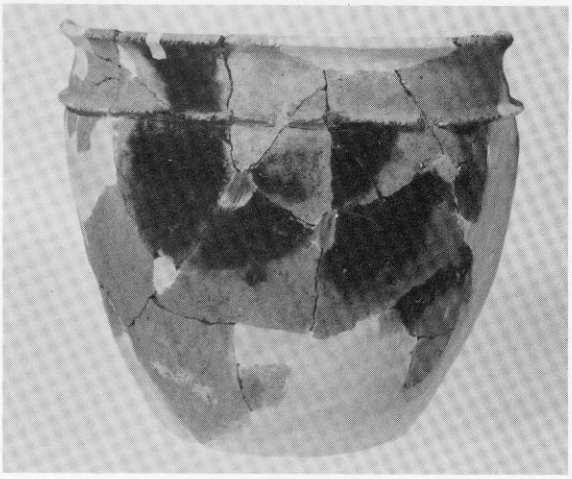
（1）第34号袋状竪穴出土炭化板材

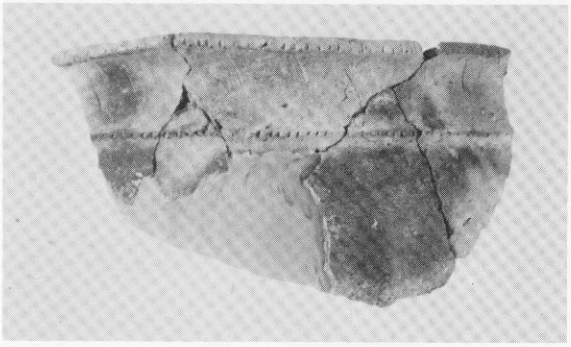
(3)

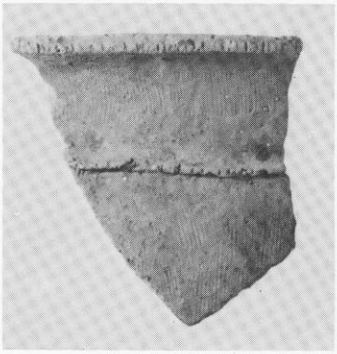
(2)甕外面の叩き目の接写



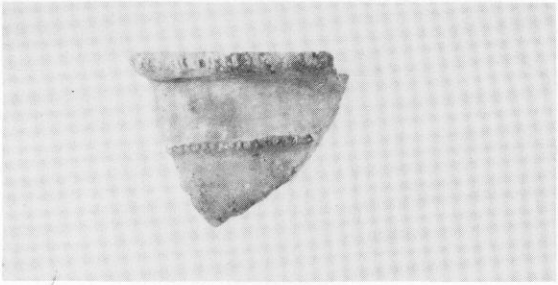
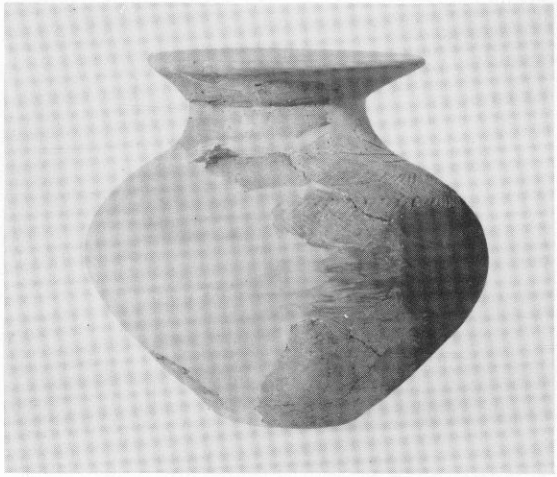
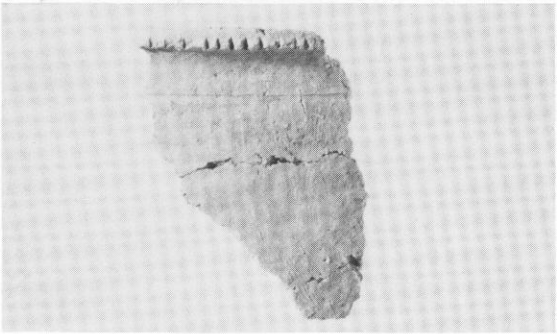
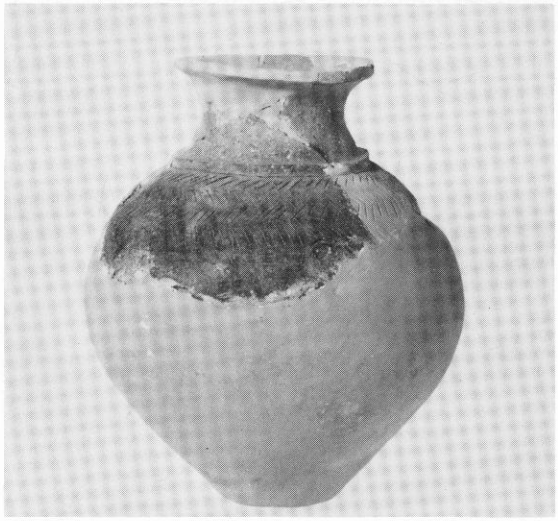
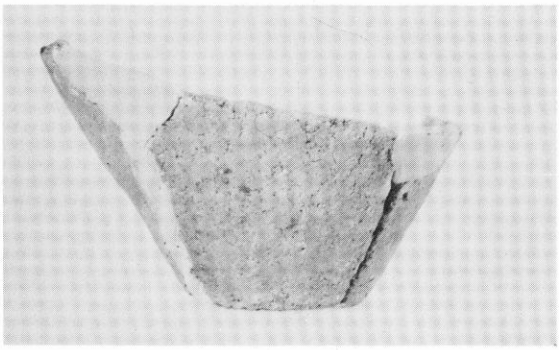
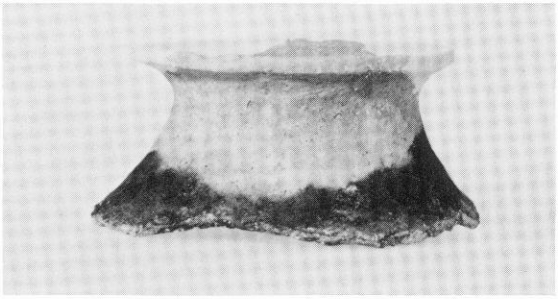
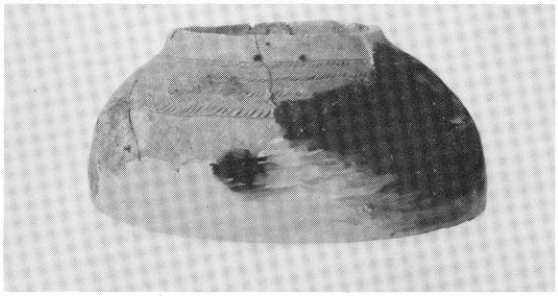
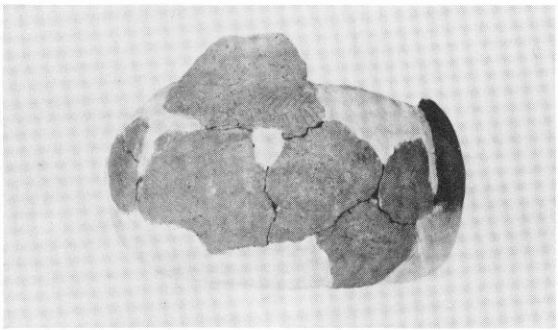
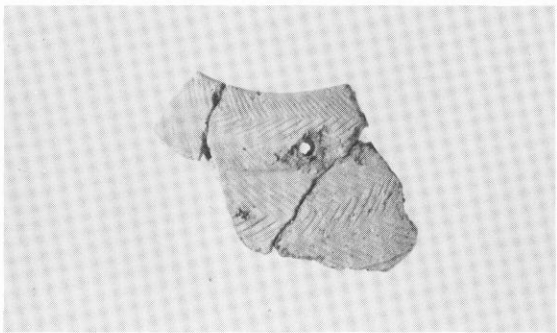
（2）第34号袋状竪穴出土の叩き目のある甕



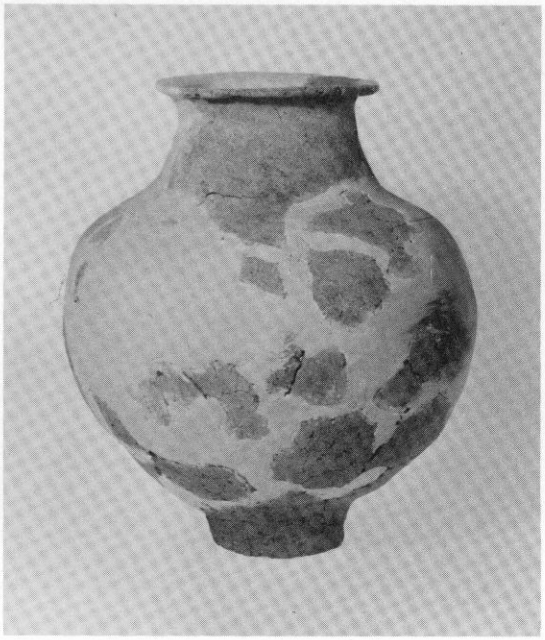


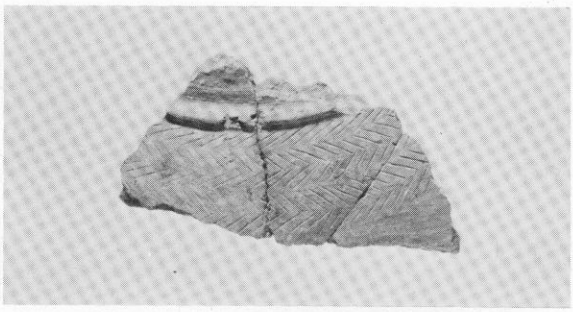


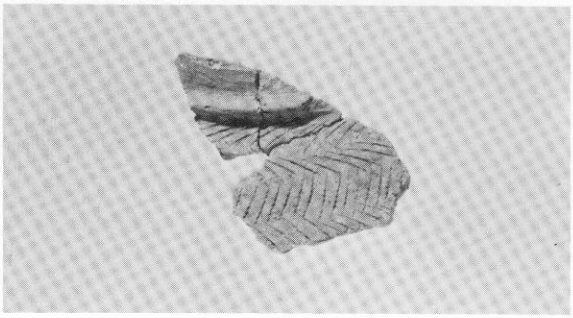
第34号袋状竪穴出土甕

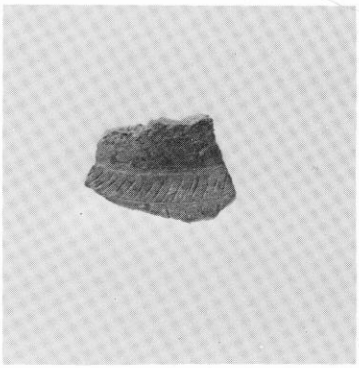










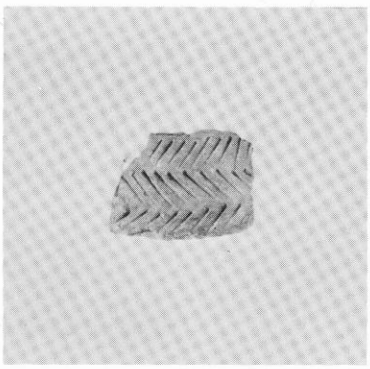
第34号袋状竪穴出土甕・壺

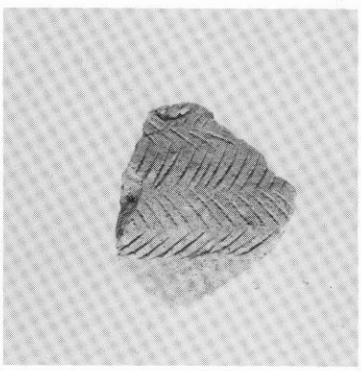




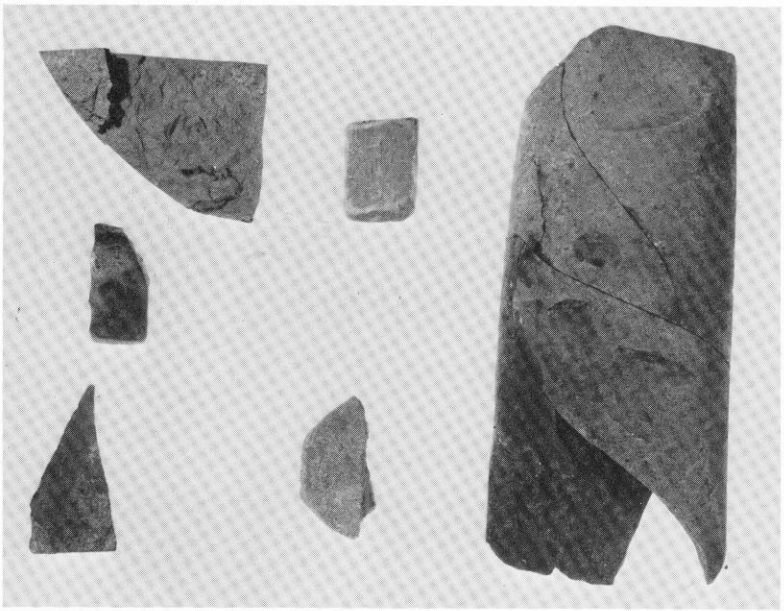




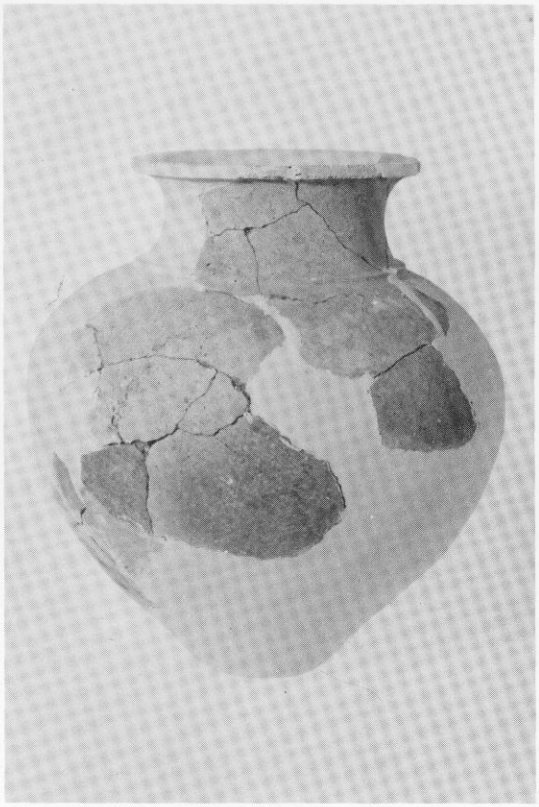


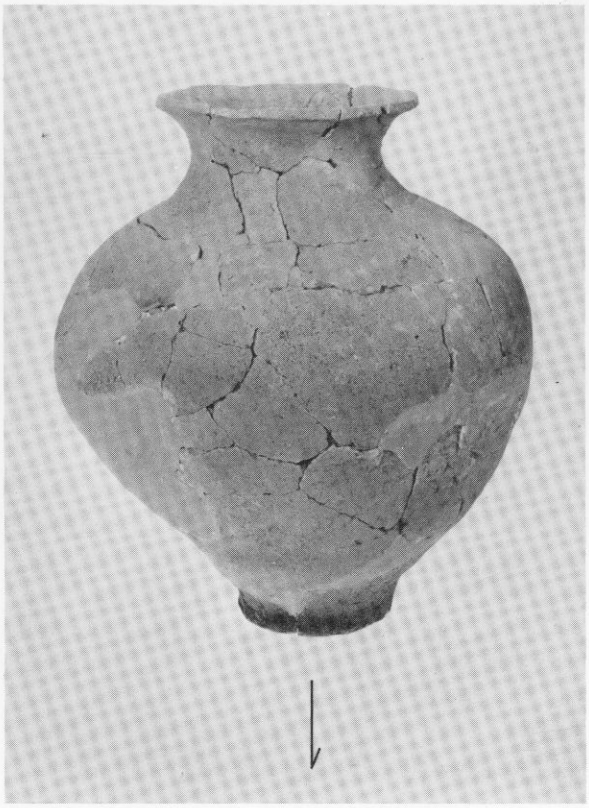


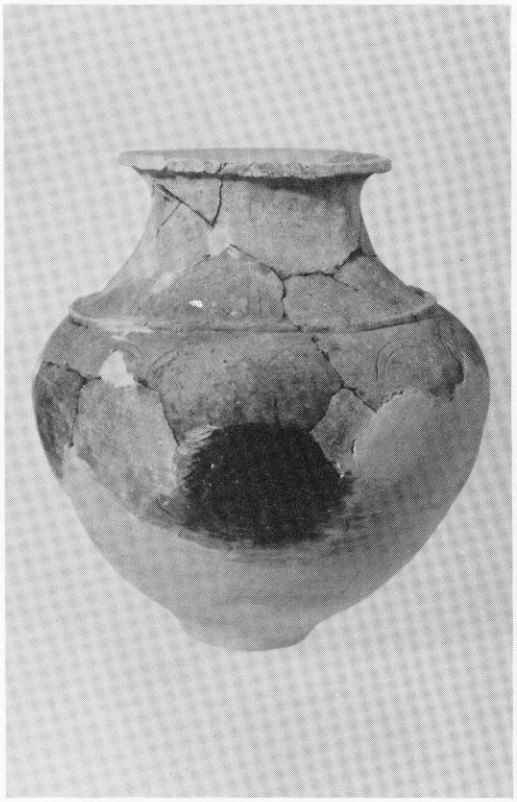
（1）第34号袋状竪穴出土壺



（2）第34号袋状竪穴出土磨製石器

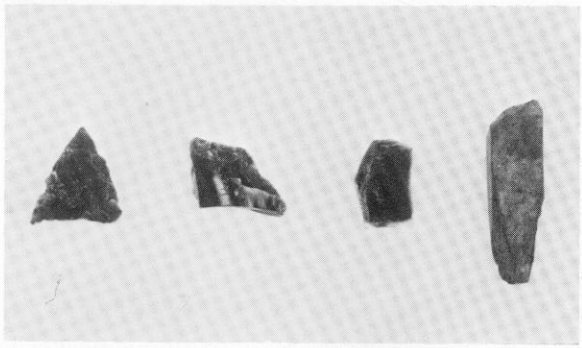


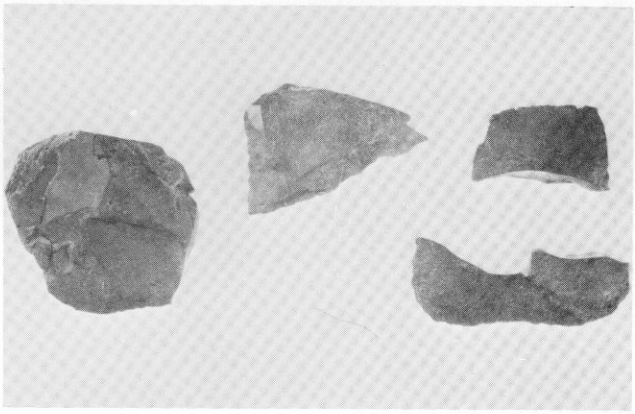




底部の籾圧痕

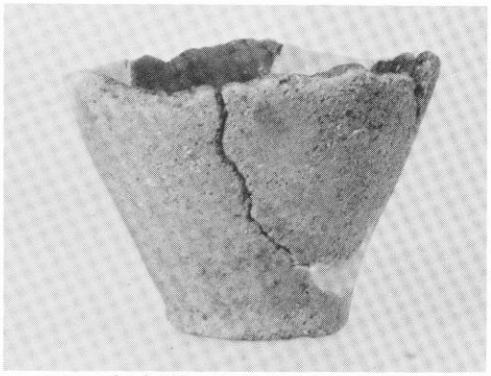
第34号袋状竪穴出土壺

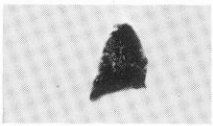


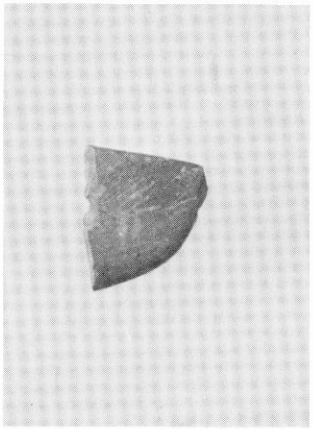


(1) 第34号袋状竪穴出土石器

(2) 第36号袋状竪穴出土土器・石包丁

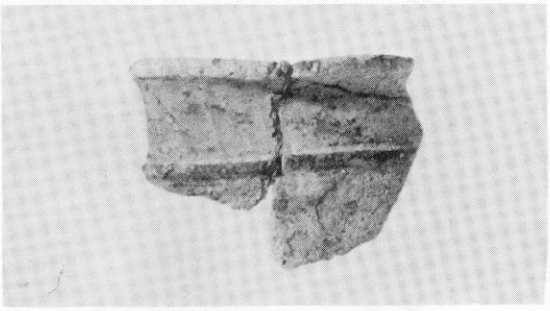


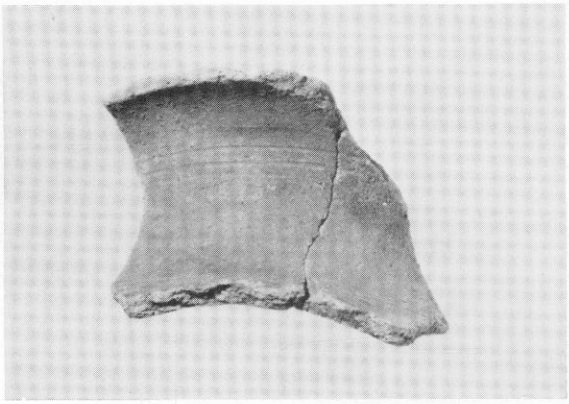




(3) 第39号袋状竪穴出土土器・石器

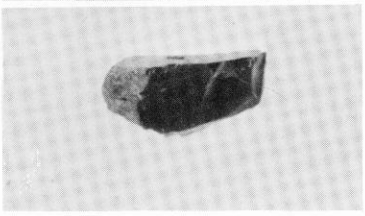
(1) 第40号袋状竪穴出土土器

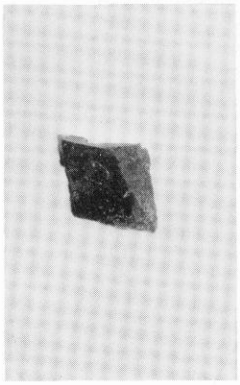


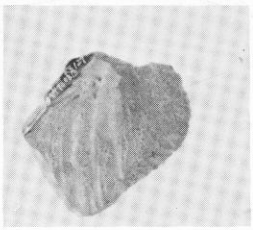


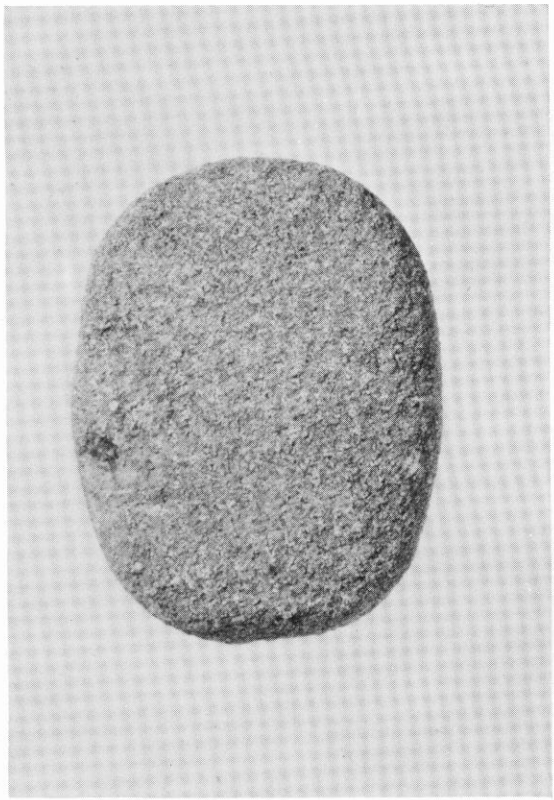
(2) 第41号袋状竪穴出土土器・石器

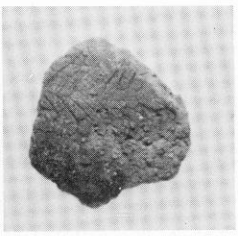
(3) 第43号袋状竪穴出土石核

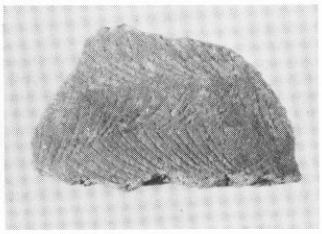


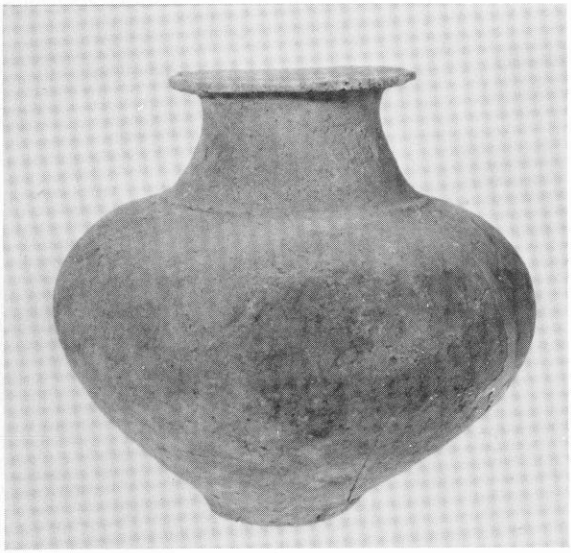






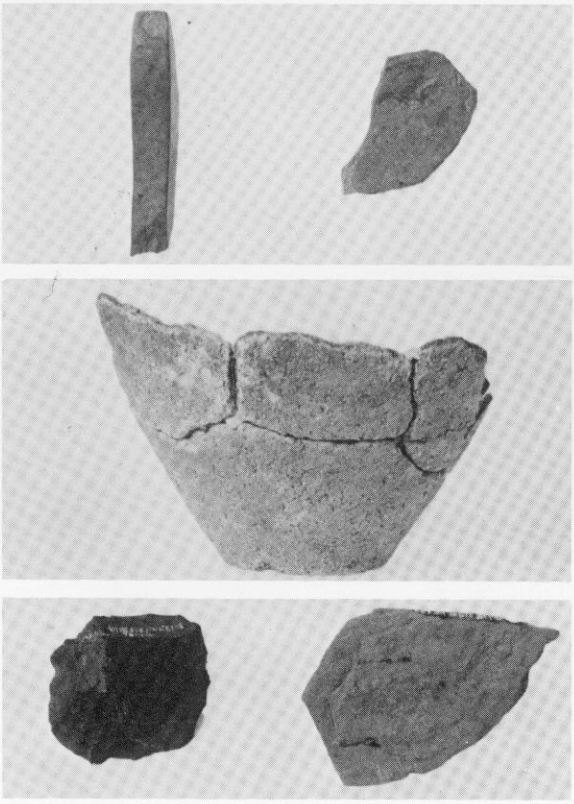




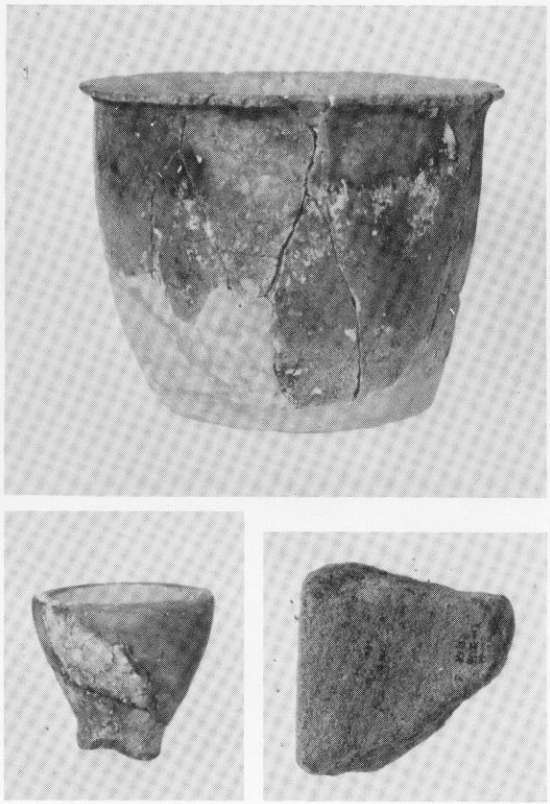


（4）第42号袋状竪穴出土土器・石器

第45号袋状竪穴出土石器

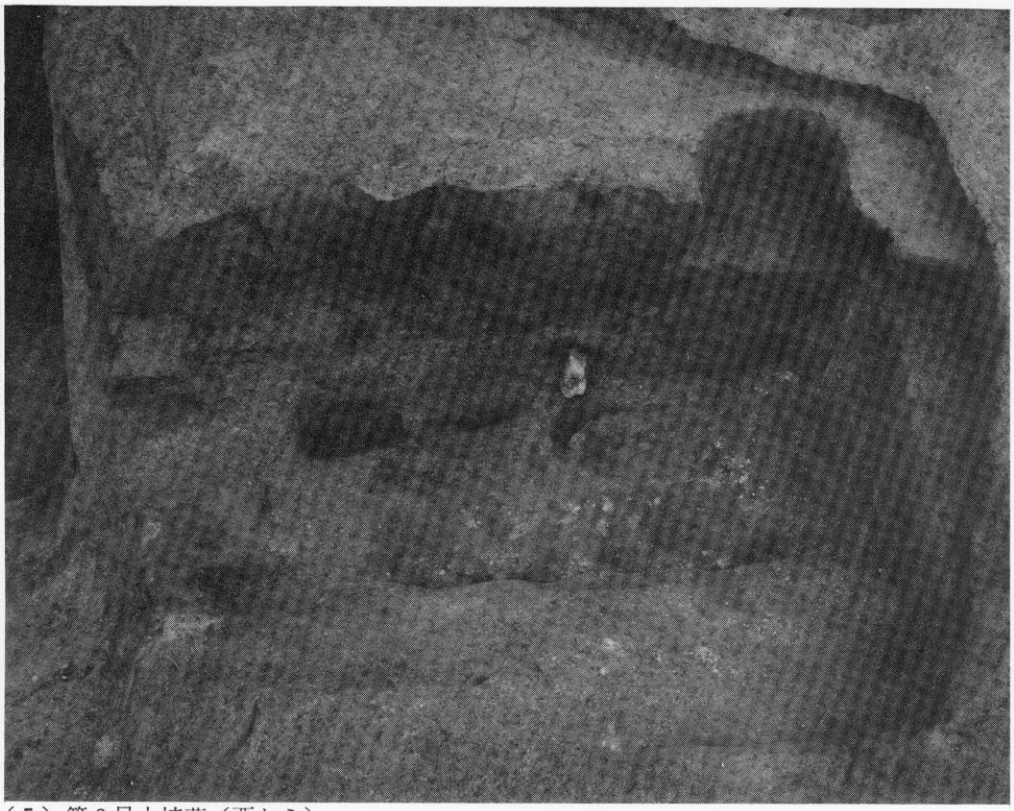


(2) 第48号袋状竪穴出土土器・石器

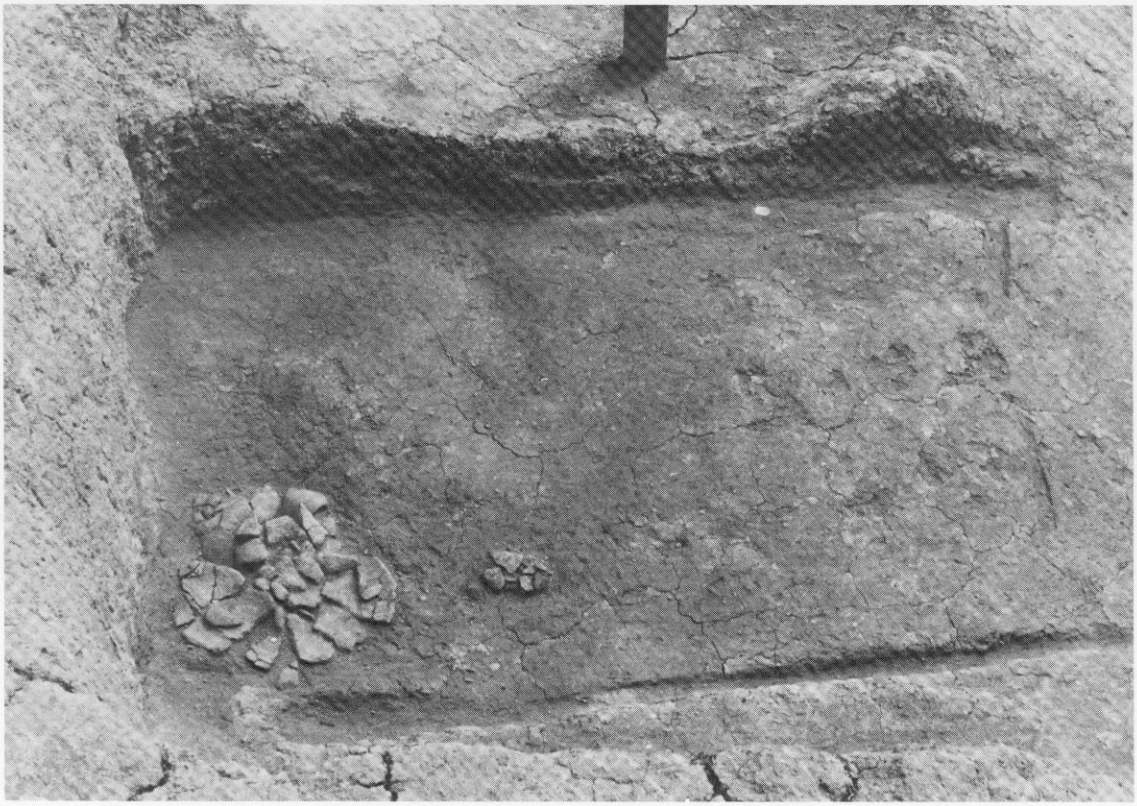


(3) 第51号袋状竪穴出土土器・石器

(4) 第1号土坑墓出土石鏃



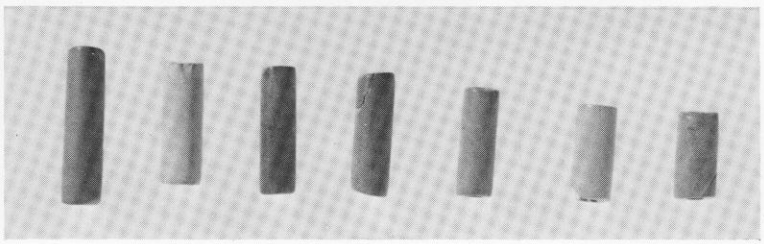
(5) 第2号土坑墓（西から）



（1）第3号土坑墓（北西から）

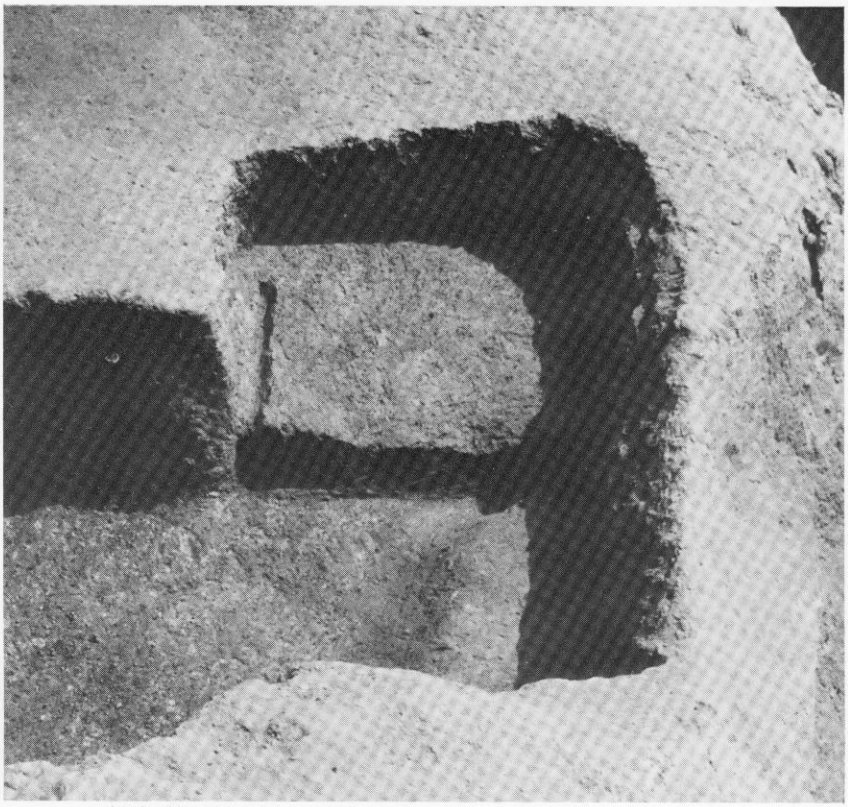
(2) 第3号土坑墓副葬小壺・石器

(3) 第4号土坑墓副葬小壺・管玉



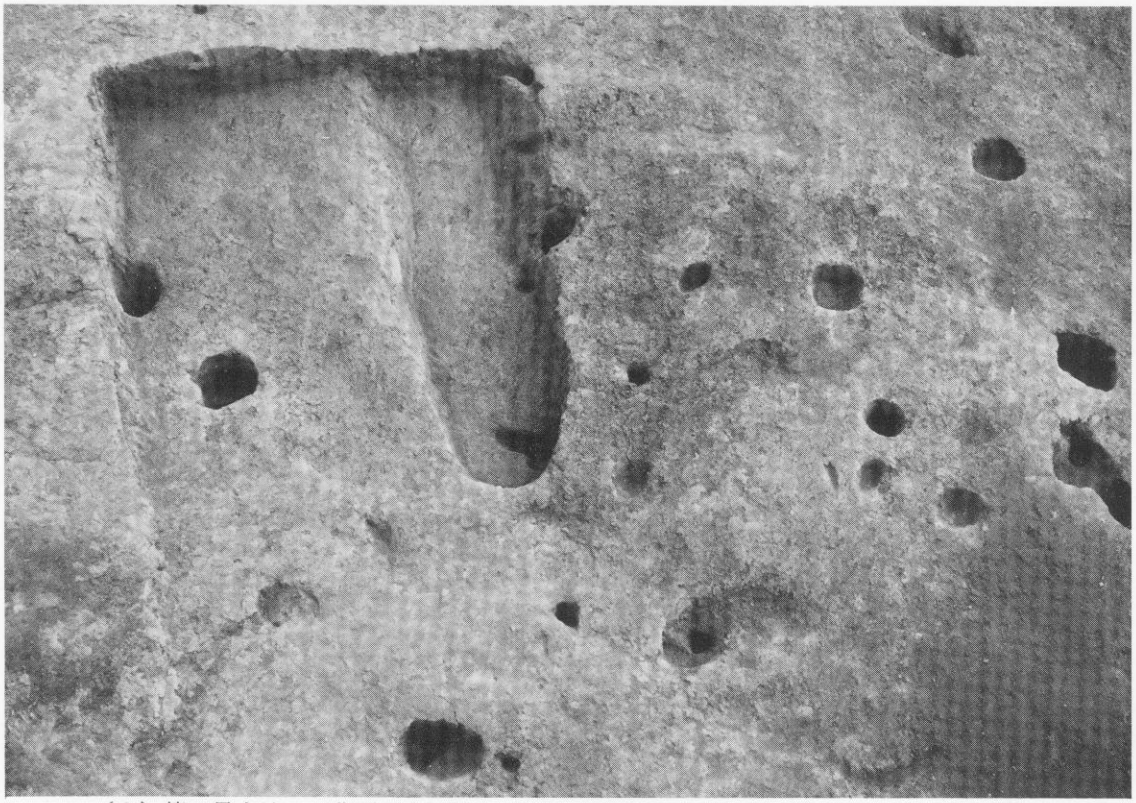
（1）第4号土坑墓副葬小壺・管玉（西から）

(2) 第9号土坑墓出土磨製石鏃

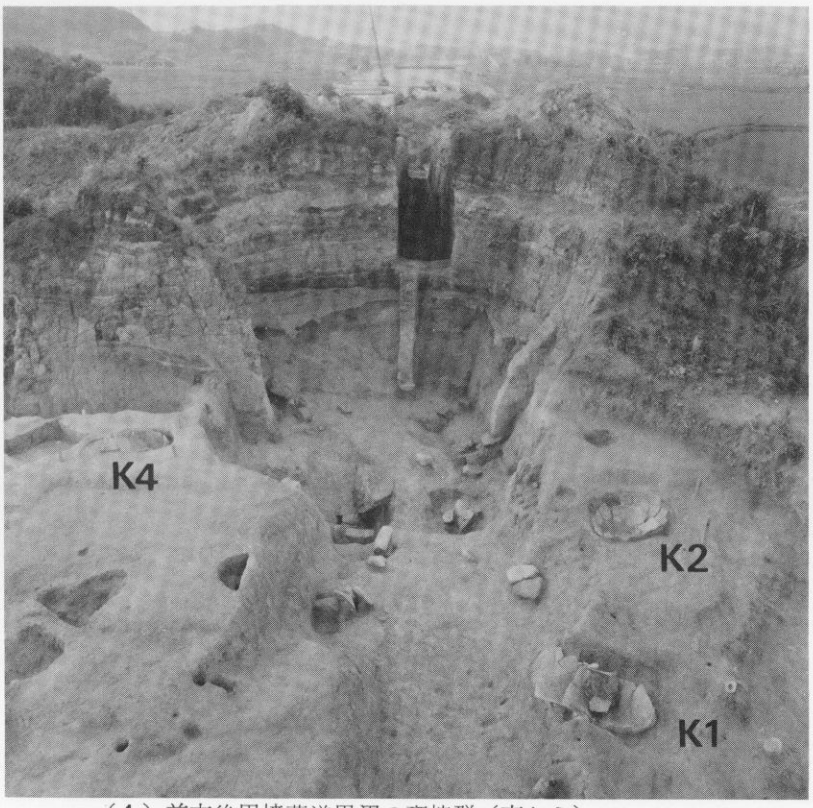


（3）第10号土坑墓（西から）

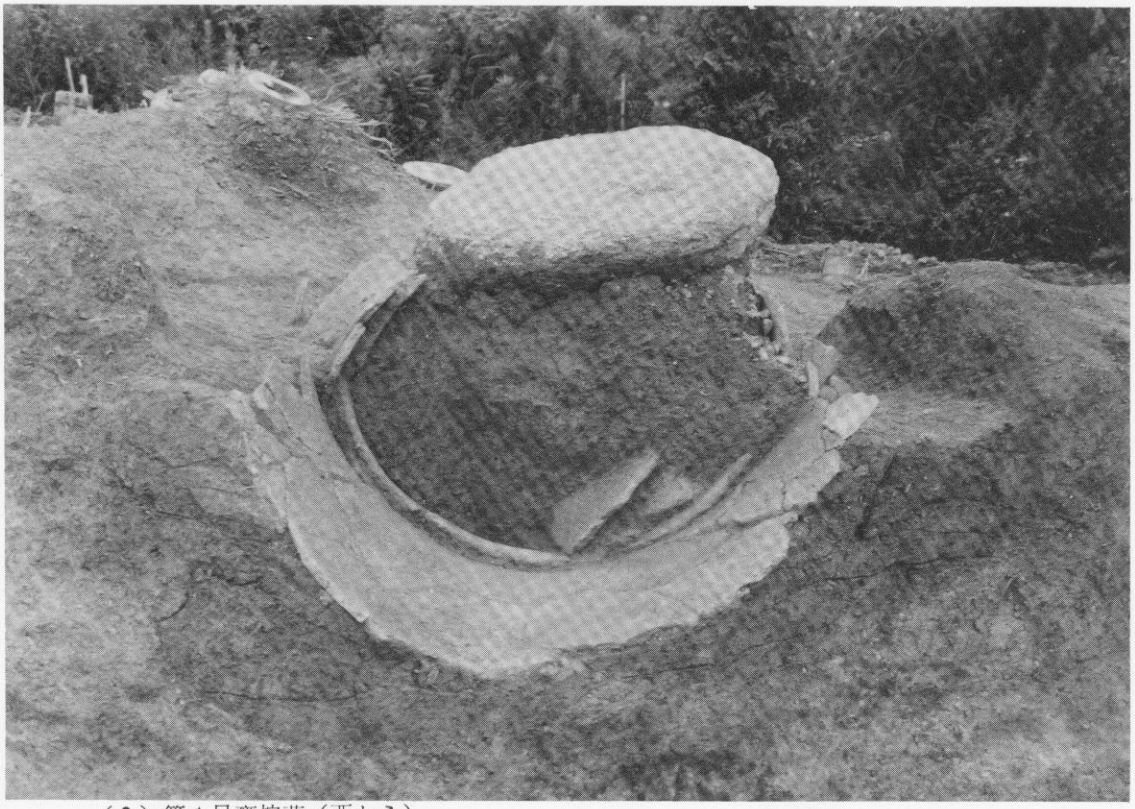
（1）第12号土坑墓（西から）



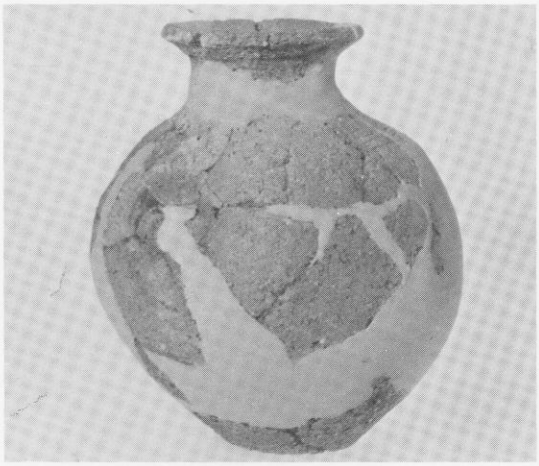
（2）第13号土坑墓（北西から）



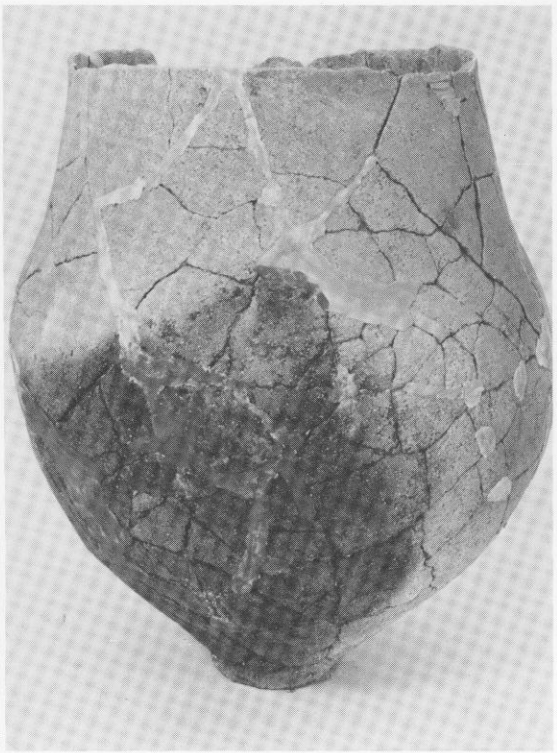
（1）前方後円墳墓道周辺の甕棺群（南から）



（2）第1号甕棺墓（西から）

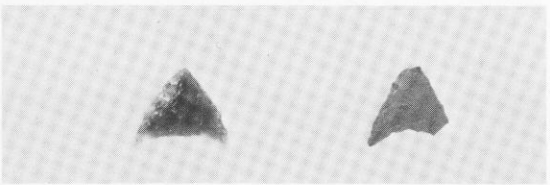


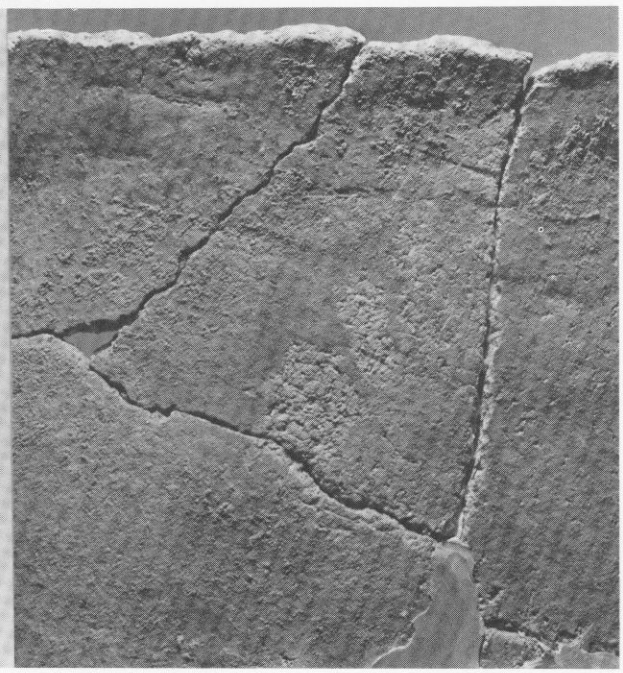
(1) 第1号甕棺墓副葬小壺



(2) 第1号甕棺

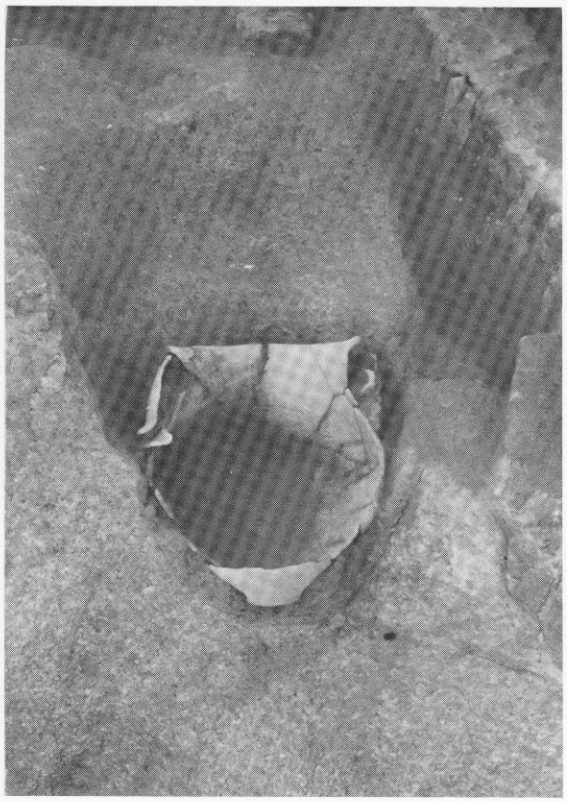
(3) 第2号甕棺





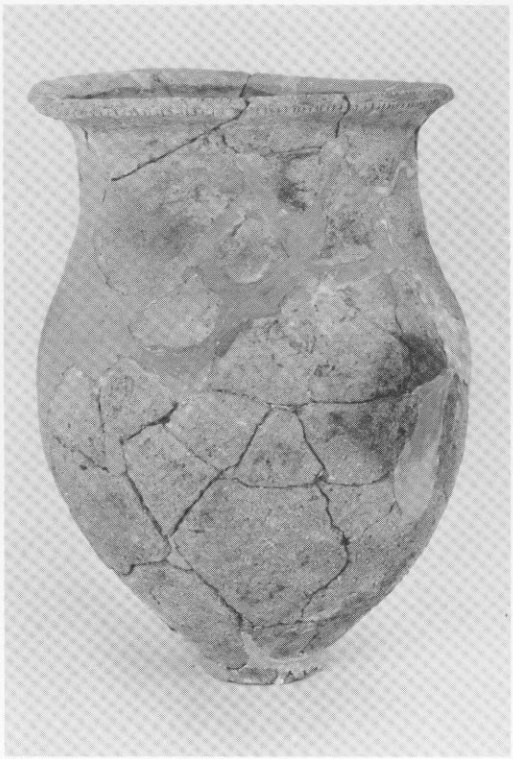
(4) 第2号下棺頸部叩き目

（1）第4号甕棺墓（南東から）

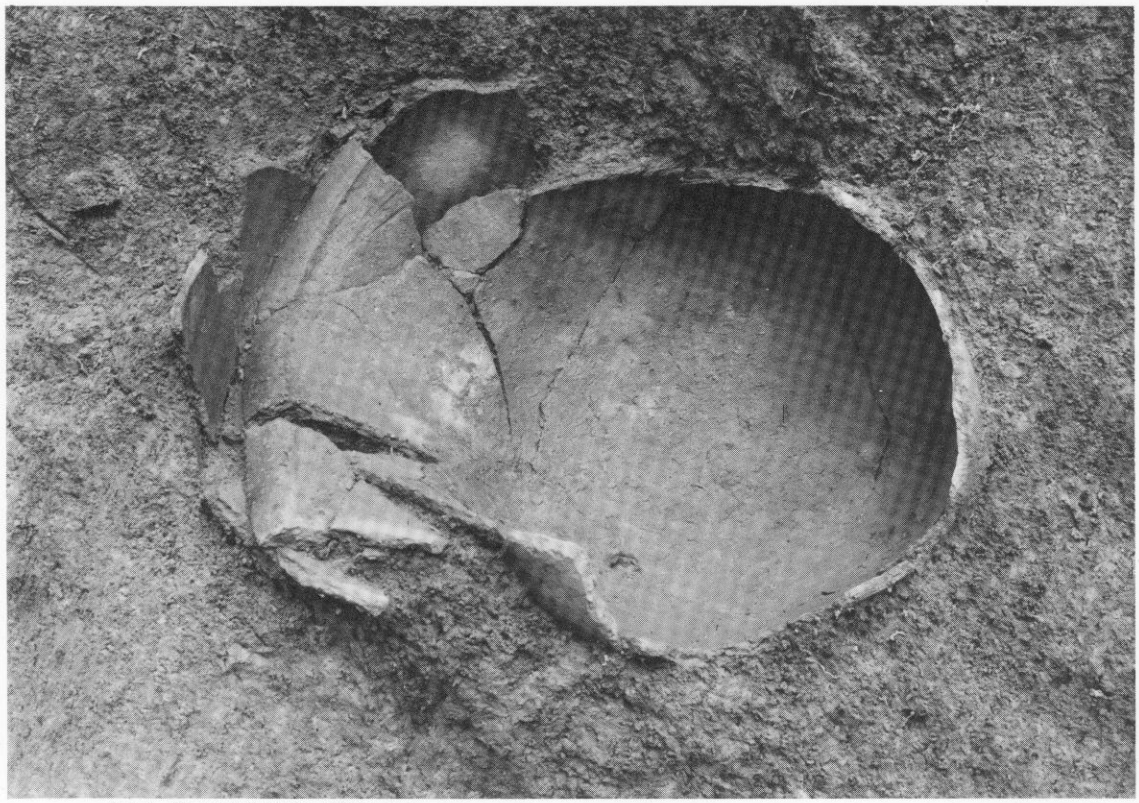


（2）第6号甕棺墓（東から）

（1）第 6 号甕棺

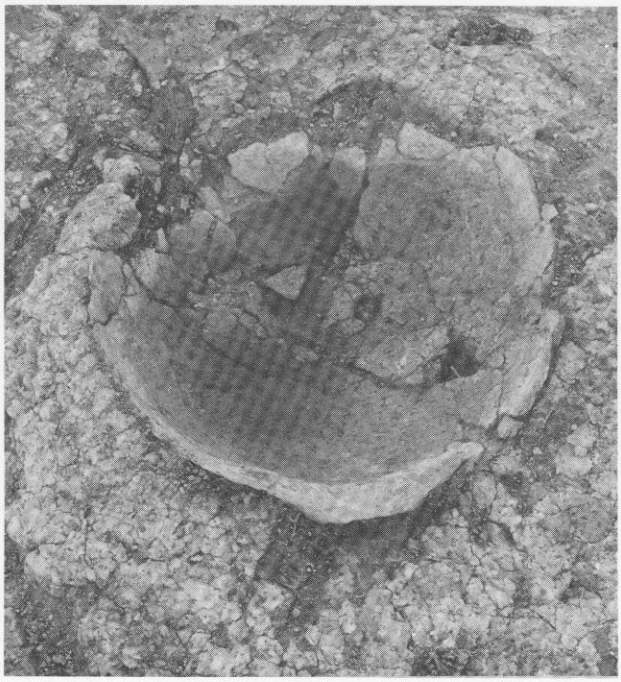


（2）第 7 号甕棺

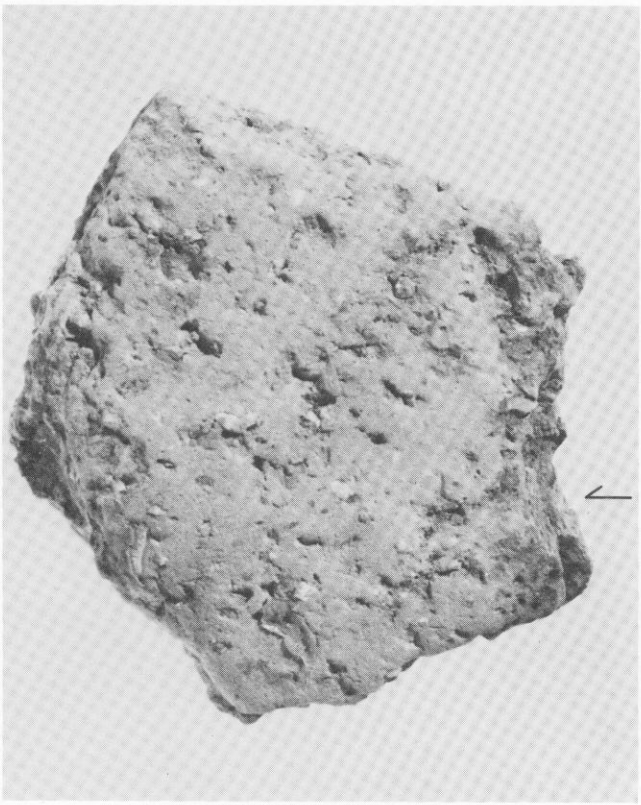


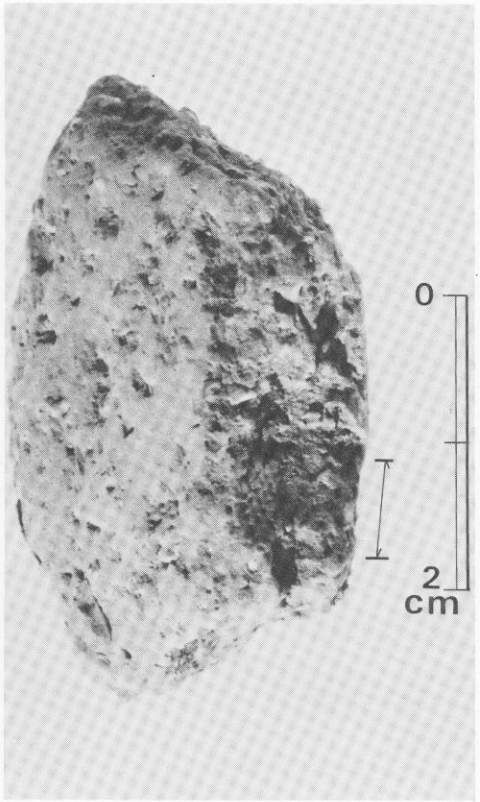
（3）第7号甕棺墓（西から）

(1) 第8号甕棺



(2) 第9号甕棺墓（東より）





（3）第9号甕棺胴部破片の布圧痕接写

（1）第10号甕棺墓・甕棺（南東から）

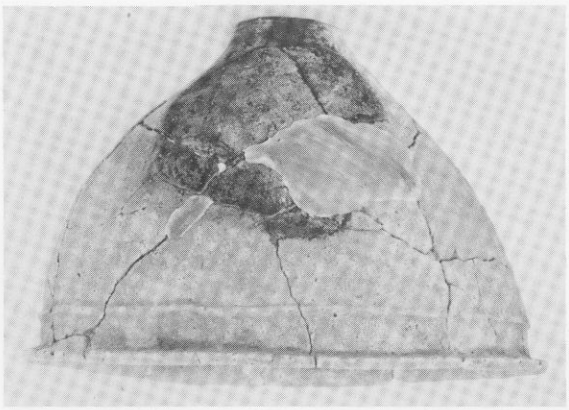
（2）第11号甕棺墓（西から）

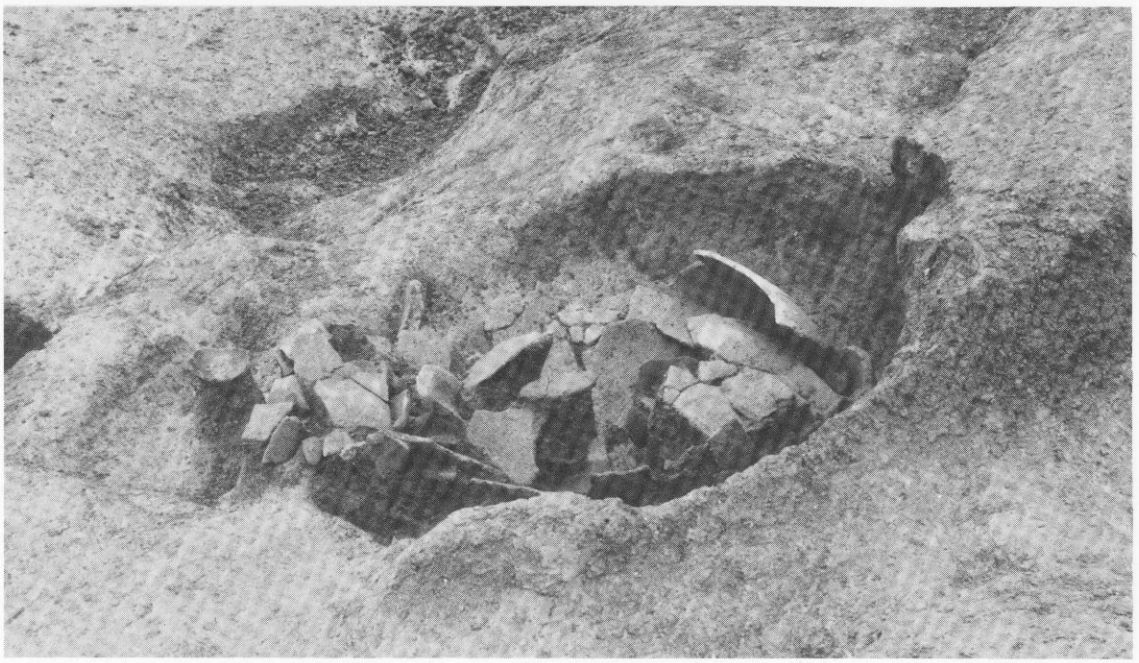
（1）第12号甕棺墓（南から）

（2）第13号甕棺墓（西から）

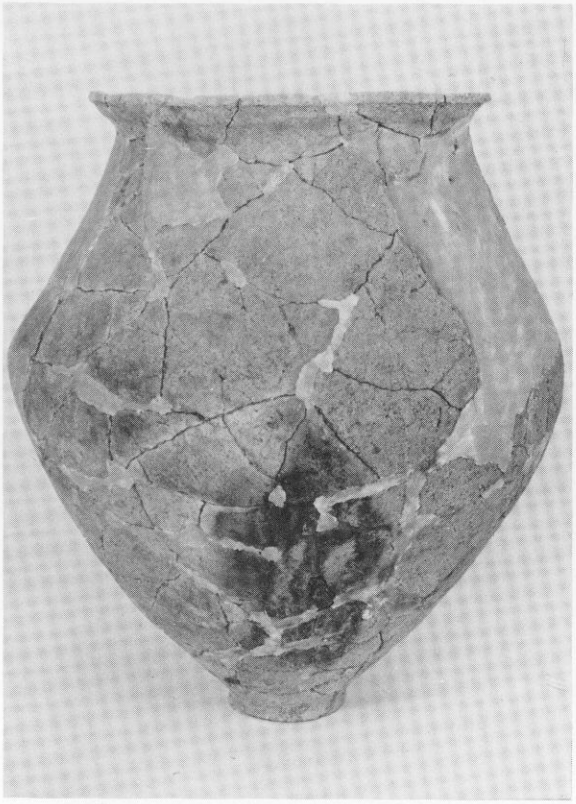
(1) 第12号甕棺

(2) 第13号甕棺

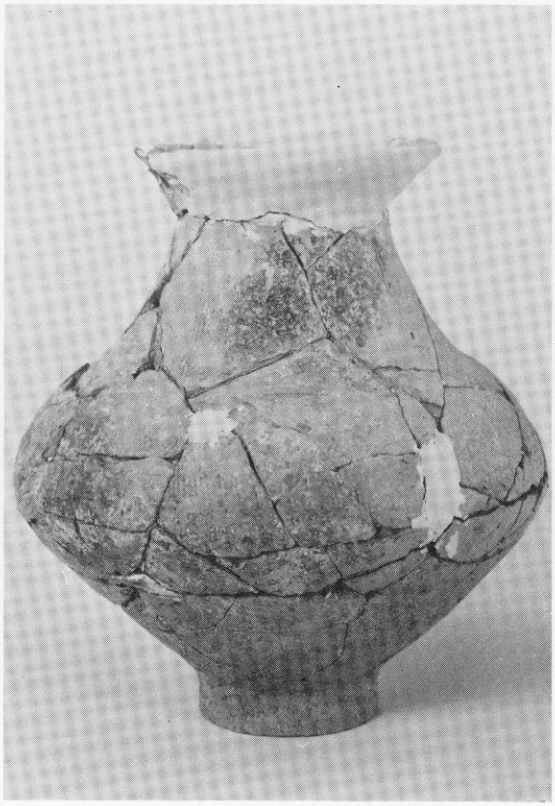




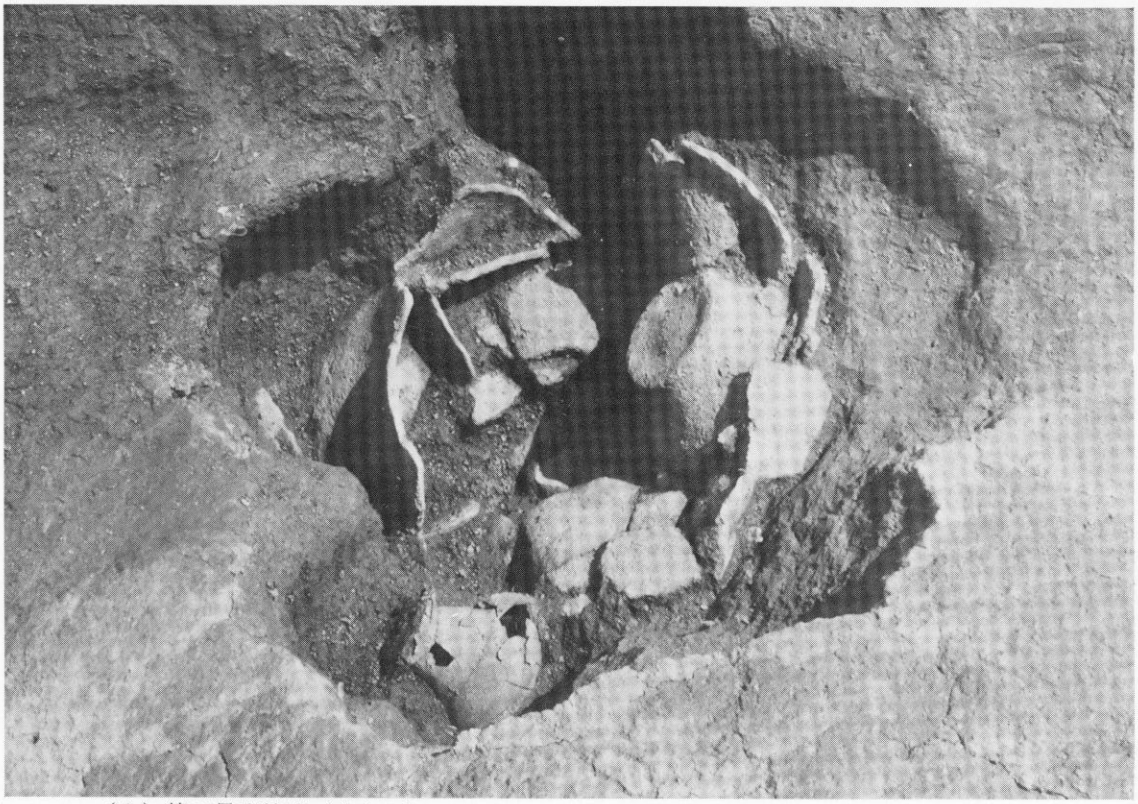
（3）第14号甕棺墓（北西から）



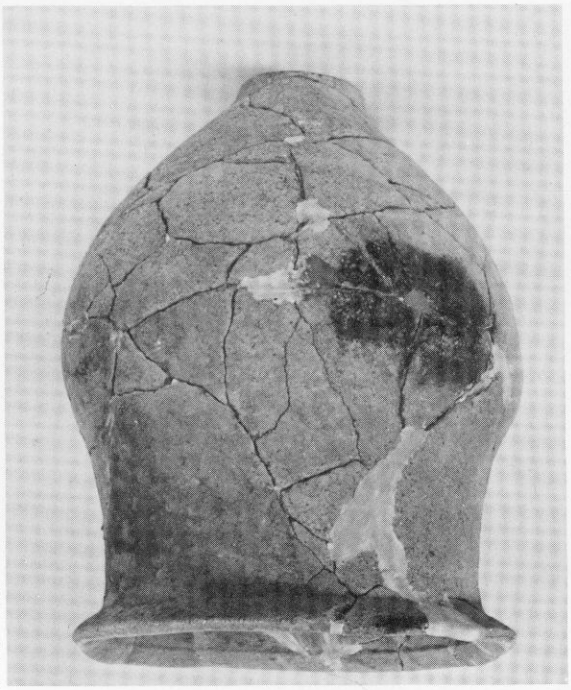
(1) 第14号甕棺

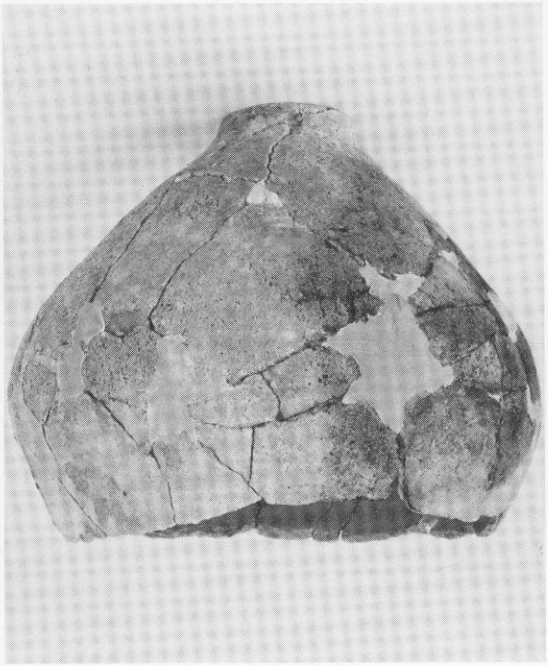


(2) 第15号甕棺墓副葬丹彩小壺



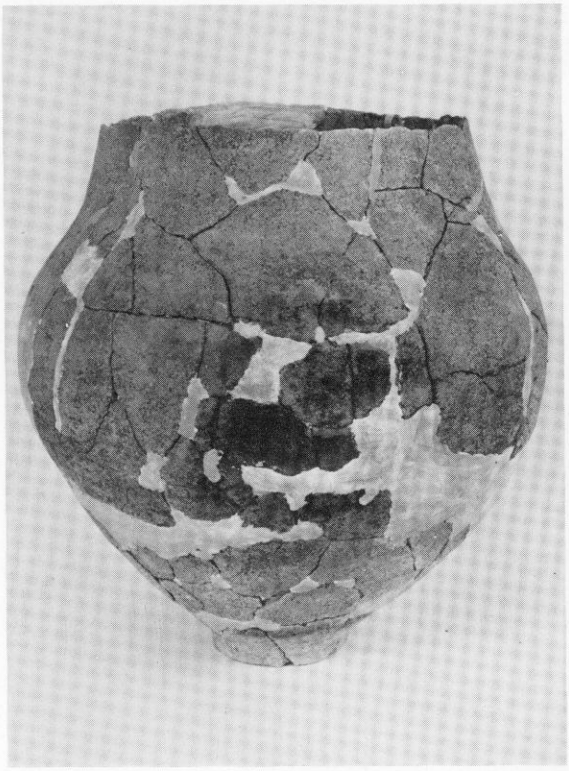
(3) 第15号甕棺墓（北から）

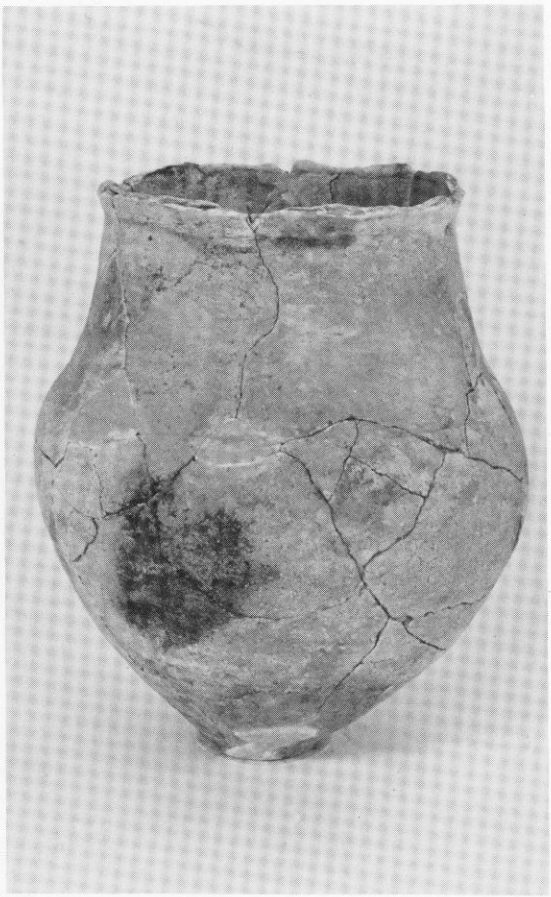


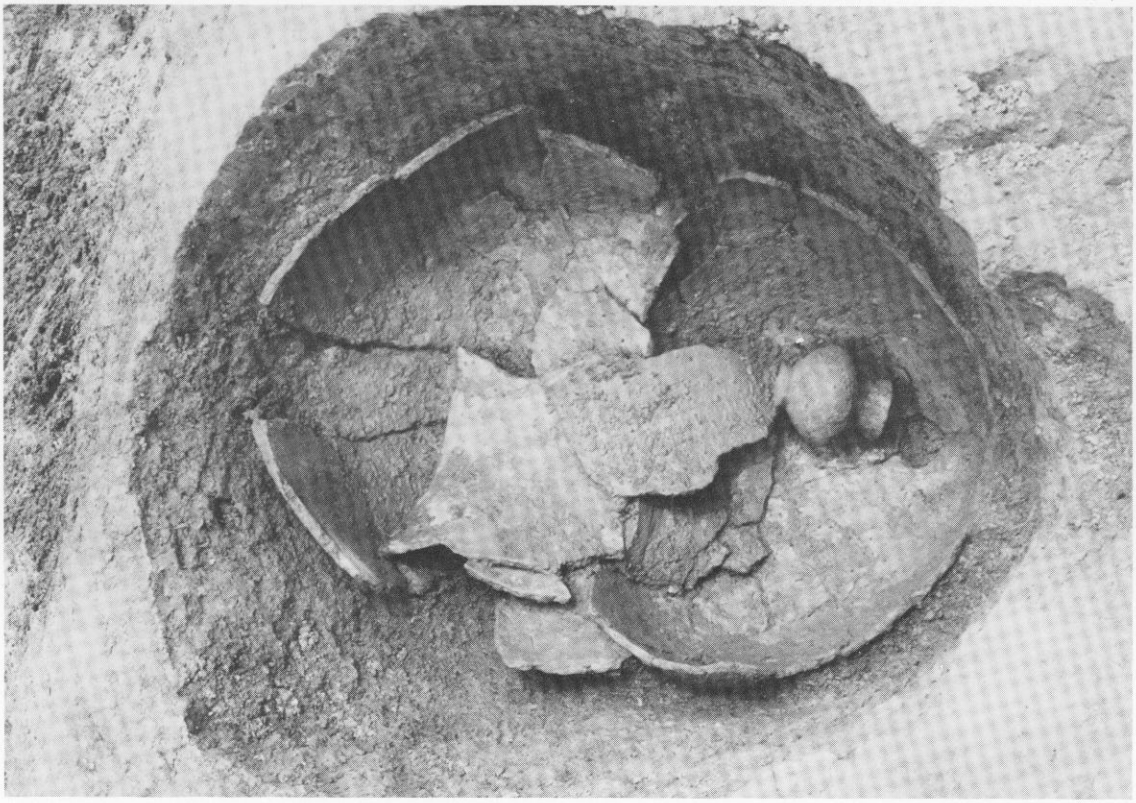


(1) 第15号甕棺

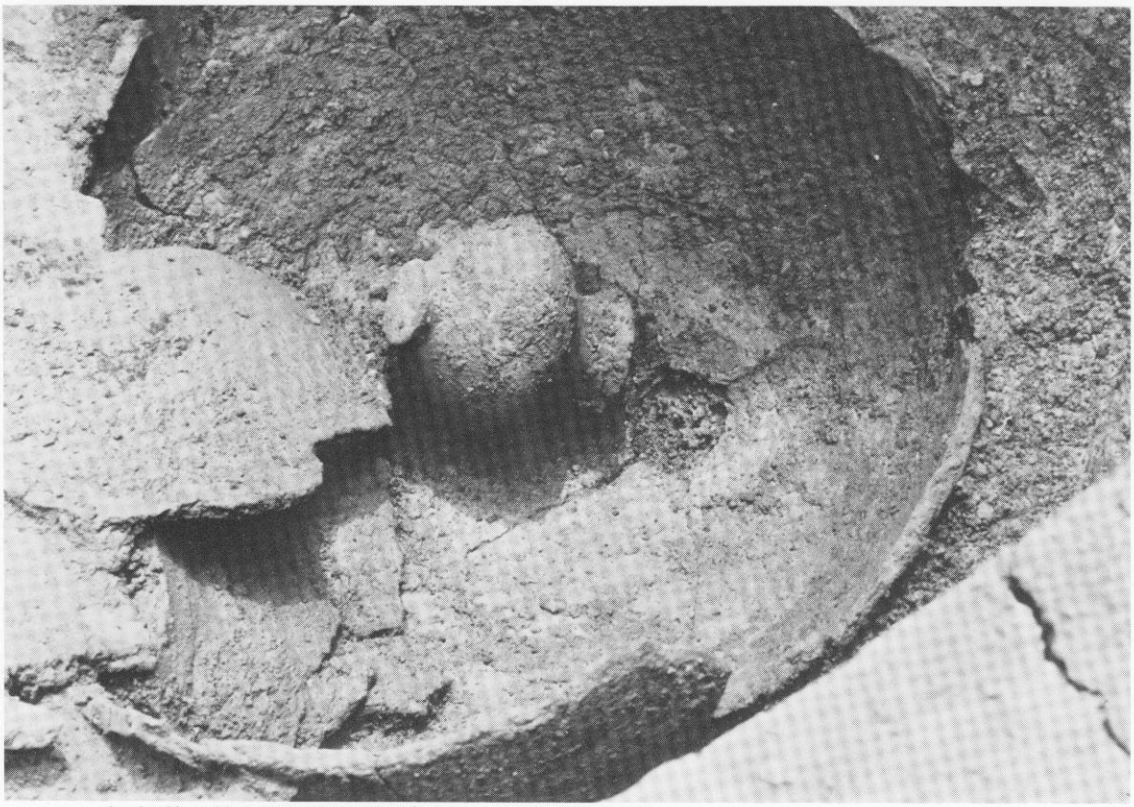
(2) 第16号甕棺





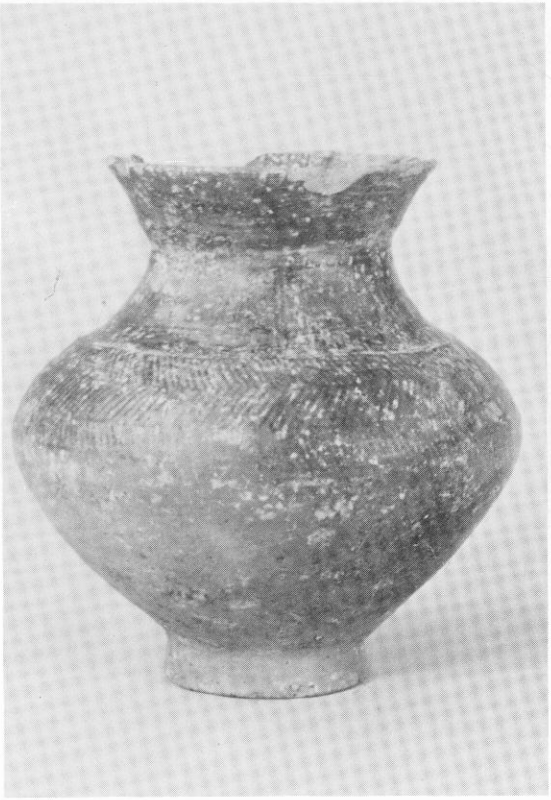


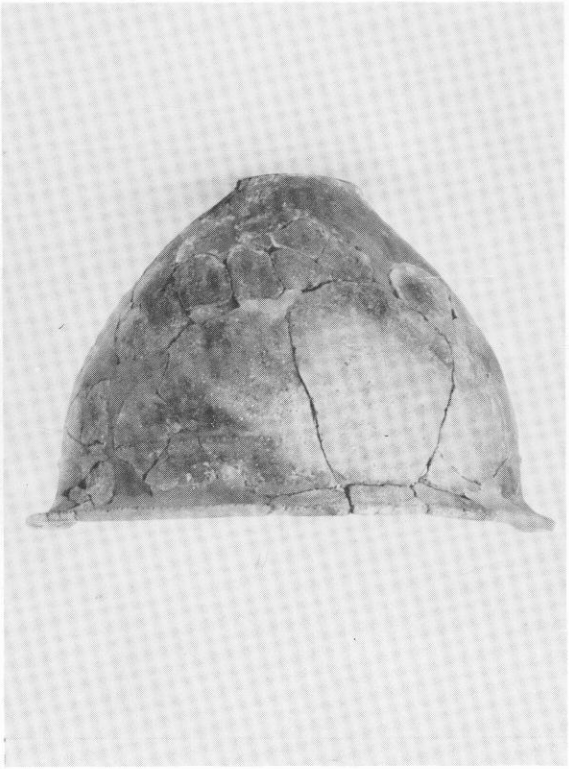
（1）第16号甕棺墓（東から）



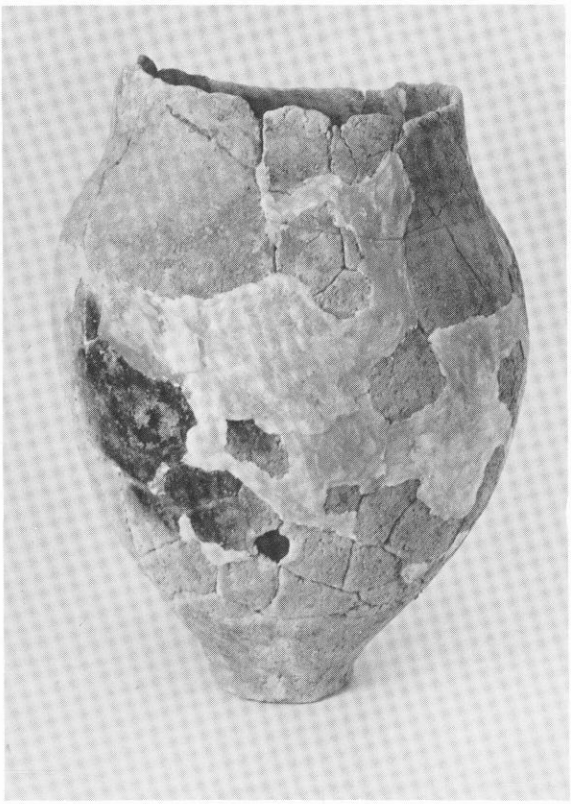
（2）第16号甕棺墓棺内副葬小壺出土状態（南から）

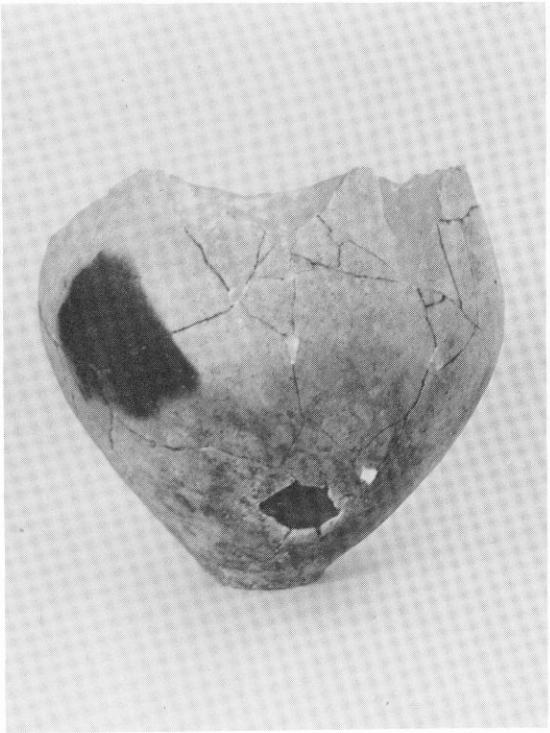
(1) 第16号甕棺副葬丹彩小壺





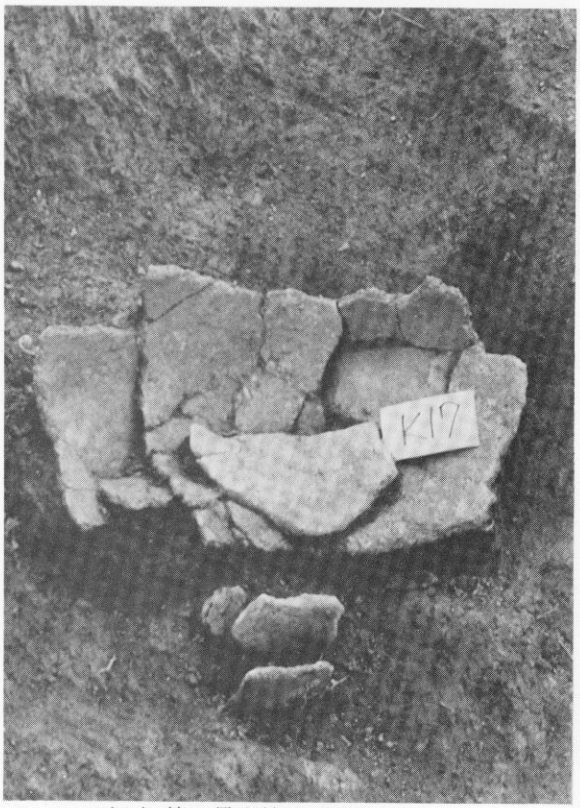
(2) 第18号甕棺



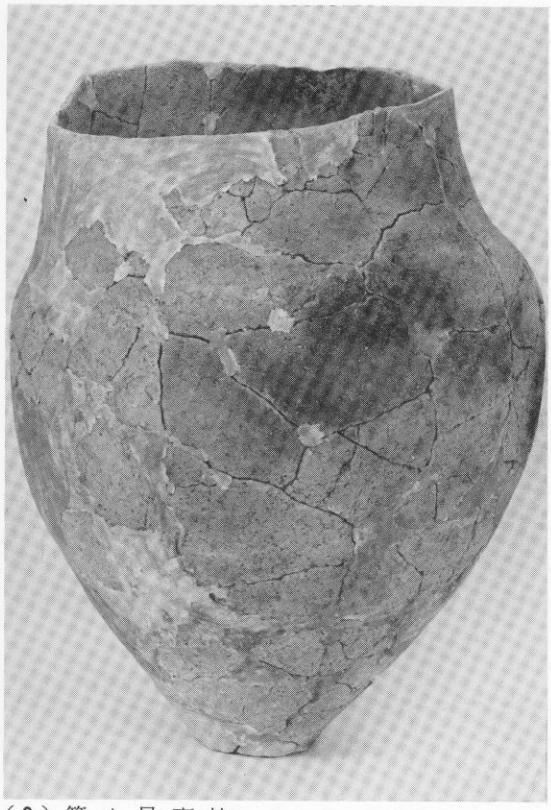


(3) 番外甕棺

（1）第4号甕棺墓（南東から）

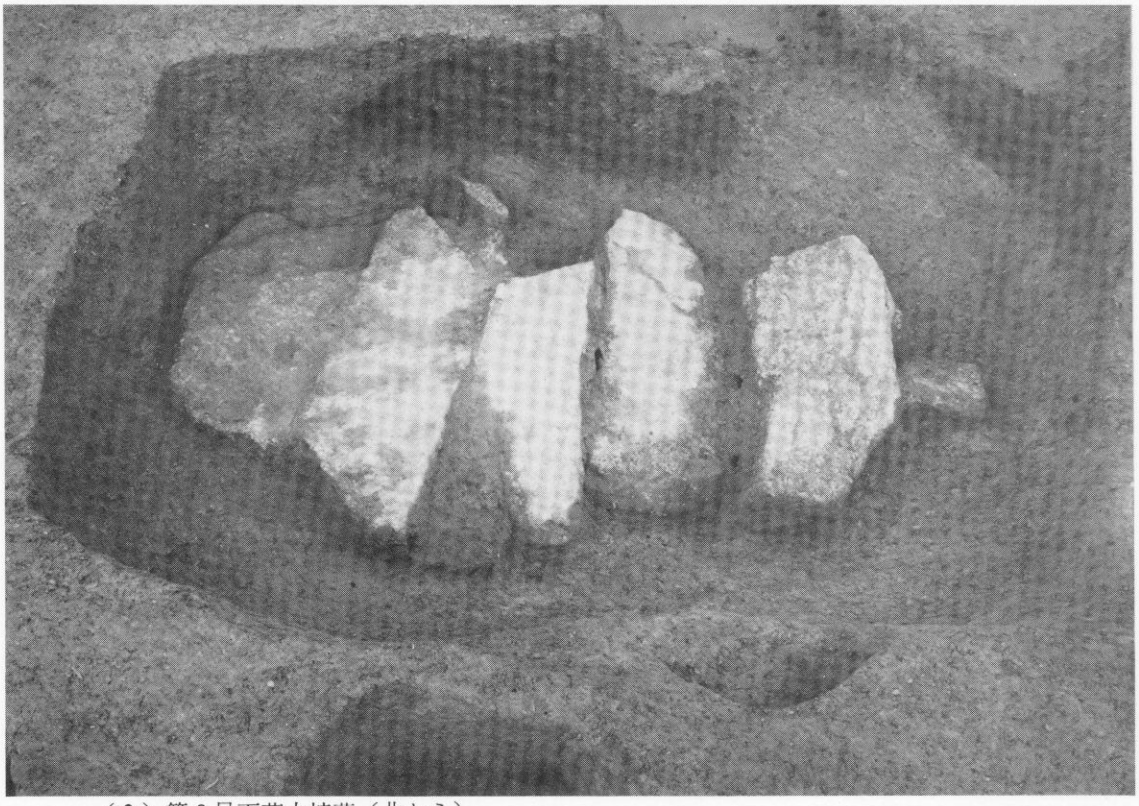


（2）第17号甕棺墓（東から）

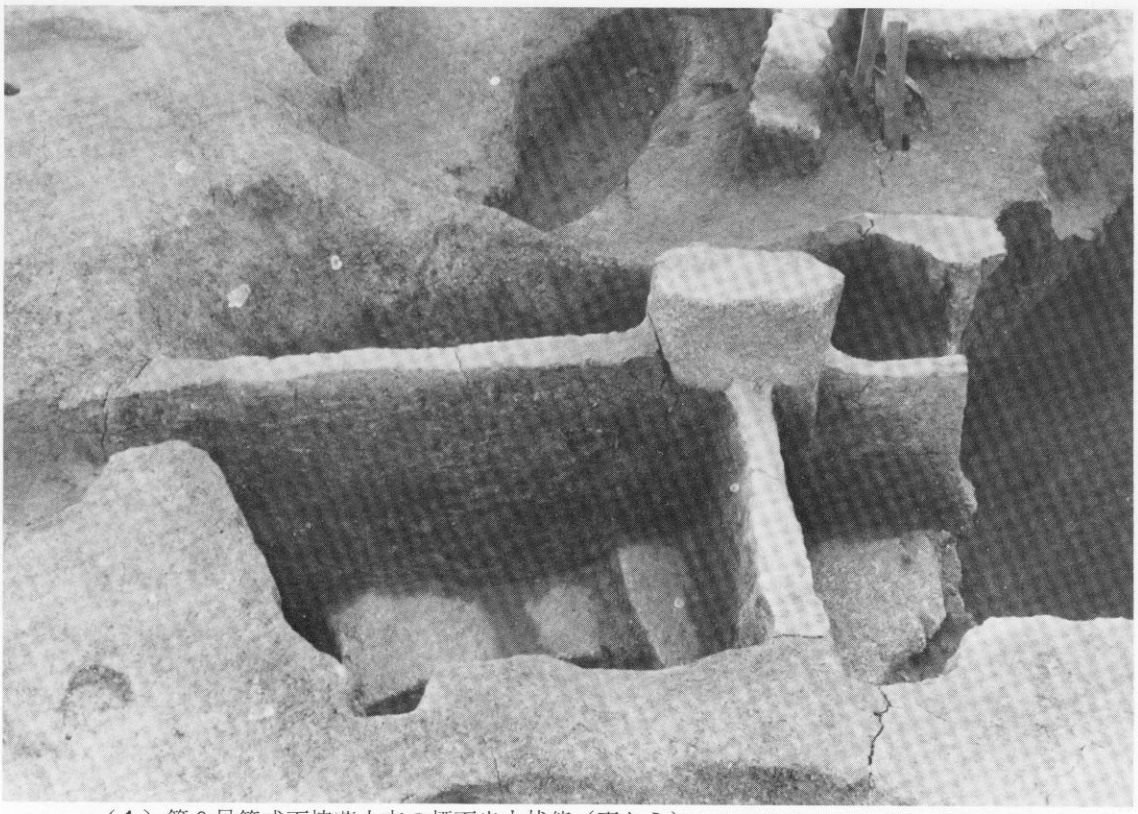


（3）第 4 号 甕 棺

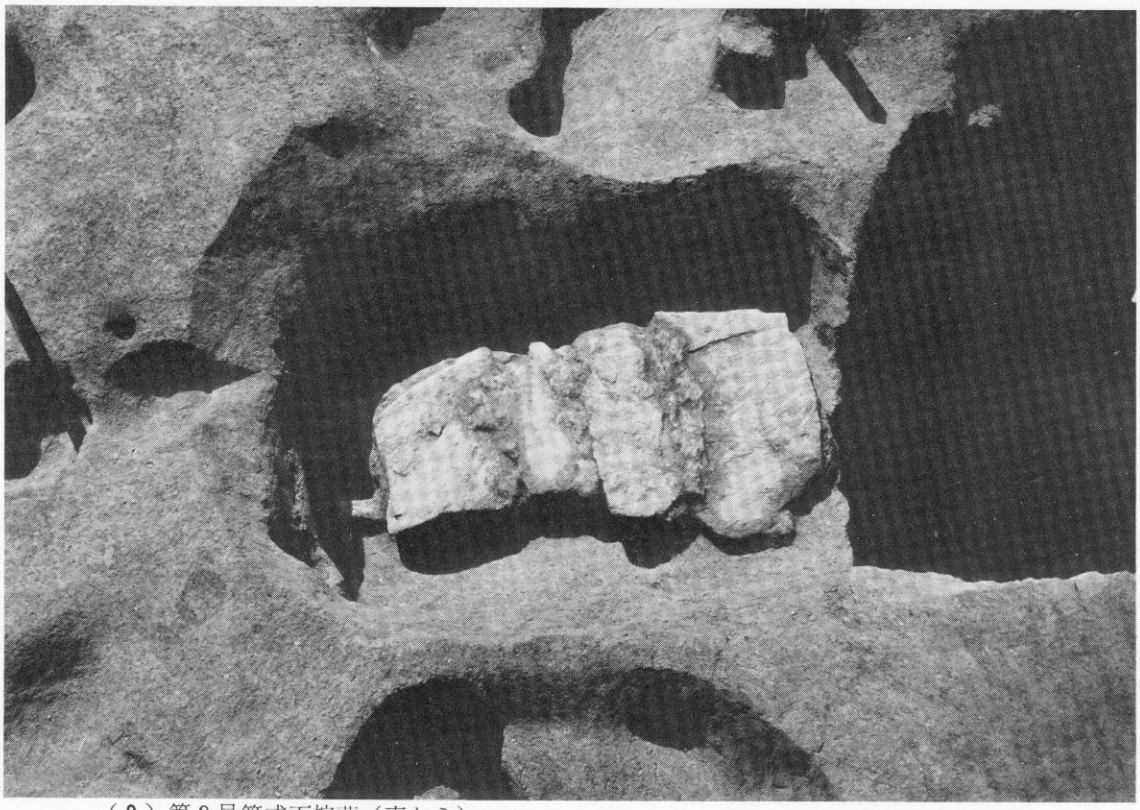
（1）第1号石蓋土坑墓（東から）



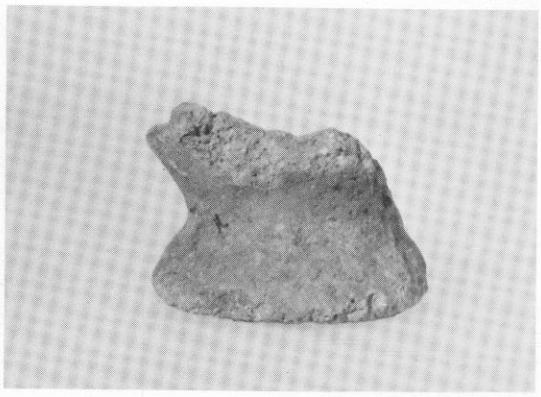
（2）第2号石蓋土坑墓（北から）

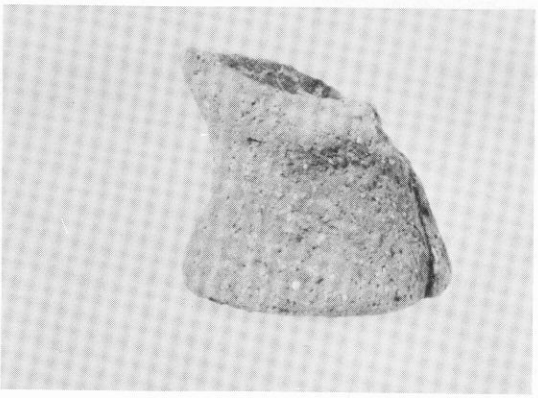


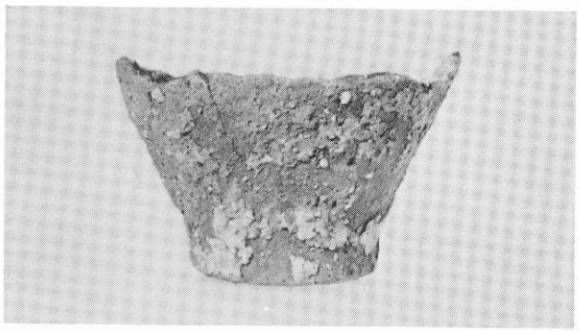
（1）第3号箱式石棺墓上方の標石出土状態（東から）

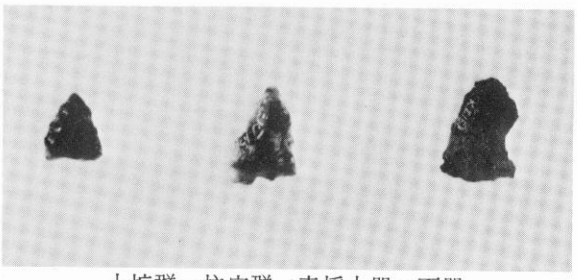


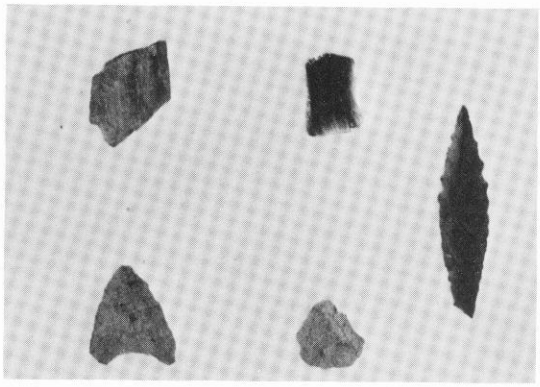
（2）第3号箱式石棺墓（東から）



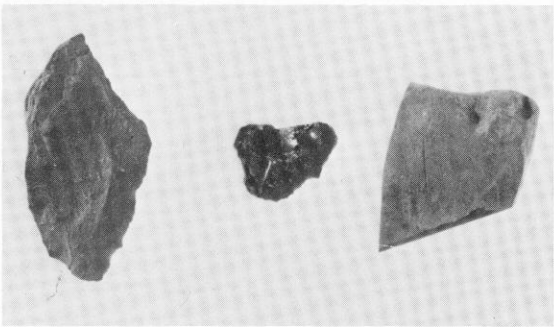
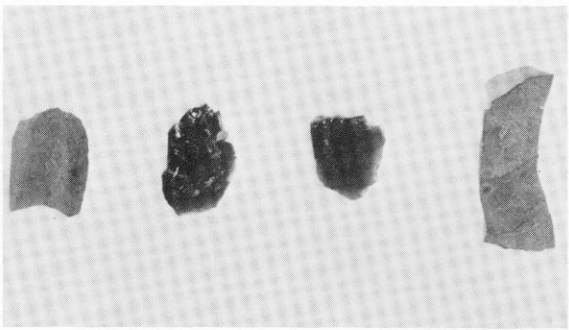


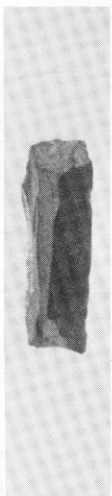


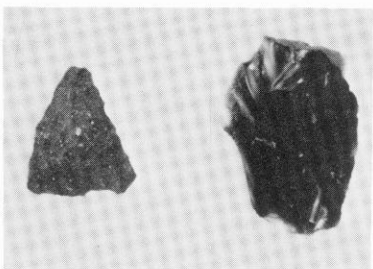


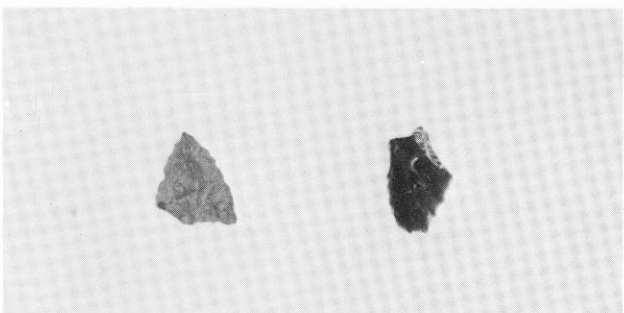


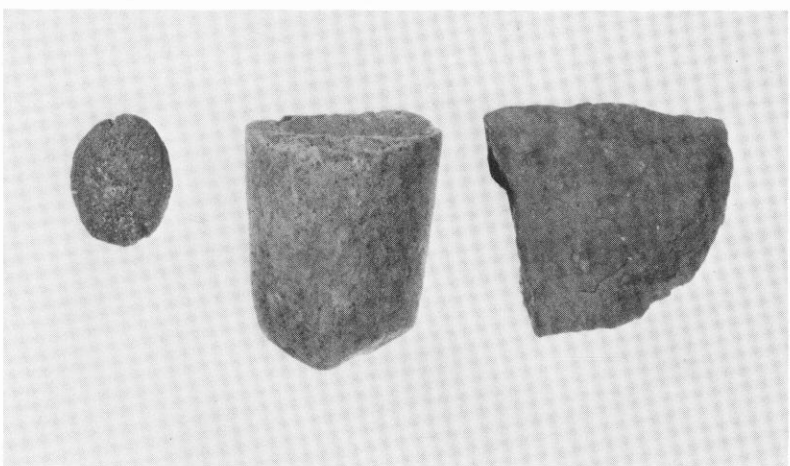
土坑群・柱穴群・表採土器・石器



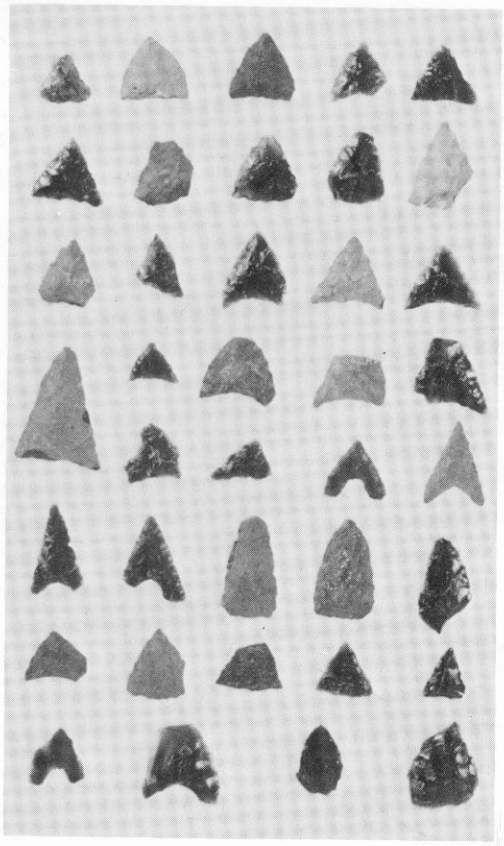




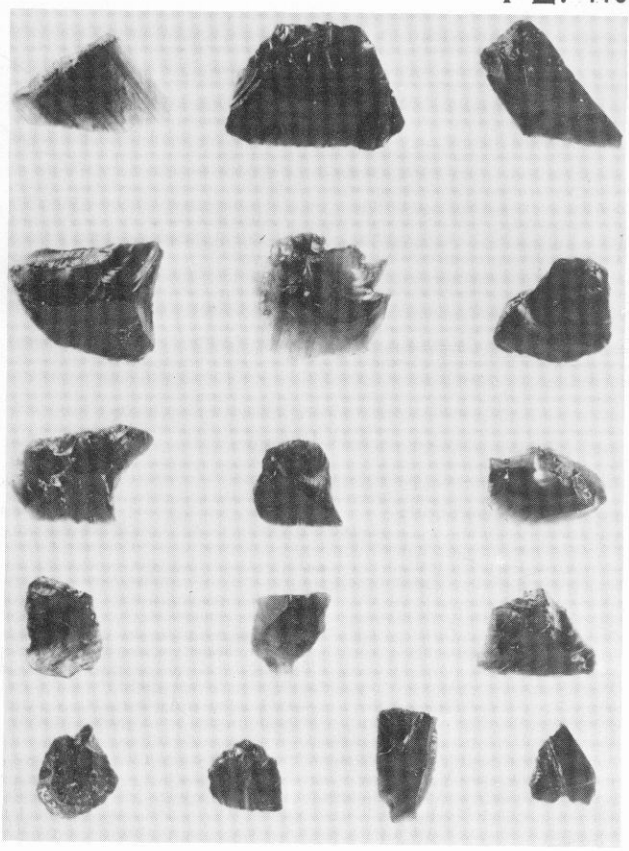


土坑群・柱穴群出土石器

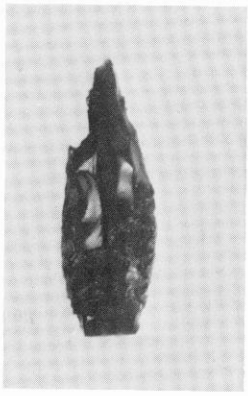
打製石鏃



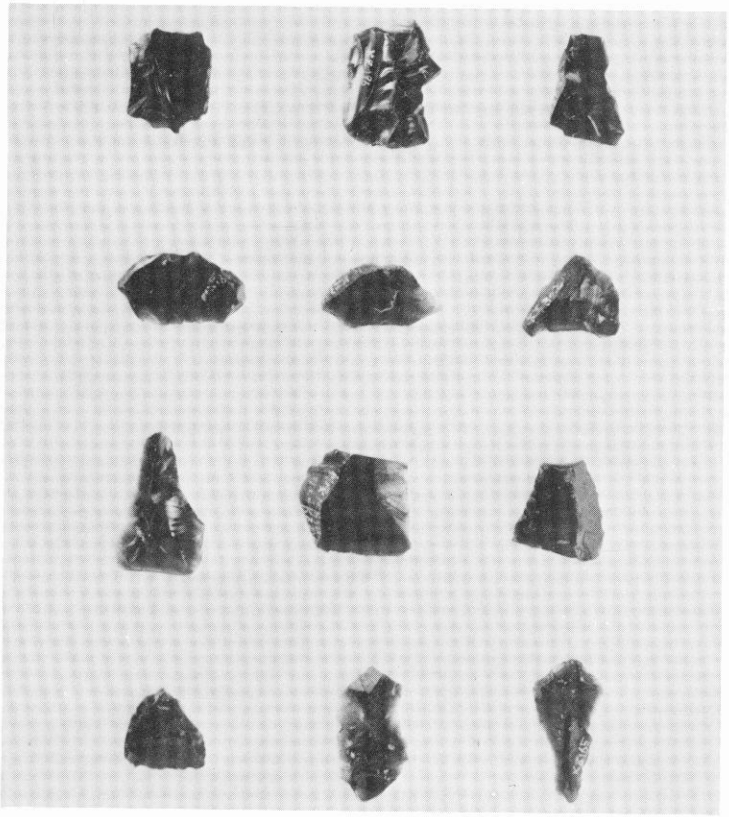
使用剝片



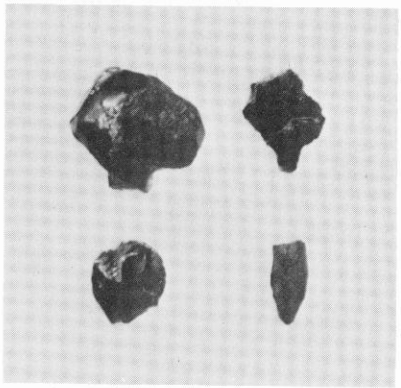
ポイント



使用剝片

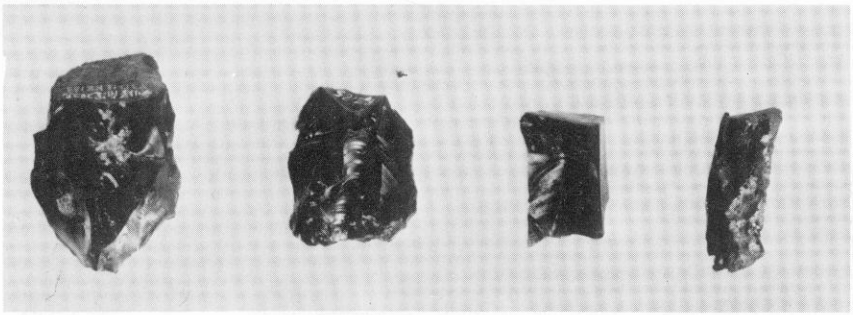


石錐

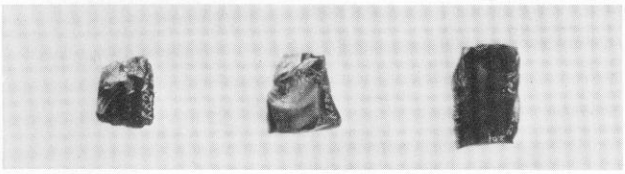


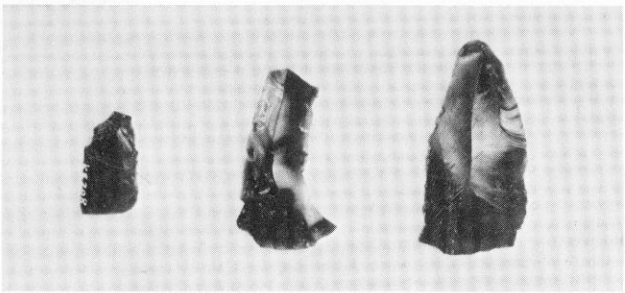
表採石器（その1）

石核



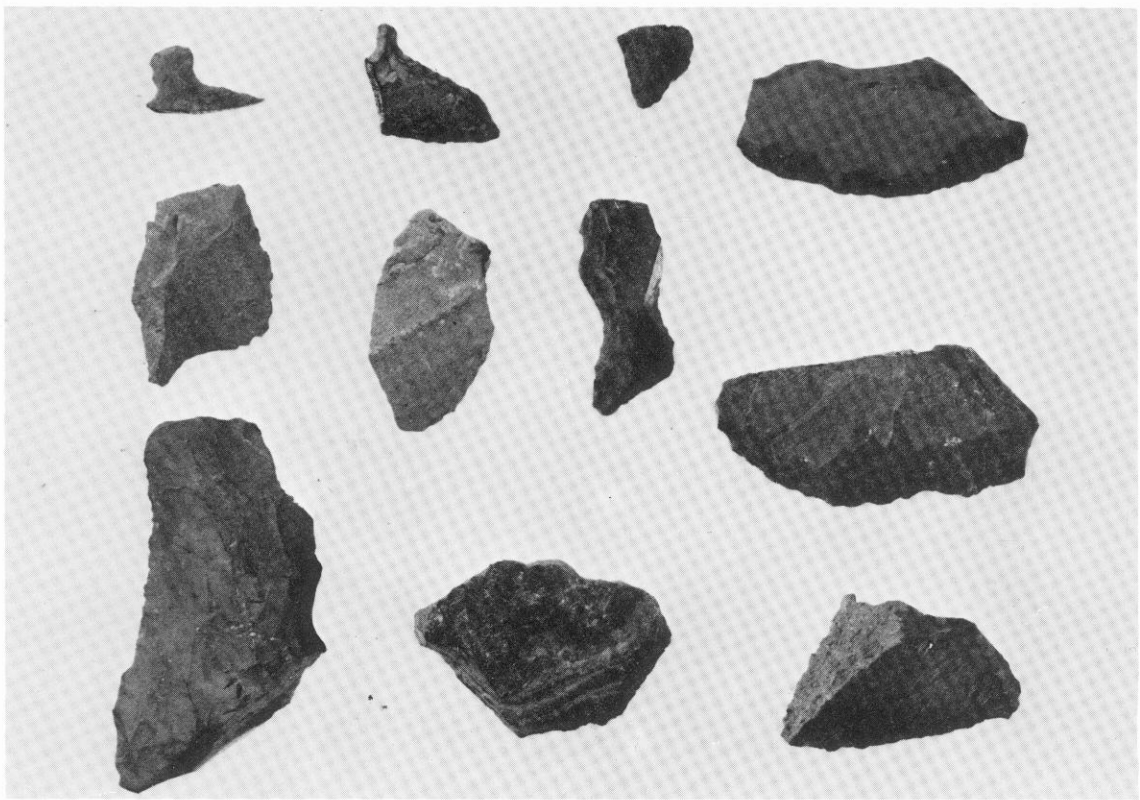
ブレイド



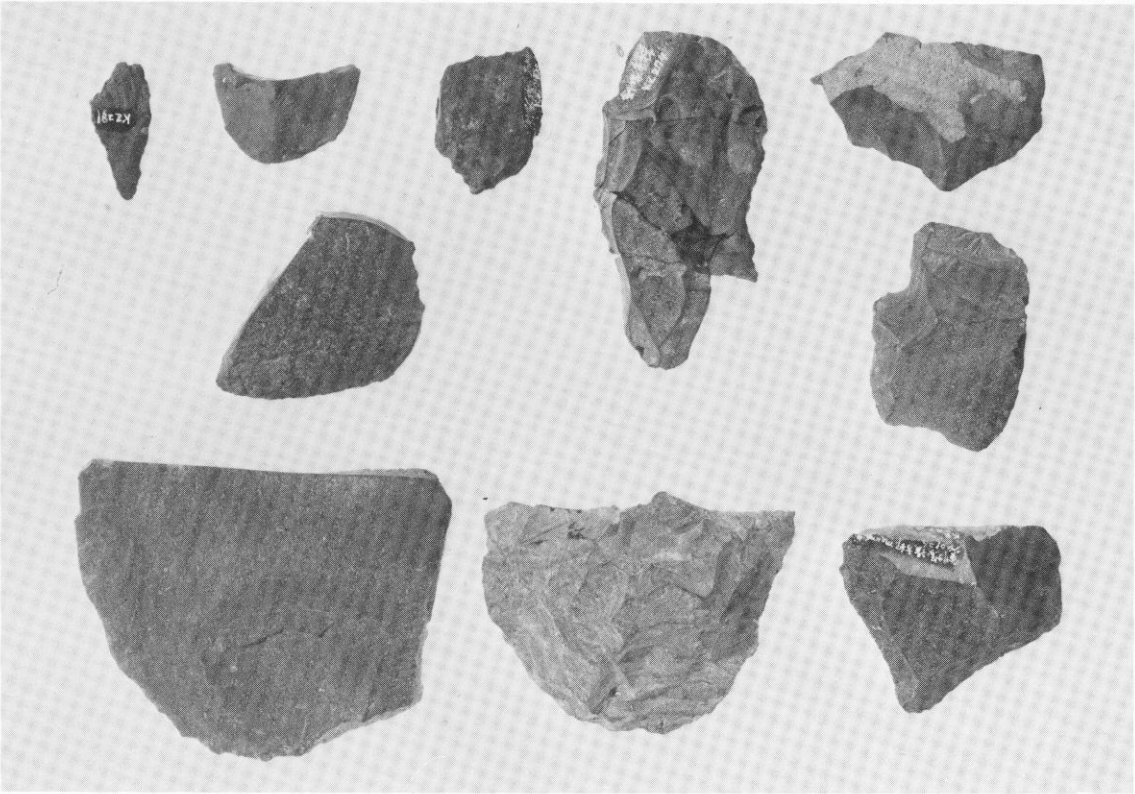


スクレイパー

スクレイパー



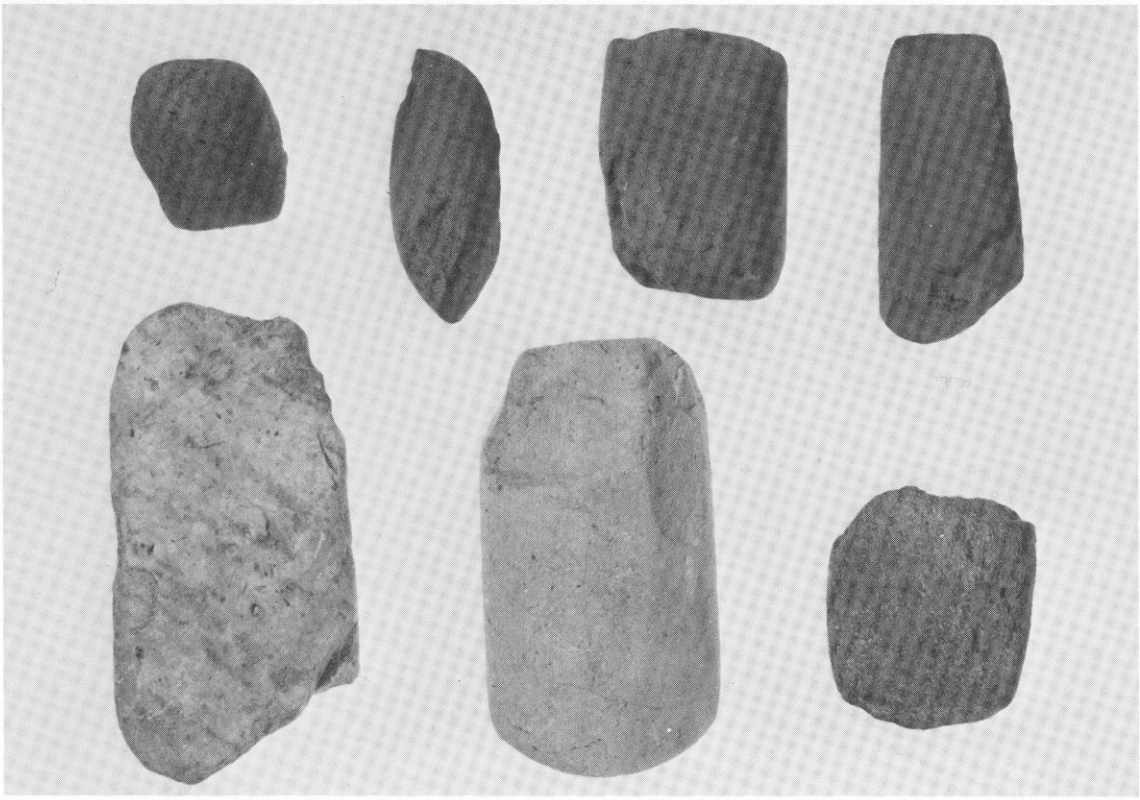
表採石器（その2）



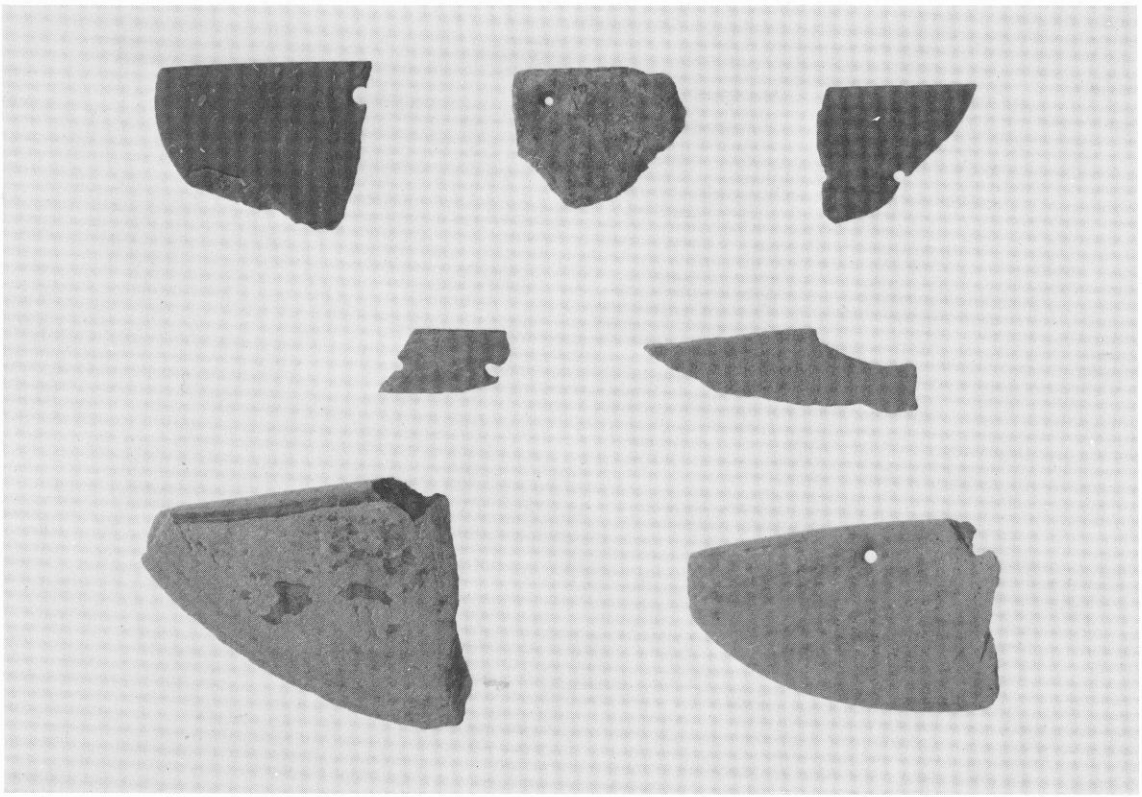
スクレイパー

表 採 石 器（その3）

磨製石斧・石のみ

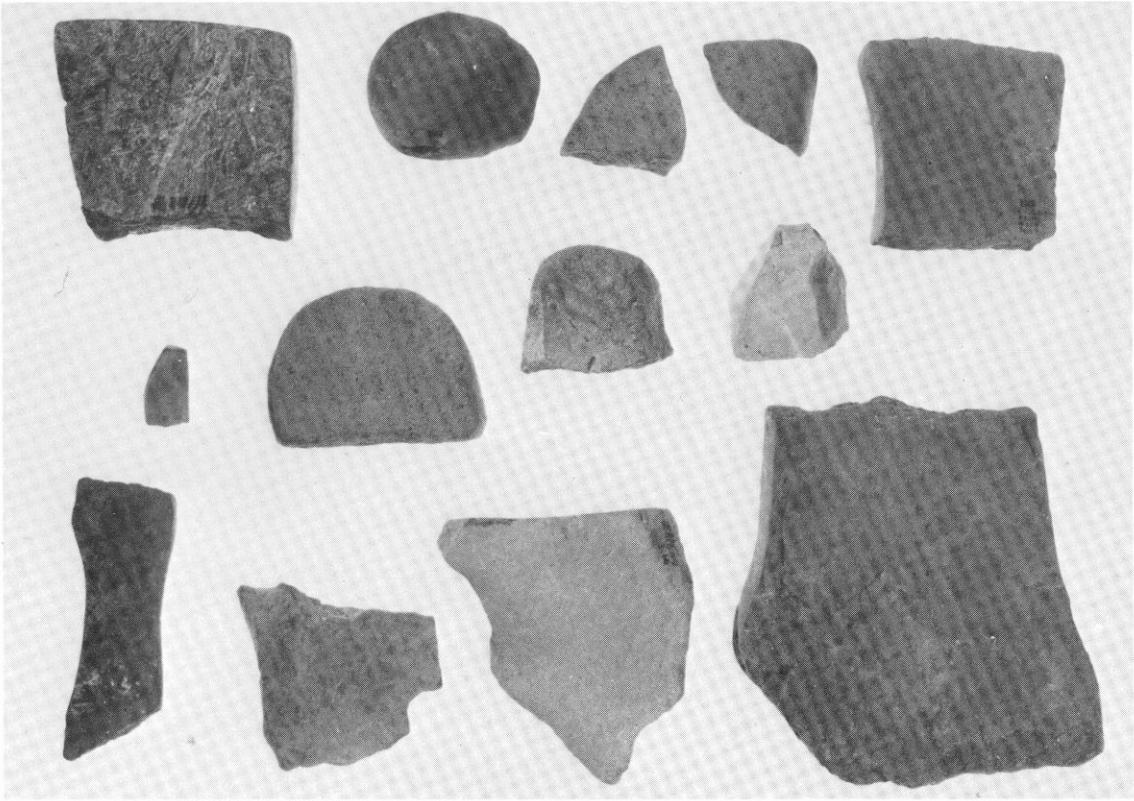


磨製石斧



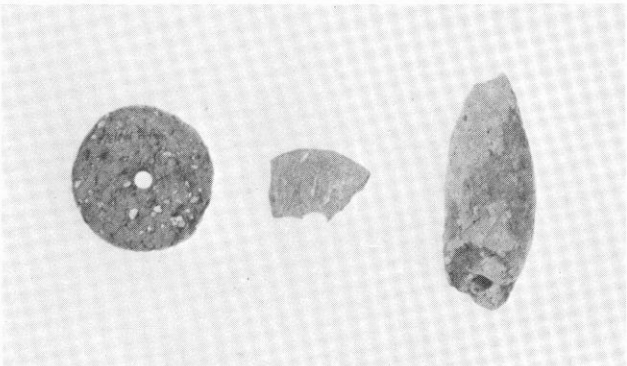
表採石器（その4）

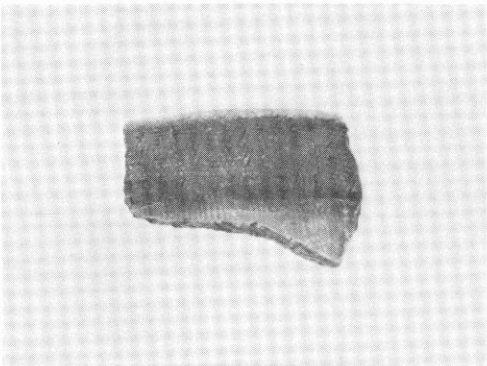
石包丁

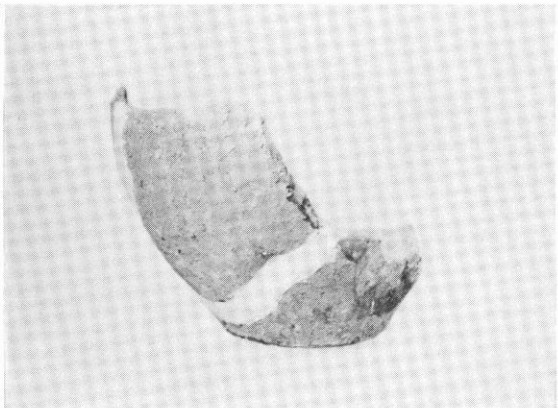


（1）表採磨石・砥石

(2) 表採土錘・紡錘車







（3）周辺遺跡採集土器

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　—XXⅣ—

下　　巻

昭和53年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号

印刷　福博綜合印刷株式会社
福岡市博多区堅粕3丁目3—16